R190.3
TA29

R190.3-TA29ウ
1200500766341

始

36.4.14

331-39
R190.3
Ta 29

神學博士　高木壬太郎著

基督教大辭典

東京　警醒社書店

論研
45 3 23
購求

序言

天主教の初めて我國に傳はりしは今より凡そ三百五十餘年以前にして、プロテスタント教の傳道を開始したるは今より凡そ五十餘年以前に在り。新宗教の扶殖は或る意義に於て國民の思想生活を變化することなれば、其傳道の容易ならざるは言ふ迄もなし。然れ共基督教は泰西文明の宗教にして、其感化の及ぶ所頗る廣く、開教以來今日に至る迄一千九百有餘年、單に無數の人類が之に依りて救濟の道に入るを得たりしのみならず、幾多の邦國も亦之に依りて文化の華を開き、政治、法律、倫理、哲學、文學、美術、人情、風俗等一として之が影響を蒙らざるものなし。所謂泰西の文明なるものも要するに基督教の文明にして、泰西の歴史は基督教の歴史を外にして之を解すべからず。我が日本國が最近に至り國運の異常なる發展をなしたる所以のものは素より國民特有の性質

に基けりと雖も、近時國を開きて泰西諸國民と交り、其文明を攝取したるもの又實に之が一大原因たるは世人の普く認むる所にして、間接には基督教の力與りて大也といふも決して失當の言に非ず。されば識者が泰西文明の淵源を探らんため之を研究せんとし、或は國民の風教を維持振作せんため之を傳へんとし、或は自己向上の途に入らんため之を學ばんとするは寧ろ自然の事にして、今や基督教の名が漸く我國民の耳に熟し、深く一般の注意する所となり來りしもの素より當然の現象也といはざるべからず。

然れ共基督教の何なるやを知るは決して容易の業に非ず。是れ單に聖典と稱するもの丶卷帙多大にして且解し難きがためのみに非ず、其一たび希臘に入り羅馬に傳はりし以來今日に至る迄宗を立て派を分つこと頗る多く、從て諸種の教義、神學を發達せしめ、特殊の制度、儀式を生ぜしめ、雜然として異同の辨じ難きものあるに由れり。泰西諸國に在りては斯教に關する文籍素より豐富にして、其年々刊行する所の著書汗牛充棟も啻ならず、從て之を研究すること亦比較的容易なれ共、我國に在ては乃ち然らず。我國斯教の文學は尙極めて幼稚にして、之が研究の指針となすべきもの殆ど全く之れなしといふも誇大の言に非ず。是れ斯教を學ばんとするもの丶常に困難を感ずる所也。余素より淺學菲才也と雖も斯教の弘布を以て自ら任ずる者なるが故に、之を以て深く憾となすこと茲に年あり。今より數年前自ら揣らず聊か此缺陷を補ひ以て斯教研究の指針に資せんため、斯教に關する一切の知識を網羅せる辭典を作らんと志し、警醒社主福永文之助氏出版の約諾を得て、爾來職を青山學院神學教授に奉ずるの傍ら、餘暇を以て日夕讀むに從て記述し、記述するに從て剞劂に附し、漸く積んで終に一卷をなすに至れり。此書即ち是也。

初め余の此書を作らんとするや、普く斯界の先輩に囑して其執筆を諸

ひ、余は單に編纂の業に任ぜんと欲したりしが、後自ら以爲らく、我國現今の教界は牧會傳道の事頗る多忙にして、先輩諸氏は多く此等の事業のために忙殺せられんとする有樣なれば、到底余の依囑に應じ難かるべし、先輩諸氏を待て事をなさんと欲せは事恐くは成らざるべし、如かず初めより獨力を以て事に當らんにはと。斯くして余は大膽にも獨力を以て事に當れり。然れ共斯教の包容する所教義あり、歷史あり、哲學あり、文學あり、建築あり、美術あり、上下數千年人類の思想生活と交渉し、其關する所極めて廣大也。故に假令該博なる知識、深邃なる學問を有するも、一人の力を以て悉く此等百般の事に造詣し得べからず。況や淺學菲才余の如きものが如何にして庵然たる此大宗教の知識に悉く通曉するを得べけんや。幸にして泰西諸學者研鑽の結果歷々として書册に在り。余は單に之を學び之を集めたるに過ぎざるのみ。然れ共余は諸氏の文書を渉獵し、聊か自ら信ずる所の立場に立ちて、泰西諸學者の所說を

是非し取捨し、自ら是也と思惟する者に就て其要を摘み、之を邦文となして此一册に約したり。是れ余が書中の記事所說に就ては敢て自ら責任を負はざるを得ざる所以也。顧みれば余が此書の稿を起してより歲を換ふること五、月を閱すること五十二、未だ必ずしも長日月也といふ可らず。加ふるに多忙の中に在りて校正の事に至る迄自ら一切の事を擔任したりしが故に不完全の點少からず、自ら意に滿たざるもの極めて多し。稿成りて自ら忸怩たるを禁ぜざるものあり。他日の是正を期して敢て世に問ふ。聊にても斯教文學のため貢獻する所あらば幸甚となすのみ。

余は獨力を以て此書の著作に當りたりといふと雖も、教友諸氏の責助を受けたること亦頗る多し。殊に牧師富永德磨氏は終始余を助けて余のために教會人名の項多くを起稿し、博士原田助、教授別所梅之助、國民雜誌主筆山路彌吉及び其他の諸氏も亦余のために

材料を供給し、又は執筆の勞を取り、以て余の此事業を助けられたり。爰に記して以て感謝の意を表す。

明治四十四年九月

高木壬太郎識

凡例

一　本書收むる所の題目凡そ三千一百有餘、基督教に關する重要の事項を大抵網羅せんことを期したれ共、尙多少の遺漏あるを免れず。他日增補せんことを期す。

二　本書收むる所の題目は分ちて左の二十八種となす。

宗教名　基督教、猶太教の如き宗教。

宗派名　基督教及び猶太教內の大小分派。

學派名　基督教會內外の神學、哲學の諸派。

僧派名　基督教會內に起りたる僧派。

結社名　宗派、學派、又は僧派に非ざる基督教會內の諸團體。

學說名　基督教會の內外に起りたる哲學、神學等の諸學說。

教　義　基督教の教義。

靈名　神、天使又は諸神。

人名　聖書中の重要なる人物及び基督教と交渉を有する著名の人物。

種族名　聖書及び教會史中に顯はれたる人種、國民又はかの。

經名　舊新約聖書中の正典。

書名　飜譯せられたる聖書、經外聖書及び其他の書籍。

地名　聖書中重要の都市山岳池河園林の類及び基督教と交渉を有する諸邦國。

物名　聖書及び基督教に關係を有する動植鑛物及び其他の諸物。

事蹟　聖書及び基督教會史中の史實。

術語　聖書に在り又は基督教會にて使用する宗教上の語。

信條　基督教會内の信仰箇條。

禮典　基督教會の聖禮典。

行事　基督教及び猶太教の祝節。

慣例　基督教及び猶太教の習慣古例等。

學科名　基督教神學の諸分科。

職名　教職又は其他の位官又は職務。

教會名　特殊の教會。

寺院名　特殊の僧庵。

學校名　基督教に關係を有する諸學校。

建物名　基督教及び猶太教の建物。

符號　基督教會の用ゆる符號。

雜語　以上の名目に入らざる者。

三　題目の排列は五十音順に依る。

四　外國語を片假名に表はすに英獨佛のVW共にヴを以て、tiはティ、diはディと記するを常とし、たれ共、既に慣例となれるものは舊慣

に從へるものありて一定せず。例之エヴァをエバ、ダヴィデをダビデ、アウグスティヌスをアウグスチヌス、メソディストをメソヂストと記せるが如し。又讀方は各々其國音に從はんことを努めたれ共、習慣に從ひ英語讀みとなしたる者亦少からず。オリゲヌスをオリゲンとなし、ルナンをレナンと讀みたるが如し。卷尾に歐字索引を附したればこれに依りて索引すべし。

五　外國語の人名地名は片假名を用ゐたれ共、慣用久しきものは漢字を用ゐたり。イエスを耶蘇、キリストを基督、パウロを保羅、ヨハネを約翰と記し、又以色列、猶太、希臘、英蘭、佛蘭西、獨逸、埃及、亞歷山、倫敦、巴理、羅馬、牛津、劍橋等と記せるが如し。

六　題目に附する歐語は英語を主とし、必要なる場合には希臘語、希伯來語又は拉丁語を添へたり。

七　書中聖書の文籍を引用するに當りては略語を用ゐたり。即ち左の

如し。

創	創世記	出	出埃及記	利	利未記	民	民數紀略
申	申命記	書	約書亞記	士	士師記	得	路得記
母前	撒母耳前書	母後	撒母耳後書	王上	列王紀略上	王下	列王紀略下
代上	歷代志略上	代下	歷代志略下	喇	以士喇書	尼	尼希米亞記
帖	以士帖書	伯	約百記	詩	詩篇	箴	箴言
傳	傳道之書	歌	雅歌	賽	以賽亞書	耶	耶列米亞記
哀	哀歌	結	以西結書	但	但以耳書	何	何西阿書
耳	約耳書	麽	亞麽士書	阿	阿巴底亞書	拿	約拿書
米	米迦書	翁	拿翁書	哈	哈巴谷書	番	西番雅書
基	哈基書	亞	撒加利亞書	馬	馬拉基書	太	馬太福音書
可	馬可福音書	路	路加福音書	約	約翰福音書	徒	使徒行傳
羅	羅馬書	哥前	哥林多前書	哥後	哥林多後書	加	加拉太書

弗　以弗所書　腓　腓利比書　西　哥羅西書　撒前　帖撒羅尼迦前書
撒後　帖撒羅尼迦後書　提前　提摩太前書　提後　提摩太後書　多　提多書
門　腓利門書　來　希伯來書　雅　雅各書　彼前　彼得前書
彼後　彼得後書　壹約　約翰第一書　貳約　約翰第二書　參約　約翰第三書
猶　猶太書　默　約翰默示錄

右の略語に伴ふ數字は章節の略にして、例之創二の七とあるは創世記二章七節、約三の五とあるは約翰福音書三章五節の略なるが如し。

八　本書を印刷に附したる後變更を生じたるものあり。日韓合邦の事ありて韓國が朝鮮となり、又は近代の人名中易簀したるものあるが如し。剞劂既に終りて改め難し。他日の訂正を期して其儘に存ぜり。

九　附錄として卷尾に基督教會年表を添へたり。本書の事實を引くに當りて併せ考ふる時は、前後の史實自ら瞭然たるを得べし。

十　本書の憑據となせる文籍は各條の末に參考書として附記せる者

あり、又附記せざるものありて必ずしも一定せず。ヘースチングスの「聖書辭典」「シャッフ」の「宗教辭典」及び「大英百科辭典」等に負ふ所多しと雖も、又諸種の聖書總論、聖書神學、組織神學、教義史、哲學史、教會史、傳記類及び其他諸多の文書に據れるを以て今一々爰に之を列擧し難し。日本の諸教會に關しては、文書に依るの外各派の人々に就て一々調査し、努めて記事の正確を期したり。

目次

アの部

頁段
愛　一ノ一
哀歌　二ノ二
愛餐　三ノ一
アイスランド　三ノ二
アイダン　聖　三ノ二
愛闇　三ノ二
アイングスウォルス　ヘンリー　四ノ二
アウガスチン　又はアウスチン　聖　四ノ二
アウガスチン　聖　又はアウグスチヌス　アウレリウス　四ノ二
アウガスチン僧尼　クリスチアン　ヨハン　クールヘルム　八ノ一
アウグスチ　八ノ二
アウグスブルグの講和　八ノ二
アウグスブルグの信仰告白　八ノ三
アウグスブルグ信仰告白辯證論　八ノ二
アウストラリア　九ノ二
墺太利　一〇ノ一
アウフクレールウング　一〇ノ一
アウベルレン　カルル　アウグスト　一〇ノ一
アウボルン神學校　一〇ノ一
アウボルンの告白　一〇ノ二
アウリファベル　ヨハン　一〇ノ二
アウレリアン　一〇ノ三
アウレリウス　マルクス　二ノ三
アヴィタス　アルシマス　エクザヤアス　一〇ノ三
アカイコ　一〇ノ三
アカヤ　二ノ一
アカン　二ノ一
アガサ　聖　二ノ二
アガソー　二ノ二
贖罪　三ノ二
贖罪日　四ノ二
アガペタス　四ノ二
アキバ　ベン　ヨセフ　四ノ二
アクアヴィヴァ　クラウヂアス　八ノ一
アクイナス　トマス　八ノ二
惡鬼又は惡魔　八ノ二
アクタ　マルチラム及びアクタ　サンクトラム　八ノ三
アクトン　ウロン　エメリッヒ　エドロルド　ダルベルグ　八ノ二
アクラ　九ノ二
アクラ　ヨハンチス　カスパル　一〇ノ一
アクラ　プリスキラ　聖　一〇ノ一
アグチス　聖　一〇ノ一
アグノエタイ　一〇ノ二
アグリコラ　ヨハン　一〇ノ二
アグリッパ　一〇ノ三
アケラオ　一〇ノ三
アコスタ　ガブリエル　ド　一四ノ二
アサ　一四ノ三
アシタロラ　一四ノ三
アシラ　一五
アジア　聖書の　一五
アストラッグ　ウアン　一五ノ三
アスベリー　フランシス　一六ノ二
アスモダイ　一六ノ二
アスモニアンス　一六ノ二
アゼンス　一六ノ二
アタナシウス　一六ノ二
アタナシウスの信條　一七ノ一
アタルガチス　一七ノ二
アダブショニズム　猶子説　一七ノ二
アダム　一七ノ三
アダムエバの歴史　一八ノ二
アダムス　サラ　フラリー　一八ノ三
アダムス　トマス　一八ノ三
アダム派　一八ノ三
アダルベルト　一八ノ三
アダルベルト　聖　一八ノ三
アッスリヤ　一八ノ三
アッセルバルグ　ロナムンデ　ユリア　フリッツ　一八ノ三
アッターベリー　フランシス　一八ノ三
アッフル　デニス　アリガスト　一八ノ三

アッベー 僧院 三ノ二
アディソン ジョセフ 三ノ二
アドヴェンチスト派 待降節 三ノ三
アドナイ 三ノ一
アドニア 三ノ二
アドラムメレク 三ノ二
アドリアン 三ノ二
アドレル ヘルマン 三ノ三
アドレル フェリックス 三ノ三
アドレル ジョルジ 三ノ一
アナクレタス 三ノ一
アナスタシウス 三ノ二
アナセマ 詛 三ノ二
アナトリウス 三ノ二
アナニア 三ノ二
アナバプテスト派 再洗禮派 三ノ三
アナンメレク 三ノ二
アニスタス 三ノ二
アハシュエロス 三ノ二
アハジア 三ノ一
アハズ 三ノ一
アハブ 三ノ一
アバ 三ノ一
アバウジ フィルミン 三ノ三
アバディー ジャック 三ノ三
アバドン 三ノ三
アバナとパルパル 三ノ一
アバリム 三ノ一
アヒトベル 三ノ一
アヒメレク 三ノ二
アビシニア教會 三ノ二
アビシャイ 三ノ一
アビシャグ 三ノ二
アビメレク 三ノ二
アビヤタル 三ノ二
アビレ子 三ノ二
亞非利加 三ノ三
亞非利加教會 三ノ三
アフリカヌス ユリウス 三ノ三
アブガル物語 三ノ一
アブサロム 三ノ一
アブ子ル 三ノ二
アブラハム 三ノ二
アブラハムの懷 三ノ二
アブラハム默示錄 三ノ二
アブラハム 尼院長 三ノ二
アベッス 三ノ二
アベラール 又はアベラルドス ピエル 三ノ二
アベル 三ノ一
アベル派 三ノ一
アベンエヅラ 三ノ一
アポット 僧院長 三ノ三
アポット エグラ 三ノ三
アポット ジョルジ 三ノ三
アポット ロボルト 三ノ三
アポット エドワイン 三ノ三
アポット ライマン 三ノ三
アポリナリウス 三ノ一
アポリナリウス說 三ノ一
アポリナリス クラウディウス 三ノ二
アポロ 三ノ二
アポロニア 聖 三ノ二
アポクリファ 三ノ一
アポクリプス 三ノ一
アポストリック ブロザルス 使徒的兄弟派 三ノ一
アポタクチシ 三ノ二
尼
天草騷動 三ノ二
アマサ 三ノ二
アマヂア 三ノ二
アマルリック 三ノ二
アマレク 三ノ二
アミロウ モイス 三ノ二
アムスドルフ ニコラウス フォン 三ノ二
アムフィロキウス 聖 三ノ二
アムブロス 又はアムブロシウス 聖 三ノ二
アムミアヌス マルセリヌス 三ノ二
アムモニウス アレキサンドリアの 三ノ二
アムモニウス サッカス 三ノ二
アムモン クリストフ フレドリッヒ フォン 三ノ二
アムヨー ジョセフ 三ノ二
亞米利加合衆國 三ノ三
アメン 三ノ三
アモス 三ノ三
亞麻士書 三ノ三
アモリ人 三ノ三
アラコク マルガレット マリア 三ノ三
アラビック幼時の福音書 三ノ三

アラビヤ 亞剌比亞 三ノ二
アラビヤ人 三ノ二
アラム 三ノ二
アラメイック語 三ノ二
アララテ 三ノ二
アラン ウィリアム 三ノ二
アランデル トマス 三ノ二
アリウス 三ノ二
アリウス說 三ノ二
アリスタルコ 三ノ二
アリステアス 三ノ二
アリストブルス 三ノ二
アリストテレース 三ノ二
アリビウス 聖 三ノ二
アリマタヤ 三ノ二
アルガイル侯 三ノ二
アルキ 三ノ二
アルクイン 三ノ二
アルコンチシ 三ノ二
アルチムボルデ ジョヴァンニ アンジェロ 三ノ二
アルセニウス 三ノ二
アルゼンチン共和國 三ノ二
アルタシヤスタ 三ノ二
アルチデアコ子 三ノ二
アルチビシップ 三ノ二
アルチマンドリテ 三ノ二
アルツング ヨハン バプテスト 三ノ二
アルテモン 或はアルテマス 三ノ二
アルドレー卿 聖 三ノ二
アルナルフス 三ノ二
アルノウ アンリ 三ノ二
アルノウル マリー アンジェリク 三ノ二
アルノウル アントイス 三ノ二
アルノウル アンゲリク 三ノ二
アルノット ウィリアム 三ノ二
アルノルディ バルソレミーアス 三ノ二
アルノール・プレシアの 三ノ二
アルノルド トマス 三ノ二
アルノルド マシウ 三ノ二
アルノール派 三ノ二
アルハ オメガ 始終 三ノ二
アルバクサデ 三ノ二
アルバ子ンス派 三ノ二
アルバン 聖 三ノ二
アルビゲンス派 三ノ二
アルビング エドワルド 三ノ二
アルフォルド ヘンリー 三ノ二
アルフレッド大王 三ノ二
アルブ 三ノ二
アルブライト ジェーコブ 三ノ二
アルベルタス マグナス 三ノ二
アルマゲドン 三ノ二
アルミニウス派の神學 三ノ二
アルメニヤ譯聖書 三ノ二
アレアンデル ヒエロニムス 三ノ二
アレキサンデル 三ノ二
アレキサンデル ヘールスの ジョセフ マケソン 三ノ二
アレキサンデル 教長 アルチバルド 三ノ二
アレキサンデル ウィリアム 三ノ二
アレキサンデル大王 三ノ二
アレキサンドリアの 三ノ二
アレシウス アレキサンデル 三ノ二
アレクス 三ノ二
アレフ 三ノ二
アレン ヘンリー 三ノ二
アロギ 三ノ二
アロムグラドス 三ノ二
アロン 三ノ二
アロン ゼンアシェル又はバルモーセ 三ノ二
アンキーラ ヨセド 三ノ二
アンギルベルト 聖 三ノ二
アングリカン教會 三ノ二
アングロサクソン 三ノ二
アンゲラス アサンクト フランシスコ 三ノ二
アンゲラス ジレレアス ヨハンネス 三ノ二
アンジェリコ ジオヴァンニ 三ノ二
アンジェリス ピエトロ 三ノ二
暗黑時代 三ノ二
アンコライト 聞道者 三ノ二
按手 按手禮 三ノ二
アンシクロペディスト 三ノ二
アンシロン ジザイッド 三ノ二
アンスガリウス 聖 三ノ二
アンセルム又はアンセルムス 三ノ二
安息日 三ノ二
安息日學校 三ノ二
安息日の行程 三ノ二

安息年 六七ノ三
アンチトリニタリアン 六八ノ二
アンチノミアニズム 律法廢棄說 六八ノ二
アンチポープ 對立法王 六八ノ三
アンチマリアンス 非聖母崇拜派 六八ノ三
アンテオケ派 六八ノ三
アンデルソン ウヰン 六九ノ三
アンデルソン ルフス 七〇ノ一
アンデルソン ラルス 七〇ノ一
アントニー 聖 七〇ノ二
アントニヌス 聖 七〇ノ二
アントニヌス ピウス 七〇ノ三
アント子リ ウアコモ 七〇ノ三
アントン パウル 七〇ノ三
アントン派 七〇ノ三
アンドーヴァル神學校 七〇ノ一
アンドリウス エリシヤ 七〇ノ二
アンドリウス マンヂヤミン 七〇ノ二
アンドリウス ランスロット 七〇ノ二
アンドレア ヨハン ヴァレンチン 七〇ノ三
アンドレア ローレンチウス 七〇ノ三
アンドレア ヤコブ 七〇ノ三
アンナ 七〇ノ三
アンナス 七〇ノ三
アンモン 七〇ノ三

イの部

有神論 イエスイト社 七一ノ一
イエス 七一ノ二
耶蘇基督 七一ノ二
耶蘇の教訓 七一ノ二
イエス シラクの子 七一ノ二
イエロニムス ソフロニムス 七一ノ三
ユウセビウス 七一ノ三
戰車 七一ノ三
イグナシアス 教父 七一ノ三
イグナチウス 七一ノ三
イグナチウス アンテオケの 七一ノ三
イグナチウス ロヨラ 七一ノ三
イグノランチヌ 七一ノ三
異教 七一ノ三
犧牲 七一ノ三
イコニオム 七一ノ三
イサク 七一ノ三
イザヤ 七一ノ三
以賽亞書 七一ノ三
以賽亞の昇天 七一ノ三
意志 七一ノ三
イシドール 聖 七一ノ三
イシポセラ 七一ノ三
イシマエル 七一ノ三
意匠論的證據論 七一ノ三
イスカリオテのユダ 七一ノ三
以色列 七一ノ三
以色列の支派 七一ノ三
イスラエル王國 七一ノ三
イゼベル 七一ノ三
以太利 七一ノ三
異端 七一ノ三
一意派 又單意論者 七一ノ三
一元論 七一ノ三
イッサカル 七一ノ三
一性派 又單性論者 七一ノ三
一致信條 七一ノ三
イッリア 七一ノ三
生死 七一ノ三
祈 七一ノ三
異邦人 七一ノ三
異邦人の庭 七一ノ三
イブ 七一ノ三
色 聖書の 七一ノ三
イルミナチ 七一ノ三
イルミナチーション 七一ノ三
イレニウス 七一ノ三
イレニカル セオロジー 平和神學 七一ノ三
印封印 七一ノ三
インカルナチーション 七一ノ三
インガム ベンヂャミン 七一ノ三
インカンベント 七一ノ三
英蘭 七一ノ三
インスピレーション 七一ノ三
インデックス リブロラム 七一ノ三
プロヒビトラム 七一ノ三
印度 七一ノ三
インノーセント一世 七一ノ三
インノーセント二世 七一ノ三
インノーセント三世 七一ノ三
インノーセント四世 七一ノ三
インノーセント五世 七一ノ三
インノーセント六世 七一ノ三
インノーセント七世 七一ノ三
インノーセント八世 七一ノ三
インノーセント九世 七一ノ三

インノーセント十世 七一ノ二
インノーセント十一世 七一ノ二
インノーセント十二世 七一ノ二
インノーセント十三世 七一ノ二
インフララプサリアニズム 七一ノ三
インマヌエル 七一ノ三

ウの部

ウァイア ダンカン 七一ノ三
ウァイゼーッケル カルル 七一ノ三
ウァイトブレヒト ゴットロブ フリードリッヒ 七一ノ三
ウァイズ 七一ノ三
ウァイズ クリスチアン ヘルマン 七一ノ三
ウァイズマン アウグスト 七一ノ三
ウァイズマン ニコラス 七一ノ三
ウァデアヌス スチーブン パトリック ヨアキム フォン リット 七一ノ三
ウァッツ 七一ノ三
ウァットソン ジョン 七一ノ三
ウァットソン リチャルド 七一ノ三
ウァトケ ウイルヘルム 七一ノ三
ウァルデン氏派 七一ノ三
ウァルトン ブリアン 七一ノ三
ウァルド ペテロ 七一ノ三
ウァルド ウイリアム ジョルウ 七一ノ三
ウァルド ウイルフリード ヒリップ 七一ノ三
ウァルドロウ ラルフ 七一ノ三
ウァルハム ウイリアム 七一ノ三
ウァルバルトン ウイリアム 七一ノ三
ウァルバルトン講演 クリスチャン フランシン ウイルヘルム 七一ノ三
ウァルヒ ヨハン ゲオルグ 七一ノ三
ウァルブルガ 七一ノ三
ヴァウガン ヘルバルト 七一ノ三
ヴァチカン宮殿 七一ノ三
ヴァチカン會議 七一ノ三
ヴァチカン寫本 七一ノ三
ヴァルデス ユアン ド 七一ノ三
ヴァレリアン 七一ノ三
ヴァレンチニアン三世 七一ノ三
ヴァレンチヌス 七一ノ三
ヴァレンチン 聖 七一ノ三
ヴァレンス 七一ノ三
ヴァロムブロサ 七一ノ三
ヴァン ダイク ヘンリー 七一ノ三
ヴァンダル 七一ノ三
ウーゼルスプーン ジョン 七一ノ三
ウィクリッフ ジョン 七一ノ三
ウィケルン ヨハン ハインリヒ 七一ノ三
ウィシャルト ウォルウ 七一ノ三
ウィシャルト ウォルウ 七一ノ三
ウィッテンベルグの一致 七一ノ三
ウィットシウス ヘルマン 七一ノ三
ウィチ子ブレンチル派 七一ノ三
ウィチル ゲオルグ ベチザクト 七一ノ三
ウィラルド フランシス エラヂウス 七一ノ三
ウィリアム オブカムの 七一ノ三
ウィリアム ネレンヂ公 七一ノ三
ウィリアム ジョールハムの 七一ノ三
ウィリアム シャムバリの 七一ノ三
ウィリアム ヨロの 七一ノ三
ウィリアム マルノスベーリの 七一ノ三
ウィリアム ライクハム 七一ノ三
ウィリアムス アイザック 七一ノ三
ウィリアムス サムエル ウェルス 七一ノ三
ウィリアムス ジョン 七一ノ三
ウィリアムス ジョン 七一ノ三
ウィリアムス卿 ジョルウ 七一ノ三
ウィリアムス卿 モニエル モニエル 七一ノ三
ウィリアムス ローウヤー 七一ノ三
ウィリアムス ローランド 七一ノ三
ウィルソン ジョン 七一ノ三
ウィルソン トマス 七一ノ三
ウィルバーフォース ウイリアム 七一ノ三
ウィルバーフォース サミュエル 七一ノ三
ウィルフリッド 七一ノ三
ヴィカル 七一ノ三
ヴィクトル 七一ノ三
ヴィジタント尼派 七一ノ三
ヴィジリウス 七一ノ三
ヴィジランチウス 七一ノ三
ヴィタス 七一ノ三
ヴィタリアン 七一ノ三
ヴィチー アレキアンドル ロトルフ 七一ノ三
ヴィンセント 聖 七一ノ三
ヴィンセント ド パウル 七一ノ三
ウェーア ヘンリー 七一ノ三
ウェーク カイリアム 七一ノ三
ウェーク フィルド エドワルド ヤッガン 七一ノ三
ウォース ヘンリー 七一ノ三
ウェールス長老教會 又はカルヴィン派 メソヂスト教會 七一ノ三
ウォスタルン神學校 七一ノ三
ウォストコット ブルック フォス 七一ノ三

ウェストファリアの講和 一四八ノ一
ウェストミンステル アッペー 一四八ノ二
ウェストミンステルの會議 一四八ノ三
ウェストミンステル標準 一四八ノ三
ヴェストリー 一四八ノ一
ウェスレヤン メソヂスト 一四八ノ一
ウェスレー ウヨン 一四八ノ二
ウェスレー チャールス 一四八ノ二
ウェスレー サミュエル 一四八ノ二
ウェスレー スザンナ 一四八ノ二
ウェスレー共勵會 一四八ノ二
ウェッセル ヨハン 一四八ノ二
ウェッヴェル ハインリヒ ヨセフ 一四八ノ三
ウェッラ デ レベヒト マルチン 一四八ノ三
ウェルハウゼン ユリアス 一四八ノ三
ウェルンクス フランシス ザビエー 一四九ノ一
ウェント ハンス ハインリヒ 一四九ノ一
ウェーンライト ヨハナサン メーヒウ 一四九ノ二
ヴェスパジアン チツス フラヴイウス 一四九ノ二
ヴェニ クリアトル スピリツス 一四九ノ二
ヴェロニカ 一四九ノ三
ウヲットン ウイリアム 一四九ノ三
ウォドロウ ロベルト 一四九ノ三
ウォルゼー トマス 一四九ノ三
ウォルセステル サミュエル 一四九ノ三
ウォルヴウォルス ウイリアム 一四九ノ三
ウォルヴウォルス クリストファル 一四九ノ三
ウォルヴウォルス チャールス 一四九ノ三
ウォルヴウォルス クリストファル 一四九ノ三
ウォルヴウォルス ヨハン 一四九ノ三
ウォルフ クリスチヤン 一四九ノ三
ウォルフ ヨセフ 一四九ノ三
ウォルフ ヨハン クリストフ 一四九ノ三
ウォルフェンビッテル斷篇 一四九ノ三
ウォルムス 一四九ノ三
ウォルリン ヨハン オロフ 一四九ノ三
ウォルレース アルフレッド ラッセル 一四九ノ三
ウォルレース ウイリアム 一四九ノ三
ウォルレース ロベルト 一四九ノ三
ウォレップ ヨハンネス 一四九ノ三
ヴォルゲート 一四九ノ三
ヴォルテール 一四九ノ三
ウジヤ 一四九ノ三
ウーダン カシミル 一四九ノ三
宇宙論的証據論 一四九ノ三
ウットケ カルル フレデリヒ アドルフ 一四九ノ三
ウッポ派 一四九ノ三
ウヴ 一四九ノ三
ウーヴ レオナルド 一四九ノ三
ウーブ レオナルド 一四九ノ三
ウニゲニツス 一四九ノ三
ウベルチヌス ド カサリ 一四九ノ三
ウムブライト フリードリヒ ウィルヘルム カルル 一四九ノ三
ウリム トンミム 一四九ノ三
ウリヤ 一四九ノ三
ウル 一四九ノ三
ウルスラ 一四九ノ三
ウルスリン 一四九ノ三
ウルトラモンタニズム 又アルトラモンテニズム 一四九ノ三
ウルパン 一四九ノ三
ウルフィラス 一四九ノ三
ウルマン カルル 一四九ノ三
ウールストン トマス 一四九ノ三
ウルルスペルゲル ヨハン アウグスト 一四九ノ三
ヴント ウイルヘルム マヌタス 一四九ノ三

エの部

英國教會 一四九ノ三
英譯聖書 一四九ノ三
エヴァンジェリスト 一五〇ノ一
エクスタシー 一五〇ノ一
エクケ ホモ 一五〇ノ一
エゲド ハンス 一五〇ノ一
エコランパディウス ヨハン 一五〇ノ一
エサルハドン 一五〇ノ一
エジオンゲベル 一五〇ノ二
埃及 一五〇ノ二
埃及人福音書 一五〇ノ二
埃及探險資金 一五〇ノ二
埃及譯聖書 一五〇ノ二
エスコリアル 一五〇ノ二
エステル 一五〇ノ二
以士帖書 一五〇ノ二
エズレル 一五〇ノ二
エゼキエル 一五〇ノ二
以西結書 一五〇ノ二
エック ヨハン マイエル フォン 一五〇ノ二
エッタハルト 一五〇ノ二
エッグルストーン アンド レヴイス エドリルド 一五〇ノ二
エッセース 一五〇ノ二
エッセ子人 一五〇ノ二
エッチンゲル フリードリヒ クリストフ 一五〇ノ二
エッディー メリー ベーカー グローヴァー 一五〇ノ三

エヅラ 一五〇ノ一
以士喇書及ビ尼希米亞記 一五〇ノ二
エヅラ第一書 一五〇ノ二
エヅラ第二書 一五〇ノ二
エラオビヤ 一五〇ノ二
エラオビヤ譯聖書 一五〇ノ二
エデッサ 一五〇ノ二
エデルシャイム アルフレッド 一五〇ノ二
エデン 一五〇ノ二
エデン 一五〇ノ三
エドマンド 聖 一五〇ノ三
エドマンド 聖 一五〇ノ三
エドレー 一五〇ノ三
エドワルヅ ウヨナサン 一五〇ノ三
エドワルヅ ヨヨナサン 小 一五〇ノ三
エノク 一五〇ノ三
エノク書 一五〇ノ三
エノク秘義の書 一五〇ノ三
エバ 一五〇ノ三
エバル 一五〇ノ三
エヒウ 一五〇ノ三
エピオン派 一五〇ノ三
エピルメロダク 一五〇ノ三
エピクーロス 一五〇ノ三
エピクーロス說 一五〇ノ三
エピクテートス 一五〇ノ三
エピスコパル チャルチ 一五〇ノ三
エピスコピウス シモン 一五〇ノ三
エピファニウス 一五〇ノ三
エピファニー 一五〇ノ三
エファタ 一五〇ノ三
エフライム 一五〇ノ三
エフラエム シルス 一五〇ノ三
エブス 一五〇ノ三
エブス人 一五〇ノ三
エブオス同盟會 一五〇ノ三
エペル ヨハン子ス ウイルヘルム 一五〇ノ三
エペソ 一五〇ノ三
以弗所書 一五〇ノ三
エペソの大會議 一五〇ノ三
エホバ 一五〇ノ三
エホバの僕 一五〇ノ三
エホヤキム 一五〇ノ三
エホヤキン 一五〇ノ三
エホヤダ 又はヨヲム 一五〇ノ三
エホラム 一五〇ノ三
エマヲ 一五〇ノ三
エムペリー ヒリップ 一五〇ノ三
エムペドクレース 一五〇ノ三
エムモンス ナサニエル 一五〇ノ三
エメルソン ラルフ ワルド 一五〇ノ三
エラスチアニズム 一五〇ノ三
エラスムス デシデリウス 一五〇ノ三
エラテ 又はエロト 一五〇ノ三
選 一五〇ノ三
エラム 一五〇ノ三
エリ 一五〇ノ三
エリ ラマ サバクタニ 一五〇ノ三
エリオット ジョルウ 一五〇ノ三
エリオット ウヨン 一五〇ノ三
エリコ 一五〇ノ三
エリゲーナ スコツス 一五〇ノ三
エリザベツ 聖 一五〇ノ三
エリシヤ 一五〇ノ三
エリム 一五〇ノ三
エリヤ 一五〇ノ三
エリヤの默示錄 一五〇ノ三
エルウード トマス 一五〇ノ三
エルヴェシウス 一五〇ノ三
エルケサイト 一五〇ノ三
エルサレム 一五〇ノ三
エルサレムの會議 一五〇ノ三
エルサレムの室 一五〇ノ三
エルサレムの神殿 一五〇ノ三
エルシャダイ 一五〇ノ三
エルスカイン エベ子ッセル 一五〇ノ三
エルスカイン トマス 一五〇ノ三
エルダデモダラの書 一五〇ノ三
エルドマン ヨハン エドウアルド 一五〇ノ三
エルリオット チャルロット 一五〇ノ三
エルリコット チャールス ウヨン 一五〇ノ三
エルリス ウイリアム 一五〇ノ三
エレア學派 一五〇ノ三
エレミヤ 一五〇ノ三
耶利米亞記 一五〇ノ三
エレミヤの書 一五〇ノ三
エレミヤ二世 (スターフ フリードリヒ 後にブロン エーレル) 一五〇ノ三
エーレル 一五〇ノ三
エロヒム 一五〇ノ三
エロヒム古典 一五〇ノ三
エローム 一五〇ノ三

エンクラタイツ　二二〇ノ上
エンゲジ　二二〇ノ下
エンゲリック　ブロザルス　二二〇ノ下

オの部

オーエン　ロバルト　二二一ノ一
オーエン　ロバルト　アール　二二一ノ一
律法　二二二ノ一
オキノ　ベルナルデノ　二二二ノ二
行　二二二ノ二
オザノン　アントアヌ　フレデリー　二二二ノ二
オジアンデル　アンドレアス　二二二ノ二
オスダード　サミュエル　二二二ノ二
オスモンド　聖　二二二ノ二
オスワルド　聖　二二二ノ二
オーステルツェー　ケン　ヤコブ　ファン　二二二ノ二
オアカジオ論　二二二ノ一
オッカム　ウイリアム　二二二ノ一
牛津　二二八ノ一
牛津運動　二二八ノ一
オッテルバイン　ヒリヤブ　ウイリアム　二二八ノ一
オッフフリード　ツイセンブルグの　二二八ノ一
オーフ　ルイタス　二二八ノ一
オトー　フライシングの　二二八ノ一
オトー　バムベルグの　二二八ノ一
處女　二二八ノ一
オチシモ　二二八ノ一
オナイダ　コンミュニチー　二二八ノ一
オノリウス　二二八ノ一
オノリウス一世　二二八ノ一
阿巴底亞書　二二八ノ一
オバーラン　ウヤン　フレデリー　二二八ノ一
オプタータス　二二八ノ一
オベルリン神學　二二八ノ一
オベルリン神學校　二二八ノ一
オラフ　聖　二二八ノ一
オリヴァース　トマス　二二八ノ二
オリヴァント　アルフレッド　二二八ノ二
オリヴィ　ピエル　ウヤン　二二八ノ二
オリヴェタン　ピエル　ロバルト　二二八ノ二
オリエル　ウヤン・ウヤタ　二二八ノ二
オリゲン　又オーゲネス　二二八ノ二
オーリン　スチーブン　二二八ノ二
オルガ　聖　二二八ノ二
オルスバウゼン　ヘルマン　二二八ノ二
オルソドックシー　二二八ノ二
オールド　カトリックス　二二八ノ二
オレアリウス　二二八ノ二
オレフィアヌス　カスパル　二二八ノ二
オロシウス　パウルス　二二八ノ二
音樂　二二八ノ二
恩惠　二二八ノ二
恩惠の方法　二二八ノ二
オンゲロス　二二八ノ二
オンデルドング　ヘンリー　アスサック　二二八ノ二

カの部

カイザリヤ　二二八ノ二
カイザリヤ　ビリビ　二二八ノ二
改心　二二八ノ二
カイム　カルル　テオドール　二二八ノ二
カイン　二二八ノ二
カイン派　二二八ノ二
香　香物　二二八ノ二
高敎會派　二二八ノ二
高等批評　二二八ノ二
カウバル　又ジーバル　ウイリアム　二二八ノ二
降魔　二二八ノ二
香爐　二二八ノ二
カウンシル　二二八ノ二
カヴァルデール　マイルス　二二八ノ二
カヴェナンター　二二八ノ二
カエタン　ヤコボ　二二八ノ二
永生　二二八ノ二
究りなき刑罰　二二八ノ二
カステル　エドマンド　二二八ノ二
カスペルト　聖　二二八ノ二
カセドラル　二二八ノ二
カタコム　二二八ノ二
カタリ派　二二八ノ二
カタリナ　聖　二二八ノ二
カタリナ　ウェンナの　二二八ノ二
カタシアヌス　ヨハネス　二二八ノ二
カタドウルス　フルフ　二二八ノ二
カッパラ　二二八ノ二
カップ　シクスト　カルル　二二八ノ二
カッペル　ルイ(又ルドヴイコス　カッペロス)　二二八ノ二
割禮　二二八ノ二
割禮の祝節　二二八ノ二
カテキウメン　二二八ノ二
カテキズム　二二八ノ二
カデシ　二二八ノ二

下等批評　二二八ノ二
カトリック　二二八ノ二
カトリック　アポストリック教會　二二八ノ二
カトリック　エピッスルス　二二八ノ二
加特力教會　二二八ノ二
カトリック　ツルース　ソサイエチー　二二八ノ二
カナ　ガリラヤの　二二八ノ二
加那太　二二八ノ二
カナン　二二八ノ二
カナン　二二八ノ二
カニシウス　ペテル　二二八ノ二
カーニス　カルル　フリードリッヒ　二二八ノ二
カノニカル　アウグスト　二二八ノ二
カノニカル　アワルス　新羅時　二二八ノ二
カノニゼーション　聖列加入　二二八ノ二
カノン　正經　二二八ノ二
カノン　二二八ノ二
カノン　ロー　宗教法典　二二八ノ二
カパドキア　二二八ノ二
カピストラヌス　(ヨオバンニ　アイカピストラノ)　二二八ノ二
カピトー　ウォルフガング　二二八ノ二
カフタン　ユリウス　二二八ノ二
カプキンス　二二八ノ二
カペナウム　二二八ノ二
カマルドゥルス　二二八ノ二
神　(舊約聖書の)　二二八ノ二
神　(新約聖書の)　二二八ノ二
神　(基督教會の)　二二八ノ二
カミサール　二二八ノ二
神の像　二二八ノ二
神の國　二二八ノ二
神の敎會　二二八ノ二
神の子　二二八ノ二
神の羔　二二八ノ二
神の友　二二八ノ二
神の櫃　二二八ノ二
カムバ子ルラ　トマソー　二二八ノ二
カムベル　アレキサンデル　二二八ノ二
カムベル　ジョン　マクレオド　二二八ノ二
カムベル　レヤナルド　ウォン　二二八ノ二
カムベルランド　リチャルド　二二八ノ二
カムベルランド長老敎會(ローレンジ)　二二八ノ二
カムベギウス(カムベッヤ)　二二八ノ二
カムミンス　ウォルウ　デヴイッド　二二八ノ二
カメロン派　二二八ノ二
カヤバ　二二八ノ二
カーライル　トマス　二二八ノ二
カラミー　エドマンド　二二八ノ二
カリクスタス　二二八ノ二
カリクスツス　ゲオルグ　二二八ノ二
構廬節　二二八ノ二
カルヴィン　ジョン　二二八ノ二
カルヴィン派神學　二二八ノ二
カフタン　ノリス　二二八ノ二
カルク　エドワルド　二二八ノ二
カルクランド　サミュエル　二二八ノ二
カルケミシ　二二八ノ二
カルジル　ドナルド　二二八ノ二
カールスタット　アンドレアス　ルドルフ　二二八ノ二
カルステールス　フスボーデンスタイン　二二八ノ二
カルセージ　ウイリアム　二二八ノ二
カルケドンの大會議　二二八ノ二
カルタイゼン　ハインリヒ　二二八ノ二
カルダーウッド　デヴイッド　二二八ノ二
カルダーウッド　ヘンリー　二二八ノ二
カルツジアン派　二二八ノ二
カルディ　ゲオルグ　二二八ノ二
カルディナス　二二八ノ二
カルディナル　二二八ノ二
カルデヤ　二二八ノ二
カルトライト　トマス　二二八ノ二
カルバリー　二二八ノ二
カルベンタル　メリー　二二八ノ二
カルベンタル　ラント　二二八ノ二
カルボクラテス派　二二八ノ二
カルメー　アウギュスチン　二二八ノ二
カルメル　二二八ノ二
カルメル派　二二八ノ二
カルロス五世　二二八ノ二
カレップ　二二八ノ二
カレンダル　ブレズレン　二二八ノ二
姦淫、　二二八ノ二
韓國　二二八ノ二
感情　二二八ノ二
カンタイン　カルル　ヒルデブランド男爵　二二八ノ二
完全論　二二八ノ二
カンターベリー　二二八ノ二
カンダケ　二二八ノ二
カント　イムマヌエル　二二八ノ二
監督　二二八ノ二
監督管區　二二八ノ二
監督敎會　二二八ノ二
カンドリッシュ　ロバルト　スミス　二二八ノ二
カンドルマス　二二八ノ二
カンプ　ミーチング　二二八ノ二

感靈說 二六八ノ二
カンニングハム ウィリアム 二六八ノ二
槍機山 二六八ノ二
ガイゲル アブラハム 二六八ノ二
蓋然主義 二六八ノ一
概念論 二六八ノ一
ガイレル ヨハン 二六八ノ二
ガウジ ウィリアム 二六八ノ二
合理說 二六九ノ二
ガヴァゼー アレクサンドロー 二六九ノ二
雅歌 二六九ノ二
學派 神學上の 二七〇ノ二
學者 二七〇ノ二
ガザ 二七〇ノ二
ガスパラン アクセノア 伯爵 二七〇ノ二
ガスリー トマス 二七〇ノ二
ガダラ ガダラ人の地 二七〇ノ二
ガラーカル トマス 二七〇ノ二
ガーディナル スチーフェン 二七〇ノ二
ガド 二七〇ノ二
ガブリエル 二七〇ノ二
ガブリエル シモニア 二七〇ノ二
ガブレル ヨハン フィリップ 二七〇ノ二
ガマリエル 二七〇ノ二
ガラテヤ ガラテヤ人 二七〇ノ二
加拉太書 二七〇ノ二
ガリカニズム 二七〇ノ二
ガリカン教會 二七〇ノ二
ガリカン信仰告白 二七〇ノ二
ガリッチン デメトリウス アウグスチン 二七〇ノ二
ガリヨ 二七〇ノ二
ガリラヤ 二七〇ノ二
ガリラヤ海 二七〇ノ二
ガリレオ ガリレー 二七〇ノ二
ガルヂット ヘンリー ハイランド 二七〇ノ二
ガルベルド ウォーバレニ 二七〇ノ二
ガローデット トマス ホプキンス 二七〇ノ二

キの部

舊カトリック派 二七〇ノ二
舊教 二七〇ノ二
救拯學 又は救濟論 二七〇ノ二
救世軍 二七〇ノ二
舊約聖書 二七〇ノ二
舊約聖書神學 二七〇ノ二
舊約聖書總論 二七〇ノ二
舊約聖書の經文 二七〇ノ二
舊約聖書の言語 二七〇ノ二
舊約聖書の時代 二七〇ノ二
舊約聖書の正經 二七〇ノ二
舊約聖書歷史 二七〇ノ二
舊約の年代 二七〇ノ二
舊約的世界觀 二七〇ノ二
機會說 又は機會原因說 二七〇ノ二
紀元 二七〇ノ二
キース アレキサンデル 二七〇ノ二
キース ウォルウ 二七〇ノ二
奇蹟 二七〇ノ二
新約 二七〇ノ二
新約書 二七〇ノ二
新約時 二七〇ノ二
新約日課書 二七〇ノ二
キーツ ジョン 二七〇ノ二
乞丐僧 二七〇ノ二
キッター ジョン 二七〇ノ二
キッド ウィリアム 二七〇ノ二
キドロン 二七〇ノ二
キニク學派 二七〇ノ二
キーブル ジョン 二七〇ノ二
詭辯學派 二七〇ノ二
キムキ 又キムヒ ダビド 二七〇ノ二
共觀福音書 二七〇ノ二
共產主義 二七〇ノ二
共同生活の兄弟 二七〇ノ二
共團會 二七〇ノ二
潔物 不潔物 二七〇ノ二
虛無說 或は破壞說 二七〇ノ二
キリキア 二七〇ノ二
キリスチアン 二七〇ノ二
基督 二七〇ノ二
基督教 二七〇ノ二
基督教會 二七〇ノ二
基督教主義學校 又は宣教學校 二七〇ノ二
基督教女子青年會 二七〇ノ二
基督教青年會 二七〇ノ二
キリスト サクラム 二七〇ノ二
基督信徒共團會 二七〇ノ二
基督單意說 二七〇ノ二
基督同胞教會 二七〇ノ二
基督の畫像 二七〇ノ二
基督の再來 二七〇ノ二

基督の職 二七〇ノ二
基督派 二七〇ノ二
基督兩意說 二七〇ノ二
基督兩性論者 二七〇ノ二
基督論 二七〇ノ二
キールケガールド セーレン アービー 二七〇ノ二
キルハム アレキサンデル 二七〇ノ二
キレーチ學派 二七〇ノ二
禁戒 二七〇ノ二
キング ウォナス 二七〇ノ二
キング トマス スタール 二七〇ノ二
キングスレー チャールス 二七〇ノ二
禁酒及び禁酒運動 二七〇ノ二
金錢 貨幣 二七〇ノ二
近代主義 二七〇ノ二
欽定譯聖書 二七〇ノ二
禁讀書目 二七〇ノ二
金の牛 二七〇ノ二
禁慾主義 或は苦行主義 二七〇ノ二
義 二七〇ノ二
僞經 又は僞聖書 二七〇ノ二
儀式 二七〇ノ二
儀式派 二七〇ノ二
擬人說 二七〇ノ二
ギーズ アンリ 二七〇ノ二
ギーズ フランソア及びシャール 二七〇ノ二
ギーゼレル ヨハン カルル ルドウイヒ 二七〇ノ二
ギゾー フランソア ピエル ウロー ム 二七〇ノ二
ギッフォルド講演 二七〇ノ二
ギッボン エドワルド 二七〇ノ二
ギッボンス ウェームス 二七〇ノ二
ギデオン 二七〇ノ二
義とせらる 二七〇ノ二
僞法王 カルル フリードリッヒ 二七〇ノ二
ギュゾラッフ アウグスト 二七〇ノ二
ギヨン マリー アーヴィア 二七〇ノ二
希臘 ウヤン ドラ モート 二七〇ノ二
希臘教會 二七〇ノ二
希臘譯聖書 二七〇ノ二
ギル ウォン 二七〇ノ二
ギルガル 二七〇ノ二
ギルバルト セムプリンガハムの 二七〇ノ二
ギルビン ベルナルド 二七〇ノ二
ギレアデ 二七〇ノ二
ギレット エブラ クリスチアン 二七〇ノ二
ギンスブルヒ ダヴィッド 二七〇ノ二

クの部

クーア アントアヌ 二七〇ノ二
悔改 二七〇ノ二
クイチン アブラハム 二七〇ノ二
クエーカル派 二七〇ノ二
楔形文字 二七〇ノ二
クザヌス ニコラウス(ニコライ又はクレブス)又ニコラ ド クザ 二七〇ノ二
クーザン ヴィクトル 二七〇ノ二
籤 二七〇ノ二
クック チャールス 二七〇ノ二
クック フレデリック チャールス 二七〇ノ二
クック ヘンリー 二七〇ノ二
功德 二七〇ノ二
クナップ アルベルト 二七〇ノ二
クニプストロ ヨハン 二七〇ノ二
クノーベル カルル 二七〇ノ二
クーバー アッシリー 二七〇ノ二
クブリアヌス ダスキウス ケキリウス 二七〇ノ二
組合教會 二七〇ノ二
組會 二七〇ノ二
クラウディウス ツリンの 二七〇ノ二
クラーク アダム 二七〇ノ二
クラーク サミュエル 二七〇ノ二
クラーク フランシス エドワルド 二七〇ノ二
クラークソン トマス 二七〇ノ二
クラショー リチャルド 二七〇ノ二
クラッブ ジョルウ 二七〇ノ二
クラトー フォン クラフトハイム(ヨハン子爵 クラフト) 二七〇ノ二
クラーメル ヨハン アンドレアス 二七〇ノ二
クララ 聖 二七〇ノ二
クラレンバッハ アドルフ 二七〇ノ二
クランマル トマス 二七〇ノ二
クーリオ ケリウス セクンドス 二七〇ノ二
クリスチヤン カトリック派 二七〇ノ二
クリスチヤン教會 二七〇ノ二
クリスチヤン サイエンス 二七〇ノ二
クリスチヤン ユニオン教會 二七〇ノ二
基督降誕節 二七〇ノ二
クリソストモス ヨブチス 二七〇ノ二
クリブト カルヴィン派 二七〇ノ二
クリューデネル 男爵夫人 ユリアン 二七〇ノ二
クリロス 亞歷山の 二七〇ノ二
クリロス エルサレムの 二七〇ノ二
クルロス ルカリス 二七〇ノ二
クルーシウス クリスチアン アウグスト 二七〇ノ二

目次

クルーデン　アレキサンダル　三六ノ二
クルニーの寺院　三六ノ三
クルムマヘル　フリードリッヒ、ウイルヘルム　三六ノ三
クレーグ　ロヨン　三六ノ三
クレスパン　ジャン　三六ノ三
クレースル　メルキオル　三六ノ三
クレテ　三六ノ三
クレドック　サミュエル　三六ノ三
クレニオ　三六ノ三
クレマンジュ　ニコラス　ド　三六ノ三
クレメンス　テトス　フラヴイウス　三六ノ三
クレメンス　ローマヌス　三六ノ三
クレメンス第三世　三六ノ三
クレメンス第四世　三六ノ三
クレメンス第五世　三六ノ三
クレメンス第七世　三六ノ三
クレメンス第八世　三六ノ三
クレメンス第十一世　三六ノ三
クレメンス第十三世　三六ノ三
クレメンス第十四世　三六ノ三
クレル　ニコラウス　三六ノ三
クロヴイス（又クルアタス、クロドヴエクス、ルドヴイクス、ルイとも云ふ）　三六ノ三
クロス　又は　タウシ　三六ノ三
クローフォルド　トマス　ロエー　三六ノ三
クロプストック　フリードリッヒ　ゴッドリーブ　三六ノ三
クロムウェル　オリヴアル　三六ノ三
クワイア　三六ノ三
懷疑說　三六ノ三
回教　三六ノ三
會衆派　三六ノ三
懷胎節　三六ノ三
會堂　三六ノ三
快樂說　三六ノ三
廣教會派　三六ノ三
領物　聖書の　三六ノ三
貨幣　三六ノ三
寛容令　三六ノ三
クンツェ　ウォン　クリストファル　三六ノ三
偶像教　偶像禮拜　三六ノ三
グーデル　ウイリアム　三六ノ三
グードウイジ　ジョン　三六ノ三
グノー　シャール　フランジア　三六ノ三
グノスチック派　三六ノ三
グラウル　カルル　三六ノ三
グラシアン　三六ノ三
グラッドストーン　ウイリアム　三六ノ三
グラトリー　三六ノ三
グラハム　イライジャ　三六ノ三
グラフ　カルル　ハインリッヒ　三六ノ三
グランヴイル　ジョセフ　三六ノ三
グリースバッハ　ヨハン　ヤコブ　三六ノ三
グリチウス　ジモン　三六ノ三
グリムソルプ　エドマンド　ベケット男爵　三六ノ三
グリーン　デッシベル　三六ノ三
グリーン　トマス　ヒル　三六ノ三
グルントウイッヒ　ニコライ　フレデリック　セファリン　三六ノ三
グレー　エーサ　三六ノ三
グレー　トマス　三六ノ三
グレスウエル　エドワルド　三六ノ三
グレグ　ウイリアム　ラスボーン　三六ノ三
グレゴア　グンター　三六ノ三
グーゴリウス　アールの　三六ノ三
グレゴリウス　ニッサの　三六ノ三
グレゴリウス　ナジアンゼイの　三六ノ三
グレゴリウス第一世　大教皇　三六ノ三
グレゴリウス第七世　三六ノ三
グレゴリウス第十三世　三六ノ三
グレゴリウス第十六世　三六ノ三
グレゴリウス　テオドル　メラマッシアス　三六ノ三
グレゴル　フォン　ハイムブルク　三六ノ三
グロステスト　ロバルト又はレーベド　又はローバート　フーダー　三六ノ三
グローチウス　三六ノ三
外國傳道　三六ノ三
劃一令　三六ノ三
畫像禮拜　三六ノ三

ケの部

傾向說　三六ノ三
經句批評　三六ノ三
經外聖書　三六ノ三
景教　三六ノ三
敬虔派　三六ノ三
經驗論　三六ノ三
啓示　又は示語　聖書の　三六ノ三
系圖　三六ノ三
系圖　耶蘇基督の　三六ノ三
經典　三六ノ三
刑罰　三六ノ三
啓蒙時代　三六ノ三
契約の概　三六ノ三
教會　又は教理　三六ノ三

目次

教義歷史　又は教理歷史　三六ノ三
教義論　三六ノ三
教區　三六ノ三
教會　三六ノ三
教會戒規　三六ノ三
教會軍　三六ノ三
教會財產　三六ノ三
教會政治　三六ノ三
教會條例　三六ノ三
教會と國家との關係　三六ノ三
教會問答　三六ノ三
教會歷史　三六ノ三
教職　三六ノ三
教長　三六ノ三
教父　三六ノ三
教父學　三六ノ三
教父時代　三六ノ三
ケキリア　聖　三六ノ三
化身　三六ノ三
化體說　三六ノ三
決疑學　三六ノ三
ケッテルマン　ウイルヘルム　エマヌエル男爵　三六ノ三
ケッテレル　ペルトロ　ホイス　三六ノ三
ケドモシ　又はキドロン　三六ノ三
ケドロン　三六ノ三
ケーユダスゼルヒ宗教運動　三六ノ三
ケーニッヒ　サムエル　三六ノ三
ケーチル　バスキエア　三六ノ三
ケノシス說　三六ノ三
ケムニツ　マルチン　三六ノ三
ケムピス　トマス　ア　三六ノ三

コの部

鋼橋　三六ノ三
創橋プラトーン學派　三六ノ三
ケモシ　エドワルド　三六ノ三
ケーヤド　ジョン　三六ノ三
ケーラス　パウル　三六ノ三
ケリー　ヘンリー　フランシス　三六ノ三
ケルスの書　三六ノ三
ケルブ　ケルビム　三六ノ三
ケルラリウス　ミカエル　三六ノ三
ケルン　ダニエル　ゲオルア　三六ノ三
ケールン　コンラード　フォン　三六ノ三
ケーレー　ウイリアム　三六ノ三
ケン　トマス　三六ノ三
ケンクレア　三六ノ三
檢稿職　三六ノ三
懲祭　三六ノ三
堅信禮　三六ノ三
講選　三六ノ三
建築　三六ノ三
獻堂　三六ノ三
ケンリック　ブランシス　パトリック　三六ノ三
ケンニコット　ベンジャミン　三六ノ三
ゲオルグ三世　三六ノ三
ゲビニウス　ワイルヘルム　三六ノ三
ゲージ　ヨハン　メルキオル　三六ノ三
ゲッデス　セーモット又はセンニー　三六ノ三
ゲッデス　アレキサンダル　三六ノ三
ゲッセマ子　三六ノ三
ゲーテ　ヨハン　ウォルフガング　三六ノ三
ゲテサレ　三六ノ三
ゲブハルド二世（ドルドブルク大僧侶）　三六ノ三
ゲブハルド　オスカル　フォン　三六ノ三
ゲヘナ　三六ノ三
ゲマラ　三六ノ三
ゲリジム　三六ノ三
ゲルハルト　パウル　三六ノ三
ゲルレス　ヨハン　ヨセフ　三六ノ三
ゲルレルト　クリスチアン　フィルヒデゴット　三六ノ三
原罪　三六ノ三
現代主義　三六ノ三

コの部

公現節　三六ノ三
犧祭拜　三六ノ三
洪水　三六ノ三
公同書翰　三六ノ三
國家と教會　三六ノ三
國教會　三六ノ三
コクチェーユス　ヨハネス　三六ノ三
コクレル　アドルフ　ローレン　ティール　三六ノ三
コーク　トマス　三六ノ三
古公教會　三六ノ三
戶籍調査　三六ノ三
古譚說　三六ノ三
コックス　サミュエル　ハンソン　三六ノ三
コットン　ジョン　三六ノ三
コットン　ウォルフ　ヒドルリー　ランケ　三六ノ三
道　三六ノ三
コニベアル　ウイリアム　ウォン　三六ノ三
古物學　三六ノ三
コプハム聊（ウォン　ヌーハトキャスル）　三六ノ三

目次

コプツ 四六六ノ一
コマンデル（ドルフマン）ヨハン 四六六ノ三
コムト アウゼスト 四六七ノ一
コムモディアヌス 四六七ノ三
コムモドス 四六七ノ三
コムブトン ヘンリー 四六七ノ三
コムポステラ 四六八ノ一
コメニウス 四六八ノ一
功利論 四六八ノ二
コラジン 四六八ノ三
コラムバ 聖 四六八ノ三
コリアル ウェレミー 四六八ノ三
コリンス アンソニー 四六八ノ三
コリント 四六九ノ三
哥林多前書 哥林多後書 四六九ノ三
コリンニー パール ドガス 四七〇ノ一
コルドヴァ 四七〇ノ二
コルバン 四七〇ノ三
コルリッヂ サミュエル テーロル 四七〇ノ三
コールブリッヂ ヘルマン フリードリヒ 四七〇ノ三
コレット ウヨン 四七〇ノ三
コレンゾー ウヨン ウィリアム 四七〇ノ三
コーレル クリスチアン及びヒーロニムス 四七〇ノ一
コロサイ 四七〇ノ二
哥羅西書 四七〇ノ二
コロムバヌス 四七〇ノ二
婚姻 四七〇ノ二
コンヴァルショニスト 四七〇ノ三
コンヴェンチクル 四七〇ノ三
コンヴェント 四七〇ノ一
コンヴォケーション 四七〇ノ二
コングレゲーショナリズム 四七〇ノ三
コンコルダット 四七〇ノ三
コンコルダンス 四七〇ノ三
コンシストリー 四七〇ノ三
コンスタンチヌスの會議 四七〇ノ三
コンスタンチヌス大帝 四七〇ノ一
コンスタンチノープル 四七〇ノ一
コンセンサス ゼチウェンシス 四七〇ノ二
コンセンサス チグリヌス 四七〇ノ二
コンタリニ ガスパロ 四七〇ノ三
コンサルヴィ エルコール 四七〇ノ三
コンデイショナル イムモアタリチー 四七〇ノ二
ミッション 四七〇ノ二
コンディヤック エティヌ ボノー 四七〇ノ三
魂魄崇拜 四七一ノ一
コンフェレンス 四七一ノ二
コンラード マールブルグの 四七一ノ二
ゴーア チャールス 四七一ノ三
ゴグ 四七一ノ三
五旬節 四七一ノ三
ゴージャリー ダニエル ウヨン 四七一ノ三
ゴス 又はゴート 四七一ノ三
ゴス子ル ヨハテス エウアンゲリスタ 四七一ノ三
ゴセン 四七一ノ三
ゴーセン フランツアー サミュエル 四七一ノ三
ゴチック型の建築 四七一ノ三
ゴチック譯聖書 四七一ノ三
ゴットシャルク 四七一ノ三
ゴットシャルク 四七一ノ三
ゴーデー フレデリー 四七一ノ三
ゴドフレー ディヨンの 四七一ノ三
護法家 四七一ノ三
護法論 四七一ノ三
ゴーバー サミュエル 四七一ノ三
ゴモラ 四七一ノ三
ゴリアテ 四七一ノ三
ゴール 四七一ノ三
ゴルゴタ 四七一ノ三
ゴルトン サミュエル 四七一ノ三
ゴルドン チャールス ウォルク 四七一ノ三
ゴールドスミッス オリヴェル 四七一ノ三
ゴルハム事件 四七一ノ三

サの部

祭司 四七一ノ一
祭司長 四七一ノ一
祭日 四七一ノ一
祭壇 又は壇 四七一ノ一
サイロビニケ 四七一ノ一
葬儀 四七一ノ一
創造論 四七一ノ二
サウス ロバルト 四七一ノ二
サウスウェル ロバルト 四七一ノ二
創世記 四七一ノ二
相伴說 四七一ノ二
サウル 四七一ノ二
サウル ウヨシュア 四七一ノ二
サヴォナロラ ヒエロニムス 四七一ノ二
サギタリウス カスパル 四七一ノ三
サタラメンタリアンス 四七一ノ三
献物 四七一ノ三
サシー ルイ イザーク ル メートル ド 四七一ノ三

目次

サタン 五六ノ二
サッピラ 五六ノ二
サーディア ハ ガオン ベン ヨセフ 五六ノ二
サドカイ派 五六ノ三
サドレトー ウヤコーボ 五七ノ一
審判 五七ノ一
サベリウス 五七ノ二
サベリウス說 五七ノ二
サマリア 五七ノ二
サマリア人の七十人譯 五七ノ二
サムエル 五七ノ三
撒母耳前書 撒母耳後書 五七ノ三
サムソン 五七ノ一
サムナー ウヨン バード 五七ノ二
サムマース トマス オスモンド 五七ノ二
サモス 五七ノ二
サモトラケ 五七ノ二
サラ 又はサライ 五七ノ二
サラミス 五七ノ二
サルゴン 五七ノ二
サルデス 五七ノ二
サルピ パオロ 五七ノ二
サルモチ 五七ノ二
サルモン ジョホウ 五七ノ二
サールワル コンノア 五七ノ三
サレバタ 五七ノ三
サレム 五七ノ三
サロメ 五七ノ一
三位一體 五七ノ一
サンキー イラ デヴィド 五七ノ二
サンクロフト ウィリアム 五七ノ二
産後祝別式 五七ノ二
三聖童の歌 五七ノ二
サン シモン クロード アンリー 五七ノ三
サン コムテ ド 五七ノ三
三十九箇條 五七ノ三
三十年戰爭 五七ノ三
山上の說教 五七ノ三
サンタ クロース 五七ノ三
サンデー ウィリアム 五七ノ三
サンディース ジョルジ 五七ノ三
サンディース エドウィン 五七ノ三
サンデマン ロバルト 五七ノ三
サンヒドリン 五七ノ三
讃美歌 五七ノ三
サン マーター ルイ グロード ド 五七ノ三
ザイオン派 五七ノ三
罪祭 五七ノ一
ザイレル ヨハン ミカエル 五七ノ一
ザヴィエー フランシスコ 五七ノ一
ザーカイ 五七ノ二
ザカリア 五七ノ二
ザカリヤ 五七ノ二
撒加利亞書 五七ノ二
坐席 五七ノ二
ザック アウガスト フリードリッヒ 五七ノ二
ザック ウイルヘルム 五七ノ二
カルル ハインリッヒ 五七ノ二
ザックス ハンス 五七ノ三
ザドク 五七ノ三
ザンキ ヒエロニモス 五七ノ三
懺悔 五七ノ一
懺悔詩 五七ノ一
懺悔僧 五七ノ一

シの部

死 五七九ノ二
シーアス エドマンド ハミルトン 五七九ノ二
シーアス バルナバス 五七九ノ二
週 五七九ノ三
酬恩祭 五八〇ノ一
宗教 五八〇ノ一
宗教改革 五八〇ノ一
宗教學 五八〇ノ一
宗教會議 五八〇ノ一
宗教裁判 五八〇ノ二
宗教條約 五八一ノ二
宗教心理學 五八一ノ二
宗教哲學 五八二ノ二
宗教法典 五八二ノ二
修道僧 五八二ノ二
宗派 五八二ノ二
終末論 又は末事論 五八二ノ二
終油禮 五八二ノ二
シウレル エミル 五八二ノ二
シェーカー派 五八二ノ二
シェークスピーア ウィリアム 五八二ノ二
シェパード トマス 五八二ノ二
シェリー パーシー ビッシ 五八二ノ三
シェリング フリードリッヒ ウォル 五八二ノ三
ヘルム ヨセフ フォン 五八二ノ三
シェンケル ダニエル 五八二ノ三
シェンヘル ヨハン ハインリヒ 五八二ノ三
シオン 五八二ノ三
シオン主義運動 五八二ノ三

シオン派 又はザイオン派 五六〇ノ一
死海 五六一ノ一
シガルニー サイアイア ハンドレー 五六一ノ二
シギスムンド ヨハン 五六一ノ三
シクストス第四世 五六一ノ三
シクストス第五世 ロヨート 五六一ノ三
シーダレーヴ 五六一ノ三
シケム 五六一ノ三
シケル 五六一ノ三
私語告白 五六一ノ三
士師記 五六一ノ三
シシヤク 五六一ノ三
シジュベア クェムブルブの 五六一ノ三
システルシアン派 五六一ノ三
至聖所 五六一ノ三
自然神學 五六一ノ三
自然崇拜 五六一ノ三
七十人譯 五六一ノ三
七悲痛祭 五六一ノ三
七勇士 基督教徒の 五六一ノ三
シゼウイック ヘンリー 五六一ノ三
執事 五六一ノ三
使徒 五六一ノ三
使徒會議 エルサレムに於ける 五六一ノ三
使徒行傳 五六一ノ三
使徒祭 五六一ノ三
使徒信經 又は使徒信條 五六一ノ三
使徒的兄弟派 五六一ノ三
使徒的教父 五六一ノ三
使徒的傳承 五六一ノ三
使徒の教訓 五六一ノ三
シートン エリザベス アン 五六一ノ三
シドニー フィリップ 五六一ノ三
シドン 五六一ノ三
支那 五六一ノ三
シナイ山 五六一ノ三
シナイ寫本 五六一ノ三
詩篇 五六一ノ三
鹽 五六一ノ三
シーバリー サミュエル 五六一ノ三
鳥原一愛 五六一ノ三
シーマン ラザラス 五六一ノ三
シメオン 五六一ノ三
シモン 五六一ノ三
シモン シーモンの 五六一ノ三
シモン ペン ヨカイ 五六一ノ三
シモン マゴス 五六一ノ三
シモン リシャー 五六一ノ三
唱歌隊 五六一ノ三
稍義 又は義させる 五六一ノ三
寓義學 五六一ノ三
象形文字 五六一ノ三
證據論 五六一ノ三
小冊子運動 五六一ノ三
小冊子會社 五六一ノ三
章節 聖書の 五六一ノ三
昇天 五六一ノ三
小兒のバプテスマ 五六一ノ三
シヤウフレル カイリアハ ゴットリーブ 五六一ノ三
小預言者 五六一ノ三
社會學 五六一ノ三
社會主義 五六一ノ三
赦罪 五六一ノ三
シヤフツベリー アンソニー アシ レーターリー 五六一ノ三
シャープ ヒミア 五六一ノ三
シャープ ゆアームス 五六一ノ三
シャープ グランヴイル 五六一ノ三
シャープ サミュエル 五六一ノ三
寫本 聖書の 五六一ノ三
シヤミエ ジのエル 五六一ノ三
シヤムマイ 五六一ノ三
赦免 五六一ノ三
シヤルマ チゼル 五六一ノ三
シヤールマン チ 五六一ノ三
シヤーロック ウイリアム 五六一ノ三
主 五六一ノ三
シュクグレル アルベルト 五六一ノ三
シュウェンクフェルド カスパル フォン 五六一ノ三
シュオーボ リチュエル 五六一ノ三
祝儀 又は祝日 五六一ノ三
レエシャン 五六一ノ三
出埃及記 五六一ノ三
主の祈 五六一ノ三
主の晩餐 五六一ノ三
主の日 五六一ノ三
シュマルカルドの戰爭 五六一ノ三
シュマルカルドの同盟 五六一ノ三
シュミッド クリスチヤン フリードリヒ 五六一ノ三
シュミーデル パウル ウイルヘルム 五六一ノ三
シュムッケル サムエル ジモン 五六一ノ三

シュモルケ ゼンヤミン 五六一ノ三
シュライエルマッヘル フリードリヒ ダニエル エルンスト 五六一ノ三
シュラッテル ミカエル 五六一ノ三
シュラーダル エベルハルド 五六一ノ三
主理說 五六一ノ三
シュルテンス アルベルト 五六一ノ三
シュレヤック ヨハン マテイアス 五六一ノ三
棕櫚 五六一ノ三
棕櫚日曜日 又は聖き枝の主日 五六一ノ三
シュワルツ クリスチアン フリードリヒ 五六一ノ三
頌歌 五六一ノ三
シヨウベンハウエル アルタウル 五六一ノ三
書翰 聖書の 五六一ノ三
職位 五六一ノ三
贖罪論 五六一ノ三
植物 聖書の 五六一ノ三
諸死者記念祭 又は柔穫祭 五六一ノ三
諸聖徒祭 五六一ノ三
鹿物禮拜 五六一ノ三
シルテン ヤン ヘンドリク 五六一ノ三
シラクの子イエスの智惠 五六一ノ三
シラス 又はシルワノ 五六一ノ三
シルレル ヨハンクリストフ フリードリヒ フォン 五六一ノ三
シーレー 聊 ロベルト 五六一ノ三
シロアム 五六一ノ三
新英州神學 五六一ノ三
新エルサレム教會 五六一ノ三
信仰 五六一ノ三
信仰箇條 五六一ノ三
信仰告白 五六一ノ三
信仰の擁護者 五六一ノ三
神學 五六一ノ三
神學校 五六一ノ三
神學士 神學博士 五六一ノ三
新教 五六一ノ三
信教の自由 五六一ノ三
新月祭 五六一ノ三
議言 五六一ノ三
心象研究 五六一ノ三
神人協同論 五六一ノ三
神人同感說 五六一ノ三
新生 五六一ノ三
神聖 五六一ノ三
神聖同盟 五六一ノ三
神治政治 五六一ノ三
新年 五六一ノ三
神祕說 五六一ノ三
神巫的託宣 五六一ノ三
新プラトーン學派 五六一ノ三
申命記 五六一ノ三
新約聖書 五六一ノ三
神約聖書神學 五六一ノ三
新約聖書總論 五六一ノ三
新約聖書歷史 五六一ノ三
新約聖書の時代 五六一ノ三
新約聖書の年代 五六一ノ三
浸禮 五六一ノ三
心理學 聖靈の 五六一ノ三
浸禮教會 五六一ノ三
神話說 五六一ノ三
寺院及び寺院主義 五六一ノ三
十字架 五六一ノ三
十字軍 五六一ノ三
十二使徒の教訓 五六一ノ三
十二使徒の福音書 五六一ノ三
十二族長約書 五六一ノ三
十分一稅 五六一ノ三
ジェオフレー セントマスの 五六一ノ三
ジェスイト 五六一ノ三
ジェネヴァ 五六一ノ三
ジェネヴェーヴ 聖 五六一ノ三
ジェーム ス ウイリアム 五六一ノ三
ジェラシウス第一世 五六一ノ三
ジェラシウス第二世 五六一ノ三
ジェルソン ジヤン シャーリエ 五六一ノ三
ジェルメーン オーサールの 聖 五六一ノ三
ジェルメーン 聖 五六一ノ三
ジェローム 又はヒエロニムス アクアの 五六一ノ三
ジェンチリス ジーバンニ ジレンチノ 五六一ノ三
ジェンチレット インノチメント 五六一ノ三
ジェンナディウス 五六一ノ三
ジェバンニ モント コルヴィノの 五六一ノ三
自我實現說 五六一ノ三
耳語懺悔 又は私語告白 五六一ノ三
十誡 五六一ノ三
ジヤキンゲン フランク フォン 五六一ノ三
實驗論 五六一ノ三
實在論 五六一ノ三
實證的神學 又は實際的神學 五六一ノ三
實證論的證明 五六一ノ三
實念論 又は實在論 五六一ノ三
實用主義 五六一ノ三

目次

ジーフェキング アマリー 六八八ノ二
ジプシー スミス 六八八ノ三
ジャイルズ 聖 六八八ノ三
寂靜主義 六八八ノ三
ジャドソン アドニラム 六八八ノ三
ジャンセン派 六八八ノ三
ジャン ダルブレー 六八八ノ三
自由意志 六八八ノ三
自由主義バプチスト派 六八八ノ三
自由會衆派 六八八ノ三
自由教會 六八八ノ三
自由教會同盟 六八八ノ三
自由宗教的協會 六八八ノ三
自由思想家 六八八ノ三
自由の靈の兄弟 六八八ノ三
ジュエル ジョン 六八八ノ三
受難劇 六八八ノ三
受難節 六八八ノ三
巡回法 六八八ノ三
殉教 殉教者 六八八ノ三
純理說 六八八ノ三
ジョアン アークの 六八八ノ三
ジョアン コアーの 六八八ノ三
ジョリス ダヴィッド 六八八ノ三
ジョルジ 聖 六八八ノ三
ジョルジアン譯聖書 六八八ノ三
ジョルジウス 六八八ノ三
ジョン 六八八ノ三
ジョン サリスベリーの 六八八ノ三
ジョンソン サミュエル 六八八ノ三
人類學 六八八ノ三
人類教 又は人道教 六八八ノ三
人性論者 六八八ノ三
人文學者 〃 六八八ノ三

ス の 部

瑞西 六八九ノ一
スウィフト ジョナサン 六八九ノ一
瑞典 六八九ノ一
スウェーデンボルグ イムマヌエル 六八九ノ二
スウブララブサリアニズム 六八九ノ二
スカッダー ジョン 六八九ノ二
スカル 六八九ノ二
逾越節 六八九ノ二
スクチヤ人 六八九ノ二
救 救主 六八九ノ二
スクライヴチル フレデリック ヘンリー 六八九ノ二
數國語聖書 六八九ノ二
スコット エリザベス 六八九ノ二
スコット トマス 六八九ノ二
スコット ウォルター 六八九ノ二
蘇格蘭 六八九ノ二
蘇格蘭一致自由教會 六八九ノ二
蘇格蘭監督教會 六八九ノ二
蘇格蘭自由教會 六八九ノ二
スコトス エリゲナ ヨハネス 六八九ノ二
スコラ哲學 六八九ノ二
スザンナの歷史 六八九ノ三
スソー ハインリヒ 六八九ノ三
スタウビッツ ヨハン フォン 七一〇ノ一
スタウデンマイエル フランツ アントン 七一〇ノ一
スタッペル フィリップ アルベルト 七一〇ノ二
スタニスラウス ウェームス ハッチソン 七一〇ノ二
スターリング ヘステル ルウシー 七一〇ノ二
スタンホープ トマス 七一〇ノ二
スタンレー アルチル ヘンリー 七一〇ノ二
スチウアルト デュガルド 七一〇ノ二
スチュアルト モセス 七一〇ノ二
スツルム ヨハン 七一〇ノ二
スツルム (又デ、ステーケン) 七一〇ノ二
スティークナ コンラード 七一〇ノ二
スティール アン 七一〇ノ二
スティール リチャルド 七一〇ノ二
スティール ルドルフ エヴルド 七一〇ノ二
スティールリング 本名ヨハン ハイリヒ ユング 七一〇ノ二
スティルリング フリート エドワルド 七一〇ノ二
ステパノ 七一〇ノ二
ステファン マルチン 七一〇ノ二
ステルリー ピーター 七一〇ノ二
ステンチット ジョセフ 七一〇ノ二
ステンチット サミュエル 七一〇ノ二
ストア學派 七一〇ノ二
ストイデル ヨハン クリスチアン 七一〇ノ二
ストイドリン フリードリヒ カルル フリードリヒ 七一〇ノ二
ストラウス ダヴィド フリードリヒ 七一〇ノ二
ストリー ロベルト ヘルベルト 七一〇ノ二
ストリゲル ウイクトリヌス 七一〇ノ二
ストルベルヒ フリードリヒ レオポルド 伯爵 七一〇ノ二
ストロング チヤン 七一〇ノ二
スパルロー ウイリアム 七一〇ノ二
スパンゲンベルヒ アウグスタス ゴットリーブ 七一〇ノ二
スピッタ カルル ヨハン フィリップ 七一〇ノ二

日次

スピノザ バールッチ デ 七二ノ二
スピノラ クリストヴァル ローハース デ 七二ノ二
スピラーグ ウイリアム ピュエル 七二ノ二
スプリング ナミュエル 七二ノ二
スプリング ゲーディナル 七二ノ二
西班牙 又エスパナ 七二ノ二
スペーチル フィリプ ヤコブ 七二ノ二
スペラウス パウルス 七二ノ二
スペンセル エドマンド 七二ノ二
スペンセル ヘルベルト 七二ノ二
スポルジョン チャールス ハッドン 七二ノ二
スマイス ジョン 七二ノ二
スマルカルドの同盟 七二ノ二
スマルレー ジョン 七二ノ二
スミス アダム 七二ノ二
スミス イライ 七二ノ二
スミス ウイリアム ロバルトソン 七二ノ二
スミス ウイリアム アンドリウ 七二ノ二
スミス ウイリアム 七二ノ二
スミス ゴールドウイン 七二ノ二
スミス ジョルジ アダム 七二ノ二
スミス ジョルジ 七二ノ二
スミス シドニー 七二ノ二
スミス ジョン コットン 七二ノ二
スミス ジョン ポイ 七二ノ二
スミス ヘンリー ポイントン 七二ノ二
スムルナ 〃 七二ノ二
スラヴ譯聖書 七二ノ二
スラクサ 七二ノ二
西利亞 七二ノ二
西利亞譯聖書 七二ノ二
スンドグ 七二ノ二

セ の 部

聖火式 又は新火聖別式 七二ノ二
聖金曜日 七二ノ二
誓願 七二ノ二
正經 七二ノ二
清教徒 七二ノ二
聖週 七二ノ二
聖書 七二ノ二
聖所 七二ノ二
聖所 七二ノ二
聖書會社 七二ノ二
聖書語彙 七二ノ二
聖書釋義 又は聖書註釋 七二ノ二
聖書釋義學 七二ノ二
聖書神學 七二ノ二
聖書辭典 七二ノ二
聖書總論 七二ノ二
聖書の寫本 七二ノ二
聖書之友 七二ノ二
聖書の飜譯 七二ノ二
聖書歷史 七二ノ二
聖心會 七二ノ二
聖數 七二ノ二
成聖 七二ノ二
聖體共在論 七二ノ二
聖地 七二ノ二
聖地詣 七二ノ二
聖徒 七二ノ二
正統說及び異說 七二ノ二
聖とせらる 七二ノ二
聖徒に關する祝日 七二ノ二
聖徒の交 七二ノ二
聖徒禮拜 七二ノ二
聖バルトロマイ祭日の虐殺 七二ノ二
聖別 七二ノ二
聖墓 七二ノ二
世末論 七二ノ二
聖油 七二ノ二
聖靈 七二ノ二
聖靈降臨節 七二ノ二
精靈說 七二ノ二
聖靈發出論爭 七二ノ二
聖禮典 七二ノ二
聖列加入 七二ノ二
セウエロス アレキサンデル 七二ノ二
セウエロス セプチミオス 七二ノ二
セヴンスデー アドヴェンチスト 七二ノ二
セヴンスデー バプチスト 七二ノ二
世界宗教會議 七二ノ二
セヂウイク ダニエル 七二ノ二
セツ 七二ノ二
說教 七二ノ二
說教學 七二ノ二
折衷說 七二ノ二
攝理 七二ノ二
セナカリブ ルキウス アンナイオス 七二ノ二
セバスチアン 聖 七二ノ二
セム人 又はセミツタ人 七二ノ二

日次

目次

セラ 七七四ノ一
セラビム 七七四ノ二
セルウイン ウォルウ アウガスタス 七七七ノ三
セルヴェトス ミカエル 七七八ノ三
セルキア 七七八ノ三
セレスチン 七七八ノ三
宣教師 七七八ノ三
洗足式 七七八ノ二
聖トマスのクリスチャンス 七七九ノ三
聖保羅大會堂 七七九ノ三
聖彼得大會堂 七八〇ノ一
千福年說 七八〇ノ三
洗禮 七八一ノ二
洗禮盤 七八一ノ二
洗禮服 七八一ノ三
ゼデキア 七八一ノ三
ゼパニヤ 七八二ノ一
西番雅書 七八二ノ一
西番雅默示錄 七八二ノ一
ゼブルン 七八二ノ一
ゼベダイ 七八二ノ二
ゼムレル ヨハン サロモ 七八二ノ二
ゼルバベル 七八二ノ三
ゼロテ 七八二ノ三

リの部

僧庵 七八四ノ一
僧院及び僧院主義 七八四ノ一
僧官會議 七八四ノ一
總會 七八四ノ一
僧會 七八四ノ二
ソクラテス 七八四ノ二
ソクラテス 七八四ノ二
素祭 七八七ノ三
組織神學 七八八ノ三
ソーシヌス派 又はソージヌス說 七八八ノ三
ソステテ子 七八八ノ三
祖先崇拜 七八八ノ二
ソゾメノス サウマテス ヘルミアス 七八九ノ二
ソーチヌス ファウストス 七八九ノ二
ソトー ドミニクス ド 七八九ノ三
ソトー ペトルス ド 七九〇ノ一
ソドム 七九〇ノ三
供のパン 七九一ノ二
ソフィア 七九一ノ二
ソフィスト 七九一ノ三
ソルンウェル ウェームス ヘンレー 七九二ノ一
ソルンダイク ヘルベルト 七九二ノ一
ソルントン ロバルト エッチ 七九二ノ一
ソロモン 七九二ノ一
ソロモンの詩篇 七九二ノ二
ソロモンの智慧 七九二ノ二
俗世主義 七九二ノ二

タの部

待降節 七九二ノ三
タイチル アウガスチン 七九二ノ三
太陽及び太陽崇拜 七九三ノ一
タイレル ベンヂット 七九三ノ一
タウゼン ハンス 七九三ノ二
タウレル ヨハ子ス 七九三ノ二
崇邱 七九三ノ二
托鉢僧 七九三ノ二
工匠ヨセフの歷史 七九四ノ一
多妻制度 七九四ノ一
多神敎 七九四ノ二
タチアヌス 七九四ノ二
タチアヌスの福音書 七九四ノ二
タッダイ 七九四ノ二
タッバン ヘンリー フィリップ 七九四ノ二
譬喩 又は喩話 七九四ノ二
除酵節 七九五ノ三
タボル山 七九六ノ一
タルゲム 七九六ノ一
タルシヽ 七九六ノ二
タルソ 七九八ノ二
タルナル サミュエル ハルベアルト 七九八ノ二
タルムド 七九八ノ二
タルメージ トマス デ ウィット 七九八ノ二
單一神敎 七九八ノ二
單意論 七九八ノ二
タンクレッド ボロニアの 七九八ノ二
擔保法 七九八ノ三
大監督 七九八ノ三
代贖說 七九八ノ三
大都監督 七九八ノ三
ダヴェンポルト ウォン 七九八ノ三
ダウプ カルル 七九八ノ三
ダグラス ロベルト ケンナウェー 七九八ノ三
ダ コスタ イサク 七九八ノ三
ダゴン 七九八ノ三
ダッハ シモン 七九八ノ三
ダッフ アレキサンデル 七九八ノ三

目次

ダータ ヨハン アウガスト 七九四ノ一
ダニエル 七九四ノ二
但以耳書 七九七ノ一
ダビデ 七九七ノ一
ダーボイ ウォルウス 七九八ノ三
ダマスコ 七九八ノ三
ダミアヌス 七九九ノ二
ダミアヌス 又はダミアニ ペテル 七九九ノ二
ダミエン ウォセフ 七九九ノ三
墮落說 八〇〇ノ一
ダリヨス 八〇〇ノ一
ダルウィールラ ユウゲチ ゴブレト 八〇〇ノ一
ダルウィン チャールス ロベルト 八〇〇ノ二
ダルハム ウィリアム 八〇一ノ二
ダルビー ジョン チルソン 八〇一ノ二
ダルマチア 八〇一ノ二
ダルマチック 八〇一ノ二
ダンカン ウォン 八〇一ノ三
斷食 八〇二ノ三
ダンス スコタス ヨハ子ス 八〇二ノ三
ダンステル ヘンリー 八〇二ノ三
ダンスタン 聖 八〇二ノ三
ダンテ アリギエリ 八〇二ノ三

チの部

中間の狀態 八〇三ノ三
チウダ 八〇三ノ三
柱頭の聖徒 八〇六ノ一
チウビンゲン派 八〇六ノ一
中保 八〇六ノ一
チウロック ウォン 八〇六ノ二
チェー子 トマス ケルリー 八〇六ノ二
チェビン エドウイン ハッベル 八〇六ノ二
智慧文學 八〇七ノ一
宣誓 八〇七ノ一
チータ 『サー』 ウォン 八〇七ノ二
チッシェンドルフ 八〇七ノ二
地方傳道師 八〇七ノ二
超自然說 八〇七ノ二
朝鮮 八〇七ノ二
超絕 過境 八〇七ノ二
超絕神論 八〇七ノ二
超絕論 又は超絕哲學 八〇七ノ二
長老 八〇七ノ二
長老主義 八〇七ノ二
長老派 八〇七ノ二
チャップ トマス 八〇七ノ二
チャプテル ハウス 八〇七ノ二
チャプレーン 八〇七ノ二
チャペル 八〇七ノ二
チャルチ リチャルド 八〇七ノ二
チャルチ アッソシエーション 八〇七ノ二
チャルチ アーミー 八〇七ノ二
チャルチ コングレッス 八〇七ノ二
チャルノック スティーブン 八〇七ノ二
チャルチメンス ユニオン 八〇七ノ二
チャルマルス トマス 八〇七ノ二
チャルチ ユニオン 八〇七ノ二
チャルチ レート 八〇七ノ二
チャルチ リルデン 八〇七ノ二
チャンセロル 八〇七ノ二
チャンドラル ウォン 八〇七ノ二
チャンニング ウィリアム エレリー 八〇七ノ二
チーユモン ルイ セバステン 八〇七ノ二
直覺說 八〇七ノ二
チヨーサル ヨハン ハインリヒ ダニエル 八〇七ノ二
チヨケ ウェオフレー 八〇七ノ二
智利 八〇七ノ二
チリングウォルス ウィリアム 八〇七ノ二
チルチル ハインリヒ ゴットリープ 八〇七ノ二
チロストン ウォン 八〇七ノ二
チンダル ウィリアム 八〇七ノ二
チンダル マシウ 八〇七ノ二
地獄 八〇七ノ二
ヂムリ 八〇七ノ二

ツの部

ツァイスベルゲル ダフィド 八〇七ノ二
ツインツェンドルフ ニコラス ウイヒ 伯爵 ルド 八〇七ノ二
ツウィングリー (又はウルリヒ) フルドライヒ 八〇七ノ二
痛悔 八〇七ノ二
痛悔律 八〇七ノ二
通告節 八〇七ノ二
ツェノーン エレアの 八〇七ノ二
ツェノーン クプロの 八〇七ノ二
ツェル マットイス 八〇七ノ二
ツオリコフェル ゲオルグ ヨアキム 八〇七ノ二
罪 八〇七ノ二
罪の告白 八〇七ノ二
ツームス ウォン 八〇七ノ二
ツーレティニ ジヤン アルフォンス 八〇七ノ二
ツーレティニ フランシア 八〇七ノ二

ウロ　八四二ノ三
グウィングリー　八四二ノ三
ヴーエン　マルチン　フォン　八四三ノ三

テの部

低教會派　八四四ノ一
定住傳道師　ティライシェンドルフ　ローベゴット　フリードリヒ　コンスタンチン　八四四ノ二
剃髮　八四四ノ二
定命論　又は宿命論　八四四ノ三
ティーユモン　ルイ　セバスチン　八四四ノ三
ティーレ　コルネリス　ペトルス　八四四ノ三
ティロストン　ウヨン　八四四ノ三
ティングル　ウイリアム　八四四ノ三
テオドシウス大帝　又は一世　八四七ノ三
テオドレトス　モプスエスチアの　八四八ノ二
テオドロス　テグラトビルゼル　八四八ノ二
テサロニカ　八四九ノ三
帖撒羅尼迦前書　八四九ノ三
帖撒羅尼迦後書　八四九ノ三
哲學　八四九ノ二
テッツェル　ヨハン　八四九ノ二
テート　フルチバルド　ラムベル　八四九ノ二
テート　チーホム　八四九ノ二
テトス　八四九ノ二
提多書　八四九ノ二
テニソン　アルフレッド　八四九ノ二
テニソン　トマス　八四九ノ二

デの部

デイオゲチス　ヨハンゲンニ　八四九ノ二
ディオダチ　ヨハンゲンニ　八四九ノ二
ディオドロス　八四九ノ二
ディオニシウス　聖馬の　八四九ノ二
ディオニシウス　カルツシアの　八四九ノ二
ディオニシウス　アレオパギタ　八四九ノ二
ディオダチトスに贈る書　八四九ノ二
ディグビー　『サー』カテルム　八四九ノ二
ディーステル　ルドウイヒ　フォン　八四九ノ三
ディキンソン　ヨハチン　八四九ノ三
ディタク　ウヨン　八四九ノ三
ディタク　トマス　八四九ノ三
ディヅモス　八四九ノ三
ディデロー　デニー　八四九ノ三
ディーベンブロック　クリスチアン　メルキオル　八四九ノ三
「ディルマン　ドリロ　アウグスト　八四九ノ三
ディーン　ウェッチ　ウイルヘルム　マルチン　レベレヒト　八四九ノ三
條例　八四九ノ三
デヴィース　サミュエル　八四九ノ三
デヴィッヴ　トマス　ウイリアム　ライス　八四九ノ三
デヴィッド　聖　八四九ノ三
デヴィッドソン　アンドリウ　ブルウス　八四九ノ三
デヴィッドソン　サミュエル　八四九ノ三
デヴィッドソン　ランデール　トマス　八四九ノ三
デヴェー　マティアス　ピロー　八四九ノ三
デカポリス　八四九ノ三
デカルト　ルネー　カロス　メソヌス　ウイン　八四九ノ三
デキオス　トラヤヌス　八四九ノ三
デサイブルス　オフ　クライスト　八四九ノ三

デデルライン　ヨハン　クリストフ　八四九ノ三
デナリ　八四九ノ三
デニー　聖　八四九ノ三
デニソン晩餐事件　八四九ノ三
デポラ　八四九ノ一
デミウルゴス　八四九ノ一
デムブスタル　ウヨン　八四九ノ二
デメトリオス　八四九ノ二
デモクリトス　八四九ノ三
デヴェアジエ　ド　オーラン　ウヤン　八四九ノ二
デュカンジュ　シャール　デュフレスンシュア　八四九ノ二
デュトア　又は　デュトアメムアリニ　ウヤン　フィリップ　八四九ノ二
デュバンルー　フェリクス　アントアン　フィリップ　八四九ノ二
デュブーア　アン　八四九ノ三
デュブレシー　モルチー（フィリップ　ド　モルチー）　八四九ノ一
デュペアロン　ウヤヌ　ダヴィー　八四九ノ三
デュ　ムーラン　シャーラ　八四九ノ三
デュ　ムーラン　ピエル　八四九ノ三
デュラン　聖　ブアーセーンの　八四九ノ三
デューリー　ウヨン　八四九ノ三
デーリッチ　フランツ　八四九ノ二
デーリッチ　フリードリヒ　八四九ノ二
デール　ロベルト　ウイリアム　八四九ノ二
デンク　ヨハン又はハンス　八四九ノ一
傳道　八四九ノ二
傳道會社　八四九ノ二
傳道之書　八四九ノ二
丁抹　八四九ノ三

トの部

トインビー　アルノルド　九四四ノ三
トウイッス　ウイリアム　九四四ノ三
時　聖書の　九四四ノ一
特赦　九四四ノ一
年　聖書の　九四四ノ一
トッド　ウェームス　ヘンソルン　九四四ノ一
トッド　ウヨン　九四四ノ二
トッド　ヘンリー　ウヨン　九四四ノ二
トビット書　九四四ノ二
トブラディー　アウグスタス　モンテーグ　九四六ノ一
トマス　九四六ノ一
トマス　アクイナス（又アクイノのトマス）　九四六ノ二
トマス　ア　ケムピス　九四七ノ二
トマス福音書　九四七ノ二
トマス幼時の福音書　九四七ノ二
トムソン　ウヨセフ　パーリッシ　九四七ノ三
トラ　九四七ノ三
トラクテーリアン　九四七ノ三
トラコニテ　九四七ノ三
トラビスト派　九四七ノ三
トラヤヌス　マルクス　クリビウス　九四七ノ三
トーランド　ウヨン　九四七ノ二
トリテミウス　ヨハン　九四七ノ二
鳥告　九四七ノ二
トルクェマダ（又ツレクレマダ）トマス　デ　九四七ノ二
土耳其　九四七ノ二
トルストイ　伯爵　リオウ　ニコライエウイッチ　九四七ノ二
トールック　フリードリヒ　アウグスト　九四七ノ二
トレゲルス　サミュエル　ブリドータス　九四七ノ二
トレト　フランセスコ　九四七ノ二
トレント會議　九四七ノ一
トロアス　九四八ノ二
トンケル派　九四八ノ二
ドー　ロレンゾ　九四八ノ二
獨逸　九四八ノ二
獨逸カトリック派　九四八ノ二
獨逸神學　九四八ノ二
ドイッチュ　エマヌエル　オスカル　メナヘム　九四八ノ二
獨逸譯聖書　九四八ノ二
獨逸レフォルムド教會　九四八ノ二
ドーウィー　ウヨン　プレキサンデル　九四八ノ二
ドウクオボル派　九四八ノ二
同仁教會　九四八ノ二
道德的證據論　又は道德論的說明　九四八ノ二
同胞教會　九四八ノ二
動物　聖書の　九四八ノ二
動物崇拜　九四八ノ二
ドーリングル　ヨハン　ヨセフ　イグナツ　フォン　九四八ノ二
獨立教會　九四八ノ二
獨身主義　九四八ノ二
ドケテ說　基督假幻說　九四八ノ二
ドシテオス　九四八ノ二
ドッヂ　ウイリアム　アール　九四八ノ二
ドッヂ　マルカス　九四八ノ二
ドッヂウェル　ヘンリー　九四八ノ二
ドッドリッヂ　フィリップ　九四八ノ二
ドナチス派　九四八ノ二
ドナルドソン　ウヨン　ウイリアム　九四八ノ二
ドノソーコルテス　ウヌブン　九四八ノ二
ドミチラ　九四八ノ二
ドミティアヌス　聖　九四八ノ二

ドミニコス派 九四三ノ二
ドラ（ドロシー、ウインドロー、パサナソン） 九四三ノ三
ドライヴェル サミュエル ロールス 九四四ノ一
ドラグマ 九四四ノ二
ドラモンド ウェームス 九四四ノ三
ドラモンド ヘンリー 九四四ノ三
度量衡 聖書の 九四四ノ三
ドルトの會議 九四八ノ一
ドルチル イサアタ アウガスト 九四八ノ一
奴隷制度 九四八ノ二
ドレスデンの會議 九四八ノ二
ドーレマス夫人（サラ ブラット（ヘンス）トマス シャール） 九五二ノ三
ドレランクーア 九五七ノ一
ドロテア 九五七ノ二
ドワイト ティモシー 九五七ノ二
ドン ウォン 九五七ノ三
ドーン ウォルウ ワシントン 九五七ノ三
ドンケル派 又ドンカルド派 又ばトンケル派 九五七ノ三
ドンス スコトス 九五八ノ一
ドンチル ロベルド 九六六ノ三

ナの部

内在 九四四ノ一
ナイチンゲール フロレンス 九四四ノ一
ナイン 九四四ノ二
訓慰者 九四四ノ三
ナザレ 九五六ノ一
ナザレ人 九五六ノ二
ナザレ人 九五六ノ三
ナスミス デヴイド 九五六ノ三
ナタナエル 九六六ノ三
ナタン 九七二ノ一
撓回の祭物 九七二ノ二
ナプタリ 九七二ノ二
拿篇書 九七二ノ二
ナホル 九七二ノ二
ナーマン 九七二ノ二
ナルド 九七二ノ三
ナント合 九七二ノ三

ニの部

新島襄 サミュエル及びハリエット 九七七ノ一
ニウエル 九七七ノ二
乳香 九七七ノ二
ニウトン アイザック 九七七ノ二
ニウトン ジョン 九七七ノ二
ニウマン ジョン ヘンリー 九七七ノ二
ニカヤの會議 及びニカヤ、コンスタンチノープル信條 九七七ノ三
ニカヤの信條 九七七ノ三
二元論 九七八ノ一
ニコデモの福音書 九七八ノ二
ニコデモ 九七八ノ二
ニコポリス 九七八ノ二
ニコラ フィリプ 九七八ノ二
ニコフィー 九七八ノ二
ニコライ宗 クザの 九七八ノ二
ニコラス 九七八ノ二
ニコラス一世 九七八ノ二
ニコラス五世 九七八ノ二
ニコル ウィリアム ロバルトソン 九七八ノ二
ニサン 九七八ノ二
ニーチェ フリードリヒ ウイルヘルム 九七八ノ二
日暈日 九七七ノ一
日曜學校 九七七ノ二
ニッチェ カルル インマヌエル 九七七ノ二
ニッチュマン ダーヴイド 九七七ノ二
ニード子ル クリストフル ウイルヘルム 九七七ノ二
ニチベ 九七七ノ二
日本 九七七ノ二
日本基督教會 九七七ノ二
日本組合教會 九七七ノ二
日本正教會 一〇〇三ノ二
日本聖公會 一〇一一ノ二
日本メソヂスト教會 一〇一一ノ二
日本譯聖書 一〇一四ノ一
ニム ロデ 一〇一八ノ二
ニル 一〇一八ノ二
ニール ウォン メーソン 一〇一八ノ二

ヌの部

ヌレムベルグの和約 一〇一九ノ一

子の部

子アポリス ヨハン ゲオルグ 一〇一八ノ二
子アンデル ウイルヘルム アウガスト 一〇一八ノ二
子オブラトーン學派 一〇一八ノ二
子クタリウス 一〇一八ノ二
子コ 一〇一八ノ二
子ストリウス 一〇一八ノ二
子ストリウス派 一〇一八ノ二
子ヌトル 一〇一八ノ二
子ブカド子ザル 一〇一八ノ二
子ヘミヤ 一〇一八ノ二

尼希米亞記 一〇二〇ノ二
子ボ 一〇二〇ノ二
子ボ 一〇二〇ノ二
子メシウス 一〇二〇ノ二
子リ フィリッポ ア 一〇二〇ノ二
子ルセス クラ（エンシス 一〇二〇ノ二
子ルセス ラムブロチンシス 一〇二〇ノ二
子ルガル 一〇二〇ノ二
子ロ 一〇二〇ノ二
年忌祭 一〇二〇ノ二
子ンニウス 一〇二〇ノ二

ノの部

ノア 一〇二〇ノ二
ノアの書 一〇二〇ノ二
ノウアリス 異名はフリードリヒ フォン ハルデンベルヒ 一〇二〇ノ二
ノヴァティアヌス 一〇二〇ノ二
ノーエル アレキサンデル 一〇二〇ノ二
ノスチック派 一〇二〇ノ二
望 一〇二〇ノ二
ノックス クロン 一〇二〇ノ二
ノートル ダム 一〇二〇ノ二
ノット エリファレット 一〇二〇ノ二
ノリス ハンセルド 一〇二〇ノ二
諾威 一〇二〇ノ二
ノルス ブラウンロー 一〇二〇ノ二
ノルトン アンドリウス 一〇二〇ノ二
ノルドハイメル イサタ 一〇二〇ノ二

ハの部

背教 一〇二〇ノ二
ハイデルベルヒ問答書 一〇二〇ノ二
灰の水曜日 又に灰物曜日 一〇二〇ノ二
拜物教 一〇二〇ノ二
ハッアルド ジョン 一〇二〇ノ二
ハヴァーガル フランセス リヴドレー 一〇二〇ノ二
ハヴィラ 一〇二〇ノ二
ハヴェロック ヘンリー 一〇二〇ノ二
ハウグ マルチン 一〇二〇ノ二
博士 一〇二〇ノ二
ハガイ 一〇二〇ノ二
哈基書 一〇二〇ノ二
ハガル 一〇二〇ノ二
ハギオグラファ 一〇二〇ノ二
ハケット ホレシオ バルタ 一〇二〇ノ二
ハーゲンバハ カルル ルドルフ 一〇二〇ノ二
方舟 一〇二〇ノ二
ハヨクス スレー トマス ヘンリー 一〇二〇ノ二
ハッチ エドウィン 一〇二〇ノ二
ハッチソン フランシス 一〇二〇ノ二
ハッチフィールド エドウィン フランシス 一〇二〇ノ二
ハトン リチャルド ホルト 一〇二〇ノ二
ハート ジョセフ 一〇二〇ノ二
ハートレー デーヴイド 一〇二〇ノ二
ハドリアヌス 一〇二〇ノ二
ハマクヽ 一〇二〇ノ二
哈巴各書 一〇二〇ノ二
ハーパー ウイリアム レーニー 一〇二〇ノ二
法王 一〇二〇ノ二
法王政治及び法王制度 一〇二〇ノ二
法王選擧室 一〇二〇ノ二
法王全權論 一〇二〇ノ二
法王內閣 一〇二〇ノ二
法王無謬說 一〇二〇ノ二
法王領 一〇二〇ノ二
ハマン ヨハン ゲオルグ 一〇二〇ノ二
ハミルトン ウイリアム 一〇二〇ノ二
ハミルトン パトリック 一〇二〇ノ二
ハム 一〇二〇ノ二
ハムデン レン ディクソン 一〇二〇ノ二
ハムモンド ヘンリー 一〇二〇ノ二
ハムラビの古法典 一〇二〇ノ二
破門 一〇二〇ノ二
ハリス ウェームス レンデル 一〇二〇ノ二
ハリス トマス レーク 一〇二〇ノ二
ハルデーン ウェームス ブレキサンデル及びロベルト カルル ロベルト エドワルド フォン 一〇二〇ノ二
ハルトマン 一〇二〇ノ二
ハルナック ヤドルフ 一〇二〇ノ二
ハルボー ヘンリー 一〇二〇ノ二
ハルムス クラウス 一〇二〇ノ二
ハルムス ゲオルグ ルドワイヒ 一〇二〇ノ二
ハルムス デトレー フ デオドール 一〇二〇ノ二
ハレー ロベルト 一〇二〇ノ二
ハレルヤ 一〇二〇ノ二
ハロック ウィリアム ナレジ 一〇二〇ノ二
布哇 又はサンドウイチ群島 一〇二〇ノ二
ハーン ヨハン ミカエル 一〇二〇ノ二
匈牙利 一〇二〇ノ二
燔祭 一〇二〇ノ二
頻項哲學 一〇二〇ノ二
汎神論 一〇二〇ノ二
ハンナ ウイリアム 一〇二〇ノ二

ハンニングトン ウェームス 一〇五六ノ二
ハーンハーン イダ 伯爵夫人 一〇五六ノ二
半ペラギウス説 一〇五六ノ二
バアル 一〇五七ノ二
バアルベク 一〇五八ノ二
バイシラッグ ウイリバルド 一〇五八ノ二
バイブル クリスチャン派 一〇五九ノ一
バイロン ウヨルウ ゴルドン ノエル 一〇五九ノ一
バウエル ブルノー 一〇五九ノ二
バウリング ジョン 一〇五九ノ二
バウン ボルデン パーカル 一〇五九ノ三
バヴァリア 一〇六〇ノ一
バークレー ジョルジ 一〇六〇ノ二
バークレー ロベルト 一〇六〇ノ三
バサルスト ウイリアム ハイレー 一〇六一ノ一
バシリカ型の建築 一〇六一ノ一
バシリデス 又はバウル 一〇六一ノ一
バシルロス 一〇六一ノ二
バジル派 一〇六一ノ三
バシャン 一〇六一ノ三
バーゼルの會議 一〇六二ノ一
バーゼルの信仰告白 一〇六二ノ一
バッカナリ派 一〇六二ノ一
バック チャールス 一〇六二ノ二
バックスタル リチャルド 一〇六二ノ二
バットラル ウヨセフ 一〇六二ノ二
バッハ ヨハン セバスチアン 一〇六二ノ三
バテシェバ 一〇六二ノ三
バーデル フランツ クザーフェル 一〇六三ノ一
巴比倫 一〇六三ノ二
巴比倫の俘囚 一〇六三ノ二
バビロン 一〇六三ノ二
バプテスト教會 一〇六四ノ一
バプテスマ 一〇六四ノ一
バプテスマのヨハネ 一〇六四ノ二
バベルの塔 一〇六四ノ二
バムブトン講演 一〇六四ノ二
バーユス(デベー) ミシエル 一〇六四ノ二
バラク書 一〇六四ノ三
バラクの默示錄 一〇六四ノ三
バラバ 一〇六五ノ一
バラム 一〇六五ノ一
バーリッド エリヒウ 一〇六五ノ二
バーリングゴウルド サバイン 一〇六五ノ二
バールト カルル フリードリヒ 一〇六五ノ三
バルトロマイ 一〇六六ノ一
バルトロマイ派の默示錄 一〇六六ノ一
バルトン ベルナルド 一〇六六ノ二
バルトン ロベルト 一〇六六ノ二
バルナバ 一〇六六ノ三
バルナバ書 一〇六六ノ三
バルナバ派 一〇六六ノ三
バルチラット サミュエル 一〇六七ノ一
バルチラット ギルバルト 一〇六七ノ一
バルバウルド アンナ レティティア 一〇六七ノ二
バルメス ハイメ ルシオ 一〇六七ノ二
バルンス ウイリアム チャルマルス 一〇六七ノ三
バルンス ロベルト 一〇六七ノ三
バロニウス カイザル 一〇六八ノ一
バウル フェルヂナンド クリスチアン 一〇六八ノ一
萬有活物説 一〇六八ノ二
萬有神論 一〇六八ノ二
萬軍の主 一〇六八ノ二
晩餐 一〇六八ノ二
バンヤン ジョン 一〇六八ノ二
バウリシアン派 一〇六八ノ二
バウリヌス ポンサウス アニキウス メロヒウス 一〇六八ノ三
バウルス ハインリヒ エベルハルド ゴットロープ 一〇六八ノ三
バウルス三世 一〇六九ノ一
バウルス四世 一〇六九ノ一
バウルス五世 一〇六九ノ二
バウロ(保羅) 使徒 一〇六九ノ三
バウロ セルギオ 一〇六九ノ三
保羅の默示錄 一〇七〇ノ一
バーカル ジョセフ 一〇七〇ノ一
バーカル セカドール 一〇七〇ノ二
バーカル マシウ 一〇七〇ノ二
バコミウス 一〇七〇ノ三
バスカリス二世 一〇七〇ノ三
バスカル ブレース 一〇七一ノ一
バツマニー ヘテル 一〇七一ノ一
パトモス 一〇七一ノ二
パトリパッシアンス 父神受苦論者 一〇七一ノ三
パトリック 聖 一〇七一ノ三
パビアス 一〇七二ノ一
パムフィロス 一〇七二ノ二
パムフリヤ 一〇七二ノ二
樂園 一〇七二ノ三
パラディウス 一〇七二ノ三
パリサイ派 一〇七二ノ三
パリッシー ベルナール 一〇七二ノ三

パルヴォー ジョン 一〇七二ノ一
パルチア人 一〇七二ノ二
パレスチナ 一〇七二ノ二
パロ 一〇七二ノ三
パンション ウイリアム モーレー 一〇七三ノ一
パンタイオス 一〇七三ノ一

ヒの部

日 一〇七三ノ一
ヒウゲノー徒 一〇七三ノ一
ヒウス ヒウ ブライス 一〇七三ノ二
ヒウム デヴイッド 一〇七三ノ二
ヒエロニモス 一〇七三ノ二
光の友 一〇七三ノ二
東教會 一〇七三ノ二
悲觀説 一〇七三ノ二
非國教主義 一〇七三ノ三
非三位一體派 一〇七三ノ三
午膝草 一〇七三ノ三
ヒーシッグ フェルディナンド 一〇七三ノ三
ヒッペルト講演 一〇七四ノ一
ヒッポリトス 一〇七四ノ一
人 一〇七四ノ二
火のバプテズマ 一〇七四ノ二
ヒーベル レギナルド 一〇七四ノ二
ヒメネス デ シス子ロス フランシスコ 一〇七四ノ三
百夫長 一〇七四ノ三
ヒラデルヒア 一〇七五ノ一
ヒラリー 一〇七五ノ一
ヒル ローランド 一〇七五ノ二
ヒルデブランド 一〇七五ノ二
ヒレル 一〇七五ノ二
ヒンクマル レーンスの 一〇七五ノ二
ヒンノムの谷 一〇七五ノ三
ヒウリダン ジヤン 一〇七五ノ三
ビザンチウム型の建築 一〇七六ノ一
ビシヨップ チーサン 一〇七六ノ一
ピーチャル ヘンリー ウァルド 一〇七六ノ二
ピーチャル ライマン 一〇七六ノ二
ピーチャル ストウ夫人 ハリエット エリザベスト 一〇七六ノ二
ビッドル ジョン 一〇七六ノ三
ピーティー ジェームス 一〇七六ノ三
ピートン デヴイッド 一〇七七ノ一
ビュデー ギロオム 一〇七七ノ一
ビーール サミュエル 一〇七七ノ二
ビルギッダ 聖 一〇七七ノ二
緬甸 一〇七七ノ二
ピングハム ジョセフ 一〇七七ノ三
ピンチー トマス 一〇七七ノ三
ピウス一世 一〇七七ノ三
ピウス二世 一〇七七ノ三
ピウス四世 一〇七七ノ三
ピウス五世 一〇七七ノ三
ピウス六世 一〇七七ノ三
ピウス七世 一〇七七ノ三
ピウス九世 一〇七七ノ三
ピウゼー エドワルド 一〇七七ノ三
ピウゼー派 一〇七七ノ三
ピエトロ マルツル ヴェルミリ 一〇七七ノ三
ピエル 隱者 一〇七七ノ三
ピエル 尊者 一〇七七ノ三
ピシデア 一〇七七ノ三
ビスガ 一〇七七ノ三
ビタゴラス 一〇七七ノ三
ビニクス 一〇七七ノ三
ビーボデー ジョルジ 一〇七七ノ三
ビラト 一〇七七ノ三
ビリビ 一〇七七ノ三
腓利比書 一〇七七ノ三
ビリポ福音書 一〇七七ノ三
ビリポ 使徒 一〇七七ノ三
ビリポ 傳道者 一〇七七ノ三
ビリポ 分封君 一〇七七ノ三
ビルグリム ファーザルス 一〇七七ノ三
ビレモン 一〇七七ノ三
腓利門書 一〇七七ノ三

フの部

ファウストス レジェンシス 一〇七七ノ三
ファクンドス 一〇七七ノ三
ファーベル スタプレンシス ヤコブス(ラテツク ルフェーヴル デタープル) 一〇七七ノ三
ファユム福音書斷片 一〇七七ノ三
ファーラル フレデリック ウイリアム 一〇七七ノ三
ファルガッソン デヴイッド 一〇七七ノ三
フィスク ジョン 一〇七七ノ三
フィヂィ島 一〇七七ノ三
フィヒテ イムマヌエル ヘルマン 一〇七七ノ三
フィヒテ ヨハン ゴットリープ 一〇七七ノ三
フィラストリウス 一〇七七ノ三
フィリプ 傑侯 一〇七七ノ三
フィリプ 麗王 一〇七七ノ三
フィリプ派 一〇七七ノ三

目次

フィローン
フイン子ー　チャールス ダンティリン　二八五ノ一
芬蘭　二八五ノ二
ファーアベルン　アンドリー マルチン　二八五ノ二
ファニキア　又はフォイニケ　二八五ノ二
ファニロン　フランシアド サリニヤ　二八五ノ二
ファーベル　フレデリッダ リイーアム　二八五ノ二
フェーベル　ウヨルフ スタンレー　二八六ノ一
フエヒ子ル　ジスターフ チオドール　二八六ノ二
フエリペ二世　二八六ノ二
フェルララ　フロレンス會議　二八六ノ二
フォイエルバヒ　ルドウイヒ　二八六ノ二
フオガッザロ　アントニオ アンドレアス　二八六ノ二
フォーセット　ウヨン　二八六ノ二
フォチウス　ウォルヂ　二八六ノ三
フォヤクス　ジョン　二八六ノ三
フォルモソス　二八六ノ三
不可識論　又は不可思議論　二八六ノ三
普及福音教會　二八七ノ三
福音　福音書　二八七ノ三
福音教會　二八七ノ三
福音士　二八七ノ三
福音主義　二八七ノ三
福音對觀　又は福音和合　二八七ノ三
福音同盟會　二八七ノ三
復活節　二八七ノ三
俘囚　以色列人の　二八七ノ三
父神受苦說　二八七ノ三
フヤス　二八七ノ三
フヤス徒　二八七ノ三
フーバル　ヨハン（ヘルマン（クリメサンダ ヨハン フリードリヒ））　二八七ノ三
フーベルド　エリザベス　二八七ノ三
フライ　エリザベス　二八七ノ三
フライデレル　エリザベス　二八七ノ三
フライリングシャウゼン　ヨハンアナ　二八七ノ三
フラウド　ミヤエル パレル　二八七ノ三
フラヴィアス　マッティアス　二八七ノ三
フラチウス　二八七ノ三
フランクフォルトの會議　アウグスト ヘルマン　二八七ノ三
フランケ　二八七ノ三
佛蘭西
佛蘭西譯聖書　又はフランシス アシシの　二八七ノ三
フランシスコ　オウラの　二八七ノ三
フランシスコ派　二八七ノ三
フランセスコ　サールの　二八七ノ三
フランソア　ジョン　二八七ノ三
フリース　ジョン　二八七ノ三
フリードリチル　デオドル　二八七ノ三
フリードリヒ三世　賢侯　二八七ノ三
フリードリヒ三世　敬虔侯　二八七ノ三
フリーマン　ウェームス　二八七ノ三
フリント　ロベルト　二八七ノ三
フルギア　二八七ノ三
フルラル　アンドリカ　二八七ノ三
フルラル　トマス　二八七ノ三
フレッチャル　ウイルズ　二八七ノ三
フレッチャル　ジョン ウイリアム　二八七ノ三
フレンド派　（友會派）　二八七ノ三
フローメン　アントアン　二八七ノ三
ブカナン　ジョルヂ　二八八ノ一
ブース　ウイリアム　二八八ノ一
ブラシ子ル　ホレース　二八八ノ一
ブライアント　ウイリアム カルレン　二八八ノ一
ブラウニング　エリザベス オーロット　二八八ノ二
ブラウニング　ロベルト　二八八ノ二
伯西爾
ブリエイリー　ピエル　二八八ノ二
ブリングル　ハインリヒ　二八八ノ二
ブルックス　フイリップス　二八八ノ二
ブルノー　ジョルダノ　二八八ノ二
ブレース　チャールス ローリング　二八八ノ二
分外功德說
文藝復興
ブンゼン　クリスチアン カルル ヨシアス　二八八ノ二
ブラトーン　二八八ノ二
ブリマス　ブレズレン　二八八ノ二
ブリミナブ　メソヂスト派　又は初代メソヂスト派　二八八ノ二
ブリム　二八八ノ二
ブルレーン　ロベルト　二八八ノ二
ブロコピウス　二八八ノ二
書記士　二八八ノ二
ブロスペロス　アキタニアの　二八八ノ二
ブロセライト　二八八ノ二
ブロータゴラス　二八八ノ二
ブロティスス　二八八ノ二
プロテスタント　エピスコパル　二八八ノ二
敎會
プロテスタント敎　二八八ノ二

へ の 部

ヘーア　ウィリアス チャールス　二八八ノ二

目次

ヘーゲル　ゲオルヂ ウイルヘルム フリードリヒ　二八八ノ二
ヘゲップス　二八八ノ二
ヘスチング　トマス　二八八ノ二
ヘゼキア　二八八ノ二
ヘッケル　エルンスト ハインリヒ　二八八ノ二
ヘテロドックシー　二八八ノ二
ヘテ人　二八八ノ二
ヘフェーレ　カルル ヨセフ フォン　二八八ノ二
希伯來語　二八八ノ二
希伯來詩歌　二八八ノ二
希伯來書　二八八ノ二
希伯來人　二八八ノ二
希伯來福音書　二八八ノ二
ヘブロン　二八八ノ二
ヘール　エドワルド エヴェレット　二八八ノ二
ヘルヴェチック信仰告白　二八八ノ二
ヘルツォーグ　ヨハン ヤコブ　二八八ノ三
ヘルデル　ヨハン ゴットフリード　二八八ノ三
ヘルバルト　ヨハン フリードリヒ　二八八ノ三
ヘルマス　二八八ノ三
ヘルマン　ウイルヘルム　二八八ノ三
ヘルムホルツ　ルドウイヒ　二八八ノ三
ヘルモン　フエルヂナンド フォン　二八八ノ三
ヘレシー　二八八ノ三
ヘロデ　二八八ノ三
ヘングステンベルヒ　エルンスト ウイルヘルム　二八八ノ三
ヘンデル　ゲオルヂ フリードリヒ　二八八ノ三
ヘンデルソン　アレキサンデル　二八八ノ三
變貌　某聖の　二八八ノ三
ヘンリー　マシウ　二八八ノ三
偏理說　二八八ノ三
米國プロテスタント監督敎會　二八八ノ三
ペークウェル　ジョン　二八八ノ三
ペケット　トマス　二八八ノ三
ペーコン　フランシス　二八八ノ三
ペーコン　ローヂャル　二八八ノ三
ペザ　テオドール　二八八ノ三
ペタニア　二八八ノ三
ペタバラ　尊者　二八八ノ三
ペータ　ヨハン トビアス　二八八ノ三
ペック　二八八ノ三
ペツサイダ　二八八ノ三
ペツパゲ　二八八ノ三
ペツレヘム　二八八ノ三
ペテスダ　二八八ノ三
ペテル　二八八ノ三
ペニヤミン　二八八ノ三
ペヂディクトス　アニアンの　二八八ノ三
ペヂディクトス　ヌルシアの　二八八ノ三
ペヂディクトス十四世（ブロスペロ、ラムベルチニ）　二八八ノ三
ペヂディクト派　二八八ノ三
ペーメ　ヤコブ　二八八ノ三
ペラミー　ジョセフ　二八八ノ三
ペリアル　二八八ノ三
ペール　ピエル　二八八ノ三
伯耳義
伯耳義信仰告白　二八八ノ三
ペルゼバブ　二八八ノ三
ペルナール　クレアヴォーの　二八八ノ三
ペルナール　メントンの　二八八ノ三
ペレンガリオス　クーアの　二八八ノ三
ペンゲル　ヨハン アルブレヒト　二八八ノ三
ペンザム　ジェレミー　二八八ノ三
辯證學　又は辯解學又は護法論　二八八ノ三
辯證學者　又は辯解學者又は護法家　二八八ノ三
ペンソン　エドワルド ホワイト　二八八ノ三
ペシートー　二八八ノ三
ペスタロッヂ　ヨハン ハインリヒ　二八八ノ三
ペタヴィウス　ディオニシウス　二八八ノ三
ペテロ（彼得）　シモン　使徒　二八八ノ三
彼得行傳　二八八ノ三
彼得前書　二八八ノ三
彼得後書　二八八ノ三
彼得の敎訓　二八八ノ三
彼得福音書　二八八ノ三
彼得默示錄　二八八ノ三
ペラギウス　二八八ノ三
ペラギウス說　二八八ノ三
ペリシテ人　二八八ノ三
ペルガモ　二八八ノ三
彼斯　二八八ノ三
ペルローチ　ジョーヴァンニ　二八八ノ三
ペルーン　ジョン ウェームス スチュアルト　二八八ノ三
ペルーレー　ウイリアム　二八八ノ三
ペン　ウイリアム　二八八ノ三
ペーン　トマス　二八八ノ三
ペンテコステ　二八八ノ三

ホ の 部

ホイセル夫人　メタ　二八八ノ三
ホウイストン　ウイリアム　二八八ノ三

ホウイッチコート ペンウィミン 一二六七ノ一
ホウイットギフト ウヨン 一二六八ノ一
ホウイットビー ダニエル 一二六九ノ一
ホウイットフィールド ジョルウ 一二七〇ノ一
ホエートリー リチャルド 一二七一ノ一
ホクマ
保惠師 一二七一ノ一
ホザナ 一二七一ノ一
ホゼア 一二七一ノ一
何西阿書 一二七二ノ一
ホッデ チャールス 一二七三ノ一
ホッデソン シャッドウィルス 一二七四ノ一
ホッフマン ホールウェー メルキオル 一二七四ノ一
ホッフマン ヨハン クリストフ カルル 一二七四ノ一
ホッフマン ホドウイヒ フリードリヒ ウィルヘルム 一二七四ノ一
ホップス トマス 一二七五ノ一
ホードリー ペンウィミン 一二七六ノ一
ホプキンス サミュエル 一二七六ノ一
ホプキンス説
ホモオウジオン ホモイオウジオン 一二七六ノ一
ホール クリストファル ユリマン 一二七七ノ一
ホール ウヨセフ 一二七七ノ一
ホール ウヨン ガイン 一二七七ノ一
ホール チャールス カスバート 一二七七ノ一
ホール ロベルト 一二七七ノ一
ホールスレー サミュエル 一二七八ノ一
ホルフマン ハインリヒ エリクス 一二七八ノ一
ホルト フェントン ウヨン アンドニー 一二七八ノ一
ホルトン ロベルト フォルマン 一二七八ノ一
和闐 一二七八ノ一
ホレブ 一二七九ノ一
ホワイト ウヒリアム 一二七九ノ一
本山主義 ポエティウス マンリクス セゲエリウス 一二七九ノ一
牧會書翰 一二七九ノ一
牧會神學 一二七九ノ一
牧師 一二七九ノ一
ボシヤー サミュエル 一二七九ノ一
ボズエー ウヤック ベニンチ 一二七九ノ一
ボーソーブル イサック ド 一二七九ノ一
ボーテーン ルイ 一二七九ノ一
ボナヴェンチュラ 又ウヨヴァンニ デイジイアンザ 一二七九ノ一
ボニファキウス一世 一二七九ノ一
ボニファキウス八世 一二七九ノ一
ボニフェース 一二七九ノ一
ボヘミヤ 一二七九ノ一
ボヘミヤ兄弟派 一二七九ノ一
ボラ カタリナ フォン 一二七九ノ一
ボルロー ウォルウ 一二七九ノ一
ボールロー ヒウ 一二七九ノ一
ボールン フランシス 一二七九ノ一
ボロメオ カルロ 一二七九ノ一
ボンヂル エドマンド 一二七九ノ一
ボアレー ピエル 一二七九ノ一
ボタル アロンダ 一二七九ノ一
ボーブ アレキサンデル 一二七九ノ一
波蘭 一二七九ノ一
ボリカルプ レウナルド 一二七九ノ一
ボール レウナルド 一二七九ノ一
ボルタル ノア 一二七九ノ一
葡萄牙 一二七九ノ一
ボルテージ ウヨン 一二七九ノ一
ボンタオ ピラト 一二七九ノ一

マの部

マイエル ハインリヒ アウグスト 一二七九ノ一
マイモニデス ウィルヘルム モセス 一二七九ノ一
マキシミリアン二世 一二七九ノ一
マキシムス 懷海師 一二七九ノ一
マギ 一二七九ノ一
幕屋 一二七九ノ一
マグダラ派 一二七九ノ一
マケドニア 一二七九ノ一
マコ 又はマカ又はマルコ 一二七九ノ一
馬可福音書 一二七九ノ一
マコッシ ウヒエームス 一二七九ノ一
マゴグ 一二七九ノ一
マザル リチャルド 一二七九ノ一
マザル イングリース 一二七九ノ一
マザル コットン 一二七九ノ一
魔術 一二七九ノ一
魔術 魔術者 一二七九ノ一
マス 拉子ミサ 一二七九ノ一
マセソン ウォルウ 一二七九ノ一
マタイ 使徒 一二七九ノ一
馬太福音書 一二七九ノ一
マカビース 一二七九ノ一
マカビース書 一二七九ノ一
マックイルヴェーン サマールス ベティット 一二七九ノ一
マックス ミウレル フリードリヒ 一二七九ノ一
マクミラン ウヨン 一二七九ノ一
マックリー トマス 一二七九ノ一
マックレオド ノルマン 一二七九ノ一
マッシイヨン ウヤン バプティスト 一二七九ノ一

末日聖徒 一二七九ノ一
マッチア
抹油禮 一二七九ノ二
マドンナ 一二八〇ノ一
マナ 一二八〇ノ一
マナセ 一二八〇ノ一
マニ 一二八〇ノ二
マニカイ教 一二八〇ノ二
マビヨン ウヤン 一二八〇ノ二
マムモン 一二八〇ノ二
馬拉基書 一二八〇ノ二
マリア 一二八〇ノ二
マリアの昇天 一二八〇ノ二
マリア禮拜 一二八〇ノ二
マルキオヌス 一二八〇ノ二
マルキオヌス福音書 一二八〇ノ二
マルクス アウレリウス 一二八〇ノ二
マルクス ハインリヒ カルル 一二八〇ノ二
マルシュマン ウヨシュア 一二八〇ノ二
マルスデン サミュエル 一二八〇ノ二
マルチノウ ウエームス 一二八〇ノ二
マルチン ツーアの 聖 一二八〇ノ二
マルチン サラ 一二八〇ノ二
マルチン ヘンリー 一二八〇ノ二
マルチン一世 一二八一ノ一
マルチン四世 一二八一ノ一
マルチン五世 一二八一ノ二
マルテンセン ハンス ラッセン 一二八一ノ二
マルニクス フィリプ ウアン 一二八一ノ二
マルハイチケ フィリプ コンラド 一二八二ノ二
マルブランシ ニコラ 一二八二ノ二
マンセル ヘンリー ロンダヴィル 一二八二ノ二
マンニング ヘンリー エドワルド 一二八二ノ二

ミの部

ミウレル ウヨルウ 一二八四ノ二
ミウレル フリードリヒ マックス 一二八四ノ二
ミウレル ユリウス 一二八四ノ二
ミウレンベルグ ウイリアム アウグスタス 一二八四ノ二
ミウレンベルグ ハインリヒ メルキオル 一二八四ノ二
ミウンツェル トマス 一二八六ノ二
ミカ 一二八六ノ二
米迦書 一二八六ノ二
ミカエリス ヨハン ダヴィド 一二八七ノ二
ミカエル 一二八八ノ一
ミカエル八世 (パレオログス) 一二八八ノ二
ミサ 一二八八ノ二
ミシナ 一二八八ノ二
税吏 一二八八ノ二
ミッドルトン コニアルス 一二八九ノ一
ミツバ 一二八九ノ一
ミデアン 一二八九ノ一
ミドラシ 一二八九ノ二
ミヌキウス フェリクス マルクス 一二八九ノ二
美普教會 一二八九ノ二
修殿節 一二八九ノ二
未來世 一二八九ノ二
ミリクツ クレムウエルの 一二八九ノ二
ミリティアデス ウヨン スチュアルト 一二八九ノ二
ミル サミュエル ウヨン 一二八九ノ二
ミルトン ウヨン 一二八九ノ二
ミルマン ヘンリー ハート 一二八九ノ二
ミレトス 一二八九ノ二
民數紀略 一二八九ノ二

ムの部

無垢懷胎節 一二八九ノ二
無神論 一二八九ノ二
ムーデー ドワイト ライマン 一二八九ノ二
ムラトリ聖書 一二八九ノ二

メの部

名目論 一二八九ノ一
墨其西哥 一二八九ノ一
惠 一二八九ノ二
メソヂスト教會 一二八九ノ二
メッシヤ 一二八九ノ二
滅絶説 一二八九ノ二
メデア人 一二八九ノ二
メドハルスト ウォルタル ヘンリー 一二八九ノ二
メドレー サミュエル 一二八九ノ二
メランクトン フィリプ 一二八九ノ二
メリタ 一二八九ノ二
メルヴィル アンドリウ 一二八九ノ二
メルキセデク 一二八九ノ二
メレティウス アンテオッの 一二八九ノ二
メレティウス リコポリスの 一二八九ノ二
メロダク 一二八九ノ二
メンデルスゾーン モセス 一二八九ノ二
メンノー シモンス 一二八九ノ二

メンノー派 一三四ノ二

モの部

モーブ トマス 一三四ノ一
モーア トマス 一三四ノ一
モーア ハンナ 一三四ノ一
モーア ヘンリー 一三四ノ一
*モアブ 一三四ノ一
*モアブ人の石 一三四ノ一
默示 一三四ノ一
默示錄 一三四ノ一
目的論的證據論 一三四ノ一
モスハイム ヨハン ローレンツ フォン 一三四ノ一
モーセ 一三四ノ一
モーセ五經 一三四ノ二
モーセの昇天 一三四ノ二
モーセ六經 一三四ノ二
沒藥 一三四ノ二
モグレー ヴェールス パウリンダ 一三四ノ二
モナルキア說 一三四ノ二
モニカ 一三四ノ二
モハメッド 一三四ノ二
モラヴィアン敎會 一三四ノ二
モーリス ウォン フレデリック デニソン 一三四ノ二
モリソン ロベルト 一三四ノ二
モリツ ヤキツニアの 一三四ノ二
モリノス ミゲル デ 一三四ノ二
モルガン トマス 一三四ノ二
モルモン派 又はモロク 一三四ノ三
モロク 一三四ノ三
モンクレーフ ベンジャー リチャルドソン 一三四ノ三
モンゼル ウォン ラミュエル ビリレー 一三四ノ三
モンタヌス派 一三四ノ三
問答書 一三四ノ三
モンテスキウ シャールド セコンダー 男爵 一三四ノ三
モンテーヌ ミシェル エーケム ド 一三四ノ三
モントゴメリー ウェールス 一三四ノ三

ヤの部

ヤー 一三四ノ三
ヤー ウォー 一三四ノ三
ヤコビ ノヤードリヒ ハインリヒ 一三四ノ三
ヤコブ 一三四ノ三
ヤコブ（雅各） エデッサの 一三四ノ三
ヤコブ 一三四ノ三
雅各最初の福音書 一三四ノ三
雅各書 一三四ノ三
ヤコブの井 一三四ノ三
ヤコブ パラデウス 一三四ノ三
ヤコボン ダ トーディ 一三四ノ三
ヤペテ 一三四ノ三
ヤラペアム ヨルチリウス 一三四ノ三
ヤンセン 一三四ノ三
ヤンセン派 一三四ノ三
ヤン子とヤンブレ 一三四ノ三

ユの部

ユーオデヤ 一三四ノ三
ユウゲノー派 一三四ノ三
ユウスタチウス ウォロニカの 一三四ノ三
ユウセビウス エメサの監督 一三四ノ三
ユウセビウス カイザリヤの教師 一三四ノ三
ユウセビウス コンスタンチンの 一三四ノ三
ユウティケス 一三四ノ三
ユウティケス說 一三四ノ三
ユウノミウス 一三四ノ三
ユーブー 聖 ヴィクトルの 一三四ノ三
ユストニアス一世 一三四ノ三
ユスチヌス 殉教者 一三四ノ三
ユダ 一三四ノ三
ユダ イスカリオテの 一三四ノ三
ユダ ガリラヤの 一三四ノ三
ユダ 主の兄弟 一三四ノ三
猶太教 一三四ノ三
猶太敎的基督敎徒 一三四ノ三
猶太書 一三四ノ三
猶太人 一三四ノ三
猶太人の會堂 一三四ノ三
ユダヤの野 一三四ノ三
ユダ王國 一三四ノ三
ユディト書 一三四ノ三
ユニヴァルサリスト派 一三四ノ三
ユニテリアン派 基督論古說 一三四ノ三
ユピクイチー 一三四ノ三
ユフラテ 一三四ノ三
ユウベルウェーグ フリードリヒ 一三四ノ三
ユリアヌス フラヴィウス クラウディウス 一三四ノ三
ユリウス アフリカヌス セクストス 一三四ノ三
ユリウス二世 一三四ノ三

ヨの部

ヨーヴィアヌス フラヴィウス クラウディウス 一三四ノ二
ヨヴィニアヌス 一三四ノ二
約耳書 一三四ノ二
預言 預言者 一三四ノ二
ヨシア 一三四ノ二
約書亞記 一三四ノ二
ヨセフ 一三四ノ二
ヨセフ アリマタヤの 一三四ノ二
ヨセフ マリアの夫 一三四ノ二
ヨセファス フラヴィウス 一三四ノ二
ヨセフ二世 一三四ノ二
ヨッパ 一三四ノ二
預定說 一三四ノ二
約拿書 一三四ノ二
ヨナス エストス 一三四ノ二
ヨナタン 一三四ノ二
ヨハ子（約翰） 使徒 一三四ノ二
*ヨハ子 バプテスマの（施洗約翰） 一三四ノ二
ヨハ子ス ダマスコの 一三四ノ二
ヨハ子ス四世 一三四ノ二
ヨハ子ス八世 一三四ノ二
ヨハ子ス十世 一三四ノ二
ヨハ子ス十二世 一三四ノ二
ヨハ子ス廿二世 一三四ノ二
ヨハ子ス廿三世 一三四ノ二
約翰第壹書 一三四ノ二
約翰第貳書 一三四ノ二
約翰第參書 一三四ノ二
約翰福音書 一三四ノ二
約翰默示錄 一三四ノ二
ヨハン 龍立者 一三四ノ二
ヨハン 子ポムク 一三四ノ二
ヨハン フレデリック 一三四ノ二
約百記 一三四ノ二
ヨベル 一三四ノ二
ヨベルの書 又は小創世記 一三四ノ二
陰府 一三四ノ二
甦生 又は復活 一三四ノ二
ヨルダン 一三四ノ二

ラの部

ライオン メリー 一三四ノ二
ライト ヘンリー フランシス 一三四ノ二
ライトフート ウォセフ バルバル 一三四ノ二
ライトフート ウォン 一三四ノ二
ライプニッツ ゴットフリード 一三四ノ二
ライマルス ヘルマン ウイルヘルム 一三四ノ二
ライル ヘルベルト サムエル 一三四ノ二
ラウス エドワルド 一三四ノ二
ラオデキア フランシス 一三四ノ二
ラクタンチウス フィルミアヌス 一三四ノ二
樂天觀 厭世觀 一三四ノ二
ラコルデア ウヤン バプテスト アンリ 一三四ノ二
ラ サール ウヤン オブテスト ド 一三四ノ二
ラサルファルド サミュエル 一三四ノ二
ラザロ ベタニヤの 一三四ノ二
ラ シェーズ フランソア ド 一三四ノ二
ラスキン ウォン 一三四ノ二
ラスコ ヨハネス ア 又ウヤン ラスキ 一三四ノ二
ラッセル チャールス ウイリアム 一三四ノ二
ラッド ウォルウ トラムブル 一三四ノ二
ラティチウディナリアン派 一三四ノ二
ラティマル ヒウ 一三四ノ二
ラテラン會議 一三四ノ二
拉丁譯聖書 一三四ノ二
ラドベルトス パスカシウス 一三四ノ二
ラハブ 一三四ノ二
ラハマン カルル 一三四ノ二
ラバディー ウヤン ド 一三四ノ二
ラバスス マウルス 一三四ノ二
ラビ ラボニ 一三四ノ二
ラファエル 一三四ノ二
ラファーテル ヨハン カスパル 一三四ノ二
ラムス ペトルス（又ピエル ドラ ラメー） 一三四ノ二
ラムゼー ウィリアム ミッチェル 一三四ノ二
ラメンチー ユーゲフ エリシテ 一三四ノ二
ラルド子ル ロバルド ナサニエル 一三四ノ二
ラングトン スティーブン 一三四ノ二
ランゲ ヨハン ペテル 一三四ノ二
ランスデル ヘンリー 一三四ノ二
ランデレル マキシミリアン アルベルト フォン 一三四ノ二
ランフランク 一三四ノ二

リの部

リー アン 一三四ノ二
リー サミュエル 一三四ノ二
リヴァイヴァル 信仰復興 一三四ノ二
リヴィングストン ウォン ヘンリー 一三四ノ二
リヴィングストン デヴィド 一三四ノ二
リッケ ゴットフリード クリスチアン 一三四ノ二
リグオリ フリードリヒ アルフォンゾ マリア ダ 一三四ノ二

リシュリウ アーマン ウヤン デュプレシード 一四四ノ上
リース スタンレー 一四四ノ一
リチモンド レー 一四四ノ一
リッキ マテオ 利瑪竇 一四四ノ二
リッチェル アルブレヒト 一四四ノ二
リッチェル派神學 一四四ノ二
リッピン ウヨン 一四四ノ二
リード アンドリウ 一四五ノ上
リード トマス 一四七ノ一
リドレー ニコラス 一四九ノ一
リブシウス・リチャルド アデルベルト 一四九ノ二
リベリウス 一四九ノ二
リベルテン 一四九ノ二
リーム エドワルド 一四九ノ二
リムボルク フィリプ ヴァン 一四九ノ二
雨意說 一四九ノ二
雨性派 又は剛性論者 一四九ノ二
リューレンテ ドン ウェアン アントニオ 一四九ノ二
リンガルド ウヨン 一四九ノ二
リンチ トマス トーク 一四九ノ二
倫理學 基督教の 一四九ノ二

ルの部

ルイ 聖 又ルイ九世 一四九ノ二
ルイスブレーク 又ルスブレーク 一四九ノ一
ルカ 福音書記者 一四九ノ二
ルカオニヤ 一四九ノ二
路加福音書 一四九ノ二
ルキアヌス サモサタの 一四九ノ二
ルキアヌス 殉教者 一四九ノ二
ルキヤ 一四九ノ二
ルスラ 一四九ノ上
ルーソー ウヤン ウヤタ 一四九ノ上
ルター ルト クリストフ エルンスト 一四九ノ上
ルソ 一四九ノ上
路得記 一四九ノ上
ルツルス ライムンドス 一四九ノ上
ルーテル マルチン 一四九ノ二
ルーテル教會 一四九ノ二
ルチーサンス 一四九ノ二
ルチーサンス型の建築 一四九ノ二
ルベン 一四九ノ二

レの部

靈魂創造說 一四九ノ一
靈魂不滅說 一四九ノ一
靈通 一四九ノ二
禮拜學 一四九ノ二
禮拜式文 又は禮文 一四九ノ二
レオ一世 大法王 一四九ノ二
レオ三世 一四九ノ二
レオ九世 一四九ノ二
レオ十世 一四九ノ二
歷代志略上 歷代志略下 一四九ノ二
レギウス ウルバヌス 一四九ノ二
レークス ロベルト 一四九ノ二
レスリー チャールス 一四九ノ二
レッキー ウィリアム エドワルド 一四九ノ二
レッシング ゴットホルド エフライム 一四九ノ二
レッバイ 一四九ノ二
列王紀略上 列王紀略下 一四九ノ二
レートン ロバルト 一四九ノ二
レナン エルンスト 一四九ノ二
レーニー ロベルト 一四九ノ二
レバノン 又はレグイ 一四九ノ二
レビ 一四九ノ二
利未記 一四九ノ二
レフォルムド教會 又は改革教會 一四九ノ二
煉獄說 一四九ノ二

ロの部

ロー ウィリアム 一四九ノ二
ロアジー アルフレッド 一四九ノ二
ロイス エドワルド ギルラウメ 一四九ノ二
ロイヒリン ヨハン 一四九ノ二
ロギア 一四九ノ二
ロゴス 一四九ノ二
露西亞 一四九ノ二
ロージャース ウェームス ヤング子ス 一四九ノ二
ロージャース ヘンリー 一四九ノ二
ローズ ヒウ ウェームス 一四九ノ二
ローズ ヘンリー ウヨン 一四九ノ二
ロック ウヨン 一四九ノ二
ロマヂ オリヴェル ウヨセフ 一四九ノ二
ロッツェ ヘルマン ルドルフ 一四九ノ二
ローテ リカルド 一四九ノ二
ロード ウィリアム 一四九ノ二
ロバルトソン ウェームス クレーゼー 一四九ノ二
ロバルトソン フレデリック ウィリアム 一四九ノ二
ロビンソン エドワルド 一四九ノ二
ロビンソン ウヨン 一四九ノ二

羅馬加特力教會 一四九ノ二
羅馬書 一四九ノ二
ロマチスク型の建築 一四九ノ二
ロムバルドス ペトルス 一四九ノ二
ロヨラ イグナチウス 一四九ノ二
ロラルド徒 一四九ノ二
ロングフェロー ヘンリー ウァツウォルス 一四九ノ二
論爭學 又は護邪顧正論 一四九ノ二

ワの部

分封君 一四九ノ二

井の部

唯一神教 又は唯一神論 一四九ノ二
唯心論 一四九ノ二
唯名論 實在論 一四九ノ一
唯物論 唯理說 一四九ノ二

ヲの部

婦女 女執事 一五〇ノ上

附錄

基督教會年表 一五〇ノ一
歐字索引

目次

挿畫及び挿圖目次

アルガイル侯 一
マシウ アルノルド 四
マリアと幼兒耶蘇 四
耶蘇神殿にて質問す 五
ナザレの景 八〇—八一
東邦の學校 八二—八三
美福の山 八四
エルサレムの門 八七
ゲッセマネの園 八七
ピラトの家及びアントニアの塔 八九
最後の晩餐 九五
十字架上より下さるゝ基督 九四—九五
埃及人の用ゐたる戰車 九四—九五
埃及及びシナイ半島の圖 一〇一
埃及に於ける以色列人 一〇四
以色列十二種族に分割せられたる迦南の圖 一〇五
ダビデ及びソロモン王國 一〇七
ユダ及びイスラエル王國 一〇七
イスラエル、ジャルマチセルに朝貢す 一一二
バルンハルド ウァイズ 一一四
ヴァチカヌス宮殿 一一八—一一九
ジョン ウィックリッフ 一二一
オレンジ公 ウィリアム 一二四
ジョルジ ウィリアムス卿 一二六
ウエストミンステル (全面二枚) 一二〇—一二一
ジョン ウエスレー 一二一
ウエストミンステル、アッベーに在る記念碑 一二四
チャールス ウエスレー 一二五
カルディナル ウォルゼー 一二六
ウィリアム ウォルヴウォルス 一二九
ウォルムス 一三一
エー アール ウォルレース 一三五
スフィンクス 一三六
パロの木乃伊 一三六
エッディー夫人 一三八
エメルソン 一三八
エラスムス (ドウレル畫) 一三九
ジョルジ エリオット 一四四
エリコ道 (善サマリヤ人亭) 一四五
エルサレム 一四六
橄欖山より見たる今のエルサレム 一四八—一五〇
ウエストミンステルアッベー エルサレムの室 一五一
ソロモン神殿の圖 一五二
エゼキエル神殿の圖 一五二
ヘロデ神殿の概觀 一五三
ウィリアム カウパル 一五四
カタコムの圖 一五七
カペナウムの跡 一五八
トマス カーライル 一五九
ジョン カルヴィン 一六二
カンターベリー 一六五
インマヌエル カント 一六五
ガリラヤ海の景 一六八
救世軍日本本營 一七三
現今の希伯來語舊約經文 (創世記一—五) 一七八
東京基督教青年會館 一七九
エクケ ホモ 一八八—一八九
埃及人金環を秤る圖 一八八
貨幣 一八八—一八九
七十人譯詩篇の一部 (大英博物館藏) 一九三
オリヴァル クロムウェル 一九六
ジョン ケーヤド 一九九
ケルスの書 (馬可傳第一頁) 二〇〇
ビザンチウム型 (コンスタンチノープル聖ソフィア回教寺院の内部) 二〇六—二〇七
ゴチック型 二〇七
ルネーサンス型 二〇七
ゲーテ 二一〇
コリント古神殿の遺跡 二一〇
コルリッヂ 二一二
ダマスコ門外カルバリーと稱せらるゝ地 二一四

目次

ゴルドン將軍 一四二
シェリング 一五四
死海の圖 一五六
シナイ山の景 一六三
シュライエルマッヘル 一六九
いと杉の一種 一七〇
香柏 一七二
海棗 一七九
穀斗科 一八〇
桑 一八〇
乳香 一八三
ディーン スタンレー 一八一
ヘルベルト スペンセル 一八二
チャールス スポルジョン 一八七
ジョルジ アダム スミス 一八八
ヴァチカン寫本 一八八
シナイ寫本 一八八
亞歷山寫本 一八九
エフレーム寫本 一八九
聖保羅大會堂 一九〇
聖彼得大會堂 一九〇
有名の洗禮盤 一九一
保羅の生地キリキアのタルソ 一九二
ダルウィン 一九五
トマス チャルマルス 一九八
ウィリアム ティンダル 一九八
トルストイ伯 一九九
ヒエナ (ブルムヒエス) 二〇〇
蠶 二〇一
やつがしら 二〇二
蠟 二〇五
ナイチンゲール孃 二〇五
新島襄 二〇六
カルディナル ニウマン 二〇六
ヘッポン博士 二〇九
ブラウン博士 二一〇
ゲルベッキ博士 二一〇
井深梶之助 二一一
植村正久 二一一
グリーン博士 二一二
デビス博士 二一二
小崎弘道 二一二
宮川經輝 二一二
海老名彈正 二一二
ニコライ 二一三
澤邊琢磨 二一三
マキム監督 二一三
ポーフラワー監督 二一四
マクレー博士 二一四
ハリス監督 二一四
カックラン博士 二一五
マクドナルド博士 二一五
平岩愃保 二一五
ジェー ダブリウ ランバス 二一六
木多監督 二一六
巴比倫洪水物語の一部 二一七
ジョン ノックス 二一七
ハックスレー 二一八
ハルナック 二一八
ジョン バンヤン 二一八
ジョセフ バーカル 二一八
パレスチナ全圖 二一二—二一八
オット フライデレル 二一九
ヘーゲル 二一九
ヘルデル 二二〇
ペツレヘム及び拉丁僧庵 二二〇
誕生教會 二二八
幕屋の庭 二二八
幕屋の圖 二二八
香の壇 二二八
金の燭臺 二二八
マンニング 二二八
メランクトン 二二八
サー トマス モーア (ミカエルアンヂェロ作) 二二八
モーセ 二二八
デヴィッド リヴィングストン 二二九
マルチン ルーテル 二二九
フレデリック ロバルトソン 二二九

基督教大辭典

神學博士　高木壬太郎著

アの部

愛 Love. (agápē) 【新語】愛とは一の道徳的存在者が他の道徳的存在者の生活中に生活し、自己の幸福を他に與へて喜ぶの謂にして、愛神、愛人は新約宗教の根本的教義也。然れ共耶蘇は凡ての律法と預言者は此二の誡に因れりと言へり（太廿二の四十等）。左れば舊約宗教の根本義も亦愛神、愛人に外ならざるを知るべし。此二者は互に相關係する者にして、聖書の意義に於る愛人は愛神の念より生ず（壹約四の廿一）。然れ共亦見ゆる人を愛せずして見ゆる神を愛すと云ふは虚妄也（二の九―十一、三の十、四の廿）而して愛神の念は又吾人が神冥に吾人を愛し給ふとの事を知るより起る（四の七、十九）故に新約に在ても、舊約に在ても、愛神、愛人の精神は共に其語を神の人類に對する愛に發す。

【神の愛】愛は神の本質也。故に約翰は『神は愛也』と云へり（壹約四の八）神の愛とは神が人類の福祉を求め之に凡ての幸福を與へ、其本來の目的より離れ、罪惡に沈みたる者を救ひて回復せしめ、且人をして神の神聖、幸福なる生活を享有せしむるをいふ。（一）舊約の思想　舊約に在ては神聖の思想顯著にして、愛の思想は從面に在り。神の其民に對して有する愛なる語の初めて用ゐられたるは預言者の時にして、何西阿初めて此思想を發達し（三の一、十一の一、十四の四）申命記、以賽亞書、耶利米亞記等にも屢々之を見る。且舊約に於る神の愛は約束の民即ち以色列人に對する愛に過ぎず。然れ共愛なる語の用ゐられたること比較的晩代なりしが故に、神の愛の顯現も亦明かりとは思考すべからず。神の愛の顯現は愛なる語の使用に先ち、族長時代に於て既に之が發現を見る。又舊約に於ける神の愛は殊に以色列人に對する愛なりしと雖も、此特殊主義は究竟世界人類に福祉を與へんとの精神に伴ふ者にして、アブラハムに與へられたる約束は天下の萬民其子孫に依りて福祉を得べしとの事なりき（創十二の三、廿二の十八、廿六の四）。

（二）新約の思想　新約は舊約の思想を自述し、基督に於る神の性質の顯現と、人類救拯に關する神の永遠の意匠を示すことに依りて、神の人類に對する愛の思想を明白、完全にす。耶蘇は直接に神は愛也との事を語らざりしかども、神を父と稱し、其一體同仁の愛を示し（太五の四十五）又神が吾人の祈を聞き、吾人に善き物を與へ、吾人の罪を赦し、吾人に衣食住を與へ、嬰兒に自らを顧はし給ふ等の事を語りて神の人を愛し給ふ事を教へたり。且耶蘇自らの精神、人格、言語、行爲は悉く神の愛の意義の發現に外ならず。故に吾人は耶蘇に於て神の愛の新意義を發見し得べし。然れ共神の愛は基督の生涯と彼を信ずることに依りて得べき救拯とに依りて顯はれたりとの事を最も明に教へたるは保羅及び約翰也（羅五の五、八、八の廿五―廿九、一約三の一、四の八―十二等）彼等の教に依れば神は萬民を愛し、萬民を救ふ爲めに其子を遣はして之を犧牲となし給へり（羅馬一の六、壹約二　二等）故に基督に在ては善惡人と猶太人或は割禮ある者と割禮なき者との別なし（加五の六、四三の十一等）而して神の人を救ふは人の功作に依るに非ず、恩に由る、是れ即ち神の賜也（弗二の八等）神の此愛を其一身に證明する者は耶蘇基督也。彼の慈悲、柔和、哀憐、恩惠、惡人にも尚希望を屬して之が恢復を祈り、其羊の爲に其生命を棄てたるは、天父の人類に對する愛を其一身に於て說明したる也。

【人の神及人に對する愛】　心を盡し精神を盡し意を盡し力を盡して神を愛するは、人の神に對する根本的義務也とは、舊新約の共に教ふる所也（申六の五、可十二の廿九―卅三）。而して此義務の依て起る所以は、舊約に在ては契約國民として以色列に與へ給ふ神の特殊の恩惠に在りとなし（申四の一―十四等）新約に在ては基督に於る神の愛に在りと爲す（羅八の卅五、卅九等）此愛は單に感情明なる可ら

す、神の聖意に服從し、其誡を守ることに歸りて完ふせらる（中六、雅一の十一―十八、太七の廿一―廿三、約十四の十五等）約翰は明に『神の誡を守るは是れ即ち神を愛する也』と言へり（一愛約五の三）之て難の如く聖書の神に對する愛は全然實際的なれ共、此愛は又知識的にして加愛を深歩せしむる事に依りて修養せらるべし（弗一の十七、十八、三の十七、十八等）而して斯く神を愛する者は神に居り、神又彼に居る（愛約四の十六）て隣の如き者に自ら強ひる能はず、故に人に對する愛は神に對する愛に其源を發す。基督教的倫理は哲學的倫理と異り、其基礎を神人の親的關係に置く、即ち神は父にして人は神の子也、故に人は又皆互に兄弟也。是れ神を愛する者は父人を愛せざる可らざる所以也。既に詳に此教義の發達を論ずれば此教訓も亦既に舊約に之れあり。『那麻は『己の如く隣の隣を愛すべし』との誡を料米記（十九の十八）より引き、又『凡て人にせられんと思ふことは斯曾又人にも其如くせよ』と教へ『基督律法』と題する者なる也』との言を附加へたり（太七の十二）。然れ共此教訓は耶蘇に源を發して新なる意義を生ぜり。何となれば舊約時代に在ては國民的隣神基督の感にして『隣』の意義基だ狹隘なりしが、耶蘇の神人普遍の教義は『隣』の意義を擴大して國民的區別を撤し（路十の廿九―廿七）たるのみならず、天父の一視同仁に倣ふて敵なを愛すべき事を教へたればなり（太五の四十三―四十八）。且耶蘇地上の生活は愛にも亦此誡の模範を示せり。即ち彼は凡ての人を愛し、世に棄てられ又は罪に沈める者を憐れみ、己を苦せる者の間を救ひ、人類平和の爲に其生命を與へて、完全なる愛の模範を爲れり。而して此『己の如く隣の隣を愛すべし』

その誡は、基督教倫理の全体、聖書の教訓にして（羅十三の八―十、加五の廿二、二の十四―十八、彼前四の十四―十七）で律法は此愛の實踐を讃ふて、諸の人の者及更使の言を綜合し、若くは宣言するの力あり、又凡て凡の所者を施し、又笑ひる爲めに涙を傷ふるべし、愛なくば例等の發なしと云ひ、愛の聖書全体は『若し愛なくば例等の發なしと云ひ、愛は寛容にして人の惡を思はず、不義を喜ばず、らず、驕傲らず、非禮を行はず、己の利を求めず、怒しく起らず、人の惡を思はず、不義を喜ばず、眞理を喜ぶ、凡を堪忍み、凡を信じ、凡を望み、凡を事認ぶ也と云ひ、而して信、望、愛の中最も大なるは愛也と云へり（哥前十三）

哀歌 【Lamentations.】 【經名】 舊約聖書中の一書。エルサレムがバビロニヤ人に陷られ、國て敵手たれ五の歌を集めたる者にて、全編を通にて亡國の悲一字一句の中に溢れ、字々皆血淚の結なり。初の四章は各々希伯來語の只呂波順に排列せられ、二、四章に各々廿二節より成れ共、只呂波順に五章は廿二節より成れ共、只呂波順に

ふ、之を歌よ。『エルサレムの荒廢を起し、無常なる嘲ることなかれ、エルサレムの榮光を埋に落す。笛琴基の日に己の心を堅かく止め給はずりき』。三章、國民の苦訴か歌よ。『我は貴者の者によりて眼證に遭ひたる人也』。四章、シオンの過去と現在とを歌ふ。『黃金は光を失ひ、純金は色を變じ、聖所の石は諸の市路の日に投げ捨てられたり』。五章、國民エルサレムの仕想を訴ふ。『エルサレム我等に在りし所の事を思ひ給へ、我等の恥辱を顧み見たまへ』。

【著者】 希伯來語の聖書には此書の著者を記さず、之を初めてエレミヤに帰したるは紀元前二世紀にして、羅後一般に之をエレミヤの作也とせり。而して此時代は此書が第少耶利米記の調子と似たる點あると、歌代赤晴下世五の廿五に『エレミヤ哀歌のために哀歌を作れり』とあるより來せし者なるべしと。然れ共當時の學者は一般に此兩者の同著を比較し、其言論、文体及び思想の相違より、エレミヤの作にあらず猶著せり。而して其エレミヤに親たる著あるより、『エレミヤの弟子著』とは彼の著に熟通せる者ならんと云へり。此書の歌は國民歌にして、作者は全編を通じて國民の名を以て歌へり。書中に發見する歴史的言語より之を推するに、此等の歌はエルサレム陥落し、ユダ國民の俘虜となりし時代の作にして、巴比倫にて歌られたる者なるべし。コルニルヌ氏等の學者の說に依れば、二章及び四章は最も古く成り（五七〇頃）一章五章之に次ぎ、三章は最後の作にして俘囚時代の末に成りたる者也。

【學者書】 ドライバ『舊約文學概論』カイル『舊約の經典』計釋書にては、ペーン、スミス、ロスピーロルス、コンメンタリー、キャーター（ブッピタト、ッ

ンメンタリー）アドネー（エキスポウテル、バイブル）を使とす。

愛餐 【Love-Feasts (agapai)】 【慣例】 初代の教會に於て信徒相集りし食を共にし兄弟の交を爲し（徒二の四十六）且之に依て貧しき者を助けたりしに潤飾す（六の一、二）。思ふに是れ猶太の家庭に在て行はれたる習慣を擬し、且耶蘇がエルサレムに於て爲したる最後の晩餐に倣ひたる者なるべし。然れ共此聖餐の迹に異邦基督信徒の間に攜がりしを見れば、異教の中にも此の如き習慣の存在したりしを知るべし。新約に於る此聖餐の詳なる記事は哥前十一の十七―廿四に在り。此聖餐は午後の食事にして貧富共に一堂に會し之を行ふ。感謝の祈を以て初め、愛の接吻を以て終れるが如し。食事終りて後手を洗ひ、燈火を點し、教師の指導に從ひて讃美を歌ひ祈禱を爲す。而して晩餐に或は之に先つことあり、又に之に次ぐことあり。然れ共斯約は斯る飲食の會合を以て放肆に流るゝの危險ありとなし、保羅は哥林多教會に之を警告し、以弗所の教會にも亦之を警告せしが如し（五の十八、十九）。故に第二世紀の基督教會は大概愛餐を晩餐より分離せしめ、前者を夕、後者を朝守るに至れり。歴史上に在ては此二者比較的晩く迄結合せられたりしが、アウガスチンの時代には愛餐は單に貧民に對する施濟に過ぎざるに至れり。後又教會は飲食を教會より退けしが、遂には愛餐なも全く廢するに至れり。唯長く殘りたるは貧民舞踏の熱誠的行爲と、晩餐に作へる儀式の一部分として勤進經を讃み、手を洗ひ、平和の接吻を爲し、又希臘教會に於ては其祝福、聖別せるパンを貧民に分配したる事也とす。然るに第十八世紀に至りメソヂスト教會起るに及び、ウヌスレーは愛餐を再興し、使徒時代の慣例を復活せり。今日に於てもメソヂスト教會にては時々愛餐を守るを以て例となせり。

アイスランド 【Iceland.】 【地名】 丁抹の領にして北大西洋、グリーンランドの東南百卅哩、ノールウエーの西八百五十哩に在る島也。廣袤三萬九千二百方哩、人口七萬八千四百七十人（一九〇一調）。第八世紀の終末頃より ケルチック僧來り、第九世紀の中葉ノールウエー人來り住す。此等の移住民は異教徒なりしが、本國との交通に依りて彼等に漸次基督教化せられ、紀元一千年頃に基督教に此國の國教として承認せられ、一一〇六年ホラルに又一監督區設置せられ、一一〇六年ホラルに又一監督區設置せられ。一八〇一年ホラルの監督區廢止せられ、一八二五年全島レクキャヴィックの監督區の統轄の下に置かる。

アイダン 【聖 Aidan, St.】 【人名】 六五一死す。愛蘭（アイルランド）に生れ、アイオナに學び、其監督となるベルニシア王オスワルドの招を受け、ノルサンブリアの宣教師となり、其敬虔、謹慎にして且熱心なる德に依り其死する前、始めて之を基督教化せり。

愛蘭 【Ireland.】 【地名】 愛蘭は大ブリテン島の西に在る島にして、廣袤三万二千五百八十三方哩あり。概れ緯邊は高地なれ共、中央は低平なる盆地にして、平穀の耕作よりも牧畜に適せり。人口四百四十五万八千七百人（一九〇一調）過去十年間に廿四万六千人の減少を示せり。年々海外に移住する者四五万に上る。是れ人口減少の原因也。愛蘭はケルチック民族の殖民地にして、基督教の初めて此國に傳へられたるは、思ふに第五世紀の頃にして、ウェールズ及びコルンウォールに居住せる愛蘭殖民との交通に依りて誘入せられたりしなるべし。然れ共初めて教會を建設したるは聖パトリック（St. Patrick）にして、當時英國に於る羅馬法王の權力衰へしかば、愛蘭の教會は全く羅馬教より獨立し、當時の社會的狀態と、其民族的組織とに從ひて發達せしを以て、法王は之を以て全く羅馬教會より分離せる者也と認め、務めて之を一致せしめんと謀りしが、愛蘭教會の教師等は羅馬教會の壯嚴と其組織の整頓せるに其心を奪はれ、漸次羅馬教化するに至れり。次でノルマン人侵掠の時代となりしが、法王アドリアン四世が彼等の愛蘭征服を許可したりしも、亦愛蘭を以て羅馬教に歸せしめんとするに在りき。斯くて愛蘭内には羅馬教風の教會建設せらるゝに至りしと雖も、古代ケルチック民族の教會は尚基礎を受け守して依然存續せしを以て、愛蘭には二階の教會併立し、羅來聞へす分爭せしを以て二者共に充分の發達を爲すこと能はざりき。然れ共前者は愛蘭を征服するに從ひて漸次其境域を擴張し、エリザベタの朝に至りプロテスタントとなり、爾後愛蘭の國教となりしと雖も、一般に外國的權力の表象として認められ、愛蘭國民多數の信奉を得るに至らざりき。之に反して古代愛蘭教會は第十六世紀の宗教的紛爭に際し、極めて強力なる法王派となり、古代の信仰を有せる愛蘭人民五分の四を其味方となし、其僧侶は所謂公會的愛蘭と稱する者の盟導者となれり。第十七世紀に於る内亂の際には、國教會及び其僧侶は英國の忠實なる味方となり、愛蘭公會派及び其僧侶は其最も不撓の敵となりたり。國教會は第十八世紀の間愛蘭に於て最も優勝なる地位を占め、之を維持保護すべしとの事は、英愛兩國合同條約基礎の最も重要なる部分を占めたり

き(一八〇〇)然れ共ヒットは愛蘭公會教徒に自由を與ふるのみならず、又其會堂を建設せんとの希望を有したりき。一八三二—三〇年の大改革に於て、國教會の過大なる富と其評多の非行とに讃歎、攻撃せられ、其歳入は漸に分配せられ、其他用なる十四の監督區は廢止せられ、所謂十分一稅の徴收を解せられたり。此際に於て愛蘭公會派はコーコンネルの抗議に依りて大なる變化をなし、其僧侶は一八〇九年の改革運動に參加し、其信奉羅馬教徒は其自由を得るに至れり。又彼等は一八四三—四年の英愛合同廢止運動及び一八七九—八九年の土地及び國民的同盟運動に參加して重要なる働を爲せり。然れ共彼等の此所爲は羅馬法王の譴責する處と爲りて止めり。一八六九年國教會は遂に廢止せられ、其所領は没收せられの。而して羅馬教會は依然新教を奉ずる英國及び其政治に反抗せり。愛蘭の羅馬教會はクルスアルに根住せる蘇格蘭民族の中に生長し、高次勢力を得、ストラッフォルド(一六三三)の時には大に勢中に臨延しつゝありき。後クロンウェルの治下に在りて一時衰微に向ひしが知くなりしがごとく、王朝に復して後は他の非國教會と同じくスチュアルト朝の政治家の憎む所となりたりき。然れ共チャールス二世は之に恩賜金を與へられたる少許の保護金を與へ、クイリアム三世は更に之を增額せり。女王アンの治世は寛容なる處置を蒙りしを以て、之がため彼等に一七九五—八年に於て事に從反の態度を取りしが、英愛二國合同(一八〇一)以來英國政府の味方となり、黒馬金の增加に依りて其教師等の心を和げたり。メソヂストの愛蘭に傳へられたるは、一七四七年ウエスレーの來りて說教したりしを以て始とす。一八七八年ウェスレアン・メソヂスト教會プリミチブ・ウェスレアン・メソヂスト教會合同して愛蘭メソヂスト教會を作り、其年會を一八八一年六月マゲロに開けり。目下同國の監督は二人の大監督を有す。教師の數は千六百人あり。愛蘭公會には羅馬法王の下に在り四千に達し、四人の大監督と甘三人の監督を有す。長老教會は凡そ七百の教師を有す。

アインスウォルス 人名 (ヘンリー Ainsworth, Henry) 一五七一—一六二二 英國の人、獨立教會の講壇にて說教せしが、英國を逃れて、和蘭に來り、アンステルダムのブラウニスト會派の牧師となる(一五九三)著名なる希伯來語學者にして、且論駁家也。著書多し。

アウスチン 聖 Augustine, St. of Canterbury 最初のカンタベリー大監督。初め羅馬聖アンドリュー僧院長なりしが、法王グレゴリー、セ、アレート(五九〇—六〇四)アングロサクソン人種を基督教化せんとの目的を以て、四十人の僧侶の頭として本國に送る。五九六年サンテット島に上陸し、サルソン王エセルベルトの妃ベルサを介し、修道の効許を得。翌年王自ら洗禮を領し、國人無く基督教に歸す。後彼はカンタベリーの大監督に補せらる。六〇七年に歿す。

アウガスチン 又は **アウグスチヌス** 聖 Augustinus, Aurelius 人名 三五四—四三〇。

【略傳】北亞弗利加のカルタゴの近傍なる塔加斯特に生る。父は土官にして異教の信徒なりしも、母はモニカ(Monica)と稱する熱心なる基督信徒にして、アウガスチンの誕生に當りては、母の熱心なる祈禱に感ぜられ、生れ出でしにてカルタゴに送り、三年の間高等にて教育を受けしが、當時ローマの書を讀みて深く感激を受けるのみならず、又哲學の研究を始めしが、其文体の美に滿たざるものあるを以て中絶にして之を廢せり。それより彼はマニ教に入り、凡そ十年の間(三七三—八三)其門に入りしが、其教説の淺薄なるを、其教徒の不品行なるを見て之に滿足する能はず、一時懷疑に陥りしが、後新プラトン派の哲學を信ずるに至れり。當時長に流行せる哲學より、十六歳の少年にして既に社會の惡風に感染し、十九歳にして庶子を産む、其親迫の要の年少にして婚期尚早きを惜み、更に他の妻を娶へ、其悔改むる時迄其聞話を抑止せり。母モニカは是等の有様を見て深く之を憂へ、常に涙を流して彼の爲めに祈りしが、ある日夢に彼女を慰めて「涙の子は決して亡ぶることなし」と云ふ。アウガスチンは既に教育を受け了りて、カルタゴの學生は長たる規律にして教師の命令を奉ぜざりしがゆへ、彼は大に困難し、母の意に背きて窃に羅馬に赴き、此處にても哲學を教授せしが、羅馬の學生に授業料を納めずして逃げ去る風ありしがゆへ、彼は爲めに生活の困難を感ずるに至れり。偶々ミラノに於て哲學の教授を求るものあり、羅馬の知事シマカスはアウガスチンの才能を知り、彼を知事の紹介狀を携へ、其一子を伴ひ、ミラノに往けり。是れ彼が三十一歳の時にして、母モニカも亞弗利加より彼の跡を追ふてミラノに來れり。當時ミラノの監督はアムブロスなりしが、アウガスチンは愛聞公會教徒に自由を與ふるのみならず、又其會堂を建設せんとの希望を有したりき。一八三二—三〇年の大改革に於て、國教會の過大なる富と其評多の非行とに讃歎、攻撃せられ、其歳入は漸に分配せられ、其他用なる十四の監督區は廢止せられ、所謂十分一稅の徴收を解せられたり。此際に於て愛聞公會派はコーコンネルの抗議に依りて大なる變化をなし、其僧侶は一八〇九年の改革運動に參加し、其信奉羅馬教徒は其自由を得るに至れり。又彼等は一八四三—四年の英愛合同廢止運動及び一八七九—八九年の土地及び國民的同盟運動に參加して重要なる働を爲せり。然れ共彼等の此所爲は羅馬法王の譴責する處と爲りて止めり。一八六九年國教會は遂に廢止せられ、其所領は没收せられの。而して羅馬教會は依然新教を奉ずる英國及び其政治に反抗せり。愛聞の羅馬教會はクルスアルに根住せる蘇格蘭民族の中に生長し、高次勢力を得、ストラッフォルド(一六三三)の時には大に勢中に臨延しつゝありき。後クロンウェルの治下に在りて一時衰微に向ひしが知くなりしがごとく、王朝に復して後は他の非國教會と同じくスチュアルト朝の政治家の憎む所となりたりき。然れ共チャールス二世は之に恩賜金を與へられたる少許の保護金を與へ、クイリアム三世は更に之を增額せり。女王アンの治世は寛容なる處置を蒙りしを以て、之がため彼等に一七九五—八年に於て事に從反の態度を取りしが、英愛二國合同(一八〇一)以來英國政府の味方となり、黒馬金の增加に依りて其教師等の心を和げたり。メソヂストの愛聞に傳へられたるは、一七四七年ウエスレーの來りて說

教したりしを以て始とす。一八七八年ウェスレアン・メソヂスト教會プリミチブ・ウェスレアン・メソヂスト教會合同して愛聞メソヂスト教會を作り、其年會を一八八一年六月マゲロに開けり。目下同國の監督は二人の大監督を有す。教師の數は千六百人あり。愛聞公會には羅馬法王の下に在り四千に達し、四人の大監督と甘三人の監督を有す。長老教會は凡そ七百の教師を有す。

アインスウォルス 人名 (ヘンリー Ainsworth, Henry) 一五七一—一六二二 英國の人、獨立教會の講壇にて說教せしが、英國を逃れて、和蘭に來り、アンステルダムのブラウニスト會派の牧師となる(一五九三)著名なる希伯來語學者にして、且論駁家也。著書多し。

アウスチン 聖 Augustine, St. of Canterbury 最初のカンタベリー大監督。初め羅馬聖アンドリュー僧院長なりしが、法王グレゴリー、セ、アレート(五九〇—六〇四)アングロサクソン人種を基督教化せんとの目的を以て、四十人の僧侶の頭として本國に送る。五九六年サンテット島に上陸し、サルソン王エセルベルトの妃ベルサを介し、修道の効許を得。翌年王自ら洗禮を領し、國人無く基督教に歸す。後彼はカンタベリーの大監督に補せらる。六〇七年に歿す。

アウガスチン 又は **アウグスチヌス** 聖 Augustine, St. of Hippo, Augustinus, Aurelius 人名 三五四—四三〇。

【略傳】北亞弗利加のカルタゴの近傍なる塔加斯特に生る。父は土官にして異教の信徒なりしも、母はモニカ(Monica)と稱する熱心なる基督信徒にして、アウガスチンの誕生に當りては、母の熱心なる祈禱に感ぜられ、生れ出でしにてカルタゴに送り、三年の間高等にて教育を受けしが、當時ローマの書を讀みて深く感激を受けるのみならず、又哲學の研究を始めしが、其文体の美に滿たざるものあるを以て中絶にして之を廢せり。それより彼はマニ教に入り、凡そ十年の間(三七三—八三)其門に入りしが、其教説の淺薄なるを、其教徒の不品行なるを見て之に滿足する能はず、一時懷疑に陥りしが、後新プラトン派の哲學を信ずるに至れり。當時長に流行せる哲學より、十六歳の少年にして既に社會の惡風に感染し、十九歳にして庶子を産む、其親迫の要の年少にして婚期尚早きを惜み、更に他の妻を娶へ、其悔改むる時迄其聞話を抑止せり。母モニカは是等の有様を見て深く之を憂へ、常に涙を流して彼の爲めに祈りしが、ある日夢に彼女を慰めて「涙の子は決して亡ぶることなし」と云ふ。アウガスチンは既に教育を受け了りて、カルタゴの學生は長たる規律にして教師の命令を奉ぜざりしがゆへ、彼は大に困難し、母の意に背きて窃に羅馬に赴き、此處にても哲學を教授せしが、羅馬の學生に授業料を納めずして逃げ去る風ありしがゆへ、彼は爲めに生活の困難を感ずるに至れり。偶々ミラノに於て哲學の教授を求るものあり、羅馬の知事シマカスはアウガスチンの才能を知り、彼を知事の紹介狀を携へ、其一子を伴ひ、ミラノに往けり。是れ彼が三十一歳の時にして、母モニカも亞弗利加より彼の跡を追ふてミラノに來れり。當時ミラノの監督はアム

ブロスなりしが、アウガスチンはアムブロスの說教を聞き、深く感動し、是より次第に信仰に進みしが、又當時東方諸國に行はれたりし隱遁主義の事を聞き、世上の名譽利益を棄て、一身を神に獻げ、神と交通するは無上の幸福也と思惟するに至り、頻りに冥想に耽りしが、一日庭園に出で祈禱せる際、隣家の少女が唱取りて誦めと歌ふ聲を聞き、是れ神が我に答を與へ給ふ者也と信じ、直に家に入りて聖書を開きしが、偶々羅馬書十三章十二節以下の聖句を發見し、全然一身を神に獻ずるの決心をなし(三八六、十二月)教授の職を辭し、其一子及び二三の親友を伴ひ靜閑の地に退きて道を學び、翌年復活祭の夕(三八七、四月廿五日)洗禮を受けり。時に彼齢三十三歳。後亞弗利加に歸りしが、其途中母モニカは喜を以て永眠せり。彼既に一身を神に獻げ、其財産を施し、其郷里に於て隱遁主義の生活を勧めたりしが、ヒッポーの監督ヴァルリウス、彼の名聲を聞き、彼を聘げて其補助者となせり。彼は於是三九一年授手禮を領して長老となり、四年の後ヴァルリウス死去せるを以て、其後繼者として監督に選ばれ、死に至るまで三十五年間其職に在り。彼は之が爲めに、其誓て志したりし隱遁主義の生活を充分に實行することは能はざりしが、神の奢侈を避け、僧侶を自己と共に住ましめ、來客を歓待し、其財産を衆僧侶と共に使用する等、努めて其主義と同一の生活を爲せり。且彼は其海欧浪不義なる交通を斷ちしのみならず、當時靜の國の爲めに陶身の生活を送り、再び五誓を宣するを勧りき。當時教會内には神學上の異論あり。殊にマニ教、ドナチス派、ペラギウス教の說は其勢力頗る盛なりしを以て、アウガスチンは書を著はして此等の異端と戰へり。然れ共彼の著書の中最も有名にして且最も興味あるは、其『懺悔』(Confessions)と『神の都城』(City of God)也。『懺悔』は彼が三十四歳に至る迄の生活を最も誠過、正直に記したるものにして、最も信遵すべき自傳也。『神の都城』は、羅馬滅亡するも基督教會は滅亡せざるを論じて、當時エロームの如く『羅馬滅亡せば誰か安全ならん』と云ひて悲痛せる者多かりしがごとく、之を慰めたる也。アウガスチンの晩年に及びて、ヴァンダル人(Vandals)と稱する野蛮人、西班牙より北亞弗利加に來襲し、遂に之を滅したりしが、彼はヒッポーの未だ陥ちざるに先ちて死去せり。彼は基督教會教義の發達に於て、最も重要なる地位を占む。ルーテル、カルヴィンの知きも、其罪惡及び神の惡恵の教義に於ては、全くアウガスチンに負へり。然れ共羅馬教會の說理、例之教育、修説、洗禮に依り等に關する羅馬教會の教義は、直接若くは間接にアウガスチンより來れり。彼は說教家にして、能辯に非ざりしが、務めて其說教に注意を加へ、且可成平易の言語を用ゐて、普通人の利益を謀れり。彼は舊に希臘語を解するのみにて、希伯來語に通ぜず、其學識を以てすればエロームに如かざりしが、深く聖書の靈的意義を解すると諸師父に慰れり。要するに彼は學識より天才を以て優り、且眞理に忠實にして高潔なる精神を有すること、未だ彼の知きものあるを聞かず。彼は許多の缺點を有せるに拘らず、まさに『ローマ教ストチンの神學』アウガスチンは理論的方面より宗教を研究せり。是れ彼が神學の特色也。故に彼は三位一體論、基督論より罪ある人間論に進を置けり。

(一)三位一體論 ニカヤの三一說と異り、彼は子及び聖靈の次位說を放棄し、而して父神の惟一なる保存せり。彼曰く『神の三位には時間又は場所の點に於て區別ありと思ふべからず、此三者は同等にして且共に永遠也』。又萬物の造られたるは、或物は父に依り、或物は子に依り、或物は聖靈に依るに非ず、萬物悉く三位者の共造主として有する也。人の救はるゝも、獨り父に依り、又は子に依り、又は聖靈に依るに非ず、唯父子聖靈なる惟一の神に依りて救はる也と。彼の三一說の他の特色は、三一の偶な人の性質の中に見るとなる得べしと爲したる事にして、彼は此像を供給する人間性質の要素を名りて存在、智識、愛(又は意志)となし、又は記憶、智力、意志となる以て父の像にして父が自身を知るの知識を客觀的となしたる像也となし、而して聖靈は父と子の交親の紐にして其相互の愛の證也となせる教義を別説せり。又彼が『神の各位は全能也、されど三の全能者あり』と云ふに非ず、唯惟一の全能者あるのみ』と云へるは、一方に神の三位が共存して且に全き神性を有することを主張し、他方に神の惟一を主張せる『アメチシアン信條』の基礎を造れり。

(二)基督論 基督は神と人との間の仲保者也。而して彼は『神にして而して人』(God-man)なれ共、『神人』(God-man)にに非ず。何となれば『アウガスチンの說に據れば、神と人との完全なる結合は、何れか一方の性質を失ふに非ざれば爲し得べからざれば也。彼れ謂へらく、神人兩性は基督に在りて獨立せり、其人性は出來得るだけ神性を取得したれ共、之がため其人性を放棄したるに非ず、由來神性は人性の中に完全に出現すること能はざれば、『道』の完全な

る顯現は不可能の事也と。彼の基督に關する思想はレオの說及びカルケドンの信條と略同じ。

(三)罪惡の教義　アウガスチンの生涯に於る道德的煩悶と、其教條上の經驗とは、彼をして人の全く腐敗して道德力なきこと、故に主として神の恩寵に依らざる可らざる事を深く感ぜしめたり。而して當時ペラギウス說起り、極端なる個人主義(インヂヴイデユアリズム)を採り、人類の自然力を賴み、人は自身の働に依りて救を得べしとの說を主張せしかば、アウガスチンは之に反して起り、人類合一主義(ソリダリテー、オフ、レース)に基き、人を微力なる者とし全く神の恩惠に依て救はるべしと說けり。彼の說に依ればアダムは發達せざる小兒の如き心意を有したりしに非ず、寧ろ有力なる心意及び道德性を有し、高尚なる智惠及び積極的神聖の性情を具へたりき。素より彼の神聖は神力以外に獨立したる者に非ざりしが、神を愛し其律法を守らんとする眞心よりの衝動を含める積極的神聖なりき。之と共に彼は又高尚なる自由を與へられたりき。アダムにして若し此卓絕なる特權を利用したらんには、必ず罪惡と死とを免るゝを得たりしならん。然るに彼の愛は次第に最上不變の善より離れ、自己(セルフ)に牽かるゝに至り、從て純眞無瑕なりし精神漸く弱りて遂に誘惑者の試に堪えず死罪を犯すに至れり。於是其罪に相應せる結果は彼の上に降り、肉體と靈魂と共に死の宣告を受け、知此して彼は死すべき者となり、本性の調和は敗れ、肉は靈と戰ひ、人間固有の賦性は制す可らざるに至り、意志は束縛せられ、自由は唯罪を犯すのみの自由となり、彼は自己の力のみにては罪を犯さゞるを得ざるに至れり。而して墮落せるアダムの上に來れる死、腐敗、罪惡及び道德的無能性は同一の力を以て其子孫に遺傳し、人類は凡て生れ乍らにして不從順なる者となれり。是れ即ちアダムと其子孫の間に合一(ソリダリテー)あるに依る。換言すれば人類は凡て原始の犯罪者即ちアダムの中に在りて罪を犯したり、故に人は又生れ乍らにして刑罰を受くべき者也。アウガスチンは如此人類の道德力を殆ど皆無に歸したるを以て、論理上神の恩惠を以て人類救拯の單一なる原因と爲さゞるを得ざるに至れり。

(四)贖罪論　アウガスチンに依れば、神の恩惠は人の意志及び知力に新なる方向を與へ給ふ活動に存す。贖罪とは惡魔の羈絆、權力及び罪惡と死より救ふの謂也。彼の見に從へば人類は罪惡を犯すことに依りて惡魔の權力に委ねられたり。基督は惡魔に代價を拂ひ、人をして刑罰より免かれしめ、又意志と知力の無能より救ふ也。故に曰く『人類は惡魔が負債者として執へたる者なるが、基督即ち惡魔が負債なきに殺したる者を信ずるに依り自由となるを得べし』と。彼は基督を呼で『大なる祭司長にして自ら害で身を神に捧げたり』と稱し、又『其死に依て罪惡を抹殺するを得べし、是れ彼の死したるは己の罪惡の爲めに非ざれば也』と云へり。然れ共基督の犧牲其物は直ちに人間に對する神の本來の意向を變化せるに非ず、何となれば神は初めより人類を愛すれば也。故に彼曰く『我等が神と和睦せりといふは、神が是迄惡みし者を愛するに至りしといふの意に非ず。神は是迄既に我等を愛せしも、我等は罪惡の爲めに其敵たりしが、基督に依りて我等神と和睦せし也。神は驚くべき方法に依りて、我等を惡む時だも尙我等を愛せり』と。彼は又基督贖罪の道德力に二個の要素あるを說けり。即ち一は神の愛、他は神の謙遜にして、前者に就ては『基督の此世に來れる大目的は、人をして神が如何に人を愛するかを知らしめ、而して又初めより我等を愛せし神の愛に感激して、我等も亦之を愛するに至らしめ、又我等の隣となりて基督の命令及び模範に從て隣人を愛するに至らしめんため也』と云ひ、後者に就ては『惡魔は傲慢に依て人を死に至らしめたるが如く、基督は謙遜に依りて人を生に導けり』と云へり。

(五)預定說　アウガスチンは、生得の人間は道德上全く無力也との說を採用したりしが故に、救はるゝ者と救はれざる者とあるの事實は、唯神の意志選擇に訴へてのみ初めて解釋するを得べしと云ふに至れり。彼の說に從へば、アダムの墮落せる性質を繼承せし者は、自ら信仰を働かし、又は善行を爲すの力なければ、救を得るは全然神の力に依る。一個人が新心を受くるは神の恩惠の働は全く單力的にして、此點迄は人は單に受働的也。又人は神と共働する力なければ、抵抗する力も亦あることなし。『全能の神は如何に邪惡にして信仰に反對する者と雖も、其人の意志をして信仰に向はしむるを得る也』而して神は救はんとする者を救ひ、滅ぼさんとする者を滅す也。然らば神は如何なる標準に據りて永遠より救はるべき者を定めたりや、此はアウガスチンの答ふる能はざる處にして、彼は此點に關し『余は如何なる答を爲すべきやを知らずと白狀する也』と云へり。然れ共彼の意見に依れば、選まるゝ者と棄てらるゝ者とある理由は明白にして、彼は神の恩惠と應報とを兩乍ら顯はさんには、此兩種の運命あるを以て必要也と思惟せり。故に曰く『萬人もし皆一樣の運命を得ば、此兩者顯はるゝを能はず、もし萬人正義の宣告の下に刑罰を受けんとするか、救贖の恩惠誰に依てか顯はれん、もし又萬人悉く暗より光に遷されんとするか、應報の嚴速に顯はるゝ時勿るべし』と。

彼の說に依れば新生は選擇の確實なる證據に非ず、人新に生れて神の家族中に導かるゝも尙選まれざる者の中に在ることあり。眞實に預定せられたる者は、單に新生の恩惠に與るのみならず、又忍耐の恩賜にも與からざるべからずと云へり。又彼の意見に依れば、選まるゝ者の數は、選まれざる者に比すれば少し。何が故に神は多數を滅して少數の人のみを選むやに關しては、アウガスチンの辯論せざる處なれ共、彼等の如何なる運命より救はれたる者なるやを明示するに依て大に感謝と愛の念を興起せしめんとするに在りと論じたるが如し。又彼は神の惡の盃は人をして避くべからざる刑罰に至らしむるも、人はアダムに於て罪を犯したれば、辯解すべき處なし、人は一として神に要求する權利なし、神は假令人の救はれざるを欲し給ふ共、神に於ては不正に非ず、唯神は欲し給ふに依て人は救はるゝを得る也と云へり。

(六)新生及び稱義の教義　アウガスチンの時代に在ては、新生とは洗禮の恩惠と同一也とせられたれば、嫁に罪の赦といふ意味に用ゐられたり。道德上改心の意味も全く除外せられたるに非ざれ共、唯最も狹き意味に於てのみ之を用ゐたり。アウガスチンの所謂新生なる語も、罪の赦の外含む處の意義は改心の端緒に過ぎず。彼の說に從へば稱義とは單に赦罪の意義に非ず、一個人の總じて正となり義となる所以、換言すれば成聖也とするが如し。彼曰く『神が罪人を義とすとは、單に其罪惡を赦すの意に非ず、之に愛を與へ、恩寵に依て惡を離れて善を爲さしむるの意也』と。彼の此定義は拉丁教會一般の標準となれり。

(七)信仰論　アウガスチンは或場合には信仰を廣き意義に用ゐ『信仰とは考察する處を承認するの外ならず』と云ひたれ共、福音的の信仰即ち人を義とする所の信仰は、克己を含み愛を含まざる可らずとの事を論ぜり、彼曰く『基督に於て希望を有し、又基督を愛する者こそ實に基督を信仰する者也、希望なく愛なくして尙信仰を有すといふは、單に基督のあるを信ずる者にして、基督を信ずる者に非ず』と。彼の信仰論に於て特異とすべきは、信仰を以て知識の前項となしたる事にして、彼は『我等領解せん爲めに先づ信仰す、信仰は先にして領解は後也、信仰は知識に至るの階段にして、領解は信仰の報酬也』と云へり。又彼は信仰を以て神の恩惠に依賴する根源となし、之を呼で新約の下に神の救の恩惠を來らす道也と稱せり。彼曰く『行爲の法に依ては、神は我等に言ひ給へり、我が汝に命ずる處を爲せと、然れ共信仰の法に依ては、我等は神に言ふ也、汝の命ずる處を我等に與へよ』と。彼は又人が神より受くる報酬と云ふよりは寧ろ自由の恩賜と云ふべしと云へり。即ち曰く『吾人は吾人の善行其物も亦神の恩賜也と思はざるべからず、故に之に依て永生の報を得たればとて、單に恩寵に向て恩寵を與へられたるに過ぎず』と。

(八)教會論　アウガスチンは眞の教會として有効なる證は、其聖公會なると其使徒の關係を有することに在りと爲せり。而して彼は斯く定義を下したる教會に加はるを以て救に必要也と爲せり。彼曰く『此教會以外の者は誰なりとも今は聖靈を受けず』と。然れ共彼は人もし止むを得ざる事情あり、公教會を求むるも其洗禮を受くる能はざることあらんに、彼もし心に公教徒の如き平和を有しなば、救を得べしと云へり。

(九)聖禮典論　アウガスチンは何人も洗禮なくしては神に達することを能はずと論じ、悔改と信仰に依て洗禮を受くれば、過去の罪惡に由りて受くべき刑罰を免るべしと云へり。然れ共彼は洗禮に依りて原罪の罪科の分子を除くを得るも、性質の腐敗は除くことを得べからずと云へり。晩餐に就てはアウガスチンは化體說を斥け、比喩的解釋を取り左の如く云へり『主はパンが己の體を代表するが故に、此は我體也と云ふを躊躇し給はざりき』『吾人が神聖犯すべからずと爲すは、自然の產物なるパンと葡萄酒に非ず、唯是れ表號として眞正に聖められたる者を指す也』と。

(十)倫理說　アウガスチンは地上の物を以て比較的價値なき者也となしたりしが故に、自然、科學、財產、婚姻、家族、國家等の問題にはあまり重を置かず、修道院的生活を以て敬虔の最上至極となせり。然れ共此は彼の倫理說の一方面にして、彼の說に從へば神の地上に於る活動は、悉く教會に集注す、此世に屬する道德的範圍は唯々教會に依りてのみ純化せられざる可らず。即ち家族の基礎なる婚姻は聖典の一にして、教會に依り聖別せられざる可らず、財產を教會に寄捨するは功德也、科學は教會之を正路に導かざる可らず、國家は教會の意志と一致する場合にのみ道德的價値を有する也。彼は道德的人格、良心の自由、罪惡の意義、救拯の確實等に重を置かず、從て此等の教義には缺點少からざれ共、基督教の遂に全世界を征服すべきことを高調し、全世界の王國が遂に基督の王國となる時あるべきを豫想し、其曉に建設せらるべき永遠の都市は異教的羅馬に非ずして『神の都』新エルサレムなりと云へり。

【參考書】マルマン『拉丁基督教』モゾレー『アウガ

スチン教』カニンガハム『アウガスチン』ハルナック『教義史』(一八九八)及び『寺院主義とアウガスチンの信仰告白』(一九〇一)ハッタフェルド『聖アウガスチン』(一八九八)レーニー『公教會』(一九〇二)マッケーブ『聖アウガスチン及び彼の時代』(一九〇二)

アウガスチン僧尼 Augustinian Monks and Nuns. 【僧派名】 アウガスチンは其受洗後數名の朋友と共に、純然たる獨的生活を送らんとの目的を以て、メガストの近傍に退き、三八八年一の結社を造りしが、ヒッポーの監督ヴァレリウスの寄財あり、之に次ぎてアウガスチン自ら監督となりしより、忽ち隆盛となりたり。初めは福音書を以て其唯一の規則となせしが、四二三年以後はアウガスチンの書翰第百九及び第二百十一を以てヒッポーの尼の規則となせり。所謂アウガスチンの規則と稱する者は、何時、何處より起りしや明ならざれ共、アウガスチン自己の手より出でたる者に非ざるは明也。之と同一なる結社屬々以太利に起りしが、一二四四年法王インノーセント四世此等の者を集めて合同せしめ、之にアウガスチンの規則を與へたり。後亞歴山四世此合同を更に堅固ならしめんためヨランのランフランク、セブタラを僧派の長となし、以太利、佛蘭西、西班牙及び蘭迚に各其區長を置きたり。爾後此僧派は長足の進歩をなし、第十五世紀の初には四十二區、二千の僧院、三萬の僧を有するに至れり。一五六七年法王ピウス五世之に托鉢僧派と同一の班位及び特權を與へたり。アウガスチン尼の結社はベルベチュアに依りてヒッポーに立てられたるものなり。一一七七年亞歴山三世ウインナにアウガスチン尼院を建つ。皇帝フレデリック一世の皇女ユリヤ其最初の尼院長となる。有名なるトルノイの尼院は一四二四年ヒエル、デ、シャンピオンの建設せる所也。此僧派の隆盛に赴くに從ひ漸次廣取の空氣を入せしがため、之が反動として、第十四世紀の終に至り、イリセト及びカルボナリアに、第十五世紀の初に至り、ベラウズ及びロンバルデーに、獨立の結社起れり。又葡萄牙に於てはトマス、エ、イエス(一五八二死)根本的改革をなし、其結果遂に是アウガスチンの結社なる者起り、一六二二年に至りグレゴリー十五世之を承認せり。彼等は一時日本、フィリッピン諸島及びペリウ等に蔓延せり。西班牙には各州共に僧道者の退隠すべき廬室を備へたりき。ルーテルとの關係に於て有名なるヨハン、ストウピッは一五一五年獨逸に於て此僧派の長となりしが、新教起りてより以來漸次此派に衰頽せり。第十九世紀に至りて此派の僧院は漸次俗化し來りしが、其終に至り以太利及び佛蘭西には尚凡そ百個の僧院を有したりき。

アウグスチヌ ヨハン クリスチアン ウィルヘルム Augusti, Johann Christian Wilhelm 【人名】 一七七二―一八四一 獨逸の神學者。エナ大學にて神學を學び、同大學の東洋文學教授、後ブレスロウ、續てボン大學の神學教授となる。著書頗る多く『舊約聖書總論』等は其最も著名なる者也。

アウグスブルグの講和 The Peace of Augsburg. 【事蹟】 一五五五年九月アウグスブルグに於て會議を開き、獨逸宗教上の問題を一定せり。之を名けてアウグスブルグの講和と稱す。決議は各邦の宗教は其領主の選擇に一任するとのことにして、飽ち領主にして羅馬教を信奉するを許さず、故に新教徒は其邦を去りて、領主の新教を奉ずる邦に往かざるを得ず。又領主にして新教を信奉すれば、其邦に於ては羅馬教の禮拜を禁ずるを以て、羅馬教徒は其邦を去りて領主の羅馬教を奉ずる邦に往かざるを得ず。故に彼等には信教の自由なく唯邦を選ぶの自由あるのみ。カルル五世治生の事業は獨逸帝國の宗教を一致せしむるに在りしが、此の如く其企圖は全然失敗に終れり。

アウグスブルグの信仰告白 Confession of Augsburg. 【信條】 一五三〇年一月皇帝カルル五世、土耳其との戰爭及び宗教上の異同等に關する重要なる問題を議するの目的を以て、同年四月アウグスブルグに會議を召集するの詔を發す。於是以革派の領袖サキゾニー選擇侯は先づルーテル、メランクトン等の神學者をトルガウに召集し、アウグスブルグの會議に提出すべき新教徒の信仰告白を準備せしむ。メランクトンの之を起草し、ルーテルの之に同意し、サキゾニーの選擇侯を初め、ブランデンブルグ侯、ルーネブルグ公、ヘッセ伯、アンハルト公及びメレンベルグ并にロイトリンゲンの長官等之に調印し、之を以て新教徒の信仰告白として皇帝の前に提出すべしとの事を定む。初め皇帝は不正式に此書を提出すべしとのことを命ぜしが、選擇侯は之を否み、自ら之を携へ會議の席に於て之を朗讀すべしとの事を答ふ。皇帝は又拉丁語を以て之を朗讀すべんことを求めしが、選擇侯は『臣等は今獨逸の地に在り』と答へて之を承認せず。遂に六月廿五日會議の席に於てパイエル博士をして皇帝の前に進み、會衆の領解し得るやう徐々明白に、獨逸語を以て之を朗讀せしめ、會衆の上に大なる感動を與へたり。此告白は甲乙二部に分れ、甲の部は新教徒の信仰を示し、乙の部に羅馬教の誤謬を指摘せり。今之を略叙すれば、第一、三位一体の神の事、第二、アダムより來れる原罪の事、第三、基督の事、第四、信仰を以て基督の名を信ずるに由り義とせらるゝ事、第五、福音を宣傳し禮典を執行すべき事、第六、信仰を以て善行をなすべき事、第七、教會は福音を宣傳し禮典を執行する聖徒の團体なる事、第八、道を識き禮典を執行する牧師が假令惡人たりとも、聖語と禮典との價値には變更なき事、第九、洗禮の必要と、小兒の洗禮を可とする事、第十、聖晩餐を守る者は基督の身体と肉とを受くるものなる事、第十一、罪惡を懺悔するとを可とする事、第十二、罪惡を悔改して赦免を得べき事、第十三、信仰を以て禮典を守る者は、之に由りて惡惡を蒙るべき事、第十四、神の召を蒙らざる者に教會に於て道を教へ又禮典を執行すべからざる事、第十五、教會の益となる儀式及び祭典等を守るを可とするも、別に必要とせざる事、第十六、基督教徒が、社會を益するの風習に從ひ、政治に干與し、或は官吏となり、或に兵士となり、或は結婚することは可也とする事、第十七、最後の審判と終局の刑罰の事、第十八、國家の法律を守るだけの力ありとも、聖靈の助力なき時は神の正義を實行する能はざる事、第十九、罪の原因は神に遡ぼすると雖も、第二十、信仰と善行とは互に相關係する事、第廿一、聖徒を尊敬するとも彼等に向ひ祈願を捧げ、或は信頼すべからざる事是也。又羅馬教の誤謬として指摘せられたる箇條は、第一、一般の信徒に聖晩餐の葡萄酒を許さゞる事、第二、僧侶の結婚を禁ずる事、第三、聖禮に關する羅馬教の風習、殊に聖禮を執行するを以て犧牲を獻ずるとなし、罪惡の赦免を求むる事、第四、懺悔に關する誤謬、殊に自己の罪惡を悉く教師の前に告白せざれば赦免を受くる能はずとなす事、第五、教會の儀式を極端に重ずる事是也。此信仰告白は教會の會議に依りて決せられたる者に非ざれ共、能く新教徒の主義を表白せるを以て、今日に至るまでルーテル派諸教會には之を以て其信仰箇條となせり。於是皇帝は羅馬教徒に命じ、新教徒の告白に對する辯駁書を作らしむ。然れ共其初めに成りたる者は全く無効也とて皇帝之を排斥せり。於是薄く同年九月に至りて、其辯駁書會議の席にて朗讀せらる。會員の多數は之を以て新教徒の敗北也とし、羅馬教の説に服從すべしとの事を命じたれ共、新教徒は業より之に從はず。メランクトンは信仰告白の辯護論を著し、皇帝に獻じたれ共其受納する所とならず、故に之を獨逸語及び拉丁語にて出版せり。(次の條を見よ)

アウグスブルグ信仰告白辯証論 Apology of the Augsburg Confession. 【書名】 アウグスブルグ信仰告白に對する辯駁として、羅馬教徒一五三〇年九月三日の會議に朗讀せる者に對し、メランクトンの起草せる者にして、九月廿二日の會議に提出したれ共受納せられず。翌日メランクトンはアウグスブルグを去り、蔵中稿を改め獨逸譯と共に翌年四月之を出版せり。之を信仰告白に比すれば七倍の大にして、其文体及び學識の點に於て大に之に優れり。信仰告白の註釋として今日尚大なる價値を有す。

アウストラリア Australia. 【地名】 南緯十度廿九分より百五十三度十六分に至る同に横はれる一大島にして、タスマニア、ニューギニアの諸島を其中に含有す。廣袤二、九七二、九〇六方哩、人口三、七七一、七一五人(一九〇一調)其東岸及び西岸は第十七世紀の初め和蘭人に依りて發見せらる。一七七〇年カプテン、クック初めて東岸を探檢し、第十九世紀の初に至りて全海岸の概略初めて明白となれり。一七八八年ボタニー灣に凡そ一千人移住す、其多くは罪人也。然れ共一八一三年迄は之より内地に入ることは能はずと思惟せられたり。一八三五年ボートヒリップ建設せられ、一八三六年南アウストラリア建設せらる。アイアは更に内地を探檢し、トーレンス及びアイアの諸湖を發見す。一八四〇年後は西海岸荒涼の地千二百哩を横斷しスリン殖民地に達す。スチュアルトは一八四四―五年大陸の殆ど中心に達し、一八六二年更に大陸を西に横ぎり、一八七二年其途上に潛ふて電線を設設せり。アウストラリアの人口は一八三五年凡そ八萬人にして、其過半はニューサウスウエールス及びタスマニアに住せり。一八五〇年四十万に達し、一八六一年ヴィクトリア及びニューサウスウエールスに金鑛の發見せられたるため、人口殆ど三倍に達せり。一八五〇年西アウストラリアを除き各殖民地に責任政府を建設するの許可を得、一八九三年西アウストラリアも亦責任政府を許可せらる。アウストラリアの原人種は近年漸次死滅に赴きつゝあり。彼等の人種的起源に就ては學者の説一ならざれ共、一般に黑人と同一種族なるべしと推測せらる。無智蒙昧にして永久の住居なく、樹枝及び草を以て一時を凌ぐ茅舎を造り此處に住す。彼等は男女共裸体にして、耕作せず、牧畜を爲さず、通常樹根、野菜、魚、鳥、野獣等を食す。一夫多妻にして殆ど道德と稱する者なきが如し。原人種の數凡そ二萬二千(一九〇一調)彼等は種々の奇怪なる風俗を有す。而して彼等の中には割禮を行ふ者ありと云ふ。

墺太利（アウストリア）　Austria.　地名　北は普魯西及びサキッニー、南は伊太利、西は瑞西及びバヽリヤ、東は匈牙利に接する帝國にして、廣袤一一五、九〇三方哩、人口二六、一五〇、七〇八人（一九〇〇調）歐羅巴諸州の中獨太利匈牙利の如く、人種、言語及び宗教の異れる者を包有せる國他に之れあるとなし。墺太利には獨逸人、スラヴォニアン人、猶太人、伊太利人、アルバニア人、アルメニア人其他各種の種族あり。宗教は羅馬教人口の五分四を有し、希臘教は人口の一割、正統派希臘教二分、新教各派二分、猶太教五分の割也。

アウフクレールウング　Aufklärung.　學派名　第十八世紀獨逸に起りたる倡理派にして Aufklärung は英語の Illumination の義也。英國に起りたる自然神説と同じく、眞理は明白也との説に基き、天啓の無用を論じ、理性を以て終極の憑據となす。レッシング、ライマルヌ、ストラウスは其最も著名なる代表者也。『啓發時代』及『自然神説』の條參照）

アウベルレン　カルル　アウグスト　Auberlen, Karl August　人名　一八二四—六四　獨逸神學者。チュビンゲン大學にて神學を學び、同大學の神學教授、後バゼル大學の神學教授となる（一八五一）其著『但以耳及び默示錄の預言』Der Prophet Daniel und die Offenbarung Johannis（一八五四）は約書の歷史哲學を論じたる者にして、英語にも飜譯せられ、大なる感化を與へたり。

アウボルン神學校　Auburn Theological Seminary.　學校名　米國長老教會に關する神學校にして、紐育州アウボルン市に在り、一八一九年セチバの中會に依りて創立せられ、翌年四月紐育州廳の許可を得たり。創立の際アウボルン市民多額の寄金を寄附せしを以て地を此處に卜したる也。敷地凡そ十エーカル、市の成長に從ひ其中心を占むるに至れり。校堂、書籍館、寄宿舍等數回に增、改築せられ、美觀を極む。設立以來卒業生を出すこと二千人以上に上る。

アウボルンの告白　Auburn Declaration.　信條　一八三七年五月開きたる米國長老派の總會は、ウチカ、ゼチバ、セチシー及びウェスタン、レザーブの中會内に在る教會は、形狀に於ても事實に於ても長老教會に關する者に非ずとの決議を通過せり。於是此等中會内の長老の代表者は同年八月アウボルンに集會し、其點檢に非ざるとを辯駁し、其有する神學上の意見を公表せり。此會議に列せる者有名なる神學者及び信徒を合せて二百人、アウボルン神學校教授ジェームス、リチャルド博士之が議長たり。總會に於て新派教會の有する異端として數へられたる十六箇條に對する辯明書を作りて、之を總會に提出せり。是れ即ちアウボルンの告白と稱する者也。先づ第一は總會が新派教會を以て『神は罪惡の存在なる喜び給ふと雖も、人の道德的動作力を破壞するに非されば之を止むること能はざる也』と主張せりといふに對し、アウボルンの告白は之を否みて『善人は神が罪惡の世に入るを許容し給ひしは、人類の道德的自由を破壞するに非されば之を防ぐ能はざりしが爲めに非ず、彼が善人に警示し給はざる賢くして且憲ある理由あるに由ることを信ず』と云ひ、其他の箇條も悉くリヌスト、ミステル信條の意義と一致せる十六箇條に於て新派教會の有する異端として數へられたるを以て、所謂新派教會のウェストミンステル信條に忠實なる者証明せしのみならず、此等の教會をして、其教義及び其教會政治に於て最も純粹なる長老主義を把持せしめたりき、

アウリファベル　ヨハン　Aurifaber, Johann　人名　一五一九—七五　獨逸の神學者。ルーテルの助手となり、其著書の出版者として廣く知らる。

アウレリアン　Aurelian.　人名　羅馬帝（二七〇—七五）基督教會の古き傳説は、彼を以て十大迫害の中第九回の迫害を遂行したるものとなせ共、史家ユウセビウスの云ふ處に依れば、彼は其晩年に及び基督教に對する態度を變化せんとして、未だ之を行はざるに先ちて死せり。彼は深く羅馬の古宗教を奉ぜしか、基督教はガルリヌス以來公認せられたり。彼が之を迫害したりといふは誤傳也。

アウレリウス　マルクス　『マルクス、アウレリウス』の條を見よ。

アヴィタス　アルシマス　エクヂディアス　Avitus, Alcimus Ecdidius　人名　四九九年正統派及びアリウス派神學者の會議に於て、正統派の主なる代表者として出席し、バルガンヂヤ王ガンドボルドの嗣子シウスモンド正統派に歸し、其臣民亦多く王に倣へり。ウィーナの監督となり、五二五年歿す。

アカイコ　Achaicus (*Ἀχαϊκός*).　人名　スパノ及びボルトナトと共にエペソに往き、哥林多教會の事を詩りて使徒保羅を慰めたりし人也（哥前十六の十七）。

アカヤ　Achaia.　地名　元來希臘の南部コリント灣に接する地方の名稱なりしが、羅馬の希臘を征服するや之を以て希臘全土の名稱となせり。紀

元前一四六年マケドニアに併せられしが、同二七年分れて一州となり、羅馬の議政官に依りて任命せられたる代官の支配を受け、首府をコリントに置けり（徒十八の十二）紀元一五年テベリア帝マケドニア及びムシアをアカヤに併せ、之を羅馬副總督の管轄に移せしが、四五年クラウデア帝再び之を代官の支配に移せり。後又アカヤは分れて一州となりしが、羅馬帝國滅亡の曉まで代官之を支配せり。通常希臘語の、*Ἑλλάς* は羅馬のアカヤに適するを以て、徒廿の二には此意義を以てヘリス（希臘）にはギリシヤとあり）と記せり。然れ共『希臘』なる名目は廣き意味なれば、アカヤ及びマケドニアを包有す。而して此二者は隣々密接の關係を有する一双の者として記さる（徒十九の廿一、羅十五の廿六等）アカヤの二大市コリント及びアセンスに猶太の殖民地及び會堂ありし事、及びアカヤに基督教會の總設せられし事に就ては、徒十七の十七、十八の四、七、廿七、哥前二の一を見よ。

アカン　Achan.　人名　ユダの支派に屬するゼラの子也。ヨシュアエリコを陷れし時、アカン其掠獲物を竊みエホバの幕に背きしかば、イスラエル全軍、神の怒に觸れ、アイを攻めし時敗北して廿六人陣沒せり。探査の結果アカンの犯罪發覺し、彼は其竊みたるものを天幕に藏したりし事を告白せり。於是彼を捕へ、其掠獲物、其家族、家畜、天幕及び一切の所有を取りてアコルの谷に曳き行き、石にて彼を擊ち殺し、又家族なも石にて擊ち殺し、火を以て之を焚けり、事詳に約書亞記七章に記さる。

アガサ　Agatha.（アガテ）　人名　第三世紀に出でたるシヽリアンの婦人にして、其極めて固穩なる試煉の中に眞潔を全ふしたりし故を以て、聖列に加入せらる。羅馬教會にては、二月五日を以て其祝祭を行ふ。

アガソー　Agatho.　人名　シヽリアンの僧にして、六七八—六八一羅馬法王の位に在り。

贖罪日（アガソー）　Atonement.　行事　此猶太人の大斷食日に關することは、主として利十六及び廿三の廿六—廿二に記さるれ共、民廿九の七—十一及び出埃及の十にも減る綱目附加せらる。此等の章句の記されたる時日は思ふに相異れ共、何れも祭司古典に屬する者なるべし。此贖罪の日は毎年七月十日に之を守り、猶太人民が禮拜のために集まる『聚會』也。此日には何の工なも爲すべからず、又其日には身なやますべし。何の工にても爲す者あり、又其日の中より滅ぼさるべしと規定せらる。『身をなやま す』とは飲食を斷つの意也。（利廿三の廿六—廿二）又此日特別に神に獻ぐべき者は、通常獻ぐべき犧牲の外、罪祭には少き牡牛一匹、牡羊一匹、常祭の燕羊七匹、素祭には麥粉に油を混和せる者を用ゐ、又牡山羊一匹を罪祭に獻ぐべしとのことを規定せらる（民廿九の七—十一）此日の祭儀に關しては利十六之を詳記す。即ち祭司長は先づ自己のために、犢の牡匹を罪祭のために取り牡羊を燔祭のために取り、其身を洗ひて聖き衣を纏ひ、次に會衆の中より牡山羊二匹を罪祭のために取り、牡羊一匹を燔祭のために取り、進みて其二の山羊を集會の幕の門にてエホバの前に設き、一はエホバのため、一はアザゼルのために籤を擲く也。斯くて彼は己れ及び家族のために贖み置きたる牡牛を獻げ、火壇なる取り、壇より起れる火なを之に盛て、又爾手に細末の馨にしき香を盛て、之を携へて至聖所に入り、香を其火にくべ香の煙の雲をして律法の上なる贖罪所を蓋はしむ。彼又其牡牛の血を取り指を以て之を贖罪所の東面に灑ぎ、又指を以て其血を贖罪所の前に七回灑ぐ。斯くして彼は己れ及び家族のための贖罪をなし終りたる後、庭に歸り、民のためなる其罪祭の山羊を牽り、其血を携へて再び至聖所に入り、牡牛の血なを以て爲し、如く其血なを以てなし、之を贖罪所の上と前とに灑ぐ。斯くして至聖所のため贖をなし終りたる後、彼は又聖所に出で祭り、其處にて之と均しき儀式を以て贖をなす。此儀式の詳細は利十六之を記さず、出三十の十に罪祭の血なを以て其壇の角のために贖をなすべしとのみ記さる。思ふに是れ後人の挿入なるべし。祭司長が聖所に於て贖をなせる間は、何人も幕屋の内に居るべからず。彼れ庭に出で來れる時、牡牛の血と山羊の血なを取りて壇の周圍の角にぬけ、又指を以て七回其血を其上に灑ぎ、斯くして聖所のための贖罪をなす。後生ける山羊を牽き來り、祭司長其兩手を其上に按き、イスラエル人の惡事と罪を惡て其上に書び祖にして之を山羊の頭に載せ、遠く流ける人の手を以てアザゼルのために之を野に送る。是れ其山羊諸惡を人なき地に負ひ往かんため也。斯くして祭司長は再び聖所に入り其身を水に洗ぎ、祭司の常服をつけ出でゝ自己の燔祭と民の燔祭とを獻げ、自己と民とのために贖罪をなす。又罪祭の牲の脂を壇の上に焚き、殘餘の皮と肉とは凡て營外に携へ出して之を焼く。而して之を焼きたる者及びやの山羊をアザゼルに送りし者は、衣服を洗ひ、水を身に浴ぎて後に營に入るを許されず。以上は祭司古典に記載せる贖罪の日に關する記事なるが、尋も此儀式の起源は何時の頃なりしや。吾人は骨因以前贖

罪の日の守られたるを聞かず、又此日に關しイスラエルの早き法典(申命記)の中に何事の記されたるをも見ず。之に反して俘囚以後、罪及び贖罪に關する儀式的方面の國民の生活及び思想の上に重要の地位を占むるに至りて、此日を守ることに關する規定の設けられたるを見る。宗教上の事として斷食をなすことは、希伯來國民の早くより實行せし處なれ共、年々一定の日に於て斷食したりしは、エルサレム滅亡の時なる以て初めとなす(亞七の三—五、八の十九)復雖なる犧牲の血の儀式は思ふに比較的後世の事に屬す。而して罪惡の公然の告白(利十六の廿二)に類似せることは、俘囚以後の文籍に之を發見すべし(歸九、尼一の四—十一、九の三、申九の四—廿)且祭司的預言者エゼキエルは其俘囚より來れる民のために律法を作り、大体の目的に於ては贖罪の日と均しく、而して一層簡易なる儀式を制定せり(結四〇—四八)即ち彼は一月一日及び七月一日を以て少き牡牛を罪祭として殺し、聖所を潔むるの制を立てたり。著し贖罪の日にして其時既に存在したりしとせば、彼は特に此の如き制を立てざりしなるべし。去れば利十六の法典が、エゼキエルの定めたる簡易なる儀式の後に至りて發達したる者なるとは殆ど疑なし。ミシナには、第二神殿の時に於て守られたる此日の儀式を詳細に記載せり。此日の儀式の表する象的眞理は晩代の猶太人も之を領解したりしが如し。例之フィロンは之を以て肉体的放縱を制限せんがため設けられたる訓練也と云ひ、終に救拯的誘惑の最も盛なる時に方りて之を守らしむるが如きは最も其當を得たる者也と云へり。又ミシナには此日の儀式は悔改に伴ふに非ざれば無効也との、こと故へたり。希伯來書の記者は此日に於ける祭司長の事業を以て、基督の贖罪の事業に比し、猶太の祭司長は犧牲の血を携へて年に一回聖聖所に入りて永遠の贖を為すに反して一たび聖所に入りて永遠の贖を為し、人をして活神に奉事せんがために、死の行を去らしめて其心を潔めたりと論ぜり(九の六以下)。

アガペタス Agapetus. 【人名】二人の羅馬法王此名を有す。(一) アガペタス一世　羅馬の人にして、五三五年法王となる。羅馬帝ユスチニヤヌス、東ゴツスの王テオダトスを攻めんとす。法王ゴツス王の爲めにコンスタンチノプルに往きて饒恕し、事なきを得たり。然れ共法王の眞の目的は、コンスタンチノプルの教長アンチマス、皇后テオドラ及び宮廷多數の官人等の有する異端を攻擊せんとするに在り。遂にアンチマスを廢し、メンナスを立てゝ其目的を達せり。然れ共農ならずして同遇に客死せり。(二) アガペタス二世　羅馬の人にして、九四六—五五法王の位に在り。伯國四に於てアルトルド及びユーゴー大監督職を爭ひし時、左支右絀其歩正を判決すること能はず。又獨逸帝オット一世を羅馬に招きしも、其至るに及び、其敵を惡ませり。

アガペタス ペン　ジョセフ Akiba, Ben Joseph 【人名】第二世紀の猶太ラビにして、スミルナに生れ、ジャファ學校の教師なりしが、傳教主リアに生れ、ジャファ學校の教師なりしが、傳教主バルコクバの叛逆に與せしを以て、一三五年羅馬人の爲めに殺さる。『ラビ、エリエゼルのミシナ』を著せり。(一) アガペタス一世　羅馬の人にして、五三五年法王となる。羅馬帝ユスチニヤヌス、東ゴツスの王テオダトスを攻めんとす。法王ゴツス王の爲めにコンスタンチノプルに往きて饒恕し、事なきを得たり。然れ共法王の眞の目的は、コンスタンチノプルの教長アンチマス、皇后テオドラ及び宮廷多數の官人等の有する異端を攻擊せんとするに在り。遂にアンチマスを廢し、メンナスを立てゝ其目的を達せり。然れ共農ならずして同遇に客死せり。(二) アガペタス二世　羅馬の人にして、九四六—五五法王の位に在り。伯國四に於てアルトルド及びユーゴー大監督職を爭ひし時、左支右絀其歩正を判決すること能はず。又獨逸帝オット一世を羅馬に招きしも、其至るに及び、其敵を惡ませり。

アキバ ベン　ジョセフ Akiba, Ben Joseph 【人名】第二世紀の猶太ラビにして、スミルナに生れ、ジャファ學校の教師なりしが、傳教主リアに生れ、ジャファ學校の教師なりしが、傳教主バルコクバの叛逆に與せしを以て、一三五年羅馬人の爲めに殺さる。『ラビ、エリエゼルのミシナ』を著せり。

アクアヴィヴア クラウヂアス Aquaviva, Claudius 【人名】一五四三—一六一五　イスイト社に入り、其長となる(一五八〇)彼の長たりし間多くの困難ありしに拘らず大に隆盛に赴けり。

アクイナス トマス 『トマス』の條を見よ。

惡鬼又は惡魔 (アクマ) Demon, Devil (*daimon*) 又は *daimonion*) 【羅名】希伯來人は俘囚以前より基督教時代に至る迄、一般に形貫的及び道德的の害惡を以て人格を備へたる惡靈の所爲也となしたりしが、此思想は基督及び其使徒等の上にも大なる勢力を有し、教會師父等の中にも重要なる部分を占めたり。此思想の淵源は遠く原始のセミチック人種に在り。原始の人民は自然の勢力の中に人力の打ち勝ち難き者あるを見、其人類に災禍を與ふる者を以て惡靈に歸したり。モハメット時代の迷信比類人も『ウンニ』(Jinni) と稱する惡靈荒野に住せりと信じ、モハメット自身も之と均しき信仰を有し、之に種々の名目を與へたり。

『舊約』に於る惡鬼の思想】預言者以賽亞がエドムの運命に關する神託を語り、其城塞の荒廢せる有樣を指さて『壯山羊其友を呼び蝙蝠も亦宿りて此處を安所とせん』(廿四の十四)とある『蝙蝠』は女性的惡鬼の稱にして、當時惡鬼は野獸と共に荒野に住する者也と信ぜられたり。利未記十七の七に依れば當時『惡鬼』に犧牲を供せし風ありしを知るべし。又利未記十六の八以下に記されたるアザゼルに關する奇異なる儀式は、惡靈に關する信仰の深く當時の人心に刻まれたりしを証すべし。愛に所謂アザゼルはエホバに敵する惡靈也。又或種の動物は惡鬼の力を有すとの信仰は俘囚以前比較的早き時代より存在したりしこと疑なし。エバが蛇に誘惑されたりとの記事(創三の一—十九)之を証す。民廿二の廿二—卅四も同一の文籍より來りたる者にして又同一の信仰を示す。但しエバが蛇に誘惑されたりとの物語は、蛇の中に惡靈

宿れりとの意に非ず、蛇は即ち惡靈其物也。紀元前七世紀の末及びた世紀の大半々占めたる猶太人の俘囚は、彼等の惡鬼の思想に大變化を來せり。ジェド(ユデ) なる希伯來語の起りしは思ふに此時代に在り。此語雷約に二回(申卅二の十七、詩百六の卅七)見ゆ。然し近西利亞巴比倫語のシドゥ (sidu) より信り來れる者なるべし。然れ共其思想は同じからず、雷約に在りては此語異邦人の神の意義に用ゐられたり。邪譯聖書には『鬼』と譯せり。

『晩代猶太教の思想】異邦人の神を以て惡鬼となすの思想は希臘時代に至りて一般に確信せられ、且希臘思想の感化を受けて希伯來人の天使論及び惡魔論に一大數進を為し、超絶的神と現象世界との間に、中間的存在物を置くに至り、從て惡鬼を以て神と人との間に立つ者也との思想を生ずるに至れり。猶太人の思想に依れば、惡鬼の首領をサタンといふ。彼等は社會又は詐を爲して人を誘惑するの機を待てり。其最も誘惑に惑り易き者は病人、月經期間に在る婦人、新郎、新婚、癲癇に洗める人、夜中外出する小兒等也と爲す。又彼等は蛇、驢馬、牡牛、蚊等の如き動物を以て殊に惡鬼と結合する者也と信ぜり。彼等の信仰に依れば、惡鬼に勝ち得べき者は獨り神のみにして、祭司長數祀六の廿四を讀む時は神の守護其會衆に與へらるべく、撒加利亞三の二の言を唱へ、若しくは每食『契約の鹽』(利二の十三)を嘗むる時は惡魔除けとなるべく、又神は敬虔なる者に守護の天使を用し給ふべしと信じたりき。ヨセファスは此等の惡鬼を以て死せる惡人の靈也となし、『エノク書』は之を以て墜落せる天使也とせり。且後者に依れば惡魔は人の身体を襲ひ、之を虐擊せしめ、其他樣々の方法を以て人類を苦め、大審判の時に至るべしとエへり。

『新約全書の思想】惡鬼はサタンの下に在りて諸處を漂泊す(太九の卅四、十二の廿四、可三の廿二、路十一の十五)。惡鬼は人に入り、又力ある人の權腦に依りて人より逐び出さる。惡鬼は又他の動物に入ることもあり、かダラの豚群に入りしが如し。惡鬼に憑かれる狀態は種々に記さる。或は惑溺に住みたりとエ、或は水なき處に住みたりといふ。然れ共惡鬼の憑けるは主として病者にして、啞、聾、盲目及び癲癇に惡鬼の力の顯現也と想像せらる。彼得の岳母の熱病も亦惡鬼の所爲也と想像せらる。耶蘇は人々の惡鬼に憑かれ苦めるを見て之を憐れみ、其權威ある人格の力を以て之を逐出したり。彼の之を逐出すや魔術的方法を用ひず、單に言語(可一の廿五、九の廿五)又は按手に依りて(路十三の十三)之を逐出せり。而して彼は之を神の指に依りて爲したる也(路十一の廿、興へたり(太十二の廿八)。耶蘇は又惡鬼を逐出す力を其弟子に與へたり(太十の一)而して彼等は單に耶蘇の名に依りて之を成就せり(可十六の十七、徒三の六)。保羅も亦惡鬼に關する當時の思想を有したりしが如し。即ち哥林多前書十の十九、廿に、異邦人の神に獻ずる犧牲は惡鬼に獻ずる也と云へるは亞歷山の猶太教より來れる也。(『サタン』の條を見よ)。

アクタ マルチラム 及び **アクタ サンクトラム** Acta Martyrum and Acta Sanctorum. 【書名】基督教會初代よりの傳記を集めたる書にして、前者は殉教者のみの傳記、後者は殉教者ならざるも寛己と勇敢とを以て基督教のために盡したる聖徒の傳記也。

アクトン ジョン　エメリッヒ　エドワルド　ダルベルグ Acton, John Emerich Edward Dalberg-Acton, Lord 【人名】一八三四—一九〇二　チーブルスに生る。バルデンハムの男爵として貴族に列せられ、後ケンブリッヂ大學近代歷史學教授に任ぜらる。博學なる歷史家にして、溫和なる羅馬教徒として、英國宗教思想の上に甚深の感化を與へたり。『一八七〇年戰史』『ヴォルセー及び顧魂八世の隱遁』『獨逸の歷史學派』は其重なる著書也。

アクラ Aquila. 【人名】第二世紀の初ポンタスに生れ、猶太教に改宗し、舊約全書を希臘語に飜譯せり。オリゲンの『ヘキサプラ』第三欄に載せたるものは是也。其譯語如字的也との故を以て猶太人に敬重せらる。彼の一生に關しては詳ならず、タルガムの著者オンケロスと同一人也となすものあり。

アクラ ヨハンネス カスパル Aquila, Johannes Kaspar 【人名】一四八八—一五六〇　獨逸の人。ウィッテンベルヒ及びライプチッヒに神學を學ぶ。ルーテルの徒となり、其舊約聖書の飜譯を助く。熱心當時の神學上の爭論に與りしが、其著作は論文及び小冊子のみなりき。

アクラ プリスキラ Aquila and Priscilla. 【人名】此夫婦は保羅を助りて福音を宣傳せしめ、又アポロに神の道を教へたり(徒十八の二、十八、廿六)アクラはポントに生れたる猶太人にして、クロヂヤス帝が猶太人を羅馬より追放せし時逐はれて哥林多に來り(五二年)此處にて保羅に逢ひ其教を受けて基督教に歸し、保羅と共にエペソに來り、其家にて宗教上の集會を開けり(哥前十六の十九、後又羅馬に來りて同樣の集會を開き(羅十六の三、五)ニロ帝迫害の時エペソに往きしが其後の消息を知らず。

アグネス 聖 (セント) Agnes, St. 【人名】羅馬の處

女にして、其死の年月詳ならざれ共、三〇四年以後ならざるべし。極めて困難なる試惑の中に、其貞潔を全ふし、ダイオシアン迫害の時に、殉教者の死を遂げたりと傳へらる。羅馬教會にては一月廿一日を以て其祝祭を行ふ。

アグノエタイ Agnoetae (Ἀγνοηταί). 〔宗派名〕 希臘語 ἀγνοέω (『無知なる』の義) より出で、二個の派に名けらる。(一) 第四世紀の末ユーノキウス(Eunomius)及びテオフロニウス(Theophronius)に依り創設せられ、神の全能は現在に限られ、過去は唯記臆に依りて之を知り、將來は唯占考に依りて之を知るのみ也と主張す。(二) 更に重要なるは第六世紀に起れるものにして、アレキサンドリアの執事テミスチウス(Themistius)の創立せるものとす。彼等は基督は其人性に依れば吾人と同じく有限にして其智識も全からずと主張し、基督が『其日其時を知る者は唯我父のみ也、天に在る使者も子も誰も知る者なし』と云ひ(可十三の卅二)又ラザロの屍に就き彼が『爾曹何處に彼を置きしや』(約十一の卅四)と問ひしを以て證となす。此説は第八世紀に至りアダプシヨニスト派又之を主張したり。

アグリコラ ヨハン Agricola, Johann 〔人名〕 一四九二—一五六六 シユニッテル又はマグスタル、イスレビアスとも云ふ。一五二五年ルーテル彼をフランクフォルトに遣し、新教會を建設せしむ。一五二六—三六年其郷里アイスルベンにて説教す。一五三六年ウイッテンベルグ大學の教授となりしが、ルーテル及びメランクトンに反對せる故を以て辞職す。一五四〇年ヨアキム二世の宮廷牧師となる。獨逸の部を編輯し、又許多の神學書を著作せり。

アグリッパ Agrippa. 〔人名〕 (一) ヘロデ、アグリッパ一世 ヘロデ大王の孫にしてクラウデオと共に羅馬にて教育せらる。三八年カリピ及びルサニヤの分封君となり、四〇年に至り更にガリラヤ、ペリアを加封せられ、其翌年更にサマリア、ユダヤを加封せられ、パレスチナ全州の王となり、務めて猶太人の甘心を買はんとせり。雅各を殺し彼得を獄に繋ぎしも此目的に外ならず(徒十二の一)彼がタロとシドンの使臣を引見せる際蟲の爲めに噬まれて絶息せりとの次第(徒十二の廿三)はヨセファスも亦之を記せり。(二) ヘロデ、アグリッパ二世 一世の子也。保羅が祭司長アナニアに訴へられし時其捕へられたる次第を演述せしは此人の前なりき(徒廿六の一以下)彼は遂に猶太人に愛せらるゝを得ず、ベスパシアンの時猶太人の羅馬に背くや彼は羅馬人に黨し、チタスの爲めに戰ひてエルサレムを陷れたり。

アケラオ Archelaus. 〔人名〕 ヘロデ大王の子にして母はサマリヤのマルタケ。長兄ヘロデアンテパスと共に羅馬に於て人となり、父の死後其遺言に從ひユダヤ及びサマリヤの分封君となる(前四)紀元六年即ち其治世の第十年に至り治下の民其暴虐を羅馬帝アウグストに訴ふ。此に於て彼れ廢せられてヴインナに追放せられ、其處にて死す。ヨセファスの傳ふる所に依れば、彼はエリコに壯麗なる宮殿を築き、又アケライスと稱する村落を建てたり。彼れ初めマリアムネと婚せしが、後之を去りて其兄弟アレキサンデルの先妻グラピラを娶れり。

アコスタ ガブリエル ド Acosta, Gabriel d 〔人名〕 一五九四—一六四〇 葡萄牙の貴族にして、羅馬教の家に人となりしが、廿五歳の時基督教の教理に疑を抱き、遂に猶太教に改宗したり。後猶太教にも滿足せず、書を著して之が教に反對せしかば、會堂より逐出され、獄に繋がれしが、七年の後會堂にて鞭うたれ、足にて踏まれたる後赦されたり。

アサ Asa. 〔人名〕 ユダの王。父はアビヤム。四十一年位にあり(前九五五—九一四)。王上十五の八—二十四。前半は宗教上政治上共に活動的にして神の祝福を受けたり。後半亦成功せざるにあらざれども神の祝福を受けず。王は偶像禮拜を絶滅せんとし、又祖母マアカを退黜す。又王は平和を維持せんと勉め、好んで諸邑を建て、軍隊を訓練したり。百万の兵三百の兵車を以てユダに攻め入りしエチオピアの王ゼラをマレシャに敗りしことは、猶太の歷史に於て著名なり(代下十四)王は預言者アザリヤの言に從ひて民を勸め、大なる饗宴を設けて神と契約を新にせり(代下十五)此のエホバ禮拜の復興は、聖都に來る者を多からしめしかば、イスラエルの王バアシヤは其國境にマラの邑を建てゝ之を塞ぎたり。此に於てアサはスリアの王ベンハダテと同盟す。ベンハダテ、イスラエルの王を攻めてマラ邑を建てしめず(王上十五の十六—廿二、代下十六の一—六)かくて宗教敗壞せるを以て預言者ハナニ大に王を戒しむ。後王痛風を病んで死す。王は其の病の爲めに苦しめる時も、其平生に於ても人に依頼する心強かりき。

アシタロテ Ashtoreth (עשתרת). 〔靈名〕 フェニキヤ人の女神にして、聖書にはシドン人の神也とあれ共(王上十一の五)ペリシテ人も之を拜し、サウルの鎧甲を其廟に置けり(撒前卅一の十)。以色列人の中にも早くより之を拜したるものありしと見ゆ(士二の十三、十の六、撒前七の三、四、十二の十)ソロモンは之をエルサレムに輸入し、崇邸を築きて之を拜せり(王上十一の五)然れ共アシタロテの起りたるはフェニキヤに非ず。アッスリヤ及び巴比倫に於て既に久しくイシタルの名を以て拜せられたり。アッスリヤ王アッスルナクルパはニナベのイシタルに其病の平癒を祈りて『諸神の女王、宇宙の女神にして祈を聞き給ふ神』と云ひ、シャルマネセル二世、セナケリブ等は之をアッスル神の次に置きて、之に戰勝を祈れり。又アッスルバニパルの圖書館に傳へられたる神話的物語に依れば、イシタルは生命及び豐饒の女神也。而してイシタルは又金星と同一視せらる。舊約に顯はれたる處に依りてのみフェニキヤのアシタロテに關する思想を推定するを能はずと雖も、其他の表示に依りて之を考ふるに、彼は主として男女性慾の女神たらざるを得ず。希臘人及びフェニキヤ人はアシタロテを以てアフロデトと同一視せり。而して此アフロデトの禮拜は最も不潔なる性質を有する者也。又エレミヤの時代に於て婦人等が犠牲を献げたりし『天后』(耶七の十八、四十四の十七—十九)なる者は、思ふにアッスリヤのイシタル若くはフェニキヤのアシタロテに外ならざるべし。而してアフロデトも亦天后と稱せらる。アフロデトが男女性慾の神なるは論を要せず。果して然らばアシタロテも亦男女性慾の神たるを疑なし。アシタロテは又或る地方に於ては月神として顯はさる。是れバアルを以て日神となすにより、其配偶としてアシタロテを月神となす者なるべし。

アシラ Asherah. (אשרה). 〔靈名〕 フェニキヤ及びカナンの女神也(出卅四の十三)アシラの名は、フェニキヤの碑銘及びテルエルアマルナに記されれ共、此等の碑銘の文字は他の意義にも解釋するを得べければ、之に依て其存在を証し難し。舊約には士三の七に『斯くイスラエルの子孫エホバの前に惡を行ひ、己の神なるエホバを忘れてバアリム及びアシラに事へたり』とあり。其外王上十五の十三、十八の十九、王下廿一の七、廿三の四、六、七にもアシラの名を記したれ共、今日多くの學者は希伯來歷史の編輯者がアシラなる語を誤解し、アシタロテと混交せし者なるべしと云ふ。故にアシラはアシタロテと同一の神なりや、又は別種のものなりや明ならず。

アジア 聖書の Asia 〔地名〕 今日小亞細亞と稱する大半島の西部を包含せる羅馬領をアジアと稱せり。此中にはミシア、リデア、カリア及びフルギアの大部分、ドリア、イオニア及びイオリアの諸邑、レスボス、サモス及びパトモスの諸島を包有せり。此地方をアジアと稱するは羅馬政府より初まる。希臘の地理學者は一般にアジアなる名目を以て全大陸の稱となせしが、紀元前第二世紀の羅馬人は、ペルガメニヤンの諸王を稱して『アジアの諸王』と云ひ、一三三年アタラス三世之を羅馬に讓與してより、之を一州となしてアジアと稱するに至れり。羅馬帝國初代の歷史家、地理學者は大概、アジアなる名目を以て、羅馬領を指すが、然らざれば全大陸の稱也となせり。紀元二八五年の頃カリア、フルギア、リデア及びミシアの之れより分離してより、アジアは大に其廣義を減じ、單に海岸の市邑及びメアンデル、カイステル、ヘルムス、カイカスの低地を指すに至れり。新約に所謂アジアは羅馬の所領也(徒二の九を除く)初めペルガモは其首府なりしが、後エペソ最も重要の地となりて、羅馬の代官は此處に住せり。アジアは羅馬領諸州の中に在りて最も殷富にして人口多く、且文化の進みたる土地なりしを以て、保羅及びバルナバは其第一傳道旅行の際、其諸大市に於て説教せり。第二の傳道旅行に於ても保羅はアジアの諸市邑に於て傳道せんとせしが、聖靈に依りて之を止められたりしが故に(徒十六の六)之を第三の傳道旅行に讓れり。即ち彼はエペソに二年と三ヶ月留まりしが、此間『アジアに住める者悉く主の道を聞けり』(九の十)是れ一は多くの人々通商其他の目的を以て、エペソに來りしと、又一は保羅が其同勞者を州内の重なる市邑に遣はして傳道せしめしに由る。羅馬がアジアを領せざりし以前は此名目は全大陸の稱なりき。故に舊約經外書は此意義に於て此名稱を使用せり。

アストラック ジアン Astruc, Jean 〔人名〕 一六八四—一七六六 佛國の醫者、神學者。醫學を學び、トウラス大學、續てモントペリール大學解剖學教授となり、後巴里に來り、醫學教授となり、且ルイ十五世の侍醫となる。又聖書批評に於て造詣深く『推測説』(Conjectures)を著し(匿名、一七五三ブルッセルスに於て出版せるが如く裝ひ、實は巴里に於て出版す)モーセが創世記を著すに方り、エホバ古典及びエロヒム古典を用ゐたりとのことを論じ、モーセ五經分解的批評の端を開けり。

アスベリー フランシス Asbury, Francis 〔人名〕 一七四五—一八一六 英國スタッフォルドシアのハンズワルスに生る。一七六七年メソヂスト派の巡回説教者となり、同年ウヱスレーの命に依り、宣教師となりて亞米利加に往き、翌年ウヱスレーの補助者となり、米國に在る凡てのメソヂスト教會及び其説教者を監督するの權を與へられしが、一年にしてトマス、ランキンに代はれり。然るにランキンに反對するものありて、彼は之が爲め英

國に歸りしを以て、アスベリー再び其地位に復せり。獨立戰爭の起るに及び、初めは多少の迫害を蒙りしが、後の米國の愛國者たるを明さなりし後は、困難なくして傳道するを得たり。戰爭終りて後米國メソヂスト教會は、ウェスレーの計畫に從ひ、每教會を離れて獨立教會となり、アスベリーは選ばれて最初の監督となり、一七八四年十二月廿五日コーク博士より按手禮を受けたり。彼は義務の遂に當りては何物をも恐れず、身軀强壯にして疲勞を知らず、說教に於て常に活動せり。幼時完全なる教育を受くる能はざりしを以て、常に時間を節し短學恥らず、知此して大なる智識を得たり。彼は又組織の才に富み、且先見の明を有せり。監督ウェーンスの著せる『アスベリー傳』に依れば、彼は一萬六千五百回の說教(即ち一日少くも一回)を爲し、廿七萬哩(一年六千哩の割)を旅行し、二百廿四年會の議長となり、四千人以上の說教者に按手禮を授けたりしと云ふ。彼の初めて米國に來りし時は、メソヂスト教會は僅に十人の說教者と、六百人の會員を有するに過ぎざりしが、彼が六十五年の働をなして後歿せし時には、六百九十五人の說教者と廿一萬四千餘人の會員を有するに至れり。彼は終生娶らず、其年俸は僅に六十四弗に過ぎざりき。

アスモダイ Asmodeus (Heb.). 【靈名】 蓋し彼猶古代宗教の惡鬼アスマ(邪慾の義)と同一にして、希伯來人其名を借りてゼヤマド(滅すの義)と結べる也。『ソロモンの智慧』十八の廿五に『オレスチン』と云ひ、默示錄には之を人血易髮を有する『底なき坑の使者』『獸の王』と稱せり。希臘語聖書にアスモダイのみを記せるは『トビット』(三の八、十七)のみにして、其處には之を惡鬼とし、アラメイック及び希伯來譯には之を『シェディーム』の王とせり。『トビット』の物語に依れば、アスモダイ、ラファエルの女サラを愛し(六の十四)サラと結婚せるや直ちに之を殺せること七人に及べり(三の八)トビット又曾てラファエルを訪ひサラを見て深く之を愛し、之を娶らんと欲せしかどもアスモダイを恐れたり。ラファエル彼の友に授けてトビットに現はれ、魚の心臟と肝臟とを燒して惡魔を拂ふ術を傳ふ。アスモダイ此に於て逃れて埃及に往きしが、ラファエル之を追ふて捕へて鎖に繫げり(八の三)是に於てトビット、サラを娶り平和幸福の生涯を送れり『ヨベディム』は『猶太書』に記せる惡鬼にして、剛性を有し、且死を免れざる者と爲せり、且彼等はアスモダイを以て惡鬼の王となし、リヽスを女王也となせり。タルムドの傳へたる物語に依れば、ノアなして酒に醉はしめたるはアスモダイにして、彼は又ソロモンにサタルの所在を教へ、後ソロモンを脅し、自らサロモンに授けて其位に卽き、通常歷史がソロモンの手に成れりと爲せる官職を造りたりと云へり。

アスモニアンス 『マッカビース』の條を見よ。

アゼンス Athens. 『希臘』の條を見よ。

アタナシウス Athanasius. 【人名】 二九八—三七三 正統派の父。埃及アレキサンドリアに生る。父母共に基督信徒也。希臘の哲學及び詩歌を學び、青年の時監督アレキサンデルの書記となり、後執事に舉げられ、監督に伴ふてニカヤの會議に列席し、其決議を爲さしむるに與りて大に力あり。アレキサンデル死するに及び、其後を繼ぎてアレキサンドリアの監督に選ばれ(三二八)會衆の多數は之を歡迎せしが、アリウスの徒は大に彼に反對し、彼を亡ぼさば勝利を得べしと思惟し、百方彼を陷れんとせり。即ち彼は殺人罪を犯し、且魔術を行ひたりとの廉を以て訟へられしが、彼は之に對し、其被害者と稱せらるゝ者を議會の前に示して、其證の虛高なる事を證せり。次に彼の反對者は、彼がアレキサンドリアより穀物をコンスタンチノープルに輸入する事を禁制する企をなしたりと譯ひて、コンスタンチン帝の憤怒を起さしめたり。此の如く彼は其反對者の爲めに讒譯、迫害せられ、前後五回追放の命を蒙れり。即ち第一回は、コンスタンチン帝の爲めにガリヤに追はれ、第二回は、コンスタンシアス帝の爲めに羅馬に追はれ、第三回は、同帝の爲めに追はれて埃及の曠野に隱れ、第四回はヴァリアン帝の爲めに追はれて再び曠野に逃れ、第五回はヴァレンス帝の爲めに追はれて、父の墳墓の中に潛み、前後二十年間流離の中に歲月を送れり。彼に驅幹短小なりしかども、堅忍不拔の精神を有し、終始其信ずる處に忠なりき。是れ彼の偉大なる點にして、彼は實に心より子の父と同質(homoiousion)なること、即ち基督の神なることを信じ、此信仰は信徒たる者が神と一体となるに、最も必要なる條件として强固に守るべきものとし、熱誠を以て此信仰の爲めに戰ひ、諸方の教會が、皇帝の壓制に依てニカヤの決議を放棄せし時も、獨一人は此決議を固守せり。故に『アタナシウスに世界に向き、世界はアタナシウスに背けり』との諺あり。アレキサンドリアの信徒は深く彼を敬愛し、彼が追放の中に在りし時も、彼等は自己の牧師として其書翰を歡迎し、喜んで其教を聞きたりき。彼の

著書は基督教の教理に關する者、歷史的性質を帶べる者、註釋的なる者等枚擧に遑あらず。

アタナシウスの信條 (シンデウ) The Athanasian Creed. 【信條】 二部より成り、各部終るに警訓的語句を以てす。第一部(一—廿六條)は三位一体を說き、父、子、聖靈の教義を述ぶ。第二部(廿七—卅九條)は基督の化身及び其贖罪の事業を說く。三位一体の教義は鮮明なる文字を以て叙述せられ、明にアウガスチンの影響を見るべし。第二部は論爭的に述べられたるには非ざれ共、尙チストリウス及びユウチカスの基督論に對する爭論の影響を認むべし。此信條の成りたるは以上の二點に關する爭論の既に全く定まりたる時なること疑なし。之を以てアタナシウスの作也とし四教會が一般に承認したりしは、第八世紀の終にして、羅徒之を以て適當なる信條として益々廣く使用するに至れり。然れ共希臘教會に於ては、第十一世紀までは之が存在を認めず、之が存在を認むるに至りても、此信條の中には聖靈を以て父及び子より出づる者也となすが故に之を排斥して受けず。西教會に在りて初めて此信條のアタナシウスの作なるを否みし者は、ホッス(Gerhard Joh. Voss 一六四二)にして、何時頃何人に依りて作られたる者なるやは明ならざれ共、アタナシウスの作たり得べからざるとは、今日一般に承認せらる。此信條の著作的語句に關し、一八六五年英國教會內に大爭論あり、之に關する許多の文書發行せられしが、此爭論の結果此信條は第八世紀以前に存在したりし形跡なしとの事指摘せられたり。此信條の第二部はトレヴスに於て、基督の化身を論ずる說教の斷片として、第八世紀中頃の文書中より發見せられたり。アタナシウス曾てトレヴスに住したる事ありしより、此信條を以てアタナシウスの作に歸するに至りしなるべし。

アタルガチス Atargatis (Aramaic). 【靈名】 スリヤの女神。聖書には記されざれ共、經外書(マッカビース下十二の廿六)にはギリアドのカルニオンに在るアタルガチスの神殿の事を記せり。テロスにて發見せられたる古錄には、一般に此女神をアダド(Adad)と連結し、又之をアフロデトアタルガチスと稱せり。メレスナに於る此女神の重なる聖地はアシケロン也。又ヒエラポリスにも其有名なる廟あり。ヒエラポリスの廟に在る神殿は魚にして、アシケロンに在るものは女身魚尾也。希臘譯の物語に依れば、アタルガチス(又はDerceto)は少女にして、其廟に參詣のため來れる少年に墜墓し、之に依りて一女を生めり。然れ共自ら恥ぢてアシケロン(又はヒエラポリス)の水中に投じ、化して魚となれり。其生子はアフロデトの神殿に於て成長し、有名なるアッスリヤ女王セミラミスとなれりと云ふ。魚又は女身魚尾の神話と云ひ、化して魚となれりと云ふ等、此女神と水との間に密接の關係あるを見れば、思ふに此女神は水の生產力を擬人化したる者なるべし。

アダブシヨニズム 猶子說 Adoptionism or Adoptionists. 【學派名】 第八世紀シャーレマン帝の時西班牙に起り、後佛蘭西に傳延せる異端說にして、トレドーの大監督エリパンダス(Elipandus)之を唱道し、ウルゲルの監督フェリックス(Urgel)最も熱心に之を擁護せり。其說に曰く、基督は其神性よりすれば神の實子也、故に彼は『我と父とは一也』と云へり。然れ共、人性よりすれば彼は單に神の猶子なるに過ぎず、故に彼は『父は我よりも大也』と云へりと。此說はネストリウスの說と類似せり。思ふに其敬虔の感化に依りて生じたるものならん。シャーレマンは數回宗教會議を召集して之が處分を議し、之を異端として排斥せり。アルクイン(Alcuin)はフェリックスの强敵にして、紀元七九九年アイラチャペルに開きたる宗教會議に於て、兩人對論の結果フェリックスの敗北に歸し、愛に全く爭論を終り、此學派は其後未だ幾何ならざるに消滅したり。

アダム Adam. 【人名】 (一)名稱 此語本來は普通名詞にして人間(創二の五)或は稀に女に對して男(二の廿二)又は集合名詞として人類(一の廿六)を意味す。此の語の本源は種々の意を有す。即ち(イ)作る、產出するの意あり。故に此の語源に從へば、人は造られたる者、產出せられたる者、被造物の意あり。又造る者產出する者とも云ふを得べし。(ロ)赤くの意あり。希伯來語にては屬此意義に用ひらる。創廿五の三十に於けるエドムの如し。又アラビア、エチオピア語も此意義を有す。言語學の研究によれば、此名稱は赤色人種の中より出でたるが如し。ゲセニウスの言ふ所に依れば、埃及の石碑には常に人を赤色の者として示したりしといふ。(ハ)エチオピア詩の語原にては、快よき又は立派なるの意。又(ニ)アラビヤ語にては親む、親居するの意を含めり。又此の語は Adamah (土)より出で、人は地より生れたるもの也との意を表するならんとの說あり。創二の七に、人は Adamah の塵より造らるとあるは、記者が斯る考を有したるとを示すと雖も、此語本來の意義には非ず。人若くは人類としてのアダムなる名詞は、フェニキヤ語サビヤン語の中には用ゐられざるも、セミチック語の譯譯には之を用ゐたり。エドムは思ふにアダムの轉訛なるが如

し。

(二) 普通名詞及び固有名詞としてのアダム　創世記に記されたるアダムなる語は、普通名詞にも用ゐらる。例之天地創造に關する祭司的傳説には(一の一—二の四)此語を人類の意義にて男女兩性に用ゐたれ共、人類の系圖を示すに當りては(五の一—四)之を固有名詞として用ゐたり。又エホバ記者は創造及び墮落を記すに方りては、此語を『人』の意義に用ゐたれ共、四の廿五には冠詞を省き固有名詞として用ゐたり　去れば人類の始祖として記されたるアダムは元始の人の意なるべし。

(三)アダムに關する物語　祭司的傳説(創一の一—二の四)は他の生物と同じく單に人類の創造を記述せしのみにして、或る特殊の個人に就ては何事をも云はず。然れ共人類創造の場合に於ては最初の夫婦たる男女兩性の區別を記したり。又他の祭司的記錄より出でたりと思はるゝ創五の一—三に於ては、舊約聖書中に記載せられたる國民の祖先、殊にイスラエル人の祖先たる個人としてのアダムは、創世記一章に記されたるものと同一なりとなす。人は動物と同じく第六日に於て、凡ての物の後に造られたれ共、其創造は他の物の創造と異り、神の像にかたどられ、神の特別の祝福を受け、地上一切の權を與へられたりとして記されたり。エホバ記者の物語には(創二の四—四の廿六)人は地上未だ生物のあらざりし時地の塵を以て造られ、エホバ神其鼻より生氣を噓入れ、エデンの園を守ることを命じ、善惡を知るの樹の菓の外は凡て自由に取りて食ふことを許し、動物は其伴侶日補助者として創造せられたれど、尙足らざる處あるを以て、彼の肋骨の一を取りてエバなる女を造れり。兩人共に小兒の如く無邪氣に生活せしも、エバは蛇の爲めに、アダムはエバの爲めに惑されて善惡を知るの樹の菓を食ひ、之より罪を識れり。此に於て兩人園を逐はれて詛はるゝ者となり、詛はれたる土地を耕し、勞苦して其食を得ざる可らざるに至れりとの事を記せり。

(四)物語の要義　如上二種の傳説を檢するに、人類は被造物にして造物者たる神と全く異れる者なることを示し、埃及、アッスリア、カルデア等の神話に見るが如き半神半人の神ありて人と神とを連結する者となすが如き思想なし。然れ共人類は其の性質に於て神と關係を有す。即ち神の像に造られ(祭司的傳説)エホバの生氣を噓入られたり(エホバ記者の傳説)又動物との關係をも有するは、其同日に造られたりと云ふを以て知るべし。人類は生物非生物一切萬物の主にして、創造の冠冕なり(祭司的傳説)、エホバ記者も亦動物は人類の爲めに造られ、園は其使用に委せられたりとなす。女は第二位の者、男子の下に立つ可き者なれ共、男と同一の性質を有する者として記され、又男子墮落の原因なりとなす。又一人の男の爲に一人の女を造れりといふは一夫一婦の意義を有す。罪は生得のものにあらずして外より來れることと又罪は刑罰の伴ふこと、而かも其刑罰は人類に止まらずして生物非生物にまで及ぶ者なることを示せり。

アダムエバの歴史(レキシ)　書名　The Histories of Adam and Eve.
舊約經外默示的文學中の一書。一猶太人の作なること明なれ共、何時頃の作なりや明ならず。アダム、エバがエデンの園より追放せられて後の事、即ち彼等が食を求めて困ぬしたりしこと、神の惠を得んとて難行したること、サタンが再びエバを試み、且アダムの請に依りて其墮落の次第を語ること、カイン、アベル生れたること、アダム地を耕すこと、エバアベルの死を夢みたること、セス其他の子生れたること、アダム幻象を見たること、アダム九百三十歳にして病を得、エバとセスを樂園の附近に遣りて生命の膏を求めたれ共得ず、死して葬られたることを記せり。

アダムス　サラ　フラワー　Adams, Sarah Flower　人名　一八〇五—四八　讚美歌の作者にして、『主よみもとに近づかん』(『さんびか』第二四九)の歌は、此女史の作也(一八四〇)女史の姉エリザ、フラワーも亦作歌者にして、兩女史共にフラウニンゲの友なりき。

アダムス　トマス　Adams, Thomas　人名　一六一二—一六五三に於て、ベッドフオルドシーア、バッキンハム及び倫敦に說敎せる淸敎徒説教家及び註釋者にして、生死の年月を詳にせず。彼の著作は後三卷の書に編輯出版せらる(一八六二)ソウセーは彼を稱して『淸教徒神學者中の散文的沙翁』也と云ひ、大英字彙の記者は『彼の說教は英國說敎家中の最上乘にして、其想像の豐富なるは、ジエレミー、テーラルに優り、其機智はトマス、フーラルに優る』と云へり。

アダム派　宗派名　Adamites, or Adamiani.
第二世紀の頃北亞非利加に起り、婚姻せず、衣服を纏はず、エデンの園の無邪氣なる有樣に歸らんことを主張せる一派也。第十五世紀にもボヘミヤに同一の名目の下に、同一の主義を有せる一派起り、彼等の或るものは裸体にて生活し、妻を共有せしが、フッスの徒ヂスカ之を撲滅せり。一八四八—九年墺太利にも亦同一の派起りしが、政府之を嚴禁したり。

アダルベルト　Adalbert.　人名　一〇〇〇—一〇七二　獨逸の僧侶にして、顯理三世の顧問たり、後ブレメン及びハンブルグの大監督に任ぜられ、顯理三世の崩後、幼帝顯理四世を輔佐し、獨逸帝國の實權を握れり。獨逸、英國及びスカンヂナビヤを羅馬教區より分離せしめ、北方の一大教區となさんと企てたりしかども成らず。後宮中を逐はれ、其教區内に於ても尙非難を蒙りたりき。

アダルベルト　聖(セント)　Adalbert, St.　人名
(一)英國初代の聖徒(七〇〇)にして、ウトレヒト最初の大監督也と想像せらる。(二)『普魯西亞の使徒』と稱せられ、其鄕里ブラーグの監督となる(九八二)北日耳曼及波蘭(ポーランド)の傳道事業に其一生を委せしが、普魯西亞人に說教せる際、ポメラニヤに於て殺害せらる。(九九七)。

アッスリヤ　Assyria.　地名　アッスリヤは古代の歷史に有名なる國にして、中央チグリス河の東、北緯三十五度より三十七度の間に存在せり。メソポタミヤの高原、チグリス河の西にアッスルと稱する邑あり。アッスリヤ帝國の古都にして、アッスリヤの名は之より來れり。其北境にアルメニヤカルデアの諸山あり、アルメニヤの諸山に接續す。東にザグロスの山脈あり、チグリス河其源を之に發す。ザブ河之より流出す。後アッスリヤは此等の境域を踰へて延擴し、西北はサグリス河の左源に及び、西はカブル、ベリク二流に達し、南はラダヌ、アッスル、ニチベ及びカラ(創十の十二)の諸市のみチグリスの流域に在り。サルゴンの築ける新都ドルサルキン(今のコルサバド)はニチベの北、山麓に在り。氣候は概して溫和也。

【宗教】アッスリヤの宗教は巴比倫の宗教と大同小異也。シャルマネゼル二世(前八五九—八二五)の黑方尖塔に記されたる諸神は、アスル、アヌ、ベル、エア、シン、ラマン、サマス、メロダク、ニンダル(又はニニブ)、ネルガル、ヌスク、ベリト及びイスタルにして、此目錄はアスルを除くの外巴比倫の諸神と同じ。アスルはアッスリヤの主神にして(巴比倫に此神なし)元來アヌ(天の神)と同一の者なりしなるべく、アッヌの名はアンサルなるが故に、後變じてアサル、アッスルとなり、又アスルとなりたるなるべし。而して語音國名アッスル(アスル即ち『水原』より來る)と同一なるより、諸神の王として主位を占むるに至りしなるべし。又アッスリヤ人は風神ランモンに特殊の崇敬を獻げたり。故にアッスリヤのアスル、ランモン二神は巴比倫のアヌ、ベル(空氣の神)二神と同一の地位を占む。又ニチベのイスタル及びアルベラのイスタルは戰の女神にして、キトムルのイスタルは愛の女神也。又ニンダルは狩獵の男神、ネルガルは戰の男神也。母國巴比倫に在りては祭司は常に國王よりも大なる權力を有せしが、アッスリヤに在りては、國王自ら祭司長にして、祭司は全く國王に隷屬せり。然れ共アッスリヤの國王は先づ第一に元帥にして、軍事は何事よりも重要なる地位を占めたり。國王は又判事長にして、國法の定むる所に從ひ、最も公平に凡ての訴訟案件を審判せり。而して不從順と叛亂とは最も嚴重に之を處罰し、捕虜及び罪人は國法に違反する者として最も嗜酷に取扱ひたり。

【美術及び文學】アッスリヤの建築術は母國の建築術に優りたるが如し。彼等の特色は神殿よりも寧ろ國王の宮殿を莊嚴にするに在り。國王の肖像は諸神の像の如く大なる注意と精巧とを以て製作せられたれ共、宮殿の壁を飾れる薄肉彫は、アッスリヤ美術の最も精巧を極めたる者也。アッスリヤの技術の著しく進步したるは、サルゴン及びセンナケリブの時代にして、アッスルバニパルの治世に至り完全に達したり。英國博物館には當時の美術の標本を納む。其戰爭、凱旋、狩獵に關する繪畫は最も稱讃するに堪えたり。アッスリヤ帝國の隆盛なるに從ひ征服せられたる諸國の美術、商品は流れてニチベ、カラに入り(創十の九)趣味改良の源泉となれり。文學に於てはアッスリヤ人は全く巴比倫人を摸擬し、其創作に係る者一も之れあることなし。

【古蹟の開鑿及び發見】アッスリヤの歷史は紀元前二千年の古昔に起り、ニチベの淪落に終る。此間の歷史を今日頗る精細緻密に知るを得るは、全くニチベ、カラ等の古蹟開鑿の結果也。而して此等發見の功は英人殊にアウスチン、ヘンリ、レーヤルド卿(一八九四死)及びホルモヅ、ラッサムに歸すべし。初めてニチベの古蹟を發見したるはクラウデアス、ゼームス、リセにして、彼は一八一一年を初めとして、三度モスルに往きて一通りの探撿をなしたる後、一八二〇年に至り、充分なる探撿をなし、一八三六年其結果を世に公にせり。是よりアッスリヤの研究は大に學者の注意を引き、佛人ボタは一八四三年より四五年に至るまで、ニチベの北五哩に在るコルサバドの村落を鑿開し、英人レーヤルドは古代カラの所在地ニムロド(一八四五年—四七)及び古代ニチベの所在地コウユンヂク(一八四九—五一)を鑿開せり。其結果ボタはサラゴン王(賽廿の一)の築きたるアッスリヤ最初の宮殿及び薄肉彫、古碑等を發見し(今巴理ルーベーの博物館に在り)レーヤルドは五箇以上の大宮殿を發見せり(今英國博物館に在り)此

發見に依りてアッスルバニパル王圖書館の有名なる泥碑の大部分は今日明了となるに至れり。續きて英人ラッサムはコウユンウクを(一八五一—五四)佛人ヴィクトルプラスはコルサバッドを開鑿して、更に他の發見をなしたり。次の十年間は此等の結果を公にしたるのみにして開鑿の事絶りしが、一八七三、四年に至りてウォルウ、スミッス再び開鑿に着手し、アッスルバニパルの圖書館に關せる泥碑數箇(此中に洪水及び神話に關する巴比倫の記錄あり)を發見せり。然れ共氏は不幸にして熱病に罹り、一八七五年八月アレッポーに於て歿せり。此に於てラッサム再びスミッスの事業を繼ぎ一八七七—八年に於て、ニムロドの神殿、パラリヤトの有名なる青銅門、及びアッスルバニパル圖書館の泥碑一千四百箇を發見し、更に一八七八—八一年の間に巴比倫に於て他の發見を爲せり。爾後アッスリヤに於ては組織的の開鑿をなされ共、アッスリヤの遺物は年々多少殖英國に送らる。此外アッスリヤの種々の碑、銘はアッスリヤ諸王の肖像にして、ナルエルケルブに於て發見せられたり。次はチグリス河邊の地方に於て發見せられたるアッスリヤ王の銘、及び一八八七年の末埃及のテルエルアマルナに於て發見せられたる紀元前千五百年頃の書板也。此中には象形文字を以て書かれ、埃及王パロ、アメンホテップ三世及び四世に贈られたる書翰あり。アッスリヤの銘は又カパドキヤに於ても發見せられたり。此等の銘は紀元前二千年頃の者也といふ。又數年前シリシヤとスリヤの境なるザンザルリに於てアッスリヤ王の碑發見せられたり。以上の發見及び其他鑿柔なる文書に依りてアッスリヤ帝國數百年の歷史は頗る明白に之を知るを得るに至れり。

【歷史】アッスリヤ歷史の初に關しては素より詳に之を知ることを得ずと雖も、アッスリヤ國が元來巴比倫より出でたる者なることは、其言語、宗教、文藝より明に之を知ることを得べく、蓋伯來人の傳戲も亦之を證せり(創十の十一)又アッスリヤ最古の主治者は自ら『バチシ』即ちアッスル神の祭司也と稱したりしことも明也。此等の祭司はサムシランマンの二王にして、彼等はアッスルベルニセス及びブグルアッスルなる定めたりしといふ。埃及王パロ、タハトメスに贈遺をなせしは此二王の中の一人也。一四三〇年より一〇五〇年までは父子相繼承して王となりたり。彼等の名は大抵碑銘又は文書に記さる。此時期の初には巴比倫國向ユフラト及びチグリス地方に在りて優勝の地位を占めしが、局面漸くに變化して、ランマンニラリ一世の時に至りアッスリヤは早く既に進擊的態度を取り、シャルマネセル一世(前一三〇〇)に至り、メッポタミヤの北部に在る山地を略し、西アルメニヤの內地に侵入ムスリに至れり。且彼はカラタ(創十の十二)に王都を定め、二子ベにイスタル神の聖殿を築けり。自ら『世界の王』と稱したるは彼を以て嚆矢となす。然れ共眞にアッスリヤの最初の大征服者と稱すべきは、サグラスピレセル一世にして、六度大戰役を起し、四十餘箇國を征服して初めて地中海岸に達し『世界の王』の外庭に『世界の四方の王』の稱を受け、アッスリヤ大帝國の基礎を築けり。其子アッスルベルカラ繼で王となり、都をカラタより二子ベに移す。アッスルナウルバル二世(前一〇五〇)以後國勢漸く衰へ、アッスルイルビ(前九九〇)の外此間の國王は其名さへ傳はらず。アラム人の勃興したりしは此頃の事にして、舊約ダビデの歷史は其發達の跡を反映せり(每後十の十六)イスラエル人の勢力を得たりしも亦此頃の事にして、サウル、ダビデ及びソロモンの治世に於る發達は、當時アッスリヤの衰微と著しき對照を示せり。アッスリヤ新發達の時期を開きたるはアッスルナウルバル三世(前八八四—八六〇)にして、カラタに王都を再建し、メッポタミヤを征服して其一部を略し、東、山地の諸種族を平げ、レバノン、及びフェニキヤの海岸に進みてツロ、シドン、ゲバル、アルバド等の諸邑をして朝貢せしめたり。諸種の方面に於てアッスリヤ歷史の轉機をなせるはシャルマネセル二世(前八五九—八二五)也。彼は征服せる諸國を朝貢せしむるのみを以て滿足せず、此等の諸國に代官を置き、遂にアッスリヤ帝國の所領として、直接に其支配を受くるに至るべき永久的方策を採用せり。且アッスリヤがイスラエル及びアルメニヤ帝國と初めて觸接したりしは彼の治世也。シャルマネセルの治世に於る種々の出來事は、幸にしてパラリヤト青銅門の浮肉彫、及び黑方尖塔の繪畫に依りて知ることを

得べし。聖書歷史に關係を有し最も興味あるは、紀元前八五四年シャルマネセルとハマト及び其同盟軍との間に戰はれたる戰爭に關する事にして、其傳へられたる表に依れば、此時シャルマネセルと戰へる最も有力なる者は、ダマスコのベンハダド、ハマトのイルカルリニ及びシリルのアカブ也とす。而して愛にシリルのアカブと稱するは、イスラエル王アハブに外ならず。後八四二年シャルマネセルは又スリヤを襲ひダマスコを圍み、ツロ、シドン及び『オムリの家のヤフア』をして貢を納れしめたりといふ。愛にヤフアといふはイスラエル王エヒウに外ならず(アカブ及びヤフアをイスラエル王と同一視することは年代の上より困難あれ共、學者研究の結果、今日信はれる番伯來の記錄に誤謬ありと推考せらる)シャルマネセルの後數世の間國勢振はざりしが、チグラスピレセル三世(前七四五—七二七)に至りアッスリヤ帝國は空前の發達をなせり。故に彼は最も廣き意義に於て、アッスリヤ大帝國の眞建設者也と稱せらる。即ち彼は初めて巴比倫帝國を其權力の下に服從せしめ、アルメニアに奪はれたる土地を回復し、スリヤを攻めて之を其所領に加へたり。時宛もイスラエルはベカ新にミナヘムに壓ざて王位に即きしが、チグラスピレセルは先づダマスコを圍みて、之を陷れ(前七三二)進でイスラエルの諸邑を掠め、ナプタリの全地を奪ひ(王下十五の廿九)ベカをして貢を納れしめたり。ユダヤの王アハズも亦次で貢をアッスリヤに納れ、アラビヤの女王サムシも亦アッスリヤのために征服せられたり。チグラスピレセルが採用して以てアッスリヤ帝國の基礎を堅固ならしめたる政策は、新なる州を造るに力りて、一地方の住民全部を他の遠き地方に移し、俘虜を其空處に住ましめたる事にして、彼の相續者も亦常に此政策を採用せり(王下十五の廿九、十七の六)シャルマネセル四世(前七二六—七二二)彼に繼ぎて王となり、サマリヤを攻めて之を滅し、次でイスラエルを滅しスリヤの屬邦となれり。蓋奢王サルゴン(前七二一—七〇五)に至りアッスリヤの勢力は絕頂に達せり。尤も聖書に依アシドヤを攻めて之を取れりとの事の外、此王のことは記されず(賽廿の一)彼の重なる志望は巴比倫、アルメニヤに壞せるアッスリヤの諸州及びスリヤを結合せしめんとするに在りしが、彼はアルメニヤを略し、ミンニ、サガルテア及びアラビヤを屈從せしめ、又スリア、パレスチナ及びアラビヤを征服し以て此目的を達せり。彼は又コルサバッドに其王宮を築きしが、遂に劍客のために倒れたり(前七〇五)此刺客は一般に其子セナケリブの使嗾する處也と思惟せらる。セナケリブ嗣ぎて位に即き(前七〇四—六八一)王都をカラクより再び二子ベに移し、之をアッスリヤ、巴比倫兩帝國の首府となせり。彼は又コウユンウクに莊麗なる王宮を築き、チビュナスに武庫を建て、二子ベの近傍に壯大なる給水工事を起せり。其最も重要なる政治的事業は一方に於てルム、巴比倫と戰ひ、他方に於て四方諸國を征服したる事也。即ち彼は一方に於てエルム、巴比倫、アラム、カルデヤ及びメッヤの同盟軍と戰ひ、遂に巴比倫を取れり(前六八九)彼は又西に向ひて遠征を企て、先づシドンの王ルリを逐ひ、アルバド、ゲバル、アシドド、アンモン、モアブ、エドム等を從へ、進でユダヤの王ヒゼキヤを攻めしが(王下十八の十三—十九)彼は又アッスリヤ帝國の基礎を堅固ならしめたる政策を採用せり(王下十五の廿九、十七の六)シャルマネセル四世(前七二六—七二二)彼に繼ぎて王となり、サマリヤを攻めて之を滅し、次でイスラエルを滅しスリヤの屬邦となれり。蓋奢王サルゴン(前七二一—七〇五)に至りアッスリヤの勢力は絕頂に達せり。尤も聖書に依アシドヤを攻めて之を取れりとの事の外、此王のことは記されず(賽廿の一)彼の重なる志望は巴比倫、アルメニヤに壞せるアッスリヤの諸州及びスリヤを結合せしめんとするに在りしが、彼はアルメニヤを略し、ミンニ、サガルテア及びアラビヤを屈從せしめ、又スリア、パレスチナ及びアラビヤを征服し以て此目的を達せり。彼は又コルサバッドに其王宮を築きしが、遂に劍客のために倒れたり(前七〇五)此刺客は一般に其子セナケリブの使嗾する處也と思惟せらる。セナケリブ嗣ぎて位に即き(前七〇四—六八一)王都をカラクより再び二子ベに移し、之をアッスリヤ、巴比倫兩帝國の首府となせり。彼は又コウユンウクに莊麗なる王宮を築き、チビュナスに武庫を建て、二子ベの近傍に壯大なる給水工事を起せり。其最も重要なる政治的事業は一方に於てルム、巴比倫と戰ひ、他方に於て四方諸國を征服したる事也。即ち彼は一方に於てエルム、巴比倫、アラム、カルデヤ及びメッヤの同盟軍と戰ひ、遂に巴比倫を取れり(前六八九)彼は又西に向ひて遠征を企て、先づシドンの王ルリを逐ひ、アルバド、ゲバル、アシドド、アンモン、モアブ、エドム等を從へ、進でユダヤの王ヒゼキヤを攻めしが(王下十八の十三—十九)彼は又アッスリヤ帝國の基礎を堅固ならしめたる政策を採用せり(王下十五の廿九、十七の六)シャルマネセル四世(前七二六—七二二)彼に繼ぎて王となり、サマリヤを攻めて之を滅し、次でイスラエルを滅しスリヤの屬邦となれり。蓋奢王サルゴン(前七二一—七〇五)に至りアッスリヤの勢力は絕頂に達せり。尤も聖書に依アシドヤを攻めて之を取れりとの事の外、此王のことは記されず(賽廿の一)彼の重なる志望は巴比倫、アルメニヤに壞せるアッスリヤの諸州及びスリヤを結合せしめんとするに在りしが、彼はアルメニヤを略し、ミンニ、サガルテア及びアラビヤを屈從せしめ、又スリア、パレスチナ及びアラビヤを征服し以て此目的を達せり。彼は又コルサバッドに其王宮を築きしが、遂に劍客のために倒れたり(前七〇五)此刺客は一般に其子セナケリブの使嗾する處也と思惟せらる。セナケリブ嗣ぎて位に即き(前七〇四—六八一)王都をカラクより再び二子ベに移し、之をアッスリヤ、巴比倫兩帝國の首府となせり。彼は又コウユンウクに莊麗なる王宮を築き、チビュナスに武庫を建て、二子ベの近傍に壯大なる給水工事を起せり。其最も重要なる政治的事業は一方に於てルム、巴比倫と戰ひ、他方に於て四方諸國を征服したる事也。即ち彼は一方に於てエルム、巴比倫、アラ

ビヤを攻めしが(王下十九の九—廿七)征服ならず其二子アデラン メレクとシャレセルのために殺さる(王下十九の廿七)エサルハドンが代て位に即き(前六八〇—六六九)しが、メメル人メデア人と共にアッスリヤの東境を侵せしかば、エサルハドンハ兵をメデアに進めて之を討てり。然れ共彼の天に成功したりしは西部方面に在り。即ち彼はシドンの王を殺し、ツロを圍み、アラビヤの內地に入り、埃及を攻め、メンフイスに克ち(前六七一)チロを立てゝ其王となせり。蓋くて彼は自ら『アッスリヤ、埃及、上埃及及びエチオピアの王』と稱するに至れり。彼れ三たび埃及を征せんとして病に罹り、途に死せり(前六六九)其子アッスルバニパル(聖書のオスナパル、前六六八—六二六、剛四の十)位を繼ぎ、弟サマスサムカキンを立てゝ巴比倫の王となす。彼はアッスリヤ最後の大王にして、アッスリヤ帝國衰微の兆は既に其治世に其端を開けり。彼れ幼時より巴比倫の技術、學問を學び、且深く巴比倫文學の趣味を有せり。アッスリヤの文學が巴比倫文學の摸倣に過ぎざりしは、蓋し之がため也。彼れ二たび埃及を征し、又サマスサムカキン巴比倫を以て叛きしかば激戰の末之に克ち、エルムの王を誅に其王國を滅ぼし、又カルデヤ、アラム及びアラビヤを攻めて之を服從せしめしと雖も、之がためアッスリヤの實力は漸く微弱となり、是れより叛亂相續きて生ずるに至れり。アッスルバニパルの死後、其將軍ナボポラッサルは自立して巴比倫の王となる。アッスリヤは其子アッスルイチルイラニ嗣ぎて王となり、四年の後シンシャルイシヂン代て王となり凡そ七年間位に在り。彼は即ちアッスリヤ最後の王にして、ニヂヤ及び巴比倫起りて彼に叛き、紀元前六二五年二子ベ陷り、アッ

スリヤ帝國遂に滅亡せり。然れ共政治及び教育上に於るアッスリヤの勢力は尚衰へず、ために アッスル及びニネベの名は長く生存し、紀元以後に至るも希臘人及び羅馬人はユフラト及びチグリスの全地方を呼びてアッスリヤと云ひ、今日もアッスリヤ及び巴比倫の古事に關し、聖書に光明を與ふる學問を稱して『アッスリヤ學』と呼べり。

アッセルバルグ ロサムンデ ユリアネ フォン Asseburg, Rosamunde Juliane Von

人名 一六七二年獨逸アイゼンナッハに生る。自ら云ふ所に依れば、七歳の時異象を見、神の默示を受けたりといふ。又彼女は墨ヶ基督を見、又神の國の將來其他の事に就き、基督の語れるを聞きたりと云ふ。此事のマデチルダ及び其近隣に傳ほるや、其地の人々に大なる感動を與へ、彼女の、千年再臨說の信者ペテロセンと相知るに至るや、更に廣く人心を動搖せり。ペテルセンは彼女を其家に招き、且青年獨逸知名の神學者に贈りて、アッセバルグ嬢の受けたる啓示を以て、神の啓示となすや否やを問ひたりしが、或は然りと答へ、或は痛く之に反對する者ありき。期くて彼女の名聲は、英、佛、丁抹等の諸國に及び、ハノヴェルの宮廷も亦之を愛顧せんとせしが、ルユーチバルグ市の官吏及び說教者は之に反對し、又ヘルムステットの神學校は、ペテルセンの職を免じ之を國外に放逐せり(一六九二)アッセバルグ嬢は彼と共に國を去り、後敬虔なる若伯爵夫人と共に住みしが、彼女は是より俄に聲名を失し、其歿せし年を知らず。ライプニッツは彼女の道德的及び宗教的品性を尊護し、其見たる異象に就ては、之をプリキッタ、ヒルデガルト、メクチルディス等に比せり。

アッターベリー フランシス Atterbury, Francis

人名 一六六二—一七三二 バッキンガムシアのミルトンに生る。辯論家、雄辯なる說教家として名あり。英國皇室附の牧師、ウェストミンステルのディーン、後ローチエスタルの監督たり(一七一三) ウォルフ一世の位に即くに及び其節度に服せず、除謀の故を以て官職を剝はれ追放せらる(一七二三)逐れて大陸に往き、巴理に歿す。ウェストミンステル、アッベーに葬られたれ共墓銘を存せず。

アッフル デニス アウグスト Affre, Denis Auguste

人名 一七九三—一八四八 巴理の大監督にして、溫和にして智識あり。一八四八年革命の際、暴徒を鎭めんとて壕陣に登り、彼等に向て演說せんとし射擊せらる。歷史、教育及び宗教に關する許多の著書あり。

アッベー 僧院 Abbey.

建物 アッベットは修道院を管理せる宗教的建物にして、二種の別あり。一は王室に屬し、國王の建設維持に係り凡て王室の用に供せられ、他は直接に監督の管轄下に在りき。僧院は土地、家屋を有するのみならず、市を管轄し、貨幣を鑄造し、人を裁判するの權ありしが、英國に於ては紀理八世の時凡て此等の權利を奪ひ其財産を沒收し、佛國に於ては一七九〇年革命の際國一の運命に遭遇せり。

アディリン ジョセフ Addison, Joseph

人名 一六七二—一七一九 英國有名の論文家、讃美歌作者にして、ウィルトシアのミルストーンに生る。父は英國教會の牧師也。牛津マグダレン大學に學び後長く其フェローたり(一六九九—一七一一)。然れ共其間大陸諸國を漫遊し、父死して後英國に歸れり(一七〇三)彼れ初め牧師たらんと志せしが、ホイッグ黨の記者として用ゐられたりしを以て其志を變じ、政府の諸官に歷仕し、遂に內閣大臣となりしが、病のため僅に一年にして辭職せり(一七一八)。彼れマルメスベリーより選出せられて、國會議員となり(一七一〇)其死に至る迄其地位を保ゝり。彼れ早くよりドライデンと相知り、其『バーウィク』に論文を寄送したることあり。後スチール『タットレル』を發行せるに及び、之にも其論文を寄稿せり。然れ共彼が文學者として名聲を博したるは、彼が自ら發行せる『スペクテートル』に由れり。彼が此等の諸雜誌及び後に發行せられたる『ガーヂアン』に載せたる論文は、後一冊として『基督教の眞髓』なる表題を以て出版せられたり(一七九〇)彼は又ゝくの讃美歌を作れり。當時彼は實に基督教的政治家の好模範なりき。

アドヴェント 待降節 Advent.

行事 降誕節の預備節にして、初めてこれを守るは第四世紀以後の事也。レリダの宗教會議(五二四)に於ては待降節中の結婚を禁じ、トルスの會議(五二四)にては待降節中僧侶の每日斷食すべきを命じ、マシヨンの會議(五八一)にては、平信徒の聖マルチンの日より一週少くとも二回斷食すべきを命ぜり。現時羅馬教會及びルーテル教會にては、降誕節前四日曜日を以て待降節となし、希臘教會にては六日曜日を以て待降節となす。而して共に十一月十五日を以て之を初む。待降節は又第六世紀以後、東西兩教會共之を以て教會曆の初となす。レフォルムド教會には教會曆なく、又待降節なし。羅れ共獨逸のレフォルムド教會は斷食の外ルーテル教會に倣ひ、此節期には一定の祝句に依りて說教するを常とす。プロテスタント教會中此節期の斷食を守るは獨り英國教會あるのみ。

アドヴェンチスト派 Adventists or Second Adventists.

宗派名 一八四三年には基督再來すべしと預言せしウイリアム、ミレル(William Miller 一七八一—一八四九)の一派にして、一八三三年米國、新英州に起り、其徒忽ち五萬人の多きに達せり。然るに此預言應驗せざりしを以て信從一時減少せしが、基督の再來を待つ者少からず。此徒今日にては基督再來の時日を確然預言せず、唯斷久す之を期待せり。彼等は浸禮を行ひ、惡人の滅絕、及び死せる靈魂の審判の時まで眠れるごとを信ず。此徒分れて六派となる。エゲアンジェリカル、アドヴェンチスト(Evangelical) アドヴェント、クリスチャンス(Advent Christians) セヴンスデー、アドヴェンチスト(Seventh-Day) 神の教會(Church of God) ライフ、アンド、アドヴェント、ユニオン(Life and Advent Union) 及び耶蘇基督に於る神の教會(Churches of God in Jesus Christ) 是也。一九〇七年の調査に依れば、米國に於るアドヴェンチスト諸派の教會二,五四四箇、教師一,五六九人、信徒九九、二九八人にして、其中セヴンスデー、アドヴェンチスト最も勢力を有し、信徒の數六四、三三二人に達す。此派近年(一八八九) 日本にも來りて傳道を開始せり。一九〇六年の調査に依れば、我國に在る宣教師五人、按手禮を受けたる日本人教師二人、傳道者六人、信徒百廿五人、教會の數四也。

アドナイ Adonai (אֲדֹנָי).

稱名 舊約聖書に於ける神の名にして『我主』の義也。希伯來人はエホバの名を云はず、之を云へるは第十六世紀の基督教徒に初まる。(『神』(舊約の)の條を見よ)。

アドニア Adonijah.

人名 ダビデ王の第四子。アブサロムの死後王位の繼承者たるべき地位に在りしが、ソロモン生るゝに及びて、ダビデ之を殊愛し、位を之に讓らんとするの志あり。アドニア之を悟り、ダビデの生前早く自ら王位を繼承せんとその陰謀を回らせしが、ソロモン先づダビデの讓を得て王位に即きしかば、彼はソロモンに忠節を誓すべしとの條件を以て命に其罪を赦されたり。然るに彼れダビデ晩年の妾アビシャグを請れて其妻となさんとせしかば、其志を抱ける者として殺さる。事は詳に記さる。

アドラム Adullam.

地名 カナン人の市邑(創世廿八の一)。ユダに與へられ(書十二の十五)レホボアムの之に城壘を築き(代下十一の七)後王居住し(尼十一の廿)マッカビースの時代には重要なる地なりき。ダビデの歷史に關係を有するを以て著名なるアドラムの谷は、通常ベツレヘムの東南六哩のロデ、カライダンに在りとなせ共、近時の學者は之を以て此市の近傍に在りとなし、此二者を區別するの理由なしと云へり。

アドランメレク Adrammelech.

靈名 アドランメレク及びアナンメレクはセパルワイムの神にして、セパルワイム人がサマリアに輸入し來れる者也。彼等は其子女を火に焚て此神に獻げたり(王下十七の廿一)アドランメレクはアッスリアの記錄に存在せるアダルと同一也と想像せらる共未だ明ならず。アドランメレクは又アッスリヤ王セナケリブの子にして且其弑逆者の名也。(王下十九の廿七、賽廿七の廿八)。

アドリアン Adrian.

人名 六羅馬法王此名を有す。(一)アドリアン一世(七七二—九五)シャールマン帝の助を借りて、ロンバルド王の襲撃を退け、爾後帝と親密の關係を有せり。(二)アドリアン二世(八六七—七二)ルイ二世及びシャール先王の爭に干涉し、前者に左袒して、後者に破門を恐嚇せり。東西教會の分離は、此法王の時に其端を開けり。(三)アドリアン三世(八八四—五)チャールス三世の法王選擧に干涉するを禁ずるの命令を發せり。(四)アドリアン四世(一一五四—九)英國人にして法王となりしは、唯此人あるのみ。初め下僕となりて遂る僧院に入りしが、後其僧院長となり、後又カルヂナルの位に上りスカンヂナビヤに於る彼の功績の著しかりしに依り、遂に法王となれり。彼は其位に在る間斷へずフレデリック一世と權力を爭へり。(五)アドリアン五世(一二七六)僅に一ヶ月其位に在りしのみ。(六)アドリアン六世(一五二二—三)貧しき大工の子也。ルーベーン大學の神學教授となり、後チャールス五世の傅となりしが、其公使として西班牙に遣はされ、西班牙に在りて、トルトサの監督、及びカルヂナルを經て、攝政官となれり。彼は敬虔、正直にして、道德堅固の人なれ共、獨逸に起れる宗教改革を以て、單に教會の腐敗に對する反動に過ぎずと誤想し、之を禁壓せんとして失敗し、羅馬に於ても人心を失ひ、不人望の中に死去せり。

アドレル ヘルマン Adler, Hermann

人名 一八三九 ハノーベルに生る。其父ナタンに續きて、大英國猶太人のラビ長となる(一八九一)。且猶太人大學の校長也『イバン、ガビロル及獨逸哲學』『猶太人は愛國者なり』等の著書あり。

アドレル フェリックス Adler, Felix

人名 一八五一 獨逸國アルビーに生る。幼に

して米合衆國に往く。晉てコルチ〻大學哲伯來及東律語の教授たり(一八七四—六)。組育、倫理、教化協會、を組て(一八七六)信條及び行爲』二八七七)及び『小兒の道德教育』一八九八)を出版せり。

アドレル ジョルジ Adler, George

人名 一八六三、獨逸經濟學者にして、ボーセンに生る。フライベルグ大學國家經濟學講師(一八八六)ベーセル大學教授(一八九三—九)續てキール大學教授たり(一九〇〇)カール、マルクスの批評』(一八八六)『萬國勞働者保護』(一八八八)『古代に於る社會改良』(一八九八)『社會主義及共產主義の歷史』(一九〇〇)『獨逸職工政策の起元』(一九〇三)等の著書あり。

アナクレタス Anacletus.

人名 二羅馬法王此名を有す。(一)アナクレタス一世、第一世紀の末法王となる。教得より三人目なりと云ひ、或は四人目也と云ふも詳ならず。(二)アナクレタス二世(一一三〇—三八)獨逸富豪の家に生る。法王ホノリウス二世の死後グレゴリー(インノーセント二世)と競爭し、低位の僧侶及び羅馬人に賂ふて之に勝ち法王となる。インノーセント二世は羅馬を逃れ、佛蘭西に遁れしが、英、佛、獨、西四國は其法王たるを承認し、アナクレタスは僅にロマン及びシチリー王に依りて承認せられしのみ。後ロマンをも奪はれしが病で死ぜり。

アナスタシウス Anastasius.

人名 アンデオケの長老、チストリウスの友(若くは秘書)にして、四二八年チストリウスと共にコンスタンチノープルに往く。アレキサンドリア學派の『神の母マリア』なる語を攻擊し、マリアは人間也、神何ぞ人より生るべけんやと云ひ、愛にアンテオケ學派と、アレキサンドリア學派との爭端を開けり。然れ共クリルの奔輪に依れば、彼はチストリウスとクリルとの調和を謀らんと企てたるが知し(四三〇)チストリウス追放せられて後、尙コンスタンチノープルに止り、其欠の爲めに働けり。其生死の年代を詳にせず。

アナスタシウス Anastasius.

人名 四羅馬法王及び一偽羅馬法王此名を有す。(一)アナスタシウス一世 三九八—四〇二 アキライアのルフイナス、オリゲンの書を飜譯して、之を羅馬に入る。マルセルラ異端を以て之を訴ふ。法王オリゲンの書を禁じ、又ルフイナスの教會に出入するを禁ず。(二)アナスタシウス二世 四九六—八 耶蘇兩性論の爭に依り、東西兩教會の間に起りたる分派を矯んと欲し、アカシアス及びポチナスを保護せしも、第十六世紀頃迄異端者と目せらる。(三)アナスタシウス三世 九一一—三 (四)アナスタシウス四世 僅に半年間位に在りしのみ。(五)アナスタシウス 一一一五三 法王レオ四世死し、ベテザタ三世後を歸びしに(八五五)アナスタシウス下級の僧侶を味方として法王の位を僭ぜしも、羅馬に開ける會議に於て廢位せらる(八五六)

アナセマ Anathema (anathēma).

術語 破門、黜斥等の意を有し、邦語配書には『詛はる』と譯せり(哥前十六の廿二)唯に晚餐に陪する特權を失ひ、教會より放逐せらるゝのみならず、神の恩惠に離れ、惡魔に突され(哥前五の五)詛はれ(加一の八)沈淪に至る(羅九の五)ないふ。此語及び此語の有する思想は基督教會之を爲用し、教會の教義に反する異端を唱ふる者は宗教會議又は法王に依りてアナセマを宣告せられたり。

アナトリウス Anatolius.

人名 コンスタンチノープルの監督也。アレキサンドリア教長の使節としてコンスタンチノープルに在り、其處に死す(四五八)彼れレオ帝に帝冠を贈かしむ、是れ戴冠式の嚆矢也。讃美歌の作者として名あり。

アナニア Ananias.

人名 使徒行傳に此名を有する者三人あり。(一)エルサレムに住したる猶太の基督信徒にして、其妻サピラと共に產業を賣り、其價の幾分を匿し、殘餘を使徒等の許に携へ來り神に向て詐りしが不思議にも其場にて頓死せり(徒五の一—十一)。(二)ダマスコに住したる猶太の基督信徒にして、幻に依りて主の命を受け、往きてタルソのサウロに手を按き、其盲目を開き且之にバプテスマを施せり(九の十—十八)保羅の云ふ所に依れば、彼は猶太人の中に譽ある、律法に從へる神を敬ふ人なりしといふ(廿二の十二)(三)猶太の祭司の長。保羅の猶太人に訴へられ其前に出でし時、其側に立てる者に命じて其口を擊たしめしかば、保羅は怒りて彼を「粉塗の壁」と呼べり(廿三の一以下)後又彼は保羅をヘリクスの前に訴へたり(廿四の一以下)彼は紀元四八年祭司長となり、五九年退けられ、六七年殺されたり。

アナバプテスト派 再洗禮派 Anabaptists.

宗派名 希臘語の ἀνά (再び) 及び βαπτίζω (洗禮を施す)より來る。第十六世紀宗教改革に伴て起りたる神秘派にして、極端なる改革黨也。小兒に施したる洗禮を以て無效となし、小兒の時一たび洗禮を受けたる者も、成年に及び信仰を起せる時再び洗禮を施せるより此名あり。小兒洗禮の無效なることに就ては、ツヴルデンス派其他の宗派の中にも早くより之を唱ふるものありしが、第十六世紀に至りアナバプテストの一派、之を以て聲語となして起り

たり。然れ共此一事のみは彼等の特色に非ず。彼等は教會は全然新に生れたる者のみに依りて構成せられざる可らず、宗教は政府の吏員に依りて支配せらるべきものに非ずと主張せり。アナバプテストの名を犯せる者の中には、諸種の教義を奉じ、諸種の生活を爲せる者を包容せり、去れば之を以て惡く因襲なる破壞黨の如く見做すは誤れり。破壞黨と見做すべきは、一五二一年トマス、ミューンツェル(Thomas Münzer)を首領として、サキソニーのツウイッカウに起れる一派にして、ミューンツェルは一五二五年の百姓一揆に、其革命の主義を實行せんとせり。即ち彼は政治、社會及び宗教上現存の制度を悉く破壞し、之に代ゆるに聖徒の王國を以てし、自ら其首長とならんとしたりしが、其志を得ること能はずして、一揆の鎭定と共に彼も亦死に處せられたり。グリッセに起りたるグレベル(Grebel)及び他のアナバプテスト一派は、小兒の洗禮に反對し、又市の教會を管理するを拒みしが、ミューンツェル一派の如く過激ならず、溫和平穩にして且敬虔なりしが、同じく誅罰を蒙へ、秩序を破壞する者として罰せられ、死に處せられたる者も少からざりき。彼等は市政を破壞せんと企てたりと思惟せられたりしが、實際は然らず、唯基督信徒は官吏となるべからず、又極刑を行ふことに與るべからずとの事を主張したりしのみ。一五三〇年よりアナバプテストの教義は、俗ゆるが如き勢を以て獨逸全州に蔓延し、又和蘭にも波及せり。後和蘭には メンノー、シモニス (Menno Simonis) の組織せる一派起り、獨逸に在る同教徒と氣脈を通ぜり。メンノーは宗教的にして眞心銳き人也。其徒は同じくアナバプテストと稱すと雖も、其續紳大に異り、福音書の教ふる所に從て生活するを目的となし、信仰箇條を設けず、宣誓をなし、武器を用ひ、及び復讐的の行動を爲すことに反對し、又政府の組織を承認せしが、自ら官吏となることには反對したりき。英國より和蘭に來りしブラオン派はメンノー派と共同し國教會に反對し、且共に教會の會員となる前に人は新生を要すとのことを主張せり。一五三五年以後多くのアナバプテスト英國に來り、ノルウィッチ及び其他の場所に於て集會せり。一六〇五年 ゲーンスバローの牧師 ロン、スミス (John Smyth) 獨立教會を離れ、幼時受けたる洗禮を無效として自ら洗禮を施し、一教會を造りしが、其教會亦分れて、其一派英國に來り、倫敦に於てバプテスト教會を組織せり(一六一二—一六一四)。

アナンメレク Anammelech.

靈名 アッスリヤ人がサマリアに移住せしめたる異教民の拜したる神也(王下十七の廿一)。卅語の初のアンは思ふに巴比倫人の天空の神アンと同じく、アナンメレクとは『アンは君也』の意なるべしと云ふ者あり。又記者は巴比倫のアヌをアンクと同一說—アヌロク—したる云ふなり。何れか是なるを知らず。

アニスタス Aniceitus.

人名 羅馬の監督、一五七—一六八)ギリカルブ羅馬に來り、復活祭に關する羅馬教會と小亞細亞教會との相違に就き、法王と彼との間に爭論ありて議論一致せず、ポリカルプは羅馬教會の傳說に基き、羅馬に於て復活祭を行へり。羅馬教會に倣に割髮の風を誘入したるは此法王也。羅馬教會には、四月十七日を以て彼の祝祭日となせり。

アハシュエロス Ahasuerus.

人名 舊約以士帖に出でたる王の名にして、メド、ペルシヤの王なるダリアス、ヒスタスペス(前四八五—四六五)の子ザルセス王のこと也。此のザルセスは波斯の楔形文字の碑文中には Khsyarsa と記さる。又以士帖書(四の六)のアハシュエロスは義さにエヌルド其他の學者によりて、カンビセス王のことも爲されたれども、其のザルセス王と同人なることは疑ふ可らず。但以理書(九の一)のメデア人ダリヨスの父なるアハシュエロスの何人なるかはダリヨス自身の存在と共に不明也。

アハジア Ahaziah.

人名 (一)アハブに隱ぎてイスラエルの王となる、在位僅に一年に過ぎず(前八九七—八九六)欄の欄杆より落ちて病を起すや、使を遣してエクロンの神バアルゼブブの神託を請へり。預言者エリヤ其使に逢ひて、王必ず死なんと云ひしかば、彼れエリヤを捕へんとて五十人を遣はせしが、二回共其遣されたる人々天火のために燒盡されたり。三たび五十人を遣せし時エリヤ自ら王の許に至り、彼必ず死なんと云ひしが、果して其預言の如く子なくして死ぜり(王下一)。彼はユダ王ヨシャパテと結びタルシシに通商を圖りんとせしが、其船壞れて其目的を達ぜざりき(代下廿の卅五以下)(二)ユダの王。ヨラムの子にして其繼嗣。在位一年(前八八五、王下八の廿五—廿九)歷代志略にはエホアハズ(下廿一の十七)又ヱザリア(下廿二の六)と稱せらる。思ふに筆記者の誤寫より出でたるなるべし。彼れイスラエル王ヨラムと結びしが、エヒウ、イスラエルを以てヨラムに當さしかば、二王力を併せてエヒウと戰ひしが、ヨラムエヒウの爲めに殺されたるを以て、アハジアは遁走せり。道姥せられて重傷を負ひメギドに死ぜり(王下九の廿七、代下廿二の九)。

アハズ Ahaz. 人名 ユダ王朝第十一世の王にして、ヨタムの子也。在位十六年（前七一一—七二五）其の王位に上りし時は未だ二十歳に達せざりしならん（王下十六の二）是れより十六年の後其子ヘゼキア王位に上りしが、彼は歴代明主の後に出でたる旺盛にして惡しき王者なりしが故に、前代の明君が創始せし國を保つこと能はざりき。父ヨタムの治世の頃に同盟たりしイスラエルのペカ及びスリアのレザン、今や東ヨルダンの地方を奪ひてエルサレムを攻略せんとしたり。レザンはエラタを取りて此にアラマイト人を移し、ペカはユダ人十二万人を殺し、且其二十万人を本國に捕虜としたりしが、エホバの預言者オデドの警戒を受けて之を本國に歸らしめたり（代下廿八の九—五十一）加之エドマ人及びペリシテ人等攻め來りて諸所を攻略せり（代下廿八の十七、十八）養十四の廿八）。此頃預言者の歩調を始めしイザヤは王に告ぐるにアッスリアの恐るべきを以てしたりム（養七の二）アッスリアの王ティグラテピレセルはアハズの贈りし大金を受けてアラメク人の國に攻め入り、レザンを殺し、イスラエルを倒し、諸邑を奪ひ、ギリアテ、ガリラヤ、ナフタリの諸所より多くの捕虜を携へ歸れり（王下十五の廿九、十六の九）。此の報酬としてティグラテピレセルは神の家の財寶其他の金を取れり（王下十六の十七代下廿八の廿一）。碑文の示す處によれば、ティグラテピレセルは終にアハズを其臣下となしたりり。是れ猶太が大なる異邦人の横威に服する始め也。偶的横威の下に服従する間に、迷信と偶像禮拜とは發達し、イザヤは此の墜落を認逃ぜり（二の六、三の十五、八の十九）アハズは太陽を拜し日晷を作り天の諸の軍勢を拜みたるのみならず、子をモロクに葬ぐるに至れり（王下廿三の十二、代下廿八の一—四）其死するやイスラエルの王等の墓に葬られずして邑の中に葬られたり（代下廿八の廿七）。

アハブ Ahab. 人名 (一)イスラエル王。父はイスラエル王朝の創始者オムリ也。アッスリア模形文字の碑名に『イスラエルのアハブ』と記さる。其妻はイゼベルと稱しシロの王の女也。妻の爲めにバアルを崇拝し、エホバの預言者を迫害し（王上十八の四）バアルの預言者四百五十人、アセラ像の預言者四百人を養ひたり（王上十八の十九）然れ共預言者エリアの苦心功なを奏し、王の家の寄なるオバデヤはエホバの預言者百人を洞穴にかくし、エホバはエリアの爲めにバアルに跪まづかざる者七十人を殺せり（王上十九の十八）去れどもアハブは其偶像禮拜によりて大なる害惡をイスラエル人に與へたり。彼れ王位に在ること二十二年なりしが、其間北王國の勢威甚だ盛なりき。王はイズリルと名くる美麗なる市邑を建設して之を首府となし、又象牙の家を建てたりム。王はイズリルと名くる美麗なる市邑を建設して之を首府となし、又象牙の家を建てたりヤベテと同盟を結びたり（王上廿二）王の女アタリヤはヨシャパテの子ヨラムに嫁す（王下八の十八）王は此の如く謀畧あり精力ありしも、之を全ふするの才能を有せず、優柔不斷は實に彼の特性なりき。一たび刑の宣告を爲したるエリアの前に立てば躊躇し、ベカヤの預言を聞きては之に恐怖し、ナボテの葡萄園に就ては見餓に頒する行爲をなしたり（王上廿一）其悔改は淺薄にして、只感情によりて動くのみ。然れども亦敬ふべき處なきにあらず。其の敵ベネハダテを宥せしが如き（王上二十の廿三）重傷を負ふも尚戰場に止りて士卒を勵ませしが如き（王上廿二の廿五）是也。去れども神の惡は彼と其一族の上に止まり、ユダとイスラエルは彼の爲めに共に零落に導かれたりき。(二) 巴比倫俘囚の時代に僞預言者アハブなる者あり。ネブガドネザル王の爲めに焚殺せらる（耶二十九の廿一、廿二）。

アバ Abba (ἀββᾶ). 雜語 アラメイック語『父』の義。新約全書に三回見ゆ、何れも直接に父に對して用ゐらる。一は基督ゲッセマネの祈に於て（可十四の三十六）他の二は靈魂の神に對する時として保羅之を用ゆ（羅八の十五、加四の六）二回の ἀββᾶ と終の ὁ を用ゐたるは肉身の父に對する關係を表すと云ふ者あり。又二個の ἀββᾶ は親的の父、一個の ἀββᾶ は肉身の父に對する關係を表すと云ふものあれ共明ならず。然れ共此語の下に同義の ὁ πατήρ（希臘語の『父』）を加へ、『アバ父』と連結したるは注目すべし。思ふに初は希臘語を語れる猶太人が説明の爲めに用ゐたる者が、後には意味を強むる爲に一般に用ゐらるゝに至りしものなるべし。

アバウジ Abauzit, Firmin 人名 一六七九—一七六七 佛國リグに生る。ナント勅令廢止の際セネバに逃れ、後其地の圖書館長となる。新約全書を佛語に飜譯するに與りて功あり。學問該博、ニュートン、ボルテア、ルーソー等の推服する所となる。其著書の一部分は英語に飜譯せられたり。

アバディー Abbadie, Jacques 人名 一六五四—一七二七 佛國ネーに生る。新教派の神學者にして、獨逸ベルリン市佛蘭西新教派教會の牧師となり、後又英國倫敦サボイ佛蘭西教會の牧師となる。其著辯解學は、佛國宗教文學標準書の一にして、又英獨語にも飜譯せられたり。

アバドン Abaddon (אֲבַדּוֹן). 雜語 希

伯來語、舊約聖書文學にのみ之を見る。死の國、地獄、陰府の義（伯廿六の六、箴十五の十一）猶太のラビは地獄の最下部を表する語として用ゐたり。約翰默示錄九の十一には之を擬人化し、『竪の王』『底なき坑の使者』と呼べり。

アバナとパルパル Abana and Pharpar. 地名 ダマスコの河（王下五の十二）アバナは今のバラダ、パルパルは今のアワジと同一なるべしと想像せらる。前者はアンナリバナスに起り、後者はヘルモンに源を發し、共にダマスコの原野を横ぎり、西より東に流れ、所謂『牧場地』に注ぐ。

アバリム Abarim. 地名 モアブ地方に在る山脈にして、ネボ、ペオル、ピスガは此山脈に屬す。死海を拔くこと四千呎（民廿七の十二、申廿二の四十九）。

アヒトペル Ahithophel. 人名 ギロの人。ダビデ王の議官にして聰睿、才能を以て名あり。然れ共後には誠意に乏しく且主義の人に非ざりしかば、アブサロムの謀反に與せしが、其成らざるを見て、自ら縊死せり（母後十五の十二—十七の廿三）戰時の外自殺の例は舊約には唯是れあるのみ。新約にはユダあり。

アヒメレク Ahimelech. 人名 アヒトブの子。イタマルの子孫にして、エリの孫嗣也。ダビデサウルに追はれ逃れてノブに來りし時、アヒメレク彼にパンとゴリアテの劍とを授けたりしが、エドム人ドエグ之をサウルに告しかば、サウル怒りて彼と彼に屬する八十五人の祭司を殺せり（母前廿二の九—廿三）。此アヒメレクはアヒヤ（十四の三）と異名同人なるべしと想像せらる。

アビシニア教會 Abyssinian Church. 宗派名 古代に在てはエピオピア、センナアル及びアビシニアを總稱してエジオピア（Ethiopia）と云ひ、エジオピア教會を構成せしが、現今に至りては基督教はアビシニアの高原地にのみ存在し、今日のアビシニア教會は古代のエジオピア教會と代はるに至れり。紀元三三〇年頃コンスタンチン大帝在位の間フラメンチアス及びエーデシアス偶然エジオピアに來り、基督教を傳ふ。後エーデシアスはシロに歸りしが、フラメンチアスは留りて傳道を繼續し、アレキサンドリアに往きて、アタナシアスより傳道者を請ひ受け、且自ら聖別せられて監督となり、エジオピア教會の首長となれり。第五六世紀の頃上埃及よりアビシニア教會に傳道し來り、僧院主義、傳説及び聖徒崇拝の風を輸入せり。傳説に依れば新約全書のエシオピア譯はフラメンチアス之を完成し、舊約全書はメニレク（ソロモン王とシバの女王との間に生れしと傳へられたる人）之をエルサレムより携へ來れりといふも、二者共此時代に飜譯せられたるもの多し。然れ共エジオピア語は當時既にアムハリック稱せられたる土語に代はられたりしを以て、エジオピア譯聖書は、國民基督教化の上には左迄有効ならざりき。エジオピア語は現今全く死語にして、教會に於てのみ使用せらるるに過ぎず。之を了解するものなし。教理の點に於て、アビシニア教會はコプチック教會と類似する所あり、共に基督の神人兩性合一説を信ぜり。又マリア及び聖徒を以て基督と人との間に欠くべからざる仲保者也となして之を禮拝し、聖徒は自己の贖の爲めに死せしに非ずして、人の贖のために死したる也と信ぜり。彼等は舊約及びエルサレム宗教會議の教令を併せ、八十一卷の經典を有し、教會の傳説を以て聖書と同一の權威を有するもの也と信ぜり。教會の首長をアブナ（『我儕の父』の義）と稱し、カイロ在住のコプチック教長の任命を受け、ゴンダルに住す。彼は獨り國王即位の禮を掌り、又僧侶及び執事に按手するの權を有す。一五五五年イエスイト教派來りて傳道を開始し、數十年間熱心なる働の結果其勢力大に振ひ、國王ザスヂオス其反對者を虐殺し、羅馬教を以て國教となしたりしが、一六四〇年に至り羅馬教徒は國外に放逐せられ、アビシニア教會は再興せられたり。第十九世紀の初アビルカと稱する敬虔なるアビシニヤ僧聖者アムハリック語に飜譯せしが、大英國聖書會社はこを聘ひて印刷し、又英國教會より宣教師を送りて傳道せしを以て、新教派の傳道一時大に振ひたりしが、土人僧侶の反對と新來の羅馬教宣教師の陰謀とに依り、其事業を破壞せられたり。一八五八年新教派に同情を有せるコプチック派の僧侶アブナとなり、又パセルより新教派の宣教師を送り來りしが放に、傳道一時復た振ひしが、國王セタドアの時宣教師を捕へて獄に投じ、其事業再び破壞せられたり。後英國アビシニヤに勝ち、宣教師は放免せられたれ共、新教の傳道漸後再び振ひ今。

アビシャイ Abishai. 人名 ダビデ王三十人衆の首（後廿三の十九）王の姉妹ヒルヤの長子にしてヨアブ、アサヘルの兄弟也（代上二の十六）勇敢にして忠義の念深く、其兄弟と共にダビデに臣事し、彼を困難を共にして、嘗て身を以て彼を救ひしことあり（母後廿一の十七）選でられて一方の將となり、エドム人、アンモン人、スリア人及びアブサロム、シエバ等と戰ひ屢々軍功を立てたり。

アビシャグ Abishag. 人名 ダビデ王老

年に及びし時王を看護せしシュナミの美女也（王上一の一—四）。王の死後アドニヤを擁ぜんことを請ひしが、ソロモン王は之を以て王位を覬覦する者となして之を殺せり（二の十三—廿五）。

アビメレク Abimelech. 人名 （一）ゲラルの王。アブラハム（創廿の一—十七）及びヤコブ（廿六の七—十一）の物語と關聯して記さる。此二箇の物語は同一の物語の異錄なること疑なく、而して後者の方最古の傳說を傳へたる者なるべし。（二）詩篇卅四の標題に記せるガトの王。思ふに此はアキシの誤なるべし（母前廿一の十一）。（三）シケムの婦人に由りてギデオンに生れたる子。其兄弟七十人を殺しシケム人の王となりしが、三年の後テベツと戰へる際一人の婦のために石を投げられ、其腦骨を碎かれて死せり。（士九）。

アビヤタル Abiathar. 人名 猶太第十代の祭司長、エリより第四代、イタマル家最後の祭司也。アドニヤを助けたりしがためソロモン王に逐はる（王上二の廿七）ダビデ驚及びサウロ窩に分れたる二箇の祭司長は愛に至りて其終を告げ、エホバのエリになしたる神言應驗せり。（母前二の卅一）。

アビレネ Abilene. 地名 紀元廿六年の頃ルサニアの分封せられたるスリアの一地方にして（路三の一）首府をアビラと稱し、ヘルモン山の北に在り。之をアビラと傳するは、カインがアベルを此地に葬りたりしとの傳說に基けりといふ。

亞非利加 アフリカ Africa. 地名 亞非利加は未開の大陸にして、住民教化に浴せず、最も憐むべき狀態に在りしを以て、第十九世紀中後等に傳道するの目的を以て、其地に至りし者ありしかども、元來亞非利加は氣候險惡にして熱病流行し、歐洲人の能く堪ふる所に非ざりしのみならず、交通の道尚未だ開けず、從て內地に入るは容易の事に非ざりしを以て傳道の事業亦頗る困難なりしが、第十九世紀下半倫敦傳道會社は此島に傳道を開始し、凡そ廿年の間盛に布教したりしが、後基督教に反對せる女王王位に登り、宣教師を島外に放逐し、信徒を甚しく迫害し、中には死刑に處せられたる者もありしが、彼等は能く此迫害に堪へしを以て、女王の死後教會は再び盛大に赴き、信徒も漸く增加するに至れり。然るに一八九五年佛國は此島の獨立を奪ひしを以て、傳道も亦一時大に妨害を蒙りしが、佛國に於ける新教徒も亦此島の傳道に從事するに至りしを以て、漸次盛大に赴きつゝあり。今世紀の初に於る信徒の總數廿八萬人あり。

亞非利加教會 アフリカクワイ The Church of Africa. 宗派名 人種、氣候及び其他特異の事情に依り特異の發達を爲せり。基督紀元の頃亞非利加は四州に分れ居りしが、此四州合して一監督所管區を作り、而してカルセーヴは漸次大監督所在地となるに至れり。基督教の亞非利加に傳はりし起源は詳ならざれども、當時羅馬との交通頻繁なりし事なれば、早くより愛に傳はりしと明也。元來亞非利加人は强烈熱誠にして且純潔の民なりしを以て、基督教に對する反對も劇烈なりしが、一旦之を受け入るゝに及ては又非常の勇氣と忍耐とを以て之を守れり。テルチュリアン、クプリアン等の書は如何に彼等が當時迫害を受け之に堪えたりしかを示せり。亞非利加教會は之を東邦教會殊に亞歷山教會に比すれば實際的也。其異端說と呼ばれたるモンタニ教、ノヴァチアニ教及びドナチ教の知きも思辨的に非ずして道德的也。テルチュリアン。クプリアン。アウガスチンの神學も形

而上學的なるよりも寧ろ心理學的也。故に東教會に於て三位一体及び基督論の形而上學的解說に就りたりし時に方り、アウガスチンは自由意志及び神の恩寵の知き實際的問題に解釋を與へたり。亞非利加教會はアウガスチンの死後ヴァンダル人の來襲（四三〇）と共に衰微し、サラセン人の此國に打ち勝つに至りて全く滅亡したり。然れ共テルチュリアン。アウガスチンは羅馬教會の神學に大變化を與へ、ダブリアンも亦其教會政治の上に同一變化を與へたり。

アフリカヌス ユリウス Africanus, Julius 人名 第三世紀の基督教著作家にして、パレスチナのエマスに住し、曾て埃及の歷山府に遊びしことあり。彼の著作はユウセビウスの書中に引用せられたるもの3外存在せず。

アブガル物語 The Legend of Abgar. 書名 新約經外編會書の一書。エデッサの王アブガル五世と耶蘇との間に往復せられたる書翰也として傳へられたる者也。アブガル不治の病に罹りしが、耶蘇奇跡を行ひて諸の病を愈すと聞き、書を贈りて彼が來りて其病を愈さんこと、及び彼がエデッサに住し以て猶太人の禍を逃れ給はんことを請へり。耶蘇は之に答へ其神より遣はされたる使命を全ふし、天の父に歸らざるべからざるを叙し、彼れ天に昇りて後其弟子の一人を遣はし主の病を愈すべしとのことを書き贈れり。果して基督昇天後七十人の一人タッダイのトマスエデッサに往き、基督の約束を成就せりとの事を附記せり。史家ユウセビウス及び其他の學者の間には之を眞實也となすものあれ共、作話なること明にして、基督教がエデッサに入りたる後其教會に使徒的基礎を與へんとの希望より出でたる者なること疑なし。思ふに第三世紀後半の作なるべし。

アブサロム Absalom. 人名 猶太の王ダビデの第三子（母後三の三）容姿端麗髮美にして多し。一妹タマルを辱めたるを怒りて兄アムノンを殺し（十三—十四）の三十二）母の父ゲシュルの王タルマイの處に逃れ止まること三年。ヨアブ、ダビデを勸めてアブサロムを宥しエルサレムに歸らしむ。而かも二年の間相見ず。アブサロム父の爲す處に快からず、民を戰慄してエルサレムを棄てゝ遁る。後アブサロムの軍敗れヨアブの爲め橡樹の間に殺さる。然れ共アブサロムの死はダビデの意に非ず。故に彼れ其死を哀むや切也（十七の廿三）アブサロム其名を後世に傳へんと欲して其生ける間に一の表柱を王の谷に建てたりし（十八の十八）ケデロンなる者は後世の建つる所也。

アブサロン Absalon. 人名 猶太の王ダビデの第三子（母後三の三）容姿端麗髮美にして多し。一妹タマルを辱めたるを怒りて兄アムノンを殺し（十三—十四）の三十二）母の父ゲシュルの王タルマイの處に逃れ止まること三年。ヨアブ、ダビデを勸めてアブサロムを宥しエルサレムに歸らしむ。而かも二年の間相見ず。アブサロム父の爲す處に快からず、民を戰慄してエルサレムを棄てゝ遁る。後アブサロムの軍敗れヨアブの爲め橡樹の間に殺さる。然れ共アブサロムの死はダビデの意に非ず。故に彼れ其死を哀むや切也（十七の廿三）アブサロム其名を後世に傳へんと欲して其生ける間に一の表柱を王の谷に建てたりし（十八の十八）ケデロンなる者は後世の建つる所也。

アブサロン Absalon. 人名 一二〇一—一二〇八 丁抹國シーランド島に生る。巴理に學び、ロスキルドの監督となり、後ランドの大監督となる。國王を助けて丁抹國を再興し、ウェンツに勝ちて基督教を傳へたり。彼は中世に於る戰士的宗教家の模範にして、丁抹大政治家の一人也。

アブチル Abner. 人名 以色列王サウルの從弟にして其軍の首也。サウルの死後其子イシボセテを立てゝ王となせしが、ユダの族之に反對して遂に之を敗れり（母後二の十七）後幾ならずイシボセテアブチルがサウルの妾リツパを納れて妻となせしを以て異志ありとなし、之を詰責せしかば、アブチル怒りてサウルの家を去りダビデに歸せり。ヨアブダビデのアブチルを用ゐて己に代へ軍の將となさんことを恐れ、敵の讒者也として彼を讒誣せしが、其效あらざるを見て、其兄弟アサエルのために讎を報ゆると稱し、遂にアブチルを殺せり。ダビデ及び民衆は深く之を悲む（母後三）ダビデは其死に臨み、ソロモンに向ひヨアブを安慰に高に下らしむる勿れと遺言せり（王上二の九）。

アブラハム Abraham. 人名 以色列國の族長、初めアブラムと稱す。又『神の友』『信仰の父』と呼ばる。テラの長子にしてカルデヤのウルに生る。此の地はユーフラテ河の四岸にして、巴比倫と波斯灣の間なる近世マダヘーアと稱する處に當ると云ふ。十歲若き從兄弟のサライと婚す。アブラハムに關しては、創世記十一の廿六—廿五の十八の外、ヨセフス。フイロン及び他の猶太人學者の記錄になし。聖書の記す處に依れば、其の家族は偶像信者なりしが、神の感導を受けて迦南に行かんとし遂にハランに止る。父此に死す（創十一の廿一、十五の七）。神アブラムに現はれ、此處を去りて迦南に行くべきを命じ、且つ大なる國民の祖先とならんと告ぐ。アブラム時に年七十五、直に其命を奉じ、其子なる姪と甥ロトと凡そ二千の從僕及び所有一切を携へてシケムに行き、モレの橡樹の森に止る。神又アブラムに現はれて、此の全地を其子孫に與へんと約す。會々饑饉ありて此に止ることを得ず、埃及に行く。後アブラム富んで再び迦南に歸りしも事端之れより漸く起る。終にロトと分る。アブラムがロトの損むに任せて善き地を之に與へ、又敵の爲めにロトの苦しめらるゝや念ざ赴きて之を救ひしが如きはアブラムの寬仁を讃す（創十三、十四章）。アブラム年漸く邁めども未だ子なし、神の約束何時成就すべきや其信仰を試らるゝと雖甚し。然れども天使及び祥端はアブラムが子を得ることの確實なるを說す。アブラム、サライの勸めによりて埃及人なるハガルを妾

さし、一子イシマエルを擧ぐ。而かも是れ約束の子にあらざりき。アブラム時に年八十六。彼れ九十九歳の時神又現はれて前約を新にし、名をアブラハムと改めしめ、妻サライ(寛恕)をサラ(王女)と改めしむ。此時アブラハムは其契約を遵守すべきを約し、割禮を以て其約する所の記號印を証となし、彼を初めイシマエル及び一族の男子悉く割禮を受く。天使又現はれてサラに約束を告ぐ。又平原の諸邑神の怒によりて亡されんことを天使に依りて告げられしかばアブラハム此の諸邑の爲めに祈りたれ共、之を救ふべき五人の義人さへなかりしかば、ソドムは遂に之が爲め亡びたり。アブラハムが迦南の南端ゲラルに移りしは蓋し之が爲なりしならん。アブラハム百歳に近く、サラ九十歳に達せし時、初めて一子イサクを擧ぐ。ハガルはサラの嫉妬の爲めに放逐せらる。アブラハムに來れる最後の最も悲痛なる試錬は一子イサクを捧げよとの神の命令なりしが(創廿二)アブラハムは其最も堅き信仰を顯はして神に喜ばる。爾來アブラハムの生涯は極めて平和也。サラ百二十七歳にして死しヘブロンのマクペラの洞に葬らる。アブラハム後又ケトラを娶として六子の父となり(創廿五の六)イサクの子エソウ、ヤコブ等の生長を見、信仰の成就せしを喜び百七十五歳にして死す(創二十五の七、八)。如上舊約聖書中のアブラハムの傳記は完全なる者に非ず、諸種の傳説を拔き集めて之を補綴したるもの也。而して其目的とする處は以色列國民の起元、發展、及び其上に在る神の保護の如何なりしかを最も能く説明せんが爲めなるを以て、之に最も能く適合したる傳説をとりて中心となせり。近世批評學者の説によれば少くとも左の三種の傳説混合せる者也。即ち(一)エホバ記者の傳説より出でたる者(創十二の一―四、六、十三の五、七―十一、十二―十八、十五、十六)。(二)エロヒム記者の傳説より出でたる者(創十四、十五、二十、二十一の六―三十二、廿二)。(三)祭司的傳説より出でたる者(創十三の六、十一、十二、十六の一―三、十五、十六、十七の一―二十七、十九の二十九、廿一の一、二―五、廿三、廿五の七―十七)是也。

アブラハムの懷(ふところ) Abraham's Bosom. 【稗語】 アブラハムは信仰の父と稱せらる。故に樂園に在りて幸福を受くるをいふ。(路十六の十九―三十一)。

アブラハム派 Abrahamites. 【宗派名】 第十八世紀の末ボヘミヤに起りたる自然神教的の一派にして、アブラハムが割禮を受けし以前の信仰を奉ずと稱し、一神説、靈魂不滅説、聖書、十誡及び主の祈を信ぜり。政府彼等の子女の其説を信ずるを禁ぜしを以て、幾もなく斷滅せり。尚パウリシアンの一派に此名を有するものあり、其條を見よ。

アブラハム默示錄(もくしろく) 'The Apocalypse of Abraham. 【書名】 舊約經外默示的文學中の一書。アブラハムが父の偶像禮拜に快からず、天使ヤオエルを訪ひ之を謀りしに、ヤオエル彼に犧牲を獻ぐることを教へ、又鳩の翼を與へて天に伴ひ、諸種の啓示を與へたりしことを記す。現存せるはスラヴォニヤ語の飜譯のみ。

アベッス 尼院長 Abbess. 【職名】 舊教に屬す。アボットと同數を選ぶ。其權力も亦殆ど同じ。羅馬教會にては其宗教會議に列席するの權を承認せり。

アベラール又は**アベラルドス** Abelard or Abelardus, Pierre ピエル 【人名】 一〇七九―一一四二 佛國ナントに近きパレーに生る。有名の神學者及び煩瑣哲學者にして、實體論、名目論の爭論最も激甚なりし時世に出つ。巴理に來り、初めロッセリンに就き、後ウイリアムスに就きて學び、出藍の譽あり。三十六歳にして歐羅巴に於て最も著名の教師となり、ノッテル、ダムに於る彼の學門には各地より學生來集し、其數五千に及びしと云ふ。彼は學派爭論の上に超然たり。且獨斷的方法に反對し、批評的方法に依りて教へたり。彼の弟子の中にはセレスタイン二世及びブレシアのアルノルドの如き人あり。其名聲藉甚なりしが、ヘロイス(Heroise)との關係に依り、頓に之を失墜するに至れり。ヘロイスは一僧侶庶出の娘にして、才色兼備の一少婦也。來りてアベラールの門に學びしが、彼れ深く之を戀慕せり。然れ共正式に結婚する時は、教會の高僧となること能はざるを以て、竊に夫婦の契を結びたりしが、事顯はれて大なる耻辱を蒙り、遂にセント、デニスの寺院に入りて僧となり、ヘロイスも亦アルゲンタイル寺院の尼となれり。後彼はノーゲンドの曠野に退き、禮拜堂を建てしが、此處にも學生圍集せり。然れ共彼は其著書の故を以て罪せられ、(一一二一)且斷へず迫害を蒙りたりき。後彼は又選ばれてルイスのセント、ギルダシアス寺院の長となりしが、同僚の僧侶彼を憎み、之を毒殺せんと謀りしこと二回に及びしを以て、彼は遂に此處を遁れて再び教師となり、學生を集めて教授せり。彼は曾て神學をアンセルムに學びしが、其師の神秘的傾向を有せるに拘はらず、彼は性來批評的なりしを以て、其所論正統教理の外に出づる者多し。三位一體は其神學の中心教理なりしが、彼は之を以て神の屬性となすに至れり。且彼は智識なき信仰は完全ならずとして、神學の自由研究を主張し、又古代神學者の説の相互に衝突せる事實を示して憚る處なかりしかば、教會の憤惡を招き、遂にセンスの宗教會議に於て、異端の告訴を受けたりしが、彼は自ら辯護せずして議場を退き、法王の審判を仰ぎたりき。其結果彼は再び著書、教授をなすを禁ぜられたりしが、クラニーの僧ペテル、ベネラビリスの厚意に依り、彼と共に殘年を送ることを許され、讀書、祈禱、默想に其餘生を送り、六十三歳にして死せり。彼の屍はヘロイスの屍と共に、巴理の同一墳墓に葬らる。

煩瑣哲學の辯証法はアベラールに於て其頂上に達したりき。彼れ謂へらく、言辭又は名稱は唯一言一名としては通性の者に非ずして、一個のもの一特殊のものたるに外ならず、一言一名が通性の意味を得るは、そが或事物の上に就きて言ひ顯はさるゝに由れり。故に通性は立言に存すと云ふべき也と。是れ彼が通性論にして、煩瑣哲學の初期に於る實在論と唯名論との爭論は彼に於て一段落を爲せり。彼は又時勢に先じて倫理學を一科學として初めんとしたる所あり。彼れ説きて曰く、道德上の善惡は外に表はるゝ動作に非ずして、意志が自由に認諾することに在り。故に外部に發表せざるも、もし意志之を認諾せば道德上善惡の差別は既に成立せる也と。彼は如此重を主觀的方面に置き、德行の唯一の根本的標準は各人自らの眞心に從ふことに在りと爲したり。而して彼は如此論據より、人間が祖先より傳へて生れ乍らに感染せる罪は寧ろ過失といふべき者にして、嚴密なる意義に於て罪惡といふべき者に非ずと云へり。彼が希臘人を歎美して、希臘の哲學者は基督以前の基督にして、ソクラテース、プラトーン等は神の啓示を得たる者也、何となれば神の子は智慧にして、智慧の在る處何處にも神の聲を聞けば也と云へりしが如き、彼が如何に當時一般の思想を超越したりしかを知るべし。其教會に受け容れられざりしこと更に恠むを要せず。

アベル Abel (הבל) 【人名】 アダム、イブの第二子(或は云ふ雙胎)牧者也。カインより愈れたる祭物を神に獻げ(來十一の四)嫉妬の爲めにカインに殺さる(創四の八)原語アベルは氣息の義、短命の意を表せしならん。アベルを牧者とせるは牧者の生活を貴みし舊約の傳説に一致せり。其祭物の顧みられたる所以は、最上の物を神に獻げたることに依り顯はされたる敬虔の精神に在り。新約は彼を以て人類最初の殉教者(太廿三の卅五)信仰の繼者となし(來十一の四)其死を基督の死に比せり(來十二の廿四)。アウガスチンはアベルを以て新生者、カインを以て生得の人の代表者となせり。

アベル Abel. 【地名】 アベルは又牧場の義を有す。パレスチナ及びスリアに在る數箇處の地名の頭に冠せらる。即ちアベルベテマアカ(列後廿の十四、十五等)アベルメホラ(士七の廿二等)アベルミツライム(創五十の十一)アベルシッテム(民廿五の一)の如し。

アベル派 Abelites, or Abelonians. 【宗派名】 北亞非利加のヒッポ近隣に住せる村民より成れる一派なりしが、聖アウガスチンの頃既に其存在を失へり。其名蓋しアベルの足跡に倣はんとの意より來れり。思ふに古きノスチック教の一派なりしならん。

アベンエヅラ Aben-Ezra. 【人名】 一〇八八―一一六七 第十二世紀に生れたる最も有名なる猶太學者にして、トレドーに生る。亞非利加、埃及、パレスチナ、バグダッド等を巡遊し、恐くは印度にも至りたるならん。以太利に住する猶太人に文法及び國語を教授し(一一四〇―五五)佛蘭西及び倫敦に遊び、遂にナバルに居留せり(一一六〇)彼の詩は希伯來語にても亞剌比亞語にても、韻律完全なれ共、天來の靈感に乏しく其哲學は新プラトン派なれ共、創始の思想なし。然れ共モーセの五經、以賽亞、詩篇、但以耳等の註釋は、文法的歷史的にして、當時に在ては新機軸を出せるもの也。

アボット 僧院長 Abbot. 【職名】 初め單に長、若くは著名の僧侶を尊敬するために與へられたる名なりしが、漸次僧院の首長を指す名となれり。東教會のアルチマンドリテと同じ。西教會に於ては十一世紀以後建てられたる僧派にては、其首長をPrior(方丈) Guardian(監守) Rector(讀經者) Minister(教師)等と稱してアボットと云はず。アボットは法冠を戴き、監督の徽章を帶ぶるを得べく、又政治上の位置を有するを得べし。少くとも廿五歳以上にして、現今の規定に從へば必ず僧職に入りたる者ならざるべからず。僧派に屬する僧侶之を選み、監督之に按手禮を授けて此職に就かしむ。

アボット エヅラ Abbot, Ezra 【人名】 一八一九―八四 ユニテリアン派の聖書學者にして、米國合衆國メーン州ウヤクソンに生る。ハーバルト大學新約聖書批評の教授となり(一八七二―八四)又新約聖書改正英譯の米國委員を助けたり(一八七一―八一)『第四福音書の記者』を著し(一八八九―新刊)又ホドソンの『新約聖書字彙』スミスの『聖書字典』及びアルガーの『來世の教理』を出版せり。

アボット ジョルジ Abbot, George 【人名】 一五六二―一六三三 英國ギルドフォルドに生る。牛津バリオル、カレッヂに學び、ユニバ

ーシナー、カレッヂの學長となり、後ライロフィルド、及び倫敦の監督を經て、カンターベリーの大監督となる。曾て新約聖書飜譯者の一人たり（一六〇四）。又英國教會と蘇國教會とを合同せんとて、ダンバー侯と共に蘇國に赴きたることあり（一六〇八）エセックス侯離婚事件の委員長たりし時、離婚の請願を拒否したりし爲め、ウェールス王の忌諱に觸れ、又毒注規定以外の王權を主張せるシプソルプ博士の說教を許可せざりしため其監督職を中止せられたることあり。熱心なるカルビン派の神學者にして、反對者を迫害せり。著書多く、其『ヨハネ講義』は再版せられたり（一八四五）。

アポット ロボルト Abbot, Robert 人名 一五六〇—一六一七 大監督アボットの長兄にして、牛津に學び、パリオル、カレッヂの學長となり、後サリスベリーの監督となる。博學、能文にして著書多けれ共、後世に傳はれるものなし。

アポット エドウィン Abbot, Edwin 人名 一八三八 英國倫敦に生る。神學者にして著書頗る多し『聖書の教訓』（一八七二）『自然より基督』（一八七七）等は其著名なる者也。

アポット ライマン Abbot, Lyman 人名 一八三五 米國マサチュセット州ロクスベリーに生る。ヘンリー、アルド、ビーチャルに學ぎて、ブルークリンの牧師たりしことあり（一八八八—九九）。今雜誌アウトルックの記者たり。曾て其兄弟ベンウャミンと共に、『ベナンレー』の變名を用ゐ、法律書及び小說を發行したることあり。其著書には『宗教字典』（一八七二）『基督教の進化』（一八九二）『基督教の倫理』（一八九七）『古代希伯來人の生活及文學』（一九〇一）及び『ヘンリー、アルド、ビーチャル傳』（一八八三）等あり。

アポリナリウス Apollinarius. 人名 西利亞ラオデキアの監督にして、異端を唱へし故を以て名高し（三九〇死）彼れ初め聖書の註釋及び基督教辯解論を著し、異端を攻擊しニカヤ信條の擁護者たりしが、單にアリウスの說を辨駁するの目的を以て初めたりし彼の基督論は、やがて異端を以て目せらるゝに至れり。當時ニカヤ信條を基として、發達せる神學は、完全なる神性と完全なる人性とは基督に於て結合せるが故に、基督は完全なる神にして、同時に完全なる人也との說を保持せしが、アポリナリウスは之れに反對し、實体學の上より云ふも、心理學若くは教義學の上よりいふも、矛盾せる說也と云へり。彼れ謂へらく、各自完全なる性質を有する二箇の異りたる物体は、相結合して一箇となることは能はず。故に完全なる人と完全なる神と、一体となるが如きことあるべからず。神人一体の觀念の如きは、畢竟希臘の神話に於る人身牛頭の怪物と異なるなきのみ。且夫れ基督に於て完全なる神性と完全なる人性とが結合せりとの觀念は、直に贖罪の觀念を破るものならば罪惡卻るを犯し得べき性質を有するとせば、彼は贖罪の事業を全ふするの資格なければ也。完全なる神性と完全なる人性とは、結合して一体となることは能はざるが故に、もし基督の人性にして完全なりしとせば、彼は、自動的に其神性を放棄したりしならざるべからず。而して苦を受け、十字架に釘けられ、死したるは、唯基督の中に在る人のみなれ共、人の死は以て死を滅すること能はず。此困難を解說せんとしてアポリナリウスは、基督の人性を其肉体と魂魄とに限り、其中に神の道窮り給へる也となせり。此說は大なる波瀾を教會に與へ、アレキサンドリアの會議（三六二）は之を罰し、アタナシウスは之を辨駁せり（三七二）後アポリナリウスは教會を離れて自ら一派を造りしが（三七五）羅馬の會議に於て之を罰し、後鬱々其徒に反對する勅令羅馬帝より出でたり。

アポリナリウス說 Apollinarianism. 學派名 西利亞ラオデキヤの監督アポリナリウスの唱へ出せる說。『アポリナリウス』の條を見よ。

アポリナリス クラウヂウス Apollinaris, Claudius. 人名 フルギアのヒエラポリスの監督。マルカス、アウレリウス帝（一六一—一八〇）の世に出で、ミリトスと同時代に生る。基督教辯解學者にして、モンタヌスの反對者也。著書多しと雖も、今傳はるものは僅に斷篇のみ。

アポロ Apollos (Apollos). 人名 『使徒』（聖書）に連ぜり』（使十八の廿四）保羅の第三傳道旅程に在りし時（五四年）彼れエペソに來り『心を熱くして耶蘇の事を詳細に教へたり』（十八の廿五）然れ共『彼は唯約翰ののバプテスマを知れるのみ』なりしと云ひ（同上）又其後保羅がエペソに來りし時或弟子等保羅に答へて『我儕は聖靈のあることだに聞かざりき』と云ひ『約翰のバプテスマに入れられたり』と云ひしを見れば（十九の一—六）彼は基督教のバプテスマを知らざりしと考へらるゝ。然れ共彼は耶蘇の一生に關する重なる事實をば學知せしものゝ如し。且プリスキラとアクラの家に招かれて彼等より神の道を尙も詳細に學びたれば（十八の廿六）エペソに在る兄弟等の紹書を得てアカヤに往き、『聖書を引て耶蘇の基督なる事を示し人々の前にて猛烈に人を痛く辨駁したり』（十

八の廿七、八）斯くて彼は五七年に至り再びエペソに歸りしが、彼去りて後羅林多信徒の中にはアポロの徒也、保羅の徒也と稱する者ありて教會の分裂を來せり（哥前一の十二、三の五）然れ共彼等の間柄は羅林多教會の建設に與りて最も力ある者はアポロなりや保羅なりや等の事に過ぎずして、保羅とアポロとの間には何等の隔意あらざりしなるべし（哥前十六の十二）。新約中最後にアポロの事を記せるは提多三の十五にして、此時（六七年）彼はクレテに在り。保羅が『アセナス及びアポロを熱切に送りて彼等をして乏しきことなからしめよ』と提太に勸めたるを見れば、兩者の交情の疎ならざりしを知るべし。ルーテルは初めて希伯來書の記者はアポロなるべしとの說を唱へ出せり。此說は今最も廣く行はる。

アポロニア 聖 Apollonia, St. 人名 デアス帝の迫害に依り、アレキサンドリアに於て教に殉ず（二四九）彼女は他の基督信徒と共に捕へられ、其齒の悉く拔くる程類を撲たる。異教徒は更に薪を積て之を燒し、基督を脫せよと命ぜり。彼女は暫時躊躇せしが、俄然自ら火中に跳り入りて焚死せり。中世の頃彼女は齒痛除の保護者として拜まれ、羅馬教會にては二月九日を以て其祝祭日となす。

アポクリファ 『經外聖書』の條を見よ。

アポクリプス 『默示錄』の條を見よ。

アポストリック ブロザルス 宗派名 使徒的兄弟派 Apostolic Brothers. 單にアポストリック（Apostolic）とも云ふ。第十三世紀後半上以太利に起りたる一派にして、ダルハルド、サガレリ（Gerhard Sagarelli）の首唱する所、羅馬教會の虛榮的壓迫に反動して、使徒時代の單純な摸倣すべしと主張す。初めサガレリの勢力は微弱にして、其徒甚だ少かりしが、パルマ監督の干涉（一二八〇）法王の進可を得ざる宗教的結社は一切禁ずと云へるオノリウス四世の法令（一二八六）及びラュールジパルゲの會議に於てサガレリを破門したるも（一二八七）とは、大に世人の注意を引き、其徒益々加はり、一二九四年サガレリは捕へられ、一三〇〇年遂に火刑に處せられしが、彼よりも更に才幹あるドルシノ（Dolcino）代りて首領となり、其熱心と預言の力とに依り、益々多數の徒を集めたり。羅馬教會は彼を捕へんとて軍隊を送り、彼又能く防ぎしが、一三〇七年遂に敗れて火刑に處せられたり。然れ共此派の勢力尙衰へず、後數十年間宗教會議に於て屢々之を禁ぜり。

アポタクチシ Apotactici. 宗派名 第三世紀の頃フルギア、ジリシア及びパムフリアに起りたる道徳教の一派にして、婚姻、私有財産の制等に反對し、此等の點に關する初代使徒の教訓に從ふべしと唱へたり。彼等は又アポストリシ（Apostolici）とも稱せらる。

尼 ヌン、ヌンネリー Nun, Nunnery. 雜語 英語『ナン』はコプチック語の nonnos（ノンノス）より出で『神聖』の義也。基督教會には初代より男性の禁慾主義者と共に、女性の禁慾主義者あり。彼等は『神に聖別せられたる處女』と稱せられ、其家族と共に住したれ共其一生を貧者病人の看護の爲めに獻げたり。誓約をなして監督に依りて聖別せられ、特殊の服裝をなすことを許さる。彼等が禁慾主義者と同時同樣にして、エローム及びアムブローズの時の事也。彼等は監督の支配を受け、其定むる所の規則に從へり。又彼等は日々の禮拜を受けて彼は五七年に至り再びエペソに歸りしが、彼去りて後羅林多信徒の中にはアポロの徒也、保羅の徒也と稱する者ありて教會の分裂を來せり（哥前一の十二、三の五）。然れ共彼等の間柄は單に羅林多教會の建設に與りて最も力ある者はアポロなりや保羅なりや等の事に過ぎずして、保羅とアポロとの間には何等の隔意あらざりしなるべし（哥前十六の十二）。新約中最後にアポロの事を記せるは提多三の十五にして、此時（六七年）彼はクレテに在り。保羅が『アセナス及びアポロを熱切に送りて彼等をして乏しきことなからしめよ』と提太に勸めたるを見れば、兩者の交情の疎ならざりしを知るべし。ルーテルは初めて希伯來書の記者はアポロなるべしとの說を唱へ出せり。此說は今最も廣く行はる。

アポロニア 聖 Apollonia, St. 人名 デアス帝の迫害に依り、アレキサンドリアに於て教に殉ず（二四九）彼女は他の基督信徒と共に捕へられ、其齒の悉く拔くる程類を撲たる。異教徒は更に薪を積て之を燒し、基督を脫せよと命ぜり。彼女は暫時躊躇せしが、俄然自ら火中に跳り入りて焚死せり。中世の頃彼女は齒痛除の保護者として拜まれ、羅馬教會にては二月九日を以て其祝祭日となす。

アポクリファ 『經外聖書』の條を見よ。

アポクリプス 『默示錄』の條を見よ。

アポストリック ブロザルス 宗派名 使徒的兄弟派 Apostolic Brothers. 單にアポストリック（Apostolic）とも云ふ。第十三世紀後半上以太利に起りたる一派にして、ダルハルド、サガレリ（Gerhard Sagarelli）の首唱する所、羅馬教會の虛榮的壓迫に反動して、使徒時代の單純な摸倣すべしと主張す。初めサガレリの勢力は微弱にして、其徒甚だ少かりしが、パルマ監督の干涉（一二八〇）法王の進可を得ざる宗教的結社は一切禁ずと云へるオノリウス四世の法令（一二八六）及びラュールジパルゲの會議に於てサガレリを破門したるも（一二八七）とは、大に世人の注意を引き、其徒益々加はり、一二九四年サガレリは捕へられ、一三〇〇年遂に火刑に處せられしが、彼よりも更に才幹あるドルシノ（Dolcino）代りて首領となり、其熱心と預言の力とに依り、益々多數の徒を集めたり。羅馬教會は彼を捕へんとて軍隊を送り、彼又能く防ぎしが、一三〇七年遂に敗れて火刑に處せられたり。然れ共此派の勢力尙衰へず、後數十年間宗教會議に於て屢々之を禁ぜり。

アポタクチシ Apotactici. 宗派名 第三世紀の頃フルギア、ジリシア及びパムフリアに起りたる道徳教の一派にして、婚姻、私有財産の制等に反對し、此等の點に關する初代使徒の教訓に從ふべしと唱へたり。彼等は又アポストリシ（Apostolici）とも稱せらる。

尼 ヌン、ヌンネリー Nun, Nunnery. 雜語 英語『ナン』はコプチック語の nonnos（ノンノス）より出で『神聖』の義也。基督教會には初代より男性の禁慾主義者と共に、女性の禁慾主義者あり。彼等は『神に聖別せられたる處女』と稱せられ、其家族と共に住したれ共其一生を貧者病人の看護の爲めに獻げたり。誓約をなして監督に依りて聖別せられ、特殊の服裝をなすことを許さる。彼等が禁慾主義者と同時同樣にして、エローム及びアムブローズの時の事也。彼等は監督の支配を受け、其定むる所の規則に從へり。又彼等は日々の禮拜を受けて

天草騷動 『The Amakusa Riot』（アマクサソウドウ）の條參照。 事讀 徳川に天草騷動と稱すれ共、其實は天草、島原の騷動にして、肥前國高久牛島と肥後國天草島に起りたるキリシタン宗一揆が、後には高久牛島の有馬古城（原城）に籠り、此に天下の大軍を引受けて花々しく敗ひたる後、龍城の老若男女僅に變心者山田浦門佐を除くの外、悉く殉教者の血を流したるを以て結局とす。抑も此地方は天主教輸入の時より宣教師の來住する者多く、天草、島原には早く學校の設ありて日本人傳道者を養成し、文祿四年（一五九五）には天草學校の生徒六十名に達し、島原の學校は擴張を告げて有江村に移りし程なれば、日本の西端年ら拉丁文明の感化は此に一種の風俗を作りたりとも云ふべき歟。去れば此地方より傳道者の出でたる者多く、元和八年（一六二二）長崎にて殉教したる藤原左太夫父子、河野七右衛門、寛永二年（一六二五）同所にて同じ運命に死したる仁助、嘉助の二人、寛永六年（一六二九）同所にて殉教したる石田某祐何れも皆有馬の產也。天草騷動の首領たりし益田四郎の父甚兵衛は、天草大矢野の人にて、島原、天草逸彼方此方を巡行しキリシタン宗を說きたることありしと云へば、是亦宗教の教育ありし人物なるべき歟。民間既に原の如く宗門行はれしのみならず、高久牛島の領主たりし有馬の家中にはキリシタンの徒甚だ多く、領主有馬修理大夫晴信德川幕府に對し表面は不信者を裝ひ居りしが、其實は洗禮を受けて教名をウヤンと稱し、

家臣多くは宗門の徒なりし也。然るに晴信がキリシタンなること後不圖したることより露顯せしかば、大御所(德川家康)大に驚き、慶長十七年(一六一二)三月廿三日晴信を甲斐國都留郡に流し後自殺せしめらる。但し遺領は子息左衛門佐直純に賜りぬ。こは舊封の例に非ず、直純には罪なければ新封の義にて家を承けしめし也。是れ併し乍ら大御所の外曾孫女(本多忠政の女、始め越後の堀氏に嫁す)に配したるゆかりあるが爲め也とぞ。幕府は於是淨僧爲圖意を有馬氏の領地にやり佛教を演說して其民を化せしむ。そは其士民に天主教歸依の者多きを以て也。去り乍ら幕府はそれにも滿足せず、慶長十九年(一六一四)二月遂に有馬氏を日向國縣に移したり。有馬の家人等天主教に歸依し領主の命に從はず、無事に新封の地に轉ぜんこと難儀也と聞えしかば、近國の大名より出兵して鎭壓したり。流石に天主教の巢窟たりし高久半島も此威壓手段にて暫くは外面だけ教門滅亡の狀を示したれ共、幕府は尙油斷せず、元和二年(一六一六)松倉豐後守重政を大和五條より移し、原封三萬三千石に加ふるに一萬石を以てし、高久一郡は天主教の巢窟なれば力を盡して邪宗を滅はすべき內旨あり、諸役を免除せられき。此人寬永十年(一六三三)に歿す。始め有馬氏の居りし原城に住せしが、元和四年(一六一八)治を島原に移したり。されば此人が高久半島に領主たりしは、通計十八年也。此間此附近にて外國宣敎師、日本人傳道者抔の官吏の追捕に逢ひて火刑に處せらるゝ者少からず。兼て天主教の教門には素養深く內々信仰を棄てざる人民は殉教者の奇特なる死狀を見ては一層感奮し、政府の手段の餘りに殘酷なるを恨めしく思ひたり。元和七年(一六二一)頃松倉氏の領地に白人宣教師の潜伏する者十人許りなりきとあれば、之に從ふ日本人傳道者抔を合せたらば隨分の人數なるべし。左樣の人々が形を變へ姿をやつし鳴りを沈めて谷の木の葉の下くゞる水の如く、靜に人民の耳にさゝやきたる結果は、迫害の強ければ強き丈け深大なる者ありしならん歟。他日の大破裂は此に基くと云ふも可也。乍去官吏の異教迫害はそれにても猶足らずとし、寬永三年(一六二六)頃より半島の中央に聳へたる溫泉岳にて熱湯の慘刑を行ひ、以て信者の心を畏さんとしたり。

然れ共此慘刑は長崎奉行のしたることにて、藩主松倉家の直接に行ひたる者に非ず。長崎奉行は是まで何にて畏しても天主教徒がびくともせざるに困じ、溫泉岳の熱湯を利用しそれにて信心を緩へさせんとしたることなれ共、天主教徒は此處にも例の我慢を現はし、沸沸る熱湯をそゝがれ、皮肉はやけ爛れ、屍は熱湯の底に沈められたれ共、尙其信仰を棄つべしと言ふ者勿りき。斯く此示威運動も其効なかりければ寬政九年にて一先づ切上げとなり、其年の四月山中に有りし天主教徒は長崎に呼びかへさるゝこととなりぬ。高久半島の事は斯樣の次第なるが、扨眼を轉じて江戸政府の處置を見るに、天主教撲滅の決心愈々堅き者の如く、寬永十二年五月には國中に令して全く海外の渡船を禁じ、三本の帆柱を用ゆるさへならぬこととなり、五百石以上の船を作るまじき定とはなりぬ。其上宗門の檢查を嚴重にし例の寺證文の法を立て日本の津々浦々何處も天主教徒の住みがたきやうになしたり。江戸政府のキリシタン宗門に對する迫害此の如く日々嚴重となり來れるさへあるに、かてゝ加へて高久半島にては領主松倉重政卒し、子息長門守重治の世となりしより政道其宜しきを得ず、士民の不平を招き寬永十二年には家士四十八人の立退を見るに至れり。元來高久半島には前藩主有馬家日向轉封の時共に他鄕に往くを好まず、其儘仕を辭して在邑し百姓となりし者あり。此人々は大抵內々キリシタンたる者也。其上士民も亦キリシタン多く、中には時勢に不滿の心ありて松倉家の威を恐れず、藩政の斯く亂るゝを見ては內々舌を吐きて復仇の時機到來せりと思ふ者さへなきに非ざりしに、藩主の惡政日に增長し、非道の事多く人心次第に離るゝ有樣なりしかば、宗門迫害の不平と合して、遂に一揆の騷動を見るに至れる也。

去れ共天草騷動には此外尙至大の原因あり。そは何ぞと云ふに德川の天下も此時迄は創業の際なれば、處分荒療治も多く、大名の家の潰されしものも中々に多し。高久半島附近の事を以て言ふも肥後の中國は小西行長の領地なりしに慶長庚子の役行長無二の石田方にて敗軍したれば、其廿万石の提封は悉く沒公せられ、其天草は寺澤志摩守に與へられ、其外は隈本の加藤家に加恩ありしに、其加藤家も寬永九年に改易の沙汰あり、五十餘萬の家中は遂に浪人となりたり。其外久留米の毛利侍從秀包も庚子の役に西軍に屬して家を失ひ、臼杵の太田飛彈守、筑後山下の筑紫氏も小倉の森壹岐守も同樣の理由にて降封せられ、大友宗麟の遺孫も庚子の役に方向を誤りたれば流石の名家も再興の望全く斷へ、舊臣遺氏の空しく世路の困難に泣きし者も多かりしなるべし。九州以外には尙廢封の家少からず。之が爲めに浪人の多くなりしこと疑ふ可らず。左樣の浪人が日本國中に彷徨したりし其頃の天下を想像すれば、國中一般不平の氣滿ちて時勢を憤る者の聲も自ら聞へたるは勿論也とす。左れば天草騷動とて決して地方的の現象に非ず、やはり日本全國の形勢が生じ出したる騷動也。乍去島原城中に籠りたる浪人は日本國中の寄り集り勢に非ず、何れも高久半島並に天草島に土着したる人々のみなりしは讀者の注意すべき處也。扨も高久半島の不平黨は既に藩主の逆政に苦み、既に天下に不平多きを聞き、世變既に近きに在りと想像したりけるに、忽ち江戸の秘密也とて人々の口より耳に傳へられたる一說あり。當時將軍家は癩病に罹り居れり、既に若年より其病の芽ありしかば自ら恥ぢて簾中を迎へざりしを、老臣等は血統の絕へんことを恐れて室あらんを勸めしかば、其人京都より下向ありしかども夫妻の御契はなく別殿に住し給へりと云ふ。是は固より齊東野人の語にて事實上の根據なきことなれ共、キリシタンは將軍家を宗門の大敵、神を瀆す者の巨魁と見做したれば、天罰にて人に忌まるゝ惡疾に罹りたり抔想像したるは自然の勢なるべきか。さて此想像が事實と信ぜられて長崎より九州地方に傳へられ高久半島にも入り來りたれば、例の不平黨はさてこそ天運循環時節到來也と內心大に賴もしく思ひたることならん。是れぞ天草騷動の發端なりしなるべき歟。

島原一揆が單に宗門のために非ざるは、同じ島原領にても日見、樺州、大崎、北浦、木場抔云へる長崎地方と相接したる諸村が始めより此一揆に加はらず、終始鎭靜の狀態を保ちたるにて知るを得べし。且島原城中に籠りたる者は悉く島原、天草地方のもののみにて、肝腎の長崎すら人氣に少しの動搖なく、內々天主教に未練ありし九州の舊信者も之を坐視して一人の起て應ずる者勿りしは、益々此騷擾の原因が單純なる宗門の信仰に起りし者に非ざることを知るべし。但し斯く言へばとて宗門の信仰が此騷動に全く關係なりしには非ず。宗門の信仰が手傳はざれば此騷動を歷史に傳はる程大なる者にはなし榮し也。されば此點より見れば之を宗門の戰爭と云ふに異議ある可からず。殊に其頃天主教にて專ら唱へたる末世基督再來審判の教理が信者の心を堅くし、天下を敵とするをも厭はざるに至らしめたる作用に至ては眞に驚くべき者あり。此頃島原、天草にて誰れ言ひ出しけん、今年より肥前肥後にヂェイツゼラル(天地滅盡、基督再來)始まるべし、來年は九州盡くヂェイツゼラルたるべし、三年の後日本六十餘州悉くヂェイツゼラルたるべし、天主此言を貝殼に記し給ひて天草大矢野に降し給へりと云ふ說流布したり(耶蘇天誅記)彼等は兼てヂェイツゼラルの教理を事實として確信したる人々なれば、さては天主は愈再來し給ふべし、世界は滅亡すべし、罪を悔て今までの冷淡を懺悔し再び天主の信仰を公言して天誅を免るべしとて忽ち一揆を起したり。

其外天草、島原の人々を團結したる一勢力は增田四郎時貞といふ美少年の人格也。世に傳はる所に依れば、四郎の父益田甚兵衛は肥後宇土の人にして小西行長の右筆也(耶蘇征伐記)行長の滅後宇土に隱居し、島原長崎邊を彼方此方と巡回し密にキリシタンの宗門を法談し、此騷動の起りし年の夏は天草大矢野鄕越野浦に居たりといふ。甚兵衛は此時既に六十と聞へたり。四郎は即ち其子也。幼にして神童の名あり。其五歲にして書きたる字さへ幅物として珍重する者さへありしと云へば其夙達の才なりしを知るべし。嘗て熊本士人某の小姓たりしことあり、後長崎に遊學し、歸りて父を助けて傳道に從事せしかば、其名次第に高くなりぬ。四郎寬永十四年、十六歲の少年にして美貌世に類ひなく宛も處女の如くなりしといふ。此少年不思議に信者の迷信を獎す一原因となり、はては今より廿五年前天草上津浦のバテレン某、此島を放逐せられし時言置きたることあり、今より廿六年後此地に善童を生ずべし、是れ天の使也と云ひたるは此少年なるべし抔云ひはやす者あるに至れり。是亦一揆の結合を猛烈ならしめたる一原因となりにき。尙一揆をして自信力を生ぜしめたる他の一原因は、此地方が鐵砲の製作に長じ、從て其使用に慣れたること也。此戰爭の始終を見るに一揆は百姓に似合はず、多分の鐵砲を有し火藥も割合に潤澤にして射擊も亦下手ならざりしが如し。此一事は彼等をして天下を敵として戰はしむるに、幾分か其自信力を助けたりしことなるべし。

世に云ふ天草騷動は寬永十四年(一六三七)十月十五日島原領有馬村にて夜中一揆の起りしに初まり、翌年二月廿八日一揆の立籠りたる原城の全く落城したるを以て終とす。此間日を閱すること百三十に過ぐ。彈丸黑子に過ぎざる高久半島及び天草島の士民を以て天下の大兵を引受け此程持ちこたへたること宗門の熱心に基けり。落城の後梟首の者二萬百五十に及びたるを見れば、長籠城にも二心を生ずる者少く、食既に盡きて草を食ひ、草既に盡きて人の屍を食ひ、火藥既に盡かずして木石を投じ、木石既に盡かずして器財を投じ、一身赤裸々復依りて鬪ふべき者なきに至りて尙其信仰を易へざりしを見るべし。乍去此戰をして斯く長引かしめたるには尙他の原因あり。他なし天下漸く泰平に慣れ幕軍の掛引迅速ならず、空しく時日を遷延したれば也。例之此一揆の起りしは寬永十四年十月十五日なれ共、一揆鎭撫のため板倉內膳正重正、日附石谷十藏貞淸の島原に至りたるは十二月三日にして、此間五十日を經た

天草騷動
天草騷動
天草騷動

り。去ればこそ此間に島原一揆は天草一揆と合し、高久牢島の險要と聞へたる原城を籠築し、職び得べき壯丁二萬三千、老幼婦女を併せて三萬餘人、五百挺の鐵砲、七箱の鉛丸、廿五箱の彈藥を用意し、深く天主の爲に職はんとて靜まりかへりて官軍を待かけたり。爰には職記は暗して記さず、唯此戰の特質として注意すべき者を擧げんに(一)城中城外悉く天主教の徒なりしかば、攻圍軍の消息は自ら城中に聞へ易く、從て攻圍軍は屢々意外の損失を招きたる事。(二)城中に集合したる人物は主として天草島原地方の者に限りしかば其方言凡て一定し、之に加ふるに當時天主教徒の慣用せる外國語雜へ用ゐられしかば、攻圍軍より間諜を用ゐしも言語不明なりし事。(三)城中に於ては日々宗教上の集會を催し人心を堅くしたる事。(四)又耶蘇、マリヤの名を喝へ日々舞踏歌唱して信心の昂上を謀りたる事。(五)城中の人家には何れも天主の像を掲げありし事、並に兵士皆十字架を額にしたる事。(六)增田四郎を天の遣はし給へる功德廣大聖化自在の聖童也としたる信仰の容易に衰へざりし事。(七)加藤、小西の浪人尚生殘りて城兵の幹部たりしかば、軍の進退自ら法ありて世の所謂百姓一揆に類せざりし事。(八)城中固より必死を期したれば、二心を懷きて降參する者少かりしと拔其首要の者とすべき點。却攻圍軍に於ては板倉、石谷の初めて原城下に著したるは、城中既に守備全かりし時たりしのみならず、板倉は中島一萬五千石の小諸侯にして、石谷は千石の旗本たるに過ぎざりしかば、二人の威望未だ九州諸侯を壓するに足らず。軍令も自ら行屆き難き所あり。兵數も總勢三萬には過ぎざりしかば、十月廿日の總攻擊に皆手負一人だになかりしかば、板倉は此城の力攻になり翻きを察し疊を堅くして長圍の計を爲さんと欲したれ共、此間幕府にては只管成功を急ぎ、初め幕軍の向ふと共に直ちに解散すべしと豫期したる一揆の思の外手强きを聞きて遽かにあわて出し、更に松平伊豆守信綱、戸田左門氏鉄を征討使として發したりしかば、板倉は已の功なきを恥ぢ、諸軍を指揮して一擧に城を屠らんと欲し、寛永十五年正月元日再び總攻擊をなし、爲めに死傷四千餘人に及び、重昌は五十一歲を以て打死し、石谷も亦重傷を負ひ、總敗軍に及びたり。此總敗軍ありし日より中一日を隔て正月三日信綱、氏鉄島原に入津し、信綱は同く四日有馬に著したり。是より愈々長圍の計を定む。且此頃幕府より更に隣國諸侯に出陣を命じたれば兵數漸く增して十餘萬に及べり。信綱が平戸の和蘭船を招きて大砲にて城の東隅を討たしめたること正月六日より同廿五日迄にして、其間四百廿五發を發し、其廿五日砲の破裂に依り斃人一人死したりしも期さしも船への功德廣大聖化自在の聖童也としたる信仰の容易に衰へざりし事。(七)加藤、小西の浪人尚生殘りて城兵の幹部たりしかば、軍の進退自ら法ありて世の所謂百姓一揆に類せざりし事。(八)城中固より必死を期したれば、二心を懷きて降參する者少かりしと拔其首要の者とすべき點。却攻圍軍に於ては板倉、石谷の初めて原城下に著したるは、城中既に守備全かりし時たりしのみならず、板倉は中島一萬五千石の小諸侯にして、石谷は千石の旗本たるに過ぎざりしかば、二人の威望未だ九州諸侯を壓するに足らず。軍令も自ら行屆き難き所あり。兵數も總勢三萬には過ぎざりしかば、十月廿日の總攻擊に皆手負一人だになかりしかば、板倉は此城の力攻になり翻きを察し疊を堅くして長圍の計を爲さんと欲したれ共、此間幕府にては只管成功を急ぎ、初め幕軍の向ふと共に直ちに解散すべしと豫期したる一揆の思の外手强きを聞きて遽かにあわて出し、更に松平伊豆守信綱、戸田左門氏鉄を征討使として發したりしかば、板倉は已の功なきを恥ぢ、諸軍を指揮して一擧に城を屠らんと欲し、寛永十五年正月元日再び總攻擊をなし、爲めに死傷四千餘人に及び、重昌は五十一歲を以て打死し、石谷も亦重傷を負ひ、總敗軍に及びたり。此總敗軍ありし日より中一日を隔て正月三日信綱、氏鉄島原に入津し、信綱は同く四日有馬に著したり。是より愈々長圍の計を定む。且此頃幕府より更に隣國諸侯に出陣を命じたれば兵數漸く增して十餘萬に及べり。信綱が平戸の和蘭船を招きて大砲にて城の東隅を討たしめたること正月六日より同廿五日迄にして、其間四百廿五發を發し、其廿五日砲の破裂に依り斃人一人死したりしも期さしも船への功なきを恥ぢ、諸軍を指揮して一擧に城を屠らんと欲し、寛永十五年正月元日再び總攻擊をなし、爲めに死傷四千餘人に及び、重昌は五十一歲を以て打死し、石谷も亦重傷を負ひ、總敗軍に及びたり。此總敗軍ありし日より中一日を隔て正月三日信綱、氏鉄島原に入津し、信綱は同く四日有馬に著したり。是より愈々長圍の計を定む。且此頃幕府より更に隣國諸侯に出陣を命じたれば兵數漸く增して十餘萬に及べり。信綱が平戸の和蘭船を招きて大砲にて城の東隅を討たしめたること正月六日より同廿五日迄にして、其間四百廿五發を發し、其廿五日砲の破裂に依り斃人一人死したりしも期さしも船への功なきを恥ぢ、諸軍を指揮して一擧に城を屠らんと欲し、寛永十五年正月元日再び總攻擊をなし、爲めに死傷四千餘人に及び、重昌は五十一歲を以て打死し、石谷も亦重傷を負ひ、總敗軍に及びたり。此總敗軍ありし日より中一日を隔て正月三日信綱、氏鉄島原に入津し、信綱は同く四日有馬に著したり。是より愈々長圍の計を定む。且此頃幕府より更に隣國諸侯に出陣を命じたれば兵數漸く增して十餘萬に及べり。信綱が平戸の和蘭船を招きて大砲にて城の東隅を討たしめたること正月六日より同廿五日迄にして、其間四百廿五發を發し、其廿五日砲の破裂に依り斃人一人死したりしも期さしも船への功なきを恥ぢ、諸軍を指揮して一擧に城を屠らんと欲し、寛永十五年正月元日再び總攻擊をなし、爲めに死傷四千餘人に及び、重昌は五十一歲を以て打死し、石谷も亦重傷を負ひ、總敗軍に及びたり。此總敗軍ありし日より中一日を隔て正月三日信綱、氏鉄島原に入津し、信綱は同く四日有馬に著したり。是より愈々長圍の計を定む。且此頃幕府より更に隣國諸侯に出陣を命じたれば兵數漸く增して十餘萬に及べり。信綱が平戸の和蘭船を招きて大砲にて城の東隅を討たしめたること正月六日より同廿五日迄にして、其間四百廿五發を發し、其廿五日砲の破裂に依り斃人一人死したりしも期さしも船への功なきを恥ぢ、諸軍を指揮して一

アマサ Amasa.　人名　(一)エサルの子にして母はダビデ王の妹アビガイ也。アブサロムの謀反に加はり其軍に將となれり(毎後十七の廿五)王軍の將ヨアブの爲めにエフライムの森に於て敗らる(十八の六—八)ダビデ王其即を救せしのみならず、ヨアブに代りて其軍に將たらしむ(十九の十三)アマサ王軍を率ひてシエバを戰ふやギベオンに在る大石の傍に於てヨアブの爲めに殺さる(二十の九—十二)。(二)エフライム人にして、イスラエルの王ペカがアハズと戰ひて其の捕虜なサマリヤに遷れ歸りしとき、痛く之に反對せし人也。(代下廿八の十二)。

アマヂア Amaziah.　人名　ユダの王(前八三八—八〇九)炎はヨアシ也。炎の爲めに譬を報ひエドマア人を打敗り、イスラエルの王エホヤシを攻めしが、軍敗られエルサレムは擒れ、財寶は掠奪せらる。エホヤシの死後十五年間王位に在りしが後人に殺さる。(王下十四)。

アマルリック Amalric.　人名　第十二世紀の中頃、佛國パリの生る。巴黎大學神學及び哲學の教授なりしが、異端の宣告を受け、憂鬱死に至る。彼が一派を立て無數の門弟を有せしこと、其死後に至りて發見せられ、彼の遺骸は發掘せられ、其弟子の重なる者は罰せらる。彼の教理は(一)神は萬事也(二)基督信徒は各皆自ら基督なる休の肢なること信ずざるべからず、此信仰は救主の生と死との信仰と同く、救拯に必要也(三)愛に居る者は罪を犯さず、その三箇の基礎の上に立ち、門弟等更に之を敷衍、發達せり。彼等の信ずる處に依れば、神はアブラハム、基督及びアマルリックに於て、三度已を顯はせり、基督は人は神也との意義に於てのみ神也。彼等は教會の聖式を信ずせず、聖徒の禮拜を以て偶像禮拜となし、教會を以て默示錄中のバビロニヤ也と云ひ、法王を以て基督の敵也となし、又彼等の社會の外に死者の復活、天の國あるを信ずず、罪惡の意識の外

に地獄なしと云へり。

アマレク Am'alek.　人名　エサウの孫也(創三十六の十六)。然れどもアマレク人の祖先にはあらず、何となれば創十四の七に見ゆる如く、彼の生るゝ前已に此の人種存在したれば也。

アミロウ モイス Amyraut, Moïse　人名　一五九六—一六六四　新教の家庭に生れ初め法律を學びしが、カルヴィンの書を讀で神學に志し、ソーマル大學(Saumur)に入り、後其教授となる。後來りて此大學は戰に隆盛に向ひ、國外、殊に瑞西より學生群集せり。然るに彼の教ふる所稍や異端に傾けりとて非難百出、其『預定論』(Traite de la Predestination)出づるに及び、物論沸騰、セダンの正統派大學教授ピエル、ド、モーソンを初め其他の學者大に彼を攻擊せり。如此彼は三度異端の告訴を受け、三度放免せらる。後佛國の神學者は多く彼と調和するに至り、瑞西の學生はソーマルを退學せり。右に記載せる外彼の著書頗る多し。

アムスドルフ ニコラウス フォン Amsdorf, Nikolaus Von　人名　一四八三—一五六五　ルーテルの最も親密なる友、最も熱心なる信徒の一人にして、ウォルムスの會議に彼に伴ひ、彼の窟にウインテンベルグに來るや、其家に招きて之をかくまへり。又彼の聖書翻譯を助け、其著書の出版を監視し、彼に依り選ばれて監督となれり(一五四二)。彼れ智力敏捷なれ共、狹隘にして其論爭稍もすれば極端に走り、メニウス(Menius)との論戰に於ては、善眞なる行爲は救搖に害ありと唱ふるに至れり。ルーテルの死後、彼とメランクトン及びウィッテンベルグの人々との交情全く疎隔せり。

アムフィロキウス 聖 Amphilochius, St.　人名　カパドキアに生れ、法律を學び、コンスタンサノープルに於て辯護士の業を營みしが、後テオザフに退き、隱者の生活をなし、三七五年選ばれてイコニアムの監督となる。熱心にアリウスの神學に反對し、帝を勸めてアリウスとの爭點に關する議論を公になすを禁ぜしむ。彼の著書と稱するもの數多あれ共、『エピストラ、シノデカ』(Epistola Synodica)の外は、僞作にして信ずべからず。此書は三位一體の正統說を辯護せるもの也。生死の年月詳ならず。

アムブロス 又は **アムブロシウス** Ambrose or Ambrosius, St.　人名　聖 三四〇—三九七　アムブロスは羅馬貴族の家に生れ羅馬にて法律を學び、後北伊太利の知事となり、其首府ミラノの監督死し、其後任者に關し正統派とアリウス派との間に爭論あり、ミラノに住せり。彼知事となりて後幾ならず、公になすを禁ぜしむ。彼の著書と稱するもの數多あり。此時に於て新知事の能力と、其公平無私なるとに感じ居りしが故に、滿場一致を以て彼を擧げて監督となしたり。然るに彼は此時基督教に就ては尙未だ永遠者にして、洗禮さへ受け居らざりしかば、固辭して受けざりしが、會員一同の歎願に依り、遂に其請を容れ、直に洗禮を領し、八日の後聖別せられて監督の寄附ぜり。斯くて彼は其死に至るまで凡そ二十三年間教會の爲に盡力し、彼が在職中其位に就きたりし三人の法王よりも、更に偉大にして善眞なる働をなしたり。彼は羅馬帝國の運命遂に衰頽に傾くべきことを思ひ、教會を組織して之に依て以て人類を救濟せんとせり。彼は元來寬容の人なりしが、異端の蔓延には極力反對し、アリウス派なるヴァスチナ皇后の努力ありしに拘らず、ジルヨタムに正統派の監督を置き、又皇后がアリウスの徒の爲めに、ミラノに會堂を建てんとせしが、之なを拒んで許さず、此の如くにして大に正統教會の發達を保護したり。彼は又異教の風習を存することを好まず、元老院の門壁に立てる祭壇の再興に反對し、パレンチニヤン及びテオドシウス帝をして、再び之を破壞せしめたり。彼は又教會を監督するの熱心を以て貴民を輔助し、又は野蠻人のために執へられたる者を救はんため、會堂の裝飾的物品を賣り、其金を以て之を贖ひ出せり。曾てテサロニケ人其地方の知事に背きて謀反し、之を殺害せし時、テオドシウス帝大に怒り、其市民を處罰し、凡そ七千人を殺數せり。其後帝ミラノに來り、其地の會堂に入らんとせしが、アムブロスは之を許さず、會堂の入口に立て其入場を拒絕して曰く『人を殺戰したる手を以て、如何ぞ神前に出で、其聖體(即ち晩餐)を受くるを得んや』と。帝は此語に感激し、八ヶ月間公然自己の殘忍猛惡なりしことを懺悔し、漸く教會の禮拜に與る、ことを得たり。アムブロスは素より神學の奧義を極めたるに非す、然れ共熱誠の人にして、彼は謹厳の時間を減て神學を學びたりと云ふ。其著書の知き別に新奇の思想なしと雖も、實際上の教訓多し。彼は又ミラノの教會のため禮文を作り、教會の音樂を改良せり。

アムミアヌス マルセリヌス Ammianus Marcellinus.　人名　アンテオケの人、幼にして哲學及び辯論學を學び、身を軍籍に投じ、ユリアヌス帝に從て、彼斯軍と戰ひ、後又羅々從軍して功あり。後羅馬に退き、歷史の研究に其一生

を委し、紀元四百年頃死ぜり。其著羅馬史は、ヲルパの時より(九六)ゲアレンスの死に至り(三七八)三十一卷より成れ共、初め十三卷は紛失して傳はらず。其傳はれる者は、基督教會史重要の實料也。一般の說に依れば彼は基督信徒に非ざりき。故に其書中彼は外敵者の地位より基督教を觀察し、其事實を記述、說明ぜり。

アムモニウス アレキサンドリアの Ammonius of Alexandria. 人名 オリゲンの教師にして、第三世紀の中頃編輯書の和合を謀り、且編輯書を項目に分てり、『アムモニウス項目』と稱する者是也。彼の著書に『モーセ及耶蘇の和合』ありたりとのことなれ共、今日に傳はらず。

アムモニウス サッカス Ammonius, Sac? 人名 サッカスとは綽の義にして、少年の時擔夫を業とし、籠を擔ひしを以て此名あり。第二世紀の頃アレキサンドリアに住し、アレキサンドリア派哲學の祖となる。プロチナス及びロンギナスは其門に出づ。然れ共彼には著書なし。ポルフィリーの云ふ處に依れば、彼に基督教の家庭に生れたれ共、後基督教の信仰を棄てたりしといふ。

アムモン クリストッフ フレドリッヒ フォン Ammon, Christof Fredrich Von 人名 一七六六―一八五〇 エルランゲン大學に學び、其哲學、神學の教授となり、ゲッチンゲン大學神學教授に轉じ、再びエルランゲンに歸り、後宮廷說教者となりてドレステンに往く。其最初の著『純正聖書神學要論』は、其重なる著書の一にして、書中インスピレーション說なる以て、編次人の自負心より來りたるものとなし、常識を以て天啓の眞理を判斷する標準となせり。次で世に出でたるは『基督教論理學撮要』『神學概論』等にして、著者は此等の書に依りて、純理派雄將の一人と認められたり。『時代宗教の欠點に對する苦樂』に於て、著者は一時正統說に歸りたれ共後又純理說を主張ぜり。晩年の作『耶蘇傳』『正統神學の眞髓』等は、神學界の注意を引くに至らず。

アムヨー ジョセフ Amyot, Joseph 人名 一七一八―九四 イエスイット派の僧にして支那に往き(一七五〇)四十四年間傳道の後北京に死す。孔子傳(一七八九)滿洲、韃靼、佛語字典及び滿洲、韃靼語文典の著あり。又其著書 Lettres Edifiante et Curieuses には支那の風俗、習慣、法律、宗教及び歴史に關する事實を記せり。

亞米利加合衆國 アメリカガッセウクコク United States of America. 地名 米國の贊見、殖民及び發達は、科學的好奇心、冒險的名譽心、及び自利心と共に宗教的動機の結合して成れる者也。コロンバスは宗教熱心家に動機も異教國民の中に基督教を宣傳せんとするに在り。且彼は其發見に依りて得たる利益の一部分を以て十字軍の費に供し、斯くして地の權にまで十字架旗を翻さんと企てたりき。米國の發見は寇も歐洲に於て宗教改革の起れる少し以前のことにして、此發見に依りてプロテスタント教は其發展と共に此國に入り來れり。今此條下には此國に於ける宗教發達の概略を記す。

【歴史的概觀】北米合衆國の宗教歴史は、一六〇七年バルヂニヤ州の殖民、更に嚴密に之を云へば、一六二〇年ピルグリムスがマッサチュセット灣に上陸したるに初まる。爾後米國は歐洲諸國に於て迫害を蒙りたるプロテスタント教徒の避難所にして、清教徒、長老派、クエーカル派、バプテスト、ヒューゲノー徒、ルーテル派、モラヴイアンス、レフォルムド派等の信徒續を續けて此國に移住し、此處に宗教上の自由を樂めり。英國の羅馬教徒も亦續を避けて來りメリーランドに移住せしが、其多數はプロテスタント教徒なりき。此等の教會は素より微弱なりしが、其後英國の壓制に抗して立ち、七年の戰爭の後遂に其獨立を全ふせる國民を生ずるを得たりき。一七八三年英國と和を講じ、十三州三百萬の民衆を以て獨立國の組織し、一七八七年三百の代議士ヒラデルヒヤに會合して憲法を創定し、政教の分離を明にし、大統領を選び四年を以て其任期となせり。獨立戰爭の結果從來英國の母教會と關係を有したりし教會、例之監督教會及びメソヂスト教會の如き者も、之と關係を絶ちて獨立するに至れり。米國は元來土地尼沃にして、無盡藏の國宝あり。加ふるに政治の自由、人民の勤勉を以てし、建國以來殖産、工業、貿易等各方面に於て長足の進歩を爲し、曾て十三州なりし者、今は四十五州六領地となり、人口は(フランスカ及び布哇を合せて、七千六百三十萬以上を有するに至れり(一九〇〇年調)今日に於ては其富と其文明と世界の諸國に冠たるに至れり。人口の增加と共に教會も亦其會員を增加し、教會及び教會の經營に成る事業、例之學校、病院、孤兒院、感化院、禁酒會、傳道會社の如き者又著しき發達を爲せり。概して論ずれば米國の宗教的生活も亦他國のそれと大差なしと雖も、又多少特色なきに非ず。今左に其重なる者を擧ぐべし。

【政教の分離、信教の自由】(一)中央政府は初より其權限を政治上の事柄に限り、各州の內治、殊に宗教に關係する事柄には一切干涉ぜず。一七八七年制

定の憲法第六條第三節に曰く『宗教上の意見は之なる合衆國の官職又は公の信用を保維する條件となすべからず』と。一七八九年の憲法追加箇條に曰く『議會は宗教の設定(an Establishment of religion)に關する、又は其自由の行動を禁ずる、又は言論、出版の自由、集會及び請願の權利を制限する法律を制定すべからず』と。一七九六年十一月四日トリポリ國と締結せる條約に曰く『合衆國の政治は如何なる意義に於ても、基督教を以て基本とすることなし』と。此政教分離の原則より來る自然の結果は、人民の權利義務は全く宗教の如何に關係なきこと、何人も信仰の爲めに所罰せらるゝことなきこと、何人も信仰の爲めに租稅を徴收せらるゝことなきこと、及び或る宗派に特權を與へて偏頗の待遇を爲す能はざること等にして、歐羅巴の或國々が或る宗派を以て國教となし、又は或る宗派に特權を與へて之を庇護するとは頗る異れる者あり。然れ共政教分離の制度は政教進行制度と同じからず。故に國家の安寧秩序を破り、風俗を紊亂し、國家の法律命に違反する場合には、警察權及び其他の權力を及ぼして之れが取締を爲すを得。例之一八八二年三月廿二日の新刑法に於て、各州悉に國家が直接に司法權を及ぼす地方に於て一夫多妻を行ひたる者を處罰して、五百弗以下の罰金及び五年以下の禁錮に處し、又官職に任用せらるゝ權及び選擧權を剝奪する旨を規定せるが如し。モルモン教徒は如上の信教自由に關する憲法上の原則を引用して、如此き法律は憲法に違反する者なることを主張したれ共、合衆國政府は、國家は風俗を紊亂し社會道德に違反する者を認容して、袖手傍觀すること能はずして之に應ぜざりき。(二)以上は中央政府に就て云へることなれ共、各州に就て見る時は、其原則に就て異なる所なきも、細目に於ては各同じからず。例之或州に於ては左の如き禁制を設くるが如し。(イ)宗教上の言論著作を制限し、又は禁止すべからず。然れ共其著作又は言論にして、表面に宗教を假裝し、實際に道德風俗を害する者ある場合は此限りに非ず。(ロ)宗教上の儀式に參列するを强制す可らず。但し一宗派內に於て此の如き者を破門するは隨意にして、又此の如き宗派を退くも各自の自由たるべし。(ハ)宗教上の目的のために課稅せらるゝことなきも、若し個人自ら進んで任意に義務を負擔したる時は、一般の法律の規定に從ひて之が履行の責に任ずる可らず。(三)前述の如く合衆國は純粹なる政教分離の原則を採用し、之を强行せんことを期せりと雖も、之がため國家は宗教に對して全く無關着也と誤解す可らず。唯國家は全然信政の事に任ずべく、宗教の事は全然之を教會の自由に委すべしと言ふに在るのみ。故に國民は一般に宗教的にして、其多數は基督教徒也。且政府は實際に於て教會に對して幾多の特權を附與せり。例之左の如し。(イ)兵役義務の賠償　ターカル宗徒の如きは全然戰爭を否認し、兵役を否認せり。故に紐育州、ペンシルバニヤ州の如きは、如此き者に對しては金錢を以て兵役の義務に代ふることを許せり。(ロ)日曜日の嚴守　蘇國を除きては米國程日曜日を嚴守するの國他に之れあるなし。此日には勞働を禁じ、又飲酒、諸興行を爲すを禁じ、犯す者は所罰せらる。(ハ)神を誇る者を罰すること　ペンシルバニア、マサチュセッツ、コンチカチカット等の諸州に於ては謂神距なる者を規定し、犯す者は所罰せらる。(ニ)議會に於る祈禱　此家の立法機關たる議會を開會するに當りて祈禱を行ふ。而して議會は之がため教師を任命す。(ホ)陸海軍の說教師　大統領は陸海軍に說教師を任用す。(ヘ)兵役及び陪審義務の免除　バルヂニア、コンチカチカット、テキサス諸州の採る所也。(ト)租稅の免除　教會の財產は一切の租稅を免除せらる。然れ共政府は又或點に就ては教會に對し、他の一般の結社よりも强き制限を附するの場合あり。即ち左の如し。(イ)教會財產取得の制限　各州は大抵不動產の取得を禁ず。バルヂニヤ州にては、教會が一個人の遺言を以てする財產の贈與を受くるを禁ず。紐育其他の數州にては、宗教上遺贈の手續及び金額に制限を附せり。(ロ)一宗派法人たるの禁止　合衆國に於る凡ての宗派は、其一宗派の教師、教會を總括して一の法人と爲すことを許可せられず。法人たるを得る者は、各教區の教會のみにして、一宗の業件の下に許可せらる。(ハ)教會を法人とするの禁　バルヂニア州にては教會は法人たるを得ず、唯教會を代表する委托人之を主管す。而して此委托人は教師、信者兩者より成るを要す。

【教會維持法】信教の自由は合衆國民の受くる特權なるが故に、米國にては洗禮又は聖信禮を强制するが如きことなく、又教會に出席するもせざるも各自の自由也と雖も、國民の多數は何れかの教會に出席するを常とし、又喜て教會維持のために貢用を醵出す。多少の除外はあれ共、米國各派の教會には大抵信徒の寄附金に依りて維持せられ、各派所屬の大學及び神學校も亦有志の寄附金に依りて維持せらる。牧師の俸給は大抵坐席料及び日曜其他の集金に依りて支給せられ、平均一人の年俸額八百弗に上り、大都市の牧師の中には五千弗より二萬弗の年俸を受くる者あり。神學教授の平均年俸は凡そ一千二百弗に出

づ。信徒は唯に教會及び學校を維持するのみならず、又聖書會社、續書會社、傳道會社等をも維持し、之が爲め年々巨額を出捐せる金額數百萬弗に上る。

【主要なる宗派】米國に在る主要なる宗派は大抵歐洲より來れる者にして、米國に於て新に設立せられたる小派も亦少からず。紐育、チカゴの如き大都市には大抵各派の教會の設立せらるゝを見る。米國の宗派を大別して三種となすを得べし。第一種は編書主義の教會　即ち宗教改革家の神學を基礎とし、聖書を以て信仰及び行爲の唯一の標準とし、第十六、七世紀の信仰告白を以て教訓の規矩となす教會にして、米國基督教徒の大多數は此種類に屬し、社會に最も強大なる勢力を有す。此中長老、會衆、監督の三派は最も知識あり、教育ある信徒を包容し、中等以上の階級間に勢力を有す。メソヂスト、バプテスト二派は會員の數他派に超え、中等以下の階級間に信徒多し。此等の諸派の中最も古く、且比較的富有なるは監督教會にして、一六〇七年バルヂニヤの殖民に初まる。次は會衆派にして一六二〇年ピルグリムスの上陸に初まり、次はダッチ、レフォルド派にして、一六二八年最初の教會を紐育市に設立したるに初まる。米國最初の有名なるバプテストはロージャー、ウィリアムスにして、彼は一六三六年ローグ、アイランドを開始せり。クェーカル派は一六八〇年、メッヂスト派は一七六六年初めて米國に其基礎を置けり。獨逸教會の米國に於て初めて組織せられたるは、第十八世紀の中頃よりのことにして、其中ルーテル派最も強大にして、日耳曼レフォルムド派之に次ぐ。第二種は羅馬教にして、初めは甚だ微々たる者なりしが、後歐羅巴より多數の殖民移住せるより漸次強大に赴き、今日にては一宗派として他に之に敵する者なきに至れり。移住民の中愛蘭より來る者は多く此教派に屬し、獨逸より來る者の中にも亦此教派に屬する者少からず、南歐より來る者は殆ど都く羅馬教徒也。第三種は教會古來の信條を排斥し、改革教會の宗義を奉ぜず、新なる教義を立てたる者にして、ユニテリアン教會は最も尤なる者也。此教會はボストン及びケンブリッヂに其本部を有し、會員の中には高等なる教育を受けたる者少からず、博愛事業に殷勤なるを以て稱せらる。次はユニバルサリスト派にして、スリエーデンボルヂ派亦此中に入るべし。此外近年新に起りたる諸派亦少からず。

【教會及會員の統計】最近の調査に依れば、米國に於る教會、教師及び信徒の各派別統計左の如し（一九〇七年調）

第一表（教會及び教師の數）

教派	教會數	教師數
アドヴェンチスト派（六派）	三、五四四	一、五六六
バプテスト派（十四派）	五六、二二九	三、八二二、九九九
リバー、ブレズレン派（三派）	九八	一四、三四
ブレモス、ブレズレン派（四派）	三一四	一五、八九二
カトリック派（九派）	一〇、三三一	九九、一四一
カトリック、アポストリック派	六一	一、二〇〇
クリストアデルフィアンス派	一、五〇〇	一、二〇〇
クリスチャン、コン子クション派	一、三〇〇	一、二〇〇
クリスチャン、カトリック派（ダーウィー）	一〇、三〇〇	一、二〇〇
クリスチャン、サイエンス派	一〇、三〇〇	一、二〇〇
クリスチャン、ユニオン派	一、三〇〇	一、二〇〇
神の教會派	一、三〇〇	一、二〇〇
新エルサレム教會派	一、二〇〇	一、二〇〇
コンミューニスチック、ソサイエチー派（六派）	一、二〇〇	一、二〇〇
會衆派	六、六六一、三三四	三、六〇四、三三四
デサイプルス派	一、三六六、一三四	一、三六六、一三四
ダンカルヅ派（四派）	一三、三六六	一、三六六、一三四
福音教會（二派）	一三、三六六	一、三六六、一三四
フレンド派（四派）	一三、三六六	一、三六六、一三四
フレンド、オフ、セ、テンプル派	一三、三六六	一、三六六、一三四
日耳曼エバンゲエリカル、プロテスタント派	一三、三六六	一、三六六、一三四
日耳曼エバンゲエリカル、シノッド派	一三、三六六	一、三六六、一三四
猶太教（二派）	一三、三六六	一、三六六、一三四
モルモン派（二派）	一三、三六六	一、三六六、一三四
ルーテル派（廿三派）	一三、三六六	一、三六六、一三四
瑞典エバンゲエリカル、ミッション、カベナント	一三、三六六	一、三六六、一三四
メソヂスト派（十七派）	一三、三六六	一、三六六、一三四
長老派（十二派）	一三、三六六	一、三六六、一三四
プロテスタント、エピスコパル派（二派）	一三、三六六	一、三六六、一三四
救世軍	一三、三六六	一、三六六、一三四
ジュウエンクフエルゲアンス	一三、三六六	一、三六六、一三四
ソシアル、ブレズレン派	一三、三六六	一、三六六、一三四
倫理教育傷會派	一三、三六六	一、三六六、一三四
スピリチュアリスト	一三、三六六	一、三六六、一三四
セオソフィカル、ソサイエチー	一三、三六六	一、三六六、一三四
同胞教會（二派）	一三、三六六	一、三六六、一三四
ユニテリアン派	一三、三六六	一、三六六、一三四
ユニバルサリスト派	一三、三六六	一、三六六、一三四
インデペンデント、コングレゲーション派	一三、三六六	一、三六六、一三四
總計	一三、三六六	一、三六六、一三四
前年度ニ比シ增加	一三、三六六	一、三六六、一三四

第二表（信徒の數）

教派	信徒數	前年ニ比シ增
アドヴェンチスト派（六派）	九六、六八一	三、六六一
バプテスト派（十四派）	三、三三、三三五	一〇三、三六六
リバー、ブレズレン派（三派）	四、三三九	—
ブレモス、ブレズレン派（四派）	六、六六一	—
カトリック派（九派）	一二、六四九、四五五	三六、六〇〇
カトリック、アポストリック派	一、五〇一	—
クリストアデルフィアンス派	一、三三五	—
クリスチャン、コン子クション派	一〇一、五六四	—
クリスチャン、カトリック派（ダーウィー）	四〇、〇〇五	—
クリスチャン、サイエンス派	八六、〇六六	四、八六六
クリスチャン、ユニオン派	一、三六〇	—
神の教會派	四一、四四五	—
新エルサレム教會派	八、一〇〇	—
コンミューニスチック、ソサイエチー派（六派）	一、二〇〇	一、二〇〇
會衆派	四、〇八四	—
デサイプルス派	六六、六三二	三、六〇四
ダンカルヅ派（四派）	一、三六六、一三四	一〇一、三六六
福音教會（二派）	一三、三六六	三、六〇四
フレンド派（四派）	一三、三六六	三、六〇四
フレンド、オフ、セ、テンプル派	一三、三六六	三、六〇四
日耳曼エバンゲエリカル、プロテスタント派	一三、三六六	三、六〇四
日耳曼エバンゲエリカル、シノッド派	一三、三六六	三、六〇四
猶太教（二派）	一三、三六六	三、六〇四
モルモン派（二派）	一三、三六六	三、六〇四
ルーテル派（廿三派）	一三、三六六	三、六〇四
瑞典エバンゲエリカル、ミッション、カベナント	一三、三六六	三、六〇四
メソヂスト派（十七派）	一三、三六六	三、六〇四
長老派（十二派）	一三、三六六	三、六〇四
プロテスタント、エピスコパル派（二派）	一三、三六六	三、六〇四
救世軍	一三、三六六	三、六〇四
ジュウエンクフエルゲアンス	一三、三六六	三、六〇四
ソシアル、ブレズレン派	一三、三六六	三、六〇四
倫理教育傷會派	一三、三六六	三、六〇四
スピリチュアリスト	一三、三六六	三、六〇四
セオソフィカル、ソサイエチー	一三、三六六	三、六〇四
同胞教會（二派）	一三、三六六	三、六〇四
ユニテリアン派	一三、三六六	三、六〇四
ユニバルサリスト派	一三、三六六	三、六〇四
インデペンデント、コングレゲーション派	一三、三六六	三、六〇四
總計	一三、三六六、二一〇	九六、一、五四〇
前年度ニ比シ增加	九六、一、五四〇	—

メッヂスト派（十七派）
モラビアン派
長老派（十二派）
プロテスタント、エピスコパル派（四派）
レフォルムド派（三派）
救世軍
ジュウエンクフエルゲアンス
ソシアル、ブレズレン派
倫理教育傷會派
スピリチュアリスト
セオソフィカル、ソサイエチー
同胞教會（二派）
ユニテリアン派
ユニバルサリスト派
インデペンデント、コングレゲーション派
總計
前年度總計

以上の表中には基督教に屬せざる者あり、猶太教の如き是也。又純粹に基督教中の宗派と稱すべからざる者あれ共、暫く之を加ふ。

會員の數を見てすれば、カトリック派第一位に居り、メッヂスト派之に次ぎ、バプテスト派又之に次ぎ、ルーテル派、エピスコパル派、レフォルムド派、モルモン派、同胞教會、福音教會、猶太教、フレンド派等次第に之に次ぐ。

アメン Amen (ἀμήν). 術語 希伯來語にして、確實の義を有す。(一)今語られたる事を自己のものとして採用するの目的を以て用ゐらる。『斯くあり』又は『願くあるべし』といふの意也(民五の廿二)。此語は宗教上の事にのみ用ゐらる、神は事を眞實に爲し給ふべしとの信仰を表白する者なれば也。アメン、アメンと重ねるは語意を強むるが爲め也。公拜の祈禱、感謝、祝禱及び頌歌の終に、又人々はアメンと云ふ也(尼八の六)此風は猶太の會堂より基督教會に傳はり(骨前十四の十六)以て今日に至れり。(二)自己の祈禱、感謝、祝禱及び頌歌を確むる爲めに之を用ゆ(羅一の廿五、九の五)。(三)耶蘇は自己の言を述べんとする前に、最も厳かなる調子を以て、此語を用ゐたり。『我れ誠に爾に告ん』と云ひ『我れ誠に誠に爾に告ん』といふが如し。此に云ふ『誠』はアメン也。(四)基督及び神の名として此語を用ゆ。例へ基督に就ては『アメンたる者、忠信なる眞實の証者』云々と云ひ(默三の十四)神に就ては『眞實(アメン)の神』云々と云へるが如し(賽六十五の十六)。

アモス Amos. 人名 猶太の預言者、亞歴士書の作者。亞歴士書に依れば、彼はテコアの牧者にして(一の一)又桑の樹を作る者也(七の十四)テコアはエルサレムの南凡そ九哩の地に在り。去れば彼が南王國の出なりしこと殆ど疑なし。去れ共彼はエホバの命に依り、北王國の預言者となれり(七の十五)彼が『我は預言者に非ず、又預言者の子にも非ず』(七の十四)と云へるは、彼が職業若くは教育に依りて預言者となりしに非ず、其受けたるインスピレーションの人爲的不自然に非ざるを云へる也。亞歴士書の云ふ所に依れば、彼は『地震の二年前』に其使命を初めたりしと云へ共(一の一)其地震は何時頃迄りたりしものなりや明ならず。然れ共此書の内容より察するに、彼の預言はヤラベアム二世治世の晩年、即ち前七六〇―七四六年に渉りたりしこと疑なきが如し。ヤラベアムの治世はイスラエル王國の全盛時代にして、彼は其曾て失ひたりし所領を恢復せ

り(玉下十四の廿三—廿九)亞摩士書の示す處に依れば、當時國民は豪奢安逸を極め(六の一—五)ベテル、ギルガル及び其他の處にては偶像禮拜行はれ(四の四以下、五の廿一—廿三等)國民一般に頗る傲慢の態度を有したりき(六の十三)。是れアモスがベテルに顧はれ、國民の災殃を預言せし所以也。斯くて彼は祭司アマジヤの滅亡及びイスラエルに關する預言を終り、家に歸り其預言の大要を錄せり。亞摩士書は即ち彼が斯くして錄したる者也。

亞摩士書 The Book of Amos. 【經名】 預言者アモス(別項『アモス』參照)の預言を記したる者、舊約聖書中の一卷、小預言書の第三位に在り。

【此書の内容】 は左の如く概括するを得べし。緒言(一、二章)イスラエル隣國民及びイスラエル國民の罪惡を示し、刑罰の必至を說く。第一部(三—六章)(一)執政者次に國民一般に向ひ、神の審判を說き、其悔改を勸む(三の一—四の十三)(二)アモスの國民の罪惡に對する悲痛、讒責、眞の宗教に歸らん:との勸奬、及び神の言を聽かざる時來るべき滅亡、俘囚の預言(五章)(三)國民の奢侈、自尊、傲慢に對する讒責(六章)。第二部(七—九章)(一)三の異象(七の一—九)(二)アモスの追窮せられたる事(七の十—十七)(三)第四の異象、刻薄なる商人、放逸なる富者及び迷信的巡禮者に對する攻擊(八章)(四)最後の異象、惡を行ふべき者の受くべき刑罰、及びメツシヤ的希望(九章)。

【此書の宗教思想】 (一)神に關する觀念　アモスの唯一神說は全然他神の存在を許さず。此確信は哲學的思索の結果に非ず、エホバの義、大、及び人類に近く在ませりとの深奧なる感情より來れり。彼の思想に依れば、エホバは全能にして、其力は人類の處史、殊に以色列國民攝理の上に顯はる(五の廿一、六の十四、九の七)國民的生活の運動は其精神的なる物質的なるとを問はず、凡て其手中に在り(二の九—十一)。人類の出來事には偶然なる者なく、幸福も災殃も悉く神の聖意に依りて行はる(三の三—八)(二)エホバと以色列との關係　アモスは當時の人々と同じく、エホバは特別の意義に於て以色列の神にして、以色列は彼の民也と信じたりしが、兩者の關係を以て全然道德的となし、彼等にしてもし道德的要求を充すこと能はざれば、其關係消滅すべしとのことを說けり。儀式的禮拜には眞正の價値なく、眞實に神に事ふるの道は唯義を行ふに在り(五の廿一—廿四)。彼の最も力を籠めて論じたるは、社會的道德の代りに宗教的儀式を行ふは、エホバの憎み給ふ處也と云ふに在り。彼の思想に從へば眞正の宗教とは惡を離れ、善を爲すに外ならず。正義は彼の預言の鍵にして、彼の神は正義の神也。(三)神の審判書也。アモスは此目を以てイスラエルの上に來るべき神の審判となし(五の十八—廿)且此目既に來れりとなし、而して其結果を以て國民の全滅也となせり(二の十四—十六、三の十二—十五、四の二、三等)彼は斯くして之がため神の用ゐ給ふ器也となせど雖も、其名を示さずして(五の廿九の八—十五)メツシヤ的希望(九の八—十五)

『以色列の預言者』(一八九一)等は其重なる者也。

アモリ人 Amorites. 【種族名】 『山人』の義也と想像せられたれ共、今日の學者は『塔の絕頂』の義也と想像す。テルエルアマルナ碑の時代(前一四〇〇)には今のパレスチナの北に接する地方をアモリ人の地と稱せしが、舊約に依れば、アモリ人は迦南の主要なる住民の知く、迦南全土の住民を稱してアモリ人と稱せり。母後廿一の二、申二の九、十然れ共嚴密に云へばアマレキ人は迦南の南の地に住み、ヘテ人、エブス人及びアモリ人其山々に住み、カナン人其海邊とヨルダンの邊に住せり(民十三の廿九)彼等の國は又パレスチナの東南に在り。古代に於て既に彼等は死海の西南に住せしが(創十四の七)出埃及の時代には、ヨルダンの東にシホン及びオグの二國を成せり(申廿一の四、書二の十)以色列人が迦南に入らんとして先づ占領したりしは此二國なりき(民廿一の廿七—廿)。埃及の古碑に依れば、アモリ人は長身にして色白く、毛髮淡黑、碧眼にしてリビア人に類し、白人種に屬す。彼等は漸次埃及に移住し來り、パロの民となりしといふ。

アラコク マルガレット　マリア Alacoque, Marguerite Marie 【人名】 一六四七—一六〇　佛蘭西の尼にして、熱心なる宗教者也。聖心會を建設し、宗教上諸種の著作あり。

アラビック幼時の福音 Arabic Gospel of the Childhood. 【書名】 新約經外編音書中の一書。耶蘇の幼時に關する:とを記せる者にして、晩出のもの也。書中多く奇怪なる物語を記す。例之嬰兒なる耶蘇を洗ひたる產湯は奇功を有し、癩病に罹りたる小兒之に浴して潔められたりと云ひ、覺術者のために驢馬に化せられたる青年ありしが、マリ

ア耶蘇を其背に置きしかば、忽ち人の形に歸りたりといふが如き類是也。此書回教徒の中に在りては耶蘇に關する知識の寔なる材料を供せらる。

アラビヤ 【地名】 希臘の地理學者が亞細亞、亞非利加兩洲の間に分在せる大半島の全部に與へたる者にして、土民は之をアラビヤ(Arabia)と稱し、土耳其人は之をアラビスタン(Arabistan)と稱す。東、波斯灣及びオマン灣、西、紅海の間に橫り、方形的半島を爲す。北は其境界明ならず。假に北緯三十度を以て境となす。北より南に至る長さ一千五百哩、平均幅員八百哩、面積一千二百万方哩にして歐羅巴全洲の三分一に當る。紅海の海岸は沙州及び珊瑚礁を以て圍まれ港灣極めて少し。バベルマンデブ海峽の入口にはペリム島あり、英領にして最も重要の地也。南海岸は印度洋に突出し、アデン、ダファル、ケシン等の良港あり。東オマンの海岸にはマスカット港あり、水深く且陸に圍まる。然れ共波斯灣の海岸は水淺くして良港に乏しく、北オルマヅの海峽に至りて僅にエルコワイトあり。獨逸はコンスタンチノープルよりバグダットを經此地に途る鐵道を敷設せんとの計劃をなせり。土耳其政府は此地を其勢力範圍に入れんと欲すれ共、英國之を承認せず。波斯灣は現今英國の勢力範圍内に在り。古昔の地理學者はアラビヤを分ちて、アラビヤペトリア(西北及び西乃半島)アラビヤフェリックス(西南岸)及びアラビヤデセルタ(其他の部分)の三部となせり。況時は之を西乃半島(スエス及びアカバ灣灣の間の地)エルヘジヤズ(紅海に臨み、エルエメンの暨續なる地に接する地)ハドラマウト及びマーラ(アデン灣及び印度洋に臨める地)オマンの山郷(アラビヤの角をなせる地)エルハサ(波斯灣に臨める地)及びエルチッザ(内部の沃地)に分つ。元來アラビヤは高地にして、海拔平均三、五〇〇呎、西部及西南は徐々に低く、他の方面は急に低し、エメン、高き處にして、海拔九、九〇〇呎、西乃山は之れより低き:こと三六五呎也。低き海岸の沃地は此等の高地と海との間に在り。此の如くアラビヤ半島は海岸の平原、海岸の山脈及び中央の高原より成る。氣候、海岸は暑氣頗る強く。アデンに於る一月の平均溫度は華氏の七十五度、六月は八十五度也。然れ共北部の平原は降雨少く冬期に於る寒氣に頗る嚴烈也。物產、エメン及び其他海岸の險崖地には珈琲樹繁茂し、又アカシア樹、香料の樹、棗、慢陶、木棉、玉蜀黍及び米を產す。又ヘヘヤヅには旃那樹(センナ)、メッカ近傍にはボルサム樹、西海岸には指甲花(ヘンナ)、波斯灣附近には藍を產す。チッザ地方には牛及び獨峯駝を產出し價頗る高し。此外駱駝、白鹿馬、羊、山羊等も亦此地方著名の產物也。野生の者には駝鳥、虎、豹、野猫、他の鑛物なも產す。住民は凡そ三百五十萬、眞にアラブス人にして回教徒也。チッザ、ハドラマウト、オマン、マーラ及びアラは事實上各々獨立の種族也。然れ共オマンのソルタンは英國政府に承認せられ、其勤草を有せり。メッカはモハメットの邊羅し、死したりし地にして、スリヤ、埃及よりメッカに往く途に當れり。其港をヤンボと稱す。メッカはモハメットを葬れる地にして、年々參詣の群集頗る夥し。ダマスコよりメディナ及びメッカに達する電線は既に築設せられたれ共、土耳其政府は此道に沿ふて鐵道を敷設せんとの志望を有せりといふ。

【歷史】 回教徒はアラビヤの歷史を二期に分つ。回教以前の時期には一二の事實を除きては記すべき者なし。其一は羅馬曾てアラビヤを征服せんとしたりしが、果さゞりしとの事也。アラビヤの史家はアラビヤ人を區別して、歷史以前に在し現今其跡を絕ちたる者、眞正のアラブ人即ちカタン(聖書のヨクタン)の子孫なる、南アラビヤの住民、及びモストアラブ即ち北方よりアラビヤに入り漸次土民と混化せるイシマエル人の三となす。アラビヤの歷史はエメンに於るマレブの堤の決潰したる時より始まる。此災厄に依りて、多くの種族は北部に其新住地を求め、爰に數箇の小邦を建設せり。此等の種族の一なるメモドはヘヘヤヅに其國を建てたり。其遺跡は今日尙之を見るを得べし。モハメッド以前のメッカに就ては詳に之を知るを得ず。此處にはカアバと稱する護國神の廟存在せしを以て參詣者四方より集り來り、他の都市よりも繁盛を極めたりき。紀元六一二年モハメッド新宗教を唱へ出せしが、メッカの殷富は主としてカアバ廟の存在に依るを以て彼は大なる迫害を蒙り、十年苦戰の末遂に小數の信徒と共にメディナに退けり。此行をヘギラと稱し回教の紀元となす。是よりアラビヤ歷史の第二期に入る。モハメッドは神政國を建設し、自ら其首長となりて政教一切の主權を掌握せり。彼の副官をカリフと稱し、四人を置き信徒の上に權を取らしむ(六三二—六六〇)。後宗教上の理由よりも政治上の理由より黨爭起り、保守黨、分派黨の二に分れたり。オンヤド朝はメッカの貴族黨を代表して立てる者也(六六一—七四九)。朝廷をメディナよりダマスコに移してより、メッカ及びメディナは單に宗教上の中心となり、アラビヤの歷史は土耳其帝國の歷史の中に沒入せり。第八世紀の初に至り、ヨハバイト族の反動的大

運動起り、アラビヤは再び獨立國となり、凡そ百年の間繼續せしも、又土耳其のために敗られたり。然れ共ヌバイト族は中央アラビヤに在りて優勢力を有し、一八九七年アブダルベンメッタアの指揮の下にコヌイトに進軍し、驍復的侵掠を逞ふせり。

【言語及び文學】 アラビヤ語はセミチック語の分派にして、南部セミチック語の部類に屬す。コーランの權に依りて亞細亞、亞非利加、地中海の島々及び西班牙に蔓延せり。西班牙に於ては今日之を見ずと雖も、其言語の中にアラビヤ語の混入せる者頗る多し。アラビヤ語は多くの方言を有すれ共、コーラン及び古代詩歌の力に依りて能く其一致を保てり。且數百年間アラビヤの沙漠に閉られたるを以て、第七世紀頃に至るまで能く其原始の形狀を存せり。アラビヤ語は最も原始のセミチック語に近似するを以て、セミチック語の研究者に取りて最も重要なること明也。且此語は他のセミチックの方言に在りて失はれたる語源を存するを以て、翦約の不分明なる言語も此語より光明を得ることあり。又歐羅巴語の中にも此語の混入せる者頗る多きを見る。且中世のアラビヤ人は熱心に諸種の學問を研究したりしを以て、天文學の術語及び星辰の名の中には多くのアラビヤ語を見るべし。アラビヤ文學の古典時代は回教以前にして、此時代には詩歌的文學の產出頗る多し。最初の散文はコーランにして、アラビヤ文學の一大時期を劃す。コーランは回教の經典にして、モハメットの語二百より成り、其長短に從て之を百十四章に編集せり。コーランは古昔の詩歌に對して反對の態度を取りしと雖も(異教的文學なるが故に)元來アラビヤ語は詩的言語たるの傾向を有するを以て、コーランは韻文を以て書かれたる者に非ざれ共、其古き部分は幾分か、詩的性質を有するを見る。コーラン出でゝより諸種の文學は之を中心として譯出せり。即ちモハメッドの選擇及び選語はサンナの名に依りて出で、コーランの歷史、註釋及びモハメット傳等は相續きて著作せられたり。且當時アラビヤ人は希臘思想の種種及び其方法に通ずしを以て、之を取りて回教神學を構成し、神の性質、コーランは永遠の古より存在したる者なりや、作られたる者なりや等の問題を哲學化したり。又コーラン研究の必要より語學研究の熱心を惹し、ために幾多の字書編輯せられたり。且凡そ人類の思想にしてアラビヤ人の筆に上らざる者なく、數學、天文學、醫學、歷史、地理學、宇宙學等に關する著述多し。詩歌、小說、其他の文學も亦頗る隆盛を極め『アラビヤンナイト』『セアンセス』等は何れも世界各國の語に飜譯せられ、尙多くの讀者を有するに人の善く知る所也。

アラビヤ人 Arabian. 種族名 此語聖書にも種々の意義を以て使用せらる。(一) 何れの國民たるに拘はらず、荒野に住する人民をいふ(創十三の廿、アラビヤ)耶因以前の聖書記者は總稱して居たれど耶因以後の文學に於ては之を『アラビヤ』と譯せり(王上十一の十五、耶廿五の廿四、結廿七の廿一)此語の子音は『雜種の民』と譯せる語(耶廿五の廿等)及び『夕』と譯せる語の子音と同一なるを以て、何れに譯すべきや甚だ正確ならず。寧廿一の十三は英譯、邦譯共『アラビヤ』と譯したれど『夕』と譯する方可なるべく、代下九の十四は『雜種の民』と譯する古碑にも記され、史家ヘロドタスの記す處に依ればアラビヤ人の所領はスリヤ人の所領の間に夾まれ居りしが知し。聖書にはアラビヤ人をデダン及びケダルと共に記せり。思ふに彼等は北アラビヤに住したりしなるべし。彼等は王を有したりしと云へば、又定まりたる市邑を有したりしと疑なし。但しアラビヤ人なる名稱の起源は明ならず。(二) 耶因以後の文學に在ては、アラビヤ人なる者は通常『ナバテア人』の稱を表す。マッカビース下五の八に『アラビヤ人の王の名也』の語あり。アレタはナバテア人の王の名也。プロコピアスは、アラビヤの首府をペトラとなせり。ペトラはナバテア人の首府として有名なる者也。故に保羅が『アラビヤ』なる語を用ひし時(加一の十七、四の廿五)思ふに彼は之に依りて當時ユフラト河より紅海に達せしナバテア人の領地を指せしとならん。彼等の王の一人をアレタといふ。ダマスコに於る其邑宰は保羅を捕へんとして苦心せる者也(哥後十一の卅二)彼等は元來メソポタミヤより出で來りしが、巴比倫晩代の王等の柔弱なるに乘じ、イドュマヤの古首府ペトラを掠取せり。ペトラは通商の要路に當りしを以て、彼等次第に殷富に向ひ、頗る文化の域に進み奢侈を極むるに至れり。彼等の初めて歷史に顯れたるは紀元前三一二年にして、彼等は此時スリヤ王の遺はせる將軍と戰ひ之を退けたり。後ナバテヤ帝國はマダーイン、サリヒと稱する地方にまで擴張したり。此のことは、羅馬の記錄の證する處也。(四) アラブなる名目が善人が今日アラビヤと稱する大半島の住民に適用せらるゝに至りしは、紀元前第三世紀のことにして、舊約に於る唯一の證據に代下廿一の十六也とす。爰に『エシオピヤに近きアラビヤ人』とあるは蓋しエメンの極南に在るハバシヤの近隣の民を云へる者なるべし。代下廿六の七に『神ウジヤ王を助けてダルバアルに住むアラビヤ人及びメウニ人を攻擊せしめたり』とあ

り。然れ共此事列王紀略に見へざるを以て其眞僞を保し難し。代下十七の十一の『アラビヤ人』といふも均し。確實ならず。

アラム Aram, Arameans. 地名 創十の廿二、廿三に依れば、アラムはセムの子にしてウヅ、ホル、ゲテル、マシの父也。廿二の廿一に依れば、アラムはナホルの子なるケムエルの子にして、カヅとブズはケムエルの長兄也。舊約に在りてアラムと稱するはメソポタミヤの北部、スリヤ及びアラビヤペトリアの大部分の者にして、此地方の住民は重もにセミチック種に屬し、アラメイック語を語る。尤もオロント河に濱するカデシ及びユフラト河に臨めるカルケミシ地方には、ヘテ人住居し、ユフラト河の東岸にはミタンニ王國あり。アラメイック語はペトラのナバテア人も之を語れり。イシマエル人もアラム人と同種に屬せしこと疑なし。アッスリヤの古碑にはアラムを稱してアラム、アルム、アリム、アルマ等と云へり。但しアッスリヤ人はユフラト河の西岸に在る住民にはアラムの名を與へず、之をヘテ人、アモリ人と稱せり。然るに舊約はスリヤの住民にも亦メソポタミヤの住民と同じく、アラムの名を適用せり。尤も其地方に從て特別の名目を附し、メソポタミヤを稱してアラムナハライム(Aram naharaim)即ち『二河(チグリス及びユフラト)のアラム』と云ふ(士三の八、邦譯にはメソポタミヤとあり)(舊約の他の部分(創廿五の廿廿八の二五—七、卅一の十八等)には此地方をパダンアラム(Padan-aram)と稱す。『パダン』とは野又は園の義にして、何れ十二の十二に『アラムの野』とあるは、蓋しパダンアラムの譯語なるべし。ユフラト河の西に在りては、アラムの勢力東はヨルダン河、南はギリアドのミヅパに及べり。北に在るゾバのアラム(Aram of Zobah)といふ。サウル王の時にはゾバに諸王ありしが(毋前十四の四十七)後間もなくゾバはハダデセル王一人の支配に歸せり(毋後八の三—十二)後又ハダデセルはダビデのために敗られ、ゾバの諸王イスラエルの從屬となれり。十の十六)ゾバのアラムに接する地をベテレホブ(Aram-rehob)といふ(十の六、八)又はアラムレホブ(Aram-maacah)と稱す。ゲシュルと共にマナセに與へられたる地也(申三の十四、書十二の五、十三の十一、十三)マアカとゾバの間にダマスコの邑あり。ダマスコは又アラムダマスコと呼ばる(毋後八の六)ハダデセル王の敗北と共にダビデに降服せしが、ソロモンの時其獨立を回復し(王上十一の廿三—廿五)幾ならずイスラエル王國の强敵となれり。且スリヤに在るアラム諸邦を悉く呑併せしを以て、アラムなる名は實際に於てダマスコの專有する所となれり。終れ共後遂にアッスリヤのために滅さる。アラム人の諸神の中最も主なる者をハダドと稱す。日神にしてアッスリヤ人は之を其風神リンモンと同一視せり。亞十二の十一にはハダデリンモンの結合語あり。ハダデの外に其子ベンハダデ、ハザエル、ヒヤマス、レケブエル、バアルサメン、アドリボル、ヤルキボル、アタル等の諸神あり。南テヤ、ペトラ及び西乃半島のナバテアアカモ、カシオス、セレマ等の諸神を有す。スリヤの神は土星にして、アラムの譯語なるべし。ユフラト河の西に在りては、アラムの勢力東はヨルダン河、南はギリアドのミヅパに及べり。北

アラム Aram, Arameans. 地名 創十の廿二、廿三に依れば、アラムはセムの子にしてウヅ、ホル、ゲテル、マシの父也。廿二の廿一に依れば、アラムはナホルの子なるケムエルの子にして、カヅとブズはケムエルの長兄也。舊約に在りてアラムと稱するはメソポタミヤの北部、スリヤ及びアラビヤペトリアの大部分の者にして、此地方の住民は重もにセミチック種に屬し、アラメイック語を語る。尤もオロント河に濱するカデシ及びユフラト河に臨めるカルケミシ地方には、ヘテ人住居し、ユフラト河の東岸にはミタンニ王國あり。アラメイック語はペトラのナバテア人も之を語れり。イシマエル人もアラム人と同種に屬せしこと疑なし。アッスリヤの古碑にはアラムを稱してアラム、アルム、アリム、アルマ等と云へり。但しアッスリヤ人はユフラト河の西岸に在る住民にはアラムの名を與へず、之をヘテ人、アモリ人と稱せり。然るに舊約はスリヤの住民にも亦メソポタミヤの住民と同じく、アラムの名を適用せり。尤も其地方に從て特別の名目を附し、メソポタミヤを稱してアラムナハライム(Aram naharaim)即ち『二河(チグリス及びユフラト)のアラム』と云ふ(士三の八、邦譯にはメソポタミヤとあり)(舊約の他の部分(創廿五の廿廿八の二五—七、卅一の十八等)には此地方をパダンアラム(Padan-aram)と稱す。『パダン』とは野又は園の義にして、何れ十二の十二に『アラムの野』とあるは、蓋しパダンアラムの譯語なるべし。ユフラト河の西に在りては、アラムの勢力東はヨルダン河、南はギリアドのミヅパに及べり。北

アラメイック語 Aramaic. 地名 聖書のアラムを見よ。

アララテ Ararat. 聖書のアラムを見よ。

アリウス Arius (ᾌρειος). 人名 二五六—三三六 リビヤに生る(リビヤは埃及西方の海岸にして、使徒行傳二の十一の所謂クレテの地方也。

アランデル トマス Arundel, Thomas 人名 一三五三—一四一三 英國アランデル城に生る。アランデル侯の第二子にして、大法官たること二回。エライの監督、ヨルクの大監督を經て、カンテルベリーの大監督となる(一三九六)其兄アランデル侯と共に反逆の罪に坐して(一三九七)追はれて羅馬に往き、聖アンドリユカスの大監督となりしが、距理四世位に卽くに及び、赦されて其職に復す。

アランデル ウィリアム Allan, William 人名 一五三二—一五九四 牛津大學に學び、メリー女王の時、聖メリー學院長となり、後ロルクのカノンとなる。メリーの羅馬教を採用するや、彼は最も熱心に之を歡迎せしが、メリー崩じエリサベス位に即きて、再び新教を採用するや、彼は逃れて佛に往き、全力を盡して英國に羅馬教の勢力を擴張せんとせり。後寇に英國に歸り、牛津の近傍に匿れて三年を經しが、事遂に露れて再び英國を去り、佛國に往き、ランス、佛、四及び羅馬の輔助を得て、學校を立て英國の僧侶を教育し、又雜書を出版して英國民に分配せり。彼は此の如くして英國君民の憎惡を受けしが、羅馬教國君民の愛顧を蒙り、メクリンの大監督となり、羅馬に在りて豪奢の生活を爲せり。

アランデル トマス Arundel, Thomas 人名 一三五三—一四一三 英國アランデル城に生る。アランデル侯の第二子にして、大法官たること二回。エライの監督、ヨルクの大監督を經て、カンテルベリーの大監督となる(一三九六)其兄アランデル侯と共に反逆の罪に坐して(一三九七)追はれて羅馬に往き、聖アンドリユカスの大監督となりしが、距理四世位に卽くに及び、赦されて其職に復す。

アリウス Arius (ᾌρειος). 人名 二五六—三三六 リビヤに生る(リビヤは埃及西方の海岸にして、使徒行傳二の十一の所謂クレテの地方也。

或はいふ、アレキサンドリアに生る〜）アンヤオケにて教育を受け、其後アレキサンドリヤに來り長老となり、此處にて基督の神性に就き異說を唱ふ（三一八）。彼は基督の永遠なる神にして、天父と均し（homoousio）との說を否み、基督は其本質天父と均しからず、天父に遣られたる者也と云ひ、神の獨一なることを保持せん爲に、多神教の如き說を唱け、又三位一體說の如き異端の教を證け、基督教なして信じ易からしめんとせり。彼は獲身長軀、容姿端嚴にして學問該博、辯舌巧妙にして人を服せしむるに足りしが、爭論を好むの性癖を有したりしと傳ふ。尤も彼の敵と雖も其熱點を指摘せざりしを見れば、其道德的性格の美にして眞誠少かりしを知るべし。彼熱心に其說を主張し、說教、著書等に依りて之を宣布したりしかば、アレキサンドリアの監督アレキサンデル之を憂へ、爲めに會議を開き、其說を異端となして之を禁ぜり（三一八）彼逃れてアレキサンドリアを去りしが、カイザリヤ及びニコメデアのユウセビウス共に彼を歡迎し、且亞細亞の教會中には彼の說を承認するもの少からざりしかば、當時の基督教會は悉く此爭論の渦中に陷れり。彼は如此勢力ある多くの味方を有せしが、ニカヤの會議に於ては（三二五）遂に敗れてイルリアに追放せられたり。然るに後間もなく反動起り、ユウセビウスの徒公然彼の說に贊成を表し、宮廷に近きて彼の爲めに救免を請ひしかば、彼は遂に赦されてコンスタンチノープルに來り、ユウセビウスの徒に迎へられて、再び教會に入らんとせしが、其前日八十歲の齡を以て俄に沒せり。正統派の人々は之を以て神の刑罰也とし、之をイスカリオテのユダの死に比するものあれ共、彼の友は敵の爲めに毒殺せられたる也と思惟せり。其遺

なる文書『サライア』(*Thalia*, The Banquet)は半ば散文半ば詩を以て記され、自己の說を辯護したるものなれ共、アタナシウスの書中に引用せる外は現存せず。ニコメデアのユウセビウス及びアレキサンドリアのアレキサンデルに贈れる彼の書簡は現存して今日に傳はれり。(『アリウス說』參照。)

アリウス說 Arianism. 【學派名】 亞歷山の長老アリウスの首唱せる處、古代の基督教會歷史中、基督の身位に關する異端の最も大なる者にして、絕久す正統教派の攻擊ありしに拘らず、第四世紀の或時期間東教會の主なる信條なりき。

【アリウス說の由來】 アリウス說爭論の源は深く、ニカヤ會議以前のロゴス說の相違に根ぜり。茲にかりゲンの保持せし基督論の矛盾は此爭論の導火線となりたりき。オリゲンは一方に於て基督に永遠及び其他の神性を歸したりしに拘らず、他方に在りては神格中の個性的卑遜を認め、子は父の下に在りて、第二の神也との一說を敎へたり。アタナシウスは此說の初の方に重を置き、アリウスは後の方を高調し、爰に所謂アリウス說の爭論を惹起せり。

【アリウスの立脚點】 彼の說に從へば基督は神に非ず、寧ろ神に造られたる者にして、宛も天使の如し。然れ共神は人より遙に遠かり居る者なるが故に基督なる人物を造り、基督の中保に依りて人に關係す、故に基督は神人の中間に位し、吾人の主とし、造物者として、神の如く尊敬すべき者也。彼は此の如く神の獨一性を保持せんがため三位一體說の如き迂解の說を退けたり。而して彼は說教、著書の方法に依り熱心に其說を主張したるを以て、亞歷山の監督は夫に之を憂慮し、爲めに會議を開きて之を異端となし其宣布を禁じたりしが（三一八）アリウスは之に從はず益々其說を主張して止まざりしが故に遂に劇烈なる爭論を起すに至れり。

【ニカヤ(Nicea)の大會議】 コンスタンチン帝は三二三年東羅馬の帝位に即き、全帝國を一致せしめんとの希望を抱きしかば、此劇烈なる爭論の起りしを苦々しき事に思ひ、書を亞歷山の監督に贈り、此の如き些細なる點に就き爭論すべからずとの事を命令せり。然れ共後遂に神學的爭論の禁令に依りて抑壓す可き者に非ざることを悟り、宗教會議を開きて此爭論を決せんとせり。於是三二五年ニコメデアの附近なるニカヤに一大會議を召集せり。此會議は教會歷史に特筆すべき大會議にして六月十四日を以て開會し、七月廿五日を以て閉會せり。列席の監督三百十八名、皇帝先づ自ら會議を開きて歡迎の辭を述べ且祕始列席せり。カイザリアのユウセビウスを首腦とせる一派は兩派を調停せんとし、ユウセビウスは大體のみを規定せる信仰箇條を提出し、可成神學的議論を避け一般の信徒を其中に包容し得る樣なさんと企てたりしが、アリウスに反對せる一派は、アリウスの徒が同盟すること能はざる樣に之を骨止せんと謀りたり。初の程はアリウスに反對する者少數なりしが、亞歷山の監督殊に其伴ひ來りたる青年執事アタナシウスの熱心と雄辯とに依りて遂に議場の大多數をしてアリウスに反對し、ユウセビウスの提出せる信仰箇條を左の如く骨正して、議場を通過せしめたり。即ち一、我等は萬物の造主にして全能の父なる獨一の神を信ず、二、我等は主なる基督を信ず、彼は天父より生れし獨子、即ち父の本質より生れし子、神より出でたる子、光より出でたる光、眞の神より出でたる眞の神、彼は造られし者に非ず生れし者にて、天父と同質の者、又彼は天に於ても、

地に於ても萬物を造り、我等を救はん爲めに世に降り、肉體を取りて人となり、死して後第三日に甦りて天に昇り、萬民を審判ん爲めに再び地に來るべし、三、我等は聖靈を信ず。と是也。此信仰箇條の要點は、基督を以て天父と同質也とするに在り。然るにアリウスの徒は基督を神とし、主として拜することを承認したれ共、天父と同質也との事を信ぜざりしが故に之に同意を表することを能はず。然れ共亞非利加の二人の監督を除くの外衆監督は悉く骨正案に同意し之に調印せり。於是皇帝は此二人をアリウスと共に放逐し、又アリウスの著書を燒き、其徒を以て基督教の仇敵として罰すべき事を決定し、爰に此大會議を終れり。

【五十年間の爭論】 然れ共此大會議の決議を以て論爭を終りたるに非ず、否却て益々劇烈にして一層長き爭論を惹き起すに至れり。元來ニカヤの會議に於てはアタナシウスの熱心と雄辯とに動かされて、一時其說に贊成したりしと雖も、多くは中心より其說に服したりしには非ず。故に彼等は散會後再び直ちに爭論を開始し、甲是乙非容易に決せず、分裂又分裂遂に數派を生ずるに至れり。即ち一はニカヤの決議を贊成し、天父と子との同質を信じ明に基督の神性を承認する者、二はアリウスの徒にして、基督を神とし造物主として尊敬すれ共、天父に造られたるものとし、父子の差別を明にし、其同質を拒否する者、三は極端なるアリウスの徒にして、神と基督との相違を更に極端に說ける者、四は中立の徒にして、基督を神の子として尊敬すれ共、之に定義を附するを好まず、又同質なる語はサベリウスの異端に類し、天父と子との區別を紛亂するを虞おりとして之を避くる者是也。初めコンスタンチン帝はニカヤの決議を遵奉し、大に之を強固にせんと努めたりしが、後其姉妹の勸誘に依りアリウスに同情を表し、之を召還し彼を監督となして再び教會に入るべき事を命ぜり。然れ共アリウスは教會に入らんとする前夜俄に死去せり（三三六）後コンスタンシウス帝も半アリウスの說を採用し、同質說を奉ずる者を迫害せしがユリアヌス帝の神學上の爭論に無頓着なる事と、ユヴイアヌス帝の寬大なる政略とは又ニカヤ派の氣勢を挽ふるに至れり。要するにニカヤ大會議以後凡そ五十年間は、教會も宮廷も共に神學爭論の渦中に卷き込まれ、宗教會議は屢々開かれ、種々なる信仰箇條は決議され、異端、破門は屢々宣告せられ、會堂も劇場も街衢も市場も、店舗も浴場も悉く神學的論爭を以て充滿せられたり。此間アリウス派の驍將はニコメデアのユウセビウスにして、ニカヤ派の驍將はアタナシウス也。アタナシウスの死後正統派の爲めに最も力を盡したるは、大バウル、ナウアンツスのグレゴリー及びニッサのグレゴリー也。此兩派五に消長あり。ヴァレンス帝に至り又半アリウス說を採用し同質の徒を迫害せしが、世は漸くアリウス說に反對し、ニカヤの信仰箇條を贊同する者を生ずるに至れり。

【コンスタンチノープルの大會議】 テオドシウス大帝即位するや直ちにアリウス說に反對し、三八一年コンスタンチノープルに第二の大會議を召集せり。此會議に來集せる監督合せて百五十人、ニカヤの信條を改正し（現今ニカヤ信條と稱する者是也）同質說を强固にし、爰に久しく教會を動搖せしめたる論爭を終結せしめたり。斯くしてアリウス說は教會主要の教義としては此時より其存在を失ひたれ共、一箇の神學說としては時々現出するを見る。殊に英國に於て盛りとイ。例之ソジニウス。ユニテリアン等の說を保持するアリウス說に近し。ミルトン、及びアイザック、ニュートンは天父と子との關係に於てはアリウス說に近けれ共、其精神、目前に於ては大に異れり。

【野蠻人中に於るアリウス說】 コンスタンチノープルの大會議に於てニカヤ信條は全勝利を得たれ共、此はテオドシウス帝の權威に依れる事にして、羅馬帝國以外に及べるに非ず。故にヴァレンス帝の時アリウス說の解釋に從て基督教を傳へられたる西方野蠻人の中には、アリウス說の痕二三百年間行はれたるを見る。

アリスタルコ Aristarchus. 【人名】 保羅の同勞者テサロニカの人、保羅に伴ひトロアスよりエルサレムに往き（使十九の廿九、廿の四）カイザリヤにて彼と共に捕はれ（四四の十）又彼と共に羅馬に往けり（使廿七の二）傳說に依れば彼はテサロニカの監督となり、ニロ帝の迫害に逢ひ殉教者の死を遂げたり。

アリステアス Aristeas. 【人名】 埃及朝廷の高官也。トレミー、フィラデルファスの命を受けて、數多の贈物を携へエルサレムに使し、アレキサンドリアの圖書館に備ふべき正確なる舊約聖書の寫本を乞ひて之を得、又七十人の猶太の學者を伴ひて歸る。『七十人譯』と稱して三四世紀間猶太人及基督教の學者の用ひし希臘語の舊約聖書は此の學者等の譯せしものなりとは、アリステアスが其兄弟に贈りし書翰に基きて起りし說也。此の書翰はパセル（一六六一）及びオッタスフォルドに於て（一六九二）印行せらる。ルイスの英譯あり。然れ共學者は之を信ぜず。

アリストブルス Aristobulus. 【人名】

猶太歴史の末期に、此名を有する許多の人あり。(一)ウリヤ、ヒルカナスの子。父の死後其位を奪ひて王と稱し(前一〇七)母及び其兄弟等を殺せしが、恐怖、悔恨して其翌年死す。(二)アレキサンデル、ヤナイアスの末子。其兄ヒルカナスに迫り位を讓らしむ(前七〇)。ヒルカナス亞剌比亞に逃れ、其王の助を借りて猶太を襲ひしが、アリストブルス羅馬人の助を借りて之を敗る。ポンペー、エルサレムを奪ひ、彼を廣にして羅馬に送る。彼逃れて猶太に歸り、兵を擧げて羅馬人と戰ひしが、敗れて再び羅馬に送らる。ジーザル彼を放して猶太に歸らしめしが、途中にて毒殺せらる(四九)。(三)ヘロデ大王の子。其弟アレキサンデルと共に羅馬に於て教育せらる。父の嫌疑を蒙り、共に絞殺せらる(前六年)。(四)前掲アリストブルスの子。クラウデウスと共に羅馬に於て教育せらる。私生活を送る。(五)カルシスの王ヘロデの子、ヘロデ大王の孫。アルメニヤ、後アルシスの王となる。ヘロデヤの娘サロメを娶る。

アリストブルス Aristobulus. 人名 トレミ!六世の時埃及に住したる猶太の祭司。マッカビース書下卷一の九には、猶太人の中に勢力あり、トレミー王の師たりしと記さる。或人は之を以て逍遙學派の哲學家アリストブルスと同一視せり。後者はトレミー六世に、モーセ五經の註釋を献じ、逍遙學派の教義は舊約聖書より出でたることを示したる人也。

アリストテレース Aristoteles (or Aristotle). 人名 前三八四ー三二二 希臘のスタギラに生る。故に『スタギラの哲人』又は『スタギラ人』の稱あり。十七歳の時、雅典に遊びてプラトーンの門に入り、其歿するに至る迄凡そ二十年間其門下に在り。然れ共彼は此時より既に師の所説に服從すること能はざりき。三四三年より七年間マケドニヤ王フィリップの朝に仕へ、王子アレキサンドル(後の大帝)の師傅となる。アレキサンドル即位の後間もなく雅典に轉じ(三三四)其郊外なるリヤカイオン(λύκειον)の林園内に學校を開き、廿年間其哲學を教授せり。故に彼の學派を『リヤカイオン派』又は『リケウム派』(the Lyceum)と稱す。又彼の學派を一に『ペリパテティック派』(Peripatetic)と稱するは、彼がリケイオンのペリパトイ(περίπατοι 並樹の路の義)に於て學を講ぜしが爲め也と云ひ、又彼が其並樹道を逍遙しつゝ教授せしを以て、希臘語のペリパティン(περιπατεῖν 逍遙又は散歩の義)より此名稱起れりとも云ふ。後説を取て、邦語に逍遙派と譯する事あり。アレキサンドル帝歿後、排マケドニヤ黨勢力を得るを以て、彼は雅典を去り、カルキスに退き、其處に歿せり。

アリストテレースの哲學は二元論にして、物質と形式、神と世界とを以て、分離すべからざる存在物となせども、尚之を以て判然區別すべきものとなせり。然れども彼の二元論は唯物論的に非ず、形式、神なる以て主なる要素となせり。彼の神は意志よりも寧ろ動作にして、人格に非ず。故に彼の哲學は凡神論的なれ共、彼の凡神論は一神論的にして、多神説に反對せり。故に彼は基督教會より多少の同情を得たり。即ちイレニウス及び其他の師父は、彼を痛擊したれ共、ユスチン、マルタルの知きは、彼に就て何事なりと云はず、アレキサンドリアのクレメントの知きは、彼を以て基督の先驅者也となし、基督の世に來りし以前に於て、保持せられ得べき眞理を保持せりと云へり。基督教義の辨証的彫琢盡なるや、彼の論理學は、第四、五世紀に於ては、異端論者の採用する處となり、第六、七世紀に於ては、正統派の採用する處となれり。初め羅馬教會に於ては、彼の哲學に異常な抱き、之を讀むことを禁じ、大學の門より之を排斥せしが、アルベルタス、マグナス及びトマス、アクイナスの時より、此異常は全然消滅し、煩瑣哲學の中心となりて大に尊敬せられ、彼の説に當ける著書は大學に入るを許されず、彼の説に反對することを敢ふる者は死を以て罰せらるゝに至れり。彼の説が煩瑣哲學者に受け容れられ尊敬せられたるには理由あり。其理由の一は、彼の哲學の方式が當時の教學を組織することに便利を與へたること也。其二は教會が天然界に關する智識をも網羅して、當時の學界の主權を握り、あらゆる世間の事を司る者となるの必要を感じ、而してアリストテレースは最も這般知識の淵源となるに堪ゆる者なりしこと也。其三は彼の有神哲學が希臘哲學の中最も教會の教義、即ち神學を組織せるに適合せりと思はれたること也。此等の理由を以てアリストテレースの哲學大に用ゐられ、之に依りて煩瑣哲學は其面目を一新したりき。然るに宗教改革運動起るに及び、煩瑣哲學と共に彼は全然基督教會に其勢力を失ふに至りたりき。

アリピウス 聖 Atypius, St. 人名 聖アタピウスはユスチンの弟子にして、アウガスチンと共にミラノに往き、アムブロスより洗禮を領す。アウガスチン、ヒッポーの僧となりし時、彼も亦同處に在る僧院に在り、後ダストの監督となる(三九四)。羅馬教會に於ては、八月十五日彼の爲に祭禮を行ふ。外に聖アリピウスと稱する柱頭骨業者あり、第六世紀の中頃アドリアノープルに生る。柱頭に登

り、五十年間其上に立ちて苦行せりといふ。希臘教會にては、十一月廿六日彼の爲に祝祭を行ふ。

アリマタヤ Arimathea. 地名 ユダヤの邑にして、耶蘇の屍を取りて其墓に葬りたるヨセフの生地也(太廿七の五十七、六十)舊約のラマタイムゾヒム(紀前一〇二)と同一視し、タムナ及びリッダに近き處に在りとなす者あり。然れ共其何れに在りやは今日より之を推知するを得ず。

アルガイル侯 Duke of Argyll. 人名 『法則の統治』(The Reign of Law)の著者として有名なるアルガイル侯は第八代の侯爵にして、其名をウ[illegible]ルウ、ダグラス、キャムベル(George Douglas Campbell)と稱す(一八二三ー一九〇〇)。有名なる雄辯家、政治家、著者也。一八五三年より英國自由黨内閣に在りて、尚書、驛遞總官、印度大臣に歷任せしが、一八八一年愛爾土地法案に關し辭任せり。其重なる著書は『法則の統治』(一八六六、一八九〇第十九版)『元始の人』(Primaeval Man 一八六九)『自然の敎』(The Unity of Nature 一八八四)『信仰の哲學』(The Philosophy of Belief 一八九四)等也。

アルガイル侯

アルキ Arkites. 種族名 カナン人の子孫にして、フェニキヤ國の建設者也(創十の十七、代上一の十五)。アルカの邑は後世に至りカイザリヤパニヤと稱し、羅馬帝アレキサンデルセゲエラスの生地也。此地は中世に至りても尚重要の地と占め、一一三八年十字軍のために略取せられたり。現今テルアルカの古墟の在る處として知らる。

アルクィン Alcuin. 人名 七三五ー八〇四 英國ヨルクに生る。ヨルクの學校に於て僧宮の教育を受け、後自ら其學校の校長となれり。七八二年羅馬に遊び、歸途パビアにてシャーレマン帝に面謁し、帝の招聘を受けて、佛國貴族の子弟を教育するの任に當りトマルチンの僧院を鶴れり。翌くて彼は佛國の宮廷に住し、帝を教導し、貴族大學校の長となり、帝を中心とせる貴顯の團体の一員となり、當時に於る文明的諸運動の先頭に立てり。シャーレマンは屢々彼に政治上の事、殊に英國との交渉に關し、諮詢すること多しかり、彼が未來の地位は宗教上の顧問にして、此方面に於る彼の勢力は甚大なりき。彼の一生を鼓吹せる理想は、宗教的精神の萬事に通徹せる、世界にして、彼はシャーレマンの帝國に於て、此理想の現實せらるべきを望みたりき。此の知き思想より、彼は神學を以て、教育上最も重要なものとなしたりしが、之が爲に古典の教育を疎外したるには非ず、神學と古典とは兩立する者にして、此兩者結合して、初めて基督教會は文明の保護者となるべしと信ぜり。入〇二年シャーレマンの命に依り、拉丁譯の聖書を改譯せり。此改譯に依り、拉丁譯が比較的正確となりしこと多しとすべし。其外神學及び古典に關する彼の著書頗る多し。

アルコンチシ Archontici. 宗派名 第四世紀に起りたる一派にして、自ら默示錄と稱する奇異なる書を編纂せり。其中の一書に、七の天ありて、一天毎に主宰者あり、此等の主宰者は人の靈魂を食ひて生く、第七天の主宰者をサバオス(Zabaoth)と云ふ、猶太の惡魔神は其子の一人也と云へることあり。此派はエルサレム近傍のカファルバリカのベチルを首唱し、其弟子の熱心なる働に依り一時富者の間に其勢力を振へり。其教義は大体に於てノスティック派に同。

アルチムボルヂ ジオヴァンニ アンジェロ Arcimboldi, Giovanni Angelo 人名 一五五五死 第十五世紀の末ミラノに生る。聖教得教會建築の時其會計を監督し、一五一四年北獨逸及びスカンヂナヴィアに於る教卸券發賣總督官となる。丁抹に留ること二年、教卸券を賣りて巨額の利益を得たり。端典に至り、其貴族に丁抹王の密事を洩し、其甘心を得て同一の成功を收めんとせしが、事顯はれ、丁抹に於て得たる一切の富を沒收せらる。遂れて羅馬に歸り、不信の罪を訴へられしが、法王は丁抹王の宗教改革に左袒せし故を以て彼の罪を赦せり。後ノヴァラの監督(一五二二五)ミラノの大監督となる(一五五〇)。

アルセニウス Arsenius. 人名 博學にして敬虔の念篤き故を以て、監督ダマサスの推薦に依り、羅馬の王子アルカデアヌの傅となる(三八三)彼爲めに其惡に觸れ、羅馬を去り(三九四)埃及スチの沙漠に退きて隱者となり、九十五歳に至る(或は云ふ、百廿歳也と)埃及の僧宮中最も著名なるもの3

一人にして、希臘教會にては五月八日、羅馬教會にては六月十九日を其紀念日となす。彼の言として傳はれる者の一に曰く『余は屢々語れることなき悲みしことあれ共、未だ嘗て沈黙默せるなる悲みしことなしと』。

アルゼンチン共和國 The Argentine Republic. 地名 西はアンデス河に至り、東は大西洋に臨み、南はパタゴニヤに境し、北はボリヴィアに接する南米の共和國にして、一五一六年ユアン、デアジ、デ、ソリス之を發見し、西班牙の所領となりしが、一八一〇年ボルボン朝の覆覆するに及びて母國に反し、一八一六年リオ、デ、ラ、プラタ合衆共和國成立し、爾後二十年間爭亂相續きしが、一八三五年より一八五二年に至る迄ユアン、マヌエル、デ、ロサス執政として之を統轄し、一八五三年新憲法宣布せられ、一八九〇年再び革命運動起りて經濟上危機に瀕せしが、今日は疲弊全く盡き繁榮の狀態に在り。人口凡そ五百四十萬(一九〇四調)一方哩の住民平均五人に當る。アルゼンチンに生れたる者其五分三を占む。多くは西班牙人の子孫也。其他の五分二は移住民にして伊太利人最も多し。羅馬教は國教にして、五箇の監督教區を有す。然れ共其西班牙に背きて獨立國となりしより、大に羅馬教の地位を改變し、僧道院を閉止し、其財産を没収し、十分一稅を政府の手に納めて、其一部を教育費に充て、一八二五年に至りて信教の自由を許し、一八三四年又雜婚の承認せり。プロテスタント教の宣教師が初めて此國に來りしは一八三五年にして、爾後新教各派盛に傳道して成功せり。而して其最も盛なるはメソヂスト教會也とす。

アルタシャスタ Artaxerxes. 人名 古代の波斯語に依ればアルタクシャトラにして、『大帝國』の義也。ヘロドタスが『大戰士』の義とせしは誤れり。舊約に記せるアルタシャスタはシヤスタスの第三子アルタシヤスタロンギマナスのみ也(前四六四—四二五)。彼は其父の暗殺せられし後パタトリア人を敗り、ダリアスを殺して位に即く。四六〇年埃及人彼に背きしが之を壓服し、四四九年希臘と戰ひ、小亞細亞に在る希臘人の市邑を奪て、シプラスを取る事能はず、二世紀に嗣ぎて王となる。

アルチデアコヲ Archidaeon. 職名 監督所管地の事務、殊に慈善に關する事務を執行する職也。教會の組織成るに從ひ、アルチデアコヲの權限漸次增加し、宗教裁判を爲す權をも有するに至りしが、此權はトレントの會議に於て大に削減せられたり。英國教會にては一八三六年に定めたる法律に從ひ、一人の監督に二人乃至四人のアルチデアコヲを附し、總計八十五人あり。其職は教職志願者の試驗、扶持附教職の推薦、牧師管區の巡回、熱善金の分配、教會の總物及び教會所領内の家屋の管理、及び監督の代理として總會を開く事等也。

アルチビ・ショップ Archbishop. 『監督』の條を見よ。

アルチマンドリテ Archimandrite. 職名 希臘教の僧院長にして、羅馬教のアボットと云ふに均し。

アルツォッグ ヨハン バプテスト Alzog, Johann Baptist 人名 一八〇八—七八 獨逸の人、羅馬教會の史家也。羅馬教註釋の主義と題せる論文を提出し、ミューンステル大學より神學博士の學位を受く。ボーセン神學校、セルテシャイム神學校の教授を經て、フライベルク大學の教授となる。晩年廣き歴史家にして、新教の人々にも尊敬せらる。其著『教會歴史』は九版を重ね、伊、葡、ポヘミヤ、アルメニヤン、及び英語等に翻譯せらる。

アルテモン 或は **アルテマス** Artemon or Artemas. 人名 第三世紀の頃羅馬にて教へ、三位一体説に反し、基督は他の凡ての預言者より優りたれ共、通常の人にして、其神性説の如きは臆説に過ぎず、寧ろ多神數に類するの説を唱へたり。彼の説は後更にサモサタのパウロに依りて敷衍せらる。

アルドレー卿 Sir Calling Eardley. 人名 一八〇五—六三 英國宗教的博愛家にして福音同盟會の創立者也。福音同盟會の目的は世界萬國に於る諸宗教團體の禮拜の自由を得んとするに在り。其創立は一八四六年に在り。卿の力を盡したる事業の中尚記すべきはバルガリヤ教會の獨立を成就せしめたる事(一八五八)露典の羅馬教徒に對する刑法を廢止せしめたる事、及び土耳其帝より凡ての宗教的團體の禮拜の自由の許可を得たる事(一八五六)也とす。卿の著書として有名なるは『一英人の蘇國教會に對する感想』と題する者也(一八四二)。

アルナルフス 聖 Arnulphus, St. (or Arnulfus). 人名 五八二—六四一 壯時軍人及び政治家として名あり、後メッツの監督となる(六一二又は六一三)六二七年ヴォスゲの嶽野に退き、隱士の生活を送り、聖徒の名を得たり。

アルノウ アンリ Arnaud, Henri 人名 一六四一—一七二一 カルヴィンシヤの僧。サヴォイのヴィクトル、アマデアス、パウドイスを迫害するや、之を率ひて瑞西に退きしが(一六八六)佛蘭西及びサヴォイの軍々破りて再び其故郷

に歸り(一六八九)サヴォイ侯も一たび信教の自由を許せしが、佛蘭西と交渉の結果再び信教の自由を奪ひしかば、ウォルテンベルグに退き、パウドイスの牧師となりて、其處に死せり。

アルノウル マリー アンゲリク Arnuld, Marie Angélique 人名 一五九一—一六六一 ヤンセン派の尼。十四歳ポルトロヤルの尼院長となり、十七歳聖ベルナールの規律を勵行し、尼院の改革を行へり。後ヤンセン教の尼院に入る。

アルノウル アンリ Arnauld, Henri 人名 一五九七—一六九四 アントイヌの兄、初め法律を學び、後僧職に入り、續て聖ニコラス僧院長、トゥル及びアンゲルスの監督となる。熱心にヤンセンの説を奉ぜり。

アルノウル アントイヌ Arnauld, Antoine 人名 一六一二—九四 ヤンセン派の神學者。巴理に生る。ポルトロヤルの僧院に退き、イエスイト派に反對す。ヤンセン派の説を奉ぜる故を以て、ソルボーン協會より逐はる。イエスイト派の迫害を受け、佛蘭西を去り(一六七九)爾後フランダルス及び和蘭に住す。當時の最大なる哲學者にして著書あり、又パスカル及びランスローを助けて其著述を大成せしむ。

アルノウル アンゲリク Arnauld, Angélique 人名 一六二四—八四 佛國有名の尼。巴理に生る。其伯母の教育を受け、ポルトロヤルの尼院長となり(一六七八)イエスイト派の爲めに迫害せらる。

アルノット ウィリアム Arnot, William, D.D. 人名 一八〇八—七五 蘇國有名の神學者。『地上生活の天法』『福音解説』『我等の主の譬喩』『ヨェームス、ハミルトン傳』等の著あり、廣く讃まる。

アルノルディ バルソレミーアス Arnoldi, Partholemous 人名 一四六三—一五三二 獨逸ウシンゲンに生る。アウガスチン社の僧、エルフアルト大學の哲學(後神學)教授にして、ルーテルの師也。殷意人文主義に反對したれ共、又此運動の宗教的となりしより、ルーテルに依りて年以後遂に宗教改革の熱心なりしより、心を飜し、一五二一教改革の熱心なる反對者となれり。

アルノール ブレシアの Arnold of Brescia. 第十二世紀の初めブレシアに生れ、一一五五年羅馬に移り、巴理に往きアベラールに就て學び、ブレシアに歸り熱心なる教會改革家となる。彼て自ら持すること嚴厳にして、機ゆるが如き雄辯を有す。羅馬教會の教義に就ては多く反對せざりしが、當時の教會を以て初代の教會に比し、其富敗の甚しきを見、熱烈改革の念あり。彼謂へらく、僧侶の原因は教會の富めるに在り、僧侶の俗なるも亦其富有なるに基けりと。於是彼は先づ僧侶をして使徒の如く財産を有すること勿らしめ、信徒の寄捨を以て滿足せしむるを以て改革の第一要義となし、教に依りて其説を廣布しブレシア及び其近傍の人々を愛へ、遂にラテランに會議を開き(一一三九)アルノールをブレシアより放逐し、且説教することを禁じたり。於是彼は遁れて佛蘭西に往きしが、時宛も舊師アベラールと聖ベルナールとの間の論爭盛なりしかば、彼は自ら其論爭に加り、熱心に舊師を助けたりしが、センスに開ける會議は、彼とアベラールを異端として罰せしかば、彼は遁れて瑞西に往きしも(一一四〇)ベルナールの追擊急なりしを以て、再び遁れて、カルヴナル、ギドウに身を寄せたり。偶々法王インノーセント二世崩ぜしかば、彼は伊太利に歸り、羅馬にて公然説教を始めたりしが、羅馬人は彼の宗教的思想に對しては無頓着にして、唯其社會的生活に及ぼせる影響を見て深く之を喜べり。彼も亦自ら其宗教的出立點を忘れ、古羅馬帝國の盛大に刺擊せられて、政治的改革者となり、自ら調へらく、皇帝を法王より獨立せしめ、元老院と人民とに依りて國家を統治せば、自由は回復せられ、古羅馬の繁盛は再び期するを得べしと。國民は於是大に勃興し、一一五五年遂に新憲法制定せられ、アドリアン四世は止むを得ずして之を批准せしが、法王は之を好まず、オルヴィトーに退けり。後間もなく法王はアルノールを罰せしが、偶々フレデリック、バルバロッサ大軍を率ひて羅馬に侵入せしかば、アルノールは羅馬を逐はれ、法王は羅馬に歸れり。後アルノールはフレデリックに降りしが、フレデリックは彼を法王に附し、法王は彼を絞殺し、其屍を焼き、其灰をテベル河に投ぜり。

アルノルド トマス Arnold, Thomas 人名 一八二三—一九〇〇 ラグビーのアルノルド博士の第二子にして、マジウ、アルノルドの弟也。一八四七年新西蘭に往き、一八五〇年タスマニヤの視學官となる。羅馬教に改宗し、カルヴナル、ニウマンの同僚たる故を以て、オクスフォードの羅馬教大學文學教授となり(一八五六—六二)一八八二年オクスフォードのユニバーシティー、カレッヂ文學教授となる。『英國文學、歴史及び批評概論』を初め、文學上許多の著作あり。

アルノルド トマス Arnold, Thomas 人名 一七九五—一八四二 歴史家、神學者にして、英國最大の教育家。ワイト島のイースト、カウスに生る。一八二八年ラグビー學校の校長となり、英國第一流の學校となす。彼が教育上成功の秘訣は、創度に非ず、其高潔なる宗教的、道德的の人格に在り。彼は人の性格を涵養するの明を有し、規則に依らずして、學生を鼓舞し、其進性及び智力を進養せり。期くてラグビーの學風は、凱面目にして且倫理的也との高評を得たり。彼は政治上及び宗教上進歩的思想を有したりしが爲め、王黨及び高教會派の嫉視する所となれり。牛津トラクト運動の起りし時、熱心に之に反對し、廣教會派を組織し、英國最大の説教家及び文學者を網羅せり。一八四一年牛津大學近世歴史學教授となる。彼が古代歴史の科學的研究に與へたる効多し。其歴史上の著作に『羅馬史』(一八四〇—四三)『晩代羅馬共和政史』(一八四九)『近世歴史講義』(一八四七)あり。宗教上の著作には『教會の改革』(一八三三)『教會雜論』『説教集』(一八七八)等あり。

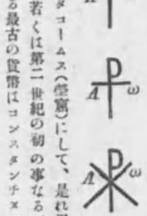
アルノルド　マシウ

アルノルド マシウ Arnold, Matthew 人名 一八二二—一八八 英國の詩人、批評家にして且教育家。トマス、アルノルドの長男、ミッドルセックスのラレハムに生る。一八四七年ランスダウン卿の秘書となり、一八五一年視學官に任用せられ、大陸教育制度の報告書を作ること三回。其間暇身を文學に委し、詩人及び批評家として名あり。一八五七年より六七年迄牛津大學詩學の教授たり。一八八三年及八六年米國に遊ぶ。一八八五年視學官を辞す。リヴァープールに在りて、俄に死す。彼れ文學に志してより、最初の十年若くは十二年間は主として詩作に身を委す。其最大なる文學的批評の出でたるは、一八五七年より十年間の事にして『ホーメル飜譯論』(一八六一、二)及び『ケルチック文學研究論』は其最も著名なるもの也。彼が教育上に於る實驗と、英國民心の研究とは、彼をして當時國民の有する理想に不滿ならしめたり。於是彼の文學的批評は漸く轉じて國民生活の批評となり、其『教化及び無政府』(Culture and Anarchy 一八六九)に於ては、國民の社會的及び教育的僻見を攻擊し『友義の花冠』(Friendship's Garland 一八七一)に於ては、政治上の僻見を痛罵し、『文學及び獨斯説』(Literature and Dogma 一八七三)『神及び聖書』(God and the Bible 一八七五)『教會及び宗教に關する最後の論文』(Last Essays on Church and Religion 一八七七)等に於ては、宗教上の僻見を攻擊せり。彼は當時青年思想の上に大なる感化を與へ、其著作は詩文共に英國文學の中に不朽なるべし。

アルノール派 Arnoldists. 宗派名 プレシアのアルノールの死後凡そ半世紀間、其説を有せし人々の一派なりしが、第十二世紀の初め當時北伊太利に許多ありし羅馬教會及び僧侶に反對せる他の派中に混入せり。

アルハ オメガ 始終 Α and Ω 或は Alpha and Omega. 術語 希臘語アルハベットの始及び終の文字を結合せる者にして、約翰默示錄の中に基督自ら永遠に存在することを顯はさんために三度此言を用ゐられたることを記せり(一

の八、廿一の六、廿二の十三)。然れ共此思想は更に古代に之れあり。舊約貝賽亞書には、エホバ自己を朽つべき偶像に比し、『我は始也或は終也』と云へりとあり(四十四の六)。舊斯約聖書共に此言は永久弥存續の思想と、結極原因の觀念とを表白す。即ちアルハは天地創造の初なる表し、オメガは基督に於る神の國の完成を示す。希臘文字のΑ(アルハ)及びΩ(オメガ)は其形狀單純にして且意義を有するを以て、基督教會の初代より基督教的信仰の模表として用ゐられ、或は一字若くは之を組合せて各種の紀念碑に屢く用ゐられたり。此等の文字を用ゐたる最古の一例はメロス島のカタコームス(墓窟)にして、是れ思ふに第一世紀の終若くは第二世紀の初の事なるべし。又之を用ゐたる最古の貨幣はコンスタンチヌス大帝の子なるコンスタンス及びコンスタンチヌスの時代也。此外指環、印章、繪畫、嵌工、凸彫等にも此文字の用ゐられたるを見る。新教徒も亦時々之を用ゆ。例之獨逸カーロッテンブルグ禮拜堂の前面、伯林マッタアイ教會の聖壇、米國新紐育マザンスクウェーア長老教會等に於て之を用ひたるが如し。



アルバクサデ Arphaxad. 地名 創世紀(十の廿二、廿四、十一の十)に記せる地名にして、希臘語にてアルラパチトスと名くる地方のこと也。現今尙アデバタ又はアルバタの名を以て殘存す。アルメニア人カルズ人はゴルディネの東方山地に此名を附す。創十にシェムの子孫を記すに當りて、南より北に進み、次に西に行き、終に東南に進んでユフラテに歸る。此の順序によればエラム、アシュル、アルバクサデ、ルデ、アラムとなる。此語の意義に就きては議論多し。此語もと希伯來及びアラビヤの二語より成る。カルデア人の境界、又はカルデア人の城とも譯するを得べし。然れども分散と譯する方可なるに似たり。此にアルバタサデと云へる希伯來人の遠祖は、初めアルラパチトスに住みしが、先づノゾボミヤに移り、被ユフラテを越へて迦南、アラビヤに移り住みたる者也。此の説は希伯來人の祖先にカルデヤのウルより來りしと云ふ記錄と一致す(創十一の廿二なるべし)。

アルバヂンス派 Albanenses. 宗派名 カサリ派の一派にして、絶對的二元論を主張す。アルバヂンスに於て、カサリ派の過和黨と分離せしを以て此名あり。尙『カサリ派』の條を見よ。

アルバン 聖 Alban, St. 人名 第三世紀に生れたる英國最初の殉教者也。羅馬に遊び、基督教を信じ、デオクレシアンの治世殉教者の死を遂げたり。マルシアンスの王オッファ、其紀念のためにベルラミヤムの近傍に一僧院を建てしが、其周圍、聖アルバンスの都邑を成せり。

アルビゲンス派 Albigenses. 宗派名 第十一世紀の初め伊太利に起り、南佛蘭西に蔓延し第十三世紀の中頃迄其勢力を逞ふせし一派にして、アルビ市より起りしを以て此名あり。彼等は文書を殘すも、基督教と東洋宗教との調合より生じ、亞細亞に起りし、バルカン半島を越へて西歐に達せし一大思潮の分派なること明也。此思潮の最初の流派はマニキアン、次の流派はパウルシアン、第三の流派はカサリにして、アルビゲンスは此最後の流派の更に分れたるもの也。カサリ派は共に二元論、基督如幻説(ドケチズムを見よ)等の教理を奉じ、殆ど禁慾主義に類せる嶮嚴なる道德律を守り、又共に羅馬教會に反對せる政策を採用せり(カサリを見よ)南佛蘭西は土地豐饒にして人民快活なるに反し、教會は委靡として振はず、僧侶は無學、迷信にして暴戾恣睢を極めしかば、此派試く所の、單純、清潔なる使徒時代に歸るべしとの教訓と、言行一致せる其説教者の生活とは、大なる感動を與へ、人々皆羅馬教會を去て此派に歸するに至り、遂に彼等は羅馬教の僧侶を逐ひ、其寺院を奪ひ、自ら其僧侶及び監督を選び、大に其勢力を振ふに至れり。於是羅馬教會は屢々會議を開きて之を討し、且幾回かの戰爭を重ねて、鎮りに之を迫害せしが、漸く一二二九年に至り之を撲滅するを得たり。

アルビング エドワルド Irving, Edward. 人名 一七九二—一八三四 著名なる創始的説教家にして、カトリック、アポストリック教會の建設者也。蘇格蘭のアンナンに生る。十三歳にしてエヂンバラ大學に入り、四年にして卒業す。一八一五年説教者の免許を得、一八一九年グラスゴーに於てチャルメルス博士の補助牧師となる。一八二二年倫敦カレドニアン教會の聘に應ず。初め聽衆僅少なりしが、能に增加して堂に滿つるに至れり。身体長大にして黑髮長く肩に垂れ、熱心嚴格の精神色に顯はる。其説教は創始的思想に富み、之を飾るに雄辯と豐富なる想像とを以てせり。彼の最も心力を注ぎたりしは終末の問題にして、一八二三年『來るべき審判に關する講論』と題する書を發行し、次ぎて基督再來の問題を研究し、其結果を『ペン、エッツ』と題し、西歐羅巴語にて著作し、後之を英語に飜譯せり。彼は其殘年を尙此等の問題の研究に費せしが、基督の

人性論其他に關し、蘇國教會の教ふる所に當けざる所あり。一八三〇年遠に異端の告訴を受けたり。此時カルデールと稱する蘇國の一辯護士倫敦に來り、其妻及びタルブリンと稱する者アルビンガの教會に於て不可解の語に於て預言を初めたりしが、アルビンガは之を以て聖書の教訓に適へる者となして此運動に加はり、其會衆の多數に棄てられ、一八三二年八百の會衆と共に新なる禮拜堂に於て集會を開けり。其翌年彼は教會より破門せられしが、タルブリンの預言に從ひ、アルデールは彼を其特殊なる會衆の監督に推せり。一八三四年彼は預言に從ひ大に活動せんとして蘇國に往きたりしが、歸英に使され四十二歳にしてグラスゴーに死せり。死に臨み彼は『生くるも死するも我は主のもの也』と反復せりと云ふ。トマスカライルは彼を稱讃して『彼は余の雷て遂ひたりし人の中最も自由、最も親切にして最も大膽なる人なりき』と云へり。

アルフォルド Alford, Henry, D. D. 【人名】 ヘンリー 一八一〇—一八七二 カンタベリーの副監牧師にして、當時最も博學なる教家の一人也。即ち彼は詩人、說教家、畫工、音樂家、聖書學者、批評家にして且語學者也。彼は『時代評論』の創立者にして、又其最初の記者也(一八六六—七〇)。彼の大作は希臘語新約聖書の出版にして、一八六八年訂正を施して其六版を發行せり。且之に依りて獨逸學を英國の讀者に紹介せる功著し。此外創世紀及び出埃及記の一部分の改正譯及び註釋、『英國讀者のための新約全書』欽定譯新約全書の改正譯を初めとし、著書頗る多し。

アルフレッド大王 Alfred the Great. 【人名】 八四九—九〇一 英國王。當時國人中王に拉丁語を教ふるものなかりしが、王は學問及び文明の何物たるかを解し、デンス人と屢々戰を交へて國家甚だ多事なりしに拘らず、鋭意國運の進歩及び改良を謀れり。斯くて王は國内の政治及び宗教上の組織を改造し、デンス人のために燒かれたる教會、僧院及び學校を再建し、且アセルチー及びウィンチスタルの僧院及び牛津(オクスフォード)大學の如きものを新に起てたり。王は又許多の學者を招聘して之を優待し、羅馬より書籍を輸入して、圖書館を設立せり。王が其國人の中に智識及び教化を欲するの念を起さしめたるは、最も著しき事實にして、王の自ら著譯せるもの頗る多し。

アルブ Alb. 【雜語】 白麻布製の僧服にして、第四世紀以後用ゐられたれ共、現今は羅馬教の僧侶のみ之を用ゆ。

アルブライト Albright, Jacob 【人名】 ジェーコブ 一七五九—一八〇八 北米福音教會の創立者にして、ペンシルバニヤ州ポッ色の近傍に生る。兩親は同州に住せる獨逸人にして、ルーテル派の教會に屬せるを以て、彼も亦父母と共に其教會に入会なりたり。彼は當時の不完全なる教育を受けしが、成長するに從ひ、其周圍の、其智識的及び靈的生活に適合せざるを感ずるに至れり。於是彼は婚姻後、凡そ七十哩隔たれるランカスタル郡に轉居し、此處にて瓦及び煙瓦の製造に從事せしが、事務繁榮、迚ゃ富を得るに至れり。然るに一七九〇年引續きて其愛子數人を失ひしかば、彼は悲哀に堪へず、獨逸改革派教會の牧師ハウツの葬儀說教を聞き、大に感動して、從來宗教に冷淡なりしを悔ひ、深く改心するに至れり。然れ共獨逸ルーテル派の同胞中には、彼れの宗教上の有樣を領解するものなく、左りてメソヂスト派に對しては、一種の偏見を有したれば、之に往きて安慰を求むることを爲さざりしが、偶ゃメソヂスト派に屬する信徒なる說教家アダム、リッジェル神の道に就きて、彼が從來聞きしよりも優りて、能く彼に語れるを聞き、獨り深く自ら喜べるのみならず、又其喜を他にも分け與へんとせしが、反對ありて果さず。於是メソヂスト教會に往き、其教會政治に就て學ぶ所ありしが、深く之を喜び、遂にメソヂスト教會に入會し、勤士の免許狀を得たり。然れ共彼は當時未だ教役者とならんとするの念ありしに非ず、唯深く同胞の精神的狀態を憂へ、只管其改心を祈りしのみなりしが、偶ゃ重き病に罹り、身を以て改革の事業に任ずべきことを確信するに至り、一七九六年十月遂に斷然俗業を擲ち、全身を巡回傳道の事業に委するに至れり。素より是には反對ありしがども、彼は毫も屈せず、自費を以て各地を旋行し、只管人の爲めに善を爲さんと心掛けたり。彼は長くメソヂスト教會に留まらんことを欲したりしが、當時此教會は獨逸人の中に傳道せざりしかば、彼は心ならずも、メソヂスト教會を離れ、別に『福音教會』と稱する一派を創立するに至れり。斯くて一八〇〇年には、三個の教會を組織し、一八〇三年には、會議を開き、メソヂスト監督教會と離れたる而かも大体に於てはメソヂスト主義なる組織を採用せり。一八〇七年第一年會を開きたりしが、平信徒の集會なる此年會に於て、全會一致を以て彼を牧師及び監督に選擧し、聖書を以て信仰及び行爲の唯一標準也と宣言せり。彼は此年會の後間もなく死去せり。監督ヤーケル彼の容貌を記して曰く『彼は身長哈ど六尺、滑なる黑髮、高き額、小さき、凹める、鋭き眼、曲れる鼻、能く的合へる

口と頤、格好よき体格、白き容色、及び快活にして激し易き性情を有せり』と。(『福音教會』の終巻所)。

アルベルタス マグナス Albertus Magnus. 【人名】 一一九三—一二八〇 パドリアに生る。博學にして、其智識多方面に渉れるを以て『萬能博士』と稱せらる。ドミニカン派の僧となり、後ラチスボンの大監督たり(一二六〇)曾てパリ大學に在り、科學、神學、及び哲學教授たり、後コローメの僧院に退き、此處に其餘生を送れり。其科學の智識は、當時の人々をして驚嘆者也と想像せしめたり。其神學上の著作には、聖書註釋、說教集、道德及び美學上の論文、教義的說明の書等枚擧すべからず。トマス、アクイナスは彼の門に出づ。彼れ通性論に斷案を下して曰く、通性は神の意中に於る造化の模範としては個々物に先ちて存し、又吾人の摘象して造りたる概念としては個々物に後れて存すと。彼はアリストテレースの哲學を其所說に取り容れたれ共、彼に在ては哲學と信仰とは自ら殊別のものたる觀あり、兩者の融合は尚未だ彼に於ては成就せられざりき。煩瑣哲學の立脚地に在りて此兩者を最もよく結合せしめたるは、彼の門人アクイナスなりき。

アルマゲドン Armageddon or Harmagedon. 【地名】 默十六の十六に三の靈が諸王たちを集めたる地として記せる希伯來語地名。改正英譯はハルマゲドンとなし、希臘語寫本の中にはマゲドンとなせる者ありて、讀方及び意義共に明ならず。此語最古の解說はヒッポリタスの與へたる者にして、彼は之を『美なる場所』の義となし、エホシャパテの谷を指せりとなせり(耳四の二)。教會は又久しく之を『メギドかの山』の義に解し、今日にても尚類く信ずる者多し。メギドウはヨシアの戰死せし處として有名なれ共(王下廿三の廿九)此名の此處に記されたる地なるを以て獲十四の十三の『北の極なる集會の山』と同一視し、ケンケルも之に贊して、山上にて諸神の戰へりと云へる傳說あるを言へり。エヌルドは此希伯來文字を數字となす時は『大羅馬』の義を表すといへり。

アルミニウス派の神學 Arminianism. 【學派名】 第十六世紀の宗教改革に於てアウガスチンの預定說復興せしが、カルヴィンは之を極端に發達せしめ、爲めに神の惡惡の普遍的方面を若むに至りしかば、之に對する反動的運動起れり。即ちアルミニアニズムと稱する者にして、初め和蘭ライデン大學に起り、後長く神學上爭論の題目となれり。【アルミニウス】 Jacobus Arminius 一五六〇—一六〇九 アルミニアニズムの雄跨也(創首者に非ず)ライデン大學に學び、後ウェネヴァ大學に選び、テオドル、ベザに從ひ神學を學ぶ。然れ共其哲學に於ては、熱心にラマスを奉ぜり。後又羅馬に遊び、歸りて後アムステルダム教會の牧師となり、其學識と雄辯とを以て大に名聲を博せり。當時和蘭の教會に在りては、カルヴィン派の神學頗る盛にして、殆ど全教會をカルヴィン派化せんとするの勢力ありしが、クールンヘルト(Coornhert)なるものあり、盛に書を著してカルヴィン說を排擊せり。又カルヴィン派の中にも溫和、極端の二派あり。極端派は人類の墮落も亦神の預定せる所也と云ひ、(Supralapsarians)溫和派は人類の墮落は神之を預知せりと雖も預定せるに非ず、預定は墮落以後に來れる者也と云へり。(Infralapsarians)アルミニウスはクールンヘルトの救拯普遍說と、溫和カルヴィン派の所說を駁擊すべしとの官命を蒙り、カルヴィン說を保護するの目的を以てクールンヘルトの著書を研究せしが、却て其說の眞理なるを認め自己の說を棄てゝ、所謂アルミニアニズムを唱道するに至れり。(一六〇四年)其說に謂へらく、基督は萬民の爲めに死し給ひたれば、其贖罪の惡惡も亦萬民に及ぶ者にして、何人も皆此惡惡を蒙るの機會を有す。聖旨は墮落せる人類を救はんために、萬民を導きて此惡惡に浴せしむ、然れ共此惡惡を受くゝると否とは人々の自由獨斷に依る。又眞面目に神に信賴する者は、終りまで忍ぶことによりて救拯を受くるを得べしと雖も、一旦惡惡を受けたる者も後再び之を棄てゝ墮落することあり。預定は無條件に非ず、神は此等の事を知り、之に依りて救拯を確定する也。アルミニウスは此の如く神の惡惡と聖寵の助力とを高調し、從て又人間の責任を說けり。彼の說に依れば神は萬民を愛し、悉く之を救はんと欲し給ふと雖も、人には又自由の意志ありて、神の惡惡を受くるも棄つるも皆其意志の欲する所に從ふことなれば、滅亡者の滅亡は神の惡惡の不足なるがために非ず、神の惡惡を受くるの機會なきが爲めに非ず、又神の預定に基くにも非ず、自己の頑固なる心を以て自ら神に背き其惡惡を拒むが爲めに外ならず。一六〇五年彼に舉げられてライデン大學の神學教授となりしが、其同僚フランシス、ゴマルス(Francis Gomarus)は極端なるカルヴィン說を把持せしを以て兩者の間に劇しき論爭起り、大學より延て講壇并に家庭に及び、之を調停せんと謀りし者ありしかども効を奏せず、彼に其死に至る迄最も熱心に論爭を繼續せり。然れ共彼は溫和なる基督教徒にして、グロチウスは彼を稱說して『彼は人に郊

せられたれ共、曾て人を罪したることなかりき」と云へり。彼の死後彼の説は其徒に依りて宣傳せられ、廣く信徒の間に弘布せらるゝに至りしと共に、其內容に於ても亦變化發達せり。元來アルミニウス説は單に普遍的恩恵と條件的救拯の教義なる意義するのみなりしが、漸次發達して廣く自由的傾向を有する宗教、道德説を指示するに至れり。ゴマルスの徒が彼等を目してペラギウスの徒也となして之を排斥するに至り、彼等は和蘭及び西フリースランドの州會に抗議を提出し、五個條の目を備へてカルヴィン説の誤謬を指摘し、恩恵の普遍的なることなる論ぜしに、州會はアルミニウス説に傾き、爭論を禁じ平和を守るべき旨を命ぜり。

【ドルトの會議】 The Synod of Dort 然るにゴマルスの徒は此命令に服せず、有名なる政治家も亦此渦中に卷込まれ、共和黨の首領オルデンバルンベルトは、有名なる法律家にして且神學者なるグロチウスと共にアルミニウス派を助け、王黨の首領モーリスはゴマルス派を助け、爭論頗る劇烈なりしを以て、アルミニウスの死後九年ドルトの會議を召集し此論爭を決定せんと企てたり。此會議は一六一八年十一月に始まり、會議を重ねること百五十四回、翌年五月を以て閉會せり。和蘭の外諸國の神學者に書を贈りて來會を促せしに、英、蘇、獨、及び瑞西の諸國より招に應じて來れる者廿八人、佛國よりは一人も參會せざりき。此會議は初めよりアルミニウス派を排斥するの目的を以て開かれ、熱心なるゴマルス派のボゲルマン議長となり、アルミニウス派に屬する議員の辯論を許さずして、のみならず、遂に悉く之を退場せしめ、其五個條の信條を罰し、カルヴィン派の神學に依れる信仰個條を制定せり。此會議終りて後アルミニウス説を奉ずる二百人餘の教師は其職を避けられて追放せられ、オルデンバルンベルトは死刑に處せられ、グロチウスは獄に繫がれたり。此後數年間アルミニウス派の信徒は種々なる迫害に遭遇せしが、ヘンリー王立ちて聯合州の長官となるに及び（一六一五）初めて和蘭に住し、教會及び學校を建つるの自由を得たり。然れ共過去止みて後アルミニウス派の勢力却て振はず、信徒の數も亦減少するに至れり。

【ウエスレアン、アルミニアニズム】 メソヂスト派の鼻祖ウォンウェスレーはアルミニウスの神學を奉じ、之がためカルヴィン説を非ざるホイットフィルドと手を分つに至れり。單來メソヂスト派は其英國に在るとも米國に在るとを問はず、一般にアルミニウス説を把持し、カルヴィンの預定説に反對せり。今此點に關するウェスレー派の所説を左に簡短に示すべし。（一）ウェスレー派はカルヴィンに異ならずと雖も、神の恩寵（グレイス）の預知（ボーズ）を以て論理的に神の意志に先つもの也と爲す。故に神の決定するや凡の事情及び境遇に依りて之を爲す、其預知や直覺的なるのみ。神の知る所のものは、其過去なると現在なると將來なるとに拘はらず、假令全然確實なるも認識に依りて必然の結果を發に至れるには非ず。神は唯其既に起りたること、今起れること、將に起らんとすることを知るのみに非ず。又其然らざりしことあるべく、ありうべきことをも知る也。是れアルミニウス説の神觀との根本的相違也。（二）ウェスレーの徒は以上の相違を認むるが故に、神は物質的事件を任意に決定すと雖も、道德的範圍に屬する出來事は任意に決定せず、或程度迄之を合理的受道物（人）の意志に放任すとの事を信ず。彼等の説に依れば是れ人の試煉及び自由意志の依て生ずる根源也。（三）人は腐敗せる道德的性情を具て生れ、從て自ら神の聖意に適ふ樣に神を愛し又之に事ふること能はずと雖も、基督の顯恩は普遍的にして、且聖靈は暮く凡ての人を照して之を救拯に導くが故に、何人と雖も其生れ乍らの性情に勝ち、もし自ら之を强まば神の定めたる方法に依りて福音の救に預ることを得べし。而して人なして新生活に向はしむることは、各自の自由意志にして、此意志は神の與ふる光明と恩恵とに依りて刺激せられ誘導せらるべしと雖も、之がため强迫せらるゝに非ず。神より出でゝ斷へず指導する力あるに非ざれば、人の意志は正當の方向に向て動くこと能はざれ共、此力は假令知何に强大なるも强迫的には非ず。故に聖靈は人の之を受くる場合に力りて始めて其道德的性質を改善する有力なる作因たるべし。換言すれば、人は自己の力に依りて救はるゝこと能はず、神に依りへ救はれんとの希望に依り、此目的に從て基督を信じ、依て以て救はるゝことを得べし。而して此中に含める悔悟と信仰とは神の賜なれ共、其之を實際に用ゆるは全く人の自覺的意志と個人的動作とに在り。（四）悔改は自覺的信仰の結果にして、感情の自覺的變化を含有す。故に此恩恵の狀態を知るは神の子の受くる特權也。又健全なる實驗に聖書と共に、此變化せる關係の事實なることを證す、之を名けて『聖靈の證』といふ。（五）メソヂストの徒は又神の恩恵と人の信仰及び服從の德とに依り人は地上に於て其腐敗性を脫離し、完全に達し得べしとの事を信ず。所謂『完全の清潔』なるもの是也。（六）彼等は神の恩恵と人の

信仰とに依りて救拯を得、完全の清潔に達し得べきことを信ずるが故に、又中途にして是等の恩恵より落つることあるべしとの事を信ず。以上は即ちウエスレー派取る所のアルミニウス説の梗概にして、近年に至る迄カルヴィン説に對し熱心に此教義を擁護し來りしと雖も、カルヴィン説は近來其勢力を失ひ、アルミニウス説を採用する者次第に多きを加へ來りしと、時世の變化したるとに依り、近年再び熱心なる之が論爭を見ず。

アルメニヤ Armenia.

【地名】 小亞細亞の東北に位し、北はトレビゾンド及びトランスカウカシアに境し、南はカルヂスタンに接し、東はカスピアン海に臨む。全國大部高原にして高サ平均五千呎、其最も高きはアララテ山にして海拔一万六千九百呎。ユウフラテ、チグリス、クラ、アラス等の大河は此地に發源す。氣候低地は溫暖なれ共、高地は寒氣頗る嚴烈也。地味豐饒にして物產多く牧畜も亦盛也。人種は高加索に屬し、言語はアリアン語の一種也。アルメニヤ人のアルメニヤに住する者は百萬に超え之等、露西亞に在る者凡そ五十萬、其外小亞細亞、歐羅巴、波斯等に散在する者を合せて人口二百萬に過ぎざるべし。本國に住する者は主として農耕、牧畜を營む。服裝は土耳其人と同じく、唯高き毛皮の帽を用ゆるを異れりとするのみ。

舊約聖書に依ればイデンの園の存在せしには此地方也（創二の十七）。又ノアの方舟の止まりしはアララテ山なりしと云ふ（八の四）其但ノアが初めて葡萄園を作りし處、ノア及び其妻を葬りし處也と假定せられたる場所此國に在り。又其外聖書に記されたるトガルマ（十の三、代上一の六、結廿七の十四）アシケナズ（創十の三、耶五十一の廿七）も此國の或地方を指したる名也。希臘人及び羅馬人は此國をアルメニヤと稱し、ヤヌンの友なるアルメニアスより此名稱起れりと爲せり。然れ共アルメニヤ人はハイタの子アルメナクより此名稱起れりと云ひ、ヤペテの曾孫の名に從ひてトゴマア人と稱し、神話と聖書の物語とを巧に混合して其歷史をノアに溯らしめたり。然れ共アルメニヤは適當の意義に於て、自國の歷史なる者を有せず、相續きてアッシリヤ、バビロニヤ、メデア及び波斯の屬國たり。後又亞歷山大帝に征服せられ、帝の死後交互マセドニア及びセリウシデアの管轄を受けしが、紀元前第二世紀の中頃に至りパルテアン王アルサセス大王其弟を立て、アルメニヤ王を爲せり。紀元第五世紀の初に至りアルサセス土の系統斷へしかばバイザンタイン、波斯兩帝國之を爭ひて戰爭絕久す。第九世紀の中頃に至り、猶太人の一族バグラチット王朝起りて獨立を企ふし平和を恢復し、其衰ふるに及び（一〇四五）同族ルベニア王朝之に代りて立ちたりしが、一三七五年マメルク人の來襲に逢ひ國民離散し、國家分裂するに至れり。現今三部に分れ西部は土耳其に屬し、東部は露西亞領來りて傳道し、愛に殉教者の死を遂げたりといふ。此傳說の眞僞は明ならざれ共、第二世紀の頃基督教は既にアルメニヤに傳へられ、第四世紀には既に基督教國となりし事確實也。光照者グレゴリーは即ちアルメニヤの使徒にして、彼はサリダテス王の輔佐に依り全國を基督教化せり。彼は希臘及び西利亞より僧侶を聘し、會堂を建て、監督を置き、自ら カイザリアの大監督レオンチアスに依り聖別せられてアルメニヤの教長となりしが、此教長の職は爾後長くグレゴリー家の專有する所となれり。三六四年其孫子ルセス、アナスタシトに宗教會議を開き、親族間の婚姻を規定し、且初めて僧侶、羹肯院及び教會を建てたり。三六六年再び宗教會議を開き、教長の權威を制限し、且爾後教長はカイザリア大監督を待たず、アルメニヤの監督等自ら之を選み之を聖別すべしとの事を定めたり。子ルセスの子サバタの時に至り、聖書の譯譯及び新禱書、禮文の編纂成り、五五一年に至り今日後等の使用せるアルメニヤ曆一定せられ、五五二年七月十一日を以て其紀元となせり。故に西曆一九〇七年はアルメニヤ曆の一三五五年に相當す。アルメニヤ教會はカルケドンの會議（四五一）に於て定めたる決議に反對し、基督は神性のみなる有すと云へるエウテケスの説を承認せしが、五五四年に至り遂に此點に於て希臘教會と分離せり。爾後アルメニヤ教會は漸次希臘教會と異なる神學を作成せしが、其禮文は實際之と大差なし。彼等は洗禮に於ては三度冠水を濺ぎ且水に浸すの必要あり、又洗禮と共に堅信禮必要也と云ひ、晚餐に於ては純粹の葡萄酒及酵酵を用ゐざる可らずと云へり。彼等は聖徒を崇拜せしかど煉獄説を信ぜざりき。一四三九年コンスタンチノプルに在るアルメニアン教徒は基督の一性説を棄て羅馬教會に合すべしとの法王の勸告を容れたり。於是アルメニヤ教は二に分れ、一は羅馬教會に合し、傳説的信仰を固守する者は別に一分派を作れり。此分派の首腦はエチョアザン僧院の教長にして、エルサレム及びコンスタンチノプルの教長は其管轄下に在り。一八三一年米國外國傳道會社はアルメニヤ人の中に傳道を開始せし

が、土耳其及び小亞細亞に於てのみならず、アルメニヤ本土に於ても大に成功し、一八五〇年初めてプロテスタント教會を組織するに至れり。アルメニヤ教會は初め新教徒の傳道に反對し、劇烈なる迫害を加えしが其後事情大に疎通し、米國宣教師の譯述せる聖書を一般に採用し、交情漸く密なるに至る迄屢々回教徒の迫害を蒙りたり。

地理上の關係よりアルメニヤ教會は近年に至る迄屢々回教徒の迫害を蒙りたり。

【アルメニヤの虐殺】　過去廿年間土耳其帝國殊に小亞細亞に於て、回教徒及びアルメニヤ人なる同僚をしめしが爲め、剛者の敵意を增長せしめ、後者は斷へず前者の迫害及び虐殺を蒙れり。一八八五年土耳其領アルメニヤのアルメニヤ人中に虐無篤的革命を企つるものあり。一時騒壓せられしが一八九三年夏に至りて再び革命試を宣傳せるものあり。於是クルド族は山地方面を掠奪するの命を蒙り、土耳其の常備軍も亦之を助くる爲めに派遣せられ、一八九四年八月サッスンに於て大殺戮行はれたり。歐羅巴各國は之を聞て大に驚駭し、同年十一月英、佛、露の領事は土耳其政府の任命せる審問委員と共にアルメニヤに赴き、審問の結果土耳其政府の煽動に依りて此等の暴行の行はれたる事明となりしが虐殺は尚依然として行はれたり。於是以上の三強國はツルタンに向て政治の改革を迫りしが、土耳其政府は其慣手段を用ゐて遷延決せず、却てサッスンの虐殺に與かりたる官吏を賞せり。一八九五年複雜なる改革案提出せられ、土耳其政府は之を承認せしが、暴行虐殺は一八九六年一月に至る迄尚止まず、其間調停試出でしも露國は土耳其政府を強迫するを好まず、英國も亦獨り自ら事を行ふを欲せず。同年夏ヴァン、エギン、ニクサルに於て再び虐殺行はれ、村落は掠奪せられ、疫病、饑饉は之に續きて起れり。八月に至りコンスタッチノプルに在るアルメニヤ人は政府の意慢な慣りオットマン銀行を掠奪せしが、土耳其の暴民は政府の指嗾を受けて、ダゼリアのアルメニヤ人凡そ七八千人を殺戮し、以て其恐を報ぜり。一八九六年以後虐殺は時々特發し、アルメニヤ人は今尚全く回教徒なる官吏の掌中に在り。此間虐殺せられたる者實に二万乃至五万人の多きに達し、財産の損害亦計る可らず。英米諸國の基督教徒は殺害せられたる者の寡婦孤兒を養はんが爲めに義捐金を募集し、土耳其政府の反對ありしに拘はらず多少其目的を達せり。一九〇四年クルド族再び暴挙を行ひ、今尚英國議會の問題たり。

アルメニヤ譯聖書　Armenian Version of the Bible.　【書名】　アルメニヤ譯舊約は七十人希臘譯より飜譯せる者にして、最も精確忠實なる譯也と稱せらる。從て聖書の批評に取りて希臘譯と共に最も貴重なる地位を占む。其飜譯の成りたるは三九六年より四三〇年の間に在りとす。新約の飜譯の成りたる時日及び狀態に就ては吾人詳に之を知る得ざれども、舊約と同じく、其飜譯忠實精確にして批評學上の價値頗る大也となす。

アレアンデル　Hieronymus ヒエロニムス　【人名】　一四八〇―一五四二　以太利ヴェニスの近郊に生る。初め醫學を學び、後神學を學ぶ。巴理大學希臘語の教授となり、後パチカン圖書館長となる。又法王の使節として、カラクシオリと共に獨逸に使せり。ウォルムスの會議に於るルーテルの强敵にして（一五二一）宗教改革に與せる者を迫害せり。プリンツッシの大監督となり、後

アレキサンデル　Alexander.　【人名】　八人の羅馬法王此名を有す。（一）アレキサンデル一世（一〇九―一一九）殉教者の死を遂げたりと信ぜらる。（二）アレキサンデル二世（一〇六一―七三）法王ニコラス二世死するや、ヒルデブランドの力に依り、選ばれて法王となる。然るに此時パルマの監督カダラス獨逸帝の力に依り、同じく法王となり、オノリウス二世と稱す。於是二者の間に激しき爭ありしが、マンチュアに召集せられたる會議に於て、アレキサンデルの法王たること承認せらる。ベテル、ダミアニ及びヒルデブランドの助を得て、羅馬教會に改革する處多し。（三）アレキサンデル三世（一一五九―八一）法王アドリアン四世死するや、アレキサンデル多數の投票を得て法王となりしが、少數の投票を得たるオクタビアヌスは、却て獨逸及び人民の承認を得て法王となり、ヴィクトル四世と稱せり。フレデリック一世も亦ヴィクトルに左袒し、パビアに會議を召集して、其選擧を確認せり。於是兩派分離して廿年間篤爭の端を開けり。ヴィクトル死して爭論尚止まず、パスカリス三世立ちて法王となり、パスカリス死するや、人民は又カリクスタス三世を立てて法王となせり。アレキサンデル三世は羅馬に入りて、其地位を遠ちんとせしが、フレデリック一世大軍を率ひて伊太利に攻め入り、羅馬を奪取せしを以て巢さず。然れ共アレキサンデルの勢力漸くに加はり、遂にフレデリックの軍を破り、ヴェニスの條約を結び、且羅馬の總督となれり（一一七七）彼は又英國王ヘンリー二世をして、トマス、エ、バケットを殺したる罪を謝するため、宗教上の懲罰を受けしめたり。一一七九年フランの會議を召集し、溜列に入る事の幅利を法王のみに限り、法王の選擧に關

き僧侶及び人民の容喙するを禁じ、又之を承認する帝王の權利を廢棄するの法律を通過せり。然れ共彼は遂に羅馬人民の同情を得ること能はず、オンノーセント三世斯に選まれて、アレキサンデルは三たび羅馬を逃れ、ビテルカステラに客死せり。（四）アレキサンデル四世（一二五四―六一）性質柔弱、フレデリック二世の庶子マンフレッドと戰ひ、敗れてビテルボーに逃れ、其處に客死せり。（五）アレキサンデル五世（一四〇九―一〇）在職僅に十ヶ月にして死す。其法官にして、後に罷ぎて法王となれるヨハネ廿三世に依りて毒殺せられたりと信ぜらる。（六）アレキサンデル六世（一四九二―一五〇三）放蕩、荒淫、人の妻を盜し、剛へ其所生の女と通ぜりと傳へらる。西班牙のバレンシアに生る。其叔父のカリクスタス三世として法王に選ばるゝや、立身の道を發に得んとして教會に入り、廿五歳にしてバレンシアの監督となり、次でカルヂナルとなる。法王インノーセント八世死するや、多數の投票を買ひて、法王となる。既に法王となるや更に自己の一族を以て朝廷を立て、僧權を弄せんとして、伊太利國の政治に干渉し、暗殺及び毒殺等あらゆる方法を逞したりと傳へらる。然れ共彼は又他方に在りては能力ある執政者、政治家、技藝及び學術の保護者、人民の友たるの實を示せり。彼を助け、其政策を鼓吹せるは、ジーザル、ボルギアにして、彼はマキアベリー流の政治家也。（七）アレキサンデル七世（一六五五―六七）學術の守護者にして、又自ら拉丁詩集の著者也。羅馬市の改良に與りて力あり。又聖ピエトル寺院の美麗なる柱廊を造れり。佛王ルイ十四世と爭ひ、其結果アビョンの所領を失へり。（八）アレキサンデル八世（一六八九―九一）グェニスを助けて土耳其を撃く。又瑞典女王の圖書館より貴重なる寫本を得て、ヴァチカン圖書館を富せり。

アレキサンデル　Alexander, of Hales.　【人名】　ヘールスの英國領環哲學派の神學者。グローチェスタルシーアの牧師を辭し、巴理大學希臘語の教授となり、後パチカン圖書館長となる。又法王の使節として、カラクシオリと共に獨逸に使せり。ウォルムスの會議に於て（一五二一）宗教改革に與せり。一七九年フランの會議を召集し、溜列に入る事の幅利を法王のみに限り、法王の選擧に關

アレキサンデル　Alexander, Joseph Addison, D. D.　【人名】　一八〇九―一八六〇　アルチバルド、アレキサンデルの第三子にして、十七歳米國ニュヨークのプリンストン大學を卒業し、後獨逸に學び、プリンストン神學校の教授となる。三十箇國の語に通じ、殊に希伯來語に堪能也。

アレキサンデル　アレキサンドリアの教長　Alexander, Patriarch of Alexandria.　【人名】　三一三―三二六年基督教に在り。アリウスはアレキサンドリアに開ける監督の會議に於て有罪の宣告を受け、逃れてパレスチナに往き、彼處にて教會の保護を受けしを以て、アレキサンデルは、前後再び書を其地の諸監督に贈りて、アリウス說の誤謬を指摘せり。（アリウス說の條參照）

アレキサンデル　アルチバルド　Alexander, Archibald, D. D. LL. D.　【人名】　一七七二―一八五一　米國プリンストン神學校最初の教授にして、プリンストン神學創設者の一人也。常識あり、人性を解し、同情深く、殊に敬虔の念篤し。米國長老教會今日の氣風は彼に負ふ所多し。彼は獨逸神學の惑や教會に過ぎんことを思ひ、深く之を恐れたり。彼れ著書多し、『基督教証論概論』『聖

アレキサンデル　ウィリアム　Alexander, William　【人名】　一八二四　アルマの大監督にして、一八九六年以來愛爾蘭全國の總管長也。『詩篇の証論』（バンプトン講義、一八七六）『編音書主要の觀念』『聖書、約翰の書論』（一八八七）等の著書あり。

アレキサンデル大王　Alexander the Great.　【人名】　前三五六―三二三　マセドニア王にして有名なる征服者也。歐亞二洲を征服して之を連接せしめ、希臘語を當時の文明國の共通語となし、敬くして無意識的に編音宣傳の道を開けり。彼の名は聖書の中に之を見ること能はず、偽經マッカビース上一の一―九には見えあり。又但以耳書には寓意的に彼の事を記せり。即ち二の牛九には、チアカドチッザル王の像の銅の頭として、七の六には、四の翼を有せる豹の如き獸として、八の五―七には、彼の力と其戰勝の速なるを示さんため、一角を有せる牡山羊と雖も、直接に彼の事を云へり。彼は其事業の偉大なるがため、大王の稱を得たり。彼れ紀元前三三六年父王フィリップに嗣ぎて王となり、其死に至る迄四方を征服して寧日なし。斯くして西は埃及を征し、東は西利亞、パレスチナ、波斯、及び巴比倫を從へ、又印度を衝きてインダス河に及び、ヒファシス河岸に巨大なる十二箇の壇を築きて、彼が此處に來れる紀念となせり。斯る勇將も其私慾に勝つこと能はず、過度の飲酒のため其健康を損じ、三十三歳にして死し、其建設せる埃及のアレキサンデル府に葬らる。且彼が征服して得たる大帝國は、死後其四大將の間に分割せられたり。彼太の史家ヨセフ

アスの傳ふる所に依れば、王はタロを圍みし後エルサレムに往きしが、彼に關する但以耳書の預言の應驗せるに驚き、各地に在る猶太人に重要の特權を與へたりしといふ。但し此事は異邦人の著はせる歷史には記載せられず。

アレキサンドリア Alexandria. 【地名】 紀元前三三二年亞歷山大王の建設する所也。トレミー朝の下に在りて長足の發達を爲し、幾ならずして、人口凡そ七十五萬を有する大都會となれり。亞歷山は地中海の要衝に當り、埃及の穀物は悉く此處に集まるを以て、羅馬及びコンスタンチノーブルは食物の供給を此處に求めたりしのみならず、玻璃、紙、織物も此處に製造せられ、當時智識の中心も爰に在りしを以て、東西の人々此處に集り來り、遂に世界的都市となるに至れり。當時市を三區に分ち、ラコチス區には埃及人住し、爰に有名なるセラピスの殿堂あり。希臘人はブラッキアム區に住し、爰に有名なる博物館及び拉丁、希臘、埃及、印度等の書籍七十萬卷を藏せる圖書館あり。猶太人區には人口頗る多く、フィロンの語る處に依れば、當時埃及全國に住せる猶太人の總數百萬に達したりしと云ふ。トレミー一世は彼等に希臘人と同等の權利を與へ、後羅馬帝も同一の特權を許容せしが、彼等は希臘人にも羅馬人にも嫌忌せられ、後其特權は奪はれ、會堂は毀され、第五世紀の初には遂に亞歷山より放逐せられたりき。紀元前八〇年トレミー亞歷山は市を擧げて羅馬に讓與せしが、其全く羅馬の有となりしは紀元前三〇年アウガスタス帝の之を略取せし時に在りと爲す。是より亞歷山は羅馬帝直接の管轄を受けしが、紀元一九六年に至りセヴェラス其自由權を恢復せり。然れ共爾後騷擾相續ぎ屢々反亂を企てしを以て、羅馬帝の虐遇を蒙り、第三世紀の初に至り、カラカラ帝は凡て武器を帶ぶるに堪ふる青年を悉く殺戮せり。亞歷山は是より衰微の兆を顯はせしが、六四〇年亞剌比亞人の爲めに略せられ、後海賊の横行するあり、商業漸く衰頽せしが、カイロ市の新に建てらるゝに及びて(九六六)其名聲又衰へ、喜望峯航路の發見(一四九七)に依りて商業全く衰へ、第十八世紀の終には人口僅に六千人を有するに過ぎざりき。然れ共一八〇六年に至りメヘメット、アリに依りて又復興し、近時埃及の繁華と共に再び其勢力を回復せり。一七九八年那破崙帝之を掠取せしが、一八〇一年英軍之を奪へり。一八八二年アラビ、パシャ叛亂の際英國の海軍之を封鎖し、其砲臺を破壞せり。

【文學及び宗教】 亞歷山大王の諸國を征服せし頃より、希臘の文學は亞歷山に移り來りしが、此時旣に其創始的勢力を失ひ主として批評的となりたり。斯くて一方に在りては文法、修辭、考古、神話等の諸學發達し、他方に在りては數學、天文學、醫學、地理學等發達したりしが、詩歌、哲學は進歩する所勿りき。尤も哲學の方面に在りては希臘の哲學、猶太の宗教、羅馬の實驗說、印度の神秘主義端なくも爰に會合せしを以て、一種特殊の者を產出したり。是れ即ち此等諸種の異主義を調和したるものにして、フィローン(Philo)の哲學は猶太教の方面に於て爲されたる企なりき。彼は著しく希臘思想を領解し消化する力を有したりしかども、其哲學には猶太的特色を失ひたりき。希臘哲學の方面に於て爲されたる企は、新プラトン派(Neo-Platonists)にして、神と宇宙、神と人、靈と物質との關係に關する彼等の解釋は頗る巧なるものなりしが、其思辨には希臘思想の特色を缺きたりき。斯くて基督教は此間に發達し、正統教會の本據となり、クレメント(Clement)オリゲン(Origen)アタナシウス(Athanasius)等の人々を產出せり。夫の七十人譯(Septuagint)と稱せられたる希臘譯舊約聖書の成りたるも此地なり。亞歷山寫本(Alexandrian Codex)と稱せられたる希臘語聖書の寫本(四五〇頃の產にして古寫本中最も貴重なる者の一)は亞歷山に於て發見せられたる者にして、一六二八年コンスタンチノープルの主教グリラス、ルカリス亞歷山を去るに臨み攜へ往きて同地に在る英國公使の手を經、英王チャールス一世に獻じたる者也。此寫本今英國博物館に保存せらる。

【近時の亞歷山】 埃及第一の港、第二の都府にして且軍港也。三區に分れ、佛蘭西(歐羅巴)區は東に、アラアス區は西に、回教徒區は新舊港灣の間に在り。人口三十一万五百八十七人(一九〇二調)羅馬教大監督の所在地也。

アレシウス アレキサンデル Alesius, Alexander 【人名】 一五〇〇-六五 蘇國(スコットランド)エヂンバラに生る。聖アンドリュウ教會のカノンたりし時、ルーテルの說を奉ぜるパトリック、ハミルトンを說服して、其說を變ぜしめん爲めに選ばれたりしが、却てハミルトンの議論と熱心さに感じ、自ら改革者の說を信ずるに至り、遁れて獨逸に往き、メランクトンと交を結ぶ。後英國に歸り、クランメル及びトマス、クロンウェルと相知るに至り、劍橋(ケンブリッヂ)大學の教授となりしが、クロンウェルの滅亡近きに在るを見て、再び獨逸に往き、初めフランクフォルト、オン、ゼ、オデル大學の教授となり、後ライプチッヒに轉じ、幾年を其處に送れり。

アレタス Aretas. 【人名】 (一) 猶太の祭司長ヤソン及びメネラス、スリアの王アンチオカス、エピファヌスと同時代の人也(前一七〇) (二) アラビヤの王ナオテにして、ヘロデ、アンテパスの岳父也。されどもヘロデ、アンテパス其妻即アレタスの女を離別するや、アレタス怒てヘロデを攻め、大に其軍を敗れり。ヘロデ之を羅馬テベリアス皇帝に訴ふるや、テベリアスはスリアの知事テルリアスに命じてアレタスを撃たしめしが、テベリアスの死に逢ひて中止す。新帝カリグラは再びアレタスにダマスコを支配せしむ。ダマスコの知事が猶太の祭司に勸められて、パウロを捕へしは此のアレタスの王たりし時にして、紀元三十八年又は三十九年の事也。

アレフ א 【符號】 希伯來語以呂波の最初の文字にして、紀元一八四四及び一八五九年チッシエンドルフがシナイ山にて發見せる、シナイ寫本(Codex Sinaiticus)と稱する希臘語聖書の寫本の符號として用ゐらる(此寫本のことは『聖書の寫本』の條を見よ)。

アレン ヘンリー Allen, Henry 【人名】 一七四八-一八四 米國の人。人類の靈魂は凡て一大靈より發出せる者にして、彼等はエデンの樂園に於て悉く存在し、始祖の墮落せる時彼等も共に墮落せり、人の身體及び物質世界は、人類墮落以前には存在せざりしが、墮落に依りて人類の全然滅亡に赴くを防止せんが爲めに造られたるもの也との說を唱へ、說教及び小冊子に依りて其說を宣傳するに努めたりしが、其說頗る勢力を得て、之を信ずるもの多く、其門徒をアレナイツ(Allenites)と稱せり。然れ共彼の死後漸くに衰微せり。

アロギ Alogi or Alogians (ἄλογοι). 【宗派名】 第二世紀頃小亞細亞に起れるモナルキアン派の一派にして、使徒約翰の教へたる『道』(Logos)の存在を否定せるより此名あり。(アロギとは非道の義)『モナルキアン』の條を見よ。

アロムブラドス Alombrados, Illuminati, Illuminés. 【宗派名】 第十六世紀の初西班牙に起りたる神秘派にして、其教義英國のクエーカル派及び獨逸のアナバプテスト派に似たる所あり。心中の祈禱のみ益あり、舌にて祈ることは價値なし、外形的及び肉體上の修行は守るに足らず、通常世に所謂善行なるものは取るに足らず、默想に伴ひ來る強き感情、痙攣、失神等は、神に愛せられ、聖書の恩寵に預かれる表徵にして、完全の狀態に在る者には三位一体の祕義啓示せらるべく、善人の爲すべき事、爲すべからざる事は、凡て直接に聖靈に依て示さるべしとのことを教へたり。羅馬教會は異端として之を禁じ、其徒の火刑に死するもの甚だ多し、イグナチウス、ロヨラの如きも亦嫌疑を蒙り、獄に繫がれたりしといふ。一六三四年北佛蘭西に於てボック及びグエリンの首唱せる『イルミネス』も亦此派と同じ流を汲むものにして、第十八世紀の初南佛蘭西にも『イルミネス』派繁榮せり。同時代に獨逸に起れる『イルミナチ』派も亦之と同一の流を汲むもの也。

アロン Aaron. 【人名】 猶太の最初の祭司長にして、出埃及の物語に於てモーセと共に特異の地位を占む。レビの族に屬し父はアムラム母はヨケベデ、モーセは其弟、エリセバは其妻、ナダブ、アビウ、エレアザル、イタマルは其子也(出六の廿、廿三)。以色列人を埃及より導き出す爲にモーセの代言者となり、共に彼等の指導者たり(四の十六)エホバの命に從ひ、其子等と共に立てられて祭司となり(利八)後アロンの杖芽をふき蕾を爲し花咲て果を結べる瑞事あり、彼が神に選ばれて祭司長たることと之に依りて確認せらる(民十七)。彼れ位に在ること凡そ四十年、其子ナダブとアビウ、エホバの命に背きて死したりしかば(利十の一、二)第三子エレアザル彼に繼ぎて祭司長となる。彼が性格の缺點は其柔弱なるに在り。彼は其周圍の人々の感情に支配せられ、獨立の精神に依りて行動すること能はず。故に彼はモーセのシナイ山に上り獨り民衆と山下に留りし時は、彼等の望を拒むこと能はずして彼等の爲めに金の犢を鑄(出卅二の四)又モーセとエテオピアの女を娶りたりしとて、ミリアムと共に之を誹り(民十二)後メリバに於てエホバの命に背き杖を以て磐を擊ちたりしが、此不信仰の罪に依りて彼は約束の地に入ることを得ず、ホル山に上り全會衆の目前にて百廿三歲の壽を以て死せり(民廿)。

アロン ベンアシェル又はバルモーセ Aaron ben-Asher or bar-Moses. 【人名】 猶太のラビ、第十一世紀に生れ、西教會に屬する寫本中より舊約全書の本文の異文を集め、且初めて之に母音を附せり。

アンキータ ヨセド Anchieta, Jose de 【人名】 一五三三-九七 ラグナに生る。『耶蘇の會社』に入り、宣教師となりて伯羅西に往き、印度人の中に成功ある働を爲し、伯羅西の使徒と稱せらる。

アンギルベルト 聖 Angilbert, St. 【人名】 詩人、歷史家及び外交家。シャーレマン帝の秘書となり、其女ベルサを娶る。ピカルデー、センチュラ寺院長となり(七九〇)シャーレマン帝の即位式を助く(八〇〇)當時のホーメルと稱せらる。八一四年歿

す。

アングリカン教會 Anglican Church.

【宗派名】英國教會及びその其組織を一にせる他の教會を總稱して『アングリカン、チャルチ』といふ。此等の教會は何れも三十九箇條を以て教義の標準となす。『祈禱文』(Book of Common Prayer)及び其他の儀式に依りては各派の間に多少の相違あり。然れ共各派共教職は監督の按手禮を受けたる者にして、監督の權威の下に在る者なり。便宜のため此名稱より羅馬及び希臘教會より分れたる『英國教會』を區別す。(『英國教會』の條を見よ) アングリカン教會の分派左の如し。

一　愛爾アングリカン教會　一八七一年一月一日グラッドストーン内閣の時國教會より分離し、爾後教會の政治は監督及び公選せられたる教職及び信徒の代議士に依りて處理せらる。現今大監督管區二箇あり、アルマ及びダブリン是也。監督の數は十三人にして、教職に在る者凡そ一千六百七十人也。一八七七年福音主義に從ひ、『祈禱文』を改正せり。斷へず羅馬教會と接觸するを以て、愛爾に於るアングリカン教會は、之が反動として他の極端に驅するの傾向を有せり。

二　蘇格蘭アングリカン教會　蘇國の監督政治は一五六〇年『教會條例』に依りて廢止せられたりしが、有名無實の監督は一五八〇年迄殘存したりき。後ジェームス六世初め蘇國王にして、後併せて英國王の位に登るや(英國王としてはジェームス一世)監督の國王に對し恭順服從するを見て之を喜び、蘇國に再び監督政治を恢復し、一六一〇年三名の監督を新任せり。チャールス一世に至り國民の反抗甚しかりしかば、一六三八年監督政治を廢し、其任じたる監督を免じたりしが、チャールス二世又監督政治を恢復し、其命に服せざる者は罰罰を以て之を處するに至れり。一六八八年ウィリアム三世位に即き信教の自由を與へたりしが、監督等はウィリアムの國王たるを承認せざりしを以て、一六九〇年彼等は其職を棄てウェコバイト起るに及び、監督政治を禁じ、從はざるに嚴刑を以てせしかば、遂にアングリカン教會は殆ど其跡を斷つに至りしが、一七六〇年此法令を寛にし、一七九二年全く之を廢止せしを以て、アングリカン教會は再び成立し、漸次盛大に向ひ、現今にては七人の監督、三百三十四人の教師を有し、愛爾に於る教會よりも其調高し。

三　諸殖民地及び印度に於るアングリカン教會　加那太に於るアングリカン教會は頗る盛大にして、現今十箇の監督管區及び十人の監督あり。ルーベルタランドの北部(アクラッド)には十一箇の監督管區及び十一人の監督、濠洲(ニューサウスウェールズ)には十九箇の監督管區、廿人の監督、ニューランドには七箇の監督管區、西印度には七箇の監督管區、八人の監督、印度には十一箇の監督管區、廿二人の監督、支那及び中央歐羅巴には十八箇の監督管區、廿二人の監督、北部及び其他の亞細亞地方には十二箇の監督管區あり。米國を併せて海外に在る現在監督の總數は二百八十一人也。

四　米國アングリカン教會　『米國プロテスタント、監督教會』の條を見よ。

【アングリカン教會の教職】　アングリカン教會の教職は歴史的監督主義の上に立てるを。換言すれば此教會にては、監督のみ司祭(プレスビテル)(長老)及び執事に按手を施すの權を有す、而して監督は使徒より傳承し來れる監督に依りて區別せられざる可らずとの事を主張す。教職の規則に關しては アングリカン教會中別に疑を挾む者なく、又他に異議を唱ふる者なしと雖も、此規則の霊的意義と其重要の度に就ては諸説一ならず。此主意に關し『祈禱文』中教職授任式序言に左の如き言あり。『使徒の時より以來基督の教會には、監督、司祭及び執事の階級ありし事明也。此等の職は、何人も先づ神の召を蒙り、公の祈禱と、按手とを以て正當の教權に依りて承認せられ、許容せらるゝに非ざれば、其何れの職務をも行ふこと能はざる程に貴重なる者也。神に召され、試期を經過し、試驗を受け、以下示す所の形式に從て許容せられ、監督より聖別式又は按手禮を受くるに非ざれば、何人も英國若くは愛爾の合衆教會の監督、司祭又は執事となり、其職務を執行するを得ず』。以上の言は此等の階級を以て基督教會の教會に存在したりといふのみなれ共、英國教會は實際に於て此等の階級を以て正當なる教職に必要也となせり。故に英國教會に於ては、其教職たる者は斯くの如くして按手禮を受けざる可らずと主張するのみならず、他のものゝ其教會内に於て此等の職に就くを許さず。然れ共羅馬教會又は希臘教會に於て正當の教權より按手禮を受けたる正當の教師は、再び按手禮を受けざるも此教會の教職に就くことを得。此の如く此教會は監督の區別を有する教會と、有せざる教會との間に明白なる區別を設けたり。アングリカン教會と希臘教會との間には、形式的に其親交を宣言したることなしと雖も、兩者の間には親密なる交情あり。アングリカン教會の教師はセント、ペテルスブルグの希臘教會、エルサレムの聖ホーリー・セパルカー墓教會及び其他の教會にて聖

禮式を執行することを許され、又希臘教の監督は屢々英國教會に於て祝禱を唱へたりき。之に反して羅馬教會は、希臘教會に對しては、其羅馬教會に背きて分離したりとの廉を以て、アングリカン教會に對しては、異端を唱へ、且正當なる傳承を缺けりとの理由を以て、兩教會に對し深甚の態度を取れり。アングリカン教會が正當の傳承を缺けりと云へる非難は、所謂ナッグスヘッドの爭と稱する者より起れり。エリザベス女王が英國教會を組織したりし時、マジリ、パルカーカンテルベリーの大監督となりしも、後に至り羅馬教會は、パルカーは適當なる監督の按手を受けずして、ナッグスヘッド院に於て不合法なる聖別式を受けたる也と主張せり。然れ共此は誤にして、パルカーも四人の適當なる監督に依りて合法に聖別せられたりしことに就ては確証あり、ボズエー。カラヤル。トルチー。リンガルド等の如き有名なる羅馬教の人々も亦之を承認せり。然共羅馬教會は今日アングリカン教會の教職を承認せず。法王レオ十三世は一八九六年九月を以て、此問題は既に法王ユリウス三世及びパウル四世の決定、及び一七〇四年に發表せられたるクレメント十一世の法令に依りて定まりたりとの事を記せる書翰を公にし、英國教會教職の授任は其形狀に於て、而して殊に其目的に於て缺點ありとの事を明言せり。於是一八九七年二月カンテルベリーの大監督テムプル及びヨルク大監督マックラガンは『英國の按手禮に就きて』と題する連署の書翰を公にし、之を公教會監督の全体に贈れり。此書翰は拉丁、英の二語を以て記され、歴史的事實を述べ、英國教會の地位を明にし、法王の判定は羅馬教會の實行とアングリカン教會の形式とに基けりとの事を示し、前者に就ては、第十六世紀に方り、英國の教職を如何に處理すべきやに關する問題の起りたりし時、法王は之に關して其意見定まらざりし事、及び一五五〇年より一五五二年までの間に按手せられたる司祭はカルヂナル、ポールに依りて再び按手せられざりし事を証し、後者に就ては、古代羅馬教會の教職授任法の立場より見るも、監督が祭司長の權を奪来するは必要に非ずとの事を証せり。此書翰はカルヂナル、ヴァラガンの答辯を得たりしが、更に教授コリンス及びビルベック氏は之に答へたりき。

アングロサクソン Anglo-Saxons.

【種族名】某督教の初めて英國に入りしは何時の頃なるや詳らかにされ共、古代のブリトン人の中に基督教が其根を下したりしは、第二三世紀の頃にして、其後第六世紀に至りアングロサクソン人英國に襲ひ來りて、オザン禮拝を輸入し、基督教を壓服したりしことは明也。當時ブリトン人なる基督教徒は無力にして、アングロサクソン人に傳道すること能はず、却て彼等の前に跪拜して自ら迷信に陥りたりき。初めてアングロサクソン人に傳道し、之を改宗せしめたるは、グレゴリー第一世也。古傳に依ればアングロサクソン人は自己の子を奴隷に賣るが如き極めて野蠻的陋習を有し羅馬に至りて之を賣りたりしといふ。グレゴリーの未だ法王の位に即かざりし時彼れ一日羅馬の市街に於て、多くの奴隷中に容貌清雅なる一青年を見しが、其アングロ人なるを知り『是れ實に天使の如く美なる者也』(拉丁語の天使はアングリにしてアングロ人と略ぼ同音なるを以ていふ)と云へりしといふ。於是彼は其國の狀態を尋問し、自ら往きて傳道せんとの志を起したりしが、法王となりしを以て其志を果すこと能はず。アウガスチンを遣はして傳道せしむ。彼は即ちカンテルベリー最初の監督にして、五九六年タネット島に上陸し、翌年ケント國王の許可を得て爰に傳道の機會を得たりしが、國王も亦數ヶ月の後自ら洗禮を受けて基督教に歸依せり。エセックスに於ても亦ケントに於るが如く、國王自ら洗禮を受け、倫敦に在るテアナの神殿を基督教の禮拝堂として監督メリタスに與へたり。ノルサンベルランドに在ては國王イドウィン基督教信徒なる其妻の勸さ、羅馬法王の甘言とに依り、監督パウリナスの傳道を許可せしが、王も亦自ら基督教を研究して遂に之に歸依し、異教の殿堂を基督教會の用に供するに至れり。東アンクリアに於てはシゲデス基督教を輸入し、ウェセックスの王は監督ビリナスより領洗せり。此の如くして南部のサクソン人は凡そ五十年にして異教を棄てたり。メルシアは尚久しく異教を奉ぜしが、國王ペンダ殺されて死し、其國も亦福音を受くるに至れり。時偶々スコットランドの宣教師來りてノザンベルランド及びメルシアに、コロンバの教義を傳へ、幼稚なる教會に異派を生ぜしがゆへ、國王オスウィン直ちにヨルダンに宗教會議を召集し、羅馬教の信仰及び禮拝法を採用すべきことを議決して事定まれり(六六四)斯くして英國は羅馬教會の一部分となり、羅馬法王は其宗教上の首領となり、英國教會は全く一に歸せり。然れ共羅馬教會は頑強なるアングロサクソン人を悉く羅馬化することを能はず。ノルマン人の來襲する頃迄アングロサクソンは教會語にして、洗禮の儀式も聖書も試數も凡てアングロサクソン語を採用したりき。然れ共國王及び貴族は幾ふて寺舍殿堂院を建設し、又好で長途の巡禮を爲せり。監督ウィルフリッド(七〇九死)フリースランドに傳道し、英國教會は

當時外國傳道を企てたりしが、其ノルマン人に征服せらるゝに至りて、教會は全く其獨立を失ひ羅馬教會の一部分となれり。(『英國教會』の條を見よ)。

アンゲラス ア サンクト フランシスコ Angelus a Sancto Francisco. 人名 一六〇一—七八 英國に生る。フランシスカンの僧侶。

アンゲラス シレシアス ヨハン子ス Angelus Silesius, Johannes 人名 一六二四—七七 獨逸神秘家。實名をヨハン、シェフレル Johann Scheffler と云ふ。ストラスブルグ、ライデン等にて哲學を學び、ヤコブベーメ及び其他神秘家の書を讀みて羅馬教會に入る。其神秘說は多くジョヤベンハウエルの哲學に似たる所あり。

アンジェリコ ジオヴァンニ Angelico, Giovanni. 人名 一三八七—一四五五 伊太利の有名なる畫家。一四〇八年ドミニカン社に入り、後大監督となりしが辭讓して受けず。彼はフィーソール、コルトナ、オルヴィート、羅馬及びフロレンス等に於て、多くの壁畫及び祭壇背後の畫を畫けり。ヴァチカン宮殿の壁畫は破壞せりと雖も、ニコラス五世禮拜堂に畫ける、聖ステパスチアン及び聖ロウレンスの生涯を顯せる壁畫は、彼の筆の老熟に達せるを示せり。彼の作の最も著名なるは、彼がフロレンスに滯在中(一四三六—四五)同處の廢堂、附院及びサンマルコ禮拜堂に畫ける壁畫也。彼は技術に天來の靈感あるを信じ、其畫に臨むや必ず先づ祈り、一たび手を下すや妄りに改作せず。彼の最なる作の中に『東方博士の來拜』『十字架上の基督』(サンマルコ禮拜堂に在り)『處女マリアの戴冠』(巴黎ルーヴェー博物館に在り)及び『復活』(倫敦ナショナル、ギャラリーに在り)等あり。

アンジェリス ジロラモ Angelis, Girolamo 人名 一五六七—一六二三 伊太利の人、イエスイト社の僧となり、一六〇二年(我慶長七年)日本に來る。德川秀忠外教を禁じ、イエスイトの徒を國外に放逐するや、慶長十九年(一六一四)彼れも日本服を脱ひて邦人に混じ、窟に我邦に留りしが、九年の後發見せられ、捕へられて、生きながら焚殺せられたりと云ふ。其著 Relazione del Regno di Cosa 羅馬に於て出版せらる。法王ピウス九世彼を聖列に入れたり。

暗黑時代 (アンコクジダイ) The Dark Age. 事項 中世全体を稱して暗黑時代と云ふ者あれ共、眞の暗黑時代といふべきは第十世紀にして、シャーレマン帝の運動に依りて第七世紀の下半より第九世紀の上半に至て、電時の問文學復活すべく見えたりしが、其光明漸次消滅して第十世紀は眞の暗黑時代となれり。此時代には唯に文學の滅亡したりしのみならず、社會も亦非常なる混亂を來せり。即ちシャーレマン帝の死後其帝國分裂して國家の秩序亂れしと共に、諸蛮族人は海賊を業として歐羅巴北部の諸國を侵し、唯に海岸のみならず河上に溯りて內地に侵入し、諸方の村落を暴略せり。南方に於ても亦回教を信ずるサラセン人海賊を業として歐羅巴南部の諸州を略し、亞細亞よりも亦新なる蛮人歐羅巴の東部に入り來り、其內地を侵略せり。如此時代に文學の滅亡せるは當然の事にて、國には政治なく、唯封建制度行はれて各地方の有力者割據に人民を壓制束縛し、又互に相戰へるのみ。之がため一般人民の困難せしこと一方ならず。且當時紀元後一千年を以て世界の終局來るべしとの迷信盛に行はれしかば、將來に對する希望を失ひ、正業を營むものなく、社會の活動全く退止せられたり。如此時代に方り。法王が各國の政治に干涉するを得たりしも偶然に非ず。

アンコライト 隱遁者 Anchorites or Anachorites (*ἀναχωρητής*). 術語 希臘語アナコラインは退隱の義。世を退き寂寞なる島にて默想の生活を爲せる人々の謂にして、第二、三世紀に行はれたる迫害は、之に大なる衝動を與へたり。彼等は洞穴に住し、同胞との交際を絶ち、可及的食物を少くし、言語を出さず、默禱に其時を送れり。或るものは數年間手を上に向けて舉げたる儘堂宇の中に立ちて眠らず、又或るものは風雪を犯し、高き絕壁又は圓柱の上に不動の態度を以て立つ等の事々爲したりき。彼等の數は頗る多く、殊に埃及、西利亞、ポンタス及びトラスに多かりき。彼等の中には第四、五世紀の間宗教的爭論の激甚なりし際、突然顯はれ出でゝ、國王及び人民を讃賞せるものあり、聖アントニーは其最も著しき例也。又三七〇年ユリアン、サバスはアンテオケに來りアリウス派に反對し、トラプテスはヴァレンス帝の前に出でゝ教會に害を爲すなれと誡めたり。後彼等は共同してローラ(Lauras)と稱する結社を爲し、禮拜堂の周圍に其庵室を立てたり。僧院主義發達せるに及びても、隱遁者は尙續て起り、六九二年のトルラン會議に於て、隱遁者とならんとする者は、先づ僧院に入るべしとの事を決し、シャーレマン帝は隱遁者を都く僧院に送らんとしたれ共、西獻に於てさへ、はるか後世に至る迄尙彼等の存在するを見たりき。

按手、按手禮 (アンシュ、アンシュレイ) Ordination. 禮典 人を教職に聖別する時の宗教的儀式を云ふ。教派に依りて其意義及び用法を異にせり。(一)聖書の用法 按手禮の行はれたるは遠く舊約時代に溯るを得べし。即

ち祭司、レビ(民八の十)及び國王の任命には聖油を用ゐて之を行ひ、又人を重要なる職に就かしむる時にも之を行ひ、之に依て特殊なる靈の賜を得べしと信じたり。モーセはヨシュアを立てゝ其相續者となせる時に之を行へり(民廿七の十八、申卅四の九)新約全書に在りては、祝福を與へ、若くは之を所る時に手を按けり(可十の十六)耶蘇は其昇天せんとするに方り、手を擧げて弟子を祝したりしといふ(路廿四の五十)。基督教會に於る最初の按手禮は七人の執事を立てたりし時行はれ、弟子等は彼等を其前に立たしめ祈りて其上に手を按きたり。尤も彼等は其以前既に會衆の爲めに推されて此職に選ばれたりし也(從六の五、六)使徒行傳に依れば、按手は又洗禮、及び時としては聖靈の降臨に伴はれ(八の十七、十八)時としては又其後に之を行ふことあり、コルチリオの場合に於るが如し。保羅は基督に召されたる後アナニアの按手を受け(從九の十七)後バルナバと共にアンテオケより其第一回傳道の途に上らんとするに方り、又數人の預言者及び教師より按手を受けたり(十三の一、三)保羅のテモテに對れりと稱する書翰に依れば、按手は基督信徒を教職に聖別すること關聯したりしが如し。即ち彼はテモテに命じて『輕しく人に按手する勿れ』と云ひ(提前五の廿二)又『預言と長老會の按手禮とに由りて爾に賜ひし所の賜を忽略にすること勿れ』と云へり(四の十四)新約に於る以上の例に依りて之を見れば、按手は教職聖別以外の場合にも行はれたること、及び教職の聖別は嚴格なる儀式に依りて行はれ、按手は其儀式の一部分なりしこと明也。而して按手禮を受けて教職に聖別せらるべき人の資格に就ては議論一樣ならず。(二)按手禮の意義及び按手禮を受くる人の資格(ア)初代教會に於ては、按手禮を以て教職の職務及び責任に入ることを形式的に表する者にして、單に教會の權威を授與するとゆふよりも以上の意義を有せりと爲せり。教職は初め人民に依りて選ばるゝを常とせり。羅馬のクレメントは教職は全教會の同意なる得て、有名なる人々の採用する者也と云へり。當時長老若くは監督の特別按手禮を以て必要と思考したりし事實より之を考ふれば、此儀式に特別の効力ありしと思惟したりしが如しと雖も、アウガスチンは最も明に『按手禮は之を受くる人のための祈禱に非ずして何ぞや』と言へり。然るに監督職を以て漸次重要となし、從て監督並に一般の教職を以て漸次神聖なるとなすに至れり。(イ)希臘及び羅馬教會にては按手禮を以て七聖典の一となし、洗禮を受けたる者は之に依て聖別せられ、祭司の職務を行ふことを得ずしむる者也となせり。又按手禮は洗禮の如く、消すべからざる性質を與ふ、故に又再三反復すべき者に非ずと爲せり。トレントの會議に於ては、聖靈按手に依て與へらるゝこと、按手禮執行者の『汝聖靈を受け』との言は効力を有すること、祭司は其祭司たる性質及び權力を失ひて平信徒となり得べからざることを宣言せルテンセンの云へる如く、按手禮は或る意味に於て基督的聖典也、何となれば之を受けたる者のみ獨り救免を宣告し得べく、又聖靈式を執行するを得べければ也。而して按手禮は監督のみ之を執行するを得べく、凡ての監督は同一の權を有す。尤も特殊の場合には長老も其以下の階級に按手することを得べし。一旦監督となりし者は常に監督にして、監督の按手禮は凡ての場合に於て確實也。然れ共羅馬教會は此一般的主義の存するに拘らず、英國教會を以て分離派となし、其按手禮を承認せず。(ウ)英國教會及び米國監督教會に於ては、按手禮に聖典の意義なし。英國の宗教改革家は按手を以て神の恩惠を與ふる者也とは思惟せざりき。此教會に於ても監督のみ獨り按手禮を施すの權を有し、監督に依て執行せられざる按手禮は一般に確實なる者に非ずと爲す。エリザベス朝時代の改革者は長老の按手禮をも承認せず。フーカルの云ふ所に依れば、彼の時代には(一五九四)多くの人々長老の按手禮に依りて英國教會の教職となりしといふ。他教會の教職にして英國教會の教職とならんとする者は、再び按手禮を受くることを今日一般の例也。但し羅馬教會より轉ずる者は再び按手禮を受くるを要せず。(エ)他の新教各派の教會に於ては、監督及び祭司の中には按手禮を受くるも尙俗的にして虛收に染る者ありとの事實より、按手禮に重を置かず。聖靈に依れる神の召に重を置けり。ルーテルは保留を引きて『召され、聖別せられたる彼は、召を與へ給へる彼を宣傳し得べし、是れ基督の聖別にして、眞實の聖油也』と云へり。ルーテル派及びレフォルムド教會は按手禮を承認し、又之を執行したれ共、常に神の召に重を置けり。アングスバルグの信仰告白に曰く『何人と雖も適當に神に召されたる者に非ざれば、教會に於て公に說教し、又は聖典を執行すべからず』と。此等の教會に於ては按手禮を以て、神に召されたる者を教會が公に、眞面目に同意し証明する者也となせり。又此等の教會にては、長老相共に其手を按手禮候補者の頭上に按き、祈禱を捧げ、斯の如くして彼を教

職に聖別す。然れ共儀式其物なる以て神の恩恵を與ふる者と爲す。(ま)モラビアン教徒は按手の權を監督にのみ限れりと雖も、他の新教各派監督の按手禮の確實なることを承認せり。(カ)グェーカル、デサイブル、プリモスブレズレン諸派は一切按手禮式を承認せず。彼等は就教者の内的召命を信ずれ共、外部の儀式に依りて教職を聖別するの効力を認めず。

アンシクロペディスト Encyclopedistes.

【雑話】『百科全書家』又は『百科全書の編輯者』の意にて、佛語の音譯也。第十八世紀佛國の啓蒙時代に於て、一切の學術及び技藝に關する新思想を一般の讀者に解し易からしめ、以て之が普及を謀ちんとの目的を以て百科全書("Encyclopédie ou Dictionnaire raisonné des Sciences, des Arts et des Métiers")を編輯し、若くは之に執筆せし一群の學者の名稱也。此書は一七五一年より七二年までに二十八冊を出版し、一七七六年及び翌年に補遺五卷、一七八〇年に"Table analytique"二冊を出版せり。編輯主任はディドロー(Diderot)にして、ダランベール(D'Alembert)は一七五七年迄之を助けたり。其主なる執筆者はテュルゴー。ダラム。ドルバック等にして、ヴォルテール。ルソー。ケネー。マールモンテル。デュクロー。ドウクロータール。アレー。コンドルセー等亦之に筆を執れり。此書は明白、大體に宗教、基督教、羅馬教等を攻撃せりと想像せられれ共、此は誤解也。者中イエスイト派の條には明弁的の言語少からざれ共、全体として見れば明に羅馬教を保護し、新教を以て無益、有害の改革也となせり。又三位一体、インスピレーション、贖罪等を初めとし、大抵凡ての教義を擁護せり。

アンシロン ダヴィッド Ancillon, David

【人名】一六二七—九二 佛國メッツに生れ。イエスイト派の學校に學ぶ。教師等彼を羅馬教に改宗せしめんとしたれ共、彼聞かず。後ゼネヴァに神學を學び、就教者となる。一六六六年ルーテル。ツワングリ。カルヴィン及びベザの聖餐論を著す。『ナント令』廃止の時、佛國を去り、獨逸に往き、伯林に在る佛國人に説教し、後其處に死す。其子チャールス(一六五九—一七一五)はプランデンブルグに在る佛國殖民地の管理者たり。其孫ヂアンピール、フレデリック(一七六七—一八三七)は伯林兵學校の教師、同市佛國會衆の就教者たり、後大臣となる。

アンスガリウス Ansgarius, St.

【人名】八〇一—六五 スカンヂナヴィアの使聖。『就教者たり、後大臣となる。』徒。コルヴェー僧院の僧なりしが、ラッドウィッグ帝丁抹王ハロルドと共に彼を宣教師として丁抹に送る(八二六)後追はれて瑞典に往き(八三一)彼はシェレスウィッグの宣教監督となる(八三二)彼はシェレスウィッグ教會及び瑞典の教會を創立し、又ウェング人の中に傳道せり。

アンセルム 又は **アンセルムス** Anselmus Anselm of

【人名】一〇三三—一一〇九 中世煩瑣哲學の祖にして、最著名なる英國僧侶の一人也。伊太利貴族の家に生れしが、幼にして宗教的熱心を起し、父の反對ありしに拘らず、ノルマンデーなるベックの僧院に入り、終に其僧院長となり(一〇七八)更に選ばれて、英國カンテルベリーの大監督となれり(一〇九三)彼は温和謙遜の人なりしが、教會と國家との關係に就ては、グレゴリー主義を取り、不撓の熱心を以て、前後二回の英國王と爭ひ、之がため追放せられて數年を羅馬に送りしが、一一〇六年双方の間に平和を結び、英國に歸り、殘る三年を平安に送れり。此條約に依り、國王は教會の獨立を承認し、監督選擧に干渉するの權を放棄し、監督及び僧院長は國王の下に在りて其所領を有するが故に、國王に對して忠義を盡すべしとの事を約せり。

アンセルムは神學史上に在りては、正統派煩瑣主義の父にして、第二のアウガスチンと稱せらる。先づ彼は信仰と知識との關係を明にし、煩瑣哲學の辯証的論結を形成せり。彼謂へらく、宗教上の信仰は知識に先ちて存在す。知識を問ふて道理上推考することを爲し得ざる者は信仰を以て足れりとすべし。然れ共更に進みて知識に達し得る者に取りては、信仰に加ふるに其信仰の理由を以てせんは甚だ望ましきこと也。知識を添へたる信仰は單純なる信仰と勝れりと。而して彼は又謂へらく、道理と信仰とは必ず相契合する者なるを以て、特別の天啓なしと假定するも、吾人の理性に依り推考して宗教上の信仰を立て得べしと。アンセルムの思想はプラトーン學派風の實體論に根據せり。其根據は凡べて物質的なるに從ひて息々實有に愈々完全也といふに在り。彼は斯る思想に基きて神の存在を論証せんと企てたり。謂へらく、神は絶對に完全なる者にして之に優りて全き者は考ふ可らず、斯る者を名けて神といふ。而して神といふ觀念其ものに於て既に彼の存在すること含有せらる。何となれば吾人の心にのみある者よりも、吾人の思に存在すると共に實物として存在する者の方更に多く實有なる者也、故に神にして若し唯吾人の心にのみ存在する者ならば、彼よりも更に優りたる實在なる者ふることを得べし。然るに彼は之に優りて世に實有なる者の考ふ可らざる者の謂也、故に神

を以て唯吾人の思にのみ存在する者となすこと能はず、即ち神は絶對に實有なる、完全なる者として實在すべき者也と。是れアンセルムの實體論的論証として有名なる者也 彼の著書中最も有名なるは『神は何故人となりしやか』(Cur Deus Homo)にして小冊子なれ共、初めて基督論贖罪の事實を合理的に說明せんと試みたる者にして、後世の神學界に與へたる感化少からず。彼は此書に於て、罪を犯す者は寃も神に對し借財を有するが如し、假令之を悔ひて正義を行ふも、過去に犯せる罪は償ふの道なし。神も亦贖罪なくして之を赦し給はず、其正義の政治に適合せず。基督は人となり給ひて缺點なく正義を行ひ給ひしが故に死すべきに非ず。然るに彼は人を愛する心を以て自由隨意に死し給ひしが故に、其報酬として神は人類の罪を赦し給ふ也とのことを論ぜり。

安息日 アンソビヤウ Sabbath.

【行事】一週の第七日を指せる希伯來の名にして、ユ色列人中に在りて最も大切なる宗教的禮拜の中心也。エホバ法典に『汝六日の間汝の業をなし、七日に息むべし、斯く汝の牛及び驢馬を息ませ、汝の婢の子及び他國の人をして息をつかしめよ』とあり(出廿三の十二)又十戒には『安息日を憶えて之を聖くすべし』とあり(廿の八)早き時代の歴史及び預言書には、安息日を以て新月に關係ある者となし、共に職業を止めて休息すべき日也となせり。是に依て之を見れば前八世紀には、安息日はエホバのために聖き日として守り、平日の業務を休むべき者也となされたること明也。後安息日に於る宗教的禮拜及び業務を息むべしとのことは、更に明に規定せられたり。耶利米亞書には安息日に關する預言あり『エホバ期く云ひ給ふ、汝等自ら愼め、安息日に荷を携へてエルサレムの門に入る勿れ、又安息日に汝等の家より荷を出す勿れ、諸の工作を爲す勿れ、我れ汝等の先祖に命ぜし如く安息日を聖くせよ』と云へり(十七の十九—廿七)祭司典に於る安息日の規定は更に發達、整頓し、其制定を天地創造の週の終に溯らせ『神第七日を祝して之を聖め給へる工を畢く終へて此日に息み給ひたれば也』と云ひ(創二の三)又『凡て其日に勝作を爲す人は其民の中より絶たるべし』と云へり(出廿一の十二—十七)。此日には火を焚くことも禁ぜられ、又此日に麻を拾ひし者は石にて擊ち殺されたり。又此日毎にパンをエホバの前に備ふべきこと、此日には平日に倍する犧牲を献ぐべきことを規定せられたり。此の如く祭司典に於ては安息日本來の目的及び性質を失ひ、單に儀式的制度となり、其之を守る方法も一層厳しくなりしが、後世の猶太教に至りては更に發達して幾多の煩瑣なる規則制定せられ、ミシナには安息日に爲すことを禁ぜられたる行爲三十九箇條を數へるに至れり。要するに安息日は元來エホバのために聖く守り、家内及び田野に於る勞働を息むべき日として定められたる者にして、博愛的性質を有し、ユ色列人自ら休息せんとするよりも、寧ろ他人に休息を與へんとの目的を以て置かれたる者也。安息日は何處より起り來れりとするも、之を博愛の目的に採用したるは以色列人にして、彼等は之に宗教的の意義を附し、此日に於て特別の犧牲を献げ、祈禱、默想し、又公衆に集るべき者也となせり。而して其目的は單に平日の勞働を休み、此世の心配を去り、且神の事に就て靜思する時を得んとするに在りて元來究竟なる性質を有せざりしが、時を經るに從ひ、之を演ずること勿らんとの主意より詳細の規則を設け、文字のために精神を誤り、從に形式的となるに至れり。耶蘇は自ら安息日を守りしが、當時の傳説を攻擊し、安息日は人のために設けられたる者にして、人は安息日のために設けられたる者に非ずとのこと(可二の廿七)安息日に善なるはよしとのことを明ぜにり(太十二の十二)保羅は『或は飲むこと或は食ふこと或は節期或は月朔或は安息日の事に依り、人をして贅言を議ぜしむることなかれ、此等は曾來らんとする者の影にして、其眞の形は基督につけり』と云ひ(西二の十六、十七)『爾曾慎みて月と日と節と歳とを守る、我れ爾曾に就て危む、恐らくは爾曾のために我が勤めし事の徒然ならんことを』と云ひ(加四の十)又『或人は此日を彼日に愈れりとし、或人は何れの日も皆同じとす、各人自ら定めて其心を堅くすべし』と云へり(羅十四の五)。其意、猶太教の安息日は猶太教の他の儀式と同じく基督教に無關係にして、基督教の下に在りては過ぎ去りたる者也と云ふに在り。斯くの如く新約全体の教訓に依れば、猶太教の安息日は之と關係せる凡てのものと共に基督教に依りて廢止せられたる也。(安息日と主の日即ち基督教の日曜日との關係は『主の日』の條を見よ)。

安息日學校 Sabbath School. 『日曜學校』の條を見よ。

安息日の行程 Sabbath Day's Journey.

【雑話】從一の十二に橄欖山よりエルサレムへ行程三十九箇條を數へるに至れり。當時猶太の學者は安息日に關し煩瑣なる規則を設け、其行程を制限せり。史家ヨセファスの云ふ所に依れば、此間の行程凡そ九町餘ありと云ふ。

安息年 Sabbatical year.

【行事】一週の第七日を聖也となせしが如く、猶太人にも七年毎も聖

也となし、土地を神の所有となす所の原則に基き、此年には神の所有なる土地に安息せしめたり。此年は萬事の安息する時にして、年中全く農業を息み、自然生の果物は貧者奴隷外國人及び家畜動物の食ふ所に供せり。斯く農業を休むも人民は無爲放逸に日を送れるに非ず、漁獵、養蜂、牧羊の如き、又は家屋家具を修繕し、衣服を製するが如き皆之を爲すを得たり。此年を守ることに關して示されたる規則は、貧者を顧みること(出廿三の十、十一)土地を休めること、自然生の物は凡て人畜の共有とする事(利廿五の一—七)貧しき負債者を釋放すること(申十五の一—十一)結廬節の間に人民の公會に於て律法を讀むこと(申卅一の十—十三)是也。モーセ以色列人を警めて、民もし此法に違へば其邦土は安息を得るまで荒耗たるべしと云へり。故に彼等は七十年間巴比倫に俘囚となりしことを以て此法を犯したる刑罰也となせり(利廿六の卅二—卅五、代下卅六の廿一)安息年七回に及べばヨベルの年(五十年節)に至る。此年は第七月(チスリ)の十日即ち大贖罪の日を以て始まり、此日犠牲の奉獻を終るや喇叭の聲を以て編なるヨベルの年の來れるを報ぜり(利廿五の八—五十五)此年には安息年の如く土地を息め、又奴隷に自由を與へ(利廿五の卅九—四十二)貧困のために失ふたる世襲の所領は之を舊主に復せり(廿五の廿三—廿八)。此の如くして此年は猶太國の社會をして初めに神が自由と平等に基きて組織したる時の如くに回復せしむ。又此年は土地の所有權に關する困難なる問題に對する實際の解說にして、土地の所有權をして終に大資本家の專有に歸せしむるの弊を防ぎたり。又此年は高尚なる靈的意義を有せる者となし預言者屢々之を說き、耶蘇は自己の一身に於て其應驗を見たりと云へり(賽六十一の一—三、路四の十六—廿一)。

アンチトリニテリアン 『非三位一體派』の條を見よ。

アンチノミアニズム Antinomianism. 〔學派名〕 律法廢棄說 宗教の信仰及び靈明經驗を過度に高調し、道德的律法を全く無視せる神秘的傾向也。此傾向の初めて顯はれたるはノスチック派にして、彼等は眞に靈的なる者は道德的生活に對しては全く無頓着なるを得べく、又ならざる可らずと論ぜり。之に反する傾向を遵法派(Legalism)と云ふ。羅馬教會は遵法主義を極端迄發達し、其結果、目的の如何に拘はらず凡ての道德的行爲を以て價値ありとなし、其極宗教的生命を失ひ、儀文儀禮に流るるに至れり。宗教改革は之に反して起り、其徒の中には行爲に對して信仰を高調せしが、ルーテルは單純なる信仰の外道德的行爲は救拯に用なしと論じ、律法廢棄說に赴くものあり。アグリコラ(Agricola)は其尤なる者にして、彼は『モーセの律法を守る者は地獄に往くべし』と迄極論し、遂に改革者の中に分裂を生ずるに至れり。後ルーテル派の中に一致信仰箇條決定せられてより(一五七七)此運動獨逸に於ては消滅せしが、クロンウエル時代の淸教徒、マダム、ギヨンの率ひたる靜寂派の中に此傾向の發達せるを見る。ウエスレー時代の英國にも亦此傾向あり、ウエスレー及びフレッチエルの盛に其誤謬を論じたるを見よ。

アンチポープ 〔術語〕 對立法王 Antipope. 適當の方法に依りて選まれたるに非ずして陰謀又は暴力に依り自ら法王也と僭する者をいふ。此の如きことは教會歷史に其例少からず。曾てシルベステル三世、ベネデクト九世、グレゴリ六世及びクレメント二世の四人同時に法王たりしことあり(一〇四六)斯る場合には何れを以て眞の法王となすべきや容易に判定し難きを以て、教會の分裂を來すことあり。曾てグレゴリ十一世の死後五十年間分裂したることあり(一三七八—一四二九)斯る場合には互に他を破門の刑に處するを常とす。

アンチマリアンス 非聖母崇拜派 Antimarians, or Antidicomarianites. 〔宗派名〕 第四世紀の末亞剌比亞に勢力を有せし一派。マリアは基督を生みたる後ヨセフに依りて多くの子供を生めりと主張し、當時のマリア崇拜に反對して起れるもの也。

アンテオケ Antioch ('Αντιόχεια). 〔地名〕 (一)スリアのアンテオケ セルカス朝のスリアを支配せる頃、アンテオケと稱する地數ヶ所ありしが、爰に所謂アンテオケはオロント河に面する市府にして、セルカスニカトル(前三〇一—二八〇)の建設せる處也とす。セルカス朝の下に在りて各種の人種を以て漸次發達せしが、紀元前八三年に至りアルメニア王チグラネスの爲めに略取せらる。ポンペーのチグラネスを滅すや、彼はアンテオケを以て自由市となし爰に總督を置き羅馬領スリヤの首府となす。是より多數の羅馬人移住し來り、猶太人の數も亦著しく增加せり。住民は慨して怜悧快活にして、文學、技藝大に發達せり。故に史家ヨセフアスは之を稱して羅馬、亞歷山に次で羅馬第三の都會也と云へり。基督教の異邦に傳はりしはアンテオケを以て嚆矢となす。思ふにアンテオケの猶太人及び猶太教に改宗せる希臘人は、エルサレムに於て使徒の教訓を聞きたりしなるべし。初めて選ばれたる七人の執事の中一人はアンテオケのニコラなりき(徒六の五)又ステパノに就て起りし迫害に由りて散されたる人々はアンテオケにまで至りしと云ひ、彼等の中にクプロクレネの人々ありてアンテオケに來り、希臘人に福音を傳へたりと云へり(十一の十九以下)エルサレムの教會はアンテオケに在る人々の道に歸する者多しとの事を聞き、バルナバを遣はしてアンテオケに至らしめしが、彼は往きて其地の頗る好望なるを見、タルソに至り保羅を携へ來りて、一年の間共に爰に留りて傳道せり。其弟子のクリスチャンと稱せられしは實に此地より始れり。此頃數人の預言者エルサレムよりアンテオケに來り、大なる饑饉あるべしとのことを預言せしが、其事果してクラウデオカイザルの時に起りしかば、アンテオケの信徒は各其力量に從ひてエルサレムの信徒を濟はんために、バルナバと保羅に托して彼等に物を餽れり。バルナバ及び保羅はアンテオケに歸り來り主に事へ居りしが、教會は彼等を甄び別ちて、セルキアより船出してクプロに赴かしむ。是れ即ち保羅の第一回傳道旅行也(十三の一)彼等は其使命を全ふし、再びアンテオケに歸れり(十四の廿六以下)偶々猶太人のエルサレムより來り、異邦人の基督教に入らんとする者は先づ割禮を受けざるべからずと云ふ者あり。於是アンテオケ教會はバルナバと保羅をエルサレムに送り、此等の律法より異邦人信徒を除外せんことを請ひしが、彼等はエルサレムより遣はされたる二人の使者と共にアンテオケに歸れり(十五の一以下)彼等暫らくアンテオケに留りて主の道を宣傳せしが、再びシリシアを經てリストラに向へり(十五の卅六)是れ保羅の第二回傳道旅行にして、彼は傳道を終りアンテオケに歸り(十八の廿二)此處より再び第三傳道旅行の途に上れり(十八の廿三)故にアンテオケは唯に最初の異邦教會なるのみならず、又異邦教會の母也といふも可也。傳說に依れば使徒彼得は二年間アンテオケの監督たりしといふ(加二の十一參照)第五世紀に至り羅馬、コンスタンチノプル、亞歷山、及びエルサレムと共に總主教の任地たりしが、今日も尚東西兩教會の總主教此處に住せり。アンテオケ教會の最も隆盛なりしはクリソストム(三四七生)の時代なりしが、後漸く衰微の運に向ひ、六三五年サラセン人の爲めに略取せられ、後一たび之を回復せしが一二六八年以來全く回教徒の手に落ち又昔日の面影を止めず、現今僅に六千人の人口を有するのみ。(二)ピシデアのアンテオケ 思ふにセルカスニカトルの建てたる數箇のアンテオケの一なるべし。其住民は希臘種なりとの傳說あれ共疑はし。紀元前一九〇年羅馬帝國は之を自由市となしたれ共、同三九年迄の歷史は詳ならず。同二五年羅馬領ガラテヤ州の一部分となりて羅馬に屬し、紀元六年の頃ガラテヤ州南中部の政治的軍事的中心となり、カイザリアアンテオケと稱せらる。アンテオケ所屬の地方はフルギアと呼ばれ(徒十六の六、十八の廿三)又ピシデアのフルギア或はピシデアと呼ばる。思ふに初めガラテヤ州の中に含まれ、而してフルギヤの大部分より分離したるフルギアの其部分が漸次ピシデアの中に入りたりし者なるべし。斯くして『ピシデアに接近せるアンテオケ』なる名は、遂に『ピシデアのアンテオケ』となるに至れり(十三の十四)アンテオケに於る保羅及びバルナバの說教は、其全州に影響し、主の道普く其地に廣まりしが、猶太人は神を敬ふ貴婦人及び邑の重立ちたる人々の心を動かし、保羅とバルナバを迫害し之を其地より放逐せり(十三の四十九、五十)當時フルギア及び小亞細亞地方に於ては婦人の勢力頗る盛にして、市邑の役人となり其政治に與かりたりしといふ。猶太人が貴婦人の心を動したりといふは、彼等の此特色を見るに足る。

アンテオケ派 School of Antioch 〔學派名〕 アンテオケを中心として希臘及び西利亞の諸教會に傳播したる神學的傾向にして、長老ルキアヌス(Lucian)及び其同僚ドロテウス(Dorotheus)は一般に此學派の首唱者也と信ぜらる。ルキアヌスはサモサタのパウルと同じく、基督の神人兩性を混淆せる神秘的思想に反對して其區別を高調し、凡其冷靜なる智能を以て化身の神秘を排斥し、アリウス派神學の礎をなせり。アリウスは實にニコメデアのユウセビウス及びアステリウスと共にルキアヌスの高弟也。然れ共ルキアヌスがアンテオケ派の首唱者たるは、其獨斷的神學說よりも、聖書批評學に於る彼の地位に在り。彼はオリゲンの獨斷的諷諭的解釋法に反し、文法的歷史的解釋法を採用し、聖書の文字的意義を研究し、聖書の神學を建設するを以て必要也となせり。此學派に屬する有名なる人々はヘラクリアの監督テオドール。エメサの監督ユウセビウス。アンテオケのユウスタシウス。タルソのテオドール。テオドール、及びポリクロニウス等にして、彼等の中にはアリウス派の神學を奉ずる者あれ共、何れも文法的歷史的解釋法を採用せり。金口クリソストムも此派に屬すれ共幾分か諷諭的解釋法を採用し、換型と諷諭との區別を看過せり。

アンデルソン 〔人名〕 ジョン Anderson, John 一八〇五—五五 蘇國教會最初の宣教師として、一八三七年印度マドラスに往く。蘇國教

會分裂の際自由教會に入る。後の設立せる最初の宣教師學校は、今のマドラス基督教學校の中心となれり。マドラスに殁す。

アンテルソン ルフス Anderson, Rufus, D.D. LL.D. 人名 一七九六—一八八〇 三十四年間亞米利加外國傳道會社の通信書記たり。地中海傳道地、印度及びサンドイッチ島傳道地を巡回し、且此等の傳道地に關する歴史を著せり。

アンデルソン ラルス Anderson, Lars 人名 一四八〇—一五五二 瑞典の人、國王の最も親任せる顧問官たり(一五二三—四〇)オランス及びラウロンチアス、ペトリーと共に瑞典宗教改革運動の開始者也(一五二七)設又オランス、ペトリーと共に聖書を瑞典語に飜譯す。國王弑逆の企に與れりとの嫌疑を以て、死刑を宣告せられ、王の特赦に依り官職を止めて、退隱せり。

アントニー 聖 Antony or Anthony, St. 人名 二五一—三五六 隱遁主義の先驅。埃及コプチック富豪の家に生る。埃及は氣候溫暖にして隱衒少く、且砂漠多きを以て、最も隱遁に適す。是れ隱遁主義の埃及に起りし所以なるべし。アントニーは十八歳にして兩親を失ひ、其遺産を繼ぎしが、曾て耳にしたる『全からん事を願ふ、爾が所有を賣りて、貧者に施せ』(太十九の廿一)との眞を實行せんとして、其財産を賣り拂ひ之を貧民に施し、先づ其居村に於て禁慾主義の生活を營み、手工を爲して自ら支へたりしが、尚未だ全く情慾を去り、名譽の念を絶つこと能はざりしかば、洞穴の中に住し、僅少の食を取り、或は三四日續けて斷食を爲し、之に勝たんとしたれ共、誘惑は益々其勢力を增し來りしかば、彼は更に廢墟に入り、後又紅海の傍なるコルゾン山に退き其一生を送れり。彼は羊皮を纏ひ、沐浴せず、唯神と交通するを以て喜とし、又屢々夢中サタンの誘惑に逢ひ、之と奮鬪せり。彼は如此隱遁主義の先驅たりしを以て、其間邊の破誤には、彼に敬慕を表せんとて遠方より來る者も甚だ少からざりき。マキシミナス迫害の時、彼は自ら殉教者たらんとの希望を以て、亞歴山に來り囚徒となり與へしが、此聖者なるアントニーにして信徒に慰藉を與へしが、此聖者なるアントニーにては何人も手を下す者却りき。彼は百歳の時復た亞歴山に出で來り、アリウスの説に反對し、正統説を擁護せり。彼は百五歳の高齢を保ちしが、當時聖徒の遺物を偶像視するの習慣ありしかば、死に臨み、其墓塲を人に知らしむる勿れと遺言せり。彼と親交ありしアタナシウス彼の傳記を著し(三六五)羅馬教會の隱遁主義に大なる刺激を與へたり。

アントニー Anthony. 人名 (一) アシトニー、デ、ドミニス Anthony de Dominis 一五六〇—一六二四 ゲエニス共和國に生れ、イエスイト派に入り、セアニの監督、後スパラトロの大監督となりしが、法王パウル五世と合はず、又同派の人々に憎まれ、イエスイト派より逐はれ、後英國に往き、ウィンゲルの副監督となり、盛に英國教會に入り、ウィンゲルの歓迎を受け、新教に改宗して書を著して羅馬教會及び其教義を攻撃せしが、ほゞ復た羅馬教會に入り、教罪を法王に求めしが、羅馬に歸着するや捕へられて宗教裁判に附せられ、宣告を受くるに至らずして死せり。(二) Anthony of Padua 一一九五—一二三一 アタ、のフランシスの最も著名なる弟子也。十五歳にしてアウガスチンの社に入りしが、後聖フランシスの社に入る。ボロヂナに近き僧院に入りて苦行をなし、ヴェルセルリに於て神學を學び、ボロヂナ、パドヴア等に在りて教授せしが、後其一生を全く説教に委したり。傳へ云ふ、彼れ説教する時は魚類も亦彼に聞かんとして水より出で來りたりと。

アントニヌス 聖 Antonius, St. 人名 一三八九—一四五九 伊太利フロレンスに生る。ドミニカン社に入り、後フロレンスの大監督となる。銳意僧説の改良に從事し、一四四八年の饑饉及び一四五三年の地震に獻身の行爲を顯はしたるを以て、凡ての人々に愛敬せらる。法王ピドリアヌス六世彼を聖列に入る。

アントニヌス ピウス Antoninus Pius. 人名 羅馬帝也(一三八—一六一)トラヤヌス帝の政策を繼ぎて、基督教徒を保護し、異教徒の内亂を制せり。然れ共基督教徒には、法律上十分の承認を與へざりき。後世彼を以て自由の保護者の知くなせるは誤れり。

アントチリ ジアコモ Antonelli, Giacomo. 人名 一八〇六—七六 伊太利のカルヂナル及び政治家。法王グレゴリー十六世の時大臣となり、法王ピウス九世彼をカルヂナルとなし(一八四七)又自由議院内閣の總理大臣に任ず(一八四八)當時の最も才能ある政治家の一人なりしが、其業行は售らざりしが如し。

アントン パウル Anton, Paul 人名 一六六一—一七三〇 獨逸の人、神學をライプチッヒに學び、フランクと共に聖書學院を立つ。後ハルの大學神學教授となり(一六九五)プライトハウプト及びフランクと共に、敬虔派運動の首領となる。

アントン派 Antonians. 宗派名 瑞西に起りたる新アンチノミアン派にして、首唱者アントン、ウンテルチーレル(Anton Unterstrher)の名に依りて此名あり。ウンテルチーレル(一七五九—一八二四)は羅馬教會の教育を受け、醫師として世に出でしが、一八〇〇年アムツルヂンゲンに於て宗教的運動を初め、説教、著書等をなし、一八〇二年其信徒の一團を率ひてベルンに來り、自ら世を害列かんために來れる神の子也と宣言せり。官憲は之を捕へて二年間懲役を課せしが、一八〇四年其出獄するや其徒熱心に之を迎へ再び暴動を企せしを以て、又捕へられて癲狂院に入れられ、五年の後一たび放免せられたりしが、後又捕へられて死に至る迄獄に繫がれたり。彼謂へらく、神と人とに關する元始の二教は、男女相愛して生めよ繁殖よとのことゝ、智識の樹の果を食ふ可らずとの二大誡に盡きたり、然るに始祖サタンに感ぜられ、第二誡を犯したりしため、彼等は大なる智慧を得て、先づ善惡を區別し、進に人類は政府、教會、朝廷、學校等の如き無數の制度を設くるに至れり。然れ共智識は元來サタンより出でたる者にして、人類を呪詛する者なれば、人は此呪詛より救はれざる可らず、而して之より救はるゝ道唯男女相愛して生めよ繁殖よの第一誡を守るに在るのみ、而して之が爲には婚姻、家族等の觀念より起る凡ての制限を破壞せざるべからずと。此派一時非常の勢力を逞ふして諸方に蔓延せしが、一八四〇年頃遂に之を抑壓したり。

アンドーヴァル神學校 Andover Theological Seminary. 學校名 米國最古の歴史を有する神學校にして、マサチユセッツ州アンドーヴァルに在り。一八〇七年アンドーヴァルに神學校を立つるの議ありしが、當時又ニュウベリーにも神學校を立つるの議あり。近傍に同種の學校を二箇設立するの不得策を感じ、之を合同して一校となさんと企つる者ありしが、カルヴィンの神學説に關し硬軟の二派ありて議論容易に纏らざりしも、議遂に熟して一八〇八年九月廿八日を以て一校を設立することなれり。是れ即ちアンドーヴァル神學校也。爾來今日に至る迄百年、大學、神學の教授を初めとし牧師、宣教師を養成せしこと數千人、且時々の宗教的、慈善的運動の指導者たり、哲學、神學上の著書を出版したること又少からず。新島襄は此學校の出身也。然れ共近年に至り校勢頗る振はず、一九〇八年の初め、エール大学神學部に合同の議を決するに至れり。

アンドリウス エリシヤ ベンジャミン Andrews, Elisha Benjamin 人名 一八四四 米國教育家。オハイオ州アニヨン大學校長(一八七五—九)ニウトン神學校説教學、牧會學教授(一八七七—八二)ブラウン大學經濟學教授(一八八五迄)同大學長(一八八九—一九〇〇)を經て現今テヴラスカ大學長たり。

アンドリウス ランスロット Andrewes, Lancelot 人名 一五五五—一六二六 英國神學者。劍橋大學ペムブローク學院長、ウエストミンスタルの副監督たり。鈍定聖書の飜譯に與る。後相繼てチチェストル、エライ及びウインチェステルの監督となる。

アンドレア ヨハン ヴァレンチン An-dreae, Johann Valentin 人名 一五八六—一六五四 獨逸の詩人にして神學者。獨逸、以太利、佛蘭西等を旅行し。貴族の子弟の師傅となる。當時るつるの議ありしが、當時又ニュウベリーにも神學校を立つるの議あり。近傍に同種の學校を二箇設立するの不得策を感じ、之を合同して一校となさんと企つる者ありしが、カルヴィンの神學説に關し硬軟の二派ありて議論容易に纏らざりしも、議遂に熟して一八〇八年九月廿八日を以て一校を設立することなれり。是れ即ちアンドーヴァル神學校也。爾來今日に至る迄百年、大學、神學の教授を初めとし牧師、宣教師を養成せしこと數千人、且時々の宗教的、慈善的運動の指導者たり、哲學、神學上の著書を出版したること又少からず。新島襄は此學校の出身也。然れ共近年に至り校勢頗る振はず、一九〇八年の初め、エール大学神學部に合同の議を決するに至れり。

アンドリウス エリシヤ ベンジャミン Andrews, Elisha Benjamin 人名 一八四四 米國教育家。オハイオ州アニヨン大學校長(一八七五—九)ニウトン神學校説教學、牧會學教授(一八七七—八二)ブラウン大學經濟學教授(一八八五迄)同大學長(一八八九—一九〇〇)を經て現今テヴラスカ大學長たり。

アンドリウス ランスロット Andrewes, Lancelot 人名 一五五五—一六二六 英國神學者。劍橋大學ペムブローク學院長、ウエストミンスタルの副監督たり。鈍定聖書の飜譯に與る。後相繼てチチェストル、エライ及びウインチェステルの監督となる。

アンドレア ヨハン ヴァレンチン An-dreae, Johann Valentin 人名 一五八六—一六五四 獨逸の詩人にして神學者。獨逸、以太利、佛蘭西等を旅行し。貴族の子弟の師傅となる。當時に於る博學者の一人にして、獨逸語及び拉丁語にて記せる著書許多あり、痛く當時の學者及び僧侶の彫蟲の技、哲學の風に反對せり。

アンドレア ローレンチウス Andre, Laurentius 人名 一四八〇—一五五二 瑞典の宗教改革家。曾て羅馬及びライプチッヒに在り。ストレンゲチースの執事長たり、ガスタヴアス一世を勸めて宗教改革の精神を採用せしむ。後大法官となり。聖書を瑞典語に飜譯するの事業を監督し、一五二六年之を出版す。教會の俗化を攻撃したるがため王の忌を得、反逆を陰謀せし廉を以て罰せらる。(一五四〇)。

アンドレア ヤコブ Andreae, Jacob 人名 一五二八—九〇 獨國ヴュールテンブルグに生る。一五五三年ゲーピンゲンの總理となり、一五六二年チューピンゲン大學神學教授及び校長となる。ゲーピンゲンの爲めに盡したる功は偉大にして驚歎すべし。彼は新教派の更に小黨派に分るゝを見て、改革事業に危險を與ふるもの也となし、自ら純然たるルーテル派の雄將たるに拘らず、小黨派を調停し之を一體となさんと企てたり。彼の最初の計劃は、各黨派の悉く承認し得べき、極めて大體の信條を造り、其下に之を調和せんとするに在り。彼は此目的を達せんとして二年間旅行し、各大學を訪ひ、セチヴアよりコーペンハーゲンに至る迄あらゆる神學者を訪ふて、之と商議したれ共、兩極端を把持せるフラシアンス及フィリッピストの兩黨何れも彼を信ぜず、セルヴストの會議に於て(一五七〇)彼の計劃は全く失敗に歸せり。然れ共彼はこれ爲に其企を棄てず、更に其方法を變じて其目的を達せん

とし、ルーテル派とグヴィングリー及びカルヴィン派との間に最も明白なる區別を立て、之に依て先づ獨逸國内に在るルーテル派に屬する凡ての會派を合同し、斯くして全く小黨派を滅さんと企てたり。於是汝は一五七三年スプビアン、コンコルザアと題する一篇を北獨逸の神學者に送りて其批評を求め、之を其批評と比較、調和せしめん爲に、トルガウに集會を開き(一五七六)後數回の商議を經て、遂にコンコルザア、フォアミュラなるもの出で、ルーテル派信條の一として之を採用するに至れり。彼の著書は百五十種の多きに及べり。

アンナ Anna. 【人名】(一)女預言者にして アセルの支派パヌエルの女也。路加に記されたる外其傳なし詳にせず。處女なりし時夫に過き七年共に居り八十四歳の間寡居せしと云へば、十四歳の時婚姻したりしと假定するも此時凡そ百五歳なりしなるべし。其日神殿を離れず夜も晝も斷食を爲して神に事へしが、耶蘇の神殿に献げられしを見て大に喜び、其側に立ちて主を讃美し、エルサレムにて贖を望める凡の人に耶蘇の事を語れり(路三の三十六—三十八)(二)耶蘇の母マリアの母なる聖アンナは、傳説に依ればパツレヘムの人にして、祭司マタンの女也。二姉妹あり、共にベツレヘムに在りて人に嫁す。其一人はエリサベツの母にして、バプテスマの約翰の祖母也。アンナはユダの支派のヨアキムに嫁し、ナザレに移住せり。他の傳説に依れば、ヨアキムはマリアの生後幾ならず死去せしを以てアンナはクレオパスに再嫁しアレパスの妻なるマリアを生み、後ヒメダイの妻サロメを生みたりといふ。アンナ崇拜は希臘教會に在ては第四世紀に初まる。ユスチニアン帝は五五〇年コンスタンチノープルに教會を建て、之れなアンナに献じ、其死去の日のみならず、婚姻及び懺悔の日をも祝せり。羅馬教會に於ては法王レオ三世、第八世紀に於てヨアキム及びアンナの歴史を聖保羅教會に置き、一五八四年法王グレゴリー十三世七月廿六日を以てアンナの爲めに祭筵を執行すべしとの事を命ぜり。第十七世紀にはアンナの清淨觀始試さへ唱ふる者ありしが、異端として禁ぜられたり。

アンナス Annas. 【人名】猶太の祭司長。ダレニオに依りて立てられ(六年)ヴァレリアス、グラタスの爲めに廢せられたれ共(十五年)尚大なる勢力を有し、其五子皆祭司長たり。又耶蘇の捕へられし時祭司長たりしカヤパは其義子なりき。神殿を「盜賊の巢」と爲せしは此一族にして、タルムッドには『禍なる哉アンナスの所に曳き往かる』の語あり。耶蘇の捕へられしや先つアンナスの所に曳き往かる(約十八の十三)彼は使徒等を審問せし時も其牛耳を執れり(徒四の六)約十八—廿三に記せる耶蘇を審問したる祭司長も思ふにアンナスなりしなるべし。其當時祭司長に非ずと雖も、暫て祭司長たりしものは、共に之を祭司長と稱することヨセフスも亦同じ。左れば新約記者がアンナスをもカヤパと共に祭司長と稱したるは(路三の二)、徒四の六)祭司長の代理者、又は猶太評議會長の義也と假定するを要せざるべし。

アンモン Ammon, Ammonites. 【種族名】ロルダン河の東アルノンよりヤボックに至るまでの地を領せる民也。此地方は曾てゼムズゼ人と稱する巨人の領地なりき(申二の十九—廿一)アンモン人の起源に關する物語は創世記十九の卅八に記さる。或學者は之を以て眞實なる歴史的事實也とし、他の學者は之を以て彼等の好色的性質より想起して作り出せる作話也となせり。思ふに彼等の淫佚と近親的虐散とは、聖書に記せるが如く其起源の汚れたるより生じたる者にして、彼等の淫佚なるより斯る物語の生じたるには非ざるべし。何れにするもアンモン人と以色列人との間には密接なる關係あり、アンモン及びモアブの人名及び地名が希伯來のそれに近似するを見れば、此二人種が以色列人に關係を有すること又疑ふべからず。然れ共彼等は共に以色列の敵にして、モロク又はケモシと稱する神を拜せり(士上十一の五、七)又彼等はパラムを崩ひて以色列人を圍ひしを以て、エホバの會に入ることを能はざりき(申廿三の二、尼十三の二)アンモン人は屢々以色列人を攻めしが、エフタ(士十一の卅三)及サウル(母上十一の十一、十四の四十七)に依りて攻め伏せられたり。後ダビデも亦彼等を攻め其首都ラバを陷れ、其民を從へたり(母後十二の廿六—卅一)。ヨシヤパテ王の治世に至り、アンモン人及びモアブ人共にイスラエルに背きしが、大に彼のために敗られたり(代ゥ廿)後又アンモン人はウザア王及びヨタム王に貢を納れしが(代下廿六の八、廿七の五)イスラエルの滅亡するに及びガトの市邑を奪へり(耶四十九の一—六、番二の八、九)。彼等はカルデヤ人及びスリヤ人と共にエホヤキム王に敵せしかば、エレミヤ及びエゼキエルは、彼等の罰せらるべきことを預言せり(耶九の廿五以下、廿五の廿一、廿七の二)、結廿一の十五以下、廿五の一—十七)後エルサレム滅亡後アンモン王バアリスはユダヤの再興を妨げんがため、イシマエルを遣はしてユダヤの督者ゲダリヤを殺せり(王下廿五の廿五、耶四十の十四)後又彼等はヲヘミヤに敵せり(尼四の七)ユダスマッカビースは彼等と戰ひ大に之を敗れり(マッカビース上五の七)彼

等は猶太人の如く希臘に事へ埃及に屬し又スリアの屬領となれり。其首都ラバは後ヒラデルヒアと名けられたる希臘殖民地となり、一時繁盛を極めしが、紀元前六十四年羅馬に征服せられ、スリヤの一部分となれり。ユスチヌス(一六六死)の時彼等は尚多くの人口を有せしが、後アラブ人の一部となり、全く其姿を沒せり。

イの部

有神論 (イウシンロン) Theism 【學説名】言語學上廣義に於ては、神の存在を肯定する學説、即ち多神説、萬有神説、自然神説及び唯一神説を總稱する語なれ共、實際に於ては之を狹義に使用し、宇宙の存在は至上、自存、全智、全能、正義、仁愛なる神の智恵と意志とに基けりとの事を主張する唯一神説と同義に領解せらる。神の存在の證據として古來用ゐられたる議論の主なる者は左の如し。

(一)宇宙論的證明(Cosmological argument) 宇宙の存在より因果の理法に依りて神の存在を證明せんとする者にして、其議論の要左の如し。偶然的世界は存在せり、即ち吾人が直接に經驗する處の世界は偶然に起りたる者也、故に絶對的必然の存在者存在せざるべからずと是也。此證明は吾人の直接の經驗に顯はれたる世界は其中に實質なく、又獨立なしとの思想より出立す。此の如き世界の存在はそれ自らを以て説明すること能はず、故に之を説明せんには勢ひ其世界以外に存在する或る物に往かざるを得ず。而して其或る物は必然的實質的にして且獨存する存在者ならざる可らず。此證明の含める思想は種々の形狀に於て表明せらるゝを得べし。即ち世界を以て現象となし、之より無限絶對の存在者を意識するを得べく、又世界を以て有限的關係的となし、之より凡ての現象の生ずる絶對的實體に論及するを得べし。然れ共凡て此等の形狀に於る議論の要旨に何れも相同じく、原因結果として相關係せる有限にして偶然的なる者を無限に追究することは、到底吾人の思慮し得べからざることなるが故に、止まりて第一原因を其證據に置き、之を以てそれ自らの原因、必然的獨存在者となす也。此議論は其端なアリストテレス及びジセロに發し、中世の神學者哲學者多くこれを採用し、カント以前の哲學者中亦之を用ゐる者ありしも、之に對する反對は、希臘哲學の末期に於けるエピクリアス派の學者及び懷疑論者中に既に現れ、中世に於ても亦之を首唱せざる學者あり。要するに直覺論者は此議論を採用し、經驗論者は之に反對せり。此議論に最も大なる打擊を與へたりしはカントにして、彼は有限的偶然的の存在よりして無限的必然的の第一原因を推定する議論は遵據なき臆測也、即ち偶然的原因の無究の連續は不可能也と云ふが如き、若くは必然的第一原因なしとせば、是れ偶然的原因の無究の連續を假定する者なりと云ふが如き、若くは第一原因の存在を假定するも之を以て完全也と云ふが如きに、何れも證據なき臆測也と云ひて、宇宙論的證據論を駁せり。カントの此批評が神學界に非常の影響を及ぼしたるは疑ふべからざることなれ共、此議論は全く倒れたるに非ず。神學者等の中には尚此議論に多少の價値を與へて止まず。假令此議論はカントの云へるが如く、積極的に絶對的必然的原因を推定することは能はずとするも、是れ實に吾人が無限の存在者に達する經路の一階梯にして、吾人が此世の有限にして且無常なるを知る其中には、隱然無限の存在者を意識する者なれば、消極的に有限なを否定する無限の觀念も、一層眞實にして高き觀念に達する踏石として必要也といふべし。

(二)意匠論的又は目的論的證明(Teleological argument) 宇宙の萬物には意匠あり目的ありとの事實より出發して、其原因としての神の存在を證明せんとする者にして、其議論の要左の如し。曰く、宇宙は秩序整然として、統一あり、調和あり、又よく目的に適合せる組織あり。例之日月星辰の運行が整然たる秩序を保ちて毫も違ふことなきが如き、四時の循環晝夜の變更の巻も規律を違へざるが如き、動植物の組織がよく一定の目的に適合せるが如き、之を以て盲目的の運動、若くは勢力の偶然の結果也とは思惟し難し。必ずや一大睿智の存在者ありて、萬物に先ちて一定の目的を有し、意匠を設して之を造り出せる者也と思考せざるを得ず。此一大睿智の存在者は即ち一切の秩序、一切の調和、一切の善、一切の意匠の大原因にして、換言すれば是れ即ち神也。此議論は最古くより行はれたる神の存在の證據論にして、ソクラテスこれを創唱し、アクガスチンこれを採用し、近世に至る迄諸學者、哲學者の一般に採用する論なりしが、近時自然界の器械的説明非常に進歩し、地球及び其他諸天體の生起、日月星辰の運行、四時晝夜の變更等に至る迄悉く之を器械的に説明せんとする者起りしより、意匠論者は更に一歩を進めて以爲らく、自然界の統一、調和は偶りに盲目なる物質の器械的運動の結果也とするも、生物體に至りては多數の物質が器械的に結合して成れりとは思考

すること能はず。夫れ因果の理法より考ふれば、原因と結果とは必ず同一性質ならざる可らず。故に思考する者は思考を生じ、生命ある者は生命を生ずることを得べしと雖も、生命なき者より生命を生じ、意識なき者より意識を生ずること能はず。左れば生命なき者し意識を有し組織體を有する有機物は、物質の盲目的器械的の運動並に結合の結果也と推定するを得ず。必ずや一定の目的を有する審智者の意匠に歸せざるべからずと。此議論は近世哲學者の間に行はれ、カントの知きも其論點を認めたりしと同時に之が實際的價値を承認せり。檢索的又は通俗的表明として考ふる時は、此議論の中には軟度なる感情を養ふべき材料となる者多きこと云ふ迄もなきことなれ共、論理的議論として考ふる時は未だ申分なき議論也と云ふ可らず。何となれば此議論は宇宙の外部に意匠者ありなる假定するが故に、此意匠者は種々の制限に依りて圍繞せられざるを得ず、制限に依りて圍繞せらるゝ外部的意匠者の概念は、完全にして絶對なる智慧及び力の概念たること能はざれば也。且又此世界の今日の組織なる者は意匠論者の云ふが如く完全なる者に非ず、先づ他の模範に依りて無限なる智慧の存在を確信せる上は、類る意匠者の概念を有することを得べきも、不完全不規則なる此世界の今日の組織の中に在りて、意匠者の痕跡を各事各物の中に發見せんことはなし得べきことに非ず。故に世界を意匠の顯現と見て、全智の意匠者に及ぶの議論は、論理上不完全也と云はざる可らず。

(三)實體論的証明(Ontological argument) 此議論は神なる觀念其のものゝ中に、神の存在の証據を發見する者也。心意に於ける神の思想は神の存在を証明す。蓋く思想より存在者に進ずるは此議論の要旨にして、之を表明するの形狀は學者に依りて一樣ならず。即ち此議論の創唱者なるアンセルムは、吾人の心に有する『絶對的完全』の存在者、若くは『最も眞實なる』存在者の觀念は、左樣なる者の存在を証す、何となれば『もし左樣なる者事實存在せざりしならんには、吾人は存在する、故に又最も完全なる他の者を想起すべければ也と云ひ、但の學者は存在は絶對的完全若くは無限なる存在者の有すべき屬性の一なるが故に、吾人が絶對的完全として考ふる存在者にして、もし眞に存在せざりしならば、彼は萬重奚なる屬性の一を缺けりと云はざる可らずと云ひ、又デカルトは結果より原因に溯り、無限の完全てふ觀念は有限世界に在るものゝ創始し得べき者に非ざれば、吾人は之れが創造者又は鼓吹者として無限に完全なる存在者の存在を推定せざるを得ずと云へり。此議論はすべし。勿論凡ての場合に於て觀念を有する、ことは、其事の眞に存在する証據也といふを得ず。カントの用ゐたる說明を借りて之を云へば、心に三百弗の概念を有したればとて、財嚢に之を有ぜりとの、ことなし。証する、ことは能はず。此に其だ明なる、ことなれ共、愛に思想より其存在を証する一箇の觀念あり、此觀念なくては思想そのものも成立すべからず。此觀念の客觀的存在を有する、ことは甚だ明白にして、之を疑ふは即ち凡ての思想、凡ての存在を共に否定する也、夫れ吾人は先づ思想を假定せずしては何物の存在なも思惟する、こと能はず。外界及び其中に在るものゝ存在を假定せざる可らず。思想以前又は思想以外に之が存在を思考せんとするは自家撞着也、何となれば事物は思想に依りてのみ思考せらるべく、思想に對してのみ存在す可れば也。吾人は斯く思想若くは思想と事物との究竟的一致に、事物に先たつ者也との、ことを知ると共に、かゝる一致に我れ又は彼と云へるが知き個人的思想に依りて其客觀的存在を有する者に非ざる、ことを記憶せざるべからず。一の客觀も主觀と關係せずしては存在する、こと能はずとの意味にて、凡ての客觀的存在は思想に關係せりと雖も、そは余の思想には非ず、何となれば余は思想に於て余の獨自性と客觀世界とを超越し、此兩者を抱合せる觀念に入る力を有すれば也。否主觀と客觀、自己と外界との一致は思想の凡てのはたらきに含有せらる。故に余は余の意識と客觀世界とを思考する時に、此二者を包括する高く、廣く、且大なる思想若くは意識を假定す。萬物に先だてる思想は個人としての個人的思想に非ずして、凡ての個人的存在以外に在り、凡ての個人的存在と客觀世界とを敎一せる思想又は自意識也。換言すれば思想する所のものは吾人に非ず、吾人の中に在りて思想する所の普遍的理性也。故に吾人は思想的存在者として既に、個人的感情及び意見が左樣のものとしては絶對的價値を有せざる境界に住す。絶對的價値を有するものは唯獨り個人的に吾人に關せざる思想即ち普遍的絶對的眞智の生命のみ。斯くして吾人が實體論的証明の眞意義として到達せる所のものは、獨的存在者として、吾人の意識的生活は普遍的自意識、絶對的靈的生命に根ぜり、而して此は主觀的概念に非ずして、其必然的存在の証據也との、こと也。此議論はカント及びロッツェ之に反對し、近代の神學者の中にてもキャノン、ロー及びマルチノーは其神の存在の証據論より之を書きたれ共、ヘーゲルは之を以て有神論の確固なる

証據也とせず、近代の神學者の中にてはクープ、フリント等熱心に之を贊ぜり。

(四)道德論的証明(Moral argument) 此証明はカントの創唱する處也。カントは其『純粹理性批判』に於て實體論、宇宙論及意匠論等の証明を皆薄弱にして取るに足らざる者なることを論じ、次で其『實踐理性批判』に於て、神の存在は吾人の實踐理性即ち道德上の要求に基きて立てらるゝことを得べく、又立てられざる可らざる者なることを論ぜり。是れ即ち道德的証據論にして、其議論の要左の如し。曰く、純粹理性の範圍内に於ては心意は單に想像的臆說的の外に出づる能はず。故に靈魂の永遠に存在するが如き、神の必然的完全の存在者として存在するが如き事は決して証すべからず。故に此不可識的の斯定を免るゝ爲めには、倫理の範圍、即ち實踐理性の領内、行爲と其法則との範圍に進入せざるべからず。吾人もし吾人の道德性を測見せば、吾人は直ちに一の大なる義務の法則あるを見るべし。今之に形式を附すれば『汝の意志の確冒常に萬世萬國に普遍なる立法の原理と符合するやう行ふべし』となる。此法則は經驗より來れる者に非ず、全く先天的の者にして、最も普通の人心にも最も思辨的の理性にも均しく存する者也。此道德法は吾人に最も大切なる眞理を証明す。即ち(一)吾人の自由の存在を証明す。此道德法は辨明を要せずして明に自由のあり得べきを証するのみならず、此法則を認識する者には必ず自由の實存するを証明す。(二)吾人の不滅を証明す。此道德法は吾人に示すに完全なる標準を以てす。而して最大幸福を得んとせば此標準に到達せざるべからず。然るに吾人は現生に在りては此標準に達すること能はず、唯限なき進歩の中に達すべき責任あるを感ずるのみ。故に此責任を自覺する者は又永遠の生命を推定せざるべからず。(三)神の存在を確証す。夫れ應報は、此道德法の標準に近接するの如何に依りて定まるべし。而して公平なる理性は幸福は應報に比例すべき者也との、ことを要求す。此要求を滿足するは唯智識と意志とを以て統治する至上存在者のみ、是れ即神也と。此証明は吾人が希求する理想の觀念より出發して立言せる者にして、カント自身が公言する如く、一個の要求假定に止まり、嚴格なる意義に於て証明也と云ふべからず。又此証明は此儘にては採用せられざりしと雖も、實踐理性又は意志の要求に基きて神の存在を証明せんとする精神はカント以後の哲學者神學者の多く贊承したる處也。ロッツェ。ハミルトン。パウルセン。フリントの知きは則ち其最も著しき者也。(『神』の條參照)

イエスイト社 Jesuits 僧派名 イエスイト社は羅馬教會内に起りたる他の僧派の知く、一定の規則に從て生活し、又少年に宗教々育を施し、異教其他の方法に依りて傳道を爲し、異端と賊ひ、異教徒の改宗に努めたる創倡の團社にして、外部より之を見れば、一見他の僧派と異なる處なきが如しと雖も、仔細に其組織、事業に於てのみならず、又其極類に於ても他の僧派と異なるを見るべし。是れ此派が歷史上特異の地位を占むる所以也。

【組織及び特質】 (一) 此種の僧派は凡て此世及び此世の俗事を離れ、庵室に在りて靜思默想の生活を送り、以て自已靈的生活の完全を求めんとするより起れる者にして、從て宣等が隣人のために働くは間接の事業に過ぎず、而して其働なる者も亦自己の知く此世を遁れ靜閑の生活を送らんことを勸むるに過ぎず。然るにイエスイト社は之に異り、其世より退くに將來大に活動せんがためにして、彼等は却て斯く世より退きたる熱心の人々を採用し、常に社會と交通するを以て其最大の務となし、此目的を妨ぐべき外部の究屈なる規則を取り去り、社中の人々をして隨所隨處に在りて、傳道及び其他の事業のために自由の行動を爲すを得せしめたり。又從來の僧派の組織は多くは共和的にして、同一僧派の中に在りても家々獨立して皆各々其家長及び其他の役員を公選するの權あり。其社中に入るも亦固定なることに非ず、凡そ二年の試期を經れば社中の人となりて其政治に干與し、且役員となるの權を有す。イエスイト社は之に異り、其政治は專制主義にして、社長(セネラル)は社中の公選に依りて擧げらるゝと雖も、一旦選ばれたる以上は終身其職に在りて絶對の命令權を有す。即ち彼は法律を作り之を執行し、又役員を任用す。社員の誓約は他の僧派の知く規則に對して之を爲すに非ず、直接に社長に對して之を爲す。社員の入退社を許否するの權亦社長の手に在り。其他社中の事務に關大社長の權内に在りとせらる。

(二) ベネヂクト派を初めとして凡て從來の僧派の一特色は、地方的變化に反對するに在り。彼等が貧窮、貞潔及び服從に加ふるに安定の誓約を以てしたるは、一所不住の生活、及び容易く甲の宗教團體より乙の宗教團體に轉ずること を妨止するのみならず、同一僧派の中に在りてさへ妄りに甲の家より乙の家へ轉ずること を妨止せんとしたる也。此規則に從へば、人は特異の事情あるに非ざれば、其一たび就きたる職を變化すり可らず。其結果諸國に起れる寺院は各々其國風を保存するの傾向ありき。然るにイエスイト社は之に異り、可動性と世界主義とを以て其

特色となす。此盟社の創立者は此主意を明にせんために、名くるに『盟社』(コンパニー)を以てせり。法王パウル三世に向て、此新結社の主意を説明して、從來の僧派は寓も教會の歩兵の如く、戰場に在りて一所を確守するに在り、イエスイト社は然らず、寓も騎兵の如く、何處にも往くべく、殊に最も偵察の任に適せる者也と云へり。彼は此意見を實行せんために、各國に在るイエスイトの社中に外國人を送りて其役員となし、其地の言語を學ばしめ、斯くして漸次何處にも往きて必要の地位を滿たし得る人々を多く養成せんことを努めたりき。

(三) 從來の僧派の目的は、其僧派に入れる一個人一個人の聖潔を得んとするに在り。後僧派内に於ける社交漸次發達し、禮拜を共にする風亦漸く生じ來りたりと雖も、要するに僧派内に在る個人の靈的性質を高めんとの目的に外ならず。然るにイエスイト社の創立者は初めより之と異りたる目的を以て之を創設せり。即ち彼に在りては盟社其物が目的にして、社員に盟社の利益を進むる器械たるに過ぎず。從て彼は從順を以て社員の最大要件となし、社中の人々は其長上に向て絶對的服從を爲し、全く自己の意志願欲を殺し、長上の命とあらば何地に往くも何事を爲すも、疑はず、躊躇せず之に服從せざる可らずとのことを教へたり。蓋しロヨラは最初軍人にして自ら軍律の下に在りしが故に、社中をも軍隊組織となし、兵士を訓練するが如く社員を訓練したりし也。

(四) 次に考ふべきは此主義を生ける勢力となすために、如何に此盟社を組織し支配したりしやとのことも也。社中を分ちて六級となす。見習僧(ヌオヴィス)、学僧(スコラスティクス)、信人(ドムボルム)、助役(コアジュトル)、助役(スピリチュアル・コアジュトル)、僧(プロフェス)、三誓約者、四誓約者是也。十四歳以下の見習僧は社員の候補者たることを能はず。彼等は先づ初め一ヶ月間孤樓的生活を送りて精神的修養を爲し、其以前の生活に就て一切の告白を爲さざる可らず。而して後二年間の見習生活に入る。而して此間を魂學と病院の事業とに費す。此見習の間は何時にても自ら退社することあるべし。而して退當の者は退社を命ぜらるゝことあるべし。而して退當と認めらるゝ時は學生に進級することを得べし。學生通常の課程は五年にして、後五六年間は自己の勉學を繼續すると共に下級生を教ふる爲めに費さざる可らず。神學の研究は廿八歳乃至三十歳に至らざれば之を初むるを得ず。而して四年乃至六年の研究を經て後初めて社中の僧侶として按手禮を受け、助役僧となるを得べく、誓約に入るまでには尚十年間社中に在るを要す。然れ共此階級に在る者も尚社中の政治に與り、又役員となるを得ず。之を得るは唯三箇若くは四箇の誓約を爲す者にして、社中の幹部は後者より成る。第四の誓約は法王に對する特殊の忠誠を表する者にして、即ち其命に從ひ傳道のため何處にても往くべしとのことを誓約するも也。斯くの如く最高級に進まんには三十一年以上の試期を要し、四十五歳にして初めて之に達するを得る也。以上諸階級に在る社員は見習生察、學校、誓約者察、僧道地等に分れ住せり。而して歐洲に在る各地の長は其社員の狀況、及び其農理せる事務、各學校の長は其社員の狀況を毎週其地方の主任者は其傳道の狀況を毎月之を社長に報告す。此外偵察、告訴に關する詳細の規則あり。社員中の缺點過失を發見したる時は之を其察長、學校長に訴ふべく、此等の人々の過失は管長に、管長の過失は社長に訴ふべし。而して社長も亦社中の制裁を受くるの規定あり。此の如く用意周到なる組織規定に依りて成立したるイエスイト社が羅馬教會に對して爲せる効績は非常なる者にして、歐洲の半が既にプロテスタント教化したりし時に方りて、之が頽勢を挽回したりし者は實に此派の力なりき。社中の人々は宗教改革運動の成功が主として羅馬教會僧侶の無學と墜落とに基くことを知りしが故に、彼等は先づ小中學の教育を盛にし、新なる精神と新なる方法とを以て之れを改良進歩せしめ、且最良の教科書と最良の教師とを供給せり。又僧侶の教育を盛にし、其智德を進捗することを勞めたりしが故に、彼等は其生活高潔にして眞摯なく、説教家としては其講壇を繁榮なる煩瑣哲學より救ひて、明白單純なる説教たらしめ、文學及び神學の方面に於ても、他の宗教的團體の誇り得るよりも多くの著名なる作者を出せり。然れ共彼等の事業の最も著しきは傳道の方面にして、印度、支那を初め北亞米利加及ブラヂル、パラガイ等にまで傳道し、其効績頗る著しく歴史上一異彩を放ちたりき。

(五) 然れ共此驚くべき僧社の歴史を讀む者は、二箇の著しき事實に遭遇すべし。其一は此派の敵たるプロテスタント教派及び一般に宗教に反對する者の中にのみならず、羅馬教國民の中にも此派に對する疑惑と反對とを抱ある事にして、其二は此僧社の計劃及び事業が、歐羅巴を初め、印度、支那、日本、亞米利加に至るまで、何處に於ても全く失敗に終りたる事是也。吾人は今此等の事實に關し今少しく詳に研究せざる可らず。先づ第一に就て之を云はんに、イエスイト社の遭遇したる反對は政治上及び道德、宗教上の二方面にして、政治上の方面に就ては、此僧社の標語ニA. M. D. G. ニ(All majorem Dei gloriam)

の略語にして、『神の大なる榮の爲めに』の義)は其實に其政策及び動機を表する者に非ず、此僧社の最大目的は自派の權力を富を增大せんとするに在りて、此目的を達するためには、戰爭を挑發し、一揆を助け、暗殺を行ひ、政府を顚覆せしむるも敢て厭はずその主張を有したりしとの事は、初めより深く疑はれたりし處也。此等の疑惑の中には確かなる根據なき者もあるべし。例之彼等が初めて佛蘭西及伯耶牙より追放せられし時受けたる非難、及びヘンリー四世の暗殺に就きて彼等の受けたる疑惑の如きは彼等自ら之に對して相當の辯解をなせり、而して之に對する確乎たる反證なければ、何れ共斯言し難きことなれ共、彼等に對する證據の頗る明白なる場合も亦甚だ少からず。例之彼等がヒウゲノー徒に對する羅馬教徒の憎惡心を煽動し、後又之を佛國より放逐せしめたるが如き、英女皇エリザベス暗殺の陰謀に與りたるが如き、三十年戰爭を挑發したるが如き、ボヘミヤ新教徒の迫害に與りたるが如き、ナント令廢止に盡力したるが如き、一八七〇年の獨佛戰爭を早めたりしが如き、彼等自ら責任を負はざるを得ず。又其證據は充分ならざれ共、彼等が之に與かりたりと思はる3場合も亦頗る多し。セント、バルソロミヤ虐殺がイエスイト社の社長フランシス、ボルギアが佛國宮廷を訪ひたりし後間もなく起りたるが如きは其一例にして、之に類する事は枚擧に遑あらず。道德及び教義の方面より來る反對も亦早くより之れあり、ロヨラ自ら一再ならず宗教裁判所に曳かれ、尋問を受けたることありしが、彼は元來實際的倫理的にして哲學的の傾同なく、從て教會にて信ぜられたる教義を論じ、若くは疑ふことを欲せざりしかば、何時も辯解明白に立ちて放されたりき。然れ共彼の後繼者に在ては然らず。彼等は思基の教義にあらざるなる教義を受けたれ共、尚常に之を固執したりき。然るに其道德説及び行爲に對する非難に至りては、彼等此の如く容易に之を辯解することを能はず、一五五四年以來屢々攻擊を蒙りたりき。此僧社の信用を最も多く失墜したりしは、一六一二年『Monita Secreta』と稱する書を出版したりしことにして、此書の偽作なるこゝは早くより宣言せられたれ共、尚幾版をか重ねて以て今日に至れり。後プレース、パスカルは其有名なる『Provincial Letters』に於て酷しく彼等の道德説を攻擊したりしが、其攻擊のロヨラの地位及び之を許容せる法王の行爲に影響せんことを恐れ、暗當時のイエスイト社の墜落を指摘したりしのみにして、其根本に横はれる蓋然主義をば攻擊せざりしかば、折角の攻擊も其効を奏せざりき。後又マリアナの爲したる攻擊なる者も亦單に此派の深値主義、惡斷、及び學科課程の掩蔽等に過ぎざりき。然れ共イエスイト社の教義の特色とも云ふべきは、蓋然主義(Probabilism)、逸樂主義(Mental Reservation)、目的は手段を是とする主義(Justification of means by End)の三者にして、此三主義は此僧社の格言として用ゐたる所の者也。

其計劃規模の大にして整頓せる、而て其事業の一時甚だ盛なりし此僧社が、遂に失敗に終り、所以には蓋し二箇の原因あり。其一は智力の缺乏、換言すれば大人物の缺乏是也。社中の人々は概して論守に傾して、能く教練せられたりしも、他の僧派の人々に優りて、能く教練せられたりし人物は初めよりそれなく、僅にロヨラ及びフランシス、ザヴィエーありしと雖も、此二人を除きては第一流に位すべき者一人も之れあらざりき。勿論彼等の中にもアクアヴィヴァの如き事務家あり、ベラルミンの如き辯論家あり、ボルダロッセヴチ子り。ヴェーラの如き試數家あり。然れ共其最も大膽にして且最も創始的なる思想家デニス、ペタリさへ人類思想の上には何等永久の感化を與ふること能はざりき。換言すれば此社中にはアクイナスもアンセルムもベーコンもリセリウもなく、社中悉く平凡の人々のみなりき。之をして斯の如くならしめたる所以の者は其見智僧の意志を抑壓して長者の意志に服從せしめ、斯くして天才固有の獨自性を創始力とを破壞せしむるが如きことを爲したること、又其實際的傾向より凡ての思辯に反對し、教會の教義に背ける辯論は之を引くことへ禁ずるが如き疾癈なる教育法を採用したりしとに依り、最大人物を招致し、若くは養成すること能はざりしに依れり。第二の原因は何れの地例れの時に於ても常に僧社の利益を最大目的となし、其傳道地國民の靈的利益に重を置かざりしが為め、充分之を教化する能はざりしに在り。此の如き原因に依りて、一たび歴史を飾りたりし偉大の事業も遂に全く失敗に終りたりき。

【略史】　以上イエスイト社の組織及び特質の概略を述べたれば、今は此社の歴史的梗概を敍すべし。此社の創立者ロヨラ(Don Inigo de Loyola)は四班牙の貴族にして、動尚壯なる時軍籍に入りしが、一五二一年齢三十歳にしてパムペルナ城を守り佛人と戰ひし時、重傷を負ひて片脚を失ひ、父の城中に送られしが、病床に在りて古聖徒の傳記を讀み、身を宗教のために献げんとの志を起し、後或る洞穴に入りて苦業を積み、其處にて『精神的修養』と題する有

名なる著書の稿を起せり。後以太利に往き羅馬及びヴェニスに遊びしが、それより又エルサレムに詣で、其處にて回教徒改宗の目的を以て傳道會社を設立せんとしたりしも果さず。西班牙に歸り、三十三歲にしてパルセロナの學校に入りて拉丁語を學び此處に二年を費せり。一五二六年アルカラ大學に轉じ、同志を集めて宗教上の會合を開き、又土地の人々を教へたりしも、教會の疑惑を蒙りて獄に投ぜられたりしが、間もなく赦されてサラマンカに往けり。此處にても赤獄に投ぜられしが、赦されて後巴里に往き（一五二八）其地の大學に入學せり。六年の後其周圍に集りし青年を以て一團結を作り、聖地傳道の計劃を立てたり。其の人々は即ちファベル（Peter Faber or le Fevre）ザヴィエー（Francis Xavier）レーチッス（Diego Layne）サルメロン（Alfonso Salmeron）ボバヂラ（Nicolas Alfonso de Bobadilla）等の面々にして、先づ聖地傳道に就て法王の許可を得、一五三七年ヴェニスに於てアルバの監督より一同接手禮を受けたりしが、ヴェニス及び土耳其の間に戰端開かれたるが爲め、パレスチナ行不可能となりしを以て、ロヨラは其他の人々と共に內地傳道を開始し、初めて其社をイエスイト社（Company of Jesus）と名け、法王の許可を得たり。斯くて一五四一年ロヨラは選ばれて社長となり、新に成立せる結社は僧派たるの誓約をなし、社員は其事業を遂行せんため各地に分散せり。即ちサルメロン及びブルヤは其地の僧俗を賜まして道理八世の宗教改革に勵に反對せしめんため愛爾に、ボバヂラはナポリに、ファベルは初めウォルムスの大會議、次に西班牙に、レーチッス及びレーは獨逸に送られたりしが、何れも成功あるに至らざりしが、ロヨラは獨逸に送られたりしが、何れも成功ある働をなし、是より先き印度に往きたるザヴェーの事業も亦成功を以て迎へられたりき。佛蘭西にては西班牙に對する政治上の關係より初め其事業頗る困難なりしが、後クレルモントの監督ドウブラの働により漸次勢力を得るに至れり。羅馬に在りてはパウル三世の保護宠も蒙へず、聖アンドレア教會及び種々の特權を彼等に與へたり。一五五六年ロヨラ死す。イエスイト社は此時既に成長して四十五人の數父、二千人の社員并に凡そ一百の學校及び教社を有し、十二管區に區劃せらる。ロヨラに繼ぎて社長となり、法王ピウス五世より更に大なる特權を得、且社長の權威を增加せり。一五四六年其死する時教社は十八管區に分れ、百三十箇の學校を有するに至れり。此社が初めて悪評を得、且法王を以て其張敵となすに至りしは、エベルハルド、メルキュリアンが社長となりし時にして、イエスイトの徒は一五八一年にはエリザベツ女皇の嫌疑を企てしとの嫌疑に依り、一六〇一年には所謂火藥事件に加りたりとの嫌疑に依りて、英國より追放せられ、又顧理四世暗殺の陰謀に與せりとの嫌疑に依りて佛國より追放せられたり。然れども一六三九年イエスイト社が創立百年の紀念を爲すに方りては、教社の數八百、社員一萬五千人にして、三十六管區を有するに至れり。イエスイト社とヤンセン派との爭論の開始せられたるは其翌年のことにして、此爭論は凡そ百年の間繼續し、イエスイト社勝利を得て、其教義に書く羅馬教會內に行はるゝに至れり。又彼等がプラガンサ侯を助けて西班牙に背かしめ、之を葡萄牙王位に即かしめたるも此年のことにして、彼等は其功等に依り無後百年間葡萄牙王國の宗教及び政治上に實權を握りたりき。佛國に於てもルイ十四世の登極と共に彼等は大なる勢力を得、事業も亦成功を以て迎へられたりき。佛蘭西にては西班牙に對する政治上の關係より初め其事業頗る困難なりしが、後クレルモントの監督ドウブラの働により漸次勢力を得るに至れり。羅馬に在りてはパウル三世の保護宠も蒙へず、聖アンドレア教會及び種々の特權を彼等に與へたり。一五五六年ロヨラ死す。イエスイト社は此時既に成長して四十五人の數父、二千人の社員并に凡そ一百の學校及び教社を有し、十二管區に區劃せらる。ロヨラに繼ぎて社長となり、法王ピウル三世の保護宠も蒙へず、聖アンドレア教會及び種々の特權を彼等に與へたり。一五五六年ロヨラ死す。イエスイト社は此時既に成長して四十五人の數父、二千人の社員并に凡そ一百の學校及び教社を有し、十二管區に區劃せらる。ロヨラに繼ぎて社長となり、法王ピウル三世の保護宠も蒙へず、聖アンドレア教會及び種々の特權を彼等に與へたり。一五五六年ロヨラ死す。

西班牙に對する政治上の關係より初め其事業頗る困難なりしが、後クレルモントの監督ドウブラの働により漸次勢力を得るに至れり。羅馬に在りてはパウル三世の保護宠も蒙へず、聖アンドレア教會及び種々の特權を彼等に與へたり。一五五六年ロヨラ死す。イエスイト社は此時既に成長して四十五人の數父、二千人の社員并に凡そ一百の學校及び教社を有し、十二管區に區劃せらる。ロヨラに繼ぎて社長となり、法王ピウル三世の保護宠も蒙へず、聖アンドレア教會及び種々の特權を彼等に與へたり。一五五六年ロヨラ死す。

イエスイト社は此時既に成長して四十五人の數父、二千人の社員并に凡そ一百の學校及び教社を有し、十二管區に區劃せらる。ロヨラに繼ぎて社長となり、法王ピウル三世の保護宠も蒙へず、聖アンドレア教會及び種々の特權を彼等に與へたり。一五五六年ロヨラ死す。

イエスイト社は此時既に成長して四十五人の數父、二千人の社員并に凡そ一百の學校及び教社を有し、十二管區に區劃せらる。ロヨラに繼ぎて社長となり、法王ピウル三世の保護宠も蒙へず、聖アンドレア教會及び種々の特權を彼等に與へたり。一五五六年ロヨラ死す。

イエスイト社は此時既に成長して四十五人の數父、二千人の社員并に凡そ一百の學校及び教社を有し、十二管區に區劃せらる。ロヨラに繼ぎて社長となり、法王ピウル三世の保護宠も蒙へず、聖アンドレア教會及び種々の特權を彼等に與へたり。一五五六年ロヨラ死す。

イエスイト社は此時既に成長して四十五人の數父、二千人の社員并に凡そ一百の學校及び教社を有し、十二管區に區劃せらる。ロヨラに繼ぎて社長となり、法王ピウル三世の保護宠も蒙へず、聖アンドレア教會及び種々の特權を彼等に與へたり。一五五六年ロヨラ死す。

イエスイト社は此時既に成長して四十五人の數父、二千人の社員并に凡そ一百の學校及び教社を有し、十二管區に區劃せらる。ロヨラに繼ぎて社長となり、法王ピウル三世の保護宠も蒙へず、聖アンドレア教會及び種々の特權を彼等に與へたり。一五五六年ロヨラ死す。

イエスイト社は此時既に成長して四十五人の數父、二千人の社員并に凡そ一百の學校及び教社を有し、十二管區に區劃せらる。ロヨラに繼ぎて社長となり、法王ピウル三世の保護宠も蒙へず、聖アンドレア教會及び種々の特權を彼等に與へたり。一五五六年ロヨラ死す。

イエスイト社は此時既に成長して四十五人の數父、二千人の社員并に凡そ一百の學校及び教社を有し、十二管區に區劃せらる。ロヨラに繼ぎて社長となり、法王ピウル三世の保護宠も蒙へず、聖アンドレア教會及び種々の特權を彼等に與へたり。一五五六年ロヨラ死す。

イエスイト社は此時既に成長して四十五人の數父、二千人の社員并に凡そ一百の學校及び教社を有し、十二管區に區劃せらる。ロヨラに繼ぎて社長となり、法王ピウル三世の保護宠も蒙へず、聖アンドレア教會及び種々の特權を彼等に與へたり。一五五六年ロヨラ死す。

イエスイト社は此時既に成長して四十五人の數父、二千人の社員并に凡そ一百の學校及び教社を有し、十二管區に區劃せらる。ロヨラに繼ぎて社長となり、法王ピウル三世の保護宠も蒙へず、聖アンドレア教會及び種々の特權を彼等に與へたり。一五五六年ロヨラ死す。

王を輔けて法王と爭ひ、ヒウゲノー教徒を迫害し、ナント令を廢棄せしめ（一六八五）又ヤンセン派と驅ひて其教徒を虐殺したり。然れ共爾く一方に於て勢力を得ると共に他方に於ては漸く其勢力を失へり。即ち日本に於て此教徒が迫害を受けて殆ど絕滅したるは此頃の事也（日本に於る此教社の事業に就ては『日本』の條を見よ）且アクアヴイヴァ以後社長となりし者は、多くは其器に非ず、彼等は徒に富貴權勢を慕ひて漸次俗化し、嗣紀次第に怠惰し、自由教育の制度は廢れ、中等以下の社會に於る彼等の勢力は漸くに衰へたり。而して又彼等は佛國に於て權勢を恣にしたりしがため、大なる反對を蒙り、漸く其勢力を失墜せり。然れ共彼等に取りて最も大なる打擊は、彼等自ら世界至る所の國々に於て商賈を營みたるの一事にして、ロヨラは教社が富を蓄積することを禁じたりしが、彼等の商業は無禁眞際止しことなかりき。斯て彼等は之のため遂に支那よりも追放せられたりき。又彼等が長く其勢力を有したりし國々に於ても、彼等に癒くに其名聲を失へり。即ち葡萄牙に於ては、彼等の商賈事業が國家の通商を害すとの理由に依りて、其商品を沒收せられ（一七五七）又國王暗殺の嫌疑を以て、國外に追放せられたり（一七五八）佛國に於てはラバレット破產直接の原因となりて、一七六七年國外に追放せられ、西班牙に於ても國王に對して謀反を企てたりとの理由を以て同一の運命に遭遇したりしが、一七七三年遂に羅馬法王は其有名なる勅令を以て、イエスイト社が諸國の政治に干涉したる事、他の宗教團體と爭ふて靈魂を滅したる事、異教の慣例に從ひたる事、教會を迫害したりし事等の罪狀を數へて、全く此會社の存立を禁止したりき。

此時此會社は四十一管區、二萬二千五百八十九人の社員及び一萬一千二百九十五人の僧侶を有したりしが、彼等は法王の禁令を物の數とも思はず、法王權威の範圍以外なる露、普二國に逃さ、普國を中心として依然活動したりき。斯くて一八〇一年に至りて、法王ピウス七世は北普に對社設立の許可を與へ、一八一四年には全く會社設立の自由を回復せり。佛國に於ては一七六五年の追放後も『信仰の父』等の名に依りて依然其存在を維持したりしが、ナポレオン一世全く之を禁止せり。爾後幾度か或は之を許可し、或は之を禁止したりしが、一八八〇年遂に全く彼等を追放せり。西班牙に於ても或は之を許し、或は之れを禁じたりしが、一八三五年之を放逐し、爾後彼等は全く法律的立脚地を有せず。葡萄牙に於ては一八三四年之を逐放せり。其熱心なる保護者たりし露國に於ても一八二〇年國內より全く之れを驅逐し、瑞西は一八四七、八年の交之を放逐し、和蘭も一八一六年之を放逐したれ共、自耳義に在ては一八三〇年の革命を助けたりしの理由を以て、其地位を保てり。初め之を保護したりし獨逸に於ても、遂に一八七二年國會の決議に依りて之を追放し、英國に於ては之が存立を許可すれ共、國民の性情に適せざるを以て殆ど勢力なし。羅馬に在りては其回復の初め悲歩遲々たりしが、後法王ピウス九世の保護に依りて、羅馬教會の至る所に之が存在を見る。現今社員の數幾何ありや精密に知ることを得ざれ共、凡そ六千人內外あるべしといふ。

耶蘇基督（イエスキリスト）　Jesus Christ（Jesus Christ）

[人名] 姓には耶蘇傳の梗概を記す。近時耶蘇を傳せんとする者、彼がメッシヤ的意識より初むるの傾向あれ共、最も安全にして且最も適當なる方法は、從來の耶蘇傳の知く、先づ外部に顯はれたる生活の方面を研究し、而して後其內的意義を發見するに在り。吾人研究の方法も亦之に外ならず。然れ共紙數限りあれば吾人は唯僅に其概略を示すに過ぎず。耶蘇傳の材料となるべきは主として四福音書也。但し四福音書の歷史的價値は各々相同じからず。第四福音書は現形に於ては果して使徒約翰の作なりや甚だ疑はし。共餘福音書の中に在りても、馬可傳は最も早く成りたる者なれ共、馬太傳、路加傳は後に至り發達せる思想の富入なき曉出の者なれば、後に至り發達せる思想の富入なきを期すべからず（詳細の批評は各書の條に就て見るべし。）故に四福音書を用ゐて耶蘇傳の材料と爲すに於て取捨を要する者あるは勿論の事也と知るべし。

【歷史的狀態】 凡そ人は皆歷史的背景を有す。故に人を知らんと欲せば先づ其歷史的背景を知らざるべからず。抑も耶蘇の生存せし當時の狀態如何。吾人は先づ之が概略を研究せざる可らず。

（一）外部の狀態　耶蘇の傳道に從事せし當時ユダヤ及びサマリアは、直接羅馬の所領にして、ポンテオ、ピラト（Pontius Pilate）と稱する太守に依りて統轄せられたりき。ピラトは紀元廿六年テベリア帝に依りて派遣せられ、三十六年其免黜を受けし時迄在職せり。彼が羅太人の慣行を蔑視し殘忍を事とせしことは、史家ヨセフスの証する處にして、諸十三の一も亦其性行を示す。由來羅馬の統治は極めて嚴厳刻薄なりき、然れ共當時羅馬の統轄したりし民は極めて頑愚亂を好む者なりしことを思はゞ、亦以て其止むを得ざるに出しなり知るべし。猶太に於る羅馬の租稅を徵集するために、羅馬政府に雇用せられたる官吏を、新約全書に稅吏と稱す。此稅吏に到る處猶太人の輕蔑と憎惡とを受けしが、是れ其羅馬政府に雇用せらるゝのみならず、又聚斂を事としたりしに由る。パレスチナの南部は知此羅馬の太守に依りて統轄せられしが、其東北地方は尙ヘロデ大王の子等に依りて統轄せられたりき。彼等は王號を稱することを許されざりしかども、尙獨立權を有し、父の違法に從ひて其所領を治めたりき。ヘロデ大王の子等とは即ちアンチパス（紀元前四—紀元三九）及びピリポ（前四—紀元三四）にして、前者はガリラヤ及びペリヤを領し、後者はイツリア及びテラコニアを領せり。アンチパスは耶蘇のガリラヤに住みし間其領主たりし人にして、バプテスマのヨハネを殺したる人也。彼は激情の人にして、其父の儲敵と奢侈とを欲れ、又猶太人の甘心を得んとして猶太教徒たるの粧を爲せり。彼は又土木を好み、ガリラヤ湖畔テベリア市を經營し、之を其首府と爲せり。耶蘇が彼を呼び『其狐』（路十三の廿二）と云ひたりしは、其秘婚にして陰險なりしを云へる也。彼は公然其兄弟の妻ヘロデアに通じ、之を容れて其妻と爲さんとし、バプテスマのヨハネの諫めるに逢ふて之を獄に繫ぎ、後ヘロデアの勸に依りて之を殺したりしが如き、亦以て彼が如何に正義を蔑視したりしかを知るべし。然れ共彼は後多少悔悟の念を生じ、且宗教の事に關し、幾分か好奇心を起したりしが如し（可六の廿、路廿三の八）。ピリポはヘロデ大王の子等の中最も善良なる者にして、ヨルダン河の水源に近き地に新に首府を經營して、カイザリヤピリポと命名し、又ヨルダン河のガリラヤ海に注ぐ處の地點に在るベテサイダ市を再興せり。彼はヘロデヤの孫なるサロメの所天なりしと云ふ。彼の所領はエルサレムを距ること遠く、且猶太人との關係少かりしが故に公然異教

徒として生活せり。當時の軍隊はユダヤ及びサマリアに在りては、太守之を統督し、ガリラヤ及びペリアに在りては、分封君之を管掌せり。エルサレムの守兵は、平時はコーホートと稱する五百人乃至六百人の一隊を以て成り、大祭の節は別に增兵を受くるの制なりき。ユダヤ及びサマリアの司法權は太守の掌中に在りしが、實際は猶太の集議院之を司れり。集議院は七十一人の長老を以て成り、國事犯を除くの外各種の犯罪を審問し、而して其判決は最終なりき。集議院に於て最も勢力を有する者は祭司なりしが、此祭司は巴比倫の背囚より歸り、政務を執行せし以來猶太の貴族となり、人民の富の半を占有したりき。此貴族的祭司の一派を稱してサドカイ人(Sadducees)と云ふ。彼等は標式的壓蔑にして其他を顧みるに遑あらず。故に最も國民の擾亂を起し、之れに依て羅馬政府の怒に觸るゝことあらんことを恐れたりき(約十一の四十八)。彼等はパリサイ人と共同して耶蘇を陷れ、遂に之を死に致したりしが、使徒時代に至りては、彼等が耶蘇の徒を苦むること最も甚しかりき。彼等は宗教に冷淡にして其憤懣せし神學は概して消極的に過ぎざりしが、尙其教義及び實行に於てパリサイ人と異る處ありき(使廿三の八)。之に反して最も宗教的熱心に富みたる者なり、パリサイ人(Pharisees)と稱す。パリサイとは『區別せられたる者』又は『淸教徒』の義にして、自ら其間關に在る異教的生活の凡ての汚穢及び程遠より區別せられたる者也と信じ、日常の行事に律法と傳說とを嚴守すべき事を主張し、其生活の理想甚だ高かりしが、不幸にして其理想は內的生活に非ずして、外部の形式なりしが故に、煩瑣なる規則のために却て道德的義務を廢し、律法を恪守すとの名の下に却て律法を蔑視するの過を聞き、義と仁と信とを棄て、徒に儀經を重くし、斯道を長くし、杯と盤の外を潔くするの宗教となるに至れり(太廿三、可七、十二)。パリサイ人に律法の教訓を傳へたりし者を學者(Scribes)と稱す。彼等は以色列人の教師にして、會堂又はラビの學校に於て其徒弟を教へ、當時に於る宗教的木鐸として最も社會に尊敬せられたりき。當時パリサイ人は宗教は如何なる政府の下に在りても妨なく行はるべしとの考より、概して政治上の問題に遠ざかりしが、人民の多數は神の民の外國に隷屬するを憤慨し、其覇絆を脫せんことを熱心に希望せり。此希望を遂げん爲めには如何なる事をも辭せず、寧に劍を執りて神の國を設立すべき時機の到るを待ち望みたりし一派をカナン人又はゼロテ(Zealots)と稱す。エデルダヤ人博士が國民黨と稱したる者是也、十二使徒の中にも此派に屬する者一人ありき(太十の四、徒一の十三)。エルサレムが羅馬の爲めに圍まれし時、最も勇猛の精神を顯はして之に抗したりしは此派に屬する人々也とす。然れ共パレスチナには又外國的勢力の甚だ強大なる者ありたを見る。ヘロデ王朝は初めよりヘレニズムを採用し、其建築の如き悉く希臘風なりき。思ふに其宮廷は希臘的氣味を以て滿されしこと、マッカビー朝以前スリヤ王が國內に經營したりしデカポリスの如き希臘的市邑も思ふに亦國民に希臘的感化を與へたりしならん。然れ共其最も至大の感化を國民に與へたりしは、四方に散亂せる猶太人が大祭節の時エルサレムに往來したりしことにして、彼等は亞歷山及びアンテオケを中心として生活したりしことなれば、此交通に依りて希臘の文化がパレスチナに輸入せられたりしこと論を俟ず。而して茲に又他の外國的勢力のパレスチナに入りし者あるを見る。即ち太古に其證を發する巴比倫及び東方諸國との交通イスラエル人の俘囚に依りて復活せられたる事にして、從てパレスチナ及東方文化の影響を蒙りしは當然の事也といふべし。此影響は吾人之をエッセヲ人(Essenes)と稱する一派の中に見るべし。即ち彼等が日出の時之に對して祈禱を捧げたりしが如き、又天使と交通し且天使を用ゐる力を有せりと信じたりしが如き、蓋し波斯教の感化に外ならず。此派は又パリサイ風の區分主義を極端に推及ぼし、儀式的潔淨を重じ其事則に沐浴し、白衣を着し、商業を排し農業を營み、共產的生活を送り、婚姻及び男女の交通を禁じ、動物犧牲に反對せり。其儀式的潔淨を重じたるは全然猶太的也と雖も、極端なる禁慾主義を守り、流血的犧牲を否認し、共產的生活を送りたるが如きは、思ふにピタゴラス派哲學の感化を受けたるものならん。此派の人々は多く北海の海岸に住居したりき。

(二)內部の狀態 (イ)猶太教 耶蘇の時代に於るパレスチナの宗教的狀態が根本的改革を來せる者ありしは疑を容せず。此事は福音書及び保羅の書翰に明なれ共、史家ヨセフスの言ふ所も亦均しく之を證せり。抑も當時の猶太教は如何なる狀態に在りしや、吾人は今茲に其長短の大要を試べし。神に關する觀念は思ふに猶太教の最も強き方面なりしなるべしと雖も、其神はあまりに超絕的にして、自然神教の神と同じく、神と人との間に存する深淵を架する者勿りき。彼等は以色列に對するエホバの愛を說き

聚耶兒幼さアリイ

雷トルサ セテアヤドレア

しかども、基督教に所謂天父及び神即ち愛也との觀念は是れなかりき。又猶太教は基督教にあるが如き神秘的要素、例之葡萄樹と枝との譬喩に依りて神人一の一致を說げるが如き思想を全然缺きたりき。ラビ的猶太教の最も不幸なりしは道德と成文律に服從する事とを以て全然同一事也となし、義務、善良、敬虔等の言を以て、何れも律法を行ふと同一意義を有する者也となしたる事なりき。故に其說に依れば律法を知り之に從ふ人は善人にして、律法を知らず之を犯す人は惡人なりき。此の如く道德と律法とを同一視することは幾多弊害の源となりたりき。何となれば律法なる者は元來外部に顯れたる行爲のみに關する者なるが故に、此二者を同一視するの結果は自然道德を外部に顯はれたる行爲のみに限らんとする傾向を生じたれば也。ラビが屢々動機の正しかるべきを敎へたるは事實にして、舊約の宗教も亦素より此外に出づることは能はざりしと雖も、律法的觀念深く人心に浸染して、實際に於ては動機の如何を顧みる者なかりき。外部に顯はれたる行爲に重を置きたりし他の結果は、行爲に依りて救はるべしとの秘密なる教義を發達したりしことも也。如此教義は何處にも之れあり、別に珍らしきことに非ずと雖も、猶太教に在りては之を頗る極端に推及ぼし、律法の行爲を守れば守る程功德あり、而して各人自ら功德を積まざるべからずとの事を主張せり。然るに律法を守ることは極めて困難の業也。於是學者は律法に加ふるに更に汗牛充棟も啻ならざる解釋的の律法を以てし、此律法も亦原始の律法と同一の權威を有せしか、此解釋的の律法は從に繁文縟禮となりて普通民衆の重荷たりしのみならず、實際原始律法の意義を誤釋曲解せる惡律法にして、形式に重きを置き動機を無視せしかば『人災毎に向ひて富を羨ふべき者はコルバン即ち禮物也と云へば事へずともよし』と云へるが如き（可七の十一、十二）幾多不道德なる誡を生ずるに至れり。此の如く原始の律法と解釋的律法とを共に守らんことは、素より普通民衆の堪え難きことは必然なりしかども、單に之を器械的に守らんことは必ずしも爲し難き事に非ず。パリサイ人と稱するは即ち此等の律法を器械的に守りたる徒にして、彼等は一般民衆を以て『律法を知らざる多衆の人』（約七の四十九）として輕蔑し、而して自ら律法を遵守せる義人也として誇りたりき。夫の自ら義とせるパリサイ人と稅吏との喩話（路十八の十一―十三）は最も能く此間の消息を示す者也。而して猶太人の他國人に於けるは、寧もパリサイ人の一般猶太人に於けるが如く、自ら誇りて他を輕蔑したりき。彼等は政治上他國の覊絆を脫せざりしと雖も、未だ曾て人種的及び宗教的自尊の精神を失ひたることあらず。而して此自尊の精神は時と共に益々成長し、其周圍に藩屏を築きて自ら他國民と區別し、以色列人のみ獨り神の恩寵を受くるの特權を有せりと思惟し、其宗教的、道德的生活を改善することを勉めずして、『我儕の先祖にアブラハムあり』と云ひ、獨り其國民的特權に信賴したりき。

以上は猶太教の信條及び之より生ずる結果を示したる者にして、亦以て根本的改革の如何に必要なりしかを知るべし。然れ共之がため猶太教には何等の取るべき點なく、其國民に與へたる者は悉く害惡のみなりしと思惟すべからず。猶太教も亦其長處を有し、基督教の起るに當りて其先驅を爲したり。先づ第一吾人は猶太教は明に舊約聖書の宗教なりしことを記憶せざるべからず。猶太教は唯に摩西の律法のみならず、預言及び詩篇を包有せる聖書の上に立ち、頗る律法を重視したりしかども、之がため其他の部分を忽諸に附せざりき。吾人は又新約聖書の中に、忠實に神に信賴し其恩愛を仰望したりし人々の稱讚を以て記されたるものあるを見る。即ちザカリヤ及びエリサベツの如き、シメオン及びアンナの如き、ナタナエル、ニコデモ、アリマタヤのヨセフ及び耶蘇が『神の國より遠からず』と稱說せる青年學者の如き是也。彼等に猶太教の純潔無垢なる產物にして、耶蘇が之より播かんとする種子を受くる爲めの肥田に外ならず。又猶太教の產したる文籍の中には、其極端なる律法的觀念を矯正し、之に所謂福音的精神を鼓吹したる者少からず。タルムドの如きも悉く此樣に非ずして、其中に美しき敎實を發見すべしと云ふ。傳へ云ふ、ヒレル嘗て一言にして律法の意を知らんと欲せし者に答へて『爾の厭ふ處の者は又之を爾の友になす勿れ、是れ律法の全體にして、其餘は註釋也』と云へりしと。又云ふ、ソコのアンチゴナスは嘗て『報償を得んとの心より主人に事ふる奴隸の如くなる勿れ、報償を得んとの心なく主人に事ふる奴隸の如くなるべし、而して又天を畏るべし』と云へりしと。此の如き幾多の言は吾人尙之を猶太教の中に發見すべし。又耶蘇紀元前後二百年間に著されたる僞名の文籍、例之エノク書、ソロモンの詩篇、エズラの第四書、バラクの默示錄等の如き書の中には、最も明に猶太教の短所を暴露する者あれ共、又之と共に高尙なる方面を示す者なくんばあらず。之を要するに耶蘇當時の猶太教は一長一短あり。其神の觀念及び人の神に對する義務の說念の如き、當時の希臘人、羅馬人及び東洋人の及ぶ處に非ざりしかど、前者に就ては尙足らざる所あり、後者

耶蘇基督

耶蘇神殿にて質問す

ナザレの景

に就ては矯正を要する幾多の缺點ありき。然れ共天下未だ猶太人の如く宗教の事に眞面目なる者之れあらず。彼等の中には公然無神説を唱へ、若くは宗教に無頓着なる者甚だ少く、且彼等は宗教の圖畫に對し最も忠實にして熱切の愛を有せり。故にエルサレムの滅亡後出でたる默示的文籍を見るに何れも悲慘を極めたり。思ふに天下未だ曾て猶太人の如く悲慘の運命を有したる者あらず。然れ共彼等は之が爲めに毫も其信仰を失墜せず、神が斯く彼等を處し給ひし聖意如何と案じ深りたりき。

（ロ）　基督教の種子を受けたる地　然れ共概して之を論ずるに、猶太教の基督教に近似する要素は、其宗教的中心を遠かるに從ひ益々多くを之を發見すべし。基督教の最も強く反對したりしは、枯淡、冷酷なる律法主義にして、預言及び詩篇の中には基督教の精神に近似せる者少からざりしが、當時猶太教徒の中には、殊に預言及び詩篇を研究せる一派あり。此人々は第四エズラ書の『柔和なる者』ソロモンの詩篇の『貧しくして且乏しき者』馬太傳の『心貧しき者』（五の三）路加傳の『我心主を崇め我靈我救主なる神を喜ぶ』（一の四十六―五十五）者にして、ヨセフ。マリアを初め、ザカリア。エリサベツ。シメオン。アンナの如きは即ち此階級に屬する者也。彼等は黨派を作らず、又別に具體的の政策を有せざりしがども、那ふに國中何れの處にも此種の敬虔なる人々多くありしことならん。又當時宗教的新運動の開始を嘱望し、其開始せらるゝに及びて之を歡迎したる者ありしは、馬可傳十二の廿二―廿四の記事に依りて明也。吾人が既にエッセヲ人に於て之を見たるが如く、動物的犠牲の廢止は當時既に其準備成りたりしが如し。且曾堂を中心としたる宗教的生活が神殿に於る禮拜の廢止と共に、動物的犠牲の廢止を助けたりしこと疑なし。又當時の猶太教徒は異邦人を猶太教化するに熱心なりしが、此熱心は後異邦人を基督教化する段階となれり。吾人は福音書に於て既に、此の如くして猶太教化せられたりし異邦人の速に福音を受けたりし實例を見る也（路七の二―五、可十五の廿九）。

（ハ）　救主出現の希望　然れども福音の準備のために大切なりしは、メッシヤ出現の希望也とす。當時更に猶太人は其金科玉條とせる所謂摩西の五經にメッシヤ出現の約束明白ならざると、彼等が單に現世の事にのみ渇ゆたりしとに依り、之な希望せるの跡なく、又エッセヲ人にも此の如き希望を有せりとの證據を發見せずと雖も、學者及び學者の指導を受けたる一般の人民は、最も熱心に神の預言者に依りて約束し給へる時の來らん、ことを待ち望みたりき。然れ共如何にして此約束は來るべきやに關しては諸説一致せず。ゼロテ人の知きは干戈を以て外敵に勝ち、此の如くして以色列の敎の成就せらるべきを期待せしと雖も、又預言者の所謂『主の日』來るに及びて、神の力天より顯はれ、其怒り給へる凡ての異人を滅し、以色列を救ひて之を新天新地に置き、以て之を慰め給ふべしと思惟せる者ありき。此の如き想像は其端を但以耳書に發し、諸他の默示錄亦之を記載せり。此剛直の間に位する信仰は吾人之をザカリヤ及びマリアの歌、及びシメオンの感謝に於て見る也。即ち彼等は、神は今尚天に在まし其民を顧み給ふ可ければ、一旦時機到來するに至らば、彼等の王を其中より起し給ふべしと信じて之を俟ち、而して彼の治世は外敵を征服するのみならず、又其民を潤むべしと信じたりき。此種のメッシヤ觀は『ソロモンの詩篇』及び『エノク書』に於て之な見るべし。此二書は紀元前七十年以後の作なるべしと信ぜらる。後者は但以耳書の『人の子』の觀念な取り之なメッシヤと同一視し、且メッシヤな以て王となすのみならず、又審判者となしたり。之な要するにメッシヤの性質に關しては諸種の異説ありしと雖も、メッシヤ出現の希望は頗る廣く國民の間に普及したりしが如し。

【耶蘇の幼時】　（一）　誕生　耶蘇は其傳道の生涯を通じて、ナザレの住民ヨセフ及びマリアの子也として認められたり。耶蘇がカペナウムの會堂にて爲せる教を聞きし人々は、耶蘇の『我は天より降りしパン也』と云ひしことに就き議して『彼が父母は我儕の知る所なら不や、即ち彼はヨセフの子耶蘇に非ずや』と云ひ（約六の四十二）ナザレ人も耶蘇がナザレに來り説教せし時、同樣の疑問な發して『彼等が疑問の書は三福音書の傳ふる所各小異あり、即ち馬可には『彼は木匠に非ずや』（六の四）とあり、馬太には『是れ木匠の子に非ずや』（十三の五十五）とあり、路加には『此はヨセフの子に非ずや』（四の廿二）とあれ共、耶蘇を以て木匠ヨセフの子也と認定したりしに至ては相同じ。又路加傳の記者は『ヨセフ、マリアを以て『兩親』（二の廿七、四十一、四十三）と云ひ、又『其父母』（二の廿三）と稱し、マリアをして『爾の父と我と憂へて爾を尋ねたり』と云はしめたり（二の四十八）又馬太及び路加の記者は共に其系圖に於て耶蘇を以てヨセフの子となしたり。然るに此二者共に一方に於て此の如く耶蘇のヨセフ及びマリアの子なることな傳へたりしに拘はらず、他方に在りてはヨセフは血統上耶蘇と何等の關係なく、耶蘇は聖靈に依りて孕まれたる者也と爲せり。但し二書傳

ふる所の記事耶蘇の誕生を以て奇跡的也となすの一事に於てのみ一致し、其細目に至りては全然相同じからず。即ち馬太傳は天の使ヨセフの夢に顯はれて『聖靈マリアを孕ることを懼るゝ勿れ、其孕める所の者は聖靈に由る也、彼れ子を生まん其名を耶蘇と名くべし』と云へりと云ひ、東方の博士星を見て耶蘇の生れたるを知り禮物を携へて來り拜せりと云ひ、ヘロデ王耶蘇を殺さんとせしかば、ヨセフ又夢に天使の示現を蒙り嬰兒と其母とを携へて埃及に逃れたりと云ひ、ヘロデの死後ヨセフ又彼等を携へ埃及を出でゝガリラヤに往きナザレに永住したりと云へり。然るに路加傳は全く是等の事を記せず。之に反して其記事に從へば天使の啓示を蒙り其生む處の聖なる者なることを知りしはマリア也。耶蘇の生れたる時來り拜したるはベタレヘムの近傍の牧者也。マリアとヨセフは潔の日滿つるを待ち、嬰兒を携へてエルサレムに上り、律法に從ひて凡ての事を竟りしかば、其處よりナザレに歸りたり。此の如く此二書の記事は一見矛盾の觀を為す者あり。是等の相違は他の新約の諸書が奇跡的誕生に就て全く沈默なる事と、又如何にして斯る家庭の秘事が公にせらるゝに至りしやと共に一個の疑問也。

(二) 系圖　馬太(一の十七)及び路加(三の廿三―卅八)に記されたる耶蘇の系圖を調和せんとする二箇の試みなり。其一は馬太傳の系圖を以てヨセフの者也となし、路加傳の系圖を以てマリアの者也となす是也。路加傳の系圖を以てマリアの者也となす爲めには福音書の本文を曲解せざるべからず。故に近時の學者は此等の系圖を以て共にヨセフの者也となすに殆ど一致せり。第二の解說は養子說とも云ふべき者にして、即ち實際の血統と法律上の系統とは相違する事あるべく、此二箇の系圖も此の如き事情に依りて相違せる也と云ふに在り。此說理由なきに非ずと雖も巧妙に過ぎて受取り難し。故に近時の學者は敢て此二箇の系圖を調和せんことを求めず、耶蘇のダビデの系統より出でたることを証せんとせる熱望より創出されたるものゝ如き也と爲せり。

(三) クレニオの戶籍調査　路加傳に依れば、耶蘇は羅馬帝アウグストの世クレニオ、スリヤを治めし時の初次、戶籍調査の行はれし時、ユダヤのベタレヘムに生れたりしと記さる。而して其誕生はヘロデ大王の尙生存中の事なりしといふ。ヘロデは紀元前四年に死したりと云へば、耶蘇の誕生は遲くとも紀元前四年ならざる可らず(『新約全書の時代』の條を見よ)。而してヨセフはダビデの家族又血統なれば戶籍につかんとて、マリアと共にベタレヘムに至り、此處にて蓋期滿ち耶蘇の誕生を見たりしといふ。然るに此記事に就ては學者の間に疑團あり。謂へらく、アウグストが天下の戶籍を調ふるの詔を出したりとの証跡他に之れあるなし、假りに之ありとするも當時或程度迄獨立國たりし猶太國に之を及ぼしたりしや疑はし、又假りに之を及ぼしたりとするも、羅馬の法律に從へばヨセフ及びマリアが其居住地を離るゝの必要なし、且クレニオは前後再びスリヤを治めたりしかども、紀元前九―七年スリヤの太守たりしばサタルニナスにして、同七―四年にはヴァラス、スリヤの太守なりき、されば路加は紀元六年猶太が羅馬に併せられて後行はれたりしクレニオの戶籍調査と此說に近年勢力を得たりしが、今より十數年前(一八九三)當時埃及に於ては十四年毎に羅馬帝國に依りて戶籍調査行はれたりとの事實發見せらるゝに至り、ラムゼー博士は之より推究して、此戶籍調査はパレスチナにも行はれたりし事、パレスチナに於ては其慣例に從ひ、自己の家族又は血統のある地に往きて戶籍につきたりし事、クレニオは此時太守には非ざりしかど、ヴァラスの爲めに納稅の事を司りたりしとの事を明にし、以て路加の記事の正確なるを証したり。

(四) 耶蘇の成長　耶蘇は其世に出現せる迄はナザレに在りて、孩提より當時に、童時より壯年に進みたることなるが、此間の事に關しては福音書記者詳に之を記さず。唯僅に路加傳に其幼年の事を記して『其子やゝ成長して精神強健に智慧滿ち神の恩寵其上に居れり』と云ひ(二の四十)而して十二歲の時兩親に携へられエルサレムに上り、節筵の日終りて兩親は歸途に就きけるに、彼は獨り留りて神殿の講堂に在り、多くの學者に圍まれて問答しつゝありしとの事を記せり(二の四十一―五十二)此一事は以て耶蘇の當時受けたりし教育の一端を想像するに足れり。彼の兩親は貧しかりしと雖も、共に實撲にして且敬虔の念に富める人々なりしかば、思ふに最良の宗教的教育を彼に授けたりしなるべし。又當時會堂は實際に於て宗教的教育の中心なりしかば、彼は每週此處に至り、聖書を讀むを問き又日常の行爲に對する教を受けたりしなるべし。且此時代には極貧の都邑にはラビの管理する學校の設ありしとの事なれば、彼も恐らく幼時より此學校に送られ普通の教育を受けたりしならん。馬可の傳ふる所に依れば、彼は自ら工匠の職を營みたりしといふ(六の八)父ヨセフの事は耶蘇十二歲後再び記されざるを以て、早く死したるならんと想像せらる。耶蘇は四人の弟を有し、又妹なも有せしと云へり(可六の三)思ふに彼は

父の死後自己の力を以て毋及び此等の弟妹を養ふを要したりしならん。去れば此工匠の職は彼なして自主の精神を養はしめたりしなるべく、又衆に多くの人々と交り人情の微を學び、遂て又人の罪と其要求とを知るの機會を與へたりしなるべし。而してナザレの風先は頗る美なる者なりしと云へば、彼が自然より受けたる感化も亦少からざりしなるべし。彼は此くの如くして『智慧も齢も彌増り、神と人とに益々愛せられ』(路二の五十二) 世に出現するの準備を爲したりき。

【傳道準備の時代】 バプテスマを受けしより重なる使徒を召すに至る迄。此間の事は主としてユダヤに起りたれ共、又ガリラヤに起りたることもあり。紀元廿六年の冬に初まり、翌廿七年の論越節の數週後に至る(時代に關しては『新約全書の時代』の條を見よ)。馬太三の一―四の十一、馬可一の一―十三、路加三の一―四に記さる。

(一) バプテスマのヨハネ及び耶蘇の受洗　當時の猶太人は神の國の性質を能く領解せざりしと雖も尙之を口にし、其出現の近きに在るを信じ、其表徴を望みつゝありき。左れば預言者の顯れて天國近づけりとの事を宣傳すとの興四方に達するや國民の動搖したりし者惟しむを要せず。預言者其名をヨハネといふ。彼れヨルダンの下流に近きユダヤの野に顯れて説教せり。彼は曾て久しく寂寞たる荒野に在りて制慾的生活を送りしが、其生活の方法頗るエリヤに似たる者あり。彼の顯したりし使命も亦甚だ單純にして、彼は舊約の預言者と同じく深く國民の危機の目前に迫れるを感じ、之を以て國民を警告せり。彼の思惟する處に依れば、來るべき者は神の審判にして、此審判は彼よりも大なる使命を有せる一人の審判者に依りて成さるべし。今や斧を樹の根に置かる、故に凡て善果を結ばざる樹は斬られて火に投げ入らるべし』。左れば國民は此審判に對する準備

東邦の學校

等なして過去の罪の消滅して新生活に入りたるを感ぜしめたり。此潔淨の方法を稱してバプテスマと云ふ。而してヨハネは此方法を採用したりしを以て『バプテスマのヨハネ』と稱せらる(施洗者ヨハネと譯せるもあり)。此方法は猶太人の從來行ひ來りたる、殊にエッセネ人の儀式に於て最も重要なる地位を占めたりし齋沐の禮と頗る相似たり。唯其異なる所は彼等に在ては屢々之を反復し、此に在ては生涯一回之を行ふを以て足れりと爲すに在り。ヨハネは罪の悔改を説き悔改者にバプテスマを施すを以て其主なる事業となせしが、彼は又自己よりも大なる者の來るべき事を告げ、且耶蘇を以て是也と爲せり。彼れ一日側の如くヨルダン河に於てバプテスマを施しつゝありしに、耶蘇亦彼よりバプテスマを受けんとしてガリラヤより來れり。馬太傳(三の十三―十五)に依れば、此時ヨハネは一旦耶蘇の請を拒みしが、强て請へるに依り、初めて之を承認したりし也といふ。然れ共此記事最古の福音書(馬可傳)に之れなきを以て後人の挿入なるべしと疑はる。ヨハネが耶蘇を以て己よりも大なる者也と信ずるに至りしは、思ふに耶蘇受洗の後なりしなるべし。耶蘇がバプテスマを受けて水より上りし時天よりの異兆顯れたりしとの事は四福音書共に之を記せ共、共觀福音書は之を以て耶蘇自ら見聞せる事也と爲し、唯約翰傳のみヨハネの見聞したる所也と爲せり(一の廿二―廿四)。何れにもせよヨハネは自己を以て一個の先驅者に過ぎずとなし、創越者に非ざるを自覺したりしかば、耶蘇のバプテスマを受け聖靈にみたされ(路四の一)たる有樣を見て、自己は其樣の組を解くにも足らぬ者也と思惟したりしなるべし。

(二) 耶蘇の受けたる誘惑　耶蘇はバプテスマを受けし後直にヨルダンの岸を去り、聖靈に驅られて寂寥なる荒野に退き四十日食はず、三箇の誘惑を受けたり(可一の十二、十三、太四の一―十一、路四の一―十三)。四十日といふは概數に過ぎず、何物をも食はざりしと云ふは、恐らくは特に斷食を守りしとの意に非ず、荒野の事情通常食すべき者を供給する能はざりしをいふ。此誘惑は云ふ迄もなく、耶蘇の心中に起れる主觀的經驗を比喩的に記したる者にして、思ふに耶蘇は後に至りて之を弟子に語りたる者なるべし。此物語は耶蘇がバプテスマを受けてメッシヤ的召を蒙りたりしを證す。彼は此召を蒙りて如何にして其使命を盡すべきやに就き默想せんが爲めに荒野に退けり。蓋しメッシヤ的事業は政治的なるよりも宗教的たるべく、法律的なるよりも思寵的ならざるべからず。然れ共是れ悉く猶太人の預期に反する事なれば耶蘇將來の事業は頗る困難ならざるべからず。邦も耶蘇は如何にして猶太人の反對に抗し此困難なる事業を遂行すべきや、彼は四十日間此問題と奮鬪したりしが、後肌の身に迫るを感じたり。於是慮へらく、我れ若し果してメッシヤたる天職を與へられたりしとせば何が故に斯く肌膚に迫ることありやと。是れ天職に對する疑の疑惑なりしが、彼は又謂へらく、人の生活に必要なるは肉體を養ふ食物のみに非ず、神の聖意を爲すに在り、故に不充分の食物を以て滿足せざる可らずんば須らく之に滿足すべし、神もし我に食物を與へ給はんと欲し給はゞ、石を化してパンとなすも亦難きに非ず、又何ぞ衣食の事を以て煩とならんやと。彼は此の如くして第一の誘惑に勝ちたり。是れ耶蘇が他日天空の鳥野の狐にさへ劣るが如き生活を爲して尙之に甘ずるを得たりし所以也。然れ共此堅固なる信仕は第二の誘惑の導因となれり。今耶蘇は己が神の召を受けしを信ずること深し、されば仕て彼は凡ての危險に頓着なく、一切の自重を打忘れ、偏に神の保護に信仕し、不注意にも其身を神殿の巖より飛下りたりしが、是れ亦神の聖意に非ず。さらば彼は國民の希望に引つられ知れば、其事業を爲すこと容易にして且愉快なるべしと雖も是れ神の聖意に非ず。さらば彼は國民の希望に從ふべきか、抑も亦神の聖意に從ふべきか、是れ彼が受けたる第三の誘惑にして、彼は云ふ迄もなく、如何なる時如何なる場合にも神の聖意に從ふべしと決心したり。是れ彼が後日神の國を建つるに方り、權謀術數を頼まず、武具兵力に依らず終始一貫せる主義に依り、仁愛と眞理とを以てしたりし所以也。

(三) 最初の弟子及びカナの婚筵　耶蘇曠野に退きし後バプテスマのヨハネは、依然傳道とバプテスマを授くることを繼續し、ヨルダンの谷を北上してベニヤに至れり。耶蘇の誘惑の場より歸り來るや、彼は耶蘇を其弟子に示して『世の罪を任ふ神の羔羊』と云へり。二人の弟子は之を聞て耶蘇に從ひしが、其中の一人なるアンデレは此新なる教師に感服すること深く、其兄弟シモンを求めて『我等メッシヤに逢へり』と云へり。又他の一人はゼベダイの子ヨハネなりしが、彼も亦急くに其兄弟ヤコブに逢ひ之を最初よりして弟子の數に入らしめしならん。而して此時耶蘇は將さにガリラヤに向ひて去らんとせし時なりしが、其翌日又ピリポを其小き群の中に加へ、ピリポは又ナタナエルを携へ來れり。斯くして其最初の弟子の一群は成りぬ(約一の廿九―五十)。彼は此等の人々を携へてガリラヤのカナに赴き婚筵に列せり。耶蘇の母も亦愛に居たりしと云へば、思ふに彼が親戚の家なりしならん。彼は此處にて水を葡萄酒に化し、婚筵の急要に應ぜしめたり。是れ彼が爲したる最初の奇跡にして、弟子等之に依りて彼を信じたりといふ(約二の一―十一)。

(四) 最初の逾越節　斯くて耶蘇は其母兄弟及び弟子等を携へカペナウンに降れり(約二の十二)。是れよりカペナウンは耶蘇傳道の中心となれり。耶蘇は斯くて暫らく此地に止まり、靜に其新しき友人等と交際したりしが、逾越節の近づくに及び、國民の宗教的中心地に於て公然メッシヤ的事業を開始せんとしてエルサレムに上れり。此事は第四福音書(二の十三以下)のみ記載し、共觀福音書は之を記載せずと雖も、之がため約翰傳の証言を疑ふべからず。彼は初春即ち逾越節にエルサレムに到着し、其年の十二月迄ユダヤに滯在せり(約四の廿五)。但し此數ヶ月間に關する約翰傳の記事は極めて零碎的の者也。耶蘇が神殿を潔めたりしは未だ必ずしもメッシヤ的宣言運動也と思惟するを要せず、此は寧ろ宗教改革的事業也。耶蘇が此時『爾曹此殿を毀て我れ三日にて之を

超てん』と云ひしは、地方的中心を有する猶太教は、）霊的中心を有する基督教に依りて其地位を奪はるべしとの意にして、之を耶蘇の復活に應用したるは後人の思想なるべし。此神殿潔の事は、他の福音書に在りては、耶蘇傳道の終りに起れる事也とせり（可十一の十五―十八）。斯る事が二回起れることは必ずしもなしと云ふ可らず。然れ共もし一回のみなりしとせば、著人は寧ろ第四福音書の記事を以て正確也とせざるべし。耶蘇の神殿潔を見て深き感動を其心に起せる一人あり。此人は即ち猶太人の宰、集議院の一員なるニコデモ也。彼れ一夜耶蘇を訪ふて天國に關する眞理を問はんことを求めしかば、耶蘇は彼に曾々るに新生の必要を以てせり（約三の一―十六）此ニコデモは後耶蘇の忠信なる辯護者となれり（七の五十）。耶蘇はエルサレムを退きし後も暫くユダヤに止まり、バプテスマのヨハネの傳道の如き単純なる準備的傳道を繼續せり。而して彼の名聲はヨハネよりも一層盛に揚りしが、既にして耶蘇の弟子等耶蘇を助けてバプテスマを施したりとの聞あり。此一事ヨハネの弟子の嫉妬を招き、且パリサイ人等は耶蘇をして此上ユダヤに傳道するを不可也と感ぜしめしを以て、耶蘇はガリラヤに退隠せり。

（五）　ガリラヤの退隠　耶蘇は急ぎてユダヤを去りガリラヤに退かんとせる途上道々サマリアに借りたりしが、ヤコブの井の傍にて休憩中偶然一個の婦人と會談し、之に己の誰なることを示し、且精神的禮拝の事を說きたりしが、間らずもサマリア人に傳道の端緒を得愛に二日留まれり（約四の四―四十二）彼はガリラヤに到着後ナザレに歸りたりしが如く、又弟子等は各々其常業に復し、耶蘇が之を新傳道に召したりし時に及べり。約傳傳に依れば耶蘇が大臣の子を醫したりしは此時に在り（四の四十六以下）此出來事は馬太及び路加に記されたる百夫の長の僕の醫されし事に能く似たれば、同事の異譯ならんと唱ふる者あれ共、又不同なる點も多ければ約傳傳は別事を傳へたる者なるべし。

【耶蘇傳道の建設的時代】　耶蘇は此時に至る迄未だ新宗教組織の事業に着手せざりき。數人の弟子は彼の周圍に集り來りしかども、此はラビの弟子が其周圍に集り來りしに異らず、彼等は未だ耶蘇と離るべからざるが如き深き關係を結びたりしに非ず。故に耶蘇の故郷に退隠すると共に、彼等も亦各自に其家に歸れり。神殿潔の如き、又此間に爲されたりし奇跡の如き、未だ大に猶太人がメッシヤに期待したりし處に孫ひたりしと云ふ可らず。彼が弟子と共に施したりしといふバプテスマなる者も亦ヨハネのバプテスマと同じく、単に悔改のバプテスマに過ぎざりき。然れ共今や耶蘇は一歩を進めて新宗教の建設に着手し、彼の宗教は猶太教と同じからず、又ヨハネの宗教とも同じからず、新なる意義に於る神の國の建設也との事漸く世に明なるに至れり。此時期を假りに稱して耶蘇傳道の建設的時代といふ。紀元廿七年パンテコスト祭の頃に起り、翌廿八年過越節の少時前に至る。一部分はエルサレムに於て爲されたりしが、ガリラヤに於て起りたる事也とす。太四の十二―十三の五十三、可一の十四―六の十三、路四の十四―九の六、約五の一―四十七に記さる。

（一）　十二使徒の召、教育及び其使命　耶蘇の傳道は其ナザレよりカペナウムに移り、四人の漁夫を召して常從の弟子となしたることに初まる。此等の四人即ちシモンとアンデレ、ヤコブとヨハネは既に記したるが如く曾て耶蘇に從ひしことありしが、其故郷に退隠すると共に彼等も亦家に歸りて水業に復し居たりし也。然るに一日彼等がガリラヤ湖岸に在りて網を洗ひし時、耶蘇彼等に向ひ『我に從へ』と云ひしかば、彼等は直ちに其水業を棄てゝ耶蘇に從へり（可一の十六―廿。此『從へ』と云ふは、耶蘇と『偕に置く』の義にして（三の十四）即ち師へす彼と共に在りて組織的に其教を受くるの謂也。耶蘇の宗教は素より秘教に非ざれ共、又弟子の一群あり、其團體に入る者には特殊の利益與へられ、他の人々の聞き得べからざる特別の說明をも聞くことを得る也（太十三の廿四）。四人の弟子に續きて召されたるレビとす、彼は又マタイと稱せらる。點くして都合十二人の弟子を召し、己と偕に置き、又教を宣べ傳ふる爲めに遣はさんとの目的を以てこを簡び、名けて使徒と云ふ（可三の十六―十九、太十の二―四、路六の十四―十六、徒一の十三）。彼等は何れも社會上、中流若くは其以下の地位に在る者にして、中には稍や富める者もありしが如し。例之ヤコブ、ヨハネの父が僕人を有したりしが如き（可一の廿）ヨハネ（約十八の十五）是也。彼等が耶蘇より受けたりし教訓は極括して之を『神の國の福音』と云ふ（可四の十一）彼等は素より其教へられたりし凡てを領解したりしに非ず、否彼等の之を領解することは甚だ遲く、彼等は時機と場合の到着して之を說明するに從ひ、漸次に之を領解したりし也。耶蘇は其後間もなく（思ふに紀元廿八年の初めなりしならん）自ら往くこと能はざる地方に十二使徒を遣はし（太十の一以下）之に鬼を逐出し又疾病を愈す權力を與へたりしが、彼等が口を以て傳ふべき事は唯『天國近きに在り』との事に過ぎざりしが

知し（十の七）。

（二）　耶蘇とヨハネとの相違　ヨハネも耶蘇も、又耶蘇の弟子も共に『天國近きに在り』との宣言を以て初め、又彼等何れも悔改のバプテスマを施したりしが、耶蘇の方面に在ては此等の事は單に其準備たるに過ぎず。故に愛に至りて其類似の點は全く消滅せり。耶蘇はヨハネの事を語りて『婦の生みたる者の中最も大なる者也』と云ひしかども、又『天國の最小き者も彼よりは大なる也』と附加せり（太十一の十一）ヨハネの事業は善良にして適當なる者なりしに相違なしと雖も、未だ之を以て完全也といふ可らず。故に耶蘇は先づヨハネの禁慾的生活の方法を棄てゝ、大に世人の驚得を惹起したりしが（可二の十八―廿二、太十一の十八以下）其内部の教訓に於る相違は更に大なる者ありき。即ちヨハネは神の國及びメッシヤの性質に關し古き思想を維持し、道德的改善の必要を說きたれ共、其他の事に至りては當時國民一般の考と毫も異る處なかりき。然るに耶蘇は唯神の國及びメッシヤの性質に關する古き思想を棄て、全く新なる觀念を懷抱したりしのみならず、又全く新なる實行の方法を採用せり。是れヨハネが獄中に在りて失望の餘り疑念を挿み、其弟子が耶蘇に遣はして『來るべき者は爾なりや』と問はしめたる所以也。此時耶蘇は其事業に着手したりしのみにて、未だ明に神の國の奥義をヨハネに示すことは能はざりしかば、古預言者の言を引きてこに答へ、且忍耐と熟察との必要を之に告げたり（太十一の五、六）。

美羅の山

（三）　神の國の宣傳　然れ共耶蘇は此間ガリラヤの群集務に其十二使徒に向ひて、神の國の新教義を傳へたりき。此教義は耶蘇の他の教訓と密接の關係を有し、最も重要なる者にして、馬太五―七及び十三は他の教訓と共に其教義を記せる者也。詳細は別に『耶蘇の教訓』の條に說くべし。愛には唯此時代に於ける耶蘇の教の重なる事は、神の國の性質及び神の國に入らんとする者に要する資格なりし事、彼の教を聞ける多數の人々は唯之を零碎的に聞きたるのみなりし事、及び彼の蒔きたる種子が一時に生長せんことは素より望み得べき事に非ず、十二使徒さへ當時未だ充分に其意義を領解し得ざりし事を驚ふを以て足れりとす。

（四）　奇跡　此時期に於る他の著しき特色は、耶蘇が病を癒し又は鬼を逐出す等の奇跡を爲したりし事也とす。耶蘇が幾多の奇跡を行ひたりし事は四福音書の共に記す處にして、如何に此等の奇跡を解說すべきやは別問題として、兎に角之を歴史的の事實也となさゞるを得ず。尙詳細は『奇跡』の條に說くべきを以て、愛には唯耶蘇の奇跡は主として恩寵の事業なりし事、彼は妄りに奇跡を行はず、唯或る種類の奇跡を教訓の媒として行ひたりしのみ也との事を云ふを以て足れりとす。

（五）　教訓及び奇跡の民衆に及ぼしたる結果　耶蘇のガリラヤに於て爲したりし教訓と奇跡とは共に初めより大なる感動を民衆に與へ、其聲名忽ち四方に傳はり、彼に聞かんとする者、彼に病を癒され、鬼を逐出されんとする者雲の如く集して其門に集れり（可一の廿二―廿四、二の二、十二、三の七―十、四の一、五の廿一、路七の廿八以下）。彼の教訓はラビのそれと異り、ラビは單に律法を說明するに過ぎざりしが、彼は自ら新なる律法を作り（太五の廿一、廿二等）且其之を語るや權威をもてる者の如くせしかば、之を聞く者皆驚き合へり（可一の廿二）然れ共彼等は之が爲めに直ちに耶蘇を以てメッシヤ也と信じたりしに非ず。當時耶蘇に對する一般民衆の考は、路加の記したる如く『大なる預言者我等の中に起る、神其民

を顧み給へり』(七の十六)といふに過ぎざりき。

(六) パリサイ人に及ぼせる影響　民衆の耶蘇に對せる感動は浸潤なりしにもせよ、彼等は單純なる心を以て彼を信ぜり。彼に對する反對は民衆より出でしに非ず、宗教的指導者即ち學者パリサイの人より出でたる也。而して彼等の反對は一時に生じたるに非ずして漸次に發達せし也。初めパリサイの人々は耶蘇及び其弟子と交り、彼等を招きて食事を共にしたることまゝありたりき(路七の廿六以下)。彼等は敢て預言者の起り得べきことを疑はず、故に屢々耶蘇の果して神より來れる者なりや否やを知らんと試みたりき(約一の十九以下、太十二の廿八以下、十六の一以下等)。然るに間もなく耶蘇の教訓及び其生活の方法、大に彼等の教訓及び生活の方法と異れりとの事明となるに及び、遂に彼等の猜疑と反對とを受くるに至れり。即ち斷食の如き事に關し耶蘇と其弟子との行ふ處、彼等の行ふ處と大に異れり(可二の十八、太六の十六等)。耶蘇は彼等の顧すべからずとして棄斥したりし人々と交りたるのみならず(可二の十五—十七等)最も明に彼等を攻撃せり。此攻撃初めは唯間接に過ぎざりしが(太六の一以下)後漸次直接となり、且頗る酷烈となりたりき。先づ第一に彼等と衝突したりしは安息日問題にして、馬可は之に關する出來事を一括し(二の廿三—三の六)路加(十三の十一—十七)約翰(五の一以下)も亦之に關する事例を示したり。而して耶蘇が彼等が見て以て神の榮譽を汚すと爲したりし事を行ひたりとて、益々彼を攻撃するに至りし也(可二の五—十一)。

(七) 耶蘇の自覺　耶蘇は自己の使命に關し堅き自覺を有し、權威み以て行ひ且語りたりしかども、自己のメッシヤたる事に關しては極めて沈默を守りたりき。惡鬼に遮かれたる人々は初めより耶蘇を知りたりしが、彼は『鬼の言ふ事を許さゞりき』(可一の廿四、三の十二等)。又彼は癩病の癒されたる者にも『愼みて人に何をも告ぐる勿れ』と命じたりき(可一の四十四)。且耶蘇が當時自己を顯はす爲めに用ゐたりしは『人の子』の稱號なりき、此稱號は既にメッシヤ用ゐられたりし言なりしと雖も、尙此謎語に過ぎざりき。彼が斯の如く自己の性格に關し沈默を守りたりし者は抑も故あり。即ち其第一の動機は當時メッシヤに關し國民一般の有したりし觀念極めて物質的、世俗的なりしなり。彼れ若し自らメッシヤ也と告白せば、徒に民衆を動搖せしめ、意外の結果を生ぜんことを恐れたりしこと也(約六の十五)而して彼は又メッシヤの性質と行爲とを以て預言者の預言に添はしめんとしたりしなるべし(賽四十二の一—三、太十二の十九)且彼は自己のメッシヤたることを宣言して、之に依て強て人々を以て之を承認せしむる欲せず、寧ろ彼の教訓と生活とに依りて、自然に彼のメッシヤたることの明なるに至らん事を望みたりしなるべし。加之彼の使命を成就するの道先づ國民の品性と其道德的觀念とを改革するに在り、而して之を爲すの道靜に彼等を教ふるに在り。故に彼は此等の理由に由り、自己の性格に就ては沈默を守り、留々として神の國の教を宣傳したりし也。

【耶蘇傳道の全盛時代】　此時期は紀元廿八年の逾越節に初まり、同年十月の攝廬節に終る。下に記せる諸しき出來事が此六ヶ月間に起りたる事なるは殆ど疑なし。概して云へば此等の出來事はガリラヤに起りたることなれ共、此時期に於ては耶蘇の足跡は廣くガリラヤ傳道の全盛時代

より遠き範圍に渉り、クロ、シドンの境域に及び(可七の廿四)更に轉じて東の方カイザリアピリピの近傍に至り(八の廿七)而してガリラヤ湖東及びデカポリスを經て、カペナウムに歸れり(七の廿一)彼が周の如く遠く巡遊したりしは傳道のため也と云はんよりは、寧ろ中央ガリラヤに於ける人心の激昂を避けんためなりしなるべし(七の廿四、廿六、八の廿、九の九參照)彼が巡遊したりし土地の大部分は、ヘロデアンチパスの所領なりしが、此時よりヘロデの黨はパリサイ人と共謀して、耶蘇を陷れんとしたりき(三の六、八の十五)。アンチパスが耶蘇を嚇したりしは(路十三の廿一)更に後の事なりしなるべしと雖も、ヘロデ黨とパリサイ人が共に耶蘇に對して陰謀を企てたりしは此時期よりの事也。此時期には五のパンと二の魚とを以て五千人に飽かしめたりし事、耶蘇水の上を歩みたりし事及び其變觀等の物語あり。此等の物語は、近人の耳には不可思議に聞ゆる事なれ共、耶蘇の使命は直接に第廿世紀の人々に與へられたる者なるを記憶せば、此等の奇跡なる者も第廿世紀に於る觀察家の立場より觀察すべき者に非ざるを知るべし。此時期に起れる出來事は太十四の一—十八の廿五、可六の十四—九の五十、路九の七—五十、約六に記さる。

(一) 民衆の耶蘇に對する熱心及び失望　ガリラヤの民衆が耶蘇に對して有したる熱心の極點に達したりしは寧も紀元廿八年の逾越節以前に在りき。彼等が彼に對して此の如き熱心を有するに至りしは、彼が僅少なる食物を以て五千人に飽かしめたりし結果なりき。時寧も逾越節に際し、ガリラヤの市邑より エルサレムに赴かんとして集る者甚だ多かりしが、此等の群集の中にはヒロデ人及び熱心に以色列の救

を望みたりし者少からざりしなるべし。耶蘇は彼等の牧者なき羊の如き者なるに由りて之を憫み、多くの事を教へ、且五のパンと二の魚とを以て五千人に供したりき(可六の廿—四十六。八の一—九にも四千人を養ひたりとの記事あり。此物語は同一事の異錄なるべしとの說近時多くの學者の取る處也)。此奇跡は深く民衆を感動せしめ、遂に耶蘇を以て彼等の曾て より待ち望みたりし救濟者也となし、彼を仰で其首領となるんと企てたりしかば、耶蘇は之を避けて山に入りたり。翌日耶蘇はカペナウムの會堂にて彼等に逢ひ、彼等の『此は甚しき言也、誰か能くこれを聽かんや』と云ひしが如き、神秘的教義を說きしかば、耶蘇を以てメッシヤなるべしと思惟し、多大の望を其上に置きたりし民衆も、耶蘇の言行の彼等の理想と相反せる者あるを見、大に失望して背き去るに至れり(約六の十二—六十六)。而して耶蘇は是より此の如き事の再び起らざるやう努めて自ら縮晦せり(可七の廿四、廿六、九の九)。

(二) パリサイ人との關係の切迫　耶蘇とパリサイ人との關係は、此時期に至りて益々切迫し來り、耶蘇は公然パリサイの徒が人の傳說を守り、却て神の誡を棄て不道德を行ふを攻撃し(可七の一—十九)彼等が天よりの休徵を求めたるを詰き(八の十一、十二)弟子等を戒めて『戒心してパリサイの人の酒酵を愼めよ』と云ひ(八の十四)斯くして兩者の交情は全く破裂するに至れり。

(三) 十二使徒の信仰、彼得の告白　一たび極點に達したりし民衆の信仰が、耶蘇の神秘的言詞に依りて氣抵を來したりしに抑はらず、十二使徒は益々耶蘇の心に入りて其眞相を理解し、深く彼を信ずるに至れり。而して彼等の信仰は彼得が彼等を代表して其信仰を告白し、『汝はキリスト生ける神の子也』と云ふに至りて其頂點に達せり(太十六の十三—廿)耶蘇は此告白を認許し、之を以て天より直接の靈感を得たりしに歸せり。吾人は素より彼得が其述べたる言詞の意義を悉く自ら領解し得たりと假定すべからず。否、彼は實に如何なるメッシヤを告白したりしや自ら知らざりし也。然れ共彼が耶蘇の教訓及び行爲の頗る領解し難き者ありしに拘はらず、尙之を信ぜんとしたりし信念に至りては之を多とせざるべからず。

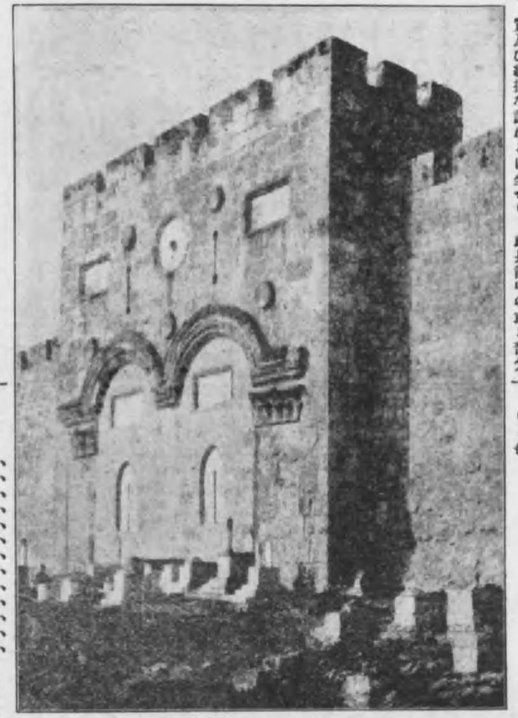
(四) 耶蘇傳道の頂點　通常の觀察家は彼得の此告白を以て、單に暗中の微光に過ぎずと思惟すべからん。ガリラヤ傳道の過去は實に民衆の盲目、頑梗、不信を示すに過ぎざるが如き觀なきに非ず(約十三の廿七—四十)。耶蘇自らも亦其多くの異能を行ひたりし諸邑の悔改めざるを見て『嗚呼禍なる哉』を宣言せり(太十一の廿—廿四)然れ共之と共に此時期の傳道を以て成功と認めたる二個の言詞の記錄せられたるを看過すべからず。其一は即ち路十の十八にして、耶蘇は弟子の惡鬼を逐出したりしことを聞て『我れ電の如くサタンの天より墮つるを見し』と云へり。又彼は此頃神に謝して『天地の主なる父よ、此事を智者達者に隱して赤子に顯はし給ふを謝す、父よ然り此の如きは聖旨に適へる也』と云へり(太十一の廿五、廿六)。此二句を見れば假令一方に於て頑梗、不信にして耶蘇を受けず、又彼に反對したりしものありしに拘はらず、彼の傳道は決して結果なき者に非ず、其最も深き意義に於ける成功なりしことを知るべし。

(五) 變觀　然れ共耶蘇の傳道は此時既に頂點に達し、是れよりは唯下向の一途あるのみ。故に耶蘇は此時より『人の子の必ず多くの苦難を受けい長老祭司の長學者どもに棄てられ、且殺されて三日の後に甦ることを示し始めたり』弟子等は最認彼等の預期に反せし者あるを見ても、尙一讖の望を繼ぎ、遂に靈眼前彼得を通して、耶蘇のメッシヤたるべき信仰を表白したりしに、メッシヤ死ぜざるべからずと云ふを聞くに至ては大に震駭せざるを得ず。於是彼得は再び弟子等の思想を代表し、耶蘇を援きて諫めんとせしに、耶蘇は嚴に之を叱責し、且彼等に告ぐるに死の必然なると共に其後に復活の來るべきことを以てし、又彼等に克己獻身の道を歩むべきを勸めたり(可八の廿一—廿八)然れ共此旅程が弟子等に取りて困難なりしが如く、又耶蘇に取りても容易なる者に非ざりしに、是より數日後耶蘇と其殊に親しき三人の弟子とが經驗せし所を以て察し得べきに似たり。耶蘇は此三人を携へて新の爲め山に上りしが、其祈れる間に天の光耶蘇の面に輝き、彼が舊約の律法と預言者との代表者たるモーセ及びエリヤと語るを見たり(可九の二—四)其語れる處の何事なりしやは、馬可、馬太共に之を云はずと雖も、路加に依れば、耶蘇のエルサレムにてもはや世を逝らんとする事なりしといふ(九の廿一)此の光景の將さに終らんとするや、天より聲あり、今既に律法と預言者に代れる耶蘇に聞くべしと云へり。此變觀の結果如何は吾人唯之を推測するに過ぎざれ共、思ふに耶蘇は之に依りて其經事に當らんとするの決心を堅くせしなるべく、又弟子等の信仰も之に依りて更に堅かゝらしたりしなるべし。

【耶蘇傳道最後の時期】　此時期は紀元廿八年の攝廬節に初まり、廿九年の逾越節に至る。此時期に起りたる出來事を地理的に分配せん事は頗る困難なれ

共、第四福音書に據れば稍や明了なる界線を作ること能ふべし。即ち約翰傳七の一—十の廿一に記載せる出來事に一部分馬太傳の起れる者にして、一部分は祭節後間もなく起れる者也とす。又約翰傳十の廿二以下は明に修殿節の時エルサレムに起れる出來事也と記さる。是れ思ふに十二月の終の事なるべし。其後耶蘇はヨルダンを渡り、ヨハネのバプテスマを施したる所に往きて久しく此處に留まれり(十の四十)而して彼は此處よりラザロを蘇らせんがためにベタニヤに往けり。後彼は又エルサレムの東北に當れる野に近きエフライムに退き、猶太人が過越節に與らんとてエルサレムに集ひ來りし時迄此處に留まれり(十一の五十五)斯の如く約翰傳は馬太傳の時及び恐らくは十月の終りまで耶蘇がエルサレムに於て爲したる事を記し、又修殿節より過越節に至るまで耶蘇がユダヤ及びペリアに於て爲したる事を記したれ共、十月の終より修殿節に至る凡そ七八週間の事に關しては何事をも記さず。此間彼は再びガリラヤに歸り其處にて傳道したりしや、吾人素より之を知るに由なしと雖も、ガリラヤ傳道は實際に於て既に此以前終結したることなれば、彼が再びガリラヤに歸りたりしとは思惟し難し。思ふに彼はエルサレム及び其近傍に此制の時日を費したりしなるべし。此時期の事に關しては太十九の一—廿の廿四、可十、路九の五十一—十九の廿八、約七の一—十一の五十七を見るべし。

(一) 所謂ペリア傳道　所謂ペリア傳道なる者の詳細は、路九の五十一—十八の十四に渉る長節に記載せられたりとする事從來の慣例なりき。是れ此記事が最終のガリラヤ退去より説き起し、而して其末に至りて馬可(十の一)馬太(十九の一)兩傳の記事と相一致するを以て也。耶蘇が最後の過越節以前或時をペリアに費したりしは、四福音書の記事が此點に於て一致するに依りて明也。然れ共路加傳の此全節を以て悉くペリアに起れる事也とするほ、路加傳の性質及び結構を誤れるに生ぜり。此長節中の或る部分は、パリサイ人に對する激烈なる攻擊及び終末に關する譬話の如きは實際終期に屬する者ならざるべからず。要するに路加は此等の記事の明確なる場所を發見し得ざりしが故に、之を悉く此長節中に收めたりし也。



エルサレムの門

はガリラヤ傳道前期中の事に屬す。例之耶蘇がパリサイ人の生活の皮相的、儀禮的なるを詰りたりしが(十一の廿七、可三の廿二以下及び太十二の廿二以下參照)十五章に記せる三節の喩話の如き是也。又十三の廿二—廿及び十七の廿—十八の八に記せる、パリサイ人に對する激烈なる攻擊及び終末に關する譬話の如きは實際終期に屬する者ならざるべからず。要するに路加は此等の記事の明確なる場所を發見し得ざりしが故に、之を悉く此長節中に收めたりし也。

(二) 此時期に於る耶蘇教訓の特質　此時期に於る耶蘇の教訓は共觀福音書中に記載せられざるに非ずと雖も、可十の一—四十五を除きては、何れが此時期に屬するものなりや確定し難し。故に吾人は此時期の教訓に關しては其大部分を第四福音書に仰がざ

るを得ず。吾人は此時期に至りて耶蘇の教訓が新なる性質を帶び來れるを見る。即ち從來主として神の國の性質に關したりし者が、此時より王の性格に重を置くに至りしを見る。吾人は共觀福音書に於ても耶蘇が『父は我に萬物を與へ給へり、父の外に子を識る者なく、又子及び子の願ほす所の者の外に父を識る者なし』(太十一の廿七)と云ひて、自己と天父との特異の關係を述べたりしを見る。而して約翰傳に依れば今や耶蘇は最も明に自己の人類救主なることを說きて、『我は生命のパン也』(六)『人もし渴かば我に來りて飲め』(七の廿七以下)『我は世の光也』(八の十二)、九の五)『我は善き牧者也』(十の十一)『我は復生也、生命也』(十一の廿五)と云へり。彼は此の如く此時期に至りて自己の性格に最も重を置くに至れり。

(三) 死及び復活の預言　既に記したるが如く、耶蘇は彼得告白の時より、其使命は死に終るべく、然れ共後遂に復活すべき事を預言し(可八の廿一)變貌の事ありて後も同樣の事を語りき(九の廿一)たりしが、此時期の終に至りて彼は又同一の事を預言ぜり(十の廿二—廿四)彼も耶蘇が此の如き預言を爲すに至りしもの、實に彼が時利あらずして此の如き運命に遭遇すべきを前見したればなり。今やヘロデアンチパス及び其黨は彼に對して益々反意を示し、パリサイ人の敵意亦益々激烈となり、此時期に入りて彼の生命を求めんとしたること二回に及べり(約八の五十九、十の廿九)。且彼は迫害を受くるは預言者の運命なるを知り(太五の十二、廿三の廿四、廿七)ヨハネの殺されたるを見て益々自己も同一の運命に逢ふべき者なることを期ぜり(太十九の十二以下)加之彼は古の預言に依りてメッシヤの苦難に逢ふべきことを學び、其前途に横はる死も亦偶然に非ざるを知り、凡て此等の苦難を受くるは預言を成就せしむる所以也と信じたりしのみならず(太廿六の五十四)又彼の勝利は唯忍耐、無抵抗及び死に依りてのみ得らるべく、此の如くして勝利を得るこそ神の聖意なる全ふする所以也と確信したりき。是れ彼が直前男往其運命の道に進みたりし所以也。然らば即ち耶蘇が其死に附したりし意義如何。彼が『人の子の來るも人に役ふ爲めに非ず、却て人に役はれ且多くの人に代り、其命を與へて贖とならんため也』(可十の四十五)と云ひしは此時期の終にして、彼は其死を以て人類に對する勞役也となしたり。然れ共彼が『多くの人に代り、其命を與へて贖とならんため也』と云ふと云ふと同一の意義なりや。此語のみにては吾人は彼の死が『期』なる解釋を之に與ふること能はずと雖も、耶蘇が此時期の終に至りて彼は又同一の事を語りき(九の廿一)たりしが、此時期の終に至りて彼は又同一の事を預言ぜり(十の廿二—廿四)彼も耶蘇が此の如き預言を爲すに至りしもの、實に彼が時利あらずして此の如き運命に遭遇すべきを前見したればなり。今やヘロデアンチパス及び其黨は彼に對して益々反意を示し、パリサイ人の敵意亦益々激烈となり、此時期に入りて彼の生命を求めんとしたること二回に及べり(約八の五十九、十の廿九)。且彼は迫害を受くるは預言者の運命なるを知り(太五の十二、廿三の廿四、廿七)ヨハネの殺されたるを見て益々自己も同一の運命に逢ふべき者なることを期ぜり(太十九の十二以下)加之彼は古の預言に依りてメッシヤの苦難に逢ふべきことを學び、其前途に横はる死も亦偶然に非ざるを知り、凡て此等の苦難を受くるは預言を成就せしむる所以也と信じたりしのみならず(太廿六の五十四)又彼の勝利は唯忍耐、無抵抗及び死に依りてのみ得らるべく、此の如くして勝利を得るこそ神の聖意なる全ふする所以也と確信したりき。是れ彼が直前男往其運命の道に進みたりし所以也。然らば即ち耶蘇が其死に附したりし意義如何。彼が『人の子の來るも人に役ふ爲めに非ず、却て人に役はれ且多くの人に代り、其命を與へて贖とならんため也』(可十の四十五)と云ひしは此時期の終にして、彼は其死を以て人類に對する勞役也となしたり。然れ共彼が『多くの人に代り、其命を與へて贖とならんため也』と云ふと云ふと同一の意義なりや。此語のみにては吾人は彼の死が『期』なる解釋を之に與ふること能はずと雖も、耶蘇が『期』なる故さんため『の犧牲なりしと解釋するこことは誤りたること、ここに非ず(太廿六の廿八)然れ共神の義を彰にさんための祭物也との思想は耶蘇に於て發見するを得ず。

【苦難】　主としてエルサレムに起りたる事にして紀元廿九年の過越節六日前に初まる。メッシヤ的入京、最後の對論、苦難、及び死を含む。此等の事は太廿一の一—廿九の廿、可十一の一—十六の八、路十九の廿九—廿四の五十二、約十二の一—廿一の廿三に記さる。

(一) 耶蘇の敵及び其行動　危機に漸く迫り來りて、耶蘇は遂に猶太人の手に捕へられ、十字架刑に處せられたり。彼なりして此の如き運命に逢はしめたりし彼の敵の行動及び其動機如何。(イ) 民衆　民衆は曾て耶蘇がガリラヤに於て五千人を養ひたりし時願はせるが如き熱心を再び顯はして耶蘇を迎へ、耶蘇は民衆凱歌の中にエルサレムに入りたり。此等の民衆は如何なる人々なりしや、又如何にして耶蘇に對し斯る熱心を起したりしや明ならざれ共、思ふに彼等の一部分は嘗時前耶蘇がヨルダン河の東岸及びエルサレムに於て爲したる數々を聞き、殊にラザロ復活の奇跡を聞きて深く之に感動したりし者なるべし。又他の一部分はガリラヤより來りたる參詣者にして、曾て耶蘇の教を聞きたりし人々なるべし。此等の人々は彼等の歡迎しつゝある耶蘇の性格に就て眞正の意義を暫りたりしに非ず、彼等の考は依然として變る處なく、物質的救拯を求むるに過ぎざりき。耶蘇は素より之を知らざるに非ざりしと雖も、ガリラヤに於てもユダヤに於ても此上最早傳道するの餘地なく、彼が苦難を受けて其使命を全ふすべき時機到來せるを知りしかば、群民エルサレムを出でゝ彼を歡迎するに會するや、自ら進でメッシヤ的世表の態となれり。然れ共彼既にエルサレムに入るや、彼は彼等の熱心に對して何事をも爲すことなく、唯神殿に於て彼等が尊敬せる猶太の宗教家を詰語したりしのみ。素より羅馬人に對して反旗を擧ぐべしと云へる如き煽動的言語を費せざりき。於是民衆の彼に對する熱心は去り、彼等の失望はやがて變じて憎惡となるに至れり。『十字架に釘けよ、十字架に釘けよ』と呼びたる群集の中には、思ふにセロテ人も交りたりしならん。彼等が耶蘇を棄てゝバラバを取りたるは、彼等に在りては彼等を欺きたる夢想家を棄て、國家の爲めには劍を執りて立たんとしたりし忠眞の人を取りたる也。又何ぞ彼等の變心を怪まんや。(ロ) イスカリオテのユダ　ユダも或は此の如き感情を有したりしならん。使徒の目錄を見れば彼は常

にゼロテ人の次に其名を記されたり。彼に長き間耶蘇の教育を受けたれ共、遂にメッシヤに關する物質的觀念を改むること能はず、耶蘇の其希望に反したるを見て、他の民衆と同じく大に失望したりしやも知るべからず。或は耶蘇をしてメッシヤ的實力を顯はさしめ、反對者の手を脫して希望の王國を設立し、之に依りて彼等を狼狽せしめんとの希望より斯の如きことをなしたるならんと想像する者あり。吾人は素より之に關する充分の証據を有せず。約翰傳に依れば、彼は金囊をもち其中に入りたる者を奪ふ者也とあり（十二の六）。然れ共若しユダにして此の如く下劣の者にして、他に全く取るべき所無りしとせば、耶蘇が之を十二使徒の一人として選びたりし理由を解すべからず。故に吾人は彼の耶蘇を賣りたる動機を以て耶に食薬に在りとなすよりも、寧ろ物質的精神と誤りたる愛國心との結合せる結果也となすを以て事實に近からるべしと思惟する也。（ハ）パリサイ人　此時耶蘇とパリサイ人とは公然たる戰鬪的狀態に在りき。彼等は『如何にしてか彼を言ひ誤らせんと相謀りり』（太廿二の十五）先づヨハネのバプテスマに關する質問をなし（可十一の廿九―廿三）次に貢租問題を以て耶蘇を陷れんとしたりしが（十二の十三―十七）耶蘇は最も巧妙なる答を以て彼等を沈默せしめたりき。素よりパリサイ人と學者とは悉く耶蘇の敵なりしと思惟すべからず。彼等の中には ニコデモ及びアリマタヤのヨセフの如きものあり、又彼等と同心の人々も少からざりしことならん。（ニ）サドカイ人　パリサイ人よりも猛烈なる反對なぬ耶蘇に試みたりしはサドカイ人なりき。彼等は唯に七たび娶せる婦人の復活の時に於ける關係如何の問題を携へ來りて耶蘇を苦めんとしたりしのみならず（可十二の十八―廿七）集議院の中に在りて耶蘇に對し公然たる處置を取らんとせり。祭司の長カヤパ及び其義父アンナスは彼等の中に在りて最も有力に耶蘇に反對したりし者なりき。而してパリサイ人の耶蘇が彼等の權威と傳說とを拒否したるが故に彼に反對したりしに反し、彼等は羅馬人が耶蘇の事に依りて來り攻めんとを恐れて、先づ彼を殺さんと謀りし也（約十一の四十八）。（ホ）ヒロト　集議院は耶蘇を死刑に當る者也と判決したれ共、死刑を執行するの權は羅馬政府の手中に在りて彼等之を如何ともなすこと能はざりしかば（約十八の廿一）耶蘇は處刑のため羅馬の大守ピラトの前に曳かれ行きたり。集議院が耶蘇を死刑に處したりし動機は、彼に對する嫉妬に外ならざりしと雖も、彼等は訴の理由を發見せんとして得ず。僅に耶蘇の言を捕へて神を瀆したる者也となし、死刑の宣告を與へたれ共（可十四の五以下）此の如き理由は未だ以て羅馬の太守に訴ふるに足らざりしを以て、彼等は之を變化し『我儕此人が民を惑はし稅をカイザルに納むることを禁じ自ら菁注がれたる王也と稱ふるを見たり』との訴を爲せり（路廿三の二）然るに固執なる問題數箇あり。今簡短に之を說くべし。（イ）馬可傳はベタニヤの晩餐を以て逾越節の二日前に在りとなし（十四の一）約翰傳は六日前に在りと爲せり（十二の一）。此矛盾を解說するの道二あり。一は馬可傳十四の一を以て單に祭司の長、學者等謀計を以て耶蘇を執へ殺さんとしたりし事のみを指せりとなす事にして、他は約翰傳十二の一を以て單に耶蘇がベタニヤに到着せる時日を云へりとなす事也。此解說何れにても矛盾を說明し得べしと雖も、之を確證し難し。斯る事に就ては馬可傳は必ずしも遵據し難しとの理由を以て、約翰傳を正しとなす者あれ共、吾人は暫く疑を存す。（ロ）通常逾越節は金曜日の事にして、最後の晩餐は木曜日の夕に在りし事也となせ共、又逾越節を以て木曜日となし晩餐を以て水曜日となす者あり。此は馬太傳十二の四十に『人の子も三日三夜地の中に在るべし』とあるに重な置き、又同傳廿七の六十二に『預備日の翌日』とあるより、逾越節の預備日と安息日の預備日とを混同せるより起れる者也。然れ共『預備日』とは安息日の預備日を指すと通常の意義にして、馬太十二の四十は福音書記者の言語なれば直き證據となすこと能はず。（ハ）馬可傳十五の廿五に依れば、耶蘇の十字架に釘けられたるは『第三時』（午前九時）なれ共、約翰傳十九の十四に依れば、耶蘇の審問は『第六時』（正午）に至るも尚終らざりしが如し。此矛盾を解說せんため約翰は通常よりも異りたる方法に依りて時を計りたるなるべしと唱ふる者あれ共、通常より異りたる方法とは如何なる方法なりや之を証明し得る者なし。又是れ恐らくは約翰傳の寫本に誤謬ありたるより起りたる者ならんと唱ふる者あれ共、果して然りや否は又訂定し難し。博士ラムセーは古

書の曆算的計時法に依り、馬可は審問の終りたる大體の時を記し、約翰は十字架に釘けられたる大體の時を傳へたる者なるべしと唱へたれ共、是又想像說に過ぎず。（ニ）耶蘇が磔刑に處せられたる日及び最後の晩餐と逾越節の食との關係に就き、共觀福音書と約翰傳の記する處と又調和し難き者あり。共觀福音書は最後の晩餐を逾越節の食とを同一視し、明に『除酵節の首の日即ち逾越の羔を殺すべき日』弟子等何處に逾越の食を備ふべきかと問へりと記せり（可十四の十二）。是れ即ち猶太曆ニサンの月十四日の朝の事なるべし。猶太にては日沒以後を以て翌日に算入すれば、最後の晩餐を食したる夕は十五日也。而して耶蘇は翌日の午後十字架に釘けられたれ共、猶太曆に依れば是又十五日の事也。然るに約翰傳に依れば、最後の晩餐のありたるは通常の逾越節を食する前にして、耶蘇の十字架に釘けられたるは、ニサン十四日の午後逾越の羔の殺さるゝ頃なりしが如し（十三の一、十八の廿八、十九の十四、廿一）此二者何れを以て正しとなすべきや。有名なる猶太の古物學者グロトルツン博士は、古來今日に至る迄猶太人は『除酵節の首の日』を以て十五日也と領解せり、故に馬可傳が『除酵節の首の日即ち逾越の羔を殺すべき日』といふは矛盾の言也と云ひたれ共、獨逸のシューレル博士は又此事實を否みたれば、何れが是なるや容易に斷言し難し。サンデー博士は共觀福音書に依れば集議院は兼て耶蘇を節日に捕ふ可らずと云ひ乍ら、實際此日に之を捕へ、又節日に劍を携ふるは禁制なるに、兵卒のみならず其弟子の一人も之を携へ（可十四の四十七）又節日に審問をなすは違法なるに之をなせり等の事實を擧げて其矛盾あるを示したれ共、逾越の食と最後の晩餐とを同一視する一事に至ては共觀福音書記者眞實を語れるが如く見ゆる者あれば、何等か吾人の知らざる事情ありて、二者を調和するの道あるべしと云へり。要するに二者の是非に就ては學者の議論未だ一定するに至らず。（三）最後の晩餐　最後の晩餐の時日及び耶蘇磔刑の時日の如何なりしに拘はらず、耶蘇が弟子等と共に食せし最後の晩餐は此小團體のための逾越の晩餐なりし事疑なし。耶蘇は其弟子に向ひて『此逾越を食する事を大に願へり』と云へり（路廿二の十五）今や其終焉切迫し來りたれば、其上に捧ぐべきかれる苦き

ゲッセマネの園

（四）ゲッセマネ及びカルバリー　耶蘇は最後の晩餐を終り無限の悲哀を其心に湧へつゝ、ケデロンを渉り、ゲッセマネの園に入りたり。第四福音書はゲッセマネの苦痛を說かず、唯其勝利を報じたるのみなれ共、共觀福音書は何れも詳に之を叙述せり。耶

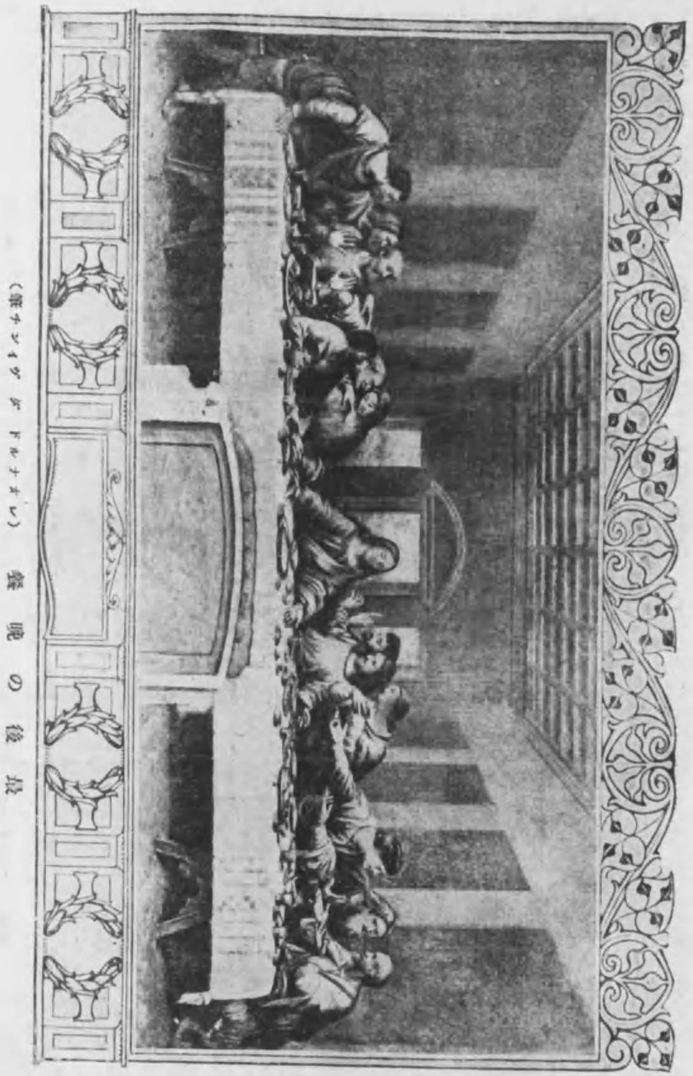
蘇は『アバ父よ爾に於ては凡ての事能はざるなし、此杯を我より取り給へ』(可十四の卅六)と云ひて其靈魂の深き熱望を言ひ顯はしたれ共、彼が父の聖旨を爲さんとの志望は遂に是よりも強く、彼は又『されど我思ふ所を爲さんとするに非ず、爾が思ふ所に非ず。然れ共使徒時代の人心に存したるは十字架の苦痛に非ずして、其恥辱、汚名なりしは注目すべき事也。是れ十字架は羅馬人に取りては奴隷の死にして、猶太人に取りては神の呪詛を受けし証據なりしを以て也。申廿一の廿三彼れ既に十字架にかゝりり、任せ給へ』と云ひて從順の意を表し、十字架を忍ぶの決心をなしたり。故に彼は是より愈極めて沈着にして其審判中にも、處刑中にも極めて泰然自若の態度を有したりき。十字架の殘酷、苦痛は多くの學者の記述したる處なれ共、素より筆紙の盡き得べき處

ヒラトの家及びアントニアの塔

罪人と同視せられ檀々の惡辛嘲笑を蒙り、悲痛の極點に達せし時は、ゲッセマネの暗雲再び彼の靈魂を掩ひ『吾神吾神何ぞ我を棄て給ふや』と呼びたりき。然れ共暗雲は又忽ち一過し去りて、彼は『父よ我靈を爾の手に託く』(路廿三の四十六)と云ひて絶息せり。此時弟子等は恐怖の餘り匿れ居たりしが、數人の忠實なる婦人と、アリマタヤのヨセフ及びニコデモは彷徨者中に在り。ヨセフは耶蘇の死を知りし後其遺骸をピラトより申受け、ニコデモと共に之を十字架より取り卸し、ヨセフの所有せる墓地へ之を葬りたり。耶蘇の最後を目擊せし婦人等は彼等の耶蘇を葬りし場所を見屆け、死體に香を餘るべき準備を爲し、律法に從ひて安息日を守れり。

【復活】 十字架と墓とは弟子等の有したりし凡ての希望を摧破し去りて、悉く復等を絶望せしめたりしに、此時突如として弟子等の心を破りたる光現れ出でたり。是れ即ち耶蘇死して後第三日に蘇りたりとの事是也。耶蘇復活の事は福音書之を記し、諸他の新約記者悉く之を傳へたり。

(一) 復活の記事 復活に關する馬可傳の記事は完備を缺けり。何となれば現今の馬可傳の最終十二節(十六の九)は最古の寫本になく、何等かの事故に依り固有の結末節失せるがため第二世紀の初め長老アリスタオン之を附加せるを以て也。而して現存せる部分(十六の一—八)には唯婦人等一週の初の日に耶蘇の墳墓に香を餘らんとて來り、其墓の開けて空しかりしことを發見したる事と、天使現はれて主の復活を弟子等に報ぜよと命じたりし事とを記するのみ。馬太路加の兩傳は馬可の斷絶點迄は同樣の証明をなし來り、それより互に別針路に進めり。即ち馬太傳は馬可傳の記錄以外に婦人等が弟子等に報知のため往かんとする途上にて耶蘇の現はれたる事、ガリラヤ山上に於る弟子等との會見及び彼等に對する最終の遺言を記し、路加傳は此外に尙エマオに至る途上二人への出現、シモンへの出現及びエルサレムの十一人への出現を記せり。約翰傳は共觀福音書に漏ら



ガドルナチ(ナポレオン) 聖墓の後故

十字架より下さる〻基督

（ルーベンス畫　アントワープ大會堂藏）

す、全く獨立に記ぜり。即ち早朝の墓塋の記事にマグダラのマリアのみを記し、又被得さ約翰の墓に至りしことゝ、耶蘇のマグダラのマリアに出現したること、夜中に十人の弟子へ出現したること、それより一週後に十人とトマスに出現したることを記せり。別して附錄(第廿一章)には七人の弟子ガリラヤ湖に漁せし時出現したることを報ぜり。然れ共福音書よりも古きは保羅の証明也。彼の記する處に依れば部合六回の出現あり、即ち第三日に於けるケパへの出現、十二人への出現、五百の兄弟への出現、雅各への出現、凡ての使徒への出現及び保羅自己への出現也(哥前十五の四―八)此中保羅の記錄にのみ存するは雅各への出現及び五百の兄弟への出現なれ共、後者は恐らく馬太傳(廿八の十六―廿)に見ゆる者と同一ならん。彼が此等の出現の時日を擧げず單に目次的に之を列記したるは、當時一般の人の熟知せる事實なるがためなりしなるべし。基督實に甦れりとの事は、復活の時より弟子等の中に起りたる確信にして、長き間漸次に生長したる物語には非ず。此事が早くより一般に信ぜられたる事なるは疑なしと雖も、詳細の點に至りては傳說一ならず、以上既に記せる如く其出現に關する記錄各々異れり。思ふに此の如き所以の者は、異りたる傳說、異りたる地方に傳へられ、而して此等の者が各別に著人に傳へられたりしに依るならん。

(二) 出現の場所　然れ共福音書の記事に依れば、出現の場所に關し大なる相違あるが如し。即ち保羅は別に出現の場所を記さずと雖も、馬可、馬太の兩傳は之を以てガリラヤに在りとなし、約翰傳は其附錄を除くの外ガリラヤに於る出現を記さず、之を以て全くエルサレムに在りとなし(第廿章)路加傳も亦エルサレム及び其近傍に於る出現のみを記し、且附するに聖靈を受くる迄はエルサレムに留まれ』との命令を以てせり(廿四の四十九)此の如き相違は抑も如何にして解說すべきや。近時の批評家の中には馬可、馬太兩傳の傳ふる所を以て正しとなす者少からず。然れ共又路加、約翰兩傳の記事を以て寧ろ信據すべき者也と論ずる者あり。此兩說各々相當の理由を附するを得べしと雖も、要するに均しく思辨的なるを免れず。於是又双方の傳說を結合し、之を一個の全圖に組立てんとする者あり。此說の困難は路加傳廿四の四十九を說明すること能はざると、耶蘇も亦死せじと確信し、遂に耶蘇を見たりとの幻想を生ずるに至りし也と。カイムは其鋭利なる批評眼を以て幻象說の困難を指摘し、此困難を免るゝため聖書の記事を作話として否定し、之と共に使徒等が復活の信仰は奇跡に根據する事を認めたり。彼れ謂へらく、使徒等の信仰は堅固にして且永續的なれば、彼等實際主を見しに非ざれば之を解釋すべからず、去ればとて彼等は肉眼を以て之を見たるに非ず、精神的視力を以て之を見たる也。然れ共是れ單に主觀的には非ず、主は己を弟子等に顯はさんとて、精神界に於て幾多の幻象を起せり。此幻象は即ち客觀的にして、主は此幻象に依り己の死に勝ちたるを、尚生けること及び神の右に擧げられたるを證明せる也と。此解說の困難は空しき墓の傳說を作話と見做すに在り。然れ共復活を以て眞實の意義に於て肉體的となすも亦大なる困難あり。『主實に甦れり』とは聖書の記事なれ共、其如何にして復活せりやは福音書別に之を說かざれば、著人は素より之を斷言し得ず。ウエストコットは著人の驚愕なる信仰は『空しき墓』に非ずして『主實に甦れり』に在りと云へり、

の著人なれば、墓の空しきを見て直ちに無我夢中となり、驚くて彼は其幻想を他に傳へしが、一種の神經的傳染病となりて他の人々も亦同一の幻想を思ひ浮べ、遂に著人の福音書に見るが如き記事となりたる也と。ストラウス及びフライデレルは稍や之に異り、謂へらく、弟子等は耶蘇の死せるを見て倉皇エルサレムを去りガリラヤに往き、其山水に接するに至り初めて其激動せる精神常に復するを得たり、即ち彼等は曾てガリラヤにて耶蘇と共に在りしこと拯を思ひ浮べ欣慕の餘り、やがて主は死する筈なし、主は死せじと確信し、遂に耶蘇を見たりとの幻想を生ずるに至りし也と。カイムは其鋭利なる批評眼を以て幻象說の困難を指摘し、此困難を免るゝため聖書の記事を作話として否定し、之と共に使徒等が復活の信仰は奇跡に根據する事を認めたり。彼れ謂へらく、使徒等の信仰は堅固にして且永續的なれば、彼等實際主を見しに非ざれば之を解釋すべからず、去ればとて彼等は肉眼を以て之を見たるに非ず、精神的視力を以て之を見たる也。然れ共是れ單に主觀的には非ず、主は己を弟子等に顯はさんとて、精神界に於て幾多の幻象を起せり。此幻象は即ち客觀的にして、主は此幻象に依り己の死に勝ちたるを、尚生けること及び神の右に擧げられたるを證明せる也と。此解說の困難は空しき墓の傳說を作話と見做すに在り。然れ共復活を以て眞實の意義に於て肉體的となすも亦大なる困難あり。『主實に甦れり』とは聖書の記事なれ共、其如何にして復活せりやは福音書別に之を說かざれば、著人は素より之を斷言し得ず。ウエストコットは著人の驚愕なる信仰は『空しき墓』に非ずして『主實に甦れり』に在りと云へり、

從ふべきに似たり。

【昇天】 新約聖書の記者は皆復活せる基督の父に昇れることを肯定す。主今神の右に在りといふは使徒行傳も黙示錄も皆之を記載せり。然れ共福音書の正しき本文には一も昇天の事を記さず（路廿四の五十一には『天に擧げられたり』とあれ共、此一句最古の寫本には之れなし）尤も路加傳には明に此含蓄あり。又約翰傳には耶蘇其父に昇らんとする事を告げよとマリアに語れりと記せり（廿の十七）路加は使徒行傳（一の一―十一）に於て、耶蘇と弟子との最後の會見を詳記し、彼等の目前にて耶蘇の昇天せることを記載せり。但し彼が雲中に隱れたりと云ふは、譬喩的言語にして、弟子等は耶蘇復活四十日間應々耶蘇の出現を見しが、其出現此時に至り最後となりたるなりとの意也。（福音書以後の基督觀に就ては『基督論』『贖罪』等の條を見よ）。

【參考書】 理想的耶蘇傳を書かんことは不可能のことなれ共、此主意に關する文獻は頗る多し。近代の著書中有名なるはストラウスの『耶蘇傳』（二卷、一八三五出版）ニャンデルの『耶蘇基督傳』（一八三七）レナンの『耶蘇傳』（一八六三）シーレーの『エクス、ホモ』（一八六六）ガイムの『ナザレの耶蘇の歷史』（一八六七―七二）ヴァイスの『耶蘇傳』（一八八九第三版）ボイシラッヂの『耶蘇傳』（一八九三第三版）ゲーキーの『耶蘇傳』（一八七七）ファーラルの『基督傳』（一八七五）ストーカルの『耶蘇傳』（一八八〇）エデルシャイムの『メッシヤ耶蘇の傳及び時代』（一八八三）アンドリウスの『我等の主の傳』（一八九二第二版）ギルベルトの『學生耶蘇傳』（一八九六）レヴィルの『耶蘇傳』（一八九七）ジュミッドの『耶蘇傳』（一八九九）アルフレッド、イー、ガルヴィーの『耶蘇內的生活の研究』（一九〇七）ウイリアム、サンデーの『近世研究に於る基督傳』（一九〇七）其外研究に賞すべき著頗る多し。邦文には竹越與三郎の『基督傳記』ニコル著柏井園譯『基督傳』リース著田中逵譯『耶蘇基督傳』ハウスラート著湯本名彈正編『耶蘇基督傳』あり。此條最もサンデーに負ふ處多し。

耶蘇の教訓 The Teaching of Jesus. 【教義】

耶蘇の教訓を叙するに方り、用ゆる處の材料も四福音書に外ならざれ共、共觀福音書と約翰傳との間には頗る相異れる處あるを以て、聖書神學者は之を區別して耶蘇の教訓を論ずるを常とす。是れ最も精確なる方法なれ共、此二者に顯はれたる耶蘇の教訓には決して根本的の相違あるに非ず。其相違は寧ろ其表明の方法と、又共觀福音書に在りては神の國に重き置き、約翰傳に在りては神の[illegible]格に重を置くとに在るのみ。故に爰には四福音書を通じて材料を撰擇し、耶蘇教訓の梗概を叙述すべし。

『耶蘇教訓の特質』 （一）外部の特質 （イ）耶蘇の教訓には形式なし。彼の教訓は時に應じ場合に應じて逐べたる者にして、組織的に思想の系統を立てんと企てたる形跡なし。故に其最も詳細を極めたる處必ずしも眞要なるに非ず、斷片的の言語却て根本的教理を表明するが如き、ここ屬々之れあり。是れ一は耶蘇の教訓を記載せる福音書の性質にも依るべし。彼の教訓は時に應じ場合に形式の末に走り、宗教の生命を失ひしに反し、非組織的、非形式的方法を採用したりしが爲めなるべし。（ロ）耶蘇の教訓は極めて單純、平易にして通俗を旨とす。彼はラビの言若くは註釋書を引ず、又經典不分明の議論を用ゐず。是れ彼は初めより貧者、窮者及び重負へる者を救はんとしたれば也。彼の教訓に於て最も著しきは其多く譬喩を用ゐるに在り。彼は最も自然な愛し、雨、日、花、鳥等に依りて最も高尚なる精神的眞理を說明し、又極めて普通なる日常生活の狀態を假りて神の國の眞理を說明せり。故に彼の說話には國王、農夫、閨丁、漁師を初めとし僧夫、奴僕に至る迄當時國民の生活一般の畫圖中に於るが如く讃美として頌はれ出づるを見るべし。彼の譬喩に二種の別あり。即ち一は實際世界の事實より取りて道德的宗教的原理を說明したる者にして、例之『鹽强なる者は鹽者の助を求めず、唯病ある者之を求む』（可二の十七）『新しき布を舊衣に縫ひつくる者あらじ』（二の廿一）といふが如し。其二は時として實際に起り得べきも、主として想像より出でたる事柄に就き精神的眞理を說明せる者にして、種蒔の喩（四の三）毒麥の喩（太廿一の廿八）放蕩息子の喩（路十五の十一）等は此種類に屬す。譬喩を解說せんとするに當り、其詳細の點に至るまで特別明白の寓意を發見せんとするは誤れり。或る喩話は此の如くして解說せられざるに非ず（種蒔の喩、放蕩息子の喩の如し）と雖も、是れ唯二三に過ぎず。多くの場合に於ては、詳細の點は唯其明にせんとする一の眞理を一層明白ならしめんとして其物語を完結せしめんがために過ぎず。故に譬喩を解說する最も安全なる方法は、一の譬喩に唯一箇の眞理を發見せんとする事にして、之より過ぐる時は牽强附會となるべし。（二）內部の特質 （イ）耶蘇の教訓は直接に政治、經濟等の知き問題に關せず。主として神と人との內部の關係に關する精神的問題也。又彼の宗教は當時の形式的宗教と異り、犧牲なく儀式なく、又祭所、聖日なる者もなれあるなし。彼の宗教に於て最も貴ぶ處は、清き心、神を愛する心、及び之より生ずる

行爲にして、自由なる心より出づるに非ずんば、其道德的生活も價値なしとせり。且彼の宗教に著しきは其極めて樂觀的なるに在り。パプテスマのヨハネ及び當時の宗教家の沈鬱冷酷なるに比すれば、一層其著しきを見るべし。（ロ）耶蘇の教訓は權威を有す。彼は古き權威に反對するを恐れず。彼は古聖賢の言語を以て過謬となさず、直ちに己を以て過謬となせり。彼は議論せず、證明せず、『我れ誠に爾曹に告ぐ』との權威ある言を以て其教訓を宣言せり。彼は何事を言ふにも躊躇せず、又彼の教訓には疑惑を含めるが如きことなし。故に彼に聞ける者『學者の如くなら[illegible]ず、權威を有てる者の如く教へたり』と其教を驚きあへり』（太七の廿七、廿八）。（ハ）耶蘇の教訓は創始的也。是れ必ずしも耶蘇の教訓は前人未言の者なりといふに非ず。彼の教へたる所は唯に舊約聖書既に之を教へたりしのみならず、希臘の哲學者も之を教へ、東洋の聖賢も之を言ひたり。其之を創始的也といふは、耶蘇は其傳へたる教訓を古の聖賢に取らずして、直接に之を神より得たりと云ふに在り。彼は常に天父と一也との確信を抱き、其教訓は創始的也との意識を有したり（太十一の廿七、約七の十六）。神及び世界に關する彼の智識は實に彼れ自らより湧出せり。彼れ自ら實に眞理の化身なりき。是れ即ち耶蘇の他の教師と異なる所也。（ニ）故に耶蘇の教訓は之を其人格と區別す可らず。彼の教訓は其意識の自然の發現に外ならずして、彼れ自ら其教訓の生ける基礎、生ける實積也。故に彼は自己の生ける人格を以て凡ての教訓の中心となせり。吾人の危險に分析時代の常として、或る特殊の教訓に向て細密の注意を向くるも、耶蘇の人格的要素を忘るゝの傾向ある事也。故に吾人に耶蘇の教訓は其人格と區別すべき者に非ざることを常に記憶せざるべからず。

耶蘇教訓の中心的教義とも云ふべき者は、天父の觀念、神の國、メッシヤ及び聖靈の四に分つべし。以下其要領を示すべし。

【天父の觀念】 耶蘇の神に關する教訓は具體的にして抽象的に非ず。彼は神の性質に定義を與ふることなせず、唯神は或る狀態に於て如何に感じ如何に働き給ふやを示せるのみ。彼は此の如くして神に關する冷淡無力なる抽象的觀念を排し、神を以て人心に於ける生ける實際的活力となし、人をして常に神の現在と加護とを切に感ぜしめんとしたり。彼の神に關する觀念は最もよく『父』なる名稱に顯はる。彼が神の國なる思想を傳へたりしに掏はらず、神を呼ぶに父なる名稱を以てし、王なる名稱を用ゐざりしは頗る奇とすべし。蓋より彼は全く王なる觀念を棄てしに非ず。彼はエルサレムを呼びて『大君の首都』と云ひ（太五の廿五）又無慈悲なる僕の喩（十八の廿三以下）及び婚禮の喩（廿二の二以下）を語るに方り、王を以て神に擬したり。然れ共此は稀有の例にして、事實に於ては彼はエホバなる舊約の觀念を棄て、之に代ふるに天父の觀念を以てせり。神を父と稱するは素より新なることに非ず。ヴィダの宗教に在てはヴァルナを父と呼び、ホーメルの詩中に在てはツォイス父として斷禱を捧げられたり。然れ共此兩者に在て父といふは單に造物者の意に過ぎず。舊約に在ても神を父としイスラエルを子と呼びたることなきに非ざれ共（出二の四十二、賽六十三の十六、耶廿一の廿等）此は唯イスラエル人全體を神の子として顧はしたるに過ぎずして、個人的の關係此間に存せず。馬拉基書（二の十）及び亞歷山文學（例之ソロモンの智慧二の十六、十八、十四の三）に至りて此觀念稍發達せしが如しと雖も、要するに神を以て恩慈ある造物主及び保護者となせるに過ぎず。唯詩篇百三の十三の言は、神を以て慈悲深き父也となしたれ共、此觀念は遙に發達するに至らず。耶蘇誕生前後の猶太教は神を以て超絕的にして世より遠く隱れたる者也となしたりき。故に耶蘇は新なる意義に於て天父の觀念を携へ來れりと云ひて可也。而して耶蘇が神を以て父となす所以の者は、神が人類を造り給へりとの訓に非ず、又神が人類の己に服從するを稱讚し給ふ態度をいふにも非ず。寧ろ萬民に對する神の慈愛の態度をいふ也。故に彼れ曾て其弟子に凡ての人を愛し、且己に敵する者さへ愛すべきことを告げて云く『かくするは天に在ます爾曹の父の子とならん爲め也、夫れ天の父は其日を善者にも惡者にも照し、雨を義者にも不義者にも降らせ給へり』と（太五の四十五）放蕩息子の喩話（路十五の十一以下）も亦神は父也との眞理より出でたる者にして、神は唯己に服從する者を愛し給ふのみならず、不從順なる罪人をも尙愛し、常に之を求め給ふことを教ふる也。去れば耶蘇の教訓に從へば神は世界萬民の父なること疑なし。然れ共神は萬人の父なるが故に萬人悉く神の子也と云ふを得べきやと云ふに、之を理想的に論ずれば素より人は皆神の子也と雖も、實際に於ては其惡せる罪惡のために子たる價値を損し、神との關係ふ破れるが故に、之を孝子といふを得ず。換言すれば神は常に慈愛にして變ることなきが故に、常に凡ての人の父たりと雖も、人は既に離惡に依りて其關係を毀損せるが故に、先づ自ら改まりて神の子とならざるべからず。夫れ父子間の倫理的關係は唯子の父に從順なる事に由りてのみ現實せら

れ得べし。故に眞實の意義に於て神の子たり得べき者は獨り神に從順なる者のみ。去れば放蕩息子の喩話に於る放蕩息子が其自然の關係に於ては子たるに拘はらず『父よ我れ天と爾の前に罪を犯したれば爾の子と稱ふるに足らざる者也』といへるが如く、人は罪に依りて子たる特權を失したれば、之を回復せんために悔改めて父に歸り其聖意に服從せざるべからず。是れ耶蘇の教へたる天父の觀念の概略也。

【神の國の觀念】 耶蘇に神の國の觀念を其國民の思想より得たれ共、之に新なる形狀と意義とを附して全く之を變化せり（舊約の神の國の思想に就ては『神の國』の條を見よ）。之を明にするには三箇の觀察點よりするなしとす。即ち左の如し。

（一） 神の國は如何なる狀態の下に何處に於て實現するや。　此神の國の觀念は、猶太國の外國に征服せらるゝに至りて、益々發達したる者にて、耶蘇の當時に在りて彼等の有したりし思想は、猶太國民は何時かは羅馬の權勢を破り、其軍隊なるエルサレムより驅逐し、神の遺はし給へるメッシヤはエルサレムを居城として天下に號令し、世界萬國の民皆之に賓客を容る、時來るべしとの事にして、約言すれば彼等の思想は何處までも物質的政治的なりき。耶蘇の母マリアがバプテスマ、ヨハネの母エリサベツを訪ひし時述べたりしと云へる歌（路一の四十六―五十五）の中に『其臂の力を發はして、心の驕れる者を散し、權威ある者を位より下し、卑賤者を擧げ、飢へたる者を善物に飽かせ、富める者を從に返らせ給ふ、アブラハムと其子孫とを窮りなく憐むことを忘れずして、其僕イスラエルを助け給へり』と云へることあり。此マリアの歌は詩的出藍にして、實史としては甚だ疑に受け取り難けれ共、當時猶太人一般の思想を之に依て言ひ顯はしたることは殆ど疑なし。然れ共福音書に顯はれたる耶蘇の神の國の思想には、聊も物質的、政治的要素なし。彼れが彼を陷れんとして來れるパリサイの人及びヘロデの黨に答へて『カイザルの物はカイザルに歸し、又神の物は神に歸すべし』（可十二の十三―十七）と云へるは、即ち神の國と國家とを區別すべきことを示したる也。彼に來て『我兄弟に遺業を我に分てよと命じたまへ』と云へるものに答へて、其戮刑人及び物を分つ者となるを拒絶したりしは（路十二の十三―十五）神の國の俗世の事務に非ざるを示したる也。彼れが捕へられんとするに方り、其弟子の敵と戰ふを許さゞりしは（太廿六の五十一―五十四）神の國の軍國に非ざるを示したる也。

然らば則ち耶蘇の神の國は何處に在りや。神の國は一に之を天國と云ふより、佛教の所謂極樂淨土と之を同一視し、此世の國に非ずして彼の世の國とやうに考ふる者あれ共、耶蘇の所謂天國は此世の國、地上の國にして、彼の世の國、天上の國に非ず。之を天國と稱ぜるは馬太傳記者のみにして、其他の福音書には絶久て此名稱なし。天と云ひ神と云ふも之と同一義なれば、天國とは天に在る神の支配し給ふ國なることは、耶蘇が主の祈に於て『爾國を臨らせ給へ』と祈れと教へたりしに依りて明也。耶蘇の目的は人を天上に救はんとするよりも、天國を地上に建設せんとするに在り。然れ共耶蘇の神の國を以て現世的也と說き去るは未だ當を得たりと云ふべからず。耶蘇の神の國には現世もなく來世もなく、此等の者を超越したる者也。換言すれば耶蘇の神の國は人心の內部に於ける靈的支配也。パリサイの人が『神の國は何れの時來る乎』と問ひしに答へて『神の國は顯れて來るものに非ず、夫れ神の國は爾曹の衷に在り』（路十七の廿、廿一）と云ひし『爾曹の衷』なる言の意義に關しては學者の解說一定せずと雖も、之を『心の裡』と解して、神の國の人心の內部に關する者なることを顯はせる者也と認て差支なし。山上說教中の樂福と稱する者（太五の三―十二、路六の廿―廿六）は、神の國に在る者の倫理的、靈的資格を示せる者にして、神の國が人心に入り來る時には、苦痛は變じて快樂となり、失望せる者は希望を有し、神に疏かりし者は神に近くことを得べきを云ふ也。愛するに神の國とは、人が神の支配下に來り、神と共に在りて其感化を蒙り、從て心中に生じ來る新世界の謂にして、此處には現世、來世の區別もなく、又國や場所の制限もなし。プルースは之に定義を下して『神の國とは神の愛を信じ、且之に勵まされて、感謝的愛情と獻身的勞役とを神に捧げたる人々の上に、其恩惠なる以て神の働き給ふ愛の支配也』（『神の國』四十六頁）と云へり。耶蘇の說念を顯せるに近しといふべし。

（二） 神の國は現在のものなるや、將來のものなりや。　此點に關し耶蘇は或る時は現在のものとして說けり、又或る時は將來に在るものゝ如く說けり。例之『もし我れ神の靈に由りて鬼を逐ひ出しゝならば、神の國はもはや爾曹に至れり』（太十二の廿八）と云ひ、『パプテスマのヨハネの時より今に至る迄人々勵みて天國を取らんとす、勵みたる者は之を奪れり』（太十一の十二）と云ひしが如きは、明に神の國を以て眼前に現出しつゝありとなす者也。彼は又多くの喩話に依りて神の國の事を說明したりしが、其中には神の國は既に發達を初め尙益々成長發達すべき者

なることを示せるものあり。即ち種蒔の喩（可四の三―廿）芥種の喩（四の卅―卅二）酌酵の喩（太十三の卅三）は其最も重なる者にして、彼が神の國を地上に蒔かれたる種子が徐々に靜肅に、人の思議すべからざる方法に依りて成長發達するに喩へ、『神の國は人種を地に蒔くが如し、日夜起臥する間に種子は芽出でゝ成長すれども其然る故を知らず、夫れ地は自ら實を結ぶ者にして、初には苗、次には穗出で、穗の中に熟したる穀を結ぶ、既に熟れば鎌時至るに依りて直に鎌を入れます也』（可四の廿六―廿九）と云ひしは其最も著しき者也。

然るに耶蘇は他の處に在りては、神の國の出現を以て將來に在るが如く說けり。例之彼が變親のすぐ前に方り其弟子に向ひ『我れ誠に爾曹に告ん、此に立つ者の中に神の國の權威を以て來るを見る迄は死ざる者あり』（可九の一）と云へるが如き、疑もなく將來の或る時期を指したる也。將來の或る時期とは何を指せるや、或は變親と云ひ、或は復活及び昇天と云ひ、或はペンテコストと云ひ、或はエルサレムの滅亡と云ひ、或は耶蘇の再臨と云ひ、學者の說一致せずと雖も、此は思ふに基督教擴張の時を指せる者にして、耶蘇の使命の言と照合して之を考ふるに、耶蘇はエルサレムの滅亡を以て神の國發達の一紀元となしたるが如し。即ち彼は最後にエルサレムに入りし時無花果の喩話を弟子等に語り『無花果を見ての樹を見よ、既に萌ぜば爾曹之を見て夏ははや近しと知る、此の如く爾曹も此等の事成るを見ば神の國の近きを知れ』と云へり（路廿一の廿九―卅一）此は疑もなくエルサレムの滅亡を預言せるものにて『此等の事成るを見ば神の國の近きを知れ』と云ふは、即ちエルサレムの滅亡を以て神の國發達の一紀元となしたるもの也。又耶蘇は最後の晩餐の席上にて弟子等に告げて『今より後新しき者を神の國にて飲まん日までは葡萄にて製れるものを飲まじ』と云へり（可十四の廿五）。是れ又神の國の發達を以て將來に在りとなすものにして、此は思ふに基督教會の聖餐式に於る耶蘇の獨的存在を云へる者なるべし。

耶蘇は此の如く、一方に在りては神の國を以て既に現實せられたるが如く說き、他方に在りては其發達を以て將來に在るが如く說き、一見矛盾せるが如く思はるゝものあり。於是或る學者等は謂へらく、耶蘇は其傳道の初めに方りて、多くの人々冤れて此に就くが如く夜に乘り從ひしが、後形勢一變して彼に敵する者漸く多く、彼の運命亦頗る危に瀕せしが、遂に神の國の希望を將來に置くに至りし也。然れ共耶蘇は初めより神の國の發達を以て將來に在りとなすものにして、此は思ふに基督教會の聖餐式に於る耶蘇の獨的存在を云へる者なるべし。

耶蘇は此の如く、一方に在りては神の國を以て既に現實せられたるが如く說き、他方に在りては其發達を以て將來に在るが如く說き、一見矛盾せるが如く思はるゝものあり。於是或る學者等は謂へらく、耶蘇は其傳道の初めに方りて、多くの人々冤れて此に就くが如く夜に乘り從ひしが、後形勢一變して彼に敵する者漸く多く、彼の運命亦頗る危に瀕せしが、遂に神の國の希望を將來に置くに至りし也。然れ共耶蘇は初めより神の國の發達を以て將來に在りとなすものにして、此は思ふに基督教會の聖餐式に於る耶蘇の獨的存在を云へる者なるべし。

時には未だ進化思想なく、當時の猶太人は天國を以て忽然顯れ來るべしと思惟したりし也と云ふものあれ共、耶蘇が神の國を以て發達すべき者となしたりしは、前に引用せる言に依りて知るべし。要するに耶蘇は神の國を以て現在にのみありとなし、若くは將來にのみありとなさず。神の國の完備は將來に待たざる可からざれ共、其發達は既に初より、既に一部分現實せられたりとなせる也。換言すれば神の國は發達的のものにして、既に其發達を初めたりと雖も、其完全なる發達と其終極的完備に至に之を將來に待たざる可からずとなせる也。而して彼は又此發達に幾多の紀元あるを認め、エルサレムの滅亡を以て其一新紀元となしたりしこと前既に云へるが如し。

（三） 神の國に入るを得べき者は誰なりや。　此問題に換言すれば、神の國は階級的、國民的なりや、又は普遍的、世界的なりやとの問題となる（し）而して單刀直入之に答ふれば、耶蘇の神の國は普遍的、世界的にして、階級的、國民的に非ざる也。其階級的に非ざるは、當時の宗教家が殆ど顧みるに足らずとして棄捨したりし稅吏、卑人に對する彼の態度に依りて明なるべし。彼嘗て曰く『我れ召びて主に主よと云ふ者悉く天國に入るに非ず、唯之に入る者は天に在す我が父の旨に遵ふ者のみ也』と（太七の廿一）是れ即ち悔改めて善なる、神の旨に遵ふ者は、其如何なる階級に在るに拘らず、神の國に入るの資格を有するなり也。彼又嘗てピリトがガリヤ人の血を其供物にまぜし事を告げしに答へて『爾曹此ガラリヤ人は此の如くなやまされし故に凡てのガリヤ人よりも惡きなりて罪ある者と思ふや、我れ爾曹に告げん、然らず、爾曹悔改めずば皆同じく亡ぶべし』（路十三の一―五）と云ひしことあり。是れ神の國に入るものゝ階級に依らずして、罪を悔改めて天父の旨に遵ふの如何に存するないへる也。彼又嘗て明に『パリサイ人に告て『稅吏及び娼妓は爾曹よりさきに神の國に入るべし』と云へり（太廿一の卅一）去れば耶蘇の神の國の階級的にあらざるは明なることなれ共、彼が稅吏、罪人に道を說きたるは、彼等が知き（太十の五、六）又カナンの婦の『我を憐み給へ、我が女鬼に遊れて甚しく苦めり』と云へるに答へて『以色列の家の迷へる羊の外に我は遣はされず』と問ひしに答へて『神の國は顯れて來るものに非ず、夫れ神の國は爾曹の衷に在り』（路十七の廿、廿一）と云ひし『爾曹の衷』なる言の意義に關しては學者の解說一定せずと雖も、之を『心の裡』と解して、神の國の人心の內部に關する者なることを顯はせる者也と認て差支なし。山上說教中の樂福と稱する者（太五の三―十二、路六の廿―廿六）は、神の國に在る者の倫理的、靈的資格を示せる者にして、神の國が人心に入り來る時には、苦痛は變じて快樂となり、失望せる者は希望を有し、神に疏かりし者は神に近くことを得べきを云ふ也。愛するに神の國とは、人が神の支配下に來り、神と共に在りて其感化を蒙り、從て心中に生じ來る新世界の謂にして、此處には現世、來世の區別もなく、又國や場所の制限もなし。プルースは之に定義を下して『神の國とは神の愛を信じ、且之に勵まされて、感謝的愛情と獻身的勞役とを神に捧げたる人々の上に、其恩惠なる以て神の働き給ふ愛の支配也』（『神の國』四十六頁）と云へり。耶蘇の說念を顯せるに近しといふべし。

（二） 神の國は現在のものなるや、將來のものなりや。　此點に關し耶蘇は或る時は現在のものとして說けり、又或る時は將來に在るものゝ如く說けり。例之『もし我れ神の靈に由りて鬼を逐ひ出しゝならば、神の國はもはや爾曹に至れり』（太十二の廿八）と云ひ、『パプテスマのヨハネの時より今に至る迄人々勵みて天國を取らんとす、勵みたる者は之を奪れり』（太十一の十二）と云ひしが如きは、明に神の國を以て眼前に現出しつゝありとなす者也。彼は又多くの喩話に依りて神の國の事を說明したりしが、其中には神の國は既に發達を初め尙益々成長發達すべき者

と云へるが如き(太十五の廿四)明に耶蘇の以色列人民に對する使命の一種特別なるを示せるもの也。耶蘇は其傳道の初に方りては、神の國を以て以色列人民のために在りとなし、又以色列人民のみ神の國に入り得べしと思惟したりしや、抑も亦單に以色列を以て救の出づる處、神の國の起脚點となしたるに過ぎざりしや明ならず。之を聖、兎に角彼は以色列人民の彼を棄て彼を顧みざるに至りて、救は以色列を去りて異邦人に移るべきを說き、彼の神の國なる者は全く世界的となるに至れり。例之或人大なる餐を設けて多賓を招き、餐の時其僕を招きたる者に遣して、百物はや備りたれば來るべしと言はせけるに、彼等皆同じく辭りぬ、其僕かへりて此事を主人に告げければ、主人怒りて其僕に命じ、道路や港巷の邊に往き貧者、癈疾、跛者、瞽者を招き來らしめたりと云へる喩話(路十四の十六—廿四)の如き、又或人葡萄園を作り之を農夫に貸して他の國へ往きしが、期至りて葡萄園の果なうけ取らんために僕を農夫の所に遣はせしが、彼等は其僕み殺したり、持主は最後に一人の愛子を遣はせしに、之をも殺しければ、持主大に怒り農夫等を打ち滅し葡萄園を他の人に與へたりと云へる喩話(可十二の一—九)の如き、何れも以色列人が耶蘇の說きたる道を拒みて之を受けず、剩へ耶蘇を迫害して之を殺したれば、神の國はやがて異邦人に傳はり、以色列人は遂に滅亡すべきを云へる也。而して彼が『人々四や東、北や南より來りて神の國に坐するならんと云ひ(路十三の廿九)又『福音は先づ萬民に宣傳へざるを得ず』と云へるは(可十三の十)明に神の國の世界的なるを顯はせる也。而して夫の馬太傳廿八の十八以下に在る耶蘇の遺言なる者は、其現在の形狀に於ては後人の附加したるものなるべしと雖も、『爾曹往きて萬國の民にバプテスマを施して我弟子となせよ』と云へる語が耶蘇の續神を表白したる者なること又疑なし。

【メッシヤ】　神の國の來るべき事は預言者之を預言し、バプテスマのヨハネも亦之を宣揚したりしが、彼等は自ら之を建設したるに非ず、唯彼等よりも大なる者後に來りて之を建設すべしとの事を預言せるのみ。然るに耶蘇は之に異り自己より大なる者なる指示せず、又其事業の繼續者、完成者なる指定せず、自己を以て其宣言せる神の國の建設者也と宣言せり。此宣言は彼が自己の事業に對して有する異常の意識より來る者にして、此意識は『キリスト』『人の子』及び『神の子』等の名稱に依りて之を學ぶべし。

(一)　キリスト　耶蘇は其傳道の初より預言者イザヤの言を引き、主の靈を注ぎて遣はし給へる者は我に於て塵驗せりと云ひ(路四の十八—廿一)山上の說教に於ては己をモーセに比し、自らモーセより大也と云ひ(太五の十七—四十八)或は自ら地に於て罪なる者はありと云ひ(九の六)又ダビデと比して自ら其主也と云ひしを見れば(可十二の廿五—廿七)早く自己のキリストなるを自覺したりしを知るへし。約翰傳に依れば耶蘇は其傳道の初めに於てサマリアの婦人に己のキリストなることを告げたりしと云へども(四の廿六)共觀福音書に依れば彼が初めてキリストの稱號を公に受けたりしは傳道の終に近ける頃にして、即ちカイザリアピリピに往く途上に於て彼得の曾自ら受けたりしを以て初めとなす(可八の廿)而して彼が初めて自らキリスト也とのことを聞へられて後祭司の長の前に立ちし時にして、即ち彼は『爾は頌むべき者の子キリストなるか』との問に答へて『然り、人の子大權の右に坐し天の雲の中に顯れて來るを爾曹見るべし』と云へり(十四の六十一、二)約翰傳の記者は耶蘇の捕へらるゝ前彼が弟子等の爲めになせる祈禱を傳へ、其中に『永生とは唯獨の眞神なる爾と其遣はしゝエスキリストを知る是也』(十七の三)との言を記したれ共、『イエスキリスト』の一句は恐ふに記者の言にして、耶蘇自己の言には非ざるべし。

(二)　人の子　耶蘇はキリストなる稱號を避けたりしが、自ら呼ぶに『人の子』なる稱號を以てせり。此稱號は福音書中に凡々八十回あり。而して福音書以外には唯二回記されたるのみ(使七の五十六、默一の廿)其他は悉く耶蘇自ら唱へたる者也。福音書中此名目が如何に使用せられたるかを見るに自ら三種に分るゝが如し。即ち其一は耶蘇現上の生活に關する者にして例之『人の子は地にて罪を赦す權あり』(可二の十)『人の子は枕する所なし』(太八の廿)と云へるが如し。其二は耶蘇の苦難及び死と關係せる者にして例之『人の子は必ず多の苦難を受け長老祭司の長學者共に棄てられ且殺され』(可八の廿一)といふが如し。其三は耶蘇の再來に關する者にして例之『人の子の權威と大なる榮光を以て天の雲に乘り來るを見ん』(太廿四の廿一)と云ふが如し。抑も耶蘇は如何なる意義を以て此名目を自己に適用したりしや、是れ頗る困難なる問題にして、學者の解說一ならず。雖も、紙幅限りあれば今爰に一々之を紹介し難し。

普人の信ずる處を以てすれば、『人の子』の名稱は、ヴァイズ、バイシラッグ、ホルツマン等の論じたるが如く、耶蘇生涯の事業と一致せる其特殊なる性格を指示せる者にして、最もよく其生涯の事業を顯はせる思想は神の國なれば、彼が自ら『人の子』と稱せし時、彼は自己を以て神の國の顯首及び建設者となしたりし也。元來『人の子』なる名稱は決して新なる者に非ず。舊約但以耳書(七の十三、四)には異邦國を野獸に象り、之に對して天の雲に乘りて來れる異人を指き、之を『人の子の如き者』と云へり。『人の子の如き者』とは疑もなく以色列國民を指したる者にして、個人を指したる者に非ざれ共、漸次メッシヤを指示したる者として一般に領解せらるゝに至りしは疑なし。故にエノク書に至りては明に之を以てメッシヤに適用せり(四十六の一、六十九の廿九)耶蘇當時の人々は未だ此名稱がメッシヤと同一の意義を有せりとのことを領解せず、耶蘇が『キリスト』の名目を避けて此名目を用ひたりしも恐らくは之がためなりしなるべく、且彼は之に由りて神の國の建設者として自己に附隨せる性格を顯はさんとしたりしこと亦疑を容れず。斯の如く解說し來れば、耶蘇の使用したりし第一種に屬する言語は、神の國の建設者たる彼の事業に關係し、第二種即ち人の子の苦難と死とに關する多くの言語は、其天職を成就するに主要なる條件を述べたる者にして、第三種に屬する言語は其天職の完成を指示したる者なることを知るべし。

(三)　神の子　耶蘇が自ら『人の子』と稱へたりしとの事は以上述ぶる如しと雖も、彼が明に自らを『神の子』と呼びたりしは、共觀福音書に在ては、猶太人が彼を罵りて『彼れ我は神の子也と云ひし也』(太廿七の四十三)と云ひし外之を見ること能はず。約翰傳には彼が直接に自己を神の子と稱したりし處數箇所あり(十の廿六、五の廿五、九の廿五)然れ共彼は屬々他より『神の子』と呼ばれたり。即ちバプテスマを受けし時、及び變貌の時『汝は我が愛子我が悅ぶ所の者也』との聲天より聞えたりしと云ひ(可一の十一、九の八)パプテスマのヨハネ子(約一の廿四)ナタナエル(一の四十九)サタン(太四の三)弟子(十四の廿三)及び彼を守れる百夫長(廿七の五十四)等何れも彼を『神の子』と呼びたり。且彼は假令直接に自己を『神の子』と稱へざりしと雖も、間接には『神の子』たるを含蓄せる言を出したりしこと約翰傳のみならず、共觀福音書にも亦記載せらる。即ち太十一の廿七に『父は我に萬物を與へ給へり、父の外に子を識る者なく、又子及び子の願はす處の者の外に父を識る者は唯我父のみ也、天に在る使者も子も誰も知る者なし』と云ひ、葡萄園の喩話に『爰に一人の愛子ありけるが云々』と云ひ(可十二の一—十二)又婚筵の喩話に『天國は或王其子のために婚筵を設くるが如し』と云へるが如き(太廿二の一—十四)何れも含蓄的に自己の神の子たることを顯はせる者也。抑も耶蘇及び彼を『神の子』と呼びし者は此名稱に依りて如何なる意義を言ひ顯はまんとしたりしや。之を知らんとせば、先づ此名稱が當時如何なる意義に用ゐられたりしやを吟味せざるべからず。舊約聖書に依れば此名稱は種々の意義に使用せられたり。即ち天使(創六の二—四、伯一の六、二の一)有司又は士師(出廿二の廿八、詩八十二の六)貴人(申十四の一)及び神政國の王(母後七の十三、詩二の七)是也。以て舊約に於ては此名稱は單に特別に神の選擇を蒙り、其殊愛を受けたる者の謂に外ならざるを知るべし。經外書即ちエノク書(百五の二)及び第四エズラ書(七の廿八、廿九)には此名稱はメッシヤと同一の意義に用ゐられたり。新約にも亦メッシヤと同一の意義にて此名稱を用ゐたりと想像すべき箇處あり(太十六の十六、馬可十四の六十一)。然れ共之に依て直ちに耶蘇自らも亦同一の意義にて此名稱を用ゐたりと推斷し難し。既に示したるが如く彼が含蓄的に己の『神の子』たるを表明せる言を見るに、彼と神との特一なる關係を言ひ顯はせるに非ざるはなし。且彼は他の場所に於て、天父の旨を行ふ者を均しく『神の子』と呼びしに拘はらず、彼は自己を之と同列に置かず、常に明に『我が父』と『爾曹が父』とを區別せり。約翰傳には『我と父とは一也』(十の廿)とあり、最も明白に神と耶蘇との關係を超越無比の者となせり。共觀福音書に在ても亦耶蘇の『神の子』には一種特別の意義あり。即ち人類は神の子供にして耶蘇は神の一人子也、人類は神の旨を行ふことに由りて、神の子供となり得べしと雖も、耶蘇は既に神の子にして完全に神を知り、完全に神の聖意をなす者也との意を表明せり。

耶蘇がメッシヤ的意識及び神子的意識を有したりしは以上云ふ處の如しと雖も、彼は其訓誡を守るべしと云へる事の外彼の性格を信じ之に固着すべしといふが如き希望を有したりしことなし。第四福音書が耶蘇の人格を論ずるは他の福音書に優れりと雖も、同書中に於る耶蘇の思想も『爾曹もし我を愛せば我戒を守れ』と云ふに外ならず。彼が神の國に入る要件として求めたる信仰は神に於ける信仰にして、彼を崇拜の目的として信ずるの信仰に非ず。然れ共何人も古來未だ嘗て彼の如くに父を知りし者なく、又何人も未だ曾て彼の如くに父を顯現したる者なし。故に彼の教ふる所は即ち天父の教ふる所にして、彼の生活、苦闘、奮闘及び死は即ち悉く天父の性質と聖意とを顯はせる者也。彼に依らずんば吾人は神の

聖意を知ることを能はず、又神に至ることを能はず。此点差に於て吾人が耶蘇を以て信仰の對象となし中心となすといふは誤れる事に非ず。

耶蘇の苦難と死との救拯的意義如何。耶蘇が自己の死に就て其弟子に語り初めたるは、其公生涯の極めて晩年、即ちガリラヤ傳道の最後今將さにエルサレムに向はんとせる前、カイザリア、ピリピに至り此處にて彼得が耶蘇をメッシヤ也と告白せし時也(可八の廿一其他の福音書)而して彼は此時より後屢々同一の預言を爲せり。然れ共彼は唯自己の必ず苦難を受けて死ぜざる可らざることを言へるのみにして、其死を以て救拯の事業に關係ありとは爲さざりき。彼が其死に救拯的意義を附したるは共觀福音書中唯二回あるのみ。即ち『人の子の來るも人を役ふために非ず、却て人につかはれ、且多くの人に代り其生命を與へて贖とならん爲め也』と云ひ(可十の四十五、太廿の廿八)及び晩餐式を立てたりし時其死の目的を述へ『是は罪赦のために與ふる我身體也、此杯は罪赦のために流す我血にして立つる總の新約也』(可十四の廿四、太廿六の廿八、路廿二の十九、廿)と云へる是也。此二の場合に在りて耶蘇が其死を以て人類の救濟に關係ありとなせるは明なることなれ共、如何なる意義に於て彼の死が人類を救濟するやに就ては彼の明言せざる所也。

【聖靈】　聖靈の觀念は共觀福音書中にも之れなきに非ざれ共、一段の發達を爲せるは第四福音書に於ける耶蘇の教訓也。其最も注目すべきは其生涯の終極の近けるに及び其死後聖靈を弟子等に送るべきことを約束したる言にして、即ち彼は『我れ父に求めん、父必ず別に慰むる者を賜ひて究りなく賜ふべし』と共に在らしむべし、此は即ち眞理の靈也』(十四の十六、十七)と云ひ『我名に託ゐて父の道はさんとする訓慰師即ち聖靈は眞理を賜ふに教へ、又我が凡て爲ることを汝等に思ひ出さしむべし』(十四の廿六、十六の十三參照)と云へり。此等の言は彼が他の場合に於て『我れ賜ふを捨て孤子とせず、又賜ふに來らん』(十四の十八)と云ひ、『暫くせば賜ふを見じ、又暫くして我を見るべし、蓋我れ父へ往けば也』(十六の十六)と云へる言と一見矛盾するが如しと雖も、後者の場合に於て彼が再び來るべしと云へるは、聖靈に於て來るの謂にして、前者の眞理の靈の來ると同一事を指す者なるべし。『我と父とは一也』との自覺を有したりし耶蘇が、又其死後弟子の上に來るべき聖靈と自己の靈との一致を確信し、永遠に其弟子と教會との中に現存すべしとのことを宣言せるは亀も恠むべきに非ず。(教會、再來等に關する耶蘇の教訓に各々其條下に就て見るべし)。

【參考書】　ヴァイス、バイシラッグ、ホルツマン、ボヴォン、スチーブンス等の新約聖書神學中の耶蘇の教訓。ヴェント『耶蘇の教訓』ブルース『神の國』エリフ、ホン、シェレング『耶蘇及び其教訓』ハルナック『基督教の本質』(高木壬太郎、和田垣謙の邦譯あり)及び『耶蘇の語類』等此主意に關する參考となすべし。

イエス　シラクの子　Jesus, the Son of Sirach.　【人名】　經外聖書『シラクの子イエスの智慧』の作者。此イエスは、其著中に云へることの外明ならず。然るに希臘文にはエルサレムのシラク、エレアザルの子とあり、近時發見せられたる希伯來語原本にはシラクの子エレアザルの子イエスの子シメオンとあるより解説に困難を生ぜり。スリヤ教會は此シメオンを新約のシメオンと同一視したれ共、監督ゲオルゲは之に反對し、此書の作者は前二四四年に生存せりと云へり(『シラクの子イエスの智慧』の條參照)。

イエロニムス　ソフロニウス　ユウセビウス　Hieronymus, Sophronius Eusebius　『エローム』の條を見よ。

戰車　Chariot.　【物名】　古代に在ては戰車は軍備の最も重要なる部分を占めたりき。埃及古代の碑銘に依れば、戰車は紀元前十七世紀頃埃及に輸

埃及人の用ゐたる戰車

入せられ、ヘテ人及びパレスチナ諸王との戰爭に之を用ゐたりしと云ふ。舊約聖書には、出埃及時代にパロ之を用ゐたりしとのことを記す(出十四の六以下、十五の一、四)。迦南人も亦之を用ゐて以色列人と戰へり(書十一の四―九、士一の十九、四の三、五の廿八)。サウルの時代にはピリステ人三千の戰車を以て以色列を壓へりと云ひ(毋前十三の五)ダビデはスリヤとの戰爭に於て一千(代上十八の四)他の場合に七百(毋後十の十八)の戰車を捕にしたりしといふ。以色列に初めて戰車を輸入したるは、ソロモンが一千四百の戰車を備へし時にして(王上十の廿六)主として之を埃及より輸入せり。爾後戰車は南北兩朝に於る軍備の重要なる部分を形成せり(王上十六の九、下七の十四、九の十六、廿一等)。預言者は以色列人の馬及び戰車に倚るを、神を信ぜずして人力に依頼する徴也として、之を譴責せり(何一の十七、十四の三、賽二の七、毋の十六、毋一の一)。

イグナシアス　教父　Ignatius, Father　【人名】　英國の說教家にして、一八三七年倫敦に生る。實名を Joseph Ignatius Lyne と稱す。英國の教會の中に僧院主義を回復せんとし、アベルがウェンニー附近の地を購ひ、ランツニーアッベーを建立し自ら其長となる。近年說教及び著書に依り、最も熱心に倫理說及び高等批評を駁撃し、正統教理の擁護に努めたり。一九〇〇―一年加那太及び合衆國に傳道旅行をなし、歸來倫敦に於る都道說教に大に聽衆を集けり。

イグナチウス　Ignatius.　【人名】　コンスタンチノープルの教長、七九〇年に生る。ミカエル一世の子也。篡奪王レオ五世の爲めに寺院に幽閉せられしが、後コンスタンチノープルの教長に舉げられる。然れ共ミカエル三世と合はず、遂に廢せられてテレビンサス島に追放せらる。ホーチウス彼に代りしが彼尚其教長たる要求を棄てず。ホーチウス、パシリウスの爲めに殺さるゝに及び、再び其職に就き死に至る迄其職に在り(八七八)。

イグナチウス　アンテオケの　Ignatius of Antioch.　【人名】　イグナチウスはアンテオケ教會の監督にして、トラヂアン帝の時捕へられて囚人となり、羅馬に往く途中、羅馬の教會、小亞細亞に於る五箇の教會及びスムルナ教會の監督ポリカルプに遇て贈りたりと稱する七書翰現存せり。イグナチウスの生涯と其事業に關しては、此等の書翰に記載せる外何事をも知ること能はず。此外に彼に關する傳說なきに非ざれ共素より信ずるに足らず。彼が羅馬に贈りたりと稱する書翰の中には、彼が殉教者たらんと欲する願望を述べたる者あり。曰く『賜曹我がために和を結ぶ勿れ、又赦免を願ふ勿れ、我は參にして、猛獸の餌牙にてひかれ神の清きパンとならんことを欲す。我は彼得保羅の如く賜曹に命ずるの權なしと雖も、基督の爲めに死刑に處せられ、甦りて基督に依れる自由を得るの望ありと確信す』と。彼の格言として傳へられたる者の中には左の如き語あり。曰く『沈默して信徒たるは、多言にして實際の信徒たらざるに優れり』曰く『基督の語を有する者は、聽聞の沈默をも聞き得べし』曰く『劍に近づく者は神に近づき、猛獸の中に在る者は神と偕に在る也』曰く『うたゝる縄粘の如く、堅く立つべし』曰く『傷を受け乍ら尚勝利を得るは、眞正の武士也』と。彼が耶蘇を神の子として尊敬したりし事は明也。彼曰く『耶蘇はマリアの子にして又神の子也、即ち肉體を有する神也』と。彼は又基督は實際の肉體を取らず、唯肉體の如き形狀を有したりしのみと云へりし說に反對して『神の子なる基督は、實に生れ、實に飲食し、實に十字架にかゝり、實に死し、實に甦りたり』と云ひ、又猶太教に反對して『猶太教に從ふ者は、恩惠を受けず、基督を信仰し乍ら尚猶太教に倣ふは無道理也』と云へり。彼は又教會の一致を說き、互に相愛して教會の親密な堅實にすべきことを反復教訓せり。教會を指して公會と云へるは蓋し彼を以て嚆矢と爲す。思ふに彼は之に依て、純粹の基督教は一地方に限らるべき者に非ず、全世界に傳播すべき者にして、全世界の教會は一致して互に其親密な誼るべき者也との意を表したる者なるべし。彼は又一致を堅實ならしむる方法として監督政治を尊重し、反復監督に服從すべきことを教へたり。即ち曰く『神に服從するが如く、監督に從ふべからず。賜曹の監督は神の代理者也、賜曹の長老は使徒の代理者也、執事も亦共に尊敬すべき者也。主が天父を離れて何事をも爲し給はざるが如く、賜曹も監督及び長老を離れて何事をも爲すことなく、互に心を同ふすべし』。又曰く『基督が天父に服從し給ふが如く、監督に服從し、使徒を敬ふが如く長老をも敬ひ、又執事をも神に立てられたる者として尊敬すべし。監督及び監督の代理者が執行する晩餐は眞正の晩餐也。監督なき時はバプテスマを施すべからず。又愛餐をも行ふべからず。監督を敬ふ者は神より譽を得べし。監督の許可なくして働く者は惡魔に事ふる者也』と。此の如く彼の書翰中には監督、長老、執事の區別明也。然れ共彼の所謂監督とは各教會の管理者にして、當時各教會には之を支配する一人の監督あり、其下に數人の長老ありしが如し。

故に之を監督政治といふ、現今の監督派の有する政治と異り、監督は唯一教會の牧師たりしに過ぎず。

イグナチウス ロヨラ Ignatius Loyola. 【人名】 一四九一—一五五六、西班牙の勳爵士にして、青年の時より軍人となり、齢凡そ三十歳の頃パンプロナの城塞を守りて佛人と戰ひしが、負傷の爲めに片脚を失ひ、止むを得ず軍籍を退けり。其病床に在りし時古代聖徒の傳記を讀みて深く感ずる所あり、一身を神に献げて教會の爲めに獅的戰爭を爲さんと決心し、病癒えて直ちにモントセラ寺院に往き、後マンレサの洞穴に退き苦行を爲すこと數月、一五二三年パレスチナに往きしが、教育なくして傳道することを能はざるを悟り、歸りて拉丁語及び哲學を學び、傍ら病者の看護に盡し、病院及び學校に於て傳道せしが、異端の疑を受け、四年間神學の事に關し緘默を守るべきことを命ぜられたり。一五二八年西班牙を去り巴理に來り、同被の學生中彼と志を同ふする者と語らひ、新團體を組織するの準備をなせしが、一五三四年愈々新團體を組織し、獨身と貧窮と從順とを守るべしとの誓約を爲せり。後彼等は羅馬に來りしが、忽ち法王の信任を受け、一五四三年法王パウル三世の認許を得、其團體を『耶蘇の聖社』と命名し、ロヨラ其總理（教父長）として選ばれたり。一六二三年法王グレゴリー十五世は、ロヨラ及びフランシスザヴィエーを聖列に入れたり。（『イエスイト』の條を見よ）。

イグノランチヌ Ignorantines. 【僧派名】 一六七九年佛國ライムスに起てられたる宗教的團體にして、一六八三年ラアン、パブテスト、デ、ラ、サル貧民兒童教育の機關として組織せり。今や此僧派は佛國西のみならず、世界各國に之あり。

異教 Paganism (paganus). 【術語】 拉丁語ぱーがにすの人『農夫』若くは『鄙の神を拜する人』の義にして、第四世紀に至り基督教が羅馬帝國の宗教となり、古代の宗教を以て迷信となせる時より、最後の意義を以て基督教以外の宗教に適用せり。東羅馬帝國に於て初めて異教禁止の法令を發したるはテオドシウス一世（Theodosius I. 三七八—九五）にして、帝は偶像に犧牲を献ぐるを禁じ、異教の殿堂を閉鎖せしめたり。四二五年テオドシウス二世は異教徒の法廷に出でゝ辯護をなし、軍籍に列し、基督教徒の奴隷を有する事等を禁ぜり。然れ共尚異教徒にして高官に列する者あり。學校は尚久しく異教哲學者の手に在り。四帝國に在りては三九九年オノリウス帝（Honorius）異教の禮拜を禁じ、四〇八年祭壇及び偶像を破壞し、殿堂を世俗的の用に供ぜり。五〇〇年テオドリック大帝に至り、偶像に犧牲を献ぐる者を死刑に處すべきことを令せり。然れ共第八世紀の頃に至るも異教は尚未だ全く其痕跡を絶たざりき。

基督教諸國に在りては、非基督教國民を以て一般に異教國民となし、迷信暗黑の中に生死する者として深く之を憐れみ、早くより之が傳道に着手したりしが、第十九世紀の中頃より各國交通の便開け、從來外國に對して閉鎖したりし門戸漸次開放せられたりしかば、歐米諸國の基督教徒は傳道會社を起し盛に異教國民の傳道に着手せり。此傳道は今日に至るも尚甚だ盛大なれ共、彼等が異教國民に對する傳道の動機は、異教に對する思想の變化と共に漸次變化しつゝあるが如し。從來基督教徒は凡ての異教を以て、迷信、暗黑の塊物となし、惡魔の產物なるが如く思惟したりしが、宗教の比較的研究開け、且諸國民相隔接し相理解するに從ひ、凡ての國民は『或は攻擊得ることあらんとて神を求めたり』ことを明となり、今日に至りては妄りに異教を輕視せず。從來は基督教と他の宗教との相違を以て超自然的及び自然的起源に歸したりしが、今日は凡ての宗教は超自然的にして又同時に自然的なりとの事承認せらるゝに至り、從て異教なる者は唯進化の程度に於て基督教に劣れりと思惟せらるゝに至れり。然れ共基督教徒は基督教を以て最も完全なる進化の程度に達したる宗教也と信じ、基督なき人若くは國民は、基督を有する人若くは國民と同一程度の靈的幸福を享くることを能はずと思惟するが故に、異教徒を基督教化することを以て其義務となして、毫も之を怠らざる也。

犧牲 Sacrifice. 【慣例】 犧牲とは神との交通（イケイ）により其恩惠を得んために、物質的の供物を神に献ぐる宗教的行爲をいふ。

【犧牲の起源】 犧牲を献ぐる最初の動機に關しては、學者の說一ならず。(一) 進物說 原始の人類は神を以て人間の如く思惟せしが故に、寃も會長に献ぐるが如く神に進物を献げたりとなす者にして、ヘルマン、シュルツ。ウロルウ、ムーア此說を主張す。(二) 服從說 人類自然の傾向より出で、自己の神に依屬すべき者なることを知り、從順の意を表せんとて爲す所の服從的行爲也となす者にして、カール、ベール。エフ、デ、モリス。アール、スメンド此說を把る。(三) 共食說 神其禮拜者と食事を

共にする者也との說にして、ウェルハウセン。ロバルトソン、スミス。テーレ。ウォ、ワ、フレーゼル エフ、ビ、ウェポンス此說を奉ず。(四) 捧護說 リッチエルの說にして、彼は犧牲を以てエホバの棲處より（怒より）に非ず）其献納者を掩護する者也となせり。(五) 代贖說 其献げられたる動物は即人に代はりて死する也となす者にして、今日基教會が通常信じ來りし說也。此等の諸說何れも多少の眞理あり。思ふに一說を以て犧牲の動機を說き去り盡し、種々の動機合して其發達を助けたる也。

【モーセ以前セミチック人種の犧牲】 創世記に記されたる族長時代の物語は、苦人に犧牲はアベルの献げたる血の供物の顧みられたる時に初よりし事（四の四）ノア方舟より出でゝ後燔祭を献げし事（八の廿）及びアブラハム及び其子孫が種々の儀式を以て犧牲を献げし事を示せり。而して犧牲の献げられたる重なる場合は、神と會合せる時及び其他人生の最も莊嚴なる時にして、犧牲の種類は酬恩祭（廿一の五十四）燔祭（廿二の十三）契約の犧牲（十五の七）及び潔祭（廿八の十八）犧牲の材料は潔き畜獸（八の廿）殊に牛、山羊、羊及び鳩也（十五の九）アブラハムの例に依りて之を見れば、人身犧牲は神の要求し給ひし者に非ず（廿二の一以下）以上記せる事が以色列國民歷史の初代の習慣と一致するは明なることなれ共、之を以てセミチック人種の最も早き時代の習慣也となし難し。原始人類の犧牲と、創世記の物語に顯はれたる比較的進步せる時代の犧牲との間には發達あり。此事實は近年ウェルハウセン及びロバルトソン、スミヌの注意する處となり、其研究の結果として、原始人類の犧牲は葬物教と密接の關係あることと、犧牲に關する觀念及び儀式は漸次進化し來れるこをを明にし、大に此方面の研究に利益を與へれ共、其言ふ所間々思辨に過ぐる者あり、其詳細の點に至りては尚未完全なるを免れず。

【古代以色列人の犧牲】 出埃及の時代より前八世紀預言者の起れる時代に至る。(一) 犧牲の材料と なりし者は、迦南の農產物、動物（出廿二の廿）穀類及び流動物（廿二の廿九）にして、血及び脂肪たる物は嫁に エホバの喜び給ふ所也とせらる。(二) 犧牲の種類は二種に分る。即ち全部を神に献げ殘餘を禮拜者に分與する者にして、燔祭は前者に屬し、犧牲祭は後者に屬す（出十の廿五、十八の十二、廿の廿四。但し此外に之を献ぐる儀式の異れるこ、之を献ぐる目的の異れるこに依り、他の名を有する者あり。(三) 犧牲祭 犧牲祭に擬義祭に於て酬恩祭と同じ。最も早くより最も厳く行はれたる最古の犧牲にして、今日に於ても慶事ある場合には之を紀念祝賀する爲めに聖餐を開くが如く、宗教的精神の旺盛なりし時代に於て、宗教的感情を表するため取りたる祝祭的犧牲也。此祝祭の國民的生活に關する場合に行はれたるは、戰爭の終り（母前十一の十五）飢饉若くは疫病の止みたる時（母後廿四の廿五）王の即位（王上一の十九）及び神殿献堂の時也（王上八の六十三）地方の部落に於ても豐年を祝する爲め之を行ひ（出廿二の廿九—廿一）又有名なる誓言者の色に來りし時之を行ひたる事あり（母前十六の五）又人其妻と共に祭所に詣りて、犧牲を献げて神の前に飲食せしことあり（母前一の三）其他臨立の曉（創廿一の五十四）客來の時（十八の一—八）新なる事を別めし時（王上十九の廿一）等に之を行へり。斯てこの場合に行はれたる者にして、思ふに彼等は其献ぐる所の者に依りて神の守護と祝福とを享くべしと思惟したりしなるべく、而して又神と共に飲食することに依りて、兩者の交を親密ならしむべしと信じたりしなるべし。(ろ) 燔祭 酬恩祭の特質は人類の經驗の光明の方面を顧はずに在りなせば、燔祭は、其暗黑の方面即ち悲痛、畏懼等の情を顧はず者也といふべし。素より或場合、例之王者の即位、神と契約を結びし時の如きは、希望と畏懼、喜悅と莊嚴とを兩つ乍ら顧はさん爲め犧牲と燔祭とを兼ね献げたりしと雖も（出廿四の五、母前十の八）最も莊嚴を要する場合には單に燔祭のみを献げたり。例之ノアが洪水より救はれたる時（創八の廿）の如き、エホバの顧ほれ給ひし時の如き（廿二の十三、士十三の十六）戰爭の初まりし時の如き士六の廿六）敵に增まれて危險に瀕せし時の如き（母前廿六の十九）是也。此燔祭の目的は其之を献げたる場合の示す如く、危險に對して守護を得、爭鬪の場合に勝利を得、又困厄より救を得んとするに在り。故を得たる後に之を献ぐる場合に在りては感謝を表するが如しと雖も、此場合に在りても尚其罪なる思想は、神の審判を免れて得たる救を表するに在り。如何にして此犧牲が神に對し效果を有するや明ならざれ共、古代希伯來人の考に依れば、神に献げられたる犧牲は發ぼしき香となりて神に達し、神之を喜び、禮拜者を助け給ふ也（創八の廿一）イサク犧牲の物語は、動物を以て人身犧牲の代りに献げられたる者也となすの說を想起せしむべしと雖も、イサクにアブラハムのために死すべき者なりしに非ざれば、此中には動物犧牲は即人の罪に對する刑罰を負ふべき者也との觀念を含蓄せず。此場合に於て動物犧牲は唯個童少き香個數多きものに代りたりとの事しめ、又之に依りて神の守護と祝福とを享くべしと思惟したりしなるべく、而して又神と共に飲食することに依りて、兩者の交を親密ならしむべしと信じたりしなるべし。(ろ) 燔祭 酬恩祭の特質は人類の經驗の光明の方面を顧はずに在りなせば、燔祭は、其暗黑の方面即ち悲痛、畏懼等の情を顧はず者也といふべし。素より或場合、例之王者の即位、神と契約を結びし時の如きは、希望と畏懼、喜悅と莊嚴とを兩つ乍ら顧はさん爲め犧牲と燔祭とを兼ね献げたりしと雖も（出廿四の五、母前十の八）最も莊嚴を要する場合には單に燔祭のみを献げたり。例之ノアが洪水より救はれたる時（創八の廿）の如き、エホバの顧ほれ給ひし時の如き（廿二の十三、士十三の十六）戰爭の初まりし時の如き士六の廿六）敵に增まれて危險に瀕せし時の如き（母前廿六の十九）是也。此燔祭の目的は其之を献げたる場合の示す如く、危險に對して守護を得、爭鬪の場合に勝利を得、又困厄より救を得んとするに在り。故を得たる後に之を献ぐる場合に在りては感謝を表するが如しと雖も、此場合に在りても尚其罪なる思想は、神の審判を免れて得たる救を表するに在り。如何にして此犧牲が神に對し效果を有するや明ならざれ共、古代希伯來人の考に依れば、神に献げられたる犧牲は發ぼしき香となりて神に達し、神之を喜び、禮拜者を助け給ふ也（創八の廿一）イサク犧牲の物語は、動物を以て人身犧牲の代りに献げられたる者也となすの說を想起せしむべしと雖も、イサクにアブラハムのために死すべき者なりしに非ざれば、此中には動物犧牲は即人の罪に對する刑罰を負ふべき者也との觀念を含蓄せず。此場合に於て動物犧牲は唯個童少き香個數多きものに代りたりとの事

を表するのみ。

【預言者の犠牲論】 古代以色列國民の犠牲的制度は、長き間に複雑せる過程を經て、漸次に變化し來りしが、前八世紀の預言者に至り、更に大なる變化を受くるに至れり。預言者の犠牲に對する言論の中には、近時の或る批評家をして、彼等の宗教的理想は全く犠牲を廢止するに在りしに非ずやと思惟せしむる者ありと雖も、彼等は唯當時行はれたりし犠牲の弊害を指摘したりし迄にして、要は之を改革せんとしたりしに過ぎず。而して彼等が改革せんとしたりし要點は、犠牲の實際及び理論の二方面に區別するを得べし。(一) 實際的方面 に在りて彼等の改革せんとしたりしは (い) 異教的犠牲の廢止、即ち偶像(何十一の二、耶十一の十二)死者 (詩百六の廿八) 及び動物(結八の十)に犠牲を献ぐることを廢止したる事。(ろ) 人身犠牲の廢止(結廿の卅一)及び (は) 犠牲に伴ふ酔酒淫行の嚴禁 (何四の十三、摩二の七) 是也。(二) 理論的方面 は彼等の殊に重み置きたりし處にして、彼等は大聲以て當時の風を攻擊したり。(い) 彼等は先づ宗教に於る禮拜式、禮拜式に於る犠牲の地位に關する當時の人々の誤りたる考を指摘して、之を改めんことを促せり。即ち當時一般の人々は、宗教的儀式を以て神を喜ばすべき最大方法也と思惟したりしが、彼等は之に反し、神の前に在りては宗教的儀式に之み道徳に比すれば更に緊要に非ずとの事を示したり。彼等の教訓に從へば、人は正義を行ふことに依りてのみ神の恩惠を享受すべし、正義を行はずして儀式を守るは神の怒を挑發する也。(ろ) 犠牲の意義 彼等の教訓に依れば、神の求め給ふ者は、人の全生活也、即ち全力を盡して其義務を行はん事也。神は造物若くは犠牲の肉に依りて動かされ得べき者に非ず。神は元來缺乏を感ぜず、假令之を感ずるとするも、人の献ぐる者は神の所有にして人の所有に非ず。故に預言者の宗教に在ては犠牲造物説は立ち難し。彼等の見地より云へば、犠牲は眞實に神に仕ふる者の感情及び精神を表白する媒にして、其効果祈禱に同じ。祈禱其物のみは價値なしと雖も、之を献ぐる者の誠意及び向上心に依りて價値を生ずるが如く、犠牲其物のみは價値なしと雖も、之を献ぐる者の誠意及び向上心に依りて價値を生ずる也。

【祭司典の犠牲制度】 ユダ朝の滅亡と共にエルサレムの神殿破壊せられ、其住民巴比倫の俘囚となりしを以て、國民をして莊嚴なる儀式に依り犠牲を献ぐることは廢止せられたれ共、當時の宗教家は之を以て禮拜の方法に對する神の刑罰也とは思考せず、大預言者起りて神殿を再建し其莊嚴なる儀式を恢復すべしと思惟せり。而して巴比倫に俘囚となりし祭司等は神殿禮拜に關する詳細の智識を有せしが、後時を經て此等の人々の死するに及び、之を書に記録するの必要起り、其結果所謂祭司典なる者編纂せらるゝに至れり。此祭司典は當時の狀態に從ひ古代の禮典を修正したる者にして、エゼラ之を採用して宗教改革を行ひ、爾來猶太教禮拜の標準となれり。祭司典に記されたる犠牲の制度は利未紀、出埃及記(廿五—廿二、廿五—四十)及び民數記第(一—十、廿五—十六)に記さる。(一) 犠牲の十五—十九、廿五—廿六) 形狀 犠牲の品物に依りて區別すれば、動物犠牲、植物の禮物及び灌祭の三となす。動物犠牲は其中最も重要なる地位を占め、分ちて燔祭、罪祭、愆祭、酬恩祭の四となす。ユダ王國の末詩田經拜りに至り、遂に國亡びて民異域に虜となるに至りしが、預言者等は之を以て國民の罪惡に對する神の刑罰也となせしかば、犠牲を献げてエホバの以色列に對する興味を喚起せんとするの念起り、之がため有血犠牲被建し、燔祭、酬恩祭に加ふるに更に罪祭、愆祭を以てするに至れり。罪祭、愆祭の區別に就ては、或は前者は知らずして犯せる罪のため、後者は有意犯罪のため也と云ひ、又前者は客觀的に刑罰を道るとため、後者は主觀的に良心を悔むるため也と云ひ、又前者は公に犯したる罪のため、後者は竊に犯せる罪のため也と云ひ、其解説一ならざれ共、愆祭は其犯せる罪の改められ得べき場合に献げられ、罪祭は一旦爲したる害の回復し難き場合に献げられたり。植物の禮物は細麻より取りたる儘の穀物、果物、橄欖油、智及び無酵のパンより成る。有血犠牲と共に献ぐることあり、又植物の禮物のみ献ぐることあり。灌祭は他の禮物と共にのみ献げられたり。(二) 有血犠牲の効力 動物犠牲の主なる目的は人之に依りて神の目より贖はるゝに在り。然れ共犠牲は何物より人を贖ふ者なりや、リッチェルは人は罪ある者なるが故に犠牲に依りて神の穢厭より贖はれんとする者也と説きたれ共、人は神の愛きことを思ふと共に深く自己の罪惡を感ずる者なれば、犠牲に依りて自己の罪を贖はんとしたりしなるべし。次に犠牲の用は宗教的生活に入らんとするに在り。又神聖なる目的のために、人又は物件を聖別するも犠牲の用也。犠牲が神の恩惠を得る方法、罪の赦を得る手段として立てられたる者なる事は明なる事なれ共、如何なる意義に於て犠牲は斯る効力を有するや諸説一定せず。幼稚なる時代に在りては迷物説、共食説の如きも成立すべしと雖も、宗教的意識の發達せる時代に

在りては、更に他の説明なかるべからず。故に此時代に於る犠牲の意義を説明せんとして左の諸説提出せられたり。即ち代贖説(自己の代りに或なる動物を殺して其罪を贖ひ、刑罰を免るといふの説)祈禱説(犠牲は祈禱と同じく其宗教的感情を表白するに在りとなす説)典禮説(一箇の典禮にして、宗的事實を表明する摸表也となす説)及び犠牲の効力に關する初代の思想は宗教的意識の進歩と共に過ぎ去りて、此時代には之に代はれる一定の觀念なかりしとなす説是也。諸説各長短ありと雖も第四説最も取るべきに似たり。

【猶太教に於る犠牲】 俘囚より歸還以後の時代に在りて、猶太國民は莊嚴華麗の儀式を以て最も謹愼に犠牲的禮拜を行ひたりしが、犠牲に對する思想は預言者教訓の感化と宗教的生活の發達とに伴ひ漸次變化し來り、第二神殿の破壊せらるゝに及び、遂に會堂は神殿に代り、律法の研究は祭壇の儀式に代はり、此の如くして新約の時代に至れり。

【新約に於る犠牲の教義】 エルサレムの滅亡は一方に於て犠牲廢止の機會となりしが、他方に於て基督教は更に完全なる犠牲の觀念を供給することに依りて、舊約の犠牲制度を破壊するに至れり。新約の完全なる犠牲とは、基督の其身を以て献げたる犠牲にして、新約記者は、基督の死を以て贖罪也となし、其死は神人を調和せしめ、罪の赦免を與へ、人生に安慰を與ふる者也となし、而して人に悔改と信仰とに依りて此恩惠に預ることを得べしと論ぜり。此點に於ては新約記者の間に異説なしと雖も、基督の犠牲の性質及び如何にして基督の死は罪の赦免を人に與ふるやに關しては、新約記者の説一致せず。耶蘇は其死を以て救に必要也となしたれ共、其死と其効力との關係に就ては何等なも云はず。保羅は基督の死を以て神の義を滿足する爲に必要也となし、即ち義者は神の所有にして人の所有に非ず。故に預言者の見地より云へば、犠牲は眞實に神に仕ふる者の感情及び精神を表白する媒にして、其効果祈禱に同じ。祈禱其物のみは價値なしと雖も、之を献ぐる者の誠意及び向上心に依りて價値を生ずるが如く、犠牲其物のみは價値なしと雖も、之を献ぐる者の誠意及び向上心に依りて價値を生ずる也。

【祭司典の犠牲制度】 ユダ朝の滅亡と共にエルサレムの神殿破壊せられ、其住民巴比倫の俘囚となりしを以て、國民をして莊嚴なる儀式に依り犠牲を献ぐることは廢止せられたれ共、當時の宗教家は之を以て禮拜の方法に對する神の刑罰也とは思考せず、大預言者起りて神殿を再建し其莊嚴なる儀式を恢復すべしと思惟せり。而して巴比倫に俘囚となりし祭司等は神殿禮拜に關する詳細の智識を有せしが、後時を經て此等の人々の死するに及び、之を書に記録するの必要起り、其結果所謂祭司典なる者編纂せらるゝに至れり。此祭司典は當時の狀態に從ひ古代の禮典を修正したる者にして、エゼラ之を採用して宗教改革を行ひ、爾來猶太教禮拜の標準となれり。祭司典に記されたる犠牲の制度は利未紀、出埃及記(廿五—廿二、廿五—四十)及び民數記第(一—十、十五—十九、廿五—廿六)に記さる。(一) 犠牲の形狀 犠牲の品物に依りて區別すれば、動物犠牲、植物の禮物及び灌祭の三となす。動物犠牲は其中最も重要なる地位を占め、分ちて燔祭、罪祭、愆祭、酬恩祭の四となす。ユダ王國の末詩田經拜りに至り、遂に國亡びて民異域に虜となるに至りしが、預言者等は之を以て國民の罪惡に對する神の刑罰也となせしかば、犠牲を献げてエホバの以色列に對する興味を喚起せんとするの念起り、之がため有血犠牲被建し、燔祭、酬恩祭に加ふるに更に罪祭、愆祭を以てするに至れり。罪祭、愆祭の區別に就ては、或は前者は知らずして犯せる罪のため、後者は有意犯罪のため也と云ひ、又前者は客觀的に刑罰を道るとため、後者は主觀的に良心を悔むるため也と云ひ、又前者は公に犯したる罪のため、後者は竊に犯せる罪のため也と云ひ、其解説一ならざれ共、愆祭は其犯せる罪の改められ得べき場合に献げられ、罪祭は一旦爲したる害の回復し難き場合に献げられたり。植物の禮物は細麻より取りたる儘の穀物、果物、橄欖油、智及び無酵のパンより成る。有血犠牲と共に献ぐることあり、又植物の禮物のみ献ぐることあり。灌祭は他の禮物と共にのみ献げられたり。(二) 有血犠牲の効力 動物犠牲の主なる目的は人之に依りて神の目より贖はるゝに在り。然れ共犠牲は何物より人を贖ふ者なりや、リッチェルは人は罪ある者なるが故に犠牲に依りて神の穢厭より贖はれんとする者也と説きたれ共、人は神の愛きことを思ふと共に深く自己の罪惡を感ずる者なれば、犠牲に依りて自己の罪を贖はんとしたりしなるべし。次に犠牲の用は宗教的生活に入らんとするに在り。又神聖なる目的のために、人又は物件を聖別するも犠牲の用也。犠牲が神の恩惠を得る方法、罪の赦を得る手段として立てられたる者なる事は明なる事なれ共、如何なる意義に於て犠牲は斯る効力を有するや諸説一定せず。幼稚なる時代に在りては迷物説、共食説の如きも成立すべしと雖も、宗教的意識の發達せる時代に

イコニオム Iconium. と稱す。小亞細亞の古都にして、ピシデアのアンテオケよりデルベに至る道上、タウラス山の麓に在り。羅馬の治下に在りてリカオニヤの首府たりき。保羅及びバルナバ三度此地に來れり(徒十三の五十一、十四の一—六、廿一—二三五)。此處に宗教會議の開かれたることあり。又十字軍の時はゴッドフレー及びフンデリックバアロッサ之を占領し、有名の地となれり。

イサク [gen.] [人名] 猶太の族長。アブラハムとサラの間に生れたる子にして、彼が生れたりしにアブラハム百歳、サラ九十一歳の時なりき。アブラハム其信仰を試みられ、モリアの地に在りてイサクを殺して試ぐへしとの命に接せしが、エホバの使願にれてイサクを救ふ(アブラハムの條を見よ)。サラの死後イサク、アブラハムの意に從ひ、リベカを娶りて妻となす(創廿四)。百年二子を生む(廿五の廿一)。長をエサウと云ひ幼をヤコブと云ふ。イサク、エサウを愛し、リベカ、ヤコブを愛したりしが、ヤコブ、エサウの野より歸り來り疲憊したるに乘じ、羹を選めて家督の權を得(廿五の廿八以下)。又父を欺きて其祝福を得たり(廿七)。於是エサウ怒りてヤコブを殺さんとせしかば、彼れ遁れてパランに往けり。後イサク百八十歳にして死し、兄弟相和せり。イサクは三族長中最も弱き人なりしが、敬虔且從順にして、父より權承せる祝福を享受し、之を其子に讓れり。彼に關即ち創世記の記事は少くも三節の異りたる傳説より來れり。故に其間多少の矛盾ある者なきに非ず。

イザヤ [Isaiah.] [人名] 猶太の預言者、且獲聖書一—廿九章の著者。其偉大なる人格、政治家的才能、ユダ歴史の危機に際し祖國のために盡したる功勞、及び其後世に及ぼせる偉大なる感化に依り、預言者中の最大なる者と稱せらる。ウジヤ王の死せし年(�current 七四〇)若くは七三六)よりエルサレムが餓にセナケリブの手より救はれたりし年(七〇一)に至る間、若くは之より數年後迄預言せり。彼の生れたるは凡そ前七六〇年(羅馬建國の七年前)にして、アモスがベテルに顯はれし時彼は尚幼童にして、ホセアが北イスラエルにて預言を初めし時彼は尚青年なりき。而してミカは彼と同時代に生れ、彼よりも年少なりき。彼はユダの王ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの時に預言せり。彼の生時起りたりし重なる政治的出來事は、七四五年デグラテピルセルがアッシリヤの王位に登りしこと、七三五年アラム、イスラエル二國同盟してアッシリヤの援を請ひ、ユダを脅ぜしこと、其翌年デグラテピルセル、ダマスコを取りしこと、七二五年サルマナセル四世北パレスチナを脅ぜしこと、七一九年サルゴン埃及を敗りしこ

と、七〇一年セナケリブ、パレスチナを襲ひ、エルサレムを圍みしが、疫病の流行せしがため、俄に圍を解きて國に退きしこと等也。六九五年頃マナセ、ヒゼキヤに繼ぎて王位に即きしが、イザヤはマナセ王の治世に尚生存したりしや否明ならず。然れ共著人はヒゼキヤ王治世以後イザヤの預言を有せず。『ミシナ』の云ふ所に依れば、イザヤはマナセ王の爲めに殺されたりと云ひ、『イザヤの昇天』と題する僞經（紀元二世紀の產物）には、彼が鋸にてひかれたりとのことを記せり。此說果して眞實なりや、又希伯來書十一の廿七は此事實を云へる者なりや確言し難し。彼はアモタの子と所ぜらる（第一の一、二の一等）猶太人の傳說に依れば、彼はアマツヤ王の甥なりしといふ。彼がユダ歷代の王と親密なりしこと、政治的勢力を有したりしこと、及びイザヤなる名は『エホバは救也』の義を有し、而してエホバの名を用ゆるは王家に限りしこと等の事實より之を考ふれば、此傳說は眞實なるが如しと雖も、彼の先祖、教育等に就ては吾人其正確なることを知らず。彼は妻子を有し、其形は『預言者の妻』と稱せられ（八の三）其二子はユダ國歷史の或る局面の象徵として命名せられ、長なるシヤルヤシュブと云ひ（七の三）次をマヘルシヤラルハシバズと云ふ（八の三）イザヤに關し最も確實にして且最も著しき事實は、彼がエルサレムの市民にして、斷へず朝廷に出で王に接近したりし事也。且エルサレムは彼の思想の中心、終極の目的にして、又其當時の歷史の樞軸、彼が繫げる希望の頂點也。彼はエルサレムの地位、其結構、其街衢の形狀、其住人の風俗を描き、又勝利、包圍、國難及び地震の中に在るエルサレム、及び其禮拜、恐慌、放逸の有樣を描けり。彼が五十年間職ひたりしはエルサレムのためにして、彼の見ての預言はエルサレムに新生を得ませんとの苦語なりき。

以賽亞書 The Book of Isaiah. 【編纂】

希伯來預言者中の一書。イザヤの時代は東にアッスリヤあり、西に埃及あり、又スリヤ、アラム等各々猛太國の盤を窺ひ居り、朝廷は其暴衆の間隙を忘れて相鬪ざたる結果、北朝イスラエルは前七二二年遂にアッスリヤ軍のために滅ぼさる。イザヤは南朝ユダの人士が眼前に此悲劇を目擊し、乍ら自ら顧ることなく、或は欺を埃及に求め、一時の苟安を貪れるヤに通じ、或は好を埃及に求め、一時の苟安を貪れる有樣を見て、悲憤慷慨に堪へず、起て侃々諤々正議言論を唱へ、遂へる當代の人心を指導せり。此書の一一廿九章は即ち此イザヤの預言を記せる者にして、彼はユダ王ウヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの治世中エルサレムに住したりしと云へば、前七四〇年頃より七〇一年頃迄の間に預言せる者也（『イザヤ』の餘塵期）四十章以下は一般に第二以賽亞書と稱せられ、イザヤ時代よりも百五十年後即ち以色列國民がバビロニヤに俘囚となりし時代の作也。前後作者を異にすと雖も、此書は思想の高潔、偉大なる點より舊約文學中の一大偉觀也と稱せらる。

【結構及び內容】

本書六十六章より成る。然れ共前既に云へる如く、四十章以下は作者及び時代を異にす（後に論ずべし）今先づ便宜上一一廿九章を區分すれば左の如し。（一）一一十二章　ユダ、イスラエル兩朝に關する預言。七四〇年より七〇一年頃迄に預言せられたる者を集む。エヌルドは第一章を一大起訴狀也と云へり。イザヤ愛に其國民の神に背ける不信の罪を擧ぐ。二一五章にはユダの上に來るべき神の審判を詳論す。六章はイザヤの神に召されたるを記す。七の一一九の七はシロエフライム戰爭中（七三五—七三四）の預言。九の八—十の四は思ふに同時別中イスラエルに向て述べたる預言ならん。十の五—十二の六はアッスリヤの傷傲及び其流亡の有樣を描ける者。（二）　十三—廿三章　主として外國に關する預言を記す。預言者は歷史の轉移を觀察し、國家の興亡の中に神の目的の顯現を見る者とす。而して以色列隣國の運命は直接に以色列國民の依賴に關するを以て、希伯來の預言者は自國の立脚地より之を觀察し、其運命を預言せり。イザヤの外國に關する預言の特色は、彼が其預言せる國々の社會的物質的狀態を能く熟知し、每時其特殊なる方面を捕へて之を明ならしむる點に在り。（三）　廿四—廿七章　此三章は、互に密接の關係を有するを以て一預言也と信ぜらる。最も明了に世界の上に來るべき神の審判及び神の民の救を預言し、稀に或る傷傲、墓虛なる色（其名を記さず）の沒落、及び以色列の後享くべき幸福を描く。此預言はイザヤの時代に適せざる者あること、其文體及び思想のイザヤと異る者あるこに依り、近世の批評家は一般に之をイザヤの作に非ずと爲せり。此預言が何れの時代の作なりやは、歷史的地位に明白なる言及なきを以て確言し難しと雖も、俘囚時代以後の作なるべしと想像せらる。（四）　廿八—卅三章　ユダとアッスリヤとの關係に關する預言。先づアッスリヤに書き埃及に頼らんとするの無謀なるを說き、後イザヤの警告に從はざるよりユダ及びエルサレムの上に來るべき異害を預言す。（五）　卅四、卅五章　エドムと以色列との將來。諸國民殊にエドムの上に近づける神の審判、及び願はれたる以色列の上に來るべき幸福を預言す。

（六）　卅六—卅九章　列王記下十八、十九章に記せる物語に、イザヤの關係したる出來事を附加せる者にして、此書の編纂者が列王記より取りて愛に挿入したる者なること明也。

【イザヤの宗教思想】

イザヤの宗教思想の起脚點となりし二箇の事實あり。其一は以色列の道德的腐敗也。當時以色列人は故意にエホバに背きたるには非ざれ共、犧牲を獻げ儀式を莊嚴ならしむるを以て神に事ふる所以也と思惟し、盛に此等の事を務めたれ共、實際の生活は甚だ不道德にして、富者は貧者を苦め、寡婦孤者の訴は聞かれず、朝賂は盛に行はれ、奢侈の風亦甚だ盛なりき。於是イザヤは是れ彼等が神の性質と要求とを誤解するより來れる者にして、全然エホバの聖意に反する者なることを說き、神は正義の神にして、律法は既に之を明にせり、神は不道德なる生活と結合せる莊嚴の禮拜を好まずとの事を明にせり。第二の事實はアッスリヤ帝國起りてパレスチナ諸國を征服したりし事にして、彼は之を以てエホバが其愛する者を鞭ち給ふ一種の器械也となし、此器械も若し其本分を忘却し自ら專橫暴虐の罪に陷らば、エホバは之を拋棄して毫も假借し給はざるべしとのことを說けり。而して彼は力を觀めてエルサレムの不可侵を說き、假令ユダは敵のために擊破せらるゝとも、エルサレムは沒落す可らず、エルサレムの安全は神の攝理の重要なる點也と云ひて、終生エルサレムに住し、同情の淚と慈愛の念とを以て國民を慰藉せり。彼は曾て此の如き信念を以てアッスリヤ王サルゴンが大軍を率ひて、新にサマリアを陷れ、エルサレムに寄せ來りし、ユダの王朝上下色々を失ひし時に際し、毅然として聽れる軍兵の覆滅近きに在るを預言し、ヒゼキヤ王をして强硬なる態度を取らしめしが、果して彼の確信の如くサルゴンは俄に軍を率ひて國に歸りたりき。彼の思想に依ればエホバは主及び王にして萬物の上に超然たり。エホバの嶺高は全篇を通じて最も重なる思想にして、彼は聖なるエホバなる語を以て之を言ひ顯はせり。然れ共神は萬物の上に超然たると共に世界及び人類の歷史に遍在せり。神は無限に高しと雖も亦無限に近し。彼は正義なる神なると共に又仁慈ある神也。又イザヤの願はせる神は、合理的の神にして、專制的の神に非ず。彼は其民の父又教師なれば、彼等は彼と論するを得べし。又彼は一定の法則に從ひて自然及び歷史の中に働き給ふ也。イザヤは神に關し知此思想を有せしが故に、其書中に奇跡又は超自然的休徵なる者なし。彼は又ユダの將來に就て預言せしが、其倫理的方面に最も重を置き、エルサレムの潔められて義の邑となるべきこと、義と共に平和來り、平和と共に幸福來るべきこと、諸國民エルサレムに來り、以色列の神と其律法とを受くべきことなど說けり。彼のメッシヤはダビデの家より生れ、政治的權力を有する王にして、其民に宗教的恩惠を與ふる中保者に非ず。

【第二以賽亞】

四十—六十六章はイザヤの作に非ずとのことは前既に云へるが如し。此等の章は巴比倫の俘囚より以色列人民の歸還すべきことに就て預言せる者にして、此中にはユダが曾てアッスリヤ人のために蒙りたる困難及び危險に就ては何事をも言はず、エルサレム及び神殿は既に久しく荒廢し、以色列人民は俘囚の地位に在り。彼等の中には、神或は彼等を忘れ給ひしに非ずやと失望し、若くは無頓着に陷れる者あり。是れ此預言のなされたる時の狀態にして、彼等の無頓着なる心を警醒し、疑へる者を起し、彼等の救濟近きに在るを告ぐるは此預言の目的也。猶太人の巴比倫に俘囚となりしは五九七年及び五八六年の二回なりしが、彼期王クロスは五五〇年エホバの器となりて起り、亞細亞の諸國を征服して遂に巴比倫を滅し（五三八年）其翌年俘囚の猶太人をパレスチナに歸還せしめたり（綱一の一—三）然るに此預言にはメデヤの既に彼斯に併吞せられたりとのことを記せ共（四十一の廿五）巴比倫の滅亡は尙將來に在る者として記されたるを見れば、此預言はクロス王が尙東、西及び中央亞細亞を征服しつゝありし時、即ち五四九乃至五三八年になされたる者なるを知るべし。此預言者はクロス王の以色列國民の救濟者たるを知り、彼は巴比倫を滅し、神の猶民なるパレスチナに歸還せしめん爲めに神の用ゐ給へる器也とのことを告げて、其同胞を慰藉鼓舞せる也。此預言を分ちて三部となす。（一）　四十—四十八章　此等の章の目的は、其國民に來るべき救濟の確實なるを証し、何者も之を妨ぐること能はざるべきを告ぐるに在り。作者は此目的を達せんために、種々の議論を用ゐてエホバが其約束を成就し得る力を有することを示せり。（二）四十九—五十九章　此等の章に於て作者は、國民自ら歸還に與り、且之に伴ふ幸福を享受し得るやう道德的改善を謀るべしとのことを勸め、彼等もしエホバの召に應ぜば大なる將來を有すべきことを說き、且エホバの理想的僕を描寫せり。（三）　六十—六十六章　此等の章に於て作者は尙明に將來の理想的シオンの幸福を描けり。

【第二以賽亞の著者】

此書の此部分が巴比倫俘囚時代の終りに書かれたる者なることは、前云ふ處の如し。然らば此部分の著者は誰ぞ也。然れ共今更に少しく詳に其理由を示さ

んに（一）此預言がイザヤよりも凡そ百五十年以後の時期に屬すと云へる一事は、即ち作者のイザヤに非ざるを証す。何となれば預言の目的は元來其當時の人心を感動し、鼓舞し、作興するに在る者なれば、當時と極めて縁遠き百五十年後に起るべきクロス王の事を夢想し、之を其國民に告げたりとて何等の利益なければ也。（二）第一以賽亞書と第二以賽亞書との間には、文體に著しき相違あり。チェーネは第二以賽亞書より第一以賽亞書の用ゐざる語凡そ二百を擧げ、且詩句の組立にも兩者の間に相違あることを指摘せり。又第一以賽亞書の概して侃々諤々たる正論議論と、簡短にして氣力ある文體とに反し、第二以賽亞書の文體は頗る情趣に富み、人情に訴へ想像を巧に運用するの技を顯はせり。是れ決して同一人の手より出でたる者に非ず。（三）兩者の思想の間にも亦相違あり。例之第一以賽亞書は主としてエホバの無限を描き、第二以賽亞書は主としてエホバの崇高を描き、第二以賽亞書は造物主、宇宙の支持者、生命の本源、歴史の創作者、無始無終永遠の神、對比なき絶對者也。又第一以賽亞書には、忠實なる殘れる者の神の審判を免るべきことを說けど共、第二以賽亞書には此思想明白ならず。エホバと異色列國民との關係、即ち異色列國民の選ばれたること、其逐命、其懲罰の目的も、第二以賽亞書は第一以賽亞書より異りたる言語、思想に於て發達せり。又第二以賽亞書にはメッシヤ的王の觀念なく、エホバの僕の觀念とに代れり。凡そ此等の相違は兩部分の著者の同一人に非ざるを示す者也。然らば第二以賽亞書の著者は何人なるべきや、吾人は之を知らず、唯無名の大預言者也と云ふの外なし。

【參考書】 總論としてはクイチン。ドライヴェルの舊約聖書總論最も可也。其外ナェーネの『年代的に排列せる以賽亞書』（一八七〇）及び『以賽亞書總論』（一八九五）ドライヴェルの『イザヤ、其豫言時代』（一八九三）ダヴリスの『以賽亞書の一致に關する議論』（一八九二）等あり。註釋書にてはチェーネ、ヴェルハウゼン、アダム、スミスの『以賽亞書』（原野彦太郎譯あり）邦語にては日野眞澄譯述『以賽亞書講義』を佳とす。

以賽亞の昇天 イザヤの昇天 [The Ascension of Isaiah] 書名 經外默示錄中の一書。初代教會の教父中に、イザヤの名を負へる經外文籍あるを云へる者あり。オリゲンは之を『イザヤの殉教』と云ひ、エピファニオスは『アナバチコン』と名け、エロームは『昇天』と云ひ、又之を『イザヤの異象』と云へる者あり。此四書の關係如何は勿論、此等の書の何物たりやを確實ならざりしが、一八一九年大監督ローレンス（Archbishop Lawrence）倫敦の或る古本屋にて、偶然にもエチオピア語の『イザヤの昇天』を發見せり。此書二部に分れ、一―五章迄には、ヘゼキア王の廿六年イザヤ、マナセがサタンに惑はされ惡を爲せしこと、ヘゼキアの死後マナセ集してサタンに誘はれ惡を爲せしこと、イザヤ逃れて荒野に赴きしこと、サマリア人バルキラ、イザヤを誣告せしこと、イザヤ基督の第七の天より來ること、其死、復活、昇天、再來等のことを預言せしこと、及び述へられ、終にてひき殺されたることを記す。六―十一章には、ヘゼキア王の十二年イザヤ異象を見、之を王に語りたること、即ち天使彼を取り昔穹及び六の天を通りて第七の天に達し、此處にアダム、アベル、エノク及び神を見たること、又基督が地上に降るべしとのことを聞きたること、同じ天使に携へられて昔穹に歸り、此處にて耶蘇の將來に於る生誕、生活、苦難、死、復活及び昇天を見、而して彼天使に分れて地上に歸り來りしこと、マナヤがイザヤを殺したるは、彼が此異象をヘゼキアに語りしがために基れたる者に非ず。異象には基督教的默示錄と同一種類の者にして、蓋し第二世紀の作なるべく、殉教の物語はイザヤの死に關する傳說に基きたる者にして、蓋し耶蘇生誕少し前に成りたる者なるべし。

意志 Will. 術語 舊約にも新約にも意志を能力として顯はしたる言語なし、又意志の働を抽象的に考へたる處もなし。當時尙未だ心理的反省力の發達せざりし時代なりしかば、『望む』『喜ぶ』『愛する』『憎む』等の言語の中には、意志の觀念をも含蓄せり。又當時の人々は動機と之を意志に依りて適用することゝの間に存する相違を認めず、又意志の働と其運用に伴ふ感情との區別をも認めず。舊約に於て殊に然りとなす。

【人の意志】 意志の自由とは、一般の領解する處に從へば、人は少くとも或る範圍内に於て自ら決定する力あり、動機に從ひ若くは之に抵抗する力あり、或る程度に於て自己の品性を更改する力ありとの義也。然れ共聖書に所謂道德的自由は精や之と異り、單に罪の奴隷の反對なゐふに過ぎず。此點より見れば『自由』とは、神の計劃し給へる如く、人の眞正の性質に從て動作する力を有することも也。而して其中に惡の傾向なく、全く神聖となりしが故に、完全なる聖徒の如く、最早惡を爲し得へしと想像せられ難き人々は、此意義に於て自由にして、眞に自由を得たる人也といふべし（約八の廿二―廿六、羅六の十七―廿二、八の十八―廿一、雅一の廿五、二の十二）。此思想の中に深き眞理あるは明なることにして、是れ又神自身の自由ならざる可らず。人に今日或る程度迄は自由を有せりや否やの問題に關しては、基督教神學者の間に異說あれ共、彼等は皆一樣に、人は元來此語の普通の意義に於て自由を有したりしとの事を聖書より推論せり。而して人類墮落の物語及び其後に明白に示されたる言（例之傳七の廿九、雅一の廿一―廿二）の中に含まれたる所の者を聽れて考ふるも、是れ實に全能全智にして且純善なる造物主にふさはしき事也といふべし。人の墮落せる狀態は從れ自身の過失に歸せざる可らず。神は或る善き理由に依りて人の誘惑に逢ふを許容し給へり、而して神は人が此誘惑に克ち得たらんことを欲し給ひしや明也。換言すれば、神は眞の善を分別し得る足る光明と、又之を撰擇し得る力とを人に與へ給ひしかども、人は自ら惡を撰みたりし也。然れ共人は最初の墮落に依りて全然道德的自由を失ひ、從て抵抗し難き神の恩寵に依るに非ざれば、救はるゝ望なも失へりとの說は、聖書の教訓に非ず。聖書が人は罪の奴隷となりたり、故に自ら自己の救を全ふすること能はず、凡て神に賴らざる可らず、善に向ふ最初の動力さへ又神に賴らざる可らずとのことを教ふるは明也（弗二の一、五、八、羅三の廿四、多三の四―六、約六の四十四、六十五）然れ共最も強く此思想を表自せる語の中にも、神の惠を受け又ほ之に抵抗することを以て人自身の意志に歸せざる者なし。又最も強く人の無能なることを主張せる聖書記者も、其他の記者と同じく、人は自ら其言行及び性情に對して責任を負はざるべからず（約一の九、十、五の四十、六の四十五、腓二の十二）又正義の通常の法則に從て賞罰を受けざる可らずとの事を明言せり（羅二の一―十六、三の十九―廿一、約七の十七）。此言すれば、世に生れ出でたる人は皆尙試練の中に在る也。故にアダム墮落の物語は、又各人の靈魂に常に新にせられつゝある善惡爭鬪の物語に外ならず。

聖書には一方に人の道德的自由の教義あり、此二者は自家撞着にして調和し難しと雖も、聖書の權威を信ずる者は共に之を承認せざる可らずと論ずる者あれ共、是れ眞理に非ず。思ふに此の如く思惟するは後世起りたる神學說の影響に依ることなるべしと雖も、聖書記者自ら此の如き矛盾ありと思惟したるの痕跡なし。自由意志の思想に附帶せる眞の困難は、神の恩寵及び人の責任に關する道德的、靈的眞理を一箇の說に結合することには非ず。善人は聖書の教訓より、神の靈は人の意志の凡ての正しき動作と共に在り、又之に先だて道德的所的善の根源也との事、神の恩寵は人の可らずとの事、此恩寵は人を救拯に導かんため或る度に於て凡ての人に與へらるべき事、然れ共神の愛に應じ、其導きに從ふは人の責任也との事を學ぶ也。アルミニウス派、カルヴィン派及びペラギウス派の人々の爭論に入り來れる議論は、恐らく何物よりも神の恩寵に關する疑惑の觀念より來りしなるべし。故にカルヴィン派は或る場合に與へられたる有效の恩寵と、他の場合に於る救拯の目的なき神靈のはたらきとを區別せり。故に又他方に在りてペラギウス派は、人に神より離れて善を爲し得べしと想像せり。然れ共是れ聖書の教訓に非ず。聖書の教ふる所に依れば、神の靈は其生命を與へんために凡ての人の靈の上にはたらき給ふ、而して人もし之を受くる時は、其道德的、靈的生活は假令其初め如何に不完全なるも漸次成長發達して止まざるべし。此の如く人は一方に於て全く神の恩寵に頼る者にして、其救はるゝも亦神の恩寵に歸せざるを得ざるを以て、自ら誇るべき功德なし。然れ共又他方に在りては、神の恩寵を受くると否とは、全く彼の自由の意志に存せざる可らず。故に彼は又道德的責任を免るゝを得ず。是れ聖書の教ふる教訓也。

此の如く聖書の教訓に依れば、少く共神の靈の導きを受け、又は拒むの範圍に於て、人は自由也。然れ共斯く云はゞ、必然論を唱ふる經驗哲學者又は自然主義の徒は云はん、神の導を受け又は拒む事、及び之に伴ふ感情、思想、目的は、外部の原因に依りて決定せられざれ共、是れ品性の生ぜる結果に外ならず、而して吾人もし人の祖先、履歴及び現在の有樣を熟知せば、此品性の生ぜる結果を預言することも亦難きに非ず。此說は心意の現象を以て自然法の支配する者也となすより來る者にして、近時自然法に關する吾人思想の範圍著しく擴大せるが故に、吾人の經驗は悉く其下に來る者也と信じ易き傾あり。然れ共之に反して、人に皆潤擇の力、自己の行爲に對する責任の念、悔悟の情、及び眞理に忠ならず、正義に缺くる所あり、又は勇氣に乏しき場合に在りては之を非難する心あるを自覺する者にして、此等の事實は必然論を以ては充分に解說し難し。蓋し人の品性、行爲の源泉には、自然世界に行はるゝ法則にのみ支配せられざる要素あり、人は各々自ら決定する力あり、其限界狹小なるも尙創始的、原做的の範圍を有するが如し。聖書に依りて之を推論するに、思ふに全智にして仁愛に富める神は、人を靈性ある者として造り給へる時に、自己の權能を聘ゐも減少するこ

さなくして、自己の如き力(比較的微小なる)を之に與へ、彼をして其受けたる教育、鍛錬に從ひ自由に之を用ゐしめ給ひしなるべし。カント、ヘーゲルを初め過去百五十年間に出でたる哲學者の中には、之と均しき意見を有する者亦少からず。吾人は唯萬有神說に陷らざるやう、神の意志と人の意志との區別を超絶哲學者の爲したるよりも更に明になすの必要あるのみ。但し即の束縛、神の恩惠及び攝理の教訓に重きを置く聖書が、人の自由に限界あるを看過せざりしは明也。然れ共假令人は其有する所の自由小也とするも、之がために其責任を逃るべきに非ず。且善眞なる神は常に人を導きて善を爲さしめんとするが故に、人は其與へられたる自由を利用して熱心善を なさゞる可らず。是れ聖書の教ふる教訓也。

【神の意志】 聖書に依れば、天地は神の意志の働より生ぜりと稱せらる(默四の十一、創一の三、六等)又神の意志は人の動作に眞の目的と標準とを供すと記さる(約七の十七、羅十二の二、四四の十二、太六の十、撒前四の三)舊約の律法を直接に『神の意志』と呼びたること明也(羅二の十七—廿)耶蘇は其使命を神の意志に歸し(約四の卅四等)保羅は其傳道の行程を神の意志の導に歸せり(哥前十六の十二)又人の受くる種々の運命も神の意志に依れりとなせる處あり(哥前三の十七)尙意志に關しては『際落』『恩寵』『預定』『選』等の條を見よ。

イシドール 聖 St. Isidore. 人名 セヴィルの大監督(六〇〇—六三六)西班牙の學者にして、西班牙に於る古代拉丁學最後の代表者也。セヴィル(六一八)及びトレド(六三三)に於て開かれたる宗教會議の議長たりき。百科字彙の如き書を著はし、其中に美術に關する古代異教の思想と基督教の教義とを調和せんと試みたり。

イシボセテ Ishbosheth. 人名 頭太の王サウルの子。サウル及び其一族ギルボアの戰に於て戰死し、イシボセテ唯獨り遺さる。サウルの軍の長アブネルは彼を立ててヨルダン河東及び以色列の王となす。ユダの家はダビデに從へり。彼れ時に齡四十歲(母後二の八—十)性怯懦にして唯アブネルに依賴せり。アブネル、サウルの妾リツパと通じたりとのこと聞えければ、イシボセテ、アブネルを呼びて之を責めしに、アブネル大に怒り、却つて其忠誠を忘れたるを責め、國をサウルの家より移してダビデに與へんと云ひ、又使をダビデに遣はして以色列を悉く彼に歸せしめんことを約し、自らダビデの軍の營に至りて其契約をかためしが、歸途ダビデの軍のヨアブに殺さる(母後三の二—卅九)イシボセテも亦其二人の臣のために殺さる。彼等其首級を携へてダビデの許に至りしに、ダビデ彼等を殺し、厚くイシボセテを葬れり(母後四の一—十二)。

イシマエル Ishmael. 人名 アブラハムの其妾ハガルに生まれたる子。其物語は創十六(エホバ記者傳說に基く)十七、廿五(祭司典に基く)廿一(エロヒム記者傳說)に記さる。アブラハムの妻サラ子なかりしかば、其侍女ハガル孕みしかば其女主人を輕蔑したり。サラ怒りて之を苦めしかば、ハガル、サラの面を避け埃及の途に向ひて逃たりしが、エホバの使ジュルの泉の傍にて彼に顯れ『按孕めり男子を生まん、其名をイシマエル(神聽知)と名くべし、エホバ汝の親縁を聽知し給へば也。彼は野驢馬の如き人とならん、其手は諸の人に敵し、諸の人の手は之に敵すべし、彼は其諸の兄弟の東に住まん』と云へり。イシマエル生れて十三歲にして割禮を受く。サラ、イサクを生みて後、イシマエルの戲むるを見て之を嫉み、アブラハムに向ひて『此婢と其子を追出せ』といふ。ハガル其子を携へベエルシバの曠野に彷徨ひしが、革囊の水盡きれば、イシマエルと相離ひて坐し聲を擧げて泣く。神其聲を聞き『起ちて童兒を起し之を汝の手に抱くべし、我之を大なる國となさん』と云ひ、且ハガルの目を開きて水の井あるを示せり。イシマエル長じてパランの曠野に住み、埃及より妻を迎へたり。イサクと共に其父を葬り、百三十七歲にして死す。彼の子孫は契約國民の世嗣に非ざりしが、彼れ十二人の子を生み、其子孫パレスチナの東の曠野に住せしが、南方彼斯灣及び北亞剌比亞の方面に漲ぎり、アラブ十二種族の祖先となれり。イシマエルは他の族長と同じく、史的人物として之を考察すべしと雖も、創世記に記されたる物語は、其子孫也と想像せられたる人種の特質に依りて着色せられたること明也。即ち『彼は野驢馬の如き人とならん』云々と云へるが如きは、アラブ人種の特質を示せる者にして、サラのハガル及びイシマエルに對する嫉妬は、以色列とアラブ民族間の關係を示したる者として見るべし。又保羅はイサクとイシマエルの物語を譬喩的に解說し、靈の宗教の儀文に對する勝利になぞらへたり(加四の廿一—卅一)。

意匠論的證據論 イシカリオテのユダ 種族名 『有神論』の條を見よ。『ユダ』の條を見よ。

以色列 Israel. 爰には主として以色列國民政治的歷史の概略を示す。其宗教的歷史は他

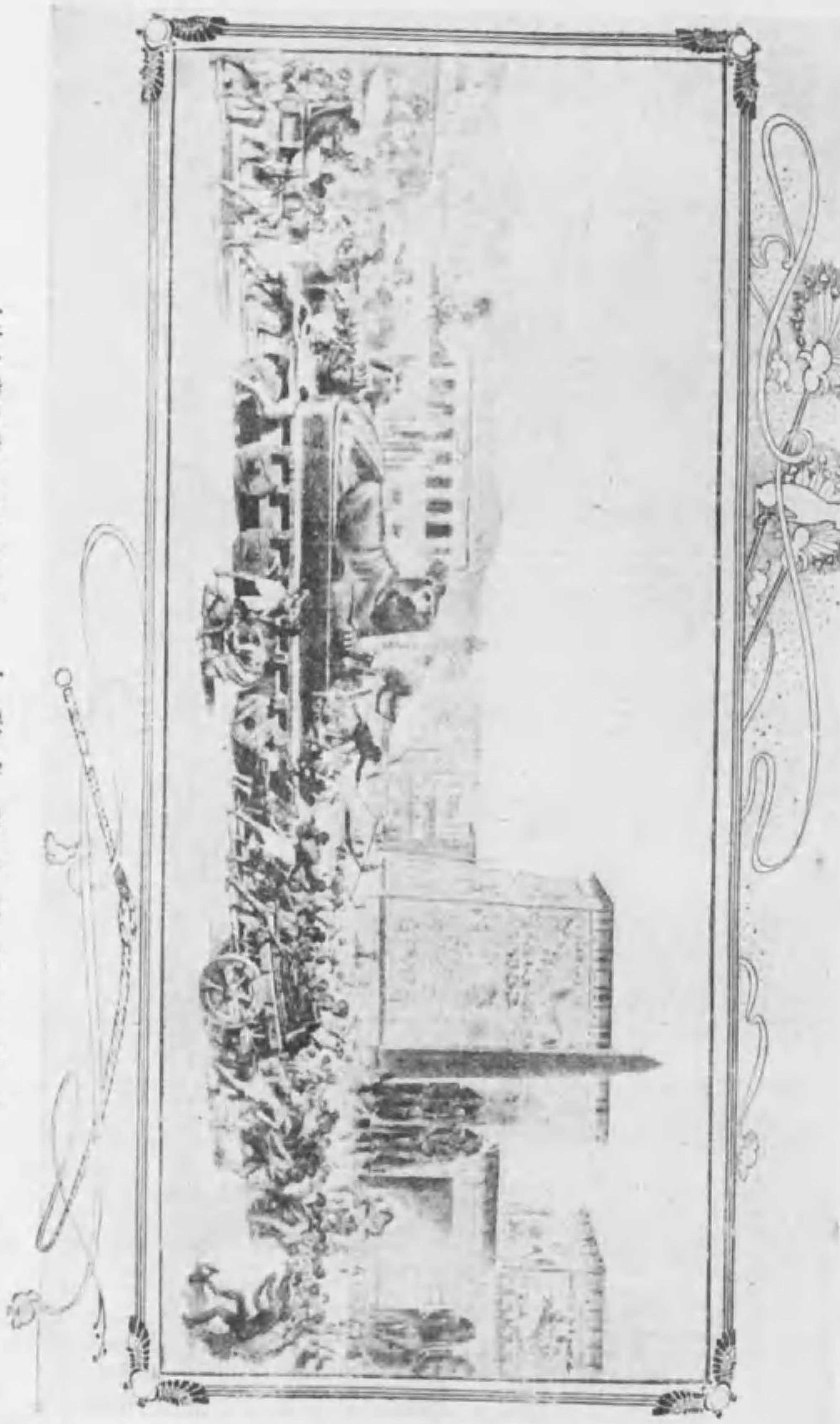
の條下に論ずべし。

【國民の名稱】 舊約時代の以色列人は自らイスラエル(ישראל)と稱す。其祖の名に取れる也(創四十三の六、八、十一)外國人、及び彼等が外國人に對する時は、ヘブル(希伯來)(עברי)と稱す(創世九の十四、十七、出一の十六、二の六等)何故にヘブルと稱せしや明ならざれ共、創世記十の廿一、廿三の『エベル』より來りしか、然らざればエベール(עבר)なる名陶の形容詞『彼岸』(賽七の廿、耶廿五の廿二)なる語より來りしなるべし。果して然りとせば、ヘブル人とは彼岸の或地方より迦南に侵入し來れる人民也との意なるべし。彼等は又猶太人(Yehudim, Judeus(又はJuif))と稱せらる。此名稱は主としてユダ族より來れり。

【人種的特質】 初めて迦南の地に入り來りし以色列人は遊牧の民にして、天幕に住せり。彼等は粗朴なる生活を以て滿足し、埃及の文明、迦南の教化に對して無頓着なりしが如し。彼等理想の生活は牧者にして(創四十六の廿二—卅四)又簡易なる農作を勉めたりき。最古の文學に顯れたる處に依れば、彼等は勇敢、冒險的、秘密、虐詐にして復讐を好み、當時一般に行はれたる多妻主義の範圍内に在ては、男女の情交に於て比較的純潔の風ありき。今日猶太人の特色として顯はれたる商業的才能は當時既に何四阿(十二の七、八)亞歷士(八の四、五)之に言及し、彼等は詐僞、欺騙を行へりとヘ云へり。思想の方面に在ては、彼等は哲學的に非ず、又組織的にも非ず。彼等が哲學上の大問題は世界に於る神の攝理にして、選人何が故に榮ゆるやとは彼等の最も關紫を繞りたりし問題なりき。彼等の思想は主として實際的宗教の方面に向ふ。彼等は實に最も宗教的にして、信仰に依りて幾多の苦難に堪え、且當時一般の他國民よりも高貴なる道德を維持したりき。

【以色列人の國土】 以色列人は國をパレスチナに有せり。パレスチナは古代東方諸國の中に在りて緊要なる地位を占めたり。北西利亞(メソポタミア)より(ユフラテス)及びチグリス河の谷地及び埃及に通ずる道はパレスチナの海岸に沿ふて走り、ダマスコより亞剌比亞の四海岸に通ずる道はヨルダン河の東に沿ふて走り、又ダマスコよりシロ及び四方諸國に通ずる道は北の方エスドラエロンの沃野を橫ぎり、パレスチナは此等の要路に接近せしを以て、以色列人の物質上道德上に與へたる影響少からず。且パレスチナは此の如き位置に在りしを以て西亞强國の運動に無關係なること能はず。即ちダマスコ人シロの海岸に向て其商業を發展せんとするか、若くは紅海の貿易に向て新出路を求めんと欲すれば、勢ひ以色列人と講和を爲すか又は之を職はざる可らず。ユフラテス河岸の帝國(アッスリヤ、巴比倫、波斯)にして埃及を征服せんとすれば、道をパレスチナに借り、以色列に大恐慌を與へざる可らず。又埃及にして其境域以外に職はんとすれば、之に援助を與へ、職もし敗れば先づ自ら危難を負はざるべからざるはパレスチナ也。然れ共吾人は之と共に二箇の事實を記憶せざるべからず。即ち一は以色列は當時海と全く隔れ、列方諸國に向て勢力を振ひしはフェニキヤ人なりしとの事にして、二は以色列は全體として西亞の强國と關係したりしと雖も、南王國は比較的孤立の地位に在り、聯ヘすダマスコと爭ひ、シロと交通し、先づアッスリヤの壓迫を感じ、先づ之が爲めに滅ぼされたる者は北王國なりしとの事也。南王國は唯土地南方に偏在せりと云ふのみに非ず、山嶽の地、攻め難く守り易し。是れ北王國に比して長く其獨立を保ちたりし所以也。パレスチナは希臘の如く數多の小邦に分れ、且各種の人種共に雜居せり。以色列人が初めて迦南に入りし時は、七の民族在りて爰に住せしが(申七の一)彼等は此等の中に住み且彼等と雜婚せり(士三の五)唯に此時のみならず、外國人は常に彼等の中に住し、彼等の上に大なる感化を與へたりし事は其歷史の証する所也。パレスチナの地味に關しては『乳と蜜と流る地』と云ひ(民十三の廿七)『葡萄、無花果ある地』(申八の八)と云へり。此は遊牧の民が牧畜の地として稱讚したる言にして、其岩がちなる谷地は葡萄及び無花果に適し、其丘陵と高原とは牧畜に適すれ共、耕作に適する土地は少なく『大麥、小麥の地』(申八の八)と稱するに足るべきほど僅にエスドラエロンの地あるのみ。其海岸地方は豐饒なりしと雖も當時はペリシテ人之を領したりき。故に以色列人は穀物の供給に乏しく屬々饑饉に遭遇し、且屬々疫疾に罹れたりき、故に又『其中に住む者を呑み滅ぼす地也』(民十三の廿二)と稱せられたりき。

【以色列國民の歷史】 (一) 以色列國民の起源 創世記に記されたる最古の記錄に依れば、以色列諸族の關係左の如し。



埃及に於ける以色列人（ポインテル氏の畫より）

以色列

- テラ
  - ナホル－タムエル－アラム
  - アブラハム
    - イシマエル－シナイ遊牧の民
    - イサク
      - イスラエル
      - エドム
  - ハラン－ロト
    - アンモン
    - モアブ

アラム（アラミアン又は西利亞人）及びシナイ半島の人民が、以色列人と關係を有したりしや否やに關しては、學者の間に多少の議論あれ共、最古の記錄は之を以て均しく以色列人に關係あるを證せり。要するに以色列人は北方より南方に向ひ、埃及の勢力下に來りし種族なりしこと最古の記錄の證する所也。（二）埃及の勢力下に在りし以色列人　以色列人は其地の饑饉を避け埃及に往き、ゴセンの地に住せり（創四十六の廿八－四七の四）然るに其子孫の漸く繁殖して强大となるに及び、埃及人其已に臨せんことを恐れ、重き工役を課して之を苦め、又生む所の男子を悉く殺すべきことを命ぜり（出一の七－十六）埃及の記錄にも彼等がラムセス二世乃至四世の頃アペ

以色列

埃及及びシナイ半島の圖

以色列

ルと稱する外國人に工役を課したりしこと事傳へらる。アペルとは思ふにヘブルの事なるべし。但し以色列人の埃及に苦められたりし時代及び其出埃及の時代は尚審に之を知るを得ず。（三）出埃及及び荒野に漂泊せし事　以色列人は久しく埃及人の苦役に苦みしが、遂に摩西（モーセ）に導かれ埃及を逃れ出でたり。パロが摩西の請を容れ、彼等の歸國を許すに至りし迄には凡そ八回の災禍埃及に降れり。パロは彼等を許して國を去らしめし後之を悔ひ其後を追ひしが、エホバ終夜强き東風を以て紅海の水を退かしめ、海を陸となしたりしかば、彼等は難なく之を踰ふるを得たり。斯くて彼等は四十年の間亞剌比亞の野に漂泊せしが、彼等が迦南の地に入る前斯く長く漂泊せざるを得ざりしは、其力未だ迦南を征服するを得ざりしが爲めなりき（出十三の十七、民十四の三、四十等）而して此四十年間に於て宗教を基礎とせる法度制定せられ（出十八の廿五－廿四の十四）エホバと彼等との間の契約成り、之に依て彼等が國民的精華の基址の据えられたるを見る（出卅四の十－廿七）而して以色列に律法を與へたるは摩西にして、十誡は即ち摩西の宗教の撮要也。出埃及記十九－廿四と卅四との關係は詳ならず、前者に記せる十誡と後者に記せる十誡との一致に就ても學者間に

黒説あれ共、エホバのみ以色列の神にして、偶像を彫み若くは之を拜す可らずとは摩西の宗教の眞髓也。

（四）　迦南の征服　以色列人が西パレスチナに入る前に、ヨルダン河の東に在て最も堅固なる根據を造りしとの事は一般に承認せらる。彼等がヨルダン河を渡り西パレスチナに轉てりとの事に就ては二箇の記錄あり。其一は約書亞記二の一―十一の九に記されし、其中にはラハブが以色列の間者を納れし事、ヨルダンの河水乾きし事、エリコの落城、アカン誅れし者み取て罪を犯せし事、二回アイを襲擊せしこと、ゼベオン人と和を結びし事、ベスホロン及びメロム河に於る戰爭等の記事あり。此記錄に依れば約書亞は摩西の後繼者にして、又以色列全民族の嚮導者なり。而して彼等は一致共同して敵に當り、アイに於て擊退せられしことの外は悉く勝利を得た事、ゼベオン人と和を結びし事、ベスホロン及びメロム河に於る戰爭等の記事あり。此記錄に依れば約書亞は摩西の後繼者にして、又以色列全民族の嚮導者なり。而して彼等は一致共同して敵に當り、アイに於て擊退せられしことの外は悉く勝利を得た

以色列十二種族に分割せられたる迦南の圖

り。他の記錄は約書亞記の終及び士師記第一章に散在せる者にして、其文體初の記錄と異らず。然れ共此記錄に依れば以色列全民族約書亞の下に在りて戰へりと爲さず、數個の種族各々團結を造りて戰へりとなせり。此記錄は最初の記錄と矛盾するには非ざれ共、斷片的にして且不完全也。此二箇の記錄を併せ考ふるに、以色列人の西パレスチナに入りし次第凡そ左の如し。即ち彼等は摩西を失ひて後約書亞を立てゝ其繼續者となし、迦南征服の途に進めり。ヨルダン河を渡り、エリコを陷れ、ゼベオンと和し、ベスホロンに於て南部諸民族と戰ひ大に之に勝てり。此連戰連勝に依りてユダ族は意氣頗る昂り、本隊より分れて南方に向ひカレブと聯合せり。約書亞はヨセフ族の長となり、且後に至りパレスチナの北部に移住せる諸族を率ひ、勝に乘じてエスドラエロンの原野を横ぎり、メロムの河に於て北方諸民族と戰ひ大に之を破れり。然れ共迦南人は後再び勇氣を鼓し戰車を整へ城壁を堅くして、エスドラエロンの守を恢復せしかば、以色列人は退きて山地を守らざるを得ざるに至れり。

（五）　以色列國民の團結　此の如く以色列人は全く迦南人を征服することを能はず（書十の四十、十一の十四、申二）。半ば征服せられたる多數人の中に定着したりしことなれば、何れの系統、何れの文明、何れの宗教を生存せしむべきやとは直ちに起り來りたる問題にして、其結果は兩者を妥協、調和せしめ、後に至りてサウル及びダビデの王國の建設せらるべき混和的基礎を造りたる事なり。迦南的以色列人は最早遊牧の民に非ず、農耕者、市府居住者、商人にして、廣く世界の形勢に注目し、四囲諸國の要衝に力りて國を爲すべき國民として適當なる者となれり。宗教に於ても彼等は厳密なる一神教を奉て、迦南人の神廟に參詣することも許せざるに至れり。且人種に混合し、人口は增殖し、後ダビデが此等の迦南的以色列人を以て編成せし軍隊の如きは頗る大なるものなりき。而して以色列人の此變化は士師時代に於て起りたる者也。

（六）　分離以前の以色列王國　王國を建設して其組織ある統治を受けんとするが如きは、幼稚なる以色列人の企て得べき處に非ざりしが、其中に入りたる迦南的要素は又彼等をして王を立て統一ある政府を組織せしむるに至れり。彼等が王國を建つるに至りし次第に就ては二箇の記錄あり。其早き記錄（母前九の一―十一の十五）に依れば、エホバ、ペリシテ人の手より以色列を救ふべき王（サウル）を選び、之に膏を灌ぐべき事をサムエルに命ぜり。サムエルはサウルを

ダビデ及ソロモン王國

に以色列人の凡ての望の達げらるべき事を約し、許後と共に在ませば心を盡して王の務を爲すべしとの事を告げて之を勵ませり。然るに他の記錄（母前八、十、十二）に依れば以色列人はサムエルの子等の惡政に滿足することを能はず、來りて王を立て彼等を勵かしめよと云ひしかば、サムエル聞て喜ばず、之を以てエホバを罪つる者也となせしが、遂に其請を許せり。然れ共彼は彼等遂に之を悔ゆる時來るべしと云ひ、又彼等が王を求めしことを以て大なる惡也と云へり。然れ共此記錄は他の事實と合せず、最初の記錄に近し。蓋くてサウルはペリシテ人の以色列を壓迫せる時に方り王位に即き、其在位の間常に四囲の諸國と戰へり。彼は實に戰士にして、幼稚なる以色列國民に如何に戰ふべきかを教へたりき。彼に繼ぎて王位に即きしダビデとす。ダビデは強大なる王國の建設者、組織者にして又學に巧に、雄弘にして能く騒ひ、辯舌さわやかに（母前十六の十八）善き人にして思慮に富めり（母後廿三の一―七）彼が四囲の諸國を征服し天下を一統し、王國の基礎を堅ふしたることは、又強大なる智力の人なりしを推知すべし。其在位の間起りたる著名なる出來事として特筆すべきは、第一エルサレムを以て其首都と寫めたる事、第二ユダ族强大となりて之より以後以色列の歴史に重要なる地位を占むるの基を開くに至りし事、第三數個たる以色列民族が埃及よりユフラテス河に達せる一大王國を建設したる事是也。當時アッスリは其勢振はず、ヘヤ人は衰へ、埃及亦微弱なりしかば、紀元前一〇一七―九三七年即ちダビデ及びソロモン在位の間以色列は其旺盛を極めたりき。ソロモンの治世は華麗なりしかども其だ疑問にして、彼は三萬人の徴募人を起して工役を課し（王上五の十三以下）一千の紀頭を貯へ（十一の三）異邦の妃及び同盟國人の甘心を得んが爲めに異教の禮拜を許し（十一の五、七）壯大なる土木を起して、異邦の工匠を用ゐ（五の十八）又神殿の中に異邦の意匠を施したりき（六の廿三）彼が果してダビデの如き宗教的信念を有したりや其だ怪はし。

（七）　アラムとの百年戰爭　ソロモン王國は遂に分離し、南牛（ユダ）は比較的平安を保ちたりしが、北牛（イスラエル）はダマスコのアラム人（西利亞人）を防禦するの術に當れり。アラム人は商業の民にして、パレスチナを經て地中海岸に其出路を求めたりしが故に、イスラエル人は其攻擊の術に當らざるを得ざりき。而してオムリ朝の諸王は能く勇氣と機智とを以て彼等に當り（十六の十六―下九の廿六）他方ツロ及びユダと同盟を結び、新都府をサマリアに建て城壁を堅ふせり。アハブはアベクにベネハダデを破り（上廿の廿六）ヨラムはハザエルよりギレアドを恢復したりしが如し（下八の廿八）然るに其後エヒウ及び其子孫の朝に至り形勢一轉し、アラム人はエヒウの子エホアハズの軍を壓殺し、ヨルダンの東の

ユダ及イスラエル王國

地を悉く掠取せり。又ハザエルは北王國（イスラエル）を横ぎり、ペリシテの境に至りがトを略し、エルサレムに迫りたることありき。（下十二の十七）當時イスラエルの國運は最も甚しかりしが、エセカ朝の第三の王ヨアシに至り形勢又一變し、彼は三度ベンハダデを破り、ハザエルの爲めに略せられたる地を恢復せり（十三の廿五）且ユダの王アマツヤを內亂を攻へ、エルサレムを陷せり（十四の八―十四）其子ヤラベアム二世に至り、ダマスコとハマテを再びイスラエルに歸せしめたり（十四の廿八）アハブ王の宗

数的政策は其同盟國なるツロのバアル禮拜を守護するに在りき。彼がイゼベルのエホバの預言者を殺すを許したりしは、彼等が王の此政策に強く反對したりしが爲めなりき。之に反し預言者エリヤの事業及び彼を保護したりしエヒウ朝の政策は、バアル禮拜者に大打擊を與へ、彼等をしてイスラエル國の主權者より再び其宗教の保護を仰がんとするの念を絕たしめたりき。ヤラベアム二世の治世は王國分離以後以色列民族の達したりし物質的繁榮の極點にして、又道德的腐敗の極點たりしなるべし。預言者アモス及びホセアは此時代に起り此腐敗を攻擊したりき。彼等教へて云く、神は唯以色列の神のみに非ず、又世界萬國の神也、神は其道德的狀態の如何に拘はらず、以色列人を惡む者に非ず、罪惡を犯せる國民は其如何なる國民なるに拘はらず之を罰すべしと。假令十誡が摩西に依て傳はりたりとの事確實ならずとするも、紀元前第八世紀の預言者が之を傳へたるは明也。アモス及びホセアは正義、純潔なる一神を拜すべき事を教へ、且其教訓を筆記して後世に傳へたり。

(八)　アッスリヤの時代　イスラエル及び西利亞の爭鬪は、アッスリヤ起りて兩者を壓服せるに至りて其終を告げたり。吾人は今爰にイスラエル王アハブの時アッスリヤ王シャルマ子セルがイスラエル及び西利亞の聯合軍を敗りたる事(前八五四)エヒウがシャルマ子セルに貢を納れし事(前八四二)及びラムマンニアリ三世がオムリ朝より貢を强取せし事(前八一一―七八三)を語らざるべし。ヤラベアム二世(前七八二―七四一)の治世イスラエルの繁榮を極めし時はアッスリヤは萎靡として振はざりしが、テグラテピレセルに至り(前七四五―七二七)國勢頓に恢復し、イスラエル王ペカ、ダマスコ王レヂンの聯合軍を敗り(王下十六の五―九)且ホセアのイスラエル王たるを承認せり。ホセアはペカを殺して自立せしが、其極北の地及びヨルダン河東の地はアッスリヤの爲に略せられたりしかば、イスラエルは今は人口稀薄の國となれり(十五の廿九)當時埃及は迦南の地を以て其勢力範圍となし、爰に其根據を据えてアッスリヤを挫かんとするの志ありしかば、ホセアは竊に埃及王と同盟しアッスリヤに當らんとせり。テグラテピレセルの繼位者シャルマ子セル四世(前七二七―七二二)之を探知し兵を進めてサマリアを圍み(十七の四以下)たりしが其繼位者サルゴン(前七二二―七〇五)に至り遂に之を陷れ、イスラエル人を捕へて之をメソポタミヤ及びメデアに移し(十七の六)イスラエルの地は爲に荒廢して猛獸毒蛇の巢窟となるに至れり(十七の廿五)爾後彼等の赦されて再び其國に歸るに至りし迄北王國の歷史に就て吾人の知る所は、唯彼等が屢々ハマテ、アルバド及びダマスコと共にサルゴンに反したりし事、及びアッスリヤの衰ふるに及びヨシア王がベテル及びサマリアに在る崇邱を毀ちたりしとの事(廿三の十五、十九)のみ也。扨サマリア既に陷り、サルゴンは勢に乘じて更に埃及を攻んとせしかば、ユダ王國も亦危險に瀕せり。此時に方りユダ王ヘゼキアの取るべき策三あり。即ちエテオピア王と結びアッスリヤに當るか、アッスリヤ王の軍門に降り其守護を受くるか、然らざれば預言者以賽亞に依りて、エホバの云ひ給へる言を信じ、アッスリヤ軍の埃及に進む要路に當れるラキシ及びリブナ諸市を棄て、其兵をユダの山地及びエルサレムに引上ぐるか是也。紀元前七〇一年サルゴンの子にして且其繼位者なるセナケリブは愈々埃及を攻めんとて西に進軍せり。ヘゼキアは貢を納れて和を請ひしが(十八の十四)ラキシ及びリブナ之に降らざりしかばセナケリブは自ら大軍を率ひて之を屠り、其將タルタンを遣はしてエルサレムに向はしめ(十八の十七)ヘゼキアを圍み其助なきに乘じて之を嘲罵せり。然るに疫病大にアッスリヤ軍の中に流行し、十八萬五千人之が爲めに斃れたりしを以て、セナケリブは兵を率ひて國に歸れり(十九の卅五)然れ共此は唯エルサレムの包圍解けたりしといふのみにて、ユダ王國は依然アッスリヤに朝貢せり。エサルハドン、セナケリブに繼ぎて王となり(六八一―六六九)埃及に勝ち、其宮殿建築の材料をユダ及び其他の諸國に徵せり。オスナパル次で位に即き再び埃及を攻めて之に勝てり。ユダ王マナセが捕へられて桎梏に繫がれ巴比倫に曳き行かれたるは思ふに此時の事なるべし(代下卅三の十一)アッスリヤ時代に於る宗教の爭も亦政治上の爭に讓らざりき。アハズ(王下十六の三以下)及びマナセ(廿一の三以下)の治世に當り、異教の禮拜并迷信盛に行はれ(賽二の六、八の十九等)以賽亞及び米迦は忌憚なく之を攻擊せり。ヘゼキアは此等預言者の言に激され、崇邱を除き偶像を毀ち銅の蛇を碎く等宗教改革の事業を勵行せり(王下十八の四、廿二)然れ共當時實際の宗教が如何に腐敗墮落せしかは以賽亞、米迦(三の十以下)の二書に云ふ所より推知すべし。

(九)　ユダ王國の滅亡　ヨシア王の治世(六三九―六〇八)ユダは小康を得たり。アッスリヤはアスルバニパル王の死後國勢頓に衰へたるを以て、ヨシアは神殿を修理し(王下廿二の三以下)崇邱を毀ち(廿三)『律法の書』(申命記)を公にし、又自ら公義公道を行ひ(耶廿二の十五)身を以て模範となりたりしかば、アッスリヤの覊絆を脫するの時期して待つべく見えたりしが、アッスリヤの覆顚は埃及及び巴比倫爭鬪の端を起し、埃及王ネコはアッスリヤ王と戰はんとてユフラテ河を指して上り來りしかば、ヨシア之を防がんとて進み往き、彼に出逢ひてメギドンに於て殺されたり(王下廿三の廿九)於是ユダは又埃及の屬地となり、ネコはエホヤキムを立てゝユダの王となせり(廿三の卅四)然れ共埃及の勝利は暫時に過ぎず、巴比倫王ネブカデネザルはネコを西利亞より追ひユダを巴比倫の屬國となせり。然れ共ユダは後二回巴比倫に背きたり。其初めて背くや巴比倫はエルサレムを取り、神殿の器皿を掠め、エホヤキン王を初め其牧伯、勇士、技術者等合せて一萬人を虜にして巴比倫に移し、ヨシアの子ゼデキアを立てゝ王となし、契約を立てゝ誓を爲さしめたり(耶廿四の一―七、結十七の十二以下)然るにゼデキアは其誓を守ること能はず、款を埃及に通ぜしかば、十一年の後巴比倫は又エルサレムを圍みて之を取り、ゼデキヤの目を抉し、其臣僚を殺し、神殿宮室を燒き、城壁を毀ち、多くの人々を虜にして之を巴比倫に移し、遺れる民の上にゲダリアを立てゝ其督者と爲せり(王下廿五)是れ紀元前五八七年也。

(十)　俘囚及び歸國　ユダの巴比倫に俘囚たりしはエホイアキンの時よりすれば(五九七)五十九年、ゼデキアの時よりすれば(五八七)四十九年にして、紀元前五三八年を以て終れり。耶利米亞書(廿五の十二)に七十年と云へるは唯其概數を示せるのみ。俘囚中の狀態に關する記事の一致せざるは、蓋し其狀態の時と處とに依りて相違せるに由る。初めに俘囚となりし者は家を建てゝ之に住ひ、園を作りて其實を食ひ、妻を娶りて子女を生ましめ(耶廿九の五、六)又彼等各自其長老を有することを許されたり(結八の一等)又エホイアキンは俘囚後三十六年に至り、エビルメロダク王之を獄より出し之に禮遇を與へたり(王下廿五の廿七以下)然るに僞の預言者は斷へず巴比倫王を欺きて猶太人を虐遇せしめたりしかば(耶廿九の廿一以下)彼等の或者は苛酷なる勞役を課せられたりしが如し(賽十四の三以下)然れ共概して論ずれば、巴比倫人の猶太人を遇するは頗る寬大なりしが如し。彼等の歸國に關しては近時批評家の間に多少の異說あり。以士喇書の云ふ處に依れば、波斯王クロスは即位の元年即ち紀元前五三八年エルサレム神殿再建の詔を發し、猶太人をしてエルサレムに上り此事業を取らしむ。ユダとベニヤミンの宗家の長及びレビ人は之を聞て直ちに奮ひ起れり。於是クロスはネブカデネザルの掠にエルサレムより奪ひ來りし神殿の器皿をユダの牧伯セシバザルに與へ、俘囚の一隊と共に之を携へてエルサレムに歸らしむ(一の一―十一)之を俘囚第一の歸國となす。吾人は此時幾何の俘囚歸國したりしや之を詳にせずと雖も、兎に角此運動は不成功に終りたりしが如し。即ち巴比倫に在る猶太人はクロスの此詔を聞きて驚愕せしが、ユダに在る民等の中には其建築を妨げたる者ありしといふ(四の四以下)此より十六年後に於てさへ猶太人は神殿再建の如き重要なる企を爲す時未だ至らずと云ひたりしと云へば(該一の二)或批評家(チェーネ)は是れ畢にクロスがダビデの系統を立てゝユダヤの總督となしたりしを云へるのみにして、所謂第一回の歸國なる者は實際あらざりしなるべしといふ。然れ共ダリアスヒスタスピス治世の初に至り(五二二)猶太人歸國の大運動計劃せられ、ダビデの裔ゼルバベル及び祭司ヨザダクの子エシュアに率ひられ、所謂第二の歸國なる者なされたり(喇二の二)此時歸國したる者總數四二、三六〇人也。然れ共彼等は此時未だ神殿再建に着手せず、各々己の邑に歸り再建の費用を醵出せり。而して秋に至りて彼等は一人の如くエルサレムに集り、燔祭を獻ぐる壇を築きたりしが(三の一以下)神殿の基礎は未だ置かるゝに至らざりき。然らば神殿再建の事業は如何にして初められたりしや、之に關し以士喇書四の廿四、五の一以下に記す處と三の八―十三に記す處と同じからず、從て批評家の間に異說を生じたれ共、思ふにダリアス王治世の二年、彼等が歸國の二年、建築に着手し、西利亞の總督タテナイの妨害ありしに拘はらず(五の二以下)ダリアス王治世の六年に至りて落成せる也(六の十五)神殿落成後凡そ六十年間の事に關しては別に記事なし。學者の推定する處に依れば此間ゼルバベル波斯王に叛き、自ら猶太の救主となり遂に其滅す所となれり。尼希米亞書に『エルサレムの石垣は打崩され其門は火に焚けたり』とあるは(一の三)此時、波斯人の爲に蒙りたる損害を云へるならんと云へり。波斯王アルタシャスタの治世に至り(四五八)祭司長の家系に屬し、摩西の律法に精しき學士以士喇なる者あり。神殿維持の爲め寄捨すべしとの事を猶太人に諭せる波斯王の詔書を携へエルサレムに上れり(喇七の八)而して彼は又以色列の民を集め、彼等の中異邦人の婦女を娶れる者は之を去るべしとの事を命じ、民皆斯く爲せり(十の六―四十四)アルタシャスタ治世の廿年(四四五)に至り尼希米亞顯はる。彼は以士喇と異り平人にして且波斯王朝の吏なりき。軍長數人及び騎兵に護衛せられてエルサレムに上りしが、其精神は以士喇と同じく

以色列國民宗教の改革を以て其目的となせり。彼は先づエルサレムの石垣を再建し(尼六の十五)富者をして貧人より強取せる田園家屋を還さしめ、高利を以て貸すを禁じたり(五の一―十三)彼は又豐穣の日に民を集め、一切の異邦人と離れ、離婚及び安息日に於る賣買を禁じ、又安息年を守り、什一の獻金を誓はしめたり(九、十)且猶はエルサレムの人口を增殖せしめん爲め二箇の方法を採用せり(十一の一以下)彼が第二の使命はアルタシヤスタ王治世の三十二年に初まり、エルサレムに殘存せる惡風を芟除せんとして熱心なる働を爲せり。彼期帝國の晩年に於る猶太人の運命に關しては詳ならざれ共アルタシヤスタ第三世(三六一―三三八)に獲きたりしが爲め之が刑罰として一部の民族へられてヒルカニアに移されたりしが如し。以賽亞廿四―廿七及び詩の諸篇に云へる災禍は之を指示せる也と想像せらる。

(十一) 希臘時代　亞歷山大王ダリアスに勝ちて(三三三)西利亞に於る彼類の營舍は其終を告げ、希臘の勢力は亞歷山及びアンテオケを中心として盛に パレスチナに流入せり。且猶太人は外間よりの壓迫に依り斷へず外國の思想及び風習に感染せり。即ち紀元前三世紀の初西利亞の埃及の爲めに征服せらるゝや、埃及王トレミーは數千の猶太人を埃及に殖民せしめしが、亞歷山大王世界を征服するに及び彼等は又世界的遊商を開始せり。此の如くして彼等は四方に散亂せしが、故國を忘るゝこと能はず時々エルサレムに歸り來りしを以て、唯彼等自ら希臘的感化を受けたりしのみならず、エルサレムも亦大なる希臘的感化を蒙るに至れり。然れ共此希臘的感化が猶太の住民をして劃烈なる政治的困難の中に陷らしめたりしは、亞歷山大王の勝利後百年以上也とす。猶太はガザ、ヨツパ、カイザリヤ、サマリアの如き希臘的市邑に接せるに拘はらず、長く希臘的感化の勢に抗し來りしが、アンチオカス、エピファネス(一七五―一六四)の時に至りエルサレムに在る希臘黨勢力を得て自ら祭司長となり、且力技場を立て、エルサレムの住民をアンテオケ市民の籍に入れ其特權を之に附與せり。然るに又メチラウスなる者起り、ヤソンを逐ひ自ら代りて祭司長となれり。アンチオカスは此混亂に乘じ猶太人を殺戮し、又之を奴隸となし、エルサレムの塔を奪へり。且安息日を守り割禮を行ふことを禁じ、律法の書を燒き、エルサレムにヅオイスの祭壇を立て、猶太人をして之に犧牲を供へしめ、又強て之に豚肉を食はしめたり。彼等の多數に或は王の命に從ひ、或は僅に受動的抵抗を試むるに過ぎざりしが、ユダスマッカビース(Judas Maccabæus)なる者起りて之に抗し、勇氣と機略とを以て西利亞の大軍と戰ひ、遂に猶太人の宗教的自由を回復せり(一六二)後幾ならずして彼は戰死したりしが、ヨナタンに至り遂に猶太の祭司長たる特許を西利亞王も、其一旦得たる自治は之を失ふことなく、其弟ヨナタンの時に至りエルサレムの塔を奪へり。且翌年に於る猶太國民はマタカビアン家の彼等の爲めに盡したる功勞を認め、シモンを以て長く祭司長、首將及びエルサレムの總督となしたり(此以後の歷史は次の條を見よ)。

以色列の支派 The Twelve Tribes of Israel.

事蹟 以色列民族は十二支派に分れたり。最正に云へば十三支派なれ共、レビ族の特種なる地位を占むるより、十二の數を保持せり(民二、十の十三以下)之を母方の系統に從ひ區分すれば(一)ユダ、イッサカル、ゼブルン(二)ルベン、シメオン、ガド(三)エフライム、マナセ、ベニヤミン(四)ダン、アセル、ナフタリとなる。以色列が迦南に定住後レビ族は領地を得ざりしを以て、十二は又所領地の數となる。然れ共ヤコブ(創四十九)及びモーセ(申卅三)の與へたる祝福の中には、レビをも支派の中に數へしを以て、エフライム及びマナセは一支派としてヨセフの名を以て記さる。結四十八の一―七、廿三―廿八にはエフライム及びマナセを二支派として記したれ共、申―卅五にはレビを數へ、ヨセフを一支派として記せり。

支派は又宗族に分れ、宗族は更に家に分る(書七の十四、十七以下)支派の首長を『牧伯』(出卅四の卅一、民一の十六、四十四、七の十二)又は『長』(民卅の一)と云ひ、次に『族の牧伯』あり(民三の廿四、卅)以色列人は十二支派の數を保存せんことを欲し、一支派の滅亡なも遺ずんと勉めたり(士廿一の十七)以色列人は十二支派の宗族の何れにか屬する故を以て、神政王國の市民たるを得たりき。故に宗圍の大切なること起れり。モーセの律法の中には、各宗族各々其父祖を臨承し、其に系統の完全を維持するやう導きたる法令ありき。彼等が聖地を取りを分割せし時は、各支派の境界を一定し、其境界線内にて各宗族各々其所領を得たりき。顯くして種族的制度成立せしがども、之がため種族的觀念を助長し、國民的觀念を妨げたるの形跡は、既に士師時代に之れありき(士五の十五―十七)。

レビ族を除き、迦南の地は左の如く十二支派に分割せられたりき。

(一) アセル　ヤコブがゼルパに生ましめたる第八

子(創卅五の廿六)出埃及の時此支派の壯丁四萬一千五百人ありしが、迦南入國前には五萬三千四百人に增加せり(民一の四十、卅六の四十四)ダビデの治世には資徴して、其名牧伯の名簿中より全く除かれたり(代上廿七の十六―廿二)アセルに定められたる所領は、アクレの沃地、シドンに至るフニキヤ一帶の海岸を含みしが(書十九の廿四―卅一)彼等は久しく其定められたる地を得ること能はず、迦南人の中に住みたり(士一の卅一)以色列人がシセラと戰ひし時アセルは其同胞の危險を忘れたりき(五の十七、十八)此支派の中よりは士師も勇士も出で來らず、其生じたる有名なる者は、バラエルの女アブナのみ(路二の卅六)。

(二) ベニヤミン　ヤコブがラケルに生ましめたる末子(創卅五の十八)彼が埃及に遣はされ、ヨセフが之を憐めんとして苦心したりし物語は創四十三、四に記さる。出埃及の時此支派の壯丁三萬五千四百人ありしが、迦南入國前には四萬五千六百人に增加せり(民一の卅六、廿六の卅八)此支派の所領はヨルダン河の東に在る狹き地にて、一方はエルサレムの西凡そ六哩に在るキリアテヤリムに達し、他方センノムの谷よりベテルに達し、此中にエリコ、ベテホグラ、ベテル、ギベオン、ラマ、エブス等の諸邑を有す(書十八の十一以下)士師時代には他の支派と戰ひ殆ど絶滅せしが(士十九―廿一)後又回復して、ダビデの時には五萬九千人以上の戰士を有するに至れり(代上七の六―十二)此支派の中よりはモアブの王エグロンを殺せしエホド(士三の十二以下)以色列最初の王サウル(母前九、十)を出し、又サウル(母後二)及びダビデ(王上十二の廿一)を助けたり。ソロモン死後王國分裂せし時は南王國に屬し、俘囚後はユダ族と共にパレスチナに於る猶太新民族の構成を為せり(創一の五、四の一、十の九)モルデカイ、エステル(帖二の五)及び使徒保羅(羅十一の一、腓三の五)も此支派より出づ。

(三) ダン　ヤコブがビルハに生ましめたる第五子(創卅の六)出埃及の時此支派の壯丁六萬二千七百人なりしが、迦南入國前には六萬四千四百人に增加せり(民一の卅九、廿六の四十三)其所領は北東はエフライム、ベニヤミン、南はユダの間に介在し、西は地中海に面せり。彼等が如何に勇敢なりしかはライシの地を掠取せしに依りて知らる(士十八)ダビデ時代には尙十二支派中に在りしが(代上十二の卅五)後其名全く消失し、約翰が幻にて見たりしといふ天使の印したる支派の中にも數へられざりき(默七の五―七)サムソンは此支派より出づ。

(四) ナフタリ　ヤコブがレアに生ましめたる第六子(創卅の十八、卅五の廿三)出埃及の時此支派の壯丁五萬四千四百人ありしが、迦南入國前には六萬四千三百人に增加せり(民一の廿八、廿六の廿五)エスドラエロンの平原を領す(書十九の十七―廿三)士師トラは此支派より出づ(士十の一)アッスリヤ王シヤルマネゼル、サマリヤを略取せし時、此支派もイスラエルの他の支派と共に俘囚となる。

(五) ユダ　ヤコブがレアに生ましめたる第四子(創廿九の卅五)其性質、生活に就ては創卅八、四十三、四十四等に記さる。此支派が將來重要なる地位を占むべきことは、彼がヤコブの祝福を受けたる時既に暗示せられたりき(四十九の八―十二)出埃及の時此支派の壯丁七萬四千六百人ありしが、迦南入國前には七萬六千五百人に增加せり(民一の廿六、廿七、廿六の廿二)迦南の地を領有せんために遣はされたるカレブは此支派より出で、又迦南の所領を分配する爲めに選ばれたる者の一人なりき(十三の六、卅四の十九)ヨシュアの外後此支派は迦南攻撃のために選ばれたりき(士一)此支派の所領に就ては他の支派に就てよりも詳細に、書十五の廿―六十三

に記さる。其廣大なる所領は早くより四部に區別せらる。即ち(イ)山地(ロ)荒野(ハ)南(ニ)平野（書十五の廿一以下）是也。カデニエル、イブザンは此支派より出づ（士三の九、十二の八）又ダビデを出して王となし、其王朝を助けたりしが（毋後二の四、王上十二）後ベニヤミンの支派と共に北王國に對して、南王國を立てたり。預言者の中此支派に屬したるは、アモス、イザヤ、ミカにして、オバデヤ、ヨエル、ナホム、ゼパニヤ、ハバクク等も亦此支派に屬したりしなるべし。俘囚後パレスチナに歸りし者の多數は此支派に屬する者なりき。嘗て羅太又は猶太人は全國民の通稱となるに至れり。耶蘇は實に此支派より出でたりき（來七の十四、默五の五）。

(八) マナセ　ヨセフ二子の一人（創四十一の五十一）出埃及の時此支派の壯丁は三萬二千二百人に過ぎざりしが、迦南入國前には五萬二千七百人に增加せり（民一の廿四、廿六の廿九）所領分配の時其一半はヨルダン河の東に住し、他半はヨルダン河の西に定着し、エフライムと共にヨルダンより海、ベテルよりエスドラエロンの境に達する地位を占有せり（書十六、十七）ギデオン、エブタは此支派より出でたりしが如し。彼等の中にはダビデの家を助けし者ありき（代上九の三、十二の十九等）ガド、マナセと共にアッスリヤ王テグラテピレセルのために滅ぼさる。

(九) ナフタリ　ヤコブがビルハに生ましめたる第六子（創廿の八、廿五の廿五）出埃及の時其子孫の壯丁五萬三千四百人にして、迦南入國前には四萬五千四百人に減ぜり（民一の四十三、廿六の四十八）其所領は北境の山地に在り（書十九の廿二—廿九）パラクはナフタリ族より出でたる一大勇士にして、トビトも亦此支派より出でたり。俘囚後羅太人はナフタリの地に來住し、其南部は人口殊に稠密の地となれり。

(十) ルベン　ヤコブがレアに生ましめたる長子（創廿九の廿二）其犯せる罪に依りて長子の權を失へり（廿五の廿二）出埃及の時此支派の壯丁四萬六千五百人、迦南入國の時は四萬三千七百三十人あり（民一の廿一、廿六の五）其所領はアルノンより（シボンに達せる高地に在り（書十三の十五）俘囚後間もなくモアブ人其故國に歸りルベン所領の勢市を占領せり。

(十一) シメオン　ヤコブがレアに生ましめたる第二子（創廿九の廿三）出埃及の時此支派の壯丁五萬九千三百人、迦南入國の時は二萬二千二百人に減ぜり（民一の廿二、廿六の十二）初めユダの支派に充てられたる南部の地を領ぜり。

(十二) ゼブルン　ヤコブがレアに生ましめたる第十子（創廿の廿）出埃及の時此支派の壯丁五萬七千四百人、迦南入國の時は六萬五百人あり（民一の廿、廿六の廿六）下ガリラヤの高地及び平原を領す（書十九の十—十六）バラクの戰爭の時重要なる地位を占め（士四の六、十六）デボラは之を稱讃して『生を棄て死を冒せる民也』と云へり（五の十八）他の諸支派と共にアッスリヤ王テグラテピレセルの滅す處となりしも（王下十七の十八以下）新約の時代には重要の地を占めたり（馬九の一、二、太四の十五、十六）。

十二支派が一の王の下に再び一の民となるべしとの預言は、將來の救拯に於る重要なる部分を占め（何二の一、結廿七の廿二）彼等が斯る者として撰へ歸らるべしとのこと預言せられたりき（詳に結四十七）支派の制度は其各處に散り居る間も尙電撥し（耶廿九の一、四十四の一、廿の一）俘囚より歸り來りし者等は自らを十二の支派の代表者となし（馬五の十七）以色列のために十二の山羊を犧牲として獻げたりき。而して彼等は各其宗家の長と血統とを示して、以色列の者なることを明にしたりき（二の五十九）此等の支派が常に彼等の間に其區別を明にしたりしことは、尼十一に記されたる名簿に依りて知るべし。然れ共此名簿の中にはユダ、ベニヤミン及びレビに屬せる者のみを記し、其他は『其他の以色列人』なる語の中に含めたり。思ふに十支派に屬する者の系譜は喪失したる者なるべし。

イスラエル王國 Kingdom of Israel.

地名 パレスチナの南部に定着せし種族は、初めよりゲゼル、ヘレス、アヤロン、ジャラビム等の市邑を境として北部に定着せし種族と分離するの傾向ありしが、ダビデに至り南北を合一して一王國と爲したりき。然るに彼の時代に在りても尙統一の念より剛者の間に時ど内亂を起さんとしたることありき（毋後十九の四十一—廿の二）ソロモン王の時に至り剛部の種族には全く租稅課役を除きたりしに拘はらず、北部の種族には重き租稅及び勞役を課して之を虐待したりしかば（王四の七—十九、五の十三—十八）遂にヤラベアムなる者預言者アヒヤに勵まされてソロモンに叛き（十一の廿九—廿九）ユダ族と分れ、北部諸族を合一してイスラエル王國を立て、民に推されて自ら其最初の王となれり（十二の廿）彼は二の金の犢を造り之をベテル及びダンに置き、之に依てエルサレム神殿の集中的勢力に抗抵せんとせり。斯くて南北兩王國は久しく互に相敵したりしが、アハブ及びエホシャファットの治世に至り、政治、進商上の同盟を結ぶに至れり。此時ユダはダビデ（十四の廿五）及びセラ（代下十四の九）の從者を蒙り

て其勢力大に衰へしが、イスラエルも亦ダマスコの勢燄を恐れて盛なるが爲め之に依りて既に大なる打擊を蒙りたり。アハブはベンハダデ二人の王エテベアルの女イゼベルを娶りしが（王上十六の廿一以下）イゼベルはバアルの宗教をイスラエルに輸入せしかば、預言者エリヤ及びエリシヤ起りて厳しく之を攻擊せしが（十八章以下）オムリ朝は之がため遂にエホヤの爲に覆され、バアル崇拜も亦共に倒れたり。此時期に關する獨逸聖書の記事とアッスリヤの記錄とを併せ考ふるに、前八五四年イスラエルはダマスコを中心とせるアッスリヤ王シャルマネセル二世に對し結へる小同盟國中遺憾なる地位を占め、アハブは二千の戰車一萬の歩兵を率ひ、ベンハダデは千二百の戰車一萬の歩兵を率ひ、駱駝八萬乃至九萬の兵を以てアロエルに於て大にアッスリヤ軍と戰ひたりしが、敗北して一萬四千の兵を失ひ、同盟も亦破れたり。アッスリヤ軍は八四九及び八四六年の二回ベンハダデを擊ちしが、イスラエルは之に與からず。四利亞は其地勢イスラエルよりも多くア軍の侵擊に蒙り易かりしかば、イスラエルは之に乘じギレアデのラモテを四利亞より恢復せんとし（列王下廿二の一以下）密後此二國の間に、干戈相續きしが、八四二年シャルマネセル四利亞を擊ひ、ハザエル（ベンハダデの繼位者）を敗れり。然るにイスラエル王エヒウ治世の終に至り、ハザエルはヨルダンの東の地を侵して之を服從せしめ（王下十の廿二、三）後更に進で南王國を攻め、ガトを拔めエルサレムを降したり。エヒウの子ヨアハズに至りハザエルはイスラエルを攻め、遂に僅少の兵を之に殘すのみに至り（十三の七）これに其子ヨアシの治世に至り形勢一變し、ハザエルの眷ひし地を恢復し、且ユダの王アマジアの兵を敗り、進でエルサレムを攻め其石垣を毀ちたり（十四の十三）シャルマネセル二世の孫ラマンニラリが四利亞を擊ふてダマスコを取りしは此時にして、四利亞は頓くして國勢衰へ、アッスリヤも亦更方一國と事を構へ、且內訌相續きて他國を侵略するの暇あらざりしかば、イスラエルは國勢を挽回し、ヤラベアム二世の治世に至りて隆盛を極め、ダマスコとハマテを再びイスラエルに歸せしめたり（十四の廿八）然るにヤラベアムの死後國勢再び頓に衰頽し、國民は政爭に依て分れ、道德は靡頽し人々互に私利を爭ふのみなりしかば（何四の十一—十四、座二の八、四の一、八の五、六等）遂にアッスリヤの乘ずる所となり、テグラテピレセル三世プル來りて之を擊ひしかば、メナヘムは貢を納めて和を請へり（王下十五の十九）ペカはアッスリヤに抗せんとして、先づダマスコ王ラヌンと同盟を結び、更にユダをも其同盟に加へんとして之を攻めたりしが、裏七の一—九）ユダ王アハズは既にア王と結びて之に貢を納れたり。七三四年ア王は遂に大軍を擧げて北王國を擊ひ、先づラヌン及び其同盟軍を破り、四利亞の市邑を奪ひ、進でヨルダンの東の地を陷れ（王下十五の廿九）其住民を虜にし、更に進でヨルダンの四の市邑をも略せしかば、ペカはサマリアに遁れたり。後ホセアに至り埃及王ソと同盟してアッスリヤの羈絆を脫せんとせしが、ア王シャルマネセル來りてイスラエルを攻めしかば、北王國は此に至りて全く滅亡せり（七二一）北王國の缺點は、其凡ての事に於て確固不拔のものなかりし事にして、政治上に於ても宗教上に於ても國民を統一し其精神を一致せしむる者を缺きたりき。例之首府はシェキムよりサルゲドよりサマリアに轉じ、王朝も亦篡奪に依て常に變化し、エヒウ朝は最も永續せしも尙僅に五世を保つに過ぎざりき。又國民の共同的敬虔の情を發ふべき宗教的中心なる者も之れあらざりき。且アハブ、アハジアの治世に在ては其宗教も大に異教化せられたるを見る（何四の十三、七の十四、座四の五、八の十四）而して其國勢の衰ふるに及びては、其社會的生活を惡化する者又これあらざりき。然れ共南王國が南部の山郷に僅在し、從て其獨尙なる國民的精神を發達せしめたりしに反し、イスラエルは斷へず迦南人及び他の異邦人種と接觸せしなを以て、彼等より惡宗教の惡感化を蒙りたる

イスエルシヤルマルネセルに朝貢す

ことあれ共、又其進歩せる文明と教化との利益を受けたることも少からず。早に之を人間の方面より見れば北王國は南王國に比して優ること大也。エリヤを初め大預言者と稱せらるゝ者も悉く北王國の產にして、然らずんば亞歷西の如く北王國に於て其事業を爲せる者也。換言すれば猶太人の貴重なる遺物として基督教會の享有せる靈的宗教の發途は、主として之を北王國預言者の教訓に歸せざるを得ざる也。

イゼベル Jezebel. 【人名】 シドン人の王エテバアルの女、イスラエル王アハブの妻(王上十六の末一)。迦南の婦人にしてイスラエル王家に嫁ざし者彼を以て嘲矢となす。最も男敢にして膽力ある女性の一人にして、マタベス夫人の如く、夫を助けて其勇氣を鼓舞せり。フェニキヤ人の宗教をイスラエルに輸入し、バアルの祭司八百五十人を養ひ、イスラエルの預言者を迫害し、エリヤの生命をも求めんとせり(王上十八、十九)。アハブ、ナボテの葡萄園を得んとして得る能はずを失望せしが、イゼベルは聰かし失望せず、遂にナボテを殺害せり(王上廿一)。イゼベル、アハブに後れて生存せること十四年、其子アハジヤの下に在り、嬢たり勢威を振ひ、又其女アタリアをユダ王に嫁せしめたり(王下八の廿六)。されば共エリヤの預言せる歷報の日は終に來れり。エヒヤ、アハブの家を剿絶せんとてエズレルに來りし時、イゼベル當時の習慣に從ひ、其目を塗り髮を飾りて窓より望み居たりしが、エヒヤの一言に依り寺人等イゼベルを窓より投落せり。エヒヤ其上を履み過り其屍を犬に與へたり。(王下九)

以太利 (イタリヤ) Italy. 【地名】 アルプスより以南の半島及びシヽリ、サルヂニヤ其他の群島を總稱す。總面積一一〇、六二三方哩、人口三二、四七五、二九三人(一九〇一年調)年々海外に移住する者少からざるに係はらず、增加の傾あり。人種は拉丁種にして多くは羅馬教會に屬す。小學教育は向寺村僻地に普及せず。廿一箇の大學を有す。立憲君主政體を奉じ、國會は五百八人の民選議員を有す。

【羅馬教】 一八七〇年九月羅馬法王に其俗權を失ひたれ共、翌年五月以太利國の立法議會は法王の獨立を保障する法律を通過せり。其法律に從へば、法王は國王と同じく神聖にして犯すべからず、君主たる榮譽を有し、護衛兵を附せらる。且國庫は年々法王に三百廿二萬五千リラ(一リラは凡そ我三十九錢に當る)を給し、ヴァチカン、ラテランの宮殿、ガンドルホ城の別莊、及び之に屬する圖書館を以て法王の所有となし、凡ての租稅を免す。又以太利政府は法王內閣員及び凡ての僧職の自由、獨立を保障せり。羅馬市に在る神學校、中學校及び凡て羅馬教の僧侶を養成せんとの目的を以て立てられたる諸學校は、皆法王の管理に屬し、國家は僧職の任命に關し容喙するの權利を放棄し、監督は國主に警を爲すに要せず、又宗教上の事務の執行に關しては國王の勅許を要する者なし。此の如く法律は羅馬法王及び羅馬教會に對しては全然自由を與ふ。而して法王はヴァチカン宮殿に住し、其宮廷には凡そ千八百人の侍臣を置き、全世界に於る羅馬教會の教務を總管す。以太利には尚法王の俗權廢止と同樣なる一の問題あり。即ち僧派廢止の事にして、一八五五年五月サルヂニア王國に於ては、凡て實際に於て教、教育若くは病者看護の任を取らざる僧派を解散すべしとの法律を發し、其結果二百七十四箇の僧院及び六十一箇の尼院を閉鎖し、三七三三人の僧、一七五六人の尼を廢したりしが、以太利統一の成るに及び、一八六六年、一八六七年及び一八七三年の三回に法律を發して同一の精神をウムブリア、ナポリ及び羅馬に適用し、其結果凡そ一千以上の僧、尼院を閉鎖し、數千の僧尼を廢し、之を實業に就かしめ、是等の僧尼院に屬する財產を沒收せしが、其價格八億三千九百七十萬リラに上り、之より生ずる歲入凡そ三千一百萬リラに達せり。以太利に在る羅馬教會は二百六十五箇の監督區、二萬四千九百八十箇の牧會區に分れ、一牧會區には少きは一百人、多きは一萬四五千の會員を有す。牧會區の僧侶は大抵土地を所有し、之より其主なる收入を得れ共、國家が其補助の爲めに要する金額は年々一百萬リラに達す。羅馬教會の儀式は通常拉丁語を用ゆれ共、南部地方のアルバニア人の中に在りては希臘語を用ゆ。

【以太利に於ける新教】 以太利にはダンテ、ペトラルカ、ローレンジアスヴァルラ、サヴォナロラ、ヴイテルボーのエゼデアス、ピカスデ。ワンドラの如き高潔なる人物時々出でゝ、羅馬教會の虐政を攻擊し改革を要求せり。而してヒサ及びコンスタンスに於る宗教會議は復等の運動を助けり、アドリアン六世及びパウル三世の如き法王は隱然之が首領たりき。此等の運動が要求したりし改革は全然道德的にして教義的に非ず。又教會の改革と云ふんよりも寧ろ僧侶の改革なりき。故に一五二四年ケチンの僧派と稱する者、カエタン及び監督カラファに依りて創立せられたりしが、此僧派は僧侶の改革を目的としたりしに拘はらず、宗教改革には絕對的に反對し、且改革を妨害せり。而して道德的改革の教義的改革に伴ふに非ざれば爲し能はざる事の明さなるや、宗教會議も法王も監督も僧侶も直ちに一致して宗教裁判を開き、異端を撲滅せんと謀れり。此の如く羅馬教會は教義の改革に一致することを能はざりしを以て、容易にプロテスタントの主義を誘入することを能はざりき。然るに北部以太利に於ては、獨逸に於る宗教改革の影響を受けり、道德的改革轉じて教義的改革となりたり。即ちルーテル、メランクトン、ヅウインガリ及びバツツエルの著書は早くよりヴェニスに輸入せられ、多くの人々に依りて讀まれつゝありしが、一五二〇年ルーテルはヴェニス政府と交通せり。アルチーリの紹介に依りヴェニス政府と交通せり。斯くて一五二〇—四二年に至る間ヴェニス共和國內に於る新教は長足の進歩をなしたりしが、是れアルチーリが不撓の精神と、僧侶の熱心なる說教と、サボナロラの弟子ブルクシヨリが聖書を以太利語に飜譯したりし功とに歸せずんばあらず。於是羅馬法王はヴェニス政府に向て嚴しく抗議せしが、ヴェニスの公使サーポロは之に答へて、異端を寬容すると否とは、ヴェニス共和國に取りて單に政略の問題に過ぎずと云へり。果してヴェニス共和國は法王との交誼の必要を認むるに至りしや、直ちに宗教裁判を閉始し、ブルチーリを逐ひ、數千の新教徒を焚殺、斬首、溺死等の刑に處して之を根絕せり。第十六世紀の初ロンバルデー諸市に新教傳來し、ルーテルを稱讚するの詩まランにて作られ、歌はれたりき。又ピードモントに於ても新教の勢力盛なりしが、此兩處に於ても宗教裁判を開きて新教徒を迫害し、遂に之を撲滅したり。南部及び中央以太利に於ても、同一なる運動西班牙人ヴァルデヂを中心として、ナポリに集りたる著名なる人々の團體に依りて開始せられたりき(一五三五—四〇)。此運動は獨逸宗教改革者との直接交通、及びヴルデンシアン宣教師の建てたる福音主義教會の働に依りて養はれたる者也。ヴァルデヂ

は僧侶に對する諷刺的の著作を爲したりとの故を以て、西班牙より逃れてナポリに來り住せしが、迫害の起るに先らて死せり。彼は其著書と其友人即ちヨキノ、フェルミゲリ、カルチセキ、フラミニアス及びカラツタジオロの如き人々の働とに依りて大なる感化を與へ、新教の勢力頗る盛大となり、監督の中にも之を信ずる者ありしが、宗教裁判開始せられて迫害甚しかりしを以て外國に逃るゝ者多く、或は捕へられて獄に投ぜられ、或は殺戮せられ、或は追放せられたる者其數を知らず。此の如くして新教は全く以太利より地を拂ひ、第十九世紀の中迄其跡を見ざるに至れり。

【福音主義の教會】 以太利に在る福音主義の教會と稱するは、ワルデンシアン教會、自由以太利教會及びメソヂスト、長老、バプチスト等諸派の教會なり。サルヂニア王國は一八四八年信教の自由を許可せり。當時ワルデンシアン教會は十五箇の教會を有すと雖も、是より直ちに傳道的活動を開始し、幾何ならずして新に三十四箇の教會を建て、三千人の信徒を得るに至り、一八五五年トルペリスに神學校を立て、一八六二年之をフロレンスに移せり。自由以太利教會は一八七〇年ミラノに建設せらる。一八八一年には教會の數三十六箇、信徒の數二千人に達し、羅馬に神學校を有せり。其他メソヂスト、長老、監督、バプチスト諸派各々傳道を開始し、著々進歩しつゝあり。

【以太利の宗教制度】 以太利憲法第一條に曰く『羅馬教を以て唯一の國教となす、其他の宗教は法律に從て之を許可する者とす』と。此法文に依れば以太利は國教制度又は公認制度を採る者の如くなれ共、一八六一年三月廿五日の代議院に於て以太利帝國の建立者たるカヴールが有名なる警句『自由國に於る自由教會』(Libera Chiesa in libero Stato)を唱道してより以來、此一語は略ど以太利帝國に於る國家對教會の國是となり、衆來幾多の法律は之がため制定せられ、信教自由、政教分離の二大原則牢乎として動すべからざるに至れり。從て今日に於ては憲法第一條は死法となりたるが如き趣あり。(『教會と國家』との條を見よ)。

異端 Heresy (heresy) 【術語】 新約聖書に在りては、此語は黨派若くは學派の義にして、パリサイ派(使十五の五、廿六の五)サドカイ派(五の十七)及び基督信徒さへ(廿四の十四、廿八の廿二)『異端』と稱せらる。黨派を異端と稱する場合に在りては、唯教義上の相違のみを云ふに非ず(哥前十一の十九、加五の廿)然れ共後此語は主として天啓の眞理を離れたる教義、若くは誤謬の說を表するため使用せらるゝに至れり(多三の十、彼後二の一)使徒等は彼等の教義より離れたる者を見る。こと頗る酷にして、之を呼びて『暴き狼』と云ひ(使廿の廿九)『犬』と云ひ(腓三の二)又保羅が加拉太教會に於る猶太教的臭味を帶べる教師、哥羅西書及び牧會書簡に言及せるノスチック教の教師に就て云へる點を見るに、頗る嶮嚴なる言語を用ゐて之を譴責せり。基督教初代三百年間に出でたる師父等の公同教會の教義より離れたる者を論ずるも亦同じ。即ちポリカルプはマルシオンを惡魔の初生子也と云ひ、イグナチウスは異端の徒を以て有毒の植物、若くは人の形を爲せる動物也となし、ユスチヌス及びテルチユリアンは異端の徒の誤謬を惡魔のインスピレーションと云ひ、テオフイラスは之を船舶顚覆の危險ある岩かの島に比せり。而して彼等は異端なる語の中に、凡

て教に關する根本的教義より隱れたる者を含有せしめ、僭倣と名稱心なを以て異端を唱ふる最大原因也と爲せり。教父等は此の如く基督教の根本的教義を主張して少しも之より隱るゝことを許さゞりしが、彼等は根本的教義と比較的不緊要なる教義とを區別し、後者に就ては寛容を示したりき。異端は教義の一致を破り、信徒の交誼を妨げたりしを以て、教會は之を唱ふる者を其中より驅逐するを例とせり。而して彼等の一たび教會より驅逐せらるゝや、自ら一派を造らな常としたりき。ノヴァチアン、ノスチック、マニキアン、ドナチスト、テストリアン諸派の如き即ち是也。然れ共異端諸派に概して活力に乏しく、其教會より分るゝや次第に其存在を失へり。之に反して教會は『眞理の柱』『基督の體』等と稱せられ、シプリアンは『教會を母として有せざる者に、神を父として有すゝ能はず』と云ひ、アウガスチンは『體として教會に屬せざる者は、頭として基督を有する能はず』と云へり。中世に至り羅馬教會に希臘教會を分離派(Schismatic)と稱し、自ら公同教會(Catholic Church)と稱せり。希臘教會は聖靈に父及び子より出づるの教義を採用し、此點に於て羅馬教會と合はざりしが、後者は前者の教義を以て異端也とは稱せざりき。然れ共宗教改革運動起るや、羅馬教會は之を異端と稱し、火と劍とを以て之を迫害したりき。若し羅馬教會のみ教會也とせば、羅馬教會以外に在る者は凡て教會に屬せず、從て基督の救恩に與ることを能はざるべし。於是羅馬教會の神學者は此結論を避くるため、異端を二種に分ち、一を實質的異端と稱し、二を形式的異端と稱す。前者は知らずして誤る者にして、從て罪過を免るべく、後者は故意に教會に敵する者にして、即罪を免るべからず。プロテスタント教會は、自ら唯一の教會也と云はず、唯教會の一部分也といふ。故に羅馬教會又は希臘教會を異端也と宣言せず。又ルーテル教會はレフォルムド教會の聖餐に關する教義を以て異端也となさゞりき。然るに宗教改革の初に方り、一種の熱狂家ありて、狹き教會の權力のみを以て神の教訓嚮導の器械也となし、異端を處するに苛酷の法を以てせる者あり。ルーテル、ヅウィングリーは比較的寛大の態度なるも、カルヴィンは苛酷の主義を取り、セルベタスを燒殺し、又ツマーセット侯を勸めて法王黨及び福音派の急進者を迫害せしめたり。其他ビーザ、ターレデン、パーキンス、カッドチース等何れも苛酷の主義を取り、教會の教ふる所に從はざる者は嚴刑に處すべしと論ぜり。然れ共又他方には寛容の主義を取る者あり。十六世紀に於てはオレンヅ侯之を代表し、十七世紀に及て其數大に增加し、アルミニヤン派、獨立派、及び英國々教の寛容派等何れも主義を異にしたれ共、最も明白に之を顯はしたるは『ダーカル』派也とす。十九世紀の末に至りて風會々歷に行はれ、且其基督教の根本思想と調和し、之を說くに他の神學說との區別甚く明なるに從ひ、後世に發達せる神學說との區別甚く明なるに從ひ、之を迫害するの風は漸く減少しつゝあり。

一意派 學派名　又單意論者　Monothelites.

基督には唯一の意志、即ち分つべからざる意志の働ありとの說を主張する一派にして、彼等は基督にしてもし一個の人格を有するとせば、意志も亦一個ならざる可らずと論じ。基督には二個の性質ある如く意志も亦二個ならざる可らずと云へる說に反對せり。此派は如此說を以て一性論を唱ふる分派を聖公會に復歸せしめんと企てたりしかども、六八〇年コンスタンチノープルに開ける大會議にて、基督には二個の意志あることを決議せしを以て、一意派は聖公會より分離し、近代に至る迄之を主張する者ありき。

一元論 イッサ。一性派　Monism.

學說名　一元論とは宇宙の萬單を一元に歸せんと試むる學說の謂なり。デカルトが心物二元を主張したるに反して、スピノザが心物の兩者を統一する實體として唯一の『本體』を提供し、以て宇宙萬象人間萬事を解釋せんとしたるは所謂一元論也。一元論にも唯物的なるものと唯心的なるものとあり。スピノザ及びこれが系統を帶べるヘッケルの一元說は唯物的なる傾向を有し、ヘーゲルのは純然たる唯心的一元論なり。夫れ近時科學的智識の發達は、ヘッケル一派の一元說に對して有力なる武器を供するもの多し。蓋し進化說が唱道せられし以來、人間と動物とは其祖先を同ふしたるの事跡殆んど疑なきものあり。人間と動物との間には本來越ゆ可らざるの溝ありとなしたるは古人の夢となりて、今日にては人猿同祖說は學者間にありては疑ふ可らざる眞理となれり。去れば近代に於ける一元論の泰斗寧ろ新一元論者たるヘッケルは、科學的研究の結果として一元論の必然に到着せらるべき眞理なる事を辨明したり。

今一元論の立論を窺ふに、以爲らく人猿は生物學及び動物學研究の結果、同じ祖先より出來れる事明らかなり、而して類人猿は猿猴族より出で、猿猴族は更に又それよりも下等なる動物より進化し來れり。かの鳥類は羽翼ありて空中に飛翔すと雖も、其起源を察すれば爬蟲類(蛇類)と其祖先を同ふす。概して言へば有脊動物は無脊動物より進化し來り、無脊動物は更に單純なる生物より出で來れり、而して最下等

の生物は之が原形質と稱し、單細胞動物たり。而して此單細胞動物を形成する主要なるものを原形質と名く。ハッケスレーは之れを『生命の物的基礎』なりと論じたり。而して此原形質は之に化學的分解を施す時は、炭素、水素、酸素、窒素の複雜の結合に成るものたるを見る也。凡ての生物は其高等なると下等なるとを問はず、此原形質を礎とする細胞の集合より成るものなり。

世界に充滿する萬物は皆唯一纖料より纖り成さる

植物も亦原形質を礎とする細胞より成る。然り而して此原形質は其成分實に五上の知しとせば、生命なるものは畢竟物質分子の微妙なる結合によりて生ずるものには非らざるか。

四時の一元哲學は、物質分子を死物なりとなさず、生物なりと觀ず。去れば分子が結合して生命の現象を生ずと謂ふも、決して分子に有せざりしものを結合によりて生じたりと言ふの意には非ず。唯本來有したるものが、結合の複雜に準じて復現に現はれ來ると云ふに過ぎず。今夫れ物理學者は元素の數を七十乃至一百と唱ふれども、一元論者は此七十乃至一百の元素は畢竟するに唯一の分子のみと主張す。即ち今の所謂元素なるものは、唯一の極微分子が其結合の有無を異にしたるものに過ぎず。換言すれば宇宙は唯一の原子より成るものなり。ヘッケルに從へば此原子はイーセルと同一なるものなるべしといふ。

今若し一歩を進めて此原子とは何ぞやと云はゞ、ヘッケルは是れぞ宇宙の本體にして、一面物質の性を表はし、一面心の現象を現はすものなり、即ち唯一の本體にして心物の二性を顯現すと說くなり。是れぞ今日世界に行はるゝヘッケル一流の唯物的一元說なりとす（詳しくはヘッケルの『宇宙の謎』を見よ）。

唯心的一元說も敢て論據なきに非ず。否極めて有力なる論據を有す。夫れ唯心的一元論者は、物質分子の本性を考究して、極微分子の本性は勢力のみと斷ず。換言すれば物質の本性は勢力なり、宇宙は則ち勢力の發現に外ならずとす。而して此勢力を稱してヘーゲルは唯一なる絕對的理性と言へり。ショーペンハウエルの『無覺意志說』、ハルトマンの『無覺理性說』も亦唯心的一元哲學中に編入するを得べし。

イッサカル Issachar.　『以色列の支派』の條を見よ。

一性派 イッサ。一性派　又單性論者　Monophysites.

學派名　基督の一性を主張する學派にして、基督は神人兩性を具へたりといふ「ストリヤス」の說に反對し、クリル派の急進家之を唱へたるを初とし、コンスタンチノープルの寺院長ユウテケスに出でて此派極端に達せり。ユウテケス敎へて曰く『基督の人性は其神性中に冥化し去りたれば、基督の肉體は吾人の肉體と同じからず、基督には適當に人間的と稱すべき者あるなし』と。彼は四四八年コンスタンチノープルの會議に於て罰せられたれ共、アレキサンドリアの監督アタオス、キュリヌス熱心に此說を保護し、又埃及に於る教會の大部分之を支へたり。四四九年エペッの會議には此派勢力を得、ユウテケスの說を採用せしが、此決議は教會大部分の嫌忌する處となり、其教理も其强迫的に決議したることも共に大なる反動を起し、四五一年カルケドンに總會を召集し、此會議にて基督は一個の人格と二個の性質を有すとのことを議決せり。五五三年コンスタンチノープルの總會にては、一性派又勝利を得しが、六八〇年の總會にては斷然此派の教理を排斥せり。其後一性派は長く分裂の狀にて種々の教派の取る所となれり。即ち此派の說ヤコバイト派、コプト派、アビシニヤン派及びアルメニヤン派等一顧はれたり。一性派は基督に唯一の性を附するに於ては皆同一なれ共、基督の身位の問題に至ては各相異れり。即ち或者はユウテケスの如く人性は其本質を變じて神性中に冥化し去れりと云ひ、又或者は人性の尙存するを唱ふるも、唯神性に化合せしを認み、以て一の合成性に二の附性ある者を唱ふ。

一致信條 イッサ。一性派　Formula of Concord (*Formula Concordiae*)

信條　ルーテル派教會の信仰箇條に關する六卷の書の來卷にして、アウグスブルグ信仰箇條の第五十週年に發刊せられ、三人の選擧侯、廿人の公、侯、廿四人の伯、四人の子、及び三十五箇の自由市之に調印せり（一五八〇年六月廿五日）之より先きルーテルの死後（一五四六）分離の基教會內に侵入し來り、極端なるルーテル派の正統主義とメランクトン派の穩然たるカルヴィン主義との分離目前に切迫したりしかば、深く此兩派を調和するの必要を感ずる者あり。一五六七年ウールテムベルグ侯クリストフ及びヘッセカッセル伯ウィリアム四世、ヤコブ、アンドレアに命じ、アウグスブルグの信仰箇條に基き、獨逸國內に在る凡てのルーテル派教會を結合し得べき信仰箇條を起草せしむ。此企劃は不幸にして失敗に歸せしが、一五七三年アンドレアに再び之を試みし、所謂スアビアン契約――ルーテル派教會の相途に關する六箇の說教を修正したる者――なる者を作り大に世人の贊成を得たり。ウールテムベルグ侯及びバデン侯の例に倣ひ、ルカス、オ

シアンデル。バルタサル、ビテムベッハ及びアベル、シェルディンゲルは一五七五年マウルブロンの信仰箇條を作りたり。翌年サキソニーの選擧侯は神學者をトルガウに會し、以上二箇の信仰箇條を基礎として、更に凡ての人々を滿足すべき信仰箇條を作るべきことを命じたり。斯くして成りたる者は所謂トルガウ書と稱する者にして、選擧侯は之を獨逸國のプロテスタント派に屬する凡ての侯伯に送りしが、凡そ廿三四人の批評を受け取りたり。於此一五七七年更に神學者をベルゲンに會して此等の批評を調味、利用し、以て新なる信仰箇條を草せしめたりしが、其結果として顯はれ出でたる者即ち一致信條也。サキソニー及び其他の六邦は直ちに之を承認したりしが、ヘッセ及び其他の十邦は之を拒否せり。獨逸以外に在ては匈牙利、瑞典及び丁抹之を承認せり。此信條は二部より成り、各部各々十二條を有す。

イツリア Ituræa. 【地名】 路加三の一にテラコニテと共にヒリポの分封地として記さる。ユウセビウス、エローム等は之を以てアウラニテ又はテラコニテと同一地方也となせり。又之を以てガリラヤ東北の地方也となし、若くはレバノン及びアンチレバノンの間の地方也となすものあれ共、精確に之を定むること難し。イツリア人は遊牧の民なれば、思ふに諸處に轉住したりしなるべし。彼等はイシマエル人の子孫にして(創廿五の十五、歴上一の廿一)他の亞剌比亞種族と共に以色列人と戰ひ、ヨルダン河の東に殖民せり(歴上五の十八—廿二)プリストプラス一世之と戰ひて勝ちたれ共(前一〇五)眞に之を征服したりしはポンペー也。爾後彼等は羅馬軍中の弓手として知られ、屢々拉丁作家の中に記さる。

生死 (インナシ)

Life and Death. 【術語】 『生くる』の希伯來語は חַיָּה にして、『生命を有す』の意義に用ゐらる(出廿三の廿)又或處には靈魂を以て生命の根源となし(創十二の十三)人の生命に神の誠に從ふことに依ると云ひ(出廿の十二)又之を『繁榮』の義に用ゐたる處あり(母前十の廿四)形容詞としては、神の生命の源として『主は生くる』と云ひ(書三の十)又普の語として『主は生くる』と云へることあれ共、通常人及び動物の『生くる』ことを表はすにも同一の語を用ゆ。又『生』なる語は大抵複數(חַיִּים)を用ゆ。此語は肉體の生命を表すのみならず又『幸福』の義をも表す(箴十六の十五、中世の廿)希臘譯には通常『生』を ζωή と譯せり。新約も亦同じ。『死する』の希伯來語は מוּת にして、人、動物、草木、及び土地に用ゐらる。『死』(מָוֶת)なる語は、髮入化して用ゐらるゝことあり(詩四十九の十四)希臘譯は θάνατος を用ゆ。新約も亦同じく、同一の意義に用ゐ之を擬人化せる處あり。『母前十五の五十五、默一の十八)又屢々續神的死の意義に於て用ゐらる(羅七の十三、一約三の十四)。

【生死に關する聖書の觀念】 (一) 舊約の觀念 創世記開卷第一、創造の物語に於て見る所の教訓は、凡ての生ける物は神之を造り給へりとの事に關しては『神言ひ給ひけるは我に倣ひて我儕の像の如くに我儕人を造り』云々と(一の廿、卅)人に關しては明白に『エホバ神土の塵を以て人を造り、生氣を其鼻に噓入れ給へり、人即ち生靈となりぬ』とあり(二の七)而して死に關しては始祖アダム、エバ蛇に惑はされ、エホバの禁じたる果を食ひしため、詛はれて死に至るべしとの思想は、基督の使徒等に在りて唯徐々として起り來りたりき。初代教會に於て異邦人信徒と猶太人信徒との間に衝突あり、保羅が後者より反對を受けたりし事實は、使徒行傳及び保羅の書翰(殊に加拉太書)に於て之を見るべし。

異邦人の庭 Court of Gentiles. 『エルサレムの神殿』の條を見るべし。

教訓は主として以賽亞、以西結二書に發見せらる。以賽亞書に依れば、死後人は再び神及び主に歸ることなすが如し。其言に曰く『我れ云へり、我れ再びエホバを見奉ることあらじ、再び生ける者の地にてエホバを見ることあらじ、我ハ無き者の中に入りて再び人を見ることあらじ』(廿八の十一)又曰く『陰府は汝に感謝せず、死は汝を讃美せず、墓に下る者は汝の誠實を望まず、唯生ける者のみ、活ける者こそ汝に感謝するなれ』(廿八の十八、十九)以西結書には屢々『生』を以て神の恩惠を受くることなしとなし、之に伴ふ地上の幸福を以て其表徴となせり(廿三の十—廿九)約百記及び詩篇には生死に關して云へる處更に多し。約百記に依れば、當時の人々は、人死するも尚存在せりと思惟したりしが如し(三の十二—十九、十の廿—廿二、十四の十三—十五)又十九の廿三—廿七に依れば、朦朧ながらも靈魂不死の觀念を有したりしが如く見ゆ。詩篇十六の十も亦同じ。然れ共死後の生命に關しては二書共に明白なる思想なく、寧ろ死を以て迷暗の地となしたりしが如し。例之詩六の五に『そは死に在りては汝を思ひ出づることなし、陰府に在りては誰か汝に感謝せん』とあるが如し。詩篇には又『生の途』を倫理的意義に用ゐ、神に從順なる者を表し、又神を以て生命の源となして歌へる處あり。讃言にも亦同一の意義にて用ゐらる處多し。

(二) 經外聖書の觀念 『智慧の書』及び『ソラク書』にも亦屢々此等の語を詩的表明の爲めに使用せり。『エグラ後書』には末日審判の異象を記し、審判の日を以て『此時の終りにして靈性不滅の始也』となせり。『ソロモンの詩篇』には無生に關する數句あり、エホバを畏るゝ者は永生に趣り、惡なる者は又

殘る、となしと云へり。『エノク書』には義人のために備へられたる天の住居の異象を記し『パラク默示錄』には凡ての人の無るべき事、惡人の刑罰せらるべき、ことを記せり。

(三) 新約の觀念 新約に『生』と譯せる原語に ζωή, ζῴον の二あり。共觀福音書に在りては ζωή は今く『數』と同意義に用ゐらる、『生に至る途は狹く門は小し』(太七の十四)『生に入るはよし』(十八の八、可九の四十三)といふが如し。ζῴον は屢々肉體の生命の意義に用ゐられ共(太二の廿、六の廿五)通常肉體及び靈魂の生命の意義に用ゐらる(太十の廿八)。ζωή も亦此意義に用ゐらるゝことあり(路十二の十五)『死』は此世の生活の終結を意義す。『生』(ζωή)の觀念は約翰福音書に殊に著しく、且特殊の意義を有す。即ち『生』又は『永生』とは、愛には神を我が有となすの義也。例之『凡て之を信ずる者に亡ぶることなくして永生を受けしめん爲也』と云ひ(三の十五)『永生とは唯獨の眞神なる爾と、其遣しし給へるイエスキリストを知る是也』と云ふが如し(十七の三)、三の廿六、五の廿六、十の十等參照)基督は又自己及び其使命を以て『生』也と云へり。『我は生のパン也』(六の廿五)『孔爾曾に言ひし言は靈也生也』(六の六十三)『我は生也』(十一の廿五等)と云ひしが如し。『死』は通常の意義にも用ゐられたれ共、第四福音書に在りて著しき思想は、之を『生』と對照して『我言を聞き我を遣はしし者を信ずる者は……死より生に遷れり』と云へることも。約翰の書に於ても此等の語は同樣に使用せらる。保羅も亦約翰と同一の意義にて『生』なる語を使用せり。『死』なる語は更に深く且廣き意義を有し、且舊約に於るが如く擬人化せらるゝことあり(羅五の十四、哥前十五の廿六)又比喩的意義に用ゐらる(羅六の四—九、七の十—十七)又罪を犯し易き肉を『死の體』と云ひ(七の廿四)『肉の事を念ふは死也、靈の事を念ふは生也安也』(八の六)とも云へり。

【是より進する教義的結論】 神は凡ての生命—形體的、道德的、靈的—の源にして、神は生命を生ぜしのみならず、又之を維持すより來らず、故に之を滅すは神に對して罪を犯す也。舊約にては生命と血とを以て隱す可らざる者となし、又此二者を同一視せり。罪は神に對して謀反する、ことなるが故に、罪を犯す者は神より離れて死せざるを得ず。故に死は罪に對する最後の刑罰也。

舊約に依れば、死は暗黑陰鬱の地にして、此處に在りては神を讃美し、神に祈ること能はず。舊約に在りては、未來世の觀念明ならず、神と交通の觀念最も著しかりしが、猶太教に至り、靈魂不滅の觀念漸次發達し、以て新約に至れり。基督は永世及び死の意義に關しては別に明言せざりしが、其最も著しき觀念は神との交通にして、『知る』と云ひ『生命を有す』と云ひ『言を守る』と云ひ『愛す』と云ひ『言を守る』と云ふが如きは何れも永生を示せる者也。要するに耶蘇に在りては、基督に依りて神と融合するは永生を得るの最大要件にして、之を欽くは永死に至るの道也。保羅に依れば、聖き生命は純化せられて貴き生命と變化し、地に屬き、肉に屬ける罪の生命は死して、靈の生命のみ生存すべし。然れ共生命は一にして之を分離すべからず、人の肉體も亦靈的原形質なを有する者なれば、肉體も亦靈化すべし。是れ保羅の蛹生の教理の生ずる所にして、彼に依れば蛹生は信仰の工作の冠也。約翰の永生の觀念は亦も豐富の意義を有す。ウエストコット博士之を概括して曰く『永世とは、凡て其卓越豐富なる力を以て今在る處の生命、個人の限界を超越し、部分を全體と結合することに依りて、個人を保存し、完全になす處の生命、滿足せしむると同時に向上心を起さしむる處の生命……部分に統一を與へ、複雜に完璧を供し、天と地とを結び付け、一の思想に存在の總計を捧ぐる處の生命也』と。(『靈魂不滅』『蛹生』の項參照)。

新 (インナシ) 『新約』の條を見よ。

異邦人 (イホウジン) Gentiles. 【術語】 猶太人が猶太人ならざる國民を指せる語。猶太人が他の國民に對する態度は、骨因後最も重要なる變化を受けたり。エグラ改革は排外精神を養はんとしたる者にて、爲めに他國人の惡を招き、史家タシタス及び其他の人々の知きは、猶太人を以て人類の敵也と云ふに至れり。猶太人は異邦人の家に入り、若くは彼等と共に食することを以て、汚を受くる者也となし(約十八の廿八、徒十の廿八、十一の三)又タルムッドは、異邦人の祝節前後三日間は彼等と取引し、又は彼等と貸借を爲すべからずとの規定ありしとの事を記せり。尤も他方に在りては異邦人を猶太教に改宗せしむるの風發達し、又改宗者に非ざる異邦人と雖も神殿に獻物を献ぐることを許されたりしと雖も(利廿二の廿五)猶太教の門をくゞらざるも、彼等は尚救はるゝを得べしとの思想は、基督の使徒等に在りて唯徐々として起り來りたりき。初代教會に於て異邦人信徒と猶太人信徒との間に衝突あり、保羅が後者より反對を受けたりし事實は、使徒行傳及び保羅の書翰(殊に加拉太書)に於て之を見るべし。

異邦人の庭 (イホウジンノニハ) Court of Gentiles. 『エルサレムの神殿』の條を見るべし。

イブ Eve. 人名 原語生命又は凡ての生物の母の義。アダムの妻にして、カイン、アベル、及びセツを生む。實に人類最初の婦人の名也。其單純なる傳說創二の廿一—廿五に在り。此記事の解說種々あり。

(一) 字義的 アダムの睡りし間に神は其肋骨を取りて一人の婦人を造れり。アダムは其實貫及び生命の己れと同一なるを認め、之を女性の人と名けたり。イブなる名稱は其の墮落の後までは與へられず。即ち此の名稱は其性質と歷史的意義とを有する者にして、斯生命と敎讀とがイブの眼より出づるとのアダムの信仰を表せる者也。

(二) 比喩的 此の解說に從へば、イブがアダムの肋骨より出でしと云ふは、心の創造の後に外部の感覺が造られたることを表はす也。肋骨は心の種々なる能力の一を云ふものにて、イブは人間の感情を代表し、アダムは其理性を代表するとなす。亞歷山の師父等は此解說を取れり。拉丁師父等は之と異り、イブがアダムの肋骨より造られたりと云ふは、後世に至りて敎會がキリストの脇腹より形成せられたることを指すものとなせり。トマスアクイナスの知きは、イブを以て敎會を代表し、アダムを以て聖典を代表する者となせり。

(三) 神秘的 アダム、イブの物語は天地創造の記事を藏ふ雲霧也、此の物語に相當すべき人物は皆てあらず、唯抽象的に感覺念み人格に現はせしのみ。即ち異性の對照異性の愛情及び存在の始元等是也と解說す。

(四) 詩的 此物語は一の牧羊歌也。聖書は詩を以て始まる。アダム、イブは必ず存在せし者ならん。然れども此の記事に就きては何人も証明することは能はず、唯女性の創造が男性の後に在りしことは事實なるのみと釋す。

ラビの說にイブはアダムの後妻にして、リリスなる者が初めの妻なりしといふ。彼等は之を以て其記事の二種なるを說明せんとせり（創一の二十七、全二の十八）而して謂えらく、リリスはアダムと同時に赤土を以て造られしが、其傲慢と不義の行爲とに因りて追放せられ、惡魔と結婚して人間と惡魔の兩性を具したるヲンなる者の祖先となりたりと。タルガムにはイブはアダムの第十三の肋骨より造られたりとあり。

色 イロ 聖書の Colours. 物名 潘伯來人は初め繪畫術を知らず、後宗敎上の理由より之を排斥したりしが、預言者エゼキエル及雅歌等の知りたりし色と關係を有したりしは唯染物術ありしのみ。從て最古の文學中色の事に言及せる者は頗る簡短也。殊くデボラの歌には『彩れる衣』『文繡を施せる衣』と云へる言あれ共（士五の廿）其他なる云はず。又弓弓の歌』には、サウル綠き衣を賜へりとのことを記せり（毋後一の廿四）創世記に記されたる色は黑（廿の廿三）白（四十九の十二）深紅色（廿八の廿八、廿）赤（廿五の廿五）灰色（四十四の廿九）等に過ぎず、而して何れも自然物に就て之を記せり。後染色せる器物フェニキヤより輸入せられ、潘伯來人の中に廣く用ゐらるゝに至りて、彼等が色に關する知識も亦漸く擴大せり。

舊新約に於る色の表徵的意義も亦頗る單純也。今左に之を略說す。

黑 舊約には唯之を自然物に就てのみ用ゆ。黑き髮、黑き馬、黑き膚、黑き天空、暗黑の夜といふが知し。

青 舊約には此色を記さず。舊約は依れば此色は靈靈及び赤と共に幕屋の幕、櫃の幕、入口の幔（出廿六の一、廿二、廿六）庭の門の幔（廿七の十六）祭司のエポド、紐（廿八）及び帶（廿九の廿九）と結び付けられたる部分、及び供のパンの机、燭臺、黃金の祭壇及び聖所の器物を蓋ふ布（民四）に用ゐられたり。又青き紐以色列人の衣服の裾の縫に施されたりと云ひ（民十五の廿八）ソロモンの神殿の玉飾所の障蔽の幔は青、紫、赤の布を以て作られたりと云ひ（代下三の十四）偶像の衣服に用ゐられたりと云ひ（耶十の九）又アッシリヤ貴族の衣服の色也と云へり（結廿三の六）又アハシュエロス王の宮殿に白、綠、青の帳幔を設けたりとあり（帖一の六）又モルデカイは藍と白の朝服を着たりとあり。（八の十五）。

綠 主として植物に用ゐらる。又皮膚に於る癩病の患所に用ゐたる處あり（利十三の四十九、十四の廿七）又同一の語黃金を記すに用ゐらる。（詩六十八の十三）。

灰色 毛髮にのみ之を用ゆ。邦語は之を白髮と譯せり（創四十四の廿九等）。

紫、青及び赤と共に幕屋の幔幕、祭司の衣服及びソロモンの神殿等に用ゐられたり（別項『紫』を見よ）此色は株に王家の服裝に用ゐられ（士八の廿六、帖一の六、八の十五、但五の七—廿九、歌三の十）王者又は貴人の表徵となり（雅廿一の廿二、詩十七の四、十八の十二、十六）又偽像の衣服に用ゐらる（耶十の九）耶蘇は其十字架に釘けらるゝ前嘲弄のため紫衣を着せられたり（ヨハ十五の十七、約十九の二、但し太廿七の廿八には『深紅色』とあり）。

赤 此色は主として自然物の色として用ゐらる。例之紅（あかがつち）羹、赤牝牛、赤き水、赤馬、赤き葡萄酒、夕紅（ゆふべ）といふが知し。然れ共又染めたる色にも用ゆることあり。赤染の牡羊の皮、赤き服飾といふが知し。又此色は癩病者の皮膚の色に用ゐられたることあり。

深紅色 邦譯聖書には『赤』と譯し又『緋』と譯し相混交せり。舊約には此色は主として綾、布、衣服、毛皮の色に用ゐらる。通常深紅色の衣服は榮榮の表象也（毋後一の廿四、雅廿一の廿四、哀四の五）。

栗色 僅に一回馬の色に用ゐらる（亞一の八）。

朱色 邦語聖書には『赤』と譯せる處あり。即ち耶廿二の十四に室を赤く塗らんとあるが知し。結廿三の十四には『カルデヤ人の像を朱にて彫めりと』あり。

白 舊約には雪、乳、マナ、馬、及び癩病人の毛髮の色として用ゐらる。白きレバノン山と云へるは其巖に雪を戴けるよりか、又は此山石灰石より成れるより名けられたる者なるべし。新約には此色自然の物體及び布の色として用ゐらる。然れ共主として用ゐらるゝは、純潔、無邪又は神聖の表徵にして、例之耶蘇の容貌白く變れりと云ひ、天使白き衣を着たりと云ひ、各の聖徒に白衣を賜へりと云ふが如し（約廿の十二、默六の十一）。

黃 舊約には此色は唯癩病者の毛髮にのみ用ゐらる（利十三の廿、廿二、廿六、然れ共此語又『蛍』とも譯せらる）。

イルミナチ Illuminati. 黨派名 第十七世紀及び十八世紀に於て西班牙、佛蘭西及び白耳義に起りたる諸種の神秘派に與へられたる名なれ共、一般に一七七六年バヴァリアに於てイェスイト派の絕智主義と戰はんため起りたる黨派を指す。此黨派は後敎徒として自然神說を取るに至れり。

イルミナーション Illumination. 『アウフクレールツンゲ』の條を見よ。

イレニウス Irenæus. 人名 初代敎會の最も著名なる著者及び神學者の一人にして、辯解學者の中に數へらる。紀元一一五年の頃小亞細亞に生れ、スムルナに於てポリカルプの敎育を受けたりといふ。ポリカルプは使徒約翰の敎孫也といふべし。それより彼は四方に赴き、一七七年の迫害に依り殺されたるリヨンの老監督がシヌスの後を襲ぎて同敎會の監督となり、死に至る迄其職を盡し、二〇二年殉敎者の死を遂げたりと傳へらる。彼が小亞細亞よりリヨンに赴きし所以は、往昔より希臘人はガリヤ（現今の佛國）の南方に殖民地を開きしが故に、其地方と希臘及び小亞細亞とは密接の關係を有したりしに由る。當時基督敎會にはノスチック敎と稱する異端入り來りて頗る大勢力を逞ふせしを以て、イレニウスは書を著して之を辯駁せり。此書の出版せられたりし確實の年代は明ならざれ共、一七七年より一九〇年の間に在りしが如し。彼はノスチック敎中に在る諸派の說を辯駁したれ共、殊に力を極めて駁擊したるは、ヴァレンチヌスチックのイオンに關する說の空想にして無道理なる說也とす。彼は之を五部に分ち、先づ初めにノスの說也とす。彼は之を賛し、此の知き說は聖書に基けるに非ず、異敎に基ける者也と斷じ、次に造物者は唯一にして、天父なる神は最初より敎會の信仰したる處、全能にして材料を要せず萬物を創造せりと論じ、次に人類には生來の儘二種類あり、物質的のものは救はれず、唯靈的のもの3み智識を受けて救ほるべしと云へる說に反對し、萬民皆自由意志あり、又倫理的責任を有する者なる事を說き、次に物質と肉體とを輕蔑する說に反對して、神は靈肉共に之を造り、又眞方共に之を救ひ給ふべしとのことを說き、最後に敎會が使徒等より傳來したる信仰は、天地萬物の造主なる獨一の神を信ずる事、人類を救はんがために肉體を取りて世に來り給ひし基督を信ずる事、又肉體の甦を信ずる事なりし事を說き、又使徒時代より敎會を監督したる監督が常に此純粹の信仰を守り來りし事と、殊に西方の重要なる羅馬敎會の監督は引き續きて、使徒時代より純粹の信仰を固守し來りし事を述べ、且自己の師なりしポリカルプがノスチック敎に反對し、彼が曾てマルシオンに遇逢し『汝は予を知るや』と問はれたりし時『子は汝をサタンの眞子なりと知る』と答へたりし事を記し、又保羅の設立し、第一世紀の終迄使徒約翰の誘導せしエペソ敎會の實例を擧げ、ノスチック敎の使徒等の敎義に適合せざることを論ぜり。此外イレニウスはフロリヌスに宛て異端を辯駁せる書少くとも二册を著したりしといふ（『ノスチック派』の條參照）。

イレニカル セオロジー 平和神學 Irenical Theology or Irenics. 術語 基督敎徒の中には絕極一に歸すべしとの考を以て、基督敎徒の中に存在する一致の點を明にする神學にして、破邪顯正（ポレミックス）學に反對する者也。即ち其相一致せる根本は大にして、其相爭ふ點は比較的不肝要なりとのことを示す。例れの時代にも斯る平和の精神を有する學者敎會の中に存在せり。例之ニカヤ時代に於るナウアンザスのグレゴリー、及びクリソストムの知き、第十六世紀に於るメランクトン及びパッツェルの知き、近代に於るカリクスタス。ゲロチウス。バックステル。ドクリー。スペチル。ナンセンドルフ及びニヤ

ンデルの如き是也。又基督教會諸派の合同の如き此精神の發現として之を見るべし。基督教徒間の同情を最も能く言ひ顯はすは『ルベルタス、メルデニアス』の『必要なる事柄に於ては一致、不必要なる事柄に於ては自由、凡ての事柄に於ては愛』"In necessary things, unity, in unnecessary things, liberty, in all things, charity." と云へる言也。此主意に關する文學としてはエラスムス。ドゥレー。ケーヘル。ランダ等を推すべし。最近二三十年來比較神學の開けたりしより基督教各派間に於る宗論漸く減少し、今日に到りては所謂宗論と稱する者殆ど之れなし。又所謂異教と稱する者に對しても寛容の精神漸く顯はれ來り、近年歐米諸國の諸大學、諸神學校に於て比較宗教學必要の科目となり、異教の宗教的意識の研究漸く盛なるに至れり。

印、封印 Seal, Sealing. 物名 此語聖書に在りては如字的、比喩的の二義に用ゐらる。(一)如字的意義 印を使用するは人類初代よりの習慣なりしが如し。舊約に依れば印は早くより希伯來人(創世八の十八、廿五)埃及人(四十一の四十二)及び彼斯人(結三の十八、八の二)に依りて使用せられたるを見る。今日もアラブ人及び彼斯人は均しく印を携帶す。新約には耶蘇を葬れる墓の石に封印したりとあり(太廿七の六十六)放蕩息子の『指に環をはめ』とあるは(路十五の廿二)思ふに父の名を印ぜる環なりしなるべく、又雅二の二の富人の『金環』も單に粧飾と云ふよりも、其人の印なりしなるべし。此等の印は寶石又は貴金屬を以て造り、中には陶器又は木製の者もありしなるべし。封印をなす時には土を用ゐたり(伯廿八の十四)然れ共希伯來人も亦アラブ人及び彼斯人の如く、印を墨き繪具又は顏料に浸したりしが如し。印は時としては認名の代りに用ひられたり。イゼベルがアハブの名を以て書を書き彼の印を捺し(王上廿一の八)以色列の牧伯、レビ人、祭司等が神との契約の書に印を捺したりといふが如し(尼九の廿八、十の一)印は又他に讓與し贈き最も貴重なる所有を意義す(歌八の六、耶廿二の廿四、提後二の十九、加六の十七)此思想と均しきは安全又は恒久の意義也。ダリヨス王がダニエルの處置なして變ること勿らしめんために、石を持ち來りて獅の穴の口を塞ぎ、己の印と大臣等の印を以て之に封印を爲せりとあるが如し(但六の十七)所有と安全の意義は又屬々運命の意義と結合せらるゝことあり。封印せられたる人は神の民として永遠の刑罰を免るゝいふが如し(結九の四、默七の三)又安全と運命の觀念、秘密にせらるゝの觀念と結合することあり(雅廿九の十一、但十二の九、默十の四)又憑藏若くは憑據の觀念を有することあり(創四十一の四十二)。(二)比喩的意義 印又は封印の宗教的、靈的意義には何等如字的の意義なく、全然比喩的也。此は主として新約に顯はる。改心者は『使徒の職の印』也と云ひ(羅四の十一)『割禮の徴を受けざる前に信仰に由て義とせられたりとの證せられたり』と云ふは(羅四の十一)確證せられたる『其證を受し者は印を以て神の眞なる事を證す』と云ふは(約三の廿三)人の實驗を以て確證せるを表し、『父の神彼に印して證す』と云ふは(六の廿七)神の確證し給へることを表す。提後二の十九の『印』は所有、確證、安全、運命の諸意義を包含し、弗一の十三、四の神は其中殊に運命の意義重し。

インカルネーション Incarnation 『化身』の條を見よ。

インガム Ingham, Benjamin 人名 一七一二—一七七二 英國ヨルクシアの傳道者。牛津大學に學び『神聖倶樂部』の一員たり。一七三五年按手禮を受けて英國教會の教師となりしが、幾もなくウヨ、ウェスレーと共に米國に航し、海上モラヴィアン派の教師に逢ひて大に益する所あり。一七三七年英國に歸り、ウェスレーと共に傳道し大に成功せり。ウェスレーのモラヴィアン派より遠ざかるゝや、彼は止りてヨルクシアモラヴィアン派の首領となりしが、後英國に在る同教徒の狀態に快らず、去りて自ら一派を建てたりしが、遂に成功するに至らずして死せり。

インカンベント Incumbent 術語 教會の扶持を有する僧侶を指す。一八六八年インカンベント條例に依り、レクトル(讀經者)に非ざるも、婚禮其他の宗務を執行する權を有する者をヴィカルと稱するを得ることゝなれり。

英蘭 England. 地名 大英國の本國。爰には基督教の此國に入りしより、今日に至るまでの略史を敍述すべし。

【宗教改革以前の歷史】 之を三期に區分するを得べし。(一) ブリッジ、サキッソン及びノルマン是也。ブリッジ、サキッソン時代 此時代の歷史は明らかならず。プリマタヤのヨセフ、使徒保羅及び其他の使徒がブリトン人に傳道したりしとのこと、及びルシアス王の改宗、アッシェル王の基督教を採用したりとの傳說は共に信ずるに足らず。信ずべき記錄は第三世紀の初めテルチュリアンが、基督教は羅馬人の建し建さブリテンの地方に至れりと云へるに始まる。爾後ブリッジ教會の歷史は初代教會の歷史にして、迫害のため殉教者の死を遂ぐる者少からず、アルバン(三〇三)は即ち其一人也。又ブリッジ教會は宗教會議の開らるゝ毎に其代表者を之に送りたり。例之アルレの會議(三一四)に其三人の監督列席したるが如し。又ブリッジ教會は異端なも有せり。ペラギウスは即ちブリトン人にして、彼は愛爾のケレスチウスと共に東方教會に往きたれ共、其唱へたる異端は尙長くブリッジ教會に殘りたりき。

(二) アングロサキッソン時代 五九七年僧アウガスチンが法王グレゴリー一世に遣はされて、タネット島に上陸せしに初まる。當時アングロサキッソン人は尙異教徒なりき。アウガスチンは直ちにケレト王エセルベルトの宮廷に往けり、王他は基督教徒なりき。彼れ英國の監督に任ぜられ、ブリッジ教會從來の監督と衝突を來せしが、羅馬教風の基督教逐に勝利を得たり。斯くて基督教は長足の進歩を以て南英に擴がり、ウリナスは之をノルザムブリアに傳へ、聖アイダンは之を中國に入れたり。タルサスのテオドルは六六八年カンテルベリーの大監督に任ぜられしが、英國監督政治の組織は彼の時代に完成し、カンテルベリーを中心として監督管區を作れり。又此時代に諸所に僧院の建設せられたるを見る。第八、九世紀の頃丁抹人英國に跳ひ來り、教會及び寺院をあらし其財產を掠奪せしが、ダンスタン(九五九—八八、英國最初の宗教的政治家)の智慧と熱心とに依り、之を回復し、且僧侶の規律を一層嚴重になしたりき。

(三) ノルマン時代 一〇六六年ヘスチングスの戰爭に初まる。此時代の特色は教會が全く羅馬法王の勢力の下に來りし事、國家が教會の權力に服從したりし事及び僧侶が漸次腐敗したりし事也とす。然れ共之がため國家は律法を作り、之に依りて教會の驕奢を除せんとし、人民は教會の教義及び生活を改革して、僧侶の腐敗を免れんと努めたりき。斯くて『世服者』ウィリアムは外國僧院長等を冷遇し、自ら法教師を選任し、之に官職を授けたりしが、彼死して後有力なる僧侶は再び權勢を回復し、教會の獨立を企ふするを得たり。カンテルベリーの大監督ランフランク(一〇七〇—八九)は特別に宗教裁判所を設け、凡て宗教に關する事件は此處にて審問する事となし、其職同者アンセルム(一〇九三—一一〇九)は國王をして監督を新任せる時之に環及び牧標を與ふるの慣例を廢せしめ、告訴は羅馬法王に向てなすべしとの舊例を主張せり。ヘンリー二世は僧侶が斯くの如くして國家の裁判を免るゝより生ずる弊害を改良せんとして、大監督トマス、エ、ベケット(一一六二—七〇)と爭ひしが之に勝つこと能はず、國家は依然として羅馬法王の權力下に在り。ジョン王は法王の意に背きし故を以て、インノーセント三世(一二〇八)のために破門せられしが、遂に屈從して法王の任命せるスチーブン、ラングトン(一二〇七—二八)の大監督たるを承認せり。斯る間に教會は昏睡の狀態に陷り、僧侶は腐惰腐敗に赴けり。ドミニカン派及びフランシスカン派僧侶の熱心にして平易なる說教は、一時信徒を驚嘆したりしが、彼等は土地を領するに至りて其勢力を失墜せり。唯問々リンカンのグロセッテストの如き偉大なる監督出で、僧侶の腐敗を攻擊し、法王の教權に反對し、聖書の教訓と其教權とを主張したりしのみ。然れ共國家は全く疲弊したるには非ずして、法律を設けて宗教的弊害を矯正せんとしたりき。而して遂に人民及び僧侶の中より、此腐敗に抗し改革を呼ぶ者出づるに至れり。即ちジョン、ウイックリッフ(一三二八—八四)は聖書を譯譯し、其の力を盡瀉し、ウィリアム、ロングランドは僧侶に嘲弄する歌を歌へり。此家ナイトンの云ふ所に依れば、當時ウイックリッフの徒頗る多く、途上二人の中一人を數ふるに至りしといふ。斯くて教會は尙凡そ五十年の間睡眠の中に在りしが、宗教改革の聲は漸次に高く、遂に改革の大運動は英國を席捲し來り、英國の基督教は遂に英國教會となるに至れり。

【英國に於る宗教改革】 內外の事情は斯くして漸くに宗教改革を促し來り、第十六世紀の初めに於る時の徴候は、大陸に於るが如く、英國に於ても人々の心に一大革命の今正に來りつゝあることを示したりき。エラスムス。コルト。トマスムーアの如き人々に依りて始められたる文藝の復興、僧侶に對する諷刺、思想の自由、及びチンダルに依りてなされたる新約聖書の翻譯は即ち時の徴候の一なりき。ルーテルの羅馬法王に對して爲したりし宣言は、英國に於ても亦熱心なる聽者を有し、何人も之を禁制し得ざりき。然れ共此等のものは宗教改革の凡ての徴候には非ざりき。英國に於る改革の最初の動機は、他の國々に於る改革と異り、宗教的に非ずして政治的なりき。教會の弊害に對する宗教的精神の反抗に非ずして、ヘンリー八世(一五〇九—四九在位)が自己の權勢を擴張し、且直接には離婚を成就せん爲めなりき。初めヘンリーの兄なる人、西班牙國王の女カタリナ(チャールス五世の叔母)を娶りしが、幾ならずして死去せしかば、ヘンリーは其寡婦なる嫂を娶んとしたりき。元來嫂を娶るは教會の禁ずる處なりしが、法王は特に之を許可したりしなれば、ヘンリーは故障なく之を娶りて妻となし、カタリナも能く妻たるの道を盡し、斯くして凡そ廿年を經過したりし